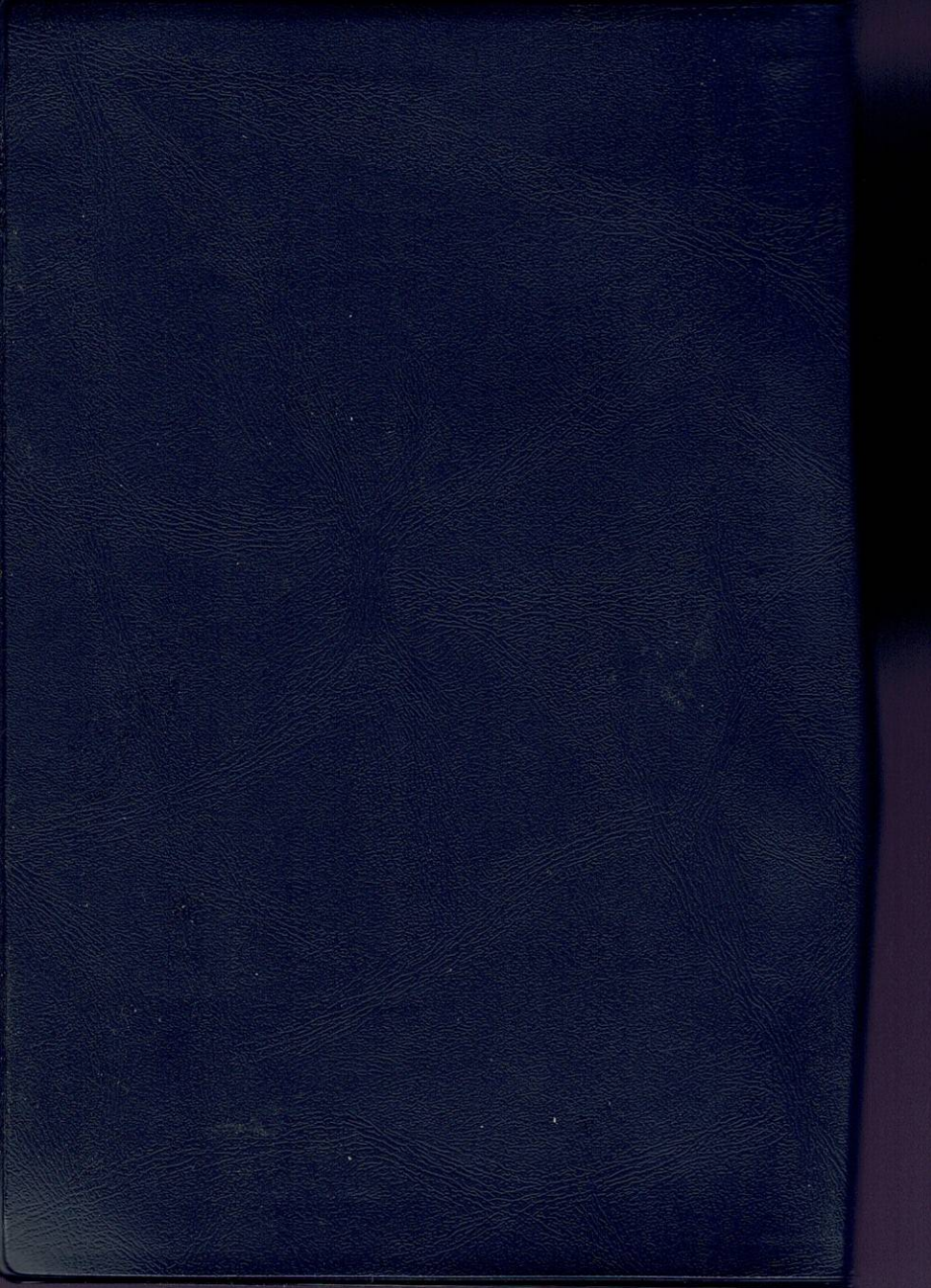


森村 三郎著

志岐島方言辞典

あ	い	う	え	お
1	16	34	46	49
か	き	く	け	こ
64	86	94	104	111
さ	し	す	せ	そ
129	137	160	170	176
た	ち	つ	て	と
182	193	202	211	220
な	に	ぬ	ね	の
234	240	243	245	250
は	ひ	ふ	へ	ほ
254	267	278	286	291
ま	み	む	め	も
300	306	312	315	318
や		ゆ		よ
322		328		330
ら	り	る	れ	ろ
336	336	337	337	337
わ				を
338				342
ん				
345				

壱岐島方言辞典



新加坡方言辭典

增補改訂版

森村

三

編著

はじめに

言葉は私達が祖先から受け継いで来た歴史的・政治的・経済的・文化的そして何よりも地域的制約の中で生き続け伝え継がれて来た人々の暮らしそのものであり、かけがえのない文化遺産です。言葉は最も端的に、その土地土地の人々の暮らしと心を余すところなく表現し伝達する手段道具として極めて重要な役割を果たして来ました。今日言葉は社会の変化や文化の波の中で押され揉まれて変化し、乱れてさえ来ていると憂慮されています。私たち吉岐の島においても風俗・習慣の変化・時代の変遷に伴って、方言も独自の行事も共に次第に忘れ去られ使われなくなって来ました。郷土の史家山口麻太郎先生は、早くからこれら失われ行く島の歴史・文化・民俗風習・説話・方言等の各分野について貴重な文献・史料として収められてきました。今日私たちの郷土研究に無くてはならない資料として、大きな役割を果たして来ています。

私はこの中の特に「方言」について先生の学術書を、少し手軽な辞典に編集してもっと多くの人々の目に触れ、未だ埋もれているかも知れない方言収集の資料ともなればと、門外漢の浅学をも顧みず、欲深い思いに駆り立てられ、山口先生の吉岐島方言集・続吉岐島方言集・補遺吉岐島方言集を私なりに再配列し、他に日本方言辞典・全国方言辞典等を読み、又島の人々の話の中からこれは方言ではと思う言葉に耳を敬て追加する方法を試みました。然し私の乏しい学力や知識能力では到底及ぶべくもなく、先生の偉大な業績に畏敬の念を抱くばかりで、徒に日時だけが空しく過ぎて行く毎日でした。それは6年程前からのことです。

私は、大正15年5月28日・那賀村（現芦辺町）中野郷東触1046番地において、父朝光・母タケの次男として出生、後両親に従って高知県高岡郡佐川町に移りましたが、昭和初期の大不況の中職を失った父母と共に再びこの島に戻り、以来その殆どをこの島で生きて来ました。土佐の国では近所で馬の居る家の子「節ちゃんくー」で遊んだこと、小学校卒業ころの東京での生活の中で、ことば・発音・アクセント・方言等について持った苦い体験や興味・思い出が沢山あります。

父が国漢の中等教員であったこともあってか、言葉につい

ては可成り厳しい躰けにあつて、家では「お父さん」「お母さん」等早くから使わされてきました。周辺では「おったん・おっかん」と使っていた頃のことです。そんな中で幼児期の思い出として今でも心にはっきり残っている言葉があります。佐川町から引き揚げて間もなくの頃だったのでしょう。「土けえに行くとな、且ちゃんも来んで」と。当時私の家に住み込んで農業を手伝ってくれていた青年に誘われました。当時から我が家は曾祖母・祖母・母による「三ちゃん農家」でもありました。「土けえ」の意味が分からず「土ば買うとで」「なし土ば買うと」。色々と「めんで」の末、彼の「土かいたい」の一語で「ああやっぱり土買いたい」と私なりに納得。牛を牽き犁を担いだ彼の後に従いました。「ここにも土はたあいそう有るとに」「どこまで買い行かすとおちゅうない」と不審な思いの中で。「よっぽど変わった良か土ば買わすとい」と思いながら。

家からの坂道を登って山の北西側にある目的の我が家の畑に着いた彼は、早速犁を仕掛けて牛に曳かせ麦の畝間を鋤きはじめました。しかし一向に「土を買う」気配も様子もありません。長い間彼の後を畝毎に随いて廻って執拗に「土はいつ買うと」を彼を困らせました。そして最後に「土けえ」とは「土を買うことではない」ことを覚えたものです。少年期に入り語数もすっかりふえて「なんちけえ」「をしゃをれや」と殊更に方言を駆使し強がりを見せたり、友達との遊びの中に腕力をカバーし時・時の優位に立とうと頑張つて見たものです。皆さんもそれぞれに忘れられない言葉や特に方言についてのさまざまな思い出や体験をもって来られたに違いありません。久しいや少しく都会暮らしをしていた娘さんが懐かしい故郷に帰り、和やかな一日の夕方、母に向かって「お母さん、こん晩のおかず何にします」「ほうぶらどむたい」。方言の持っている・方言でしかあらわせない人間味・土の臭い・温かさ、そして一語のもとに人々の暮らしや生きざまそのものを言い尽くしてしまうことば。この言葉でなければ説明や納得、言い替えの利かない素晴らしい表現力を備えた方言。この貴重な方言も今容赦なく変化して行く時代の波の中に次々に消え去り失われようとしています。敗戦後40年を経て世の中は何かも変わりました。そんな今だからこそ、この島に生きてきた人々の暮らしや行事や方言をしっかりと残しておきたいと思うのです。今ならまだ間に合います。未だ

まだ私の知らない未収録の行事や方言がこの島には沢山残っている筈です。この島に生まれこの島をこよなく愛した者の一人として、もっともっと「壱州の方言」を集めたいのです。すっかり消えてしまわないうちに。未だ未完成、検討も不十分、誤りもあるのではと恐れながらも、今後大方の先輩各位のご指摘と島のあちこちでの追録が続けられ、更により正確な方言の収集と併せて郷土史の研究の歩みの盛んならんことを念願し、子供たちや孫たちや又その先の子供達に、この島に住み・生きて来た人々の心を残しておきたいと駆り立てられながらも、進まぬ研究と歩みののろさと自らの非力を思い知らされている中で。それにしても、偉大な郷土の先覚山口麻太郎翁の数々の業績を仰ぎ見ながら、自らの「うーばんげえーな」「くわだち」と思い合わせつつ。ここに今日の還暦の日を敢えて刊行に踏み切った次第です。願わくば微衷を諒とされ大方の諸賢のご指導とご叱声をお願いするものであります。

昭和61年〔1986〕5月28日・60歳の誕生日に
〔初版文再掲〕

「増補改訂版」の出版に当たって

初版壱岐島方言辞典は、郷土史家山口麻太郎先生が数度に亘り学術書として纏められたものを、統一語順に並べ替えただけが編者の加えた精一杯の仕事でありました。

それから十年後に見直し版を考えながら方言に拘わって来ましたが、途中これからという時全く予想もしない巻き込まれ事〔身の程も弁えずの〕により数年間の中断、当初の予定が遅れましたが、反面少し違った角度から郷土の歴史や方言を見直す機会にもなったのではと思っています。今やっと色々の束縛から開放され自由・勝手と偏見の中で初版本と静かに対応できる時間を持てるようになりました。又多くの方々から「方言辞典が欲しい」と申し出がありましたが、初版本は200部ばかりしか出していませんし増刷もしませんでした。十数年間には多くの方々から貴重なご意見や解釈上の指摘、未収録語の提示を頂きました。この場をかり厚くお礼申しあげます。お会いする度に未だかと増補版のご請求、発破もかけられました。有り難い事です。残念ながらお手渡し

出来ないままあの世に旅立たれてしまわれた方、大変相済まない気と、もう少し頑張っていていただきたかった私よりお若い方もあり思いは複雑です。未だまだ未完非交響の謗りを免れませんが、廿世紀終末の年に入るを契機として、曲がりなりきりで大方の諸賢のご批判も頂き度く、ここに増補改訂版として形にしてみました。

以上誠に意を尽くし得ませんがご挨拶に代えます。

平成12年〔2000〕5月吉日

凡 例

- 1 辞典としての編集にあたり、1 見出し語(方言)・2 品詞・3 意味・4 「 」を用いて同意語及び用例の順で表すようにした。
- 2 品詞は同じ、意味が2以上あるものは番号で、品詞、意味も異なる時は別々に。
- 3 「 」の用例文は、従う語も出来るだけ方言を用いるようにした。
- 4 あ行からま行・ら行の他は「や・ゆ・よ・わ・を・ん」に統一し、「ぬ・む・ん」の区別を考えた。
- 5 「え」の重い音を「いうえ・いえ・うえ」を用いてみた。
- 6 方言即郷土史の立場から、郷土を知る軽い読み物となればと願った。
- 7 学術的な研究は原本に委ね、自由と偏見をもとにあれこれ考えてみた。

壱岐島方言編

(増補改訂)

あ

あ

あ(助)「は」の変化として用いられる。「あたしゃあ(私は)」
「猫あ」「月あ」「母あ」「いもた(妹)あ」。

あーい(感)はい。応諾の意。「あい」に同じ。(名)暇。あい間。

あーた(代)あなた。

あーたさま(代)あなた様。老人の用いる丁寧語。「あーつさん」に同じ。

あーつさん(代)「あーたさま」に同じ。

あーと(感)ありがとう。「あーとと・あーととと・あーとととー」に同じ。

あーとと(感)「あーとと」に同じ。

あーとととー(感)「あーとと」に同じ。

あーとと(感)神仏礼拝に発する祈りのことば。「嗚呼尊」か。

あーらい(感)感動的罵声。「あーらいのがんのやまおけ(龕の山桶)・こん畜生」の気持ち表現。

あい(感)はい。「あーい・あいあい・ない・なーい」などの返事に同じ。(名)ひま。あい間。「あいにゃ出ちおいでな」など用いる。

あいえつ(代)あやつ。彼奴。

「あえつ」も同じ。

あいえつまぜつ(副)あれをしこれをしてとりどりの仕事をすること。雑多の意味にも用いる。「あいえつまぜつで日は暮れた」。「あえつまぜつ」も同じ。

あいおち(名)行き違い手ちがいでなすべきことが次落する。手順が違い間違いが起るさま。「あいおちinar」「あいおちいなつちよつた」。

あいかり(名)低能者。馬鹿箸。「ありかり」に同じ。

あいぎょーさー(名)「いのこぜつく」に祭る神の名。一升櫛に飯を盛り「柳の枝の長箸」か「めんどう箸」を添えて荒神棚から祀る。「神にんげ仏にんげ親にんげ人にあいきよう尚ようござりますように」と唱えながら拝み祀る地区もあるとか。

あいきょうもん(名)愛敬(嬌)のよい者。愛想よし。にこやかでかわいらしい。

あいくりゃー(感)驚きの発声。「あっこりゃー」も同じ。

あいこのちよす(名)あいこでしょ。じゃんけんを使うかけ声。

あいさ(名)合い間。暇。「あいにゃ遊びおいでな」たまには。

あいしゃん(名)姉さま。下婢・下女などを呼ぶにも用いた。「あいやん・あんやん」とも言った。

あいぜんさん〔名〕愛染明王。
染色業者の祭る神。又はその
祭り。

あいのとーわたし〔名〕肛門
と陰部との間の部位名。「とわ
たし」ともいう。

あいめ〔動〕歩め。歩け。「はい
あいめはい（早く歩け速
う）」。

あいや〔感〕(1)軽い驚きの意を
表わす発語。「あいや、つまら
んこつした」。(2)いいえ。否定
の意を表わす語。

あいやん〔名〕「あいしゃん」
に同じ。

あうえつまぜつ〔副〕「あいえ
つまぜつ」「あえつまぜつ」に
同じ。

あうか〔形〕青い。青色。緑
色。「あおしか」に同じ。

あうしまさー〔名〕淡島神様。
民間信仰安産の神。「あおしま
さー・あをしまさー」も同じ。

あうぼり〔名〕牛の飼料「はみ」
に混合する青草類の総称。「あ
おぼり・あぼり・あをぼり」
も同じ。「はみくさ」ともい
う。

あうむる〔動〕海藻類青菜類に
湯通しすること。「あおむる・
あおめる・あをむる・いがく」
も同じ。

あうをりしうをり〔形〕萎え
なえにやつれおとろえるさま。
「物あ食われず、いごきや〔動
きは〕ならずあうをりしうを
りしちよった」。

あえちよる〔動〕落ちている。

「洗濯物の汚れ・穂から種実・
莖や器から物がこぼれ」落ち
る等広く用いる。「あえる」に
同じ。

あえつまぜつ〔副〕「あいえ
つまぜつ」に同じ。

あえに〔形動〕あんなに。「あげ
に」に同じ。

あえる〔動〕落ちる。「あえちよ
る」に同じ。

あえん〔動〕落ちない。〔形動〕
あんなに。「あえんうかしか
(あんなにおかしい)事あなか
った」。

あおしか〔形〕青々しい。「あ
うか」に同じ。

あおしまさー〔名〕「あうしま
さー」に同じ。

あおびき〔名〕青蛙。雨蛙。

あおめる〔動〕「あうむる」に
同じ。

あかいっさき〔名〕あかいさ
ぎ。魚名。

あかか〔名〕火。灯火。あか
り。「あかかあぐる(灯明を焚
く)」。(形)明るい。赤い。「な
んちあかかもんけえ(なんと
明るい・赤いものか)」。

あかくる〔動〕(1)船底の釜を汲
みだす。(2)小便まる(する)。
放尿・排尿。「あかくり行た
ちくる(小便しに行ってく
る)」。

あかし〔名〕樹木の枯小枝。燃
料枯枝。

あがし〔副〕あの位。「あがしこ」
に同じ。

あかしかぎ〔名〕長い竿先に鉤

あ

を取り付け高枯枝を折り取る道具。〔動〕「あかし」を折り取る作業。

あかしかぎーやる〔名〕「こっぱかぎーやる・しをどーらに入る」など、昔出生児の間引きの隠語としていた。「あかし刈りいやる」とも言った。

あがしこ〔副〕あれ位。あれ程。「あがし」に同じ。

あかぜ〔名〕首の後から尾元まで赤い筋が通った牛。良牛の壱州牛の相として貴重視された。「赤脊うそ口」の語もある。「うそくち」参照。

あかちよこべー〔名〕あかんべー。あっかんべえ。

あがっしゃ〔副〕あれ位。あの位。量の多少両方に用いる。「あがっしゃ有った」「あがっしゃしか無かった」。

あかとき〔名〕暁。明け方。

あかとべら〔名〕もっこくの木。つばき科。島内山地に自生し貴重庭木。

あかばち〔名〕体色赤の山峰の一種。

あかばな〔名〕あかはた。魚の名。「かんばち」ともいう。

あかはら〔名〕(1)赤痢。伝染病名。(2)いもり。腹の色赤い両棲類。

あかふじょー〔名〕月経。出産に伴う出血。海士や漁師は出漁同船を嫌忌。

あかべー〔名〕あかんべい。

あかべんちょーらい〔形〕日焼け・酒酔い等で顔が赤くな

ったさま。「べんちょーらい」ともいう。「べん」は紅色。

あかめた〔名〕目が赤くただれた人。

あがり〔名〕仕事に区切りつけ終る。

あかりたき〔名〕カンテラ灯。

あがりたて〔名〕土間から部屋に上がる縁。「へなぶり・へんぶり」に同じ。

あがる〔動〕仕事を終り家に帰る。学校から帰る。卒業する。物事を終る。

あき〔名〕作物の収穫穫入れ時季。「麦あき」「できあき」「とれあき」と用いる。

あぎ〔名〕あご(頤)。「あぎのだるうなるしこ食うた」「あぎたたく(あれこれしゃべる・雑言を言う)」。

あぎしる〔名〕よだれ(涎)。

あぎしるたらす〔動〕よだれを垂らす。〔形〕つまらぬ話を

夢中に聞き入る。「あぎしるたれーち聞きをつた」。

あぎたたく〔動〕べらべらしゃべるさまを罵り気味に言う。多弁。おしゃべり屋。

あぎのしてーさがる〔形〕子どもが親にまつわり甘え、物ねだりするさま。「あぎしるたらす」にもやや似る。

あきねー〔名〕行商人を指していう。「まち」から田舎に来て物品を売り廻った人をいう。「あきねー人」「あきねーん来た・あきねえーに行く」。

あきねーくだり〔名〕「いなか」

あ

やる。「申しあぐる」「聞かせ(し)あぐる」。

あげ〔名〕あげ田。あがり田。乾田。浅い田。深い田を「ふけ」という。

あげーに〔形動〕あのように。あんなに。「あえん」に同じ。
あけくろーに〔名〕夕方。日暮れ方。「あこくろ・あこくろー」も同じ。

あげざかや〔名〕造り酒屋に対し売り専門の酒屋。酒小売り店。

あげた〔名〕浅く排水のよい水田。「あげ」に同じ。

あけなんこ〔名・形動〕ありのままかけひきなしに。「あけなんこー」相談した。「あけなんこむ」も同じ。

あけなんこばなし〔名〕打ち明け話。「おびときばなし」ともいう。

あけなんこむ〔形動〕「あけなんこ」に同じ。

あげに〔形動〕あのように。あんなに。「あえに・あげん・あねん」とも用いる。

あげもん〔名〕(1)盆・正月に檀那寺に上納する仏餉米の類をいう。(2)てんぶら・あげ・油揚げ類をいう。

あげん〔形動〕「あげに」に同じ。

あげんと〔形動〕あんなもの。あれと同じもの。

あけんとけん〔副〕ぼんやりと。目あてなしに。「あけんとけん」に待たされた。「あきん

ときん・あけんとけんと」も同じ。

あご〔名〕とび魚。とびうお科海産魚。

あこーくろ〔名〕「あけくろーに」に同じ。

あこぎ〔形動〕執拗な仕方をする様。「あこぎたらしか事する人間」。

あこぎたらしか〔形動〕執拗なさま。「あこぎ」に同じ。

あこくろ〔名〕「あけくろーに」に同じ。

あこなり〔名〕(1)液明け方。「あこなる」ともいう。(2)腫れて赤くなる。

あざ〔名〕「ほくろ」を指していることが多い。

あさがおちょーちん〔名〕竹を割って骨組みを朝顔の花型に作り、紙を貼って提灯として盆に灯し歩いた。

あさぎ〔名〕朝鮎。朝食に摂る雑炊。

あさって〔名〕見当違いのこと。「あさって事言いをする」「あさって向いちよる(あらぬ方向を向き我聞せず)」。

あさめーりよめーり〔名〕朝参り夜参り。死者を埋葬したら49日間朝夕2回の墓参りをし、朝は夜灯した「あかりたき」を回収し、夕参りには点灯を兼ねた弔い参りをするをいう。地区によっては朝屋夕と3回の参りをするとも聞く。

あさもね〔名〕朝。朝のうち。

から町や浦に米麦雑穀野菜果物薪炭類を売りに行くこと。

「まちくだり」ともいう。

あきび〔名〕あけび。あけび科蔓性の植物。実を食べる。

あきぶと〔名〕烏賊の一種。その年の子いかがが秋になって獲れるもの。

あきぶれめえ〔名〕麦の播き付けを終え、稲の穫り入れ祝いを併せ行う農家の祝宴。「でえーこく（大黒）あげ」ともいう。

あぎほす〔動〕「あぎたたく」に同じ。

あきやのすてぎね〔形〕荒れ果てた空き家の庭に捨てられた杵は、草むらの中に放置され、事凄ましい状況にある。似た様な状況の比喩例えに。

あきゅーど〔名〕あきんど（商人）。主として行商人を呼ぶに用いた。

あきんときん〔形〕ほんやりと。「あけんとけん」に同じ。

あくがれ〔名〕あかぎれ（輝）。「寒さに手足の皮ふが裂ける」さま。

あくごたらくご〔副〕時間を長く引き延ばし飽きあきする。執拗の意にも用いる。「あくごならくご待たせうちえーち、決してけして来わせん」。「あくごたらくご話付けられた」。

あくせー〔形〕悪い。よくない状況。困った状態になること。「あくせーなもん」と言って嘆いたり心配する。

あくせーうつ〔動〕困る。困却する。手に余す。することが多くて嫌になる。「あくばる」「てやまし」「てやましとる」も同じ。

あくせーなもん〔動〕困り果てる。困ったことには。気がかり・心配な事・何んとなく気がかり。「あくせなもん」も同じ。

あくぞもくぞ〔形〕善惡とり混ぜ。「あくぞもくぞ（並べ立つる・取り出す・しゃべりまくる）」。あること無い事とりあげて。

あくたる〔動〕悪意のある態度にでる。「あくたるる」も同じ。

あぐちゃく〔動〕口を開ける。ぼかんと口を開ける。上向きに口を開ける。「葉飲むち口あぐちゃく」「口あぐちえち見おらす」。「あむちゃく・あんちゃく」ともいう。

あくてーきる〔動〕悪態づく。

あくねとる〔動〕泣く。泣きむずかる。

あくねほす〔動〕子供が泣くのを叱り罵り気味に「あくねほすぎりい叩き出すぞ」などと用いる。「あくねとる」に同じ。

あくはなす〔形〕物の継ぎ目が離れ口を開くさま。「あご（あんくお）はなす」意か。

あくぼる〔動〕手に余す。「あくせーうつ」に同じ。

あぐる〔動〕上げる。あげる。

「こえんあさもねかるとけえ
行きをると」。

あさもん〔名〕朝。「あさもね」
に同じ。「あさもんのうちい行
たちけえ（朝のうちにやって
来い）」。

あざる〔形〕飽きあきして珍
しくなくなる。「こん兒はみか
んばあざるごつ食うちよ
る」。「あざれちよる」も同じ。

あし〔動〕牛に脚を上げさせる
命令語。「あしあし」「あしと」
ともいう。〔代〕私。あたし。
わたし。「あし（私）があーて
（貴方）え……」。

あしいしをつつむ〔形〕坐り
込んで容易に立ちあがろうと
しない様。足に塩包む。碇を
打つ。

あしかけ。〔名〕めかけ。てか
け。二号夫人。

あしがため〔名〕間仕切り用の
太い床材。闕をつて根太を渡
す材名。建築用語。

あしぐせ〔名〕足癖。(1)少しの
事にもすぐ人を蹴る癖。(2)履
物を履き違え易い癖。「足ぐせ
ん悪か」。

あしぎばち〔名〕飛ぶ時脚
を伸ばしたまま飛び廻る赤い
山蜂。あしながばちの類。

あしじろ〔名〕梅雨末期雨粒太
く雨脚白い篠つく雨。この雨
が来るとやがて梅雨もあがる
と。

あしつぎ〔名〕踏み台。高所に
物を上げたり下したりに用い
る足台。多くは四角錐台形に

作る。脚継ぎ。

あしと〔動〕「あし」に同じであ
るが強意を含む。〔名〕足跡。
「あしとつけちよる」「あしと
んついちよる」などと用いる。

あしなか〔名〕身も緒も葦だけ
で編み作る野良仕事用の草履。
足裏半ば程の長さで、かかと
をはみだし履く。

あしなかぞうり〔名〕「あしな
か」に同じ。

あしのはら〔名〕足の裏。

あしのひら〔名〕足の裏。「あ
しのはら」に同じ。

あじもこっけむなか〔形〕無
味。味気ない。「あじもさっぺ
むなか」ともいう。

あじもさっぺむなか〔形〕味
気ない。

あしもと〔名〕(1)廢物。(2)米麦
などの穀類を昔は農家毎に臼
で搗いてきた。その折土間に
搗きこぼれた穀類を簡略して
「あしもと」と呼んだ。

あじろ〔名〕釣り場。漁場。網
場。

あじろしか〔形〕味良い調理の
さま。

あしをえぎ〔形〕足音をしのぼ
せ歩く。「あしをえぎ（泳ぎ）
しち出ち行た」。

あす〔助動〕ます。「行きあす・
戻りあす」。「やす」に同じ。

あすけ〔代〕あそこ。あすこ。

あすこ〔代〕(1)あそこ。「あすけ」
に同じ。(2)身体の或る部位の
隠語。

あすこりや〔代〕あそこあた

あ

り。あの辺。「あすこりゃ」とも用いる。
あすこん〔代〕あそこの。「あすこんところ（あそこのところ）」。
あずさ〔名〕いぬびわ。からびわ。ちしゃのき。むらさき科の植物名。
あすび〔名〕遊び。「あすびい行く・あすびやらく（廻る）」。
あすびやど〔名〕青年の夜の集会所。遊び宿。「わかつてやど・とまりやど」ともいう。
あすびやらく〔動〕遊び廻る。
あすぶ〔動〕遊ぶ。
あせがる〔動〕焦る。もがく。気がせく。いらだつ。
あせくちながる〔形動〕汗みどろになる。汗だくになる。「あせくちながれち働きおったばな」。
あせくる〔動〕かき廻し拡散する。あせる。拡げる。かき散らす。「干した麦をあせくる」「鶏が餌をあせくる」「火鉢の灰をあせくるな」。
あせごし〔形〕水田の水が満水し畦を越して流れ出るさま。「あせごしおる」。転じて、酒などを盃一杯こぼれる程に注ぐさまに用いる。
あせび〔名〕あせも。汗のため皮ふにでる吹出物。「あせびのでけた」。
あせる〔動〕「あせくる」に同じ。かき散らす。「あいなけえようあせつちよかしよ（途中でよくかき散らし広げておい

てくれよ」）。
あそっこ〔副〕所どころ適当に。「くまなくまんべんなく」ではなしに。気の向く所気の向くままに。「あそっこ廻っち来た」。
あそばしまっせえ〔動〕なさってくださいませ。老人女性が多く用いる。
あそびふーける〔動〕遊びに夢中になりあそぶ。「あそびふーくる・あすびふーける」も同じ。「ふーける」は「ほける・ほうける」。
あたいいくれ〔形動〕私にください。
あたまくんだり〔副〕上から下まで全身。「あたまくんだり水かぶった」。
あたまつむる〔動〕散髪・理髪する。髪をつめる。「あたまつめげえ行たちよつた」。
あたまぬうつ〔名〕頭痛。頭痛がする。「あたまんうつ」も同じ。頭痛の種（心配ごと）の起こることを「あたまんうちの出る（でくる）」という。
あたまゆう〔動〕髪を結う。髻を結う。
あたらん〔動〕さわらない。いじらない。「あたらんと・あたらんこつ」などと用いる。
あたりこくち〔副〕そこらあたり。そこら辺（近く）。「あなりこくちにやをりやせん（居ない）」。
あたりじゃなか〔副〕可成り遠方。相当に遠い距離。「行た

ちみ、あたりじゃなかけん(ばな)。とても遠い。
あたりび〔名〕死者の忌日。命日。「たちび・しょうにち」ともいう。
あたる〔動〕さわる。いじる。もてあそぶ。手に触れる。「あたるな・あたらん・あたらん事」などと用いる。
あづ〔名〕溝・堀・あんだめなどに流入した泥土・砂塵・芥類。あづち・あんだめづち、か。
あっか〔形〕明るい。「あかか」に同じ。
あつかう〔動〕もてあそぶ。いじる。
あづぐいー〔名〕河川・用水路から水田に流入する「あづ」を防ぐ杭・竹・柴木で作った箕子類。「あぐいー」ともいう。「あづ」そのものもいう。
あつけえとらるる〔形動〕ぼうぜんとする。ぼうぜん自失のさま。
あっさりざっと〔副〕簡単に。気安く。無造作に。「あっさりざっとに出来る事じゃなか」。「あっさり・ざっと」の合成語か。
あつさんへえる〔名〕暑気当りする。暑さがはいる。「あつさんいる」も同じ。暑気あたりして発熱する。
あつしか〔形〕厚々しい。「あつしき」「あつしく」ともいう。
あつだ〔名〕厚田。土地のやせた水田には稲を間隔狭く密植

して稲も藁も多く穫るようにした。米の増収を願っての耕作法。「うすだ」参照。
あっちゃこっちゃ〔形動〕反対。逆。
あっちゃこっちゃ〔形動〕あべこべ。「すっちゃこっちゃ・すっちゃこっちゃ」ともいう。反対ごと。
あつぶ〔動〕遊ぶ。「あつぶー・あっぱー」ともいう。幼児語。
あつぶー〔動〕「あつぶ」に同じ。
あっぺ〔動〕遊ぶ。「あっぺー」も同じ。
あっぺだつ〔形〕おどろきあきれる。「あっぺだつち聞いちゃつた」。
あっぱ〔名〕酒。「あっぱう」も同じ。
あて〔名〕船や海上から陸上の二点を見通して自身の位置を知る観測法。
あていばり〔名〕犬猫等の動物が物に小便をしかける行動をいう。
あてこすり〔名〕熨す。マッチ。
あてっぽう〔名・形動〕あてずっぽう。見当もつけずいい加減にする言動。
あてづわり〔動〕他の情事を見聞きして自身発情する様。牛馬に多い。
あといり〔名〕(1)後妻。「にばんぜー」に同じ。(2)寡婦が亡夫の弟と再婚すること。
あとうえー〔動〕後追い。大人

あ

や親の他出に子供が同行をせがむこと。

あとうち〔動〕履物などで泥や泥水などを脚・腰・衣服にはね上げ汚す。あととはね。「あとうちのしちよる」。

あとかんまず〔形〕時時の都合に乗り、前後を考えないでする言動。刹那的言動。やりかんぼう。やりかん。

あとかち〔名〕後味。「あとかちの悪か」「あとかちなわし(直し)」。

あとかちのわるか〔形〕後になっても気がかりで、後味の悪い思い。

あとぐりがやす〔動〕後戻りして引き返す。「ここまち来ちあとぐりがやしゃされん」。

あとさきかんまず〔形〕「あとかんまず」に同じ。

あとさん〔名〕神さま。仏さま。お月さま。お日さま。お星さま。小児語。

あとお〔感〕(1)神仏への祈りの発語。(2)お礼の言葉ありがとうの意。「あーとお・あーとお」に同じ。

あとうし〔名〕四九回忌を終えた古墓を発掘して、跡に新に死者を埋葬すること(前骨も同所に併せ祀る)。「あとうしする(した)」ともいう。

あなぐる〔動〕探し糺す。疑い問う。問い糺す。

あなせ〔名〕北西の風。秋末から冬にかけて吹き込む強い寒風。漁師の最も嫌う風。

あなちゃ〔代〕あなた。貴方。

あなばち〔名・動〕処女の状態を破り犯すこと。「あなばちわる」「さらわる」ともいう。

あなばちわる〔動〕「あなばち」に同じ。

あなまた〔名〕足指の股。

あなまたぐさり〔名〕足指の間の皮肉がただれる病氣。

あにし〔代〕彼の人。「あのにし」に同じ。

あぬ〔代〕あのお。あのお。あぬ男「あぬ女」「あぬげどー」「あぬつくしよー」など悪意をこめ用いる。

あぬおかた〔名〕あのお方。「あぬかた」も同じ。敬意をこめて用いる。

あぬわれ〔代〕あの人。あの奴。

あねさん〔名〕下女。ねえしゃん。

あねしゃん〔名〕姉さん。あねさん。

あねん〔形動〕あんなに。「あえん」「あげに」「あげん」に同じ。

あのに〔代〕あの人。彼の人。

あのにと〔代〕あの人。「あのに」。

あば〔名〕(1)網の上部に浮力として付ける桐材の浮具。(2)網漁において投網度数を示す助数詞。

あばかん〔動〕多量で混雑して物事が捌き切れない状況。物はけが悪い。

あばききれん〔動〕「あばかん」

に同じ。「そげん太か物^{モノ}あここ
じゃあばききれん」。「あばけ
ん」も同じ。

あばく〔動〕捌く。処理する。
あばくる〔形〕灸のかさぶたが
はげ落ちてびらんするさま。
あばけん〔動〕「あばかん」に
同じ。

あばらどうし〔名〕肋通し。
冬季寒い西風が吹きつけ吹き
抜ける道路。骨身にこたえる
寒風に吹きさらされる風の通
り道。「荒通し」ともいう。

あばれこぼれ〔形〕水などが
容器いっぱいになり、溢れこ
ぼれるさま。酒やお茶などの
場合にも用いられ吉相として
受入れられている。

あばろ〔名〕鯨組の網船に使用
した艀。「おーども」の次の
艀。

あひー〔名〕母親。

あびき〔動〕船の通る時に起き
る波。その波を受ける側の影
響。「こっちまじあびきの来ち
往生したつばい」。

あぶなしかなし〔副〕ようよ
うやっど。やっどのこと。ど
うにかこうにか。危ないところ
で。「めえーおおたこたあ合
うたばって、あぶなしかなし
の所^{ところ}じゃつた」。

あぶなっか〔形〕あぶない。危
険。

あぶぬし〔名〕地域や土地の有
力者。

あぶみぐわ〔名〕乗馬の鎧に似
た鉞に比較的短かめの柄をつ

けた鉞。農具。

あぶらずまし〔名〕油を入れ
る小さな壺。

あぶらけむそーけむなか
〔形〕人の体のどこにも脂肪気
もなく、ばさばさしたさま。

あぶらまぐろ〔名〕まぐろの
一種か。脂肪分の多いまぐろ。
魚名。

あぶらめ〔名〕あいなめ。魚の
名。

あぶりこ〔名〕餅や魚などを焼
くのに用いる金網。

あへしか〔形〕あぶない。「あ
えしか」「あぶねしか」に同
じ。小児語。

あぼーばれー〔形〕所有の金
品を消費し尽したり、失い尽
くすさま。

あぼし〔名〕田・畑の畦畔の高
い岸となった所の名称。「あぼ
しの草切りしち来た」。

あぼり〔名〕牛馬の飼料「はみ」
に加える青草類。「あうぼり・
あおぼり・あをぼり」などと
もいう。

あま〔形〕甘え。甘えんぼう。
「あまちゃん」などと用いる。

あまいえぼー〔名〕甘えたれ
っ子。

あまいり〔動〕海に潜り漁をす
ること。

あまがみ〔動〕やわらかに噛
む。噛む真似をする。甘え噛
みする。

あまからみ〔名〕漕ぎ柱を船に
張り付ける綱。鯨組用語。

あまご〔名〕雨具。

あ

あまごーら〔名〕天の川。銀河。

あます〔動〕誤る。間違う。「余す」。「火をあます（火を誤る）」。

あまだ〔名〕古い形式の民家で家の中の爐の上に竹で編んだ箕子を吊す。これをあまだという。ここに溜る煤を払うのを忌む。

あまにし〔名〕簍の一種で甘味のある貝。海辺の岩石の間に棲む。「あまにし」に対し「からにし」も同じところに棲む。辛い味がする。

あまぐしゃぐめ〔名〕あまのじゃく。つむじ曲り。へそまがり。事毎に反対の意を唱える者（こと）。

あまふなとー〔名〕(1)みずすまし。水棲昆虫の名。(2)海士・漁士を卑下して斯う呼んだ。「ふなとう」に同じ。

あまめ〔名〕(1)油虫。ごきぶり。(2)舟虫。(3)常に火にあたる者の手足に生ずる赤い斑紋。「あまめあぶりだすだき火ぬくーだ」。

あまやぬひでり〔形〕雨が止んだ後の晴れた空に輝く強烈な日光。

あまゆ〔名〕甘酒。「いちやざけ」ともいう。

あまよぬひでり〔形〕「あまやぬひでり」に同じ。

あまり〔名〕酢。

あまりはちこく〔形〕過分に余剰のでるさま。「酒も肴もあ

まりはちこくした」。

あまんじゃく〔名〕あまのじゃく。

あまんしゃぐま〔名〕あまのじゃく。

あまんしゃぐめ〔名〕(1)あまのじゃく。(2)咸種の蝶の蛹虫の名。(3)蛙のことを呼ぶともいう。

あみあがり〔形〕廃品となって役に立たなくなること。お払いばこ。

あみかがす〔名〕捕鯨用に用いた網用の太い麻縄。

あみかた〔名〕網漁業者の利益を配分する場合、網主に属する部分をいい、総漁獲高から雑費を引いた残りの半額とした。

あみこ〔名〕網子。網漁の資本主元方に対し従業員務者。

あみだいく〔名〕網職人。鯨組用語。

あみだねぶつ〔名〕南無阿弥陀仏の声明を唱える念仏。「ねぶつ」参照。

あみだり〔名〕編垂。藁や竹を編んだ編物を戸の代わりに家の出入口に吊したものを。

あみまい〔名〕編み舞。神楽舞の名。浦部で所望に応じ舞われる。一人網又は網代品と鈴を持って地舞を舞う。そこに夷神が現われて問答があり、網を舞所望の当主に被せる。神楽歌の書に「漁(すなどり)」とあるのがこれ。

あみよーじ〔名〕あめ牛。すだれ毛の牛で力が殊のほか強い

といわれる。

あむちゃく〔動〕仰向き加減に口を開く。「あぐちゃく」に同じ。

あめ〔名〕味噌用の大豆を煮あげる時に出来るあめ色あめ状の汁液。

あめどり〔名〕かわう。ペリカン目う科の鳥。日本には他に、うみう・ひめう・ちしまうがらすが繁殖すると。

あめのこやね〔名〕天児屋根。神楽舞の一つ。採り物は鈴と注連縄。大々神楽舞の一つ。

あめふりのき〔名〕ごんずい。きつねのぢぶくろ。野鴉椿。構。みつばうつぎ科の植物。

あもじょー〔名〕(1)小児語でお化け。妖怪。「あもじょーんでる(くる)よー」などと子供を叱ったり、たしなめたり、さとしたりする。(2)地中に小穴を穿ちその中に棲む「にわはんみょう」の幼虫。あまのじゃこ。釣糞蛇に当るか。

あもじょーぐさ〔名〕ぬかぼ。やまぬかぼ。すずめのかたびら。いね科。「あもじょー釣り」遊びに用いる草。

あもじょーつり〔名〕あもじょーぐさを使ってあもじょーを釣り上げる子供の遊び。

あもよー〔名〕「あもじょー・あもじょ」に同じ。昆虫みちおしえの幼虫。

あや〔感〕物事に感動して発する語。あらまー。「あやー」ともいう。

あやかり〔名〕愚か者。間抜け。「あいかり・ありかり」に同じ。

あやくろしか〔形〕ややこしい。曖昧。

あやす〔動〕落す。汚れを落す。穂や種実を落す(脱穀)。「稲をあやす」。

あゆみうえ〔名〕横に広く構えて両方へ歩み寄り一筋宛完成する田植法。井条植え以前の人の手による田植法。

あゆみぞめ〔名〕略式な嫁入り法。正式の結婚式を経ないで婚家先へ嫁が入ること。以後は婿方で一緒に生活したり、又は生家から通ったりもした。後日正式な婚礼を挙げ嫁入り道具もその時に運び込んだ。本人(徴兵)・親(重病)・家(女の働き手必要)等々の事情で急を要し、にわかのことでは「茶祝儀」も間に合わない時などに行われた。

あよ〔感〕「あよいえー・あよえー」に同じ。

あよいえー〔感〕いかにもそうだったかと感歎して発する言葉。「あよ・あよえー・あよなー・あよまー・いかなえー」なども同じ。

あよえー〔感〕「あよいえー」に同じ。

あよしょなー〔感〕「あよっころよー」に同じ。

あよっころいえー〔感〕「あよっころよー」に同じ。

あよっころよー〔感〕奇特な・

あ

感心なという意味に多少の憐
愍・軽侮の情を以て発する語。
「よくもまあ、ほんに……」。
あよっこりよー〔感〕「あよっ
こらよー」に同じ。
あよっしょあー〔感〕「あよっ
こらよー」に同じ。
あよっしょなえー〔感〕「あよ
っこらよー」に同じ。
あよどーゆー〔感〕「あよ・あ
よいえー」に同じ。
あよなー〔感〕「あよいえー」
「いかなえー」に同じ。
あよまー〔感〕「あよいえー」
に同じ。
あら〔名〕白米・玄米に混在す
る粃。〔接頭〕粗大。概略。「あ
ら積り」。「あら取り」。
あらかぶ〔名〕かきご料のかき
ご。「あるかぶ」ともいう。魚
の名。
あらき〔形〕(1)気の強いこと。
(2)転じて焼酎の代名。「あら
き・あらきの焼酎」「しょうむ
く」に同じ。
あらくたましか〔形〕荒々し
いさま。「あらくたましい」「お
ーくらましか」などと同形式
に用いる。
あらぐれうえ〔名〕「いながら」
を犁いて直ぐ水を張り「しろ
かき」して植える田植法。理
由はいろいろ。「いながらす
き」「しろかき」参照。
あらぐれおこし〔名〕荒塊起
し。田畑初回の犁き起し。
あらぐれかき〔名・動〕「いな
がらすき」とは逆に水田中央

部から「ぐうらん(周辺)」に
向って犁き返した田面を平に
均しながら荒々しい「くれ(土
塊)」を破碎していく作業。こ
の段階の農作業を「田ほどき」
又は「田をほどく」という。
あらけ〔名〕麦と大豆の連作の
弊害を防ぐため3年に1度菜
種や粟を作付け、畑地の更新
をはかった畑。「あらき」とも
いう。
あらごしらえ〔動〕農耕の手
順や方法を簡略化して粗仕上
げすること。又は大体の仕上
げ。
あらし〔形〕荒土。血気盛りの
意。「あらしの男」「あらしの
者」。
あらしを〔名〕荒塩。神楽舞の
一種。神社でも大々神楽には
舞う。家宅の祓いの舞で、古
記には神楽始めの次に烏帽子
着2人、折敷に塩を入れて舞
うと記されている。
あらっばさん〔形〕荒々しい
さま。「あらっばさんな男」「あ
らっばさんな事あるなよ」。
あらどり〔名〕荒取り。見込み
取り。
あらばたけ〔名〕収穫したまま
手の加わらない畑。あらばた
けを犁くには多くは「ぐりぐ
り犁き」にする。「かたくち犁
き」や「ねり」をとって犁く
こともある。各項参照。
あらばつけ〔名〕「あらばたけ」
に同じ。斯う呼ぶのが普通。
あらやま〔名〕おおやま。大体

の見積り。概算。見込み。

あらんめーが〔形〕あるまいが。ないだろうが。「あらんめー」の念押し。

あり〔代〕あれ。「ありおくれ(あれください)」。

ありかり〔名〕「あいかり」に同じ。

ありこり〔副〕あれこれ。かれこれ。雑多な事柄。「ありこりしをつたら日は暮れた」「ありこり思めえをつたら恐ろしゅうなった」。

ありつきごめ〔名〕寺送り法要の後、新仏に付けて、ろーそく・線香と共に白米1升を寺に持って参る。この米をいう。

ありっしゃ〔副〕あれだけ。あの位。「あれっしゃ・あれしこ」に同じ。

ありどむ〔代〕あれ達。彼達。あの者たち。「あるどむ」に同じ。

ありまち〔副〕あるだけ。悉皆。「ありまち盗られた」。

ありまとー〔名〕「あるまど」に同じ。

ありゃー〔感〕あれまあ。軽い驚き。

ありゃーばい〔感〕「ありゃー」に同じ。

ありゃーまー〔感〕「ありゃー・ありゃーばい」に同じ。

ありやけ〔形〕かすかな中に明るさのあるさま。夜間などおぼろな中にもそれと明確に指摘できる時に用いる。「ありや

け見えちよる」。またぼんやり状況にも用いる。

あるー〔動〕洗う。「あるう」も同じ。

あるう〔動〕洗う。

あるかぶ〔名〕かさご。魚の名。「あらかぶ」に同じ。「今日はあるかぶのよう釣れた」。

あるどむ〔代〕あれ共。あれ達。

あるまど〔名〕煮た鶏卵にかまぼこのころもをかけて作るありまとう。

あるもねえーてのいく〔動〕有るものに手がいく。身近に在るものに心が動かされ行動が誘発されるさま。

あるわし〔代〕彼の人。下級者への呼び名・ことば。

あれ〔名〕(1)米の粉。穀類の粉末。(2)おはぎ・ばた餅につける餡。「あれー・にあれー」ともいう。〔代〕あなた。お宅さま。「あれへん」に同じ。あなたさま。

あれー〔名〕「あれ」の(1)(2)に同じ。

あれしこ〔副〕「ありっしゃ」に同じ。

あれっしゃ〔副〕「ありっしゃ」に同じ。

あれへん〔代〕お宅あたり。お宅様あたり。「あれ」と同意味であるが、不的確な表現で相手への敬意や自己の恐縮の意をこめて表現する時用う。

あろうのうで〔副〕ありとあらゆる。ありったけの方法・

あ

もの。〔代〕有る物全部。色々
たくさん種類の物。

あわする〔動〕牝牛の発情に牡
牛を交尾交合させること。「あ
わせる」も同じ。

あわせごえ〔名〕麦や菜種の播
種に際し、堆肥や人糞肥を和
合してこれに種子を混じて播
く。この混合肥の名。

あわぬとしのよ〔名〕旧正月
15日の夜。この夜笹を「おん
だらがい」に浸し粟糠又は粃
殻にまぶして「粟穂」と呼び
荒神様に献ずる行事。「稲の歳
の夜」に対する行事。「いねぬ
としのよ」「おんだらがい」参
照。

あをぎた〔名〕旧暦8月頃に吹
く晴天下の北風。

あをくび〔名〕真鳴の雄鳥。味
最高と。

あをしまさー〔名〕淡島神。
民間信仰神で安産を司る。「あ
うしまさー」に同じ。

あをしる〔形〕稲・麦・大豆
等の穂が黄熟せず、褪色して
青白くなる様。長雨外色々の
原因で黄熟が緑色に逆戻りし
て熟さないさま。あおしれる。

あをだけぜめ〔名〕青竹を組
んで家の入口を塞ぐ刑。旧藩
時代上納米滞納処分制裁法と
して適用された。何日間かの
刑を受けた後はそのまま許さ
れ差押え処分はなかったとか。

あをびがね〔名〕海土が鮑獲り
に使用する鉤。あわびかぎ。

あをびぶくろ〔名〕海土が潜

水漁に携行する麻や紡績糸で
作った漁獲物を入れる網袋。

あわび袋。

あんき〔形動〕心配事のないさ
ま。閑暇。安閑なさま。「心配
しゅうちゃ思わずあんきなも
んたーえ」。

あんきうっぱなす〔形動〕安
閑として油断しているさま。

あんきなもん〔形動〕あんき
なさま。無関心さをなじり責
める発語。

あんきょー〔名〕味。あんば
い。「あんきょーが良か」。「あ
んちょー」ともいう。

あんぎりあんぎり〔副〕ゆる
ゆるだらりだらりに物を食べ
るさま。だらしなく良くない
格好。「あんぎりあんぎり道な
んがり食い乍ら戻っち来た」。

あんくおー〔形動〕ぼかんぼん
やりし切っているさま。まぬ
けたさま。

あんくおーはなす〔形動〕ぼ
んやりな様。「何んぼあんくお
ーはなしをるか」。

あんげどー〔代〕あいつ。彼
奴。あの悪もの（人・動物）。

あんこはなす〔形動〕「あんく
おーはなす」に同じ。

あんじ〔名〕思い。気付き。思
案。考え。

あんしー〔名〕あじさいの花。

あんじがけむなか〔形動〕意
外な。全く。思いもよらぬ。

あんじだす〔動〕考えだす。思
いだす。「いつ言うてるあんじ



ださぬ」。

あんじむこじもなか〔形動〕

「あんじがけむなか」に同じ。

あんじむなか〔形動〕「あんじ

がけむなか」に同じ。

あんだめ〔名〕宅地や田畑から

の流出土水を溜めるために掘

った堀。「あづだめ・あづちだ

め・ほり」ともいう。

あんちょー〔名〕「あんきょー」

に同じ。

あんなに〔代〕あの人。「あんな

なん」。

あんなん〔代〕あの人。あの

方。

あんばく〔名〕あらかぶに似た

鮮紅色、かさご科の魚名。沖

海に棲息する。「かせあんば

く」参照。〔形〕うまく。都合

よく。上手に。「おんまく」に

同じ。

あんべ〔名〕塩梅。具合。都

合。

あんべよー〔副〕都合よく。上

手にうまく。あんばいよく。

あんぼつあぐる〔形〕大失敗

する。

あんぼん〔名・形動〕阿呆。馬

鹿だったれ。

あんぼんたん〔名・形動〕あ

んぼん。

あんめさんめ〔副〕子供が長

ったらしく泣きむずかるさま。

「あんめさんめ泣きをする」。

あんやん〔名〕若い女。あねさ

ん。あねじゃん。女郎。「あん

やん買う・あんやん買えげ行

た」。

い

い〔助〕(1)るの変化として音に

でる。「分つちよい」。(2)れ・ら

の変化として「そいかい」。(3)

に・へが変わる「緑いになった」

「箱い入れた」。(4)やが変わる。

「遊ぼうい」。

いー〔名〕労働の相互交換協力

行為をいう。結い。ゆい。い

い。「いーする」「いー戻す」。

いーぐさ〔名〕言い訳(態のよ

い)。口実。「いーごつ」に同

じ。

いーご〔名〕こおろぎ。こおろ

ぎ科。

いーごつ〔名〕言い訳。「あり

(あの人) がいーごつたい」。

いーしろ〔名〕結い。いひ。ゆ

い。「いーしろでむしち、田の

草取りせにゃたい」。

いーつけ〔名〕結い付け帯。子

供を背に負う帯。「かるう(背

負う) けんいーつけ持ちちょ

いで」。「いーつけおび」「かれ

ーおび」ともいう。

いーつける〔動〕子供を背負

う。「かつかいする・かつこい

する」も同じ。

いーで〔名〕(1)結い手。稲や麦

の束を括る藁で作った縄の一

種。数本ずつの稲藁の穂先ど

うしを緋い合わせた一本の簡

易な括り縄。(2)戒めごと。言

いきかせ。「いーでんようきか



ん・ようきく。「いいで」も同じ。

いーてこつ〔名〕身勝手な言い分や我侭本位の主張。言い度い放題の言い草。

いーてふーで〔名〕言い度い放題。「いーてふーでにもの言う」。

いーむし〔名〕海辺の小石の下に棲む黒い虫。鯛漁の夜縄の餌に用いる。「ふゆむし・ふいじんむし」ともいう。「すー」も同じ。

いーもどし〔名〕「いい」を受けた家には必ず「いい」でもどす。自分で行けない時は第三者を雇ってでも「いいがえし」をする。「てまがえし」ともいう。

いーんげ〔感〕いいえ（決して）。否。「いんげ」も同じ。

いあすび〔名〕幼児が眠り乍ら笑っているのをいう。「ねあすび・ゆめあすび」ともいう。知恵が入っている・夢をみていふ・ふとりよる（身長が伸びている）・えびすさま（えんまさま）が笑わせてござるなどという。「いあすびしおる」と言いよろこぶ。

いうえー〔名〕お祝い。「いうえーごつ」に同じ。

いうえーかざり〔名〕旧暦正月6日に箸の頭に餅を焼いて付け、更に鯛をぬり着け家の入口や神前に供えるものの名。祝い飾り。

いうえーかざりもち〔名〕い

うえーかざりに用いる餅。旧正月6日に用いる「焼きかがし」の餅。

いうえーぐち〔形〕相手の喜ぶような口の利き振り。お愛想。おべっか。「いうえーぐちばっかし言う人間」。

いうえーごつ〔名〕祝い事。お祝い。

いうえーだろ〔名〕祝い太郎か。歳男の意。町家新年の餅搗き、飾り付け等一切を受けもつ男。各戸は特定の指名者をもち、当家の主人死去の外は備い替えをしないとか。

いえー〔助〕命令形の語尾につき、幾分願望の意を含む。親密な間柄にのみ用いる。「早よ来えいえー」「俺え呉れろいえー」。「いえ・え」も同じ。「来ええ・呉れろえ」となる。

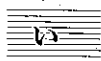
いえーしを〔動〕潮の干満が不規則に急激に来ること。「しをがくるう」ともいう。「いえーしをんさす・いえしを・えしを」ともいう。

いえーだ〔名〕間。「飯食ういえーだ待て」。「えーだ」も同じ。

いえーたんぼ〔名〕泥酔。泥酔者。「いえーたんぼしちよる」。「えーたんぼ」も同じ。

いえーつる〔動〕吐き気を催し喉の奥からこみ上げてくるさま。「いえーくいえーく（えーくえーく）」いう。

いえーと〔名〕灸。「えーと・いやーと・やーと」も同じ。



「いえーと据ゆる(灸すえる)」。

いえーとー〔名〕酔っぱらい。酒に酔った人。「えーとー」も同じ。

いえーとぐさり〔名〕灸の跡が化膿状になりできるぼつぼつの斑点。

いえーばり〔名〕(1)寝小便。夜尿。「えーばり」「あみひく」ともいう。(2)あいご。あいご科の魚の名。

いえーらしか〔形〕(1)可愛らしい。(2)小さい。

いえいえー〔名〕小児語でさかな(魚)一般をいう。「じいーじ・じいーじい」も同じ。

いえいと〔名〕灸。「いえいとー・えーと・えいと・やーと・やいと」などともいう。

いえいとー〔名〕(1)鬼ごっこ。かくれる側の者が「いえいとー」と呼ばれ発見を確認されるからの名。(2)灸。

いえかけほーじ〔名〕命の前の夜に位牌や十三仏を飾り祭壇を整え、檀那寺より僧侶来て法要準備読経などをする。「えかけ(絵掛)ほーじ(法事)」。

いえくぼめし〔名〕子供が生まれると一砂飯を山盛り押えつけにきれいに盛っておく。生児の首がぐらつかずしゃんとなるようにするためという。又この飯を指でちょっと押しくぼみをつけておくと生児に笑くぼができるともいう。「え

くぼめし・うぶちのめし」ともいう。

いえぐる〔形〕あくが強く喉がいらいら刺激されるさま。えぐいえがらっぱいさま。「えぐる・えぐし」も同じ。

いえぐわつと〔形〕満面笑顔のさま。

いえご〔名〕湾曲した内側。「あのいえごは温くか」「耳の後のいえごに垢溜^{うしろ}つちよる」。

いえごーな〔名〕他家での飲食や寝泊りができない(できにくい)性格の者。自家でなければ万事何事もでき難いかなな性格の変り者。「ごーな」は貝・蜷。やどかりの類。

いえずいー〔形〕ひどく。大変に。とても。「いえずいー早かつたねえ」。

いえすか〔形〕大層。ひどく。「いえすか太かつたつちゅうなあ」。

いえせら〔形〕笑顔を見せるのを表面的態度とみてとり罵り言う。「いえせらとるな」「いえせらかえーちよるばつて信用はされん……」。

いえせらとる〔動〕笑いふざける。

いえせろしか〔形〕そねみがましい。

いえたる〔動〕腐敗する。主に魚類の腐敗をいう。「いえわる(弱る)」ともいう。

いえつちん〔名〕さかな(魚)。幼児語。

いえつにいいる〔形〕思う通



りになりほくほく顔になり喜ぶ。悦に入る。「いえつにいてる・えつにーいる」。

いえて〔名〕餌。釣り餌。「いえて食わする・いえて撒く」。えで。えさ。

いえどいえ〔名〕江戸絵。絵。「いえどえ・えどえ」も同じ。

いえどーじ〔名〕家の主人。亭主を尻に敷く女。「いえどじ」も同じ。

いえなもん〔副〕のような。ようなもの。「えなもん・げなもん」に同じ。

いえに〔副〕「げーに」に同じ。参照。

いえびがね〔名〕(1)餌走13日藁一握りの中に栗の枝2本笹2本を入れて束ね、これで煤を掃き、後小縄で螺旋状に巻き曲けて輪状にし、荒神棚の側に吊しておく。これを「えびがね・いえびがね」という。「まんぐり」「わらぼて」という地もある。餌走13日は迎春の為の煤払いの日である。(2)伊勢蝦。えび科の節足動物。

いえらかす〔動〕だます。からかう。うそをいう。「あやす」意に用いて「子供をいえらけえち遊ばする」などという。「えらかす」も同じ。

いえりごめ〔名〕衣服を裁つ折、米3粒宛3か所に供え祈り拝む。この米をいう。襟米の意と思われる。

いえわる〔動〕弱る。よわる。「いえたる」に同じ。

いえんいえん〔動〕歩く。「えんえん」に同じ。「いえんこする・いえんこ、えんこする・いえんいえんする」。

いえんしゅー〔名〕焰硝。火薬。発破。「えんしゅう」も同じ。

いえんしゅーわり〔動〕焰硝割り。火薬を用いて石を割る。「はっぱわり」。

いえんどーもち〔名〕豌豆を煮て、甘藷・黒糖などと搗き混ぜ餅状に握り固めたもの。えんどう餅。

いえんのこいえんのこと〔動〕布団に寝かせた小児をそのまま布団ごと引っ張って位置を移動する。「いえんのこいえんのことする」ともいう。「えんのこえんのこと」も同じ。

いえんば〔名〕蜻蛉。とんぼ。「えんば」「ねんば」も同じ。

いえんめりごーり〔副〕甘ったれてむずかり泣くさま。えんえん泣くさま。

いお〔名〕うを。魚。うお。いを。

いおづら〔名〕はまひるがお。ひるがお科の植物名。「いをづら」も同じ。

いが〔名〕児。いが児。孩児。

いがいが〔名〕「いが」に同じ。

いかがた〔名〕いか漁に使う漁具。烏賊型。

いがく〔動〕ゆがく。野菜や海藻を熱湯浸しする。「あをむる」ともいう。



いがご〔名〕「いが」に同じ。孩児。

いかさむ〔副〕まさか。よもや。多分。「いかさむ来るじゃろー」「いかさむ来るめえーだい」。「いかさも」に同じ。

いかしこ〔副〕少しも。わずか。いかほど。どれほど。ほんの少しばかり。「いかしこむかからん」「いかしこむなか」。

いかずごけ〔名〕老未婚女性。「ばっちょー」に同じ。

いかにこ〔名〕風の一種。「みなだこ」に同じ。

いかっしょ〔副〕いかほど。どれほど。ほんの少しばかりの量(物・時間等)。「いかっしょむかからん」「いかっしょむなか」。「いかしこ」に同じ。

いかとり〔名〕烏賊漁。「すってー」を用いて釣る漁法。

いかとりぐも〔名〕入道雲。

いかな〔感〕何という。〔副〕決して。どうしても。

いかなえー〔感〕「あよえー」に同じ。「いかなえーまー・いかなげえー」に同じ。

いかなこつ〔感〕「いかな」に同じ。「いかなこつてー・いかなこつやれ」も同じ。

いかなこつやれ〔副〕絶対に。どんなことがあっても。「いかなることあれど」もか。

いかなこてー〔副〕「いかな」に同じ。

いかなまー〔感〕「いかなえー」に同じ。

いかにとわしてむ〔副〕どん

なににしても。何とも言語に絶するの意。「いかにとわしてむ腹ん立っち気の納まらん」。

いかにもげえーに〔副〕なるほど。「いかな」以降の各語は多くは感動詞であり又副詞のはたらきをして来たことばであった。

いかひき〔名〕いかがた用いて烏賊を漁る法。漁具「いかがた」を海面に浮かせ船で曳き烏賊を獲る法。

いかまきずってー〔名〕長てのすってーの胴に烏賊の肉を巻きつけて烏賊を誘引する漁具名。

いかよび〔名〕「おきなわすってー」につける白い陶製の漁具。

いかりた〔動〕死んだ。「はしらした」に同じ。

いがりつく〔動〕こげつく。固く密に付着する。こびりつく。くつつく。「いがりついーち離れはせん(物が・人が)」。

いかる〔動〕死ぬ。やらるる。してやらるる。「いかりた」に同じ。

いき〔接頭〕強意の接頭語。非常に。たいへんに。いかにも。いき横着者・いきなめら・いき面憎くか。

いきうるさか〔形〕ひどく肩身の狭い思いをする時発する語。くやしきもある立場にある時出る。

いきおーたましか〔形〕予想以上に多量なるさま。「いきお



一たましかしこ持ち来たねえ。」「おーくたましか・おーたましか」に同じ。

いきおーちゃく〔形〕いかに横着。極めて横着。横着そのもの。

いきおーどーもん〔名〕大の横着者。大それた横着者じゃ。

いきおい〔形〕大変（すばらしい）。たいしたものだ。たいしたものでは無いと思われる場合、ひやかし気味に「いきおいなもんたい」と用いる。

いきおいなもん〔形〕たいしたものだ。美事なもの。大きい・偉大なもの。本来は素晴らしいに用いるが、時に多少の揶揄や批判をこめて用いることがある。

いきごけ〔動〕走り乍ら力余って倒れるさま。「こけ」はこける、倒れる。

いきざし〔名〕呼吸。息ざし。多くは病人に用い「いきざしの良か（悪か）」。

いきざま〔形動〕ざまあみろ。だから言わぬことじゃない、その果て遭うたろうが。「なるこ・なるこんはて」などの同義語あり。「それみろ」。

いきじょー〔形〕かんしゃく。「いきじょーもち」「いきじょーんわるか」。

いきずすり〔動〕嗚咽。「いきずすりしち泣きおる（泣く）」。

いきすり〔副〕いきなり。するやいなや。突然に。瞬間に。

いきせしら〔形〕呼吸のせわしいこと。「坂ん急でいきせしらつーいち登った」。息せき切るさま。

いきぞー〔名〕屁。「いきぞ・いきぞう」も同じ。

いきづむ〔動〕息を腹に詰めるようにして力む。

いきづらにくか〔形〕憎々しい。憎たらしい。「いきづらにっか」も同じ。

いきどう〔名〕息道。気管。「いきどーん詰ったごたる」。

いきなわれん〔動〕お行きにならない。行かれない。「いきなはれん」も同じ。

いきはききる〔形〕息苦しい。心ぞう止まりそう。「いきはききる」。

いきはききる〔形〕はーはーと息苦しく胸はずむさま。

いぎり〔名〕(1)炭火の中に埋めるようにして燗をする尻のことがった徳利。(2)錐。工具のきり。

いぎりこむ〔動〕もむようにねじ込む。

いぎる〔動〕(1)錐でもぎ込む。錐で穴をあける。(2)辛らつな言動。「いぎりやらく」も同義。

いきろしか〔形〕「大な」。

いぐち〔名〕いびき。「いぐちかく」。

いくところごつね〔副〕行く先々ことごとくに。

いぐら〔名〕いしげ。ひばまた科の海藻名。「いむら」ともい



う。
いけ〔名〕硯。
いげ〔名〕(1)魚類の小骨。「のでいげん立った(喉に小骨が刺った)。(2)野ばらやとげをもつ草本のとげ。いげ・やはいげと呼ぶ。
いけー〔形・副〕はなはだし。大きい。たいそう。ひどく。「いけーきつかつろう」「いけー腹ん立つろう」。
いけーこつ〔形〕沢山に。多量に。「いけーこつお世話になりました……」「いけーこついただきます……」。
いけぐちたたく〔動・形〕横柄な口を利く。暴言を吐く。「あざたたく」も同じ。「いけぐちたたきをつた」。
いけとー〔名〕生前に用意建立の墓碑。いけばか。「ぎゃくし」ともいう。〔副〕いきなり。突然予告なしに。
いけばえ〔名〕生餌をつける延縄漁。
いけばやし〔名〕追い剥ぎ。
いげぶく〔名〕全身に刺を振り立てる河豚の一種。
いげめし〔名〕(1)魚の骨身を炊き込み飯にし「いげ(骨・小骨)」をはずしながら食べる。美味な老岐の郷土食。(2)嫁が姑に「小言」を言われ乍らの食事。「いげ」入ってなくとも辛かったのでは。「他人のいげめしも食うちみにゃわからん」そんな例に。
いご〔名〕こおろぎ。「いーご・

いーご」も同じ。「いごん鳴きをする」。
いこらっしゃる〔動〕行っておられる。お行きになっている。行かれている。
いさなむ〔形〕船霊様の声の勇めるに用いる。「船霊様がいさなまっしゃる」と言って、音が高く強く聞える場合に用いる。「船魂様がしげらっしゃる」ともいう。ふなだま参照。
いさば〔名〕千石船造りの「すらども」のある荷物船。「すらども」参照。
いさり〔名〕夜間灯火を点して浅瀬に眠る魚を突く漁法。
いさる〔形〕網などにくらみやゆとりのあるさまをいう。「よういさつちよる・いさりかたぬたらぬ」など。
いし〔接頭〕下に続く語意を強めるに用いる。(例)「いしめくら・いしつんぽ」。
いじいじ〔副〕意地悪く憎しみ込めていう。「ひでえいじいじ言わす人」。
いしうち〔名〕石を投げて小鰻を網に追い込み獲る漁法。
いしがんとわら〔名〕大小の石の無数に散在している。ごつごつした石原。「いしごとわら」ともいう。
いしき〔名〕尻。臀部。
いじき〔名〕肛門周辺。周辺。
いしくじり〔名〕けちんぼう。けち。
いしくら〔名〕石を多く積みあげた所。



いしぐるま〔名〕踏んで転がる小石。「石車に乗っち、けえ転うだ」。

いしごつ〔名〕居仕事。坐ってする仕事。家に居てする仕事。「いずえーく（居細工）」ともいう。

いしごってー〔名〕大の頑固者。こってーは牡牛。

いしこどり〔名〕小石をお手玉にしてする小児の遊びの名。

いしごとわら〔名〕「いしがんとわら」に同じ。わらは原。原っぱ。

いしたたき〔名〕ひたき。小鳥ひたき類の総称。石をたたくように尾を上下に振って石の上を動き廻る小鳥。

いしつんぼ〔名〕耳の聞こえが極度に悪い人。「かなつんぼ」ともいう。

いしでつくおー〔名〕不器用極まりない人。

いしぶたみな〔名〕蟻。頭に中高円形の硬い貝のふたを持ち口を閉じる小貝。食用になる。

いしまめ〔名〕(1)大豆など豆類が特に硬く水に浸したり煮たりしても全く軟らかにならないものができることがある。これを「いしまめ」という。(2)まめづた・まめごけ・いわまめと呼ばれている「うらぼし科」のしだ植物をいう。

いじめ〔形〕居仕舞。坐った姿勢。居振舞（立居振舞のうちの）。「いじめの悪か・なんちゅ

ーいじめけえー」。

いしめくら〔名〕(1)全く目の見えない盲人。(2)見えるのに周辺状況に気付かず周囲の見取れない者。

いしもぐら〔名〕やえむぐら。あかね科の植物名。

いしもち〔名〕頭頂に白い石のような独立した骨の小塊を持つ赤黄色の小魚。ぐち。

いしゃたわし〔名〕げんのしょうこ。痢病に効くゆうろそう科の薬草。

いしゃたをし〔名〕きらんそう・ぢごくのかまのふた。金瘡（刃物で受けた切り傷）小草と呼ばれるしそ科の薬草。腫物にも卓効ありと。

いしゅう〔名〕宍州。古来宍岐は一小島でありながら国防・交通上も重要な位置にあり、九州・対州と同格の一國なみの扱いを受けて来た。州には「す・しま・く」の意がある。即ち宍岐国ということである。

いしゅうたんぶつ〔名〕宍州嘆仏。嘆仏とは仏を讃嘆すること、曹洞宗での宍岐独特の地方声・明である。17世紀中頃中国の禪院から伝えられ、別名を「唐嘆仏」又は「十夜嘆仏」とも言い、全国的な「和嘆仏」に比較して用いられる楽器・リズム・仏の名・経典の読みなど、より中国的で現在では禪宗寺院を始め各宗派の寺の普山江湖会・十夜供養



の他、在家の法事供養にも営まれている。勤める僧数は基本的には導師以下6名以上が必要で厳かな中にも華かに執り行われている。

いしゅうぼんうた〔名〕旧暦
7月15日の夜を中心に盆供養として各地で綱引きをした。13日に太鼓を打ち若衆を集め綱を作り、14日黴伸べと称し軽く引き合い、15日盆の戻りに仏の腰を引き立てるといって必ず引き、16日18日は夜三更まで引き、17日は休んだ。20日に亡者（無縁仏・諸霊）供養として綱引き場周辺で念仏を唱えた後綱を納めて綱引き行事がすべて終わる。盆綱引きに関連して唄われて来た歌をいう。歌詞・(1) 盆の十五日にゃ綱引き見げ行こや綱引きかこつけ袖を引く。(2) 盆の十五日の綱引こよりも可愛いいべつびんさんの袖を引く。

いしゅうま(名) 忝州間。三九尺 三間梁(さんかんりやう)といって、間口四間半(さんくせん) (三九尺) 奥行三間の家の構えが、昔からの忝州の住家の基本で、これを規準に柱・壁・戸・障子・部屋間仕切り・畳等の大きさが割り出されてきたというのである。因みに畳は6尺に3尺。「三間に三九尺」の言いもある。

いじょーする〔動〕ともかく
(とりあえず)その場所に定住
する。(住つく)。

いずえー〔形〕威勢。贅沢。奢侈。

いずえーく〔名〕居細工。立ち働く仕事に対する坐り仕事。「いしごつ」。

いずき〔名〕鋤。主として水田を犁くのに用いる。鋤先に鋭い刃の短い鋤が取り付け、あり田面を犁き返す。

いずきがま〔名〕いずきの先端に取りつける鋳物の金具鋤先。刃が付いて土を切り拓くはたらきをする。一般に鋤の先端に取り付ける金具を「鋤きり鑿」という。

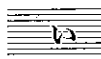
いずめ〔名〕いじめ。弱い者を苦しめる。

いせこー〔名〕伊勢講。伊勢大神宮への代参派遣講と揺拜講がある。

いせさかいじゅう〔名〕料理類・米などを入れる長方形の塗り木箱。大中小の組み物で量の多少で使い分ける。「さかいじゅう・さかえじゅう」ともいう。他に正方形の小型「重箱」があり、双方便利に使い分けをした。

いせぶた〔名〕海浜の蝸の一種。さざえの如き蓋を頭にもつ。「いしぶた・いしぶたみな」ともいう。又「すがい」「かんぎく」と呼ばれる小巻貝のことともいう。

いそ〔名〕潮干狩り。「いそいき・いそいきする」ともいう。又潮干狩りをするを「いそする・いそしをる」といふ。



舟から箱めがねなどを用いて漁るのを「ふないそ」という。沓州民謡の一節に「対州高見から沓州ん島見たら、沓州のねえしゃん達ちやいそしをる」とある。

いそいり〔名〕潜水漁法。海士・海女の漁法。

いそぎたまぐり〔副〕驚き急ぎあわてるさま。「いそぎたまぐり行たち見たばって言うしこんこたあなかつた」。

いそくろぎ〔名〕まさき類の木の名。にしぎぎ科「杜仲」ともいうと。

いそねずみ〔名〕いぼたのき。もくせい科の植物。

いそぶく〔名〕河豚の一種。しょうさいふぐ。

いそめがね〔名〕四角や四角錐台形の木箱の底部に硝子をはめ海底をのぞき見る具。「ふないそ」「つきいそ」に用いる底見めがね。

いそもん〔名〕鮑^{もく}の呼び名。時として磯で獲れるあわび・とこほし・さざえなどを含めて広い意味でも用いることもあるが本来は「あわび」だけに用いたようである。転じて女性器の俗称として「あわび・いそもん」が使われている。

いそをなご〔名〕海辺に出没するとされた女性姿をした妖怪と。

いたがね〔名〕氷。水面や水溜りに張った板状の氷。「くーり」ともいう。

いたち〔動〕行つて。「いたちおいで（行つておいで）まうせ」「いたちきます（行つて来ます）」「いたちくる（行つてくる）ばな（よ）」「いたちけえ（行つて来い）」「いたちよく（先に行つておきます）けん・ばな」「いたちよかし・いたちよけ（先に行つておけ）」。※鼯は「ゆたて」と。

いたぶ〔名〕いぬびわ。こいちじく。いちじくに似た「小果のう」をつけ熟すると紫黒色となる。「いたび」ともいい、落葉低木雌雄異株。くわ科。「ずくし」ともいう。

いたらむなか〔形動・副〕役に立たぬ余計な事。徒事。無駄なこと。「いたらむなかこつするな」。

いたらんこつ〔形動〕役に立たぬこと。悪いこと。「いたずらごと」の意にも用いる。「いたらむなかこつ」に同じ。

いだりそくなう〔動〕煮えそこねる。完全に煮えきつていないさま。

いだる〔動〕煮える。ゆだる。うだる。「いだるごつ暑か」「暑うしいだろうごたる」。

いちかわ〔名〕いちぶの木の子。麻の皮に似た強い繊維のとれる植物で、漁具・船の綱など作るのに用いた。

いちこ〔名〕鯨の胸の肉の名。

いちごむなか〔形・副〕言うことなしの状況。子供など年齢不相応に物事を処理し、文



句の付けようのないさま。立派なものだ。一語も言うところなし、か。時には軽い冗談やひやかし気味に「いちごむ中野郷」などと。中野郷は岐阜土地名。「中野郷牛の行き戻り荷」などと言われよく働く。

いちのどし〔名〕無二の親友。「どし」は同士・友達。一番の親友。

いちぶ〔名〕(1)「いちかわ」に同じ。(2)漁具「すってー」の尻に付けた紐(長さ一寸く3cm)程。

いちべ〔副〕却って。一段と。余計に。「いちべ痛う(悪う)なった」。

いちやぐさ〔名〕突然急に罹り、1〜2日のうちに治る病氣。くさは病氣。

いちやざけ〔名〕甘酒。

いちやまぶり〔名〕一夜お守り札。護符の一種。

いちわ〔名・数〕一把。稲束では18握り、周り1尺8寸位の長さの量。1.8尺は約54.5cm。

いちわり〔名〕明治初年土地割り当てに定められた各一戸宛田・畑の持分。身分・性別・年齢・地域差により割り当て分に差が設けられていた。「親から一戸一割譲られた……」。

いっ〔接頭〕「ひっ」に同じ。「いっかける」「いっかやす」「いっこぼす」などと用いる。

いづ〔動〕煮る。ゆでる。「いづる・いでる」も同じ。

いっか〔名・数〕一荷。桶片方に1斗8升入る。一荷は2斗2升の量をいう。「いっかかたつら(一荷半)」。

いっかく〔動〕ひっかける。注ぎかける。「いっかくる・ひっかくる」も同じ。

いっかさばき〔形〕金銭・物資を一度に消費するような振舞。一時に使い果たすこと。

いっかど〔副〕余程。「いっかど良か」「いっかど多か」「いっかどおろ良か(悪い)」「いっかど少なか」。

いっかやす〔動〕ひっくり返す。水などこぼし捨てる。

いっくじり〔名〕吝ん坊。しわんぱう。非常に物惜みする人。「いしくじり」に同じ。

いっくゆる〔動〕こわれる。「うっくゆる」に同じ。

いっくり〔動〕強意の働きをもつ。「いっくりかくる」「いっくりこぼす」など、掛ける・こぼす等につく。

いっくりかやす〔動〕水などをひっくりかえす。「いっかやす」に同じ。

いっくわいしょ〔名〕料理屋。料理屋女。芸妓。酉婦。「いっくわいしょおなご」との言いもある。

いっくわさばき〔形〕一時に全部を消費すること。「漁師のいっくわさばき」などの語が残っている。「いっかさばき」に同じ。

いっこいちわり〔名〕一戸一



割。土地田畑の配分法。「いちわり」に同じ。参照。

いっここー〔名〕小麦粉を練り円く平にして中に黒糖を入れ焼いたもの。平戸藩主が茶菓子として創製したと伝えられている。

いっこむ〔動〕注入する。投入する。ごそつと残さず入れる。うっ込む。

いっこん〔数〕一尾。一匹。

いっこんたくり〔形〕いっしょくた。十把一からげ。ごっちゃまぜ。

いっさき〔名〕いさき。いさき科魚名。

いっさきむし〔名〕海浜の砂礫中に棲む赤色細長のみみず虫。「いわむし」とも呼び釣りの餌として珍重。

いっしゅう〔名〕一升。榊目。

いっしょううまき〔名〕田畑の面積を表す語。田一升播きは上地で一畝半、下地で二畝とされていた。

いっしょうまっしょ〔名〕一生涯。「いっしょうまっしょう」も同じ。

いっすんじょう〔名〕短気者。一寸情。「あやつあいっすんじょうじゃけに」。

いっすんずり〔形〕物事が仲々思うように進まずはかどらないさま。歩くに歩けず四苦八苦の中で進むこと。「足しゃ痛し、いっすんずりしちい戻っち来たばな」。

いっせん〔名〕床屋さん。理髪

人。

いっそんなつ〔副〕むしろ。却って。「いっそー・いっそんなつてー」も同じ。

いっち〔副〕いっそう。一段と。最も。「いっち良か」「いっち強か」「いっちゅ」ともいう。

いっちなとき〔副〕折悪しく。折角というのに。丁度の時。大事な時に。

いっちゅよか〔形〕一層・一段と良い。「いっちょよか」も同じ。「いっちょむ良うなか(少しも良くない)」とも。

いっちょ〔副〕ひとつ。先ず。一度。「いっちょ飯ば食うちかるかろう」。

いっちょーらい〔名〕一張羅。

いっちょーろーそく〔名〕一枚きりの情着。「いっちょーらい」に同じ。

いっちょどり〔名〕お手玉遊び。「いっちょどりしゅうや」。「じゃみ」ともいう。

いつつば〔名〕やぶからし。五葉蔓草の名。烏薺母。ぶどう科。「びんばうかずら」ともいう。

いつでむかつでむ〔副〕きまりなくだらりに。いつでも意にまかせて。物事のけじめなく不用意に。

いってんぐり〔動〕両方に何等の支障もなく自由に往來すること。「壁あ切り破っちくれち、ねずみのいってんぐりし



をるたい」。

いっとー〔名〕一統。一族。系類。血筋。「そん」「ひっぱり」も同じ。

いつとてものう〔副〕何時ともなしに。甚だしく時期を失った場合に用いる。「いつわときわむなか」に同じ。

いつのはずえ〔副〕何時の間に。

いつのよぼで〔副〕何時の時代・頃か。時代・時期不詳の場合。

いっばたったもん〔形動〕無頓着で平気なさまにいう。「誰が行たちち、茶一杯注ぐもんじゃなし、いっばたったもんばな」。

いっばれーだち〔形〕一家挙げて出掛けること。「いっばれーだちしち、遊びー行た」。

いっぴゅう〔名〕一俵（俵物）。

いっぺ〔動〕接吻。くちづけ。キス。小児語として用いる。「いっぺする」。

いっぺたやる〔動〕成人して田畑を一人前に耕すことできる状態。「いっぺたやるごつなつた」。

いっぺとっぺ〔形〕なみなみと。あふれんばかりいっばいに。

いっぼんづり〔名〕鯛・あこう・鯛などの釣り漁法の一つ。

いつまで〔名〕百日草。いつまでそう。きく科の草本。

いづる〔動〕煮る。ゆでる。「い

ずる・いでる」も同じ。

いつわときわむなか〔副〕「いつとてものう」に同じ。

いて〔動〕行つて。「いておいで（行つておいでなさい）」。

いで〔名〕田の水の取り入れ排水口。溝口。堰。川から田に続く用水路。

いてきなか〔形動〕いたいけな。いの毒な。可哀そうな。

いでぐち〔名〕「いで」に同じ。水口。「いでぐちかる湿す」。

いでころす〔動〕自由勝手にする。自己の利益本位に取り扱われる。「問屋かるいでころされる」。

いでほし〔名〕餡もきな粉さえもつけない煮上げたままの延べ団子。「いでほしだご」ともいう。

いでほし〔名〕大根や甘薯などをそれぞれの形、大きさに切り熱湯でゆで、天日干ししたもの。いでほし大根・いでほし蒔（かんころ）。

いでる〔動〕煮る。ゆでる。

いてんごり〔名〕話の結論・物事の結末を次々に先送りすること。

いとくさび〔名〕べら。べら科の魚名。「やなぎば（柳葉）」ともいう。

いとこ〔名〕従兄弟姉妹の関係より遠縁にある間柄で、親しい近しい交わりをしている親戚筋や友人をいう。

いとこはとこ〔名〕血縁・親

戚関係の最末端に連なる人々。
親戚ばし。

いとこはん〔名〕「いとこ」の語に準じて用いる。

いどころね〔名〕うたた寝。ごろ寝。

いとしい〔形〕小さい。かわいらしい。

いとしか〔形〕「いとしい」「えーらしか」に同じ。

いとぞめのき〔名〕はくさんぼく。同属の「がまずみ」を指すことあり。秋冬季鮮紅色の小果を多くつける。すいかずら科の植物。

いととり〔名〕あやとり。綾取り。

いとまげ〔名〕(1)いとまごい。お別れ。退去。「いとまげしまっしょう(帰りました)」。 (2)死。「おばはんもいとまげさした(さした)ちゅうちなあ……」。「のうならした・まいらした」などともいう。

いどりこむ〔動〕坐り込んで動かない。

いどる〔動〕沈黙する。底に溜る。「底にいどる」「泥んいどっちゃる」。

いなかまわり〔名〕日用品雑貨を携え農山村を売り廻る行人。「かれえーあきねえー」に同じ。

いながら〔名〕稲を刈り取った跡に残る切株。又はその田圃。

いながらおこし〔動〕いながら田を犁くこと。稲刈りの後、初めての田起こし作業。「いな

がらすき」ともいう。

いながらすき〔動〕稲の刈り入れの終わった田は12月頃から翌年2月頃までに順次犁き起こす。牛に鋤を曳かせ田の「ぐうらん(周開)」から犁き起こして寒風にさらし、水を導入しないで風化・土中の害虫の死滅を促す。その後春を迎え「あらぐれ」「なかしろ」と作業は続く。勿論現在は殆どの作業が機械化。「いながらおこし」に同じ。各項参照。

いなくわず〔名〕牛を使って農作業する場合、周辺の草や作物を食えないよう牛の口全体に縄や棕櫚縄で編んだ口網をはめる。この網を稲食わず(いなくわず)という。

いなぼのまい〔名〕神楽舞の名。稲穂12本を紙で祝い、それと鈴をもって舞う。四方の隅を舞い終わって口に稲穂をくわえ乱れ舞となる。池田七郎神社に伝わる特殊の舞で祭神の伝説に由来すると。

いなまき〔名〕藁で編んだ穀類を干す晝表一枚大の蓆・蓆。「いまなき」とも呼ぶものあり。

いぬべと一〔名〕鯨組別当(べと一)の下役の渾名。

いねあき〔名〕稲の収穫時季。「むぎあき」参照。

いねいい〔名〕稲の歳の夜の行事。「いねぬとしのよ」を参照。

いねいーいと〔名〕稲結菜。



稲の歳の夜に用いる結びの白糸。

いねぬとしのよ〔名〕旧正月

14日の夜を稲の歳の夜といい、この夜稲藁をきれいにすぐり揃え小束を作り、それに葉付きの真竹2本と根元に12膳の竹の細管の箸を加えて白糸で結び、水がめに浸して荒神様にあげ供える。水がめは満水にしておく(夏秋の水田の水涸れに遭わず豊作に結びつく)。15日の朝「わたしがいのの粥にこの穂先と竹の葉を浸し、更に粃穀をまぶして供え豊作を祈願する。閏月年には13膳の箸を添える。

いねぬよ〔名〕稲の歳の夜を斯うも呼ぶ。「いねぬとしのよ」に同じ。

いねむ〔動〕大晦日の夜から元旦にかけては「寝る」という言葉を使うのを忌み、臥して寝るのを避け新しい年のはじめを迎えた。戦前(昭和20年・1945)まではよく守られていた。

いのこ〔名〕(1)いのこぜつく・いのこさー。(2)猪・猪の子の呼び名。

いのこぜつく〔名〕亥の子節句。旧暦10月亥の日に餅を揚ぎ菊花を添えて神前に供え神酒をたてる。親戚にも贈り届ける。一番亥の子・二番亥の子を各家の都合で祝う。三番亥の子は、乞食の節句・乙子^{ヒコ}の節句と呼び祝うものではな

いといわれてきた。又三番節句のある年は凶作年とも言われた。

いのちながを〔名〕親里(配偶者の実家)の生児が初めて来訪した時、苧に包み金を添えて与え長命を寿ぐ。苧は「からむし」といい麻の一種。

いのね〔名〕股関節のつけね。そけい部。「いのねんさす(リンパ腫)」。

いばら〔名〕鯨組の網船の碇綱の名。

いび〔名〕(1)指。(2)埋築地や溜池の堤防に取り付けられた水門。水の落し口として縦樋と敷樋と呼ぶ木製の筒を組み合わせ、縦樋数個所に穴を開けて栓をしておき必要に応じて敷樋を通して水抜操作する仕組。

いびご〔名〕漁夫が釣糸で傷つかぬよう布片等で作った指当ての輪。

いびつ〔名〕(1)飯櫃。めしびつ。「めしつぎ」ともいう。(2)楕円形のことも呼ぶ。

いぶしこぶし〔形〕表面単純滑らかでなく隆起凹凸がありごとごとしているさま。「この諸はいぶしこぶしのある」「いぶしこぶし立った木材」。

いぶしょか〔形〕まめまめしい。

いぼる〔動〕馬がいもなく。犬が吠える。人が怒りどなり立てる。

いまがみねんじ〔名〕昔、犬

い

を土中に半分埋め、前に食べ物を置き7日間見せた後犬の首を切る。この犬の霊を祀り念じたと。これをいう。

いまと一で一〔名〕今。今當代か。〔副〕今すぐに。今の間に合うのか。

いまなき〔名〕「いなまき」に同じ。

いまの一〔副〕今頃。今の今。「いまの一まち、どけえどーしをつたけえ（こんなに遅くなるまでどこでどうしていたのか）」。

いまゆー〔接続〕つまり。今言った通り。

いみ〔名〕旧暦6月29日の夏越し祭をいう。この日は井戸を浚え水神や川の神を祀り、田畑の神祭りをする。又、牛を水浴させ子供は終日遊泳した。この日河童は絶対に出ないとされ、農家は農事を休み団子や料理を作り、米・塩・神酒を夫々の祭神に供えた。一年のうち半歳の終わりの口。盆迎えの特別の日である。「忌みの日」ともいう。

いみあき〔名〕出産後33日目この日母生児を連れ初めて産土神に詣る。「ゆみあき・ひあき」ともいう。これとは別に7日目を「ゆみあき」とする地もある。

いみごもり〔名〕「いみ」の日のお講守り。地区別・谷・組・講中がそれぞれの単位でできたりに従いお講を催した。

いみしんのき〔名〕さんごじゆ。すいかずら科の植物。てつぼうしばの木。古来香岐ではこの木の花の咲く頃を田植えの適期の一目標にしてきた。

いみのひ〔名〕「いみ」に同じ。半歳を過し7月盆月を迎える人々には、年の瀬を迎えるに劣らぬ心構えをしたものである。「いみ」参照。

いむら〔名〕いしげ。ひばまた科の海藻。「いぐら」ともいひ、明治初年の頃までは飯に入れて食べもとした。

いもいり〔動〕空に上った風が海中や水中に落ちて入ること。

いもがい〔名〕芋と粟又は米とを混ぜて炊く粥。

いもかご〔名〕やまいも。むかご。山芋の蔓に生ずる小芋。零余子。やまのいも科。

いもがま〔名〕諸類の冬囲い貯蔵をする土穴。竈に横穴や家の床下を掘りなどして収穫物を防寒貯蔵する穴。

いもがころ〔名〕甘藷を薄く輪切りにして生干し又は蒸しゆでして乾燥し粉にして団子にしたり、又もち米や粟と併せ蒸して搗き合せ餅にする。「かころ」参照。「いももち」。

いもぐら〔名〕甘藷苗を植え込む（挿す）畑の畝。

いもじり〔名〕甘藷を掘りあげ収穫した後の畑地。地味などに問題あり。

いもしん〔名〕どくだみ草。じ



ふやく。
いもだごじる [名] かんころ団子を入れ炊きあげた汁物食。
いもどこ [名] 甘藷苗を仕立てるため特設する苗床。種藷を伏込みここで育苗する。
いもばな [名] グリヤの花。てんじくばたん。さく科の植物。
いもほり [名] (1) さきのはべら。「やなぎば」に同じ。魚の名。(2) 願の長くしゃくった人。どちらも山芋掘り具の形。(長いへら状) に似たからか。
いももち [名] 芋餅・藷餅。「いもがんころ」参照、手法同じ。
いや [接頭] 弥々。「いや酒呑む・いや食いする・いや飯食う」。
いやーばい [感] まあーいやだわ。まーいやなこと。「いやばい」も略同。
いやがかり [動] 牛の後産が停滞すること。
いやこつ [名] 同じことを繰り返しうじうじうるさく言うこと。繰り返言。「いやこつばかり言うちさしださす人」。
いやざけ [名] (1) いやが上にも呑む酒。(2) 欲しくないのに呑まされる酒。無理矢理強いられる酒。
いやしか [形] 食べ物に意地汚いこと。「いやしかこつするな・なんちゅういやしかこつするもんなあーえ・いやしかまねすんもんじゃなか」。
いやしだろ [形] いやしか人間。いやしん坊。言動に意地汚さを感じる人。

いやしぼう [名] いやしんぼう。「いやしだろ」に同じ。
いやじり [名] 連作してその作物に不適となった畑地。麦作2年、茄子・西瓜7年間。
いやすび [名] 乳児が眠り乍ら笑顔すること。
いやぞーいやぞー [名] 盆の綱引きでの指図や激励のかけ声。油断なくしっかり守り引け。
いやっさ [副] いやらしさ。いやらし。
いやまし [名・動] 増長。増長する。
いゆーなび [名] 夕なべ。よなべ。「ゆーなび」に同じ。夜に入り尚続ける仕事。夕方・夜の時間を利用してする手間仕事。
いら [名] くらげの一種。触れれば刺し毒あり。あんどんくらげの仲間と。
いり [接頭] 強意の働き。「いり浸る」。
いりあがる [動] 魚が海中・水中から陸上にはねあがるさま。
いりかす [名] 鯨肉・鰯などの脂を煎じた滓。食用・肥料・飼料等に用いる。
いりこみざく [名] 入込み作。他地区、他村に所有する田畑を耕作すること。
いりびたる [動] 入り浸る。入り込んで居続けるさま。
いりふねぼっけ [名] 他国への航海から船が帰港して来た時、家人が「ぼっけを作って



祝う。船の方でも作って留守居した家族や子供達に配ったりする。「ほっけ」参照。

いりやき〔名〕 鋤焼。すきやき料理。

いりゅーともん〔名〕 (1)入籍しない内縁の後夫。(2)他村・他国よりの寄留者。「いりゅーと・いりゅーのもん」ともいう。

いりわり〔名〕 真相。錯雑した内容。

いる〔動〕 (1)浴する。「風呂にいる」。(2)潜る。「海にいる・水にいる・いりい行く」。(助)「いろ・にろ」に同じ。「行く・いる・行かん・いる・わからん(行くのか・行かんのか・分らん)」。

いるつか〔形動〕 構わぬ。放っておけ。構うな放つとけ程度の意。「いるっち・いるっちゅー」なども同じ。

いるっち〔形動〕 「いるつか」に同じ。

いるっちゅーな〔形動〕 「いるつか」に同じ。「いるっちゅーなーな」「いるっちゅーない」などとも用いる。

いるわん〔感〕 いや。いやだ。いるわない(いろう・かかわり合う・世話やく)。否定の語。「いるわんえー・いるわんくさ・いるわんな・いるわんばい・いるわんばな」表現色々。

いれくる〔形動〕 まぜる。まぜくる。こねる。ごまかす。かく乱する。

いれこ〔名〕 鰻羽の元に取り付けてある「ろぐいー」のはまる穴を穿った部分の名称。鰻は把り手部分を「うで」、潮を切る部分を「ろば」という。

いれぶれめえー〔名〕 料理又は料理材を先方に持ち込んで客の家でもてなしをすること。

いろ〔助〕 であるやら。「にろ」に同じ。「済んじょいろ、どういろわからん」「済んだじゃいろ……」。

いろくず〔形動〕 各種さまざま。多種多様。あれこれ沢山。

いろしょーたえーち〔形〕 血相変えて。甚しく怒るさま。「いろしょーたえーちはるかきおる(はるか・立腹)」。

いろつわさ〔名〕 色沢。彩沢。

いろはかき〔名〕 みずすまし。まいまい虫。みずすまし科水棲動物。

いろめ〔名〕 色彩。光沢。生彩。顔色。「いろめん良か(品色生彩が良い)」。

いろわん〔感〕 「いるわん」に同じ。

いわたこ〔名〕 章魚の一種。巨大たこ。極く小型の章魚は「みなだこ」。

いわつち〔名〕 風化のすすんだ灰白色、ぼろぼろの岩。

いわむし〔名〕 「いっさきむし」に同じ。

いを〔名〕 魚。いお。うお。魚一般。

いをづら〔名〕 ひるがお。鼓子花。旋花。ひるがお科。「いお



づら」も同じ。
いをどきがしら〔名〕魚 期頭。1 触に 1 人乃至 2 人宛置かれ漁期の人夫集め等世話役をした。鯨組用語。
いをばしら〔名〕魚群甚だ大きく海面にせり出して泳ぐ状態。「いをばしらが立つ」といい魚数の多いこと。
いをばち〔名〕魚鉢。魚類の料理又は塩蔵等に用いる楕円形の木製桶。
いんいたぶ〔名〕いたび類であるが実は食えない。くわ科。「いんいたび」も同じ。いんはいぬ。いぬいたぶ。
いんがらみ〔名〕のぶどう。「がらみ」に似た蔓性の植物。実は食えない。「いぬがらみ」で、「がらみ」参照。
いんきょ〔名〕一家のうちの老人だけの住い屋。「いんきょつぼね」又は単に「つぼね」ともいう。本家隠居。
いんげ〔感〕いいえ。いいえちがいます。いいえどういたしましてなど色々な場合抑揚をつけ用いる。「いいいんげ」と強く否定したり、「いいいんげですばな」と軟らかに応じたり。
いんざんしょう〔名〕いぬざんしょう。山椒の類であるが悪臭強く香料として用いられない。みかん科。
いんずくし〔名〕ほそばいぬびわ。「いぬびわ」に似ているが実食えず。
いんだら〔名〕からすざんしよ

う。みかん科。「からすざんしよう」とも。
いんとりもち〔名〕くろがねもち。もちのき科。
いんにゃ〔感〕「いんげ」に同じ。比較的親しい関係で用い、他人には用いない。「いんにゃー・いいんにゃー」ともいう。
いんね〔感〕「いんげ・いんにゃ」に同じ。「いんねえー」ともいう。
いんのくそ〔名〕ものもらい。眼の縁にでる小腫物。人に知られずに草履の尻で刺す真似をすると治るという。
いんのこいんのこ〔動〕「いえんのこいえんのこ」に同じ。参照。
いんま〔副〕今に。そのうちに。近い将来に。いずれ。いずれそのうちに。「いんまみちよけ、どやさるるけん」。
いんまき〔名〕いぬまき。槇まき科。

う

う〔助〕「む」の変化。「見う・着う・為うだい」などと用いる。〔接頭〕「うだく(抱く)・うすてる(捨てる)・うむす(蒸す)」など。
うーか〔形〕多か。多い。「ううか」も同じ。
うーかもねえー〔形〕たくさんに。たくさん有る。「うーか

もねえある」。

うーかもん〔形〕 沢山。多い。

うーけ〔形〕 多い気味。多い量。使いおおげが大。持ち分大。嵩がある。「おーけ・おおけ」に同じ。「うーけがある・うーけんなか」。

うーばんげえーな〔形〕 大それた。身の程も弁まえぬ仕儀仕様。おおげさすぎる。おおげさでとりとめない。「おおばんげえーな」も同じ。

うーめ〔名〕 人間の靈魂の灯す青い灯。深夜に空中を飛翔するという。

うーん〔名〕 大便。「うーんする」。「ぼんぼん」も同じ。小児語に用う。

うえー〔名〕 笈。同形の股木二本を背幅に組み合わせ帯紐を付けて荷物を背負い運ぶ具。「おい」「えー」とも呼ぶ。

うえーうえー〔名〕 鬼ごっこ。遊び名。追い追い遊び。「えーえー」に同じ。

うえーかく〔動〕 追いかける。「えーかく」も同じ。

うえーかくる〔動〕 追いかける。

うえーこ〔名〕 わきが。「わきご」に同じ。

うえーじ〔名〕 鮑。「えーじ」も同じ。

うえーた〔名〕 強い真北の風。又は少し西がかった北北西の風ともいう。この風向きは地区により甚だ危険を伴う風として恐れられている。「えー

た」「ねぎた」ともいう。

うえーち〔動〕 置いて。「うえち・ええち」も同じ。「うえーちうえーちよけ（置いておけ）」。

うえーちよく〔動〕 置いておく。置いちよく。

うえーなし〔形動〕 この上なし。言いたい・したい放題の振舞。「うえなしなこつ言うな」「うえーなししいあばる」。増長し思い上った振舞。

うえじき〔名〕 戸・障子取り付けの時上側につける敷居。鴨居。

うえたからう〔形〕 植え田を負う。即ち、田植えが予定通りに進捗せず翌日廻しに延ばさざるを得ない状態に陥ること。「けえーた田からう（掻いた田の負担を負ったまま）」。

うえち〔動〕 おいて。「うえーち」に同じ。「うえーちうえーちおくれ（置いておいて下さい）」。

うかしか〔形〕 おかしい。こっけい。

うきうと〔名〕 海藻えごのり。ところてん状にして食用にする。おきうと。

うきくさ〔名〕 ほていあおい。みずあおい科の植物。

うきずってー〔名〕 漁具すってーの一種。錘の先に「めよま」を付け、その端に「すって」を付けて浮かし使用する木製の漁具。「すって」「めよま」参照。



うきなわ〔名〕浮き縄。主として鯖漁に使用する漁法の一つ。

うぐいす〔名〕男子陰部の一部の名。上下にあるという。吉州の古い俚謡に「……うぐいす呑みこませえて……」と唄い文句にある。

うぐいすのほける〔動〕鶯が鳴き囀る。

うぐみどり〔名〕雌鶏が抱卵して巣籠ると、全身の羽毛や羽根を抜け、とさかなど赤味を増して異様になる。転じて人の場合にも「うぐみどりのごたる」と例える。

うぐむ〔動〕(1)雌鶏が抱卵巣籠りする。(2)人がふくれかえって異形に見える。

うけ〔名〕碁を下した場所や網をさし敷いた場所等の目印に付けるうき。

うけあう〔動〕間違いなく物事を引き受ける。「うけおう・うけやう」も同じ。

うけかじ〔名〕地区共同で特別に契約を結び雇傭した鍛冶屋。請鍛冶。出張鍛冶ともいい、農具はじめ鍋釜家事用具等を地区内の出張先に持ち寄って数年に一度修理補充保全に当ってもらった。滞在経費や修理代は穀物や農作物で支弁し、それぞれに得意契約鍛冶をもっていた。

うけかやす〔動〕土地・家屋・家財等他人の所有になった物件を再び自己の物に買い戻すこと。

うけづる〔名〕民間で自家用焼酎を製造できた時代の容器。

胴太く口細めで胴上部に小さい突起口を持つ甕。

うけばり〔名〕太鼓。皮を張った鼓の周りにつけた穴を紐で張り合い締め加減で音を調節する太鼓。せじょう祭り・家建て・どうふれめーなど大小の祝事に打ち鳴らされる家庭用太鼓。多くの家に自家用備えつけがある。「たすきばり」ともいう。

うけやま〔名〕旧藩時代部落(地区)で共有管理してきた山林。立木は許可を得て伐り使用し、下木落葉類は燃料用として共同採取も許された。

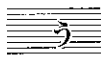
うざうざ〔副〕多数集まりうごめくさま。「うじゃうじゃ・うだうだ」ともいう。

うしあずけ〔名〕牛を所有しない農家が、余分に持った者から仔牛や成牛を預って飼育する。離乳後の仔牛を預る場合は飼育料として牛をわけて貰い、成牛の預りには使用料を払う。それらの取り引き条件は人により、所により一件一件異なる。

うしか〔名〕あめふらし。うみうし。軟体動物・貝のなかも。

うしこう〔名〕牛講。旧暦10月丑の日に講中寄り集まって牛神を祭る。飼牛の平安繁殖を祈願する。白米3合宛持ち寄る。

うしこさく〔名〕牛小作。農家



と農家・農家と漁家・農家と
博労の間に相互にそれぞれの
約束・条件のもとに牛の貸し
借り飼育関係を結んだ。これ
を牛小作という。

うしころし〔名〕かまつか。ば
ら科の植物。牛の鼻さしに用
いた木。

うしさき〔名〕飼牛の第一子。
但し牝牛に限る。うしさきは
必ず自宅で飼育し売却するの
を忌むとのこと。

うしだし〔名〕牛を野原に連れ
出して繋留し草飼すること。
「のぼり」ともいう。

うしねうちきる〔動〕見 限
る。断乎関係を断つ。

うしねんば〔名〕おにやんま。
黒に青黄の斑紋のある大型蜻
蛉。やんま。とんぼ科。

うしのくいーくち〔名〕牛の
喰い代。飼い牛が他人所有の
作物を喰い荒した場合、それ
を弁償する代物。一般に袋の
物を出す場合、一握りを手で
掴み出して中味を確かめ合っ
てから全体をあけるが、牛の
弁償物に限りそのまま一度に
あける慣わしである。

うしのくそたか〔名〕鷹の一
種。「くそたか」に同じ。

うしのこいうえー〔名〕牛の
仔祝い。2月初丑祭りに「せ
じょうまつり」を行う。これ
を牛の仔祭りと呼び、牝牛を
産ませた家からは神酒を出し
て披露した。「うしまつり」に
同じ。

うしのこのん〔名〕牛の仔飲
み。生まれて来た牛の仔は綱
を付けず「牛のまや」中心に
或る期間飼育されるが、時
には牛舎を抜け出して周辺の他
家の田畑に入り喰ったり荒し
たりの迷惑をかけたり、迷い
仔にもなり手数をかけたりす
ることがあるので、近隣関係
の家人を飼い主が酒肴をもて
なし理解協力を求め一席を設
ける。

うしのした〔名〕牛の舌のよう
に大きく広く長い葉をもつ植
物の名。まゆはけおもと。観
葉植物。

うしのしゅーぎ〔名〕牛の祝
儀。旧暦12月13日、牛の貸借
を更新する。継続して借る者
預かる者も一応牛を連れ、
酒・赤飯等を持参して貸し主
を訪う。貸主側も酒肴を調え
待遇した。「うしのまつり」と
もいう。

うしのはおろし〔名〕かくれ
みの。うこぎ科。

うしのはみ〔名〕牛の食べ物。
牛の飼料とする藁や野菜類
を短く切り混ぜ穀類の粉、野
菜くず等を与える。「はみ」
ともいう。「はみ切り・はみ
桶」。

うしのひたい〔名〕みぞそば。
「たそば」ともいう。葉の形が
牛の顔を正面から見た顔に似
ている所から付けられたと。

うしのまつり〔名〕「うしのし
ゅーぎ」に同じ。



うしのまや〔名〕牛舎。三方を一尺幅の「きりどへー」の厚壁で囲み牛舎を作った。「うしや」も同じ。「きりどへー（切り土堀）」参照。

うしのおやこ〔名〕牛の預け主と借り主（預り主）の間柄は親密で親子の如く「うしのまつり」や氏神の祭礼にも往来し交際した。これをいう。

うしば〔名〕門歯を斯う呼ぶ。

うしばく〔名〕牛馬売買商人。「ばく・ばくりゅー・うしばくりゅー・ばくさん」などと呼ばれていた。

うしばと〔名〕からすばと。鳥の名。

うしべえ〔名〕虻。あぶ。うし蠅（大型の蠅）。

うしばたる〔名〕げんじぼたる。大型の蜚。総じて大型のものに「うし」の語を付して呼んだ。※古語うし・大人。

うしまつり〔名〕「うしのこいうえー」に同じ。

うしみつば〔名〕うまのみつば。おにみつば。「みつばのうばきじょう」ともいう。せり科の植物。

うしみな〔名〕海岸の石の上を這う黒色の蟻。

うしを〔名〕潮。海水。塩水。うしお。

うしをどーふ〔名〕海水を「にがり」の代りに用いて寄せた豆腐。より固くしまって出来賞味珍重された。

うす〔接頭〕「うすきびのわる

か・うすげーな・うすすらごつ」など特に意義はそえないがやや強意の働き。「うすのろ」は同例だろうか。（動）（1）牛に荷を負わせることを「うす」又は「うせる」という。

（2）行く。来る。

うすきね〔名〕（1）魚・鳥の類の臓腑の一つの名。食用とする。（2）槇の木の実。（1）（2）共に形が臼と杵の組み合わせに見立てての名と思われる。

うすきび〔名〕不気味。気味悪。うすきみ。「うすきびのわるか」と用う。

うすげー〔形動〕横着。生意気。「うすげーな奴・うすげーもん」。

うすげーな〔形〕横着な。生意気な。うすきみわるい。「なんちゅーうすげーなもん（者）ちゅーない（何という横着者なんでしょうか）。荒々しく粗野なさま。「うすげーなか」も同じ。

うすげーもん〔名〕横着者。

うすだ〔名〕薄田。土質の肥えた水田には稲を間隔広く薄植えにして米の収量を増すようにした農民の知恵だとか。「あつだ（厚田）」参照。

うすつ〔動〕うち捨てる。捨てる。「山ん中えうすつるばい（ぞ）」。

うすつる〔動〕捨てる。放置する。

うすてちよく〔動〕放置しておく。

うすてる〔動〕「うすつる」に同じ。

うすば〔名〕(1)鉋丁。刃の薄い野菜類の料理用鉋丁。(2)「うすばかげろう」の呼び名。「うすばんを(お)る」。ありぢごく(コッテコッテ)の成虫。

うずふるー〔形〕おそろしが
る。こわがる。

うすみくらすみ〔名〕夜明け
時。夜明け頃。

うずむ〔動〕「うぐむ」に同じ。

うすもん〔名〕焼酎。薄物の意
か。清酒に対して色・味淡泊
なる故と。客に対し焼酎をす
すめる折「うすもんですが
……」と用いるのが常。

うすゆき〔名〕粳米に糯米を少
量混ぜ荒目に挽き碎いて蒸し、
篩にかけたものを碗型に固め
て更に蒸しあげる。中に餡な
ど入れて饅頭様にもする。

うすら〔副〕薄々。少々。「うす
ら酔い」「うすら知っちゃをつ
た」。「すーら」ともいい、「す
ーら酔い(すーらええ)」とも
用いる。

うすらごつ〔形動〕うそ。全く
のうそ。でたらめ。「うっすら
ごつ」「ぬすとごつ」などとも
同じに用いる。

うする〔動〕(1)来る。行く。「従
いちゃうするな(ついて来る
な・行くな)」。(2)牛馬に荷を負
わせる。「うす・うせる」に同
じ。

うせい〔名〕うせいねぶつ。念
仏の一種。あみだねぶつの他

いろいろある。

うせたご〔名〕牛馬に背負わせ
下湯や下肥を運搬するに用い
る。木製の桶。

うせの一なる〔動〕失せ無く
なる。「うす・うせる」に同
じ。来る・行くに用いる。「早
ようせの一なれ(早くあっち
へ行っちゃえ)」。

うぜらしか〔形〕うるさい。ぐ
ちゃぐちゃしてきたならしい。
がちゃがちゃ騒がしい。「うぜ
らしかあっちいたち遊べ(子
ども達へ)」。

うせる〔動〕(1)無くなる。(2)行
く。来る。(3)背負わせる。

うせろ〔動〕(1)行け。「あっちう
せろ」。(2)来い。「こっちう
せろ」。(3)背負わせろ。「せーでち
うせろ(急いで背負わせろ)・
(急いで行け)」。

うそ〔名〕口笛。「うそ吹く」「夜
さりうそ吹くもんじゃなか
(夜に口笛を吹くものではない
い)」。

うそうそ〔副〕(1)うろうろとあ
たりを嗅ぎ廻るさま。(2)鼻を
うごめかす。

うそぐち〔名〕口の周辺の色
異なった牛をいう。牛の口の
周辺の白い牛をいうとも。「赤
背うそ口」といって賞美され
る。うそ口の牛は物食いが良
く飼育し易いといわれる。賞
美は賞味ではないのか。

うそぶえ〔名〕口笛。「うそ」
に同じ。

うそふく〔動〕(1)口笛を吹く。



(2)知らん顔をして問題にしない態度をとる。

うたう〔動〕鶏が鳴く。雄鶏が鳴くことを「とりがうたう・うたいをる」という。

うだうだ〔副〕「うざうざ」に同じ。〔動〕抱く。うだく。いだく。「うだうだしようか(だっしようか)」小児語。

うだき〔動〕抱きかかえる。抱く。〔助数〕かかえ。「ひとうだき・ふたうだき」。立木の幹の太さ、柴・草・稲・麦等の束の量を示す単位。

うだく〔動〕抱く。だきかかえる。「いだく」ともいう。

うたねぶつ〔名〕念仏の一種。

うたびるる〔動〕流浪する。なぐれる。落ちぶれる。

うち〔代〕わたし。私。

うちあめ〔名〕家屋・屋内に打ちつける雨。降り込む雨。

うちかえ〔動〕藍汁の酸化した「おとし」が利かぬ場合、他の桶に入れ替えて上質の藍を混和すること。紺屋用語。「おとし」(2)参照。

うちがま〔形〕両足先を極端に内側に向けて踏み歩くさま。「うちがも」ともいう。逆を「そとがま」。

うちごもり〔名〕打撲傷の内部の疾患。

うちころす〔動〕殺す。「うち」は接頭やや強意。相手に対する不満や怒りをこめて発するに「うちころすぞ」などと用いる。

うちづり〔動〕波荒い海で瀬先から大竿で鯛やすずきなどを釣る漁法。

うちなげこむ〔形動〕包みかすさずありのままに。つくろわずありのまま。

うちなんこむ〔形動〕あっさりざっとさらけだして。「うちなげこむ」に同じ。

うちばかり〔名〕上納米は庄屋・筆取・枡取・初頭が各戸を廻って前検査をした。これには米2～3升宛やらねば積込みが後廻しになって却って百姓側の損になったと。この前検査を「うちばかり(内測り・内量り)」という。

うちふだ〔名〕鯨組で定日傭いのことを呼ぶ名。

うちみ〔名〕内見。下見。庄屋が百姓の作物の出来振りを検見して廻らせる。初頭のほかに触に一人置いた。

うちやわん〔副〕対応しない。相手にしない。放ったらかし。関心を示さない。「うてやわん」も同じ。

うちろ〔名〕鯨組の經船で積んでいる網より前部の網を投入する側の第一の艀をいう。

うつ〔接頭〕打つの意も含んで用いられる接頭語。うつかぶる・うつきり・うつきる・うつくやす・うつくゆる・うつこむ・うつさくる・うつしばく・うつしまく・うつすびく・うつすらかす・うつすらごつ・うつたたく・うつたぐ

わる・うっとばす・うっぱーもん・うっぱたぐる・うっぱっぱー・うっぱっぱー・うっぱるばう・うっぱたつぷ・うっぱがす等の用例あり。

うつ(形)(1)美しい。「うつねね・うつべべ(美しい着物・衣服)」。(2)満つ。余す。「あくせーうつ」「ぎわうつ」「やまうつ」。(動)頭痛がする。「^{めづ}頭んうつ」。

うつか(形)美しい。「うつしか」ともいう。小児語。

うつかぶる(動)すっぱりかぶる。すっかりかぶる。

うつきり(副)水など容器一杯にある。「桶え水ばうつきり入れろ」。「うつきる」も同じ。「うつきるだけ入れちよけ」。

うつくえた(動)こわれた。うちこわされた。「うつくえちよるばな」。

うつくやす(動)打ちこわす。「つつくやす」参照。

うつくゆる(動)こわれる。

うつこく(副)散々の目に遭う。「こく」はこずく。打った上にこずかれる。がたがたになる。かてて加わる。連続してひどい目にあう。

うつこむ(動)残らずごっそり投入する。「いっこむ」に同じ。

うっさくる(形)活発に動くさま。「うっさくった女」。(動)物が裂ける。割れる。千切れる。「ひっさくる」に同じ。

うつしか(形)美しい。「うつ

か」。

うっしばく(動)たたく。叩く。打つ。「うっしまく・うっすらかす」も同じ。

うっしまく(動)打つ。たたく。「しばく・しまく」に同じ。

うっしわひっしわ(形動)かてて加えて。連語。「うつこく」に似る。

うっすびく(動)思わぬ金銭の支出消費にあいまい具合に響くこと。経済的影響を受けること大なる場合に用いることが多い。「すびく」も同じ。痛みが身に沁みるさま。

うっすらかす(動)打つ。たたく。「うっすらかすぞ」と威嚇に用いる。

うっすらごつ(名)全くのそらごと。うそ。全くのでたらめごと。根も葉もないうそ。「うすらごと」に同じ。

うっそれ(名)盆の12日に仏様に念仏をあげる(唱える)こと。

うったたく(動)たたく。打ちたたく。思いっきり叩く。

うったんぐわる(動)びっくり仰天する。全く予期せぬ事態に遭いびっくりするさま。「うったんぐわるたい」。

うつつ(名)美しい着物。(形)美しい。「うつか・うつしか・ちんち・つつつ」などと同じ小児語。

うつつかつ(形動)どうかこうにか。どうなりこうな



り。やっとなんとで。負けたり勝ったりしながら。やっとのこと。やっとの思いで。
うつつげ **えつげ**〔副〕一々抗弁して口論するさま。
うととばす〔動〕全てを失う。手放してしまう。
うつねね〔名〕美しい着物。晴れ着。
うっぱーもん〔名〕腕白者。横着者。「うっぱっぱー」に同じ。
うっぱっぱー〔名〕腕白者。「すっぱっぱー」ともいう。
うっはるばう〔動〕腹這う。「うっぱるばう」も同じ。
うつぶたつぶ〔副〕たらふく。充分に。一杯に。
うっぱがす〔動〕(1)穴が開く。怪我する。「頭うっぱがすぞ」。(2)女性を犯す。処女を破る。
うつり〔名〕(1)重箱や栄え^{じゅう}車に入れて品物を贈られた折には返礼として何がしかの品を入れて返却するのを例とする。空箱のまま返すのは非礼として忌む。適当な物が無い時はマッチ棒を数本入れて「としだま」とする。「重箱のうつり」ともいう。(2)物品を入れて贈って来た容器そのものも「うつり」と呼ばれる。
うつりごーし〔名〕代わるがわる。交互に。「うつるごーし・こてごーて(交替交替)」も同じ。
うつる〔動〕相手になれる。対

抗できる。勝てる。叶う。「をしがあん男へうつるもんか(君があの子に叶うものか)」。
うつるもんか、**うてんうてん**、**うてんけん止めちよけ**。
うつれき〔名・形動〕有頂天。有頂天になる。興が乗って夢中になる。
うで〔名〕舟船の櫓の上半分の名。
うでぐすね〔名〕腕やひじ。「うでぐすねはる(てぐすねひく)」。
うてやう〔動〕相手になる。かわり合う。関係もつ。「うちやう」に同じ。
うてる〔動〕「うつる」に同じ。
うてん〔動〕叶わない。勝てない。「うつる」の否定。「あの男にやうてん」。
うとがら〔名〕抜けがら。麻の繊維をむいた後の幹部分名。
うつろ。空洞。からっぽ。
うな〔代〕お前。相手をののしり言うのに用いる。「うな・うぬ・うん」も同じ。
うなー〔代〕「うな」に同じ。
うない〔感〕はい。はいそうです。「うんない・うんなーい」ともいう。
うなぎしば〔名〕「ぼんでん」ともいい。竹や柴を束ねて海中に沈めておき、そこに集まった魚を掬い獲る漁法。
うなくぐむ〔動〕こごみ背姿になる。
うにのこがーさ〔名〕雲丹入り卵焼き。

うにめし〔名〕3月の節句には磯に行き、うに・がぜ・さぎえ・とこぶし・あわびなどの貝類を採り、飯に炊き込み「うにめし」などの料理を作りご馳走し合った。評判の郷土料理。

うぬ〔代〕お前。きさま。「うん」も同じ。

うね〔名〕(1)鯨の腹部の畝形の皮の部分の名。(2)蒔きうね。播き畝は「こじり」より小に立てる。瘠地は細めに、土地は太めにする。「ぐりぐりすき」「こじり」の項参照。

うねたて〔動〕種子を播き苗を植え付ける畝を作ること。

うの〔名〕牝牛。「うの一」も同じ。「うの仔」に対し雄牛の仔を「こつて・こつて一仔」という。

うの一ご〔名〕牝牛の仔。うのうご。

うのめかやし〔名〕気の利きすぎた利己主義者。

うば〔名〕(1)からすむぎ。ちゃひきがや。いね科の草本名。(2)老妻。老婆。

うばき〔名〕伯叔母。おば。をば。おばさん(女性一般でない)。

うばきじょう〔名〕伯叔母さん。おば。おばきさん。おばきじょう。

うばぐる〔名〕「くろいを」の老最大級魚を特にこう呼ぶ。「せきもち・かたおし・こしば」の項参照。

うばげえー〔名〕あこや貝。養殖真珠の母貝。二枚貝科。

うばこーせん〔名〕からすむぎの種実を炒り香煎としたもの。往時の救荒食物。

うばころし〔名〕珊瑚樹の枝葉を枯らして燃料としたもの。甚だ燃え難く燃る為燃やしていた老婆が死んだとの伝説があると。「てっぼうしば」といい、「うばころししば」ともいう。子供の遊びの竹鉄砲の弾に実を用いた。

うび〔動〕驚き。爺さんいわく、「婆さんなあお前やあ、さあ火事ちゅう時何かる先い出すなあな」婆いいわく、「わたしあ うび かる先い出しまつする(驚き方が先に出る)」。『うび』は人間の持つ「気」「魂」の如きものと。「うぶ」ともいう。

うぶくそ〔名〕生児が最初に排泄する糞。「うぶべん・かにばば・くろべん」などとも呼ぶ。

うぶちのめし〔名〕子供が産まれると一碗だけ飯を押えつげに山盛りに盛っておく。これは生児の首がぐらつかず、しゃんとなるようにとの願い。この碗の飯をうぶちのめしという。またこの飯の上部を指でちよつと押しておくとし児に「笑くぼ」ができることから「うえくぼめし(えくぼめし)」と呼ぶ地区もある山。

うぶめ〔名〕産死者を「うぶめ」



という。
うぶるる〔動〕溺れる。「ぐりぐりいう・ぐるぐるいう」に同じ。
うぶれる〔動〕おぼれる。うぶるる。
うべくべ〔名〕差別。區別。「善^{ちよ}か者^{もの}む悪^{わる}か者^{もの}む、ちつとむ、うべくべつかぬ」。
うまい〔代〕お前。「うまえ」も同じ。
うまき〔名〕牝牛の発情時陰部よりでる粘液。「うまき垂るる」という。
うまごやし〔名〕はるののげし。のげし。けしあざみ。苦菜。あきののげし。きく科の草本。
うまづれ〔名〕早婚のことをいう。「はやもん・わさもん」ともいい、晩婚のことを「うしづれ」という。
うまのり〔名〕大根を縦に股に切り干したものの。「うまのりだいこん」ともいい保存食。
うみいろ〔名〕作物の熟した色合い。その良否により作柄を品評する。
うみぼーず〔名〕海に出没する妖怪の一種という。
うむ〔動〕(1)熟する。熟れる。「麦がうむ・果実がうむ・柿のうんじよる」。(2)化膿する。「傷口がうむ」。
うむす〔動〕(1)蒸す。「糯米をうむす」。(2)蒸し暑い。高温多湿。うっとうしい。「今日はひでーうむすねえー」。

うむるる〔動〕蒸れる。「赤飯がうむるる」「青草がうむるる(やける)」火を用いて蒸れる。天候気温で蒸れる共、うむす・うむるる・うむれるを用いる。
うむれる〔動〕「うむるる」に同じ。
うめき〔動〕産気づく。分娩の兆。転じて物事の成立のきざしあるに用いる。
うめずりうた〔名〕鼻歌。
うら〔名〕海添いの集落・浦。元龜2年(1571)老岐は平戸松浦藩の治下に入り、農村部を在方24村に漁村部を浦方8浦に分治した。以来、郷ノ浦・渡良浦・湯ノ本浦・勝本浦・瀬戸浦・芦辺浦・八幡浦・印通寺浦の8浦が確定された。
うらおちぎん〔名〕浦落金。鯨組から納屋所在地の浦方に納付されていた金銭。
うらかた〔名〕占いする人。ト占(ぼくせん)者。占い。
うらきど〔名〕家から道路に通ずる出入口を「かどぐち」「おもてぐち」といい、他の出入口はすべて「うらきど」と言った。
うらぎめ〔名〕浦中の申し合わせによる出漁開始や禁止等を決めた規約類。
うらきる〔動〕藍を甕に出し、棒で弾き真色が出るかを試ること。「うらみする」ともいう。
うらとぐち〔名〕住家の裏や

奥・横に設けた家の出入口。
「うらんくち・うらんとぐち」
ともいう。

うらみする〔動〕「うらきる」
に同じ。

うらむこう〔名〕裏隣り。裏向
いの家。

うらや〔名〕裏部屋。屋敷裏奥
の部屋で衣服寝具類の置所、
寝室でもある。背戸に接した
裏部屋。「なんど」ともいう。
吉州民謡の「なんどん隅さね
ぞるぞるぞる、ハイケボーボ
イ」とあるのがここ。

うりしか〔形〕解しい。

うるーがが〔名〕後妻。後添
い。二番ゼー（二番添い）。

うるうえー〔名〕土地口畑の湿
度湿気。「うるおい・うるえ
ー・うるをい」。

うるさか〔形〕肩身狭く感ずる
こと。わずらわしい思い。気
うるさいさま。

うるし〔名〕(1)きづた。ふゆづ
た。常春藤。うるしづた。つ
たうるし。うるし科のかぶれ
のひどい植物。(2)うるち米。
糯米・糯粟等に対して粳米・
粳粟をいう。

うれ〔名〕梢。草木の先端部。
枝端。「うれはし」ともいう。

うれいしゅうぎ〔名〕葬
儀。葬式。

うれつきとうば〔名〕年忌供
養の法事は一般に1・3・7・
13・25・33・49年忌に行う。
そのうち33年・49年忌には、
山の生小木を伐りだし上に葉

付きの一枝を残し幹を割り、
僧侶の経文を書いた卒塔婆を
建てる。これをいう。年忌毎
に建てる。49年忌だけに建て
る。椎の木を用いる。さんご
樹を用いるなど家や地域によ
り色々、そして多少の相違が
ある。

うれはし〔名〕枝先。「うれ」
に同じ。

うれましか〔形〕羨ましい。「う
れましがる・うれましかがる」
ともいう。

うろ〔接頭〕少し。わずか。「う
ろみしり」。「おろ」に同じ。

うろみしり〔形〕ごく浅い顔見
知り。おぼろげな状況把握や
記憶。

うわがち〔形〕高く積んだ荷・
物の重心が高く不安定なさま。
重心を崩す状態。

うわじき〔名〕上敷居。鴨居。
上敷物。

うわせん〔名〕釣り銭。お釣
り。

うわだな〔名〕船の腹部「かじ
き」の上につけるはぎ板。船
材の名。

うわづり〔名〕過剰金。つり
銭。「うわは・うわめ・うわめ
ー」ともいう。

うわにはなす〔動〕食物など
器一杯にあるものを少しずつ
食べて減らすこと。うわまえ
をはねるの意味もある。

うわは〔名〕「うわづり・うわめ」
に同じ。「うわば」と用いるこ
とあり。



うわめ〔名〕「うわは・うわづり」に同じ。

うわめー〔名〕(1)「うわめ・うわづり」に同じ。釣り銭。(2)小作料。「おんめえー」ともいう。(3)小作すること。「かきいえー」ともいう。「うわまい」も同じ。

うわめえーざく〔名〕小作する。小作。「おんまいざく・おんめえーざく」ともいう。

うん〔代〕お前。貴様。「うんが何んば知っちよるか」〔感〕はい。「うんない・うーんなー・うーんない・んーなー・んない・んーんない」等。否定形として「うんにゃ・うーんにゃ・んーんにゃ」。

うんきゅう〔名〕かぶとがに。剣尾目節足動物。「うんにゅう・おんきゅう」ともいう。

うんじょる〔動〕果実が熟れている。

うんずえーくされ〔感〕物事に失敗した折、自分自身に対して発する語。「うんずえくされ、到頭出来じゃつた」。

うんそば〔名〕年越そば。

うんだあ〔代〕私あ。私は。

うんだい〔名〕菜種、からし。藝苔。

うんつく〔形〕小児子女がすねてふくれて物言わずのさま。人が頭をかかえ前臥し沈み込むさま。

うんてんばんてん〔副〕格段の相違。「ありとこりとでは、うんてんばんてんのちげえー

(違い) ばい」。雲泥の差がある。

うんどむ〔代〕自分達。俺達。単複自他両用する。「うんどま・うんどむたち(ちゃ)・うんどむ」も同じ。

うんな〔感〕はい。応諾の語。「うんなー・うんなあ・うんなあーい・うんない」などと用いる。

うんない〔形〕言行粗暴。腕白。〔感〕はい。応諾の意。

うんなか〔形〕腕白。「うんない」も同じ。

うんなぼー〔名〕腕白坊。「げえーなぼー」ともいう。

うんにゅう〔名〕かぶとがに。

うんねまる〔副〕理非を正さず成るがままに放置する。「よこねする」ともいう。

うんめ〔名〕人霊(魂)のことを「うんめ」という。雨の夜川から海に向って、火が動いていく。尾を曳いていたとか、山の上から出たとか、分裂したとか合体したとか、又見える人、見えない人いろいろと。見える人は「幽霊の火焚きよるばい」などと言うと。

え

え〔名〕蜘蛛の巣。「蜘蛛んえかけちよる(巣を張っている)」。「へ」も同じ。(助)に。へ。「為えならん」「鳶え入れち

え

よけ」^物え突き当った」
 「郷ノ浦へ^入行^えたちきた」。
 えー〔名〕(1)鱈。魚の名。「えーちゃんちゃん」ともいう。(2)嘔吐。「えーく・えーつる」に同じ。(3)炭。背負い具。「うえ・うえー」に同じ。
 えーかざり〔名〕「いうえーかざり」に同じ。
 えーく〔名〕嘔吐。「えーくいう・えーくする」。
 えーくれ〔形動〕いい加減。「えーくれんこつ言うな」。「いえーくれー・いえーくれーん・えーくれん」も同じ。
 えーこつじやなか〔形動〕とんでもないことだ。良い結果は招けないぞ。
 えーじ〔名〕鮑。あわび。
 えーしこ〔形〕沢山。満足する程多く。「えーしこ魚釣らしたつちゅう」。「よかしこ」ともいう。
 えーずき〔動〕間犁き。中耕する。
 えーそ〔名〕あいそ。あいきょう。「えーそんなか・えーそむこそむなか」。
 えーだ〔名〕間。「留守のえーだ頼む」。「今えーだにやっちゃよけ」。
 えーたさきやなか〔形〕空いた所がない。乱雑一杯に。未解決な事。山積。
 えーたつらわなか〔形〕病氣や不幸が次々続いて堪え難いさま。あいた面(顔)もない程の難続き。

えーち〔接〕おいて。「うえーち」も同じ。「遊び^ど行^どたちえーち泊った」。
 えーつる〔動〕嘔吐する。相手の気をそそりその気にさせる。誘導する。
 えーて〔名〕相手。「競争えーてん出来た」。
 えーてー〔名〕よい相手。格好の相手。
 えーと〔名〕(1)灸。やいと。「えーとすめる(灸をすえる)」。(2)酔っ払い。「えーとー(酔人)」も同じ。
 えーとしば〔名〕はくさんぼく。すいかずら科の植物。
 えーとばな〔名〕おしろいばな。やいとばな。
 えーよ〔名・副〕良い暮らし向き。いい生活(者)。「えーよしをるとちゅう」。「えーよー(栄耀)」も同じ。贅沢。
 えーらしか〔副〕可愛らしい。
 えいえー〔名〕魚。うお。うを。幼児語。
 えいぎょー〔形〕べたべたに言うおべっか。いっぱいにくっ着いたさま。「えーぎょー」も同じ。
 えいゆー〔名〕「えーよ・えーよー」に同じ。
 えいゆーか〔形〕暮らし向きが派手でぜいたくなさま。
 ええち〔接〕「えーち」に同じ。
 えかく〔動〕蜘蛛が巣を張る。「えかくる・えかけちよる」も同じ。
 えかけほーじ〔名〕「いえかけ

ほーじ」に同じ。
えぐる〔形〕えぐい感じになる。あくで喉がいらつく。「のどんえぐる」。
えご〔名〕笑顔。「えごつくる・えごよし(笑顔可愛い)」。
えごよし〔形〕にこやかな顔。子女に用いることが多い。「どーいえごよしさんじゃろうか・どういふ……」。
えじい〔形動〕非常に。大変に。大層。「えじいうーか(多か)・むつかしか・細か」。
えずい〔形動〕「えじい・えずい」に同じ。
えすか〔形動〕とても。大変に。「えじい・えずい・えずい」に同じ。〔形〕恐い・怖い・おそろしい。
えずく〔動〕嘔吐する。もどす。
えそ〔名〕餌。「えて」に同じ。
えつかる〔動〕ありつく(物・食に)。
えっちゅー〔名〕(1)麻裏草履。(2)襪。
えっと〔副〕余り。余計に。余りに。
えつり〔名〕家屋の土壁の芯は竹を主に縦横に組み合わせ編み付けて作る。昔から家屋を建てた時、壁は土壁で塗り上げるのを常とした。壁にする柱間に数か所たて・よこに固定した強めの竹を小穴を開け挿し込みそれに割り竹をしっかり藁縄で編み格子目に仕上げる。選別した土に「すさわ

ら」を入れ混ぜ練り上げた壁土を左官が塗り上げ、数日おいて裏戻し、中塗り、上塗りという工程を置いて仕上げていく。麦稈葺き屋根に土壁造りの住家は冬暖かく夏涼しく、家を評価するに「一壁二庭(畳三俵)」というのがある。えつりを編むことを「えつりかき・えつりをかく」と言い、稲藁を適宜の長さに切り壁土に混入したものを「すさ・すさわら」といい、壁芯の編み物を「えつり」と言う。
えつる〔動〕「えーつる」に同じ。
えで〔名〕「えそ」に同じ。
えとく〔名〕余徳。余得。余分の利益。「えとくが(あった・ある・なか・なかった)」。
えびがね〔名〕(1)「いえびがね」に同じ。(2)伊勢えび。
えびす〔名〕縁者不明の海難者の死体。自己の肌着を着せ懇に葬る時は、その人の運勢も良くなると。粗略に扱わない。
えびすむかいえ〔名〕夷迎え。師走歳の暮の或る日、海に潜り海底で探り当てた石を持ち帰り、迎え神のご神体とした行事。
えめえめ〔副〕幼児がめそめそ泣きむずかるさま。「そえんえめえめ言わんと」。
えもち〔名〕はらべ。鯛・鰯他大きめの魚の鰓から胃袋・腹部を包む肉は内臓と共に大変美味珍味。この部を「えもち」

お

- という。
- えらい〔副〕大変苦しくきつい(物心)。
- えらかす〔動〕(1)だます。うそをいう。「すらごつ・すらごついう」に同じ。(2)子どもをあやす。「えらかし遊ばする」「えらけえち遊ばせろよ、泣かせえたりさすな」。
- えりかけ〔名〕(1)襟巻き。(2)半襟。かけ襟。
- える〔助〕「いる・いろ・にろ」に同じ。「酒える肴える大層持っち来た」「毒える薬えるわからん」。(動)(1)穴を開ける。「のみで木や石をえる」。(2)選ぶ。よる。より分ける。よしあしを選別する。
- えれー〔副〕非常に。ひどく。「ひでー」に同じ。「今日はえれー目え遣うたばい」。
- えんにん〔名〕延引。遅参。遅刻。のびのびになる。「えんにんしましちどうも済みまっせん」。
- えんば〔名〕蜻蛉。とんぼ。「ねんば」に同じ。とんぼの仲間一般。

お

- お〔名〕麻の繊維。麻糸。緒。「を」に同じ。
- おーあじ〔名〕めあじ。鰺。魚の名。
- おーか〔形〕多い。沢山。「うー

- か・おーかもん」ともいう。
- おーがないき〔名〕大勢又は多量の氣勢。「おーがないきでやっちしもた」。
- おーぎ〔名〕鯨の肩の部の肉名。
- おーきに〔感〕(1)有難う。(2)大変に。太いに。「おーきにでした・おーきにありがとうございまっする」。「おおきに」も同じ。
- おーきん〔感〕「おーきに・おおきに」に同じ。
- おーぐち〔名〕はしぶと鳥。
- おーぐみ〔名〕隣組み組織。2つの組を合体して事を成す折に用う。大組。
- おーくらしか〔形〕大仰な。仰山な。おおげさな。「おーくらしかこつ言う」。
- おーけ〔形〕量の多少。有り高。嵩。持ち分の多少。「おーけんある・なか」。「うーけ」ともいう。
- おーけんある〔形〕たっぷり量のあり期待が持てるさま。「うーけんある」も同じ。
- おーこ〔名〕担い棒。両端を削り稲麦等の束物を突き挿して担ぐ竹・木製の棒。「をーこ」ともいう。「ろくしゃく」と呼ぶ担い棒は紐付きの箆や桶を担ぐに用いる。何れも「枋(おうご)」と呼ばれる天秤棒。
- おーこー〔名〕「おーこ」に同じ。
- おーごつ〔名〕大変な出来事。心配事。大事。「おーごつので

けた（時に人の生死に関わる出来事にも用いる）。

おーこぼり〔名〕布団丹前の類製作に用いる緩じ締め用大糸を通す大針。

おーさ〔名〕あおさ。あをのり。あおさ科の海藻。

おーさかみする〔動〕子供の頭を両手で挟み持ってつり上げる。「とうきょうみする」などと言いかからかう。

おーさじる〔名〕あおさを入れた汁物。

おーさびな〔形〕淡白な味。さびなか。

おーしごつ〔名〕大仕事。気にかかる仕事。大事業。

おーじょーや〔名〕大庄屋。5舁以上を管轄する庄屋。一般に大庄屋を舌岐では代官といった。「むらゆり」参照。

おーす〔動〕子供を養育する。育てあげる。

おーせ〔名〕(1)ねこざめ。さぜえかみ・さぜーわりに似るが、口に髭あり頭部稍扁平円形で体表皮幾分滑らか。味は上々と。(2)おとな。大人。壮年者一般をいう。

おーぜまち〔名〕大ぎれの田畑。一枚の面積が広く大勢の人の手を要した。

おーせんどー〔名〕大船頭。船頭寄りで船頭中から1人又は数人選出されて浦中の総頭役を勤めた。「せんどーより」参照。

おーたましか〔形〕仰々しい。

仰山。「いきおーたましか」に同じ。

おーつじ〔名〕大筋。大体。大略。

おーどー〔名〕(1)雄猫。おーどーねこの省略呼び。「おーどーん来ち、あたばっかりする」。(2)横着者。「おーどーもん」の省略。

おーどーねこ〔名〕雄猫。「おどうねこ・おどうねこ・ぬすつとねこ」などと呼ばれ一般的に嫌われ勝ち。

おーどーもん〔名〕横着者で嫌われ者。

おーどこ〔名〕「あしがため」の内側柱と柱間に渡す建築材でこれに根太（ねだ）を取り付ける。

おーとし〔名〕大晦日。

おーどし〔名〕節分の日。

おーども〔名〕網船の鰻の網を投入する側の鰻。甲の船では右、乙の船では左側となる。

おーどれ〔名〕大漁。大獲れ。

おーなく〔動〕仰向きになる。

おーなんぎ〔名〕大難儀。大苦労。「うーなんぎ」ともいう。

おーなんじゅー〔名〕大難洪。

おーにし〔名〕強い西風。

おーはぎ〔名〕鯨肉の骨についた肉をはぎ取ったもの。形が大きくはぎ取れば、おおはぎ、小さければ、こはぎと呼んだ。

おーばち〔名〕大げさな言い振り。大風呂敷広げる。ほら。大ばち言う。

お

おーばんげえーな〔形動〕「うーばんげえーな」に同じ。「おーばんげえーか」とも言う。

おーぼね〔名〕背骨。中心を形造る骨。「おーぼね打かぐところじゃつた、あぶねーところじゃつたつばな」。

おーむらいも〔名〕甘藷の一種。大村芋。「しもいも」に同じ。

おーもん〔動〕おしゃべり。「おーもんばっかり言うな」。

おーもんいい〔名〕大事なこと・言わないがよい事迄べらべらあれこれ口に出してしまいう人。

おあいする〔動〕酒宴の席にて相伴取り持ちをし客をもてなす。

おい〔代〕自分。俺。「おり」に同じ。

おいえぐ〔動〕泳ぐ。「おえぐ・おやぐ・おえぎおる・おやぎをる」も同じ。

おいか〔名〕負債。借金。^{ツカ}賃荷。負債。

おいけ〔名〕おやすみ。帰りの挨拶。「おいけーな・おいけまっせ・おいけおいで（まっせ）」。

おいざかもり〔名〕追酒盛り。「どーぶれめー」等で客の帰途を門口に構えた別の酒席に招き入れ、更に酒を饗応すること。又一般に本座での饗応の後、下座・次室でもてなしを更に受けること。「かねんとりいー」ともいう。

おいさがり〔名〕生えさがり。もみあげ。

おいざと〔名〕おやすみ。さようなら。晩に限り用いる。「そるそるおいざとしゅうや」。

おいず〔動〕来る・居るの敬語。おいでになる。「出おいずる学校はどこでつしょうか・よう飲みいおいずる人今日はもうおいずるめえー」など。「おいずる」も同じ。

おいだしかた〔名〕追出し方。永夫達の賃金はすべて前渡しして、洩れなく期日に出船できるよう手配する係りの人。組から夫々の担当地域に派遣された若衆がこれに当たった。鯨組用語。

おいちのめ〔名〕竜のひげの実。ゆり科の植物。

おいづけえー〔名〕追い使い。使者を出した先方に更に次の使者を発すること、又はその使者をいう。

おいでました〔動〕いらっしやいませ。ようこそお越し下さいました。

おいでまっせ〔動〕いらっしやいませ。こちらにおいで下さい。どうぞこちらへ。

おいぶつさー〔名〕お持仏様。仏様。仏壇。「おいぶつさん・おじぶつさん」も同じ。

おいぶつつあん〔名〕お持仏様。「おいぶつさん・おじぶつつあん」に同じ。

おいやん〔名〕年経た男性。おじやん。

おえぐ〔動〕泳ぐ。「おいえぐ」に同じ。

おえちよる〔動〕生えている。芽がでている。「おえる(生える)」も同じ。

おえぬき〔名〕生え抜き。その土地に生まれ育ったもの。「じねんぼこ(自然木)」に同じ。

おえる〔動〕生える。芽がでる。

おおす〔動〕育てる。「おーす」に同じ。

おおばいちご〔名〕ほおろくいちごともいい、いちごの野生種。細いとげを持つ大葉の草本植物。食用できる。「おーばいちご」も同じ。ばら科。

おおばんげえーな〔形動〕「おーばんげえーな・うーばんげえーな」に同じ。

おかいえー〔動〕食をすすめる給事。「おかいえーしまっしょう・おかいえおしまっせーどろぞ」などとすすめる。「おかえー」も同じ。

おかか〔名〕母。奥さん。

おかくら〔名〕(1)屋敷等の構えの内。(2)乗経。「かくらうち」に同じ、参照のこと。

おかさね〔動〕(1)両手を重ねてするお頂戴。おちょうだい。「おかさねしちもらい」。(2)酒を重ねて注ぐ。「おかさねまっせー・お加えしまっしょう・おかさねおしまっせえー」。

〔名〕重ね餅。正月・祝祭に献ずるおすわり(重ね餅)。

おかしゃん〔名〕おかあさん。

奥さん。

おかじょーきのごつ〔形〕足の速い事の形容。「おかじょーきのごつ速か・おかじょーきよりや速か」。おかじょうきは蒸気機関車方言ではない。

おかま〔名〕(1)荒神様を祀るかまど。(2)かまぼこ。

おかままつり〔名〕正月荒神様の「まぶりかき」神事をいう。「すがもり」とも呼ばれて来た「かまどまつり」である。別説に旧暦11月28日自宅の電神を祭ることをいうともある。

おがみぜんす〔名〕拝み扇子。正月に歳徳祿神体として高砂の絵を掛ける。

おがら〔形〕盛期を過ぎた後の様子を言い例えば「麦作りもおがらになった」などと表わす。

おかりど〔名〕お仮殿。神幸の折しばし滞在の仮殿。中宮。離宮。

おき〔名〕(1)沖。海に限らず田原平野の中央奥の方向を「おき」と呼ぶ。(2)火のおき(燠)。燠火。火のとき。

おきあるかぶ〔名〕沖海で獲れるかさごの類。「おきあらかぶ」ともいう。

おきせ〔名〕ふた付き碗(碗)のふた。木製の小皿。きざら。きせ。

おきなわずってー〔名〕すつての一種。すつての胴上半分を象牙・獣骨を付けて作り、

その上2尺ばかりの所に「いかよび」を付けて使用する漁具。

おきばいえ〔名〕南西の風。「さがりにし・おきばえ」も同じ。

おきばいえさがり〔名〕「おきばいえ」に同じ。「おきばいえさがりにし」の略。

おきばいえさがりにし〔名〕西寄りの南風。

おきばこ〔名〕沖箱。釣漁師の漁具箱。

おきよーさん〔名〕お経様。旧暦正月15日未明より、寺の大般若経を経箱に入れ各戸を持ち歩いて拝礼させ、護符を配り一年間の災難厄除を祈る。その役は各地区毎に戸主交替で毎年行われた。「お経さんの米をらす」と言って、家族揃って厳しゆくに迎え、各家では酒肴を整え賽銭を献ずる。

おく〔名〕「おき」に同じ。沖。

おくそくなし〔副〕遠慮なし。

おくだり〔名〕神社祭礼に神輿が神輿を出て神幸する儀式。馬場馬を走らせ神官騎乗し流鏑馬や、神楽を奉納。その間神輿は「はまどん(中宮)」に鎮座。現在は諸々の事情で執行されない神社が多い。

おくび〔名〕おくみ。着物の柱(えり)。

おくびむださぬ〔形動〕素振りさえしない。決して言わない。「おくびいむださん」も同じ。「くさかいきもつかん」参照。

おくま〔名〕神前に供える供物。お供米か。

おくもそくもなか〔形動〕遠慮会釈のない態度姿勢。臆も測もない。恥ためらいの気色が感じられないさま。

おくり〔名〕葬儀一般をいう。「おくり」友引・不成就日・三隣亡・仏滅・丑の口を避け午後に行ってきた。日取りは通夜の席で講中相寄り施主方と話し合い決めた。それで平素は夜間暦を見るのを忌む。僧侶数は基本的には偶数人とした。

おくりみず〔名〕盆十五日夜半精霊送りに米野菜果物菓子外盆棚に供えていた品々や水、線香灯明を焚き送り祀ること。又はその時用いる水。

おくる〔動〕起床する。起きる。「明日あ何時なんじおくと(おくること)で」。

おくわえ〔動〕お加え。「おくわえまっせー」と言い乍ら酒をすすめる。「おかさね」の項(2)に同じ。

おくわしのごたる〔形〕大変美しことのとえに用いる。お菓子のように美しいと。

おくわしん〔名〕お菓子。小児用語に。

おげ〔名〕(1)偽物。まやかし物。(2)群偽物。

おけしを〔名〕旧暦13日から潮が立ち直って干潮大となる。「しをがおくる(潮が起くる)」ともいう。

おげもん〔名〕まやかしもの。
おげ。
おけらこぼし〔名〕起き上り
小法師。
おご〔名〕(1)おごのり。紅藻類
の海藻。(2)おごちゃん。娘さ
ん。女の愛称。
おごーはん〔名〕神棚の灯明。
「おこはな」ともいう。
おごくう〔名〕神前に供えるご
飯。
おこくら〔名〕ほこら。祠。
おこげ〔名〕麻糸を績み(つむ
ぎ)入れるまげもの(桶状の
箱)。杉や松を薄い板状にして
曲げ容器に作るもの。「たが」
を使わず桜や樺の木で綴
じ合わせた。おこげは麻小荷。
「おごけ・をごけ」も同じ。
おこしずみ〔名〕木炭。炭焼き
で出来た炭。かたずみ。薪を
燃して作る炭は「消し炭」と
呼び区別して用いる。
おごちゃん〔名〕お嬢さん。「お
ごしゃま・ごご」ともいう。
「おご」に同じ。
おこじんさー〔名〕荒神様。
おこじんさん。農家商家の別
なく各家土間の壁際に大きな
竈を作り、その上部に唐破風
様式の竈神(荒神様)棚を設
け家紋入り扉を付けたりして
祀った。竈の上には灯明や祭
具を置き、餅搗き・味噌豆焚
き等特別の時に用い、平常時
は家の飾り竈であった。
おこしんさーぐさ〔名〕げん
のしょうこ。ふうろそう科の

草本。葉草として珍重される。
おこす(動)(1)刻す。「墓石い銘
おこす」。(2)益綱曳きに守勢か
ら攻勢に転ずる。「おこすぞ、
おこせおこせ」と采を振る。
おこすりのき〔名〕結こすり
の木。にわとこ。すいかずら
科の植物。草履のよこ緒・は
な緒を練り合わせに作るとき、
この木の枝を割ったものでこ
すり仕上げした。
おこする〔名〕機嫌とりする。
おべっかをいう。
おこつる(動)誘いだす。誘発
する。誘導する。おびきだす。
それとなく要求する。だまし
気味にさそう。
おこねー(動)祈り呪う行為。
おこはな〔名〕神前の灯明。「お
こーはん」に同じ。
おこぼり〔名〕おくび。げっ
ふ。胃から口へでるガス様の
もの。
おこもり〔名〕お講盛り。信仰
上や地区内の諸行事として、
宮や堂、民家等に集まり神仏
を祭り祈り、講中の平安繁栄
を願い飲食も共にする祭事。
おごりゅー〔名〕女子に対する
敬愛の称。「お嬢さん・おごり
ゅーさん」と呼ぶのと同じ。
おこれーふりー〔名〕松毛虫
の蛾。この鱗粉を身体にかけ
られるを忌む。
おこわ〔名〕強飯。硬飯。糯米
を蒸したもの。「おこわい・こ
わい」ともいう。
おさ〔名〕(1)魚の鰓。「をさ」も

お

同じ。(2)思い。心。心情。

おさい [名] 膳の漕ぎ方。押え。「をさい」に同じ。「おさえ・ひかえ」。

おさうっさぐる (形) 安堵の思いをし安閑とするさま。ゆったり平気平穩に構えるさま。

おさがり [名] (1)神仏に供えてあった供物。(2)兄姉から弟妹へのお譲り物。

おさくじ [名] お作事。他家の住居用家屋新築を「おさくじ」と言い、一般的建物建築工事と区別して呼ぶ。

おさゆ (動) 「おさい」の動詞形。

おさんだたみ [名] お産置。古めの畳を一段高く上に敷いて産床を準備しその上で出産させた。この畳は産後には捨てた。

おし (代) お前。君。「をし」に同じ。[名] 重石。「おしとらす (重石を上に乗せ抑えて置く)」。

おしー [名] どばす。「したゆ」と呼ばれる焼酎のたき滓汁。牛馬の飼料などに有用。「おすいー・をすいー・した湯」ともいう。

おしあな [名] 東風から始まって南・西に廻って終熄する二百十日前後の強烈な風。強風の親玉として恐れられてきた。南東の暴風。「おしやな」ともいう。

おしあなごち [名] 北東風の吹き出しで南西まで廻る烈風。

8・9月に多く風の王と恐れられている。「辰巳(翼)東風(たつみごち)」に同じ。

おしあなぜ [名] 南東風の強いのを「おしあなぜ・おしやな」と呼んだ。「あなぜ」は南東の風。

おしおい [名] 神に捧げ神前周辺の淨めに用いる汲んだ海水や作った塩水。

おじき [名] 伯叔父。おぢ・をぢ。

おしきめえ [名] 神楽舞の名。折敷舞。高度の技術を要する神楽。採物丸盆。「おしきめえー」も同じ。

おしこみ [名] 押込み戸棚。押入れ。

おしざ [名] 膝を折り正座すること。おひざ・正座などという。

おしずかに [副] 気を付けてお帰り下さい。夕方・夜間訪問先を辞去する折、送り出す側や路上で左右に別れる時など、お互に親切やいたわりの気をこめて発する別れの挨拶。「どうぞおしずけえおけえりまっせ」となる。

おしずけえ [副] おしずかに。気をつけて。

おしたち [代] お前達。「をしたち」も同じ。

おしつけ (動) 仰せ付け。下さい。「御免おしつけらりまっせ (ごめんくださいませ)」。「おしつけらる」も同じ。

おしつまる (形動) 押し迫る。

切迫する。歳末を迎える頃になる。

おしどり〔名〕神仏への供物を下げてきた物。

おしめえーました〔名〕おしまいなさいました。夕方や夜間の訪問先での挨拶語。こんばんは、ごめんくださいと言うところ、少し近しい間柄で。

おじや〔名〕南瓜・蒔・大根・ささぎ（ささげ豆）に米・（又は飯）を、だし汁で炊き、小麦粉の平団子を加え炊きあげ味付けした固めの雑炊風食物。主食にもしたが、主として間食や補食用にした。

おしゃかのて〔名〕むさしあぶみ。さといも科の植物。旧暦4月8日のお釈迦様の誕生日の灌仏会の甘茶仏の花御堂の棟の両端に、この花を鬼瓦代りに用いる。この花を頭と見立てた時3つの小葉のうち2枚が両手の形を思わせる為の名とか。

おじゃみ〔名〕お手玉。

おじやん〔名〕祖父。おぢいさん。

おしをい〔名〕「おしおい」に同じ。海の潮水。祭礼時神前に供えたり、神幸の先頭を進み浄めたり、家の内外に撒いて清めるに用いる。塩水を作っても同様に用いる。

おしをいたご〔名〕おしをいを入れる小型の手提げ桶。

おしをいふり〔名〕神社祭礼神幸行列の先頭に立ち、おし

をいたごの潮水を笹か柳葉に浸し乍ら打ち振って進路を浄める役割りの者。

おすいー〔名〕(1)お吸い物。お汁。「汁・しずく」ともいう。(2)「おしー」に同じ。どばす。
いさ湯。

おずみかす〔動〕目醒めさせる。起こす。

おずみつく〔動〕目がさめる。気がつく。失いかけた正気をとり戻す。

おずむ〔動〕目がさめる。

おすわり〔名〕神社祭礼に供えた鏡餅。氏子や参拝者には護符に添え切り餅にして配る。大神宮講では日・月形の餅を作り神前に供えた後、講中に切り分け配る。

おせ〔名〕おーせ。おおせ。ねこざめ的一种。魚の名。

おぜまち〔名〕一枚の面積の広い田畑。

おそそ〔名〕女性器。「おめこ」に同じ。

おぞみつく〔名〕目がさめる。気がつく。「おずみつく」に同じ。

おぞむ〔名〕目をさます。「おずむ」に同じ。

おだえる〔動〕和らぐ。おだやかになる。おとなしく落ちつく。

おだか〔形〕情欲の過度の抑制により牝牛が不妊症におちいるさま。尻尾の根元が殊の外隆起して両側陥没し（尾高）、常に発情時の状態にあること。

お

「からっぽ」ともいう。

おたから〔名〕 嬰兒に対する愛称。「おたからしょつきん・おたからしょんしょん・おたからしょんどん」と呼びかけながら嬰兒をあやすことばとして口ずさまれる。

おたっちょ〔名〕 処々の小丘・森林にこの名が残っている。お立所・お館所跡など説があるが実体不詳が多い。

おたま〔名〕 おたまじゃくし。両棲類。

おたらい〔名〕 うすのろ。気の利かぬ者。相手をののしって言うに用いた。「おたらいさん」ともいった。

おだる〔動〕 余勢が衰える。「火の手がおだる」。「おだる・おだえる・おだれる」も同じ。

おだれる〔動〕 勢が弱まる。

おちかえる〔動〕 病気をぶり返す。「おちかやる・おてかえる・おてかやる」ともいう。

おちゃと〔名〕 お茶湯。仏前に供える茶湯。ちゃとぶつげの略称。

おちゃとぶつげ〔名〕 お茶湯を供える仏具(茶碗湯呑み類)。茶湯仏具。

おちやなみ〔副〕 こしゃくな。ちよこざいな。「おちやなみい・おちやのみい」などともいう。

おちやのこ〔名〕 間食。〔副〕 易い。

おぢやん〔名〕 祖父。ぢーやん。おじやん。

おちよなみ〔副〕 「おちやなみ」に同じ。

おちよんすずめ〔形〕 背の低い女性が不相応(不似合)に着飾ったさま。

おつ〔名〕 音声。声音。声の響・調子。「あの人ん声はおつの良か」。

おっかん〔名〕 お母さん。

おっく〔名〕 奥。「おっくん方さね詰める・おっくん方ば良う見付けろ」。

おつけ〔名〕 お汁。汁物。「おっかん、おつけ注じおくれ」。

おったん〔名〕 お父さん。

おっちょい〔動〕 坐る。「おっちょいする」。

おっちょいする〔動〕 警察に拘留される。刑務所に服役する。「ちょいする・ちょいさせられる」も同じ。

おっちょく〔動〕 押さえる。綱引きで綱を押さえ気味に踏ん張り相手の引きに堪えること。

おっとこまかせ〔形〕 物を手軽に背負うこと。「おっとこまかせひっかる一ち行た」。「おっとりがれえ」「おっとりまかせ」も同じ。

おつもり〔名〕 宴席で盃納めに主人又は相伴人にさす酒盃。

おつもりわき〔名〕 おつमोरの酒盃を受けた者が、盃をさした人に更めてさし返すこと。「おつもり分け」か。

おてかえる〔動〕 病気を悪化させる。病気をぶり返す。「おてかやる」。

おてかけ〔名〕妾。おめかけ。
二号。
おてぎし〔名〕断崖。絶壁。切り岸。
おてこむ〔動〕落ち込む。「をてこむ」も同じ。
おてつく〔動〕落ちつく。「をてつく」も同じ。
おてますどり〔名〕お手櫛取り。年貢積み納めの折の藩選櫛取り役人。櫛取りは藩政時代の村役人で、庄屋の下で地割り・年貢取立などの村役に就いていた人。
おてもと〔名〕お箸。箸。
おてんば〔名〕おきちゃん。女らしさ・やさしさにそわない活発娘。
おとこ〔接尾〕人名の後に付ける語。姓の後にはつかない。「をとこ」も同じ。「岩作おとこに頼むがよか」「もうじきい作太郎おとこが来る筈じゃけえに」。時には軽侮の意も含む。「をつこ」と用いる時などに。
おとご〔名〕末っ子。
おとこし〔名〕男性。男衆。男子。「をとこし」も同じ。
おとし〔名〕(1)鯨の皮。(2)酸化した藍汁に黒糖や糖などのアルカリ分を入れ恢復させること。(3)疾風。(4)液肥を溜め腐敗を促す埋め込み肥料糞。(5)落し錠(施錠錠)。(6)農の一種(落し農)。「をとし」も同じ。
おどし〔名〕案山子。「おどりかし」ともいう。
おとしとり〔名〕(1)大晦日。(2)

元旦の雑煮祝い。
おとしのはしら〔名〕「をとしのはしら」に同じ。参照。
おとしやき〔名〕ぼうろの大型菓子。
おとしゃん〔名〕お父さん。
おとて〔名〕一昨日。「をとて」も同じ。「一昨日はさきおとて」。
おとと〔名〕お父さん。一般に町家や浦部で、おとと・おかかの対で用いられてきた。
おとめむつかん〔副〕到底及ぶ所ではない。とてもとても及ばぬ。「おとめにもつかん」も同じ。
おどり〔名〕貸金の返済期日に利子を受け取り、元金返還を更に延期する際、当月分の利息は返済と貸付けの2か月分となる。これをいう。
おどりかし〔名〕案山子。「おどし」に同じ。
おどりゃー〔感〕怒り罵る・叱る時に発する怒声。怒鳴り声。
おどれ〔感〕こん畜生位の意。「おどりゃー」に同じ。「おどれは・おどれこん畜生が・おどれ見ちよけー、じょうしきばっかりしち言う事あ聞きやせじーうえち……」などと勇ましいが、声ほどではないのが実体。
おどれー〔感〕「おどれ」に同じではあるが、お前・汝・貴様位の気持ちで軽く発し後続の語も少ない事多し。
おどれーくっそ〔感〕「おどれ」

お

等と同じ。「ええいくっそ」にも似る。
おとろしい〔形〕おそろしい。こわい。
おとろしか〔形〕おそろしい。
おどん〔代〕俺。自分。「うんどむ」に同じ。
おなごし〔名〕女衆。女性。「をなごし」も同じ。
おにさー〔名〕おじさん。伯叔父に対する呼称。「おにさん」も同じ。
おにしろほ〔名〕おにやぶまお。いらくき科の植物。杵岐では「からむし」を「しろほ・しろほぐさ」と呼び、これによく似て茎・葉が大きく草丈も高く根作りで茎葉にとげを持つところから「おにしろほ」と言った。「におうやぶまお・はかたやぶまお」などの名がある。
おにじょーくお〔名〕蕁。ひきがえる。「おんじょーくお・じょーくおー」とも呼び、小型のかえると区別する。
おにだこ〔名〕鬼胤。「おんだこ・をんだこ」が常用語。昔杵岐の島に住み島民を苦しめていた鬼を退治に来た百合若大臣に斬られた鬼の首が、宙に飛んだ後、百合若大臣の兜に落ちて来て咬み付いたさまを図にした罟。
おにとり〔名〕鬼ごっこ遊び。「おんとりしゅうや」「おんとり」も同じ。
おにのいわや〔名〕島内に残

る横穴式の古墳。円墳が大部分。杵岐国統風土記には338基の記録がある。現存数は約半数程度か。「おにや・をにのいわや」とも呼ぶ。
おにのほね〔名〕旧暦正月7日「ほげんぎょ」に、生松や竹を木戸先で焼き、この時の燃え切れ（燃えさし）を「鬼の骨」と呼び、家の門口に立て厄除け招福の行事をした。「ほげんぎょ」参照。
おにのほねふすべ〔名〕ほげんぎょ。「ふすべ」は煙を出し乍ら焚き燃す。
おにのもち〔名〕ほげんぎょの火に餅を入れて焼き食べる。厄除け招福健康の年を迎え送れると。
おにのよ〔名〕「をにのよ」に同じ。
おにばばのくし〔名〕のぐるみの実。くるみ科の植物の実。「おにのくし」ともいう。
おにみそ〔名〕臆病者。からいばりする者。
おにや〔名〕「おにのいわや」に同じ。
おねえー〔名〕縄の一種。「はなわ」と呼ぶ普通大の縄よりややために軟らかな感触に縋い仕上げる。「おね・をね」ともいう。
おねどし〔名〕同じ歳。同年齢。おないどし。「をねどし」も同じ。
おねんぎょく〔名〕子供達へのお年玉。

おばーん〔名〕おばあさん。祖母。おばばん。

おばいけ〔名〕鯨の尾部の名。「おばけ」ともいう。

おはた〔名〕織り機。機織のはた。

おはたとをし〔名〕芦辺住吉社・諸古高御祖社・箱崎八幡社外神社祭礼に献納の大織を離宮所に威勢よく先を争い運び立てる儀式。「御幡通し」。

おばな〔名〕鯛の一種。

おばばん〔名〕祖母さん。老人女性。

おひかり〔名〕神仏に献ずる灯明。

おひきまっせー〔動〕盃をお干し下さい。お召し上り下さい。どんどん呑んで下さい。酒をすすめる宴席用語。「おひきやっせー」ともいう。

おびし〔名〕船の「とこ」を押え締めつける木具。その両端を棕櫚の小縄で「うわだな」に締め付ける。

おびとき〔名〕帯解き祝い。生児4年目の霜月15日、四つ身の着物を着せ宮参りなどして祝う。「おびときいうえー」ともいう。

おびときばなし〔名〕打ち明け話。「あけなんこばなし」ともいう。

おおい〔形〕重い。

おぶか〔形〕重い。「どーいおぶかもんないえー」。

おふねさー〔名〕芦辺住吉社祭礼に大舟を曳き廻し、又は海

に浮かべたりして祭礼を祝う。お船様。

おへと〔名〕藩主の霊の遥拝所。石標を建て祭場とした。多くは墓地周辺付近に設けられた。お拝塔。

おほいえたもん〔形動〕心得たもの。感心なもの。きとくなもの。うまく上手な（理解しきった）もの。巧妙なもの。

おまいえ〔名〕(1)家の中の土間に対して畳の敷ける部屋部分名。「やうち」「おまえ」ともいう。(2)お前。貴方。

おみきあげ〔名〕祝い事。祝の宴。「おみきあげします・おみきあげますけん……」。

おみきびん〔名〕同じ体格似合いの夫婦・男女・男男・女女が並んでいるさま。余り大柄でなく小さめで可愛いらしければ尚々良しとする。おみきびんは2個1組で揃い物。

おめいれぬなか〔名〕あいそがつきる。見たくもない。思いいれができない。

おめえーおんまく〔副〕思い。思惑。思い思惑。思い惑らう。

おめえーおんまくなし〔形動〕心残りもなくすっきりと。思う存分に。「おめえーおんまくたあな」と言って「なし」の気持ちを表わすに用いる。

おめえーきる〔動〕思い切る。決心す。

おめえーふくらむ〔動〕思い込む。

おめえーふくろーじ〔動〕思いめぐらして。あれこれ考え合せして。

おめおめつ〔副〕懲り恥ずることなく。

おめおんまく〔副〕「おめえーおんまく」に同じ。おめーおんまく。

おめく〔動〕わめく。「おらぶ・をらぶ」ともいう。大声で叫ぶ。

おめげむつけち〔副〕よくも案じついて。思いついて。「おめげむつけち、よう、そういうこつの言わるるたい」。

おめげむなか〔副〕思いがけもなく。

おめこ〔名〕女性性器。めめじよう。

おめだしほりだし〔動〕思い出すままに。ぼつぼつと思いだしながら。

おめやう〔形〕自然に融合し合って、釣り合いのよいこと。

おめんとう〔名〕おめでとう。祝事や元旦の挨拶語。「おめんとう申しまつする」。

おもいかね〔名〕神楽舞の一つの名。大々神楽の中で舞われる。思い叶う。

おもいと一なる〔副〕うんざりする。悩みごとになる。考え度くなくなる。

おもいれぬなか〔名〕あいそがつきる。見たくもない。「おもいと一なる」に略同じ。

おもしろしゅーし〔形動〕面白くて。「おもしろしゅーしこ

たえじやつた」。

おもち〔動〕思つて。「おもーち・おもうち」も同じ。

おもてし〔名〕「こくせん」の水先案内人。「こくせん」参照。

おもてぬま〔名〕表の間。「おもてし」の居間。船の二番が^{ふたば}んぬきと一番かんぬきとの間の間。

おもや〔名〕家長はじめ付随家族一同の住居屋。「ほんけ・ほんや」ともいう。隠居に対する本家。牛舎・物置きに対する住家。

おもしろか〔形動〕面白か。面白い。「おもしろしか」ともいう。

おやいしとり〔名〕「しきりほーじ」に、最も親密な者(子・甥・姪)、子供の時には伯叔父母が集つて浜に行き、墓に乘せる石を採る。その採み石にする石を「おやいし」と呼ぶ。この時他に卵大の小石30～40個持ち帰り「おやいし」が倒れないように周りに積む。「おやいし」には供養の後僧侶が戒名を書き建てる。

おやかた〔名〕(1)兄。長兄。「おやかたどん・おやかつどん」等と呼び用いる。(2)親分。

おやぎ〔名〕一つの山の最も古い大木。「親木」を伐る折は「みさきさままつり」をして伐る慣わしである。(動)泳ぐ。泳ぎ。「おやぎ行こう・おやぎゆる(できる)か」と用いる。

おやぐ〔動〕泳ぐ。「おやぎ」に

同じ。
おやこ〔名〕親戚関係もこう呼ぶことがある。親子関係にも似た親類。
おやし〔名〕(1)藩主への上納米運搬船の船頭の相談役の呼び名。(2)漁士の頭役。(3)鯨組の「はぎし」の頭。
おやす〔動〕生えさす。生やす。「ひげおやす・草おやす」。「をやす」。
おやだて〔名〕出産に立合った産婆さんには後々迄、正月や盆にもお礼として餅や金品を贈り届けた。これを「おやだて」という。
おやど〔名〕あなた。お宅様。
おやぶれめえ〔名〕婚礼の次の日「しゅうときまおふれめえ(舅様お振舞)」といい嫁の両親を婿方に招き酒宴饗応する。翌日に出来難い時は折をみて行く。これをおやぶれめえという。
おやわん〔名〕塗物の飯椀をいう。
おゆずり〔名〕「おさがり」に同じ。
おゆる〔動〕生える。「をゆる」も同じ。
おらす〔動〕居られる。おられる。「をらす」も同じ。
おらびつくる〔動〕怒鳴りつける。叱りつける。叱る。怒鳴る。
おらびやらく〔動〕怒鳴り廻る。叫び廻る。
おらぶ〔動〕叫ぶ。呼ぶ。「をら

ぶ」。
おらる〔動〕おられる。居られる。「戻りおらる・為^なおらる」。「をらる」。
おらんだ〔名〕マッチ。燐す。「すりつけぎ・すりびうち」ともいう。
おり〔代〕私。俺。「をり」も同じ。〔名〕原酒。おり酒。にがり酒。
おりかけ〔名〕死者を埋葬した後、新墓の周囲を生竹を折り曲げ垣を付ける。この竹垣をいう。「にだんがき」参照。
おりかけいへー〔名〕折り掛け位牌。葬儀に用いる新位牌。小片の板に串状の割り竹を曲げて立て、紙の袋をかぶせて戒名を書き位牌として墓に立てる。「やまいへー」ともいう。
おりどむ〔代〕俺共。俺達。おれたち。
おりめん〔名〕神楽に用いる猿田彦のお面。「をりめん」も同じ。
おりょーぐ〔名〕お料供。死者納棺の折、棺に入れ・仏前に供える料理品等をまとめて「お料具(供)」という。
おる〔動〕(1)綱曳きの折、消極的に綱を強く圧して守りに立つ(駆け引き)。「をる」ともいう。「おるぞー・おっちょけ」などと采振りが指揮する。頃合いを見て引きに出る。(2)居る。(3)汁の塩分度を薄める。〔代〕俺。おれ。

お

おろ〔副〕少ない。「たいして多くない・良くない」「不十分」などの状況に接頭的に付して用いる。「おろよか（良くない）」「おろ食へ」「おろ呑うじよかしよ」「良かこたあ良かばっておろ良か」「買うち来たばって良う見おつたらおろ良かった。」「なんちゅうおろよかもんけえ（何というお粗末な物（者）かい）。」

おろくう〔動〕加減して食べる。少し食べる。少なめに食べる。

おろしじる〔名〕卸汁。大根を卸ばたで卸し味噌汁とし、主に冬季に好まれた。

おろしばた〔名〕卸^{おし}襦。板に竹釘を作り密に打って立て、大根・人参などをすり卸すに用いた。だいこん卸。

おろのむ〔動〕少し飲む。加減して飲む。

おろよい〔形〕良くない。悪い。粗末。

おろよか〔形〕良うなか。粗末な。

おん〔代〕私。俺。ぼく。お前。^{まへ}君。「おれ・をん」に同じ。

おんきゅう〔名〕かぶとがに。剣尾目節足動物。「うんきゅう・うんにゅう」などとも呼ばれている。

おんさん〔名〕(1)伯叔父。おじさん。「をんさん」も同じ。(2)大人男性を親しみもって呼ぶに用いる。

おんじょーくお〔名〕がまが

える。両棲類。大型蛙。

おんだー〔代〕俺達は。我々は。「うんだー・うんどむ・おんどむ」に同じ。

おんだこ〔名〕鬼風。おにだこ。「をんだこ」に同じ。

おんだらがいい〔名〕旧暦正月15日に炊く粥。「かいぜつく（粥節句）」参照。

おんちゃん〔名〕「おんさん」に同じ。尚不特定中年男性に用いる事が多い。

おんちょー〔名〕未婚中年以上男性。

おんど〔代〕俺。「おんどが（俺が）」。

おんどむ〔代〕俺。俺達。「うんどむ」「をんどむ」に同じ。単・複両用。

おんどめ〔代〕俺に。俺達に。私に。

おんとり〔名〕鬼とり遊び。鬼ごっこ。「おんとりしゅうや（鬼とりしゅう）」。

おんどん〔代〕「おんどむ」に同じ。

おんばく〔名〕おおばこ。おんばこ。車前草。おおばこ科の草本。

おんぼ〔名〕隠亡（隠坊）。死体扱人。

おんまい〔名〕小作。小作料。「おんめー・うわめー・かきいゑー・かきえー」などともいう。

おんまく〔形〕思い通りに。うまく。都合よく。思い切りよく。

おんまん〔動〕思わぬ。思わない。

おんめー〔名〕小作料。恩米。
御前。神社寺院所有の田畑も
小作に出された。この神田・
寺田の小作者を「おんまえ」
とか「たんとうどり」と言っ
た。

おんめえざく〔名〕御前作。
恩米作。元来は社寺所有田畑
の小作を「おんめえざく」と
言ったが、後には一般小作も
「おんまいざく・おんめえざ
く」と言うようになった。

おんやん〔名〕未婚の老男性。
「おんさん」より稍卑下した呼
称か。

おんりょー〔名〕旧藩時代役人
の役目に応じて支給された土
地。御領。御料。恩料。

おんろん〔代〕俺。俺達。「お
んどむ・おんどん」に同じ。
「おんろんなうろんがよか(俺
達は「うどん」の方がよい)」。

か

か〔助〕(1)形容詞の語尾「い・
き・し」の変化。「うれしか・
おかしか・かなしか・きさな
か」となる。(2)「は」の変化。
「花よりか団子がよか」。(3)名
詞につく。「さらか(容器の浅
いこと)」。

かー〔名〕井戸。「かあ・かわ・
くみかわ」も同じ。

がーきどん〔名〕餓鬼殿。「が

きさー」に同じ。

かーさ〔名〕(1)寒冷紗。(2)卵焼
き。

かーさなべ〔名〕「かーさ」焼
き器。卵焼き器。フライパン
的働きの鍋。

かーさやき〔名〕(1)卵焼き。(2)
卵焼き器。

かーさやきなべ〔名〕「かーさ
なべ」に同じ。

かーされー〔動〕井戸浚え。水
の神・田の神を祀る行事。旧
暦6月29日「なごし(夏越し)」
に行く。

がーたろ〔名〕河太郎。かっ
ぱ。河童。「があたりろ・がた
ろう」ともいう。

がーつぱ〔名〕かっぱ。河童。
ひょうひょう。ひょうひょう
神様。かっぱは水の神・かわ
の神の眷属ともいう。

かあ〔名〕井戸。「かー・かわ」
に同じ。「かあ」には「汲みか
あ(柄杓で水を汲む井戸)」「つ
るかあ(釣瓶で水を汲みあげ
る井戸)」があった。

かあかす〔動〕乾燥させる。干
す。

があたりー〔名〕かっぱ。がた
ろう。

かい〔名〕(1)鰯等の小魚を量る
容量の単位。この量器を「け
んち杓」という。「一かいは一
斗」。(2)女性性器。訛って「け
ー・けえ」と呼ぶ事多し。(3)
粥(かゆ)。

かい〔形動〕無茶苦茶なやり口
や振舞をいう。「かいいな事する



奴ばい」。

かいえかいえ〔動〕取り替えっこ。交換。「かえかえ」も同じ。

かいえき〔名〕交易。物々交換取引き。

かいかい〔名〕毛虫。かいかい虫。「けーり」に同じ。〔動〕おんぶ。子供を背負う（かいかいする）。

かいかいむし〔名〕毛虫。

かいこぼね〔名〕鯨の子袋の下にある骨。

かいぜつく〔名〕粥節句。おんだらがい。旧暦正月15日、粥を炊き神前に供え親里へも届け白分達も食べ祝う。

かいどう〔名〕島内の幹線道路を言う。芦辺・印通寺・風本かいどうなど。郷ノ浦芦辺線を東海道などとしやれて呼んだ。他は村道・里道・触路・谷道・野山路などと呼び地域民によって管理補修等に当らされて来た。

がいな〔形動〕手荒い。粗暴な。

かいのもと〔名〕雌鯨の陰部。「かい」ともいう。「けー・けえー・けえ」なども同じ。

かいぼげー〔名〕家屋新築祝（葺おろし・葺かぶり）の日、12本の柱根に粥を供え祀る儀式。唱え言をし、粥を口に含み吹き散らす。地区により家により行う諸式に多少の相違があるが、火難・水難をはじめ諸々の災禍を除き、家や家

族の平安繁栄を招く礎を固め落成を祝う。「はしらがいい」参照。

かえー〔動〕食事の給仕。「かえーする・おかえーしまっしょう・おかえーまっせ」などと用いる。

かえどもおし〔名〕舟の艀（かえり）を押す「ともろおし」の予備員。

かか〔名〕妻。母。「かかあ」も同じ。

かかえる〔形〕妊娠しているさま。「かかえちやらす」ともいう。

かかちゃん〔名〕母。お母さん。

かかじょうや〔名〕嬬庄屋。嬬大將。嬬天下。雌鶏が鳴く。

かがしらう〔形動〕困苦に堪え忍び、身を持していくこと。「ようよしこよし、かがしらうち来た」。「かがしりあう」も同じ。どうにか辻褄が合う。

かがしる〔動〕困苦に堪えしのぶ。

かがす〔名〕からむしで作った綱。苧綱。ちょづな。からむしは麻。

かかちょ〔名〕不具者。「かんちょー」に同じ。

かかっちょる〔副〕まだましだ。よほどよい。

かがみあじ〔名〕かがみだい。ひいらぎ。魚の名。

かかやん〔名〕母。「かかちゃん・かっかん」に同じ。

かかり〔名〕最初。はじめ。取

りかかり。「仕事あかかりが大
事」。便利さ・利便さ。「かかり
がよか・かかりの悪か」など
と用いる。

かかりご〔名〕跡を相続する子
女。あととり。

かかりのく〔動〕関係や立場を
はずれる（離れる）。「よのく」
に同義。

かかりもん〔名〕税金・負担金
等の諸掛り。

かかりゅーど〔名〕関り人。
子供成人の後、親が子の庇護
の立場に立つようになること。

かかる〔動〕厄介・世話・庇護
を受ける。「子にかかる事えな
ったばな」。

かがる〔動〕(1)引張る。引き
抜く。「草かがる」。(2)繕う。引
つ張り合わせる。「着物の破れ
かがる」。

かかれ〔名〕田畑の土中にかく
れていて鋤や農具にかかって
出る石や根。

かぎ〔名〕本鯛の稍小型の鯛。
かぎ鯛。漁業者間の通用語。
「かぎだい」参照。

かぎーかからん〔副〕愚劣極
まりない。とるにたらぬ。「か
ぎーかからん様な事言うち差
し出すな」。

かきいえ〔名〕(1)脚矢。「かき
いえー・かけや」ともいう。
杭打ち・建築材の打込みに用
いる杵状の木槌。(2)田畑の小
作。「田をかきいえに入る
」。「うわめー作・おんめえー
作」に同じ。

かきかき〔副〕きちんきちんと
厳格に。「仕事あかきかきやら
んか」。「家賃もかきかき納れ
ちもらわにゃ」。

がきさー〔名〕餓鬼様。盆に精
霊様と一緒に来ると信じられ
ている。各家では縁側の隅に
柏の葉に食物類を盛って祀る。

かきそ〔名〕網を綴り合わせる
糸。

かきそざし〔名〕書き損じ。書
きつやし紙。「かきそやし」も
同じ。

かきそやし〔名〕書き損じの
紙。書き損ずること。「かきそ
ざし・ほご紙」。

かぎだい〔名〕本鯛に入らない
寸落鯛。鯛の大きさ別に分け
られる。「ごーだい」「かぎ」と
もいう。

かきつと〔副〕確然と。はつき
りと。きっちりと。「かきかき」
に同じ。

がきどん〔名〕盆には家の仏さ
んのほかに「餓鬼どん」も来
る。「がきどん」は葬式も供養
してもらえない霊で飢えて
いる。この「餓鬼霊」に何が
しかの供えをしないと、家の
仏に供えたものが届かないと
いい、盆棚の下や縁側に柏の
葉を敷き供え祀る。三界萬霊
仏を祀るのも同じ立場である。
「がきさー」に同じ。

かきのする〔形〕大根人参など
老化して内部が硬化したり、
繊維質の網状を呈するさま、
気候など原因色々。

かきばな〔名〕濃厚な青鼻汁を垂らすさまを「かき鼻垂らす」という。

かきふね〔名〕網漁で獲れた漁獲物を積み込む船。思いおもいに船を漕ぎだして網船に近づき、網揚げにも加勢する。漁獲物が多ければ新船からかかせて網子同格の配分も受ける。かき汁には残魚も多くあって、これが船の所得分になる。食用勝手であるが、不漁で魚が無ければそのまま引揚げる。

かきぼし〔名〕大根を切り干したものの。

かきまぜ〔名〕おまぜ・まぜごはん・まぜめし・ごもくめしなどと呼ばれ大根・人参・牛蒡のほか色々の野菜を具に魚・肉で味付けし、炊き上げた御飯に混ぜ合せて作る。味めし。

かぎまめ〔名〕大豆が発芽して少し伸びたもの。

かぎりくちもなか〔副〕際限がない。果しない。だらだらして節度がない。

かぎりもくちもなか〔副〕いつ終る（果てる）とも知れぬ。「かぎりくちもなか」に同じ。

かく〔名〕船の艀を張る「へーを」を取付ける為「かじき」に打ち付けた木製具。〔動〕(1) 漕を締める。「へこかく」。(2) 漁獲物を網の中から掬い、かかえあげる。

かが〔動〕折る。かがす。「木の

枝をかが・押しかぐ・打ちかぐ・かぐる（折れる）」。

かくさむ〔動〕なだめいたわる。病人を看護する。「年寄かくさむる事（かくさめ事）仕事あ出来ん」。「かくさめ・かくさめる」も同じ。

かくさん〔名〕母。かかさん。主婦の呼称。妻・奥さんの意（夫の使用で）。

かくさんな〔名〕母・妻を呼ぶ声。

かくし〔名〕神隠し。「かくしい遭う」。

かくべつなもん〔副〕たいしたものではない。粗末なもの。「かくべつなもんじゃござっせんばって……云々」と言い人にすすめる。「かくべつなもんじゃった（良くなかった）」。

かくむ〔動〕独占する。かくまうの意。「何も彼も我が独りでかくむるつもりしちよる」。

かくむる〔動〕「かくむ」に同じ。

かぐめ〔名〕かもめ鳥。鷗。

かぐめえもん〔名〕用い者。妾。

かぐや〔名〕台所。振舞や家の物事に臨時的に特設される料理場。

かぐら〔名〕神楽。幣神楽・小神楽・大神楽・大々神楽・岩戸神楽などの別あり。舞殿には注連縄を引き廻しに張り、その間に水引きを引き廻し八神幡を八方に付け、雲板とい

う八角形の板を上にもす。近年ではこの八角形の板に八神幡を付けると。神楽は一人が畳半枚の中で舞い、一辺を3歩で歩み、全体を一坪(畳2枚)内で移動していくのが基本という。彦岐神楽は神官が舞うのが特徴。

かくらうち〔名〕(1)構えの内。構内。「おかくら・かぜうち・かぜち」ともいう。「かくらうちの広か」。(2)いちじょうの弓打祈禱のことをいう。いちじょうは一乗経。法華経。

かぐらはじめ〔名〕神楽始め。太鼓はじめともいう。奏楽のみで舞はない。太鼓・笛・唱歌の運びは太鼓を打つ者の短声(低い声)で上の句を唱え、次に一同下の句を長声(高い声)で唱和する。

かくる〔動〕牛馬の交尾。「かけさする(交尾させる)」。

かけあい〔名〕小作にだす。「田をかけあい」にだす。「かきいえ」も同じ。

かけあう〔名〕匹敵。匹敵する。力が釣り合う。対等の力(力量)。

かけあみ〔名〕網漁法の一つ。刺し網。

かけいえー〔名〕(1)掛矢。掛柄。(2)田畑の小作。小作にだす。「かきいえ」に同じ。

かけおう〔名〕間に合う。「かけあう」に同じ。

かけがけ〔名〕仕事と同時に双方にまたがること。

かけぎ〔名〕掛け木。薪炭用の丸太材。秤にかけて斤売りにしたことから。

かけげえ〔名〕掛け買い。商品を先に受け取り、代金は盆・正月期に一括支払いする法。昔はこの方法一般的。

かけご〔名〕他の籠の中蓋の役をする籠の一種。

かけざわ〔名〕物干し竿。えもんかけ。掛け竿。

かけずかんまず〔副〕お構いなしに。義務も負わず権利も放棄する意にも。

かけずる〔動〕奔走する。かけずりまわる。

かけぞる〔動〕「かけずる」に同じ。

かけだし〔名〕大勢の客を一時にもてなすに、座敷を広げるための臨時の張り出し棧敷。架け出し。

かけば〔名〕乳幼児に二重に生えた歯。

かけぬいを〔名〕掛けの魚。正月に幸木(せえわぎ)に吊し飾る魚。

かけゆ〔動〕抱える。抱きかかえる。「そげん太かつば、かけゆるもんか」。

かげる〔動〕折れる。「枝がかげる」。

かこ〔名〕桑の実。熟したら食用に。

かごてぼ〔名〕円・楕円・角形の竹籠。「かご」「てぼ」とも言い、炊事用の外、収穫用・大豆植え・釣り等々大きさも用

途も多様で重宝。

かごみ〔名〕かくれんぼ（遊び）。「五十かごみ・四十かごみ」の外、「三十・二十・十かごみ」など決めた数を数える間に隠れ、それを探す。「かごみしゅうや」と仲間を誘う。

かごみかごみ〔名〕「かごみ」に同じ。「かごみかごみ」とリズムよく誘う。

かごみぼし〔名〕隠れ法師。隠れんぼ。

かごむ〔動〕(1)かくれる。(2)手足がかじかむ。「かがむ・かじむ・かじくる・こごむ」などともいう。

かさ〔名〕腫れもの。吹出物。かぶれ。「頭えかさんでけえちよる」。「がながさ・十八がさ・でけもん」等の名も残っている。

かざ〔名〕匂い。臭気。

かざくち〔名〕風の吹き具合や方向。「今日かざくちの悪か」。かざね。

かざね〔名〕風の方向。風の根。風音。

かざぶくれ〔名〕風腫れ。原因不明の水腫。火ぶくれ・水ぶくれと並ぶ語。

がさほしか〔形〕自己の利得のみを計るさま。「あん男んがさほしかこつが」。「かつごらしか」に似る語。

かざもと〔名〕風本。勝本の古名。

かざりくど〔名〕内土間荒神棚下の籠。飾りくどで普段の生

活には利用せず。

がし〔助〕程か。か。「何がしありそうなもんじゃが」。

かしあみ〔名〕地と浜の中間の「はたくち」に地に添うて網を張り潮の上下に行き交う魚をかける網漁法。磯建網ともいう。このほか底建網・布着網・あぐり網（巻網）・やつ張り（はつそうばり）網・棒受網など、魚種・漁場・漁期・漁獲量・規模の大小・目的により網漁法に各種あり。

かしおけ〔名〕研いだ米などを浸す桶。米など洗って浸すことを「かす」と。

がしがし〔形〕稍かたい手ざわり歯ざわり。「かしかし・こしこし」も略同じ。

かじかぶり〔名〕鍛冶冠り。手拭を四つ折りにして頭に乗せる。鍛冶工が作業中こう冠っていたところからと。

かじき〔名〕(1)船の底板の次に付けた両側の板。底板は「かわら」という。(2)鱮の一種。旗魚。「ばれん」とも。

かじきり〔名〕ぼたつ。小魚の名。

かじく〔動〕かじかむ。「かごむ」に同じ。

かじくる〔動〕かじかむ。

かじこー〔名〕鍛冶講。昔一地区・一舳共同で鍛冶工を傭い入れ、農具や用具の補修工作に当らせた。その雇傭契約のとり決め。

かじめ〔名〕海岸浅瀬に生える

海藻。味噌汁に入れて食する。「かずめ・かちめ」ともいう。「かちめ」は勝和布・徒和布から来た名と。

かじめじる〔名〕かじめを生又は干し細かく刻み、碗に注いだ熱めの味噌汁に入れて攪拌し、ぬめりを出し吸う。「かずめ汁」ともいう。呉々も鍋に入れ一緒に炊かないこと。熱すぎる汁ではぬめりがでない。冬期は特に珍重される海藻汁。

がしゃばる〔形〕強情張る。はびこる。のさばる。「到頭がしゃばり通した」。

かじょー〔名〕釣り銭。過剰の意か。

がしよー〔名〕いなご・ばったの類。「はたおり(しょうじょうばった)とじんきち(ぎりぎりす)」とは区別して用いる。

がしら〔名〕(1)あらかぶ。かながしら。魚の名。(2)群中の最有能者。働きがしら。獲り・獲りがしら。

かしらだ〔名〕(1)願田。地割制度で田地割りの折上中下を組合わせて配分した。この時の上田をいう。(2)田の位置で水掛りの最上位の田をいう。

かしらぼり〔動〕甘藷などの掘り採りに、よく根の充実したものをあちこち選んで掘りとること。「さぐり掘」。

かしわのき〔名〕あかめがしわ。葉は盆に仏の飯を盛ったり、かしわだごを包んだり用いる。とうだいぐさ科の植

物。

かす〔助〕さす。させる。「走りかす・戻るかす・流るかす」。(動)物を水に浸す。水につける。研ぎ洗って浸す。「もち米をかす(浸す)」。

かすきばり〔動〕徒労。無駄働き。無用の努力。

かすくれ〔名〕かんこの木。かすくれんともいう。役に立たぬつまらぬ木。とうだいぐさ科の植物。

かすじる〔名〕(1)酒糟を入れた汁物。(2)豆腐のかす(おから入り)汁。

がすた〔名〕がらくた。無価値な品物。

かすだご〔名〕粉を曳き、取った後の糟を更に粉に曳き、その粉で作った団子。百姓農民の暮らしはそこまで苦しかった。

かすびき〔名〕鯛の子。鯛の稚幼魚名。

かすべき〔名〕「かすびき」に同じ。

かすまき〔名〕小麦粉に鶏卵・砂糖他を添加してねり、延べて餡を包み巻いて焼き棒状に作りあげた菓子名。

かすむ〔動〕匂いを嗅ぐ。

かずめ〔名〕「かじめ」海藻に同じ。(動)嗅ぎなさい。嗅げ。匂い嗅げ。

かすもかばねむなか〔副〕全く痕跡を止めない。何一つ残っていない。かすは後に残る糟・くず。かばねは死骸・骨の類。「かすもかばねもなか」

か

ともいう。
かする〔動〕容器内の水や物を残さずすくい汲みとる。「かすりとる・ごりこさぎする・こすりとる」も同じ。

かせ〔名〕糸巻き取りに使う「エ」字型の棒を死者の布団の上に置いた。昔はどこの家にも「**総**」があった。これは死者の内臓を盗りに来る魔物を防ぐ為と。現在では短刀類を置く。

かぜ〔名〕(1)雲丹の一種。ばふんうに。刺短かく灰褐色のうに。(2)幼児の頭髪の頂点と下半分を剃った時の名。「まるやま」に同じ。そんな剃り方もあった。

かせあるかぶ〔名〕色赤く石穴に棲むかさご科の魚。あらかぶ。「あんぱく」参照。「かせあんぱく」に同じ。

かぜうち〔名〕「かくらうち」に同じ。

かせかけおなご〔名〕妖怪の一種とか。

かせがせむなか〔形動〕あれもし、これもして手当り次第物事に加わる様。

かぜかみ〔名〕辺鄙な海浜に住む人を自他共に卑下賤称するに用いた。

かせそめや〔名〕染め物屋。紺屋。「かしえそめや」も同じ。「かせ」は木綿糸。

かせど〔名〕加勢人。手伝い人。

かぜひきぐさ〔名〕たうこぎ

草。狼把草。きく科の植物。昔「ろうがい」に効くとされた。

かぜひく〔動〕気が抜け効用が失われる。「こん桑や^{あつ}早よ蓋しちおかにかぜひく(効力がなくなる)とぬ」。

かせぶか〔名〕蟻の一種。しゅもくぎめ。

がぜみそ〔名〕うに・がぜの卵巣を採りだし茹でて味噌と摺り合わせ作る。

かせる〔動〕麻疹の治ること。
かぞむ〔動〕臭いを嗅ぐ。かずむ。

かた〔名〕(1)漁獲のしるしという程度。ほんのわずかばかりの漁獲。「かたがあった・いっこうにかたがなか」。(2)船の胴幅の太さを示す語。(3)地曳網での配分法。子供は歩を切り、逆に力の強い者には歩増しして配分する。〔助数〕縄の長さ把数を示すことば。二十尋又は三十尋を「^{ひと}一かた」、十かたを「^{いっすく}一束」とした。

がた〔助〕代価に見合う分量。分量に相応する価格。売買では何円分という意に用いられる。「100円がたおくれ」「1,000円がた買った」「1万円がた無か」「こがっしやがた……」。

かたあて〔名〕「かたすけ」に同じ。

かたいき〔名〕(1)片息。呼吸の苦しいさま。「かたいきつきおる」。(2)片行き。不公平・不平

等の配分や処置処遇。「片行き
のしちよる」。

かたいし [名] 椿の実。砕いて
蒸し、椿油をとる。「かてし・
かてーし」という。

かたおし [名] 「くろいを」の
うち稍型の小さいもの。「せき
もち」の下位と「こしば」の
上位大の「くろいを」呼ぶに
用いる。大きさ別の名。

かたかた [形] ちくはぐなま
ま。ふたつ一組の物の不揃い
さ。「かたかた履く」「草履のか
たかた」。

かたかま [名] 稲の刈り方の一
種の名。一方向から刈る「か
りかけ」法。

かたかめ [名] からすびしゃ
く。さといも科の植物。その球
根を「芋蔓」「和慈姑」という。

かたかるいきつく [形] 「かた
いき」(1)と同じ。

かたき [助数] 食事の度数を表
わす語。「朝昼二かたき貰おち
食うた。一かたき位え食わん
ちちゃ死にやせん、かたがた
言うな」。

かたぎん [名] かたぎぬ。ちゃ
んちゃんこ。袖なし羽織。

かたぐ [動] かつぐ。担ぐ。「木
材をかたぐ」。「かたぐる・かた
むる」に同じ。

かたくちずき [動] 畑を「こ
じり」の方から小口に犁くこ
と。土地がよく耕起されて犁
いた部分を踏み付けずによい。
牛も未耕部を進む。しかし土
の乾きが悪く「くれがやし」

には不適。土が次々に前の土
にかぶさっていき「なかすき」
に好適な犁き方。

かたぐる [動] (1)「かたぐ・か
たむる」に同じ。(2)嫁をぬす
みとる。古くからの嫁とり法
の一つ。

かたけえ [名] 片貝。「よめ
ががさ」に当る貝の名。筥の
如き条紋があり浅い海岸の石
に棲む。食用できる。

かたげる [動] 「かたぐ」に同
じ。

かたこしいし [名] 肩越し石。
葬式を見た(出合った)帰
りには、石を2個拾って1個は
右手で左肩越しに、他の1個
は左手で右肩越しに後方に投
げ、後を見返らずに帰る。厄
祓いの意味があると。

かたしれもん [名] 果実が扁
奇形に成熟したもの。人々に
余り好まれない。

かたすけ [名] (1)肩当て。担い
物の折厚手の布類を肩に当て
痛みの緩和材として用いる物。
両肩に周わし前で結び带状に
括る。(2)葬儀の「龕台」を担
ぐ者を「かたすけ」という。
死者の甥や姪婿が当たるが、地
域による慣習の違いもある。
「さかぼう」参照。

かたずける [動] 結婚させる。
嫁にやる。

かたずみ [名] 硬炭。炭焼き法
により製せられた木炭。「けし
ずみ」参照。

かたちんば [形] 長さ・大きさ



の不揃いのさま。ちんば。びっこ。

かたつら〔名〕片一方。片方。片側。対の物（履物・手袋等）の片っ方。一荷の荷の半分。片荷。

かたで〔副〕まるで。到底。決して。どうしても。……でない（否定）。

かたでいかな〔副〕いかにも。まるで。「かたでいかな聞くんじゃなか」。

がたにぎり〔名〕ぎんぼ。ぎんぼ科の魚の名。

かたにづき〔動〕白で物を搗く。折。二人で二丁の杵で搗くこと。

かたにびく〔形〕左右・前後の両荷が不均衡なさま。量の大小・寄り過。

かためいあげ〔名〕着物の肩の縫いあげ調整。肩あげ。「かたにいーあげ」ともいう。

かたはらうつ〔名・副〕初め一人に宛がわれていた食物などを新たに加わって来た者に分けられること。

かたびき〔名〕片引き戸。

かたぶきひらぶき〔副〕縦から眺め横からのぞきすかし見て物を充分に見究めること。

かたぶし〔名〕肩。肩節。肩筋肉。腕つぶしに並ぶ語。肩つぶし。

かたふち〔名〕海岸が急傾斜して深く陥没したところ。

かたふね〔名〕(1)料船の意。(2)相棒。仲間。(3)連れあい。夫。

妻。

かたみだり〔形〕衣服の前の不揃いのさま。「かたみだれ」ともいう。

かたむる〔動〕担ぐ。「かたぐる」に同じ。

かため〔名〕結納。婚約。「かためめの盃」。

かためえに〔副〕一方から順に全部。「かためえに配つちされ一た」。「かために・かためえーに」も同じ。

かためくい〔名〕固め食い。米なら米ばかり麦なら麦ばかり手許に有る品から同じ物を次々続けて食っていく。食事においてもご飯だけ、おかずだけと一品ずつ食べ切って次に進む式。

かためざけ〔名〕婚約成立の祝い酒。仲人が直ちに先方に持参する。

かためっちょう〔名〕片目くら。

かたもがり〔動〕我を押し通し言い張る。「やたもがり・もがりそくねする」も同じ。頑固に言い張る。

かたや〔名〕相撲の土俵。固い土。

かたゆるし〔名〕庄屋時代単なる傭人が年功努力によって最下級の役人にとりたてられること。「かたゆるしを受くる」などと用いた。

かたらせる〔動〕参加させる。遊び仲間に加える。「かたらせる・かたらせる・かつする・

かってる・かってる・かてる」
等類用語多し。

かたりかす〔動〕参加させる。
加える。仲間に入らせる。加えてやる。

かたる〔動〕(1)参加する。加わる。(2)女性の2回目以降の妊娠をいう。

かたろ〔名〕肩輿。船の艀の一つで右方のわきろ。「かたぬろ」即ち肩の輿で若衆の強力者から当った。

かち〔名〕(1)群。集団をつくったさま。「鳥のかちつくうち飛びをる」「魚んかちつくうち泳ぎよる」。(2)陸地。(3)徒歩。

かつ〔接頭〕(1)かつがつの意。「かつじろ・かつごまめ」。(2)加える。「かつつる」のもとの語。

がつ〔助〕「がた」に同じ。だけ。ぶん。「10円が買って買った」。

かつえど〔名〕飢えた人。「かつえどんどつするもんじゃなか」。

かつえる〔動〕飢える。「かつゆる」も同じ。

かつがつ〔副〕やっとのこと。少しずつ。一方から。片方から順次に。出来る一方から。「かつがついっぺー」「かつがつ食うちしもうた」。

がつがつ〔副〕丁度手一杯という程度。やっと一杯。

かつかる〔副〕一方から。片方から。「いくら聞いたち、かつかる忘るる」。

かっかん〔名〕母。お母さん。
かづきにん〔名〕葬儀に血族の女性がかづきを被る。この立場の人をいう。「わたばしかぶり」に同じ。

かつぐ〔動〕海中に潜り漁をすること。潜水漁。海士(女)漁。

かっこい〔名〕子供を負う絆天。ねんねこ絆天。「かっこいするよ」。(動)子どもを背負う。

かつごまめ〔名〕食用に米麦を必要分だけ日々精白して生活すること。

かつごらしか〔形〕利欲にあくせくすること。「がさほしか」に似た語。

かつしき〔名〕のぐるみ。くるみ科。水田肥料として植物の枝葉を切り込んでいた頃、主に用いられた植物名。

かっしゃ〔名〕頭。頭髮。

かつじろ〔動〕田植えの「植え代」を田植当日に一方で作っていくこと。

かっせき〔名〕船中での炊事役。主として最年少者が炊事をする(する人)。

がったろ〔名〕河童。かっぱ。がっぱ。河海に棲み好んで人間の「しりご」を抜く。頭に摺鉢状のものを冠り、角力を挑む。耕した畑の中で闘う時は手足自由にならず、頭の摺鉢を傾けて水を出せば河童の力抜けると。

かっちょ〔名〕しろはら。くわ

つちよ。鶇。つぐみ。小鳥の名。

かつつる〔動〕参加させる。加える。「かつ・かつる・かてる」に同じ。

かって〔名〕(1)茶の間。農家の居間兼食事室。(2)かたい病み。(3)対者を罵るに用いる。「こしきかって(この野郎)」と怒鳴る。「かってー」も同じ。

かつで〔副〕一方から。「なんがり」に似る。

かってかまかぎ〔感〕「かって(3)・かってー」に同じ。勝手にしゃがれ。

かってこしき〔感〕「こしきかって・かってー」に同じ。

かてる〔動〕「かつつる・かてる」に同じ。

がっぱ〔名〕河童。があっぱ。

かつはき〔名〕咲。

かっぱつる〔動〕無理矢理に取る。無理に取りあげること。

かっぱき〔形〕風采。「かっぱく」の意か。「たっぱき」ともいう。

かっぱ〔名〕頭。「かっぱー・かっぱう・がんつ・がんつう」ともいう。「かっぱ打ち割ぞ」「かっぱん良か(悪か)」などと用いる。

かっぱい〔名〕子どもを負う絆天。「かっこい・ねんねこ」に同じ。

かつやま〔名〕くしのむね。菓子名。小麦粉に砂糖等を混ぜて煉り、のべて小口より切って焼き砂糖の衣がけなどした

もの。

がつら〔副〕しながら。がてら。

かつる〔動〕参加させる。「かつつる・かてる」に同じ。

かつるる〔形〕「かつれにし(風)」の吹いている様子や、吹き出しそうな状況になる時に用いる。

がつれ〔副〕「がつら・がてら」に同じ。

かつれにし〔名〕春先から吹く湿っぽい西風で、「さがりにし」に黄砂を交えたもの。「どろにし・ふすぼりにし」などともいう。

かてー〔名〕報い。「かてえ」ともいう。

かてーし〔名〕「かてし」に同じ。

かてし〔名〕椿の実。「かたいし・かていし・かてーし」ともいう。

かてしのき〔名〕やぶつばき。つばき科。「かたしのき」ともいう。

かてしもも〔名〕桃の一種。外見・色・形・大きさ共「かてし」に似て、熟しても表皮が「かてし」の様にひび割れる。「かたいしもも・つばいしもも」ともいう。

かてじょ〔名〕舅や姑を古い時代にはこう呼んでいた。

かてじょーぶれめえー〔名〕婚礼祝いに嫁の伯叔父母を招きもてなしすること。この後先方の都合よい日に訪問する。

これを「しよていり」という。

「しよていり」参照。

かてちよく〔動〕加えておく。

かてもん〔名〕食事の副食物全般。おかず。そえもん。「かてもんかつち（おかずをかてて加えて）おあがり」などを用いる。

がてら〔副〕しながら。ついでに。

かてる〔動〕加える。副える。

がと〔助〕「がた・がつ」に同じ。「百円がと買うちけえ」。

かどぐち〔名〕屋敷入口。「きどぐち」に同じ。「かどみち」ともいい。「おもてぐち」「うらきど」などと言い分ける。「かどくち」から家の大黒柱が見えない方向に取るのが常道。門松を立て、盆の迎え火を焚くのもここ。

かどぐちみち〔名〕家の戸口と門口を結ぶ道。「かどみち」ともいう。

かどぞーもん〔形〕農作物の出来具合が土地により甚だしく差があるさまをいう。「今年しゃせじょ年ちゅうばって、かどぞーもんで」と言う。

かどどーろ〔名〕門灯籠。盆に屋外に吊す灯籠。

かどな〔名〕各家の屋号をいう。家の位置・地形・地名（小字名）・職業・由緒等により命名呼び合って来た。

かどふだ〔名〕家の戸口上に掛けた護符の木札。毎年旧暦正

月23日、宮や寺で書き与えた。神前に井桁を組み大般若経を転読する地区もあった。

かどまぶり〔名〕「かどふだ」に同じ。

かどり〔名〕(1)角。かどの所。(2)田の畦の内側を鋤で削りとする作業。田植え準備として、草切り・くわどり・畦ぬりは山間の棚田で大事な大変な農作業。かどりは鋤どり・角とり・くわどり（鋤で角をとる）等々に。

かな〔名〕大工の用いる鉋。かんな。〔接頭〕少しもしない。全くしない。「かなおれもせん」「かなつんぽ」。

かなあげおみき〔名〕「かなあげまつり」に用いる神酒。旧暦3月10日・10月10日金毘羅宮の祭りの日、平素のあやまちを詫げる「かなあげまつり」をした。その折に供える神酒。

かなあげまつり〔名〕海中に金物を落した時は直ちに引き揚げねばならないが、それができない場合には、そこに神酒をあげて、海神の怒りを鎮める祭り事をした。

かなおれ〔動〕物事の進行途中で手法や考えに譲歩などを起こす気運。

かなおれむせぬ〔形〕寸毫も譲歩しないさま。「どえんいくら言うたちかなおれむせぬ」。「かなおれもせん」も同じ。

かなかな〔名〕ひぐらし。かなかな蟬。

か

かなくーり〔名〕氷。簇のように冷たい氷。〔形〕ひどく冷えて冷たい様子の形容に「手も足もかなくーりの如なっちゃうたい」。

かなず〔名〕相撲の一手。体を立て自己の脛を相手の脛に巻いて倒す。かわずがけ。「かなずがけ・かまず」ともいう。

かなつち〔名〕三つ星。

かなとーぶく〔名〕河豚の一種。「かなぶく」に同じ。魚の名。

かなぶんぶ〔名〕こがねむし。こがねむし科の昆虫。植物の葉・根を食う害虫。

かなもぐら〔名〕茎は四角で稜上に鋭いとげがあり稍蔓状。葉は三角形の底部はハート型。「とげそば・ままこのしりぬぐい」とも呼ばれたで科。

かなやま〔名〕まんびきの名がある魚。

がに〔名〕蟹。かに。「がね・がん・がんじょう」などとも呼ぶ。

がにがたまり〔形〕小さいものが数多く集まったさま。「がんがたまり・がりがたまり」ともいう。

かにごく〔名〕各舐や地区共同で備った鍛冶工に、工場を提供し賃金や諸経費として各戸から米を切りだすこと。「うけかじ」「かじこー」参照。

がになわ〔名〕うけの一種。竹を割り漏斗状に編み、川に入れ主として蟹を獲る仕掛け。

がにみな〔名〕やどかり。「がねみな」ともいう。

がにをとし〔名〕田植え終了後はじめて潮干狩りに行くこと。

がね〔名〕「がに・がねえ」に同じ。

かねかけいぼ〔名〕耳の前方上部にできる疣。幸運の兆という。

かねせん〔名〕一厘銭。「かねせん一文も持たぬ」などと用いた。

かねち〔副〕かねて。普段。かねがね。

かねつけねんば〔名〕くろやんま。おしおからとんぼ。蜻蛉の一種。

かねてぎ〔名〕普段着。

がねみな〔名〕「がにみな」に同じ。

かねをこし〔名〕「ぶでーこー」に同じ。

かねんとりー〔名〕「おいざかもり」に同じ。

かの〔代〕船上では獣類の名を口にするのを忌み隠語として用いた。

がのこいゑむあげん〔形動〕屈服して一言の抗弁もできぬ。ぐうの音もでない。

かばち〔名〕鯨の頭部の呼び名。

かばね〔名〕土台。根本。「かばねだけ残っちゃう」「影もかばねむなか」。

かばり〔名〕羽毛に包んだ小さな偽餌針。「かばり」より大型を「ほろ」と呼ぶ。釣漁法の

漁具名。

かぶかぶ〔形〕大口を開けて飲食するさま。「かぶかぶ食いをする」。がぶがぶ。

かぶし〔名〕鯛の飼付け漁業。この漁法は薩摩地方から伝わり盛んになった。魚を集めるため撒餌をすること。

かぶせ〔名〕子供を負うた上に被せる絆天類。「かっぱい」に同じ。

かぶつき〔名〕焼魚の身をほぐして、しょうゆのみ(もろみ)に混ぜ入れてつくる副食物。

鰯他小魚を用いる。「しょうゆのみのかぶつき」の名有り。

がぶっしょー〔形〕骨格強壮筋肉質、がっちりとした体軀相貌の形容。「がぶっしょーでしばかりそうな人」。「がぶっしょーか(な)」ともいう。

かぶと〔名〕鶏のとさか。「かぶとん赤か、又は(太か)」などと用いる。

かぶりいし〔名〕土葬の時棺の上に置く平石。かめ棺を覆う蓋石ともいう。

かぶりかぶり〔形〕いやいやする。頭を左右に振りする幼児のいやいや。

がぶる〔動〕(1)担いだ桶の水が動きでこぼれでる。「水ば、がぶりこぼさんごつ担え」(2)船が荒波で揺れ動く。「舟んがぶるもんで酔うた」。

かぶれもん〔名〕うるし・はぜ・毒草に触れてでる「かぶれ」。「かぶれもんのでちどうむ

こむ」。「まけもん」ともいう。

がぶろ〔名〕川や池の深み・淵。

かべちよろ〔名〕やもり。家の壁などを這い廻るは虫類。

かま〔名〕(1)相撲の一手。相手の足に自己の足をからめ倒す。(2)麩類を貯蔵する穴。家の床下や雨水のかからない崖下に穴を掘る。「いもがま」と呼び比較的長期貯蔵用とした。

かまかぎ〔名〕鎌の形の除草具。近年刃に近い鋭利さがあり形も変化しているが、「壱州かまかぎ」は先端部は尖って刃の部は丸味を帯びなめらかで作業するのにやさしさがある。

かまき〔名〕竜巻き。突風。風の親玉で人形の形をし、次第に崩れ散って暴風となり荒れると思われていた。

かまくら〔名〕大根人参を短冊に切り酢魚と混ぜなますにする。「かまくらなます」ともいう。

かまげ〔名〕藁で編む袋。かます。吠。

がましか〔接尾〕形容詞的意味を与え、「言いわけがましか・勝手がましか・晴れがましか」などと用いる。

かまず〔名〕足を相手の脚の内側からかけて倒す法。「かなず」に同じ。

かまぞ〔名〕舟から海底のわかめ・あらめを刈り採る鎌。穂も柄も長い。

か

かまち〔名〕部屋の端。隅。へり。「あがりかまち」ともいう。

かまで〔名〕かまち。框。

かまど〔名〕荒神様。かまど神。台所。(助数)戸数を表わすに用いる。

かまとこ〔名〕台所。「かまや」の意にも用いる。「かまどこ・かまば」ともいう。

かまや〔名〕台所・炊事場・風呂場・小居間・小物置等を寄せ造りした独立小家屋。

かまわらし〔名〕「しりだかしりたかみな」とも呼び、海辺の石の間に棲む馬蹄螺科「ぎんたかはま」の類の貝。

かみあそび〔名〕神楽舞の名。扇と鈴を持ち二人で舞う。島の南目では主に「やまくち」の後に、北目では初めに舞った。神楽次第記には、神楽始めの次に記されている。

かみかくし〔名〕家に死者がでると神棚の前に半紙一枚を縦長に貼り下げ神隠しをする。これをいう。

かみげ〔名〕髪毛。頭髮。「かんげ」ともいう。

かみさし〔名〕かんざし。簪。

かみずもー〔名〕神楽舞の名。神角力。角力の型・勝負を競うこともなく、二人で互に手を取り、肩に乗り、反転するなど曲芸的に舞う。芦辺浦住吉社祭礼神幸の後、社前に構えた四本柱の中で子供角力の型をする。沼津天満社では神

幸先中宮で、「おこしかき」が角力の真似をする。これを「角力をあげる」という。一般祭礼では神官が拜殿内で簪かけ腰帯を締めて力強く舞い遊ぶ。
かみだし〔名〕白米を水浸して摺りつぶし、どろどろに煮つめたもの。母乳の代用にした。「かみだり」ともいう。

かみたて〔名〕生後33日目に生児の産毛を剃ること。産毛剃り。全部剃る、前髪を少し切る、後頭部を逆三角に剃り残すなど慣習も色々。

かみむけえ〔名〕神迎え。各社旧暦11月中に小祭典を行い出雲よりの神の帰還を迎える神事をする。この時神楽を奏す。「かんむけえかぐら」という。

かむ〔動〕食べる。食う。「飯ばかむ」。荒っぽくいう時用いる。「飯ばかめ」。

かめー〔名〕構えの内。囲い。垣内。「かめえーする・よかかめー」。「かめ・かめえー」も同じ。

かめいれ〔名〕綱・紐の結び方の名。両方から互い違いに輪をつくり組み合わせてかけ両端を引けば引くほど締まる結び方。

かめのは〔名〕くわくわら。さるとりいばら。春先から秋にかけて葉は団子の外包みに利用される。

かものいどまり〔名〕用事を持って行った先にそのまま泊

り込んでしまう。

かやく〔名〕薬味。うどん・そうめん・そば類の香料・香辛料の総称。

かやす〔動〕(1)返す。戻す。「うけかやす」。(2)羽化。ふ化させる。「ひよこかやす」。

かやる〔動〕(1)ひっくり返る。「たご(桶)がかやる」。(2)羽化・ふ化する。「ひよこがかやる」。

かよい〔動〕食事の給仕。「おかよいする」。「かえー」に同じ。

がら〔名〕背丈。身長。

からう〔動〕背負う。おんぶする。「子からうた上え大荷下げち」。

からうすふせ〔名〕葬式の棺が家を出る時、掲白を伏せ同時に座敷と庭を掃き出す。平常時に斯うする事は忌み嫌う。

からおなご〔名〕適齢期になっても生理の微のない女性。

からがけ〔名〕鰹を塩漬けし、あげて汁を切り更に塩をまぶして圧搾したもの。食用とし正月の幸木に吊し飾りにも欠かせない一品とした。

がらがら〔名〕音をだす小兒玩具総称。

からけしまき〔名・動〕作物を収穫したままの畑に、粟などの種子を播きこれを犁いて種子を鋤き込む播種法。

からし〔名〕菜種。芸苔。あぶらな科。

からしのふね〔名〕菜種の実を包む細長い莢。単に「ふね」

とも呼ぶ。

からじょーね〔形〕作物の茎・幹部の軟硬度・柔軟度。「からじょーねん無か・有る」などと用いる。

からす〔助動〕しくあられる。あらず。ある。「梶口からす」。敬語助動詞。

からすおどし〔名〕桑山子。「おどりかし」とも言い、鳥の死体を吊す。

からすがみ〔名〕烏神。山神。神社に祀る例もある由。「からすまつり」参照。

からずき〔動〕水を注ぎ入れないで水田を犁くこと。空犁き。稲穀鋤きや水田裏作に用いられること多し。

からすぐち〔名〕袋の口を烏の「ばし」状に張り出しに作った大袋。

からすずね〔名〕脛骨部の名。

からすね〔名〕ふくらはぎ。

からすのごうり〔名〕からすうり。

からすのつぎほ〔名〕寄生木。烏が遅んだ種子で発生したと考えられた。烏の接ぎ穂。多くは古木の枝に寄生する。おおばやどりぎ。こがのやどりぎ。やどりぎ科。

からすのまくら〔名〕(1)黒曜石。(2)5月の節句にだんちくの葉に包み作る不等辺三角形の団子。(3)きからすうりの実。

からすのり〔名〕手足の握撃すること。

からすぶくろ〔名〕からすぐ

ちの大袋。

からすまくら〔名〕からすうり。「からすのごうり」に同じ。うり科の植物。

からすまつり〔名〕鳥の為に諸を煮て、供え祀る。こうすると春種諸を伏せた時鳥の害がないと。伏せ込みの前適宜に行い、祭日がいつか不聞。

からすみな〔名〕鱧の一種。殻の色黒く甘味があり、海浜の岩間に棲む。

からすめん〔名〕神楽に用いる口部は尖って鳥の嘴に似、日玉太く形相に威厳があり恐い面。

からっぱ〔名〕不妊症の牛。不妊女性にも用いる。「おだか」参照。

からど〔名〕身体。「からどん太か」。

からどおとし〔名〕土葬の際葬儀に先立ち屍を埋葬する儀式することあり。

からにし〔名〕鱧の一種。味辛い。「いぼにし」ともいう。小巻貝。

からにしき〔名〕きく科の草花。

からはい〔名〕木灰。「からへー・かるへー」ともいう。

がらみ〔名〕いぬぶどう。えびづる。のぶどう。やまぶどう。子供が好んで食べた。ぶどう科。「いぬがらみ」は食べられない。

がらむぎ〔名〕玄麦。収穫した麦。

からむすび〔名〕縄・紐の結び方。花結びにせず結びきりにする。

からめし〔名〕副食おかずを副えず飯だけを食すること。「からめし食う」。

からもん〔名〕積荷無しに走行する車・舟船。空車空船。「からもんの走りよる」。

がられる〔動〕叱られる。「がらるる」も同じ。「がる(叱る)」参照。

がらるる〔動〕叱られる。

からわら〔名〕藁そのもの。細工用はすぐりわら・打ちわらにして用いる。

かり〔名〕棒状のものの中途の隆起物。「かりがある・かりが高い・かりくそがでる」などと用いる。

がり〔名〕(1)小便壺の内壁に付着する垢の類。(2)物の細かく小さいさま。残り物・屑物の意。「がりばっかり残っちゃよる・がりでむよかお呉れ」。

かりー〔形〕軽い。「かりい・かるい・かるいー・かるか」も同じ。

かりかけ〔名〕稲の刈り方の一つ。湿田で5株を刈り3株の上に刈り掛けて乾燥した。これを両方から行ない乾燥した分を収穫し、次に5株を刈り1株の上に穂だけ載せて乾燥し収穫、残り1株は畦畔に刈り干した。

がりがたまり〔形〕人・動物・物が一か所に多数集まってい

るさま。「かりかたまる・がんがたまる」ともいう。
かりかたる〔形〕大勢次々と集まる。「かりかたうち悪かこつさすなよ」。
かりかり〔名〕煎餅。固い餅。小児語。
かりかりむき〔動〕根こそぎ皮をむく。「むききる」に同じ。
かりくそ〔名〕「かり」に溜るごみ垢。
がりこさぎ〔動〕残らずかき取る。
かりしばとり〔名〕神降しの行者又はこの行者の行う業。
かる〔助〕(1)から。「島かる来た」「宵かる朝まち」。(2)で。「舟かる来た」「刀かる斬った」「筆かる書えた」。
がる〔動〕叱る。「きむる」ともいう。強く叱るのを「がりとばす」という。〔接尾〕「うれしがる・可愛がる」。動詞格付与。
かるー〔動〕背負う。「からう・かるう」に同じ。
かるいー〔形〕軽い。「かるいーもんだな」。
かるう〔動〕負う。背負う。「子供かるう・稲かるう」。
かるこ〔名〕四角形に縄で縦横に編み四隅に縄紐を付けて2つの輪にし、棒をさして2人1組で担ぎ土石を運ぶ道具。「とっこ」参照。
かるへー〔名〕から灰。灰。草木灰。「へー・からへー・から

へー客」などと言ひ用いる。
かるる〔名〕不作。不漁。「海がかるる」。「かるる秋・かれ秋」。
かれー〔助数〕物の量・回数を表わす。「幾かれーかるうたか(何回背負い運んだか)」。「一かれー二かれー」。
かれーあきねー〔名〕行商。「いなかまわり」に同じ。
かれあき〔名・形〕稲の穂の悪い年又はその状況。枯秋。
かれあきねー〔名〕「かれーあきねー」に同じ。
かれのー〔名〕からい縄。物を背負い運ぶに用いる縄や紐の類。
かれほくち〔名〕枯れ火口。十分に枯れて燃え易くなった薪や柴・木っ葉。
かわ〔名〕井戸。「かー・かあ・くみかわ・つりかわ」などという。流れる川は「こうら(かわら・川原)」と呼び区別する。
がわ〔名〕(1)漁網などの両側部分名。(2)周囲。「がわはだまっちょれ」。(3)無尽講での「ひきおや」に対する一般加入者を「がわ」と言う。
かわがしわ〔名〕芙蓉。あおい科。川辺や堤防によく生える。吉州では「あかめがしわ」を単に「かしわ」と呼んだ。これと区別しての呼び名。
かわきり〔副〕物事の最初に手をつけ実行に入ること。「俺がかわきりやる」。

かわさ〔名〕卵焼き。かーさ。
 かわさやき〔名〕卵焼き。かあ
 さやき。
 かわしょうぶ〔名〕せきしよ
 う。さといも科。しょうぶに
 似て川辺・水湿地によく生え
 る。
 がわっぱ〔名〕河童。があっ
 ぱ。
 かわぬかみ〔名〕水の神・井戸
 の神・川の神・溜池の神を同
 様に「かわぬ（の・ん）かみ」
 という。毎月29日（或は随時）
 に一定の道筋を通して井戸・
 川・溜池等の間を往来される。
 その時、「ひょーひょー」と声
 はするが姿は見え、風なま
 ぐさく吹いて羽根をもって飛
 ばれるという。
 かわぬかみさー〔名〕「かわぬ
 かみ」に同じ。
 かわはしぎ〔名〕かんこのき。
 とうだいくき科。
 かわまつり〔名〕1月・5月・
 9月29日、各地域・地区毎単
 位で「かわの神」の祭り即ち
 水神祭をする。竹の箕子で小
 棚を作り、それに日・月形の
 栲を供え、4本の笹竹を立て
 これに吊す。栲を作った後の
 器に酒を入れて白酒を造り、
 竹の細長い筒の樽に入れ棚を
 吊した4本の竹に括りつけて
 水神に捧げ祀る。栲はすぐり
 藁を折曲げて苞を作り凹みに
 盛って供えるところもある。
 藁は水に浸した粳米を搗き碎
 き丸めて作る平だんど。この

時寺から求めてきた施餓鬼幡
 を4本の竹に吊すところもあ
 る。
 かわまつりだご〔名〕川祭り
 に供えるしとき餅。
 かわみ〔名〕鯨の背身の皮付き
 肉。
 かわら〔名〕(1)藁・麦稈屋根葺
 きに、棟を覆い仕上げの棟包
 みに細竹を編み箕子を作り被
 せる。この竹編み物を「かわ
 ら」と呼ぶ。又別に大竹を縦
 割りひしゃぎにして開き、棟
 の長さに合わせ奇数箇所、か
 わら押えにし葺き上げ完成す
 る。(2)船の底板名。
 かわらひしゃぎ〔名〕きささ
 げ。あずき。かわらひさぎ。
 のうぜんかずら科の植物名。
 かん〔名〕さん。「おっかん・か
 っかん（いずれもかあさ
 ん）」。「利かん」。
 がん〔名〕(1)蟹。がね。がに。
 かに。(2)庵。龕台（死者を墓
 地に送る葬儀用台）。(感)「が
 んのやまおけ」に同じ。
 かんうおんうおん〔名〕僧の
 用いる深鉢型の楽器（鐘）。
 がんが〔名〕赤ん坊。乳幼児。
 「びっちょ」に同じ。
 がんがさ〔名〕しっこいかさ。
 吹出物。腫れ物かさの症悪も
 の。
 がんがたまり〔形〕「がりがた
 まり」に同じ。
 かんからぼし〔形〕からから
 に乾燥すること。天日干しに
 するさま。

かんかん〔名〕缶。金属製容器。「くわんくわん」と発するのが元音。

がんぎ〔名〕崖。切り岸。石垣。「がんげ」に同じ。「がんぎ切り落す」「がんぎへえのぼる（……這い登る）」。

かんぎく〔名〕砂糖りんかけ煎餅菓子。

かんきき〔動〕酒の燗具合・水加減・湯加減・味加減等を調べる。

がんぎもんぎ〔副〕しゃにむに。むりやりに。手とり足とりひしぐこと。「がんぎもんぎしち連れて来た」。「がんぎいもんぎ」も同じ。

かんくい〔名〕木・竹の伐り株。小さい切株。桿杭。「かんきー。くわんくいー」ともいう。「がんくる」も。

かんくいばっち〔名〕農夫が耕作作業に用いる膝までの短ズボン（ばっち）。

がんくる〔名〕切り株。「かんくいー」に同じ。

かんげ〔名〕鬚毛。髪。

がんげ〔名〕崖。石段。石垣。刻み目。「がんぎ」に同じ。

かんこ〔名〕かんこ舟。3枚の板で造った小舟で3艘一緒にもやいして中の舟に帆を張り走る。元は因能島の舟で阿波で作っていたが、呼子辺りでも造るようになった小漁船。

かんど〔形〕果菜類の果の形の不具なもの。「かんどぎゅうり」などと用いる。「かんちよ

う」の類語。

かんころ〔名〕(1)蒟の切り干し。生のままと、蒸したものの2通りある。(2)大根人参の類を千切りにして干し上げたもの。生のものは「でーこん（大根）がんころ」・ゆでたものは「いで（ゆで）がんころ」という。

かんころめし〔名〕芋がんころを程よく炊き煉りあげ、これに少量の米や蒟や粟なども混ぜて炊き上げもする。

かんころもち〔名〕芋がんころを糯米や糯粟と共に蒸しあげ搗き合わせ餅にしたもの。芋かんころだけでもよい。

かんころんこ〔名〕かんころの粉。生干しの芋かんころを搗き碎き（はたいて）粉末状にしたもの。団子材料。

がんじからげ〔動〕物を縦横に括りしぼり上げる。「がんじがらめ」に同じ。

かんじょー〔名〕利益。利得。ました。「作るよりゃ買おたがかんじょー」。

がんじょー〔名〕蟹。「がんじょ」も同じ。

かんずる〔動〕数を数える。

がんせき〔名〕鳥賊の一種。「つしまめ」ともいう。

かんた〔名〕対者を罵る語。極道者。

かんだ〔名〕葛^{くわだ}。「へひりかんだ・かんだ巻き・木の毒（気の毒にかけて）あかんだ（木にとっての害は葛だ）」。

かんだい〔名〕棺台。「がんだい」に同じ。「かんでー・がんでー」と同じ。

かんだぐみ〔名〕つるぐみ。ぐみ科。

かんだまき〔動〕綱や縄の綯いや巻き方が大小やよじれで不揃いに仕上がったさま。大小のかずらのからみ合った巻きに似るさま。

かんだら〔動〕往昔鯨の捌き場で、加勢に事寄せ鰯肉を許可なく持ち去る行為をしていた。転じて他人の食物を取って食ひ食ったり、公然と持ち去るなどという。「かんだらしちきた」などと用いる。「かんだる」も同じ。

かんちょー〔名〕病弱者。細い。弱い。不具者。「こしょくれ・こしょくれもん（人・物）」「かんちょ」も同じ。

かんちよろ〔名〕粗製品。脆弱（者・物）。

がんつ〔名〕頭。かつぼ。かつぼう。「がんつう」も同じ。「がんつんこわか（頭がかた）」。

がんど〔名〕盗賊。悪者。追いはぎ。「がんどー」ともいう。

がんどーふ〔名〕がんどどき。料理品。

がんどよく〔名〕強欲。欲張り。

かんにち〔名〕月内にある定まり悪日。師走は巳の日が「がんにち」とか。

がんにょーかずら〔名〕葛。

くず。まくず。「かんねかずら」に同じ。

かんぬき〔名〕船の用材名。船梁の一種。舳の側から一番かんぬき・二番かんぬきなどと呼ぶ。

がんね〔動〕四肢五体のはたらし。「がんねんかなわんごつなつた」。

かんねかずら〔名〕葛。「がんにょーかずら・みつばかんだ」に同じ。

がんのみ〔名〕蟹の目。荳科の作物名。小豆に似るが粒細く長く色も茶色的。

がんのやまおけ〔感〕対者を罵る語。「こん畜生」位の意。自己が事を誤り失敗に終わる時、自らを罵るにも用う。

かんばん〔名〕船のだんの間に設けた船室の一種。

がっぷり〔名〕瓦の一種名。〔形〕がぷりと喰いつく様子を表わす。

がんべー〔名〕浅い水辺で底に手をついて遊泳すること。蟹の如く這う。

かんぼう〔名〕扶養。病人老人の看護。

がんぼし〔感〕叱られた時発する語。「がられががんぼし」。

かんまん〔動〕構わぬ。気にしない。差し支えない。「かんまんやりする（自己の思い通り無理も承知で）」。

かんむ〔動〕頭の上に載せる。吊した物に頭を打ち当てる。「かんむる・かんめた・かんめ

る」も同じ。
かんむけ〔名〕神迎え。「かみむけ・かむむけ」も同。「かんむけかぐら」。
かんむる〔動〕「かんむ」に同じ。
かんめくりかやす〔動〕下から頭で物を突き上げひっくり返す。転じて、物事を下位の者の手(力)で崩す。
かんめる〔動〕頭にのせる。いただく。冠る(かぶる)。「かんむる」に同。

き

きー〔動〕来い。来なさい。おいで。「こっちきー」。「き・きいー・きい」も同じ。小児・女子多く用いる。
きあげ〔名〕新酒の無水和・原酒。
きえー〔名〕気合い。気合う。気心の合致。
きおんさん〔名〕祇園社及びその祭祀。島内の祇園社は郷ノ浦元居八坂神社・渡良船越祇園宮・勝本聖母社境内祇園宮・箱崎大左右金比羅社境内祇園様・国分ぎおん社・池田伝記寺境内祇園社・印通寺竜峰院裏祇園社・石田本村素戔鳴神社祇園さん・志原平人末永家前祇園神社の9社がある。その内郷ノ浦元居八坂神社の祇園祭は、元文2年(1737)

以来262年間(平成11年・1999)の歴史を誇る「ぎおん山笠の昇き山祭り」が行われ今日に至っている(詳細は巻末資料(1))。

きかい〔名〕綿糸。
きかぜ〔名〕(1)蚤・虱の卵。(2)吝嗇な女性を指していることあり。
きかや〔名〕樹木。木や草の意であるが専ら樹木に用いる。「きかや傷めるな」。
きかんき〔形〕きかぬ気。強情。「きかんきの強か」「きかんきいなる」。或る事柄に凝固まる性質。
ききずらし〔動〕言い付けをなおざりにする。大事な事を聞きもらしする。心に留めて聞こうとしない。「いくら言うてむききずらしばっかりする」。「ききずらす」も同じ。
ききたぐるー〔動〕聞き尋ね廻る。「ききたぐるーちみてむわからじゃつた」。「ききたぐるる・たぐるー」も同じ。
ききのつたえ〔動〕伝え聞くままに。「ききのつたえの薬も買うち飲ませちみたがようならじゃつた」。
きける〔形〕ひどく身にこたえる。疲れる。「きけた」も同義に用いる。
きげんうしなう〔形〕気絶する。「きげんうしなうちょうしたつちゅうばつておずみつかしたちゅうばな」。
きげんそくなう〔形〕自分自



身気分悪くなる。相手の機嫌を悪くする。気持機嫌を悪くする。不機嫌になる。

きげんづくろう〔形〕一時的に気分悪く不安定状態に陥っていたものが正常の気分に戻る。気分を落着ける。

きこり〔名〕たかのは鯛。まはた。

きこりき〔形〕物又は精神の緊張状態。

きこん〔名〕気儘。気任せ。自由。「きこんに仕事した」。

ぎざぎざ〔名〕刻み目。刻み目に似たひだ。「きりきざ」に同じ。

きさなか〔形〕きたない。「きさない・きっさなか」も同じ。

きさなばら〔名〕多産な女性。「はらがきさなか」ともいう。

きさめ〔動〕木材・丸太の外皮を削り用材化の第一段階の作業をする。「さめよき・ちゅうのう」などの道具を用いる。「さむ・さめる」参照。

きし〔名〕崖。〔助〕だけ。限り。「これしき持たん・これしき無か」。

ぎしぎし〔副〕歩きさまの気どったさま。「ぎしぎしする男」。

きしめん〔名〕小麦粉の延べ団子を菱形に切ったもの。祇園祭や盆に作る。

ぎしゃぎしゃ〔副〕(1)威張った態度。「ぎすつく」参照。(2)老人の元気なかくしゃくたるさま。

きしゃごこ〔名〕小児が貝殻を持ってする遊び。「こ」参照。

ぎしゃつく〔動〕高慢な態度をとる。「ぎすつく」に同じ。

ぎしゃばる〔動〕頑張るに似る。「がしゃばる」に同じ。

ぎしゅむ〔動〕きしむ。軋む。

きじょーちゃん〔名〕「きばちょーちゃん」に同じ。

きしょく〔名〕気分。気味。気持。機嫌。「きしょくの良か(悪か)」。

きじり〔名〕囲爐裡の側の小板張り部。ここに鍋・釜や下方には薪等燃料の木などを置いた。

きじりばしら〔名〕きじりの側に立つ柱。

きじろー〔名〕白蟻。木材を食害する。

ぎす〔名〕「ぎそ」ともいう貝。海岸の岩石や寄り藻などに群棲する黒豆大の貝。食用となる馬蹄螺科。

きずき〔名〕楮の繊維ですいた和紙。

ぎすぎす〔副〕気どった歩き振り。「ぎしぎし」に同じ。

きすご〔名〕きす。魚名。

ぎすつく〔動〕肩をいからせ横柄に道歩き。高慢な態度。「ぎしゃぎしゃ」。

ぎすとー〔名〕治癒期の疱瘡のふた。蟻ぎすの「とう」に似た故の名と。

きずばう〔形〕かすり疵を受けること。

きせ〔名〕茶碗類の蓋。「おきせ

付き」。

きせり〔名〕きせる。煙管。

きせもん〔名〕衣服。着物。

ぎそ〔名〕鳶「ぎす」に同じ。

きたあなせ〔名〕北風に北西風の混り吹く風。性わる風。あなせは北西風。

きだこ〔名〕海蛇の一種で海中に棲み虎の体色に似て、三・四尺の体長。

きたごち〔名〕北東風。

ぎたつく〔形〕ぎちぎちして粘りあり。

きたどり〔名〕五位鷲。この鳥が啼いて通れば3日の内に北風が吹くとか。

きたのねのほし〔名〕北極星の呼名と。

きため〔名〕北方面。壱岐島の北部一帯の呼名。南方面を「みなみめ」。

ぎち〔名〕ぎちぎちした土。粘土質土。

きちーこつ〔形動〕残念な事。酷い事。きついこと。「きちい」も同じ。

きちげー〔名〕(1)きんみずひき。めなもみしゅうやぶからし 薺。ばら科の植物。薺(いのこ・いのし)・薺<薺>(やぶからし)。衣服・動物の体に着き易い草の実。(2)狂人。気の狂った人。

きちみた〔動〕来てみた。「きちみろ(①来て見ろ。②来てみろ・来るな、ひどい目に遭わすぞ)」。

きつい〔形〕(1)辛い。苦しい。ひどい。(2)生活困難。(3)強い。

(4)険しい。

きついー〔形〕ひどく。甚だ。悔しい。「きついー解らん奴(何とも物わがりの悪い人間)」。「きちいー」も同。

きついーこつ〔形動〕残念なこと。

きついーもん〔形動〕悔しく残念な。「こりが出けんちやきついーもん」。

きついーやつ〔形動〕ひどい奴。可哀そうな奴。情ない奴。

きつか〔形〕「きつい」に同じ。ひどい・悲しいこと(身内の不幸等)同情に値する程のことにも用いる。

きっかけ〔名〕本体からさしかけた小屋根。二重軒の下の軒。「さげ」。

きっかけづくり〔名〕麦稈屋根に瓦の庇を取り付けた家。本屋根の下に大きめの庇(きっかけ)を付けた家。

きつきつ〔副〕(1)忍び笑いの状況説明にそえる。(2)戸障子の江りが滑らかでないさま。(3)物が一杯いっぱいやとでゆとりのないさま。

きっさなか〔形〕きたない。悪質なやりくち。することがきたない。

きっさなげえーな〔形〕いかにもきたない。

きっさなもん〔形〕悪い奴。根性悪の者。期待や意に反した行為や対応を執った者への怒り罵りに発する語。

きっさね〔形〕汚い。悪い。

き

きっさねもん〔形〕横着者。
性なし者。

きっしょ〔名〕吉書。元旦の書
初め。諸帳簿・一定書式の事
項事柄の書き始めではないか
と言われている。文字そのも
のの書初めは正月二日。

きっすはっす〔副〕ぎりぎり
一杯の様。やっど。危機一髪。
間一髪。

ぎっちょ〔名〕左利き。左ぎっ
ちょ。

きつつり〔副〕きっちり。きつ
かり。丁度。きちんと。

ぎつつり〔名〕吃逆。しゃっく
り。

ぎつつりこーり〔副〕物事の
円滑に運ばないこと。

きつね〔名〕売春婦。売笑婦。
きつねのちゃぶくろ〔名〕こ
みかんそう。とうだいくさ科
の一年草。

ぎっぱ〔形〕立派。じっぱ。ぢ
っぱ。

ぎっはぎめん〔形〕厳格なこ
とにいう。「口じゃぎっはぎめ
んな事言うが……」。

きつぶ〔名〕税金納付通知書。
「きつぶん来つろうが……」。

きっぺきる〔副〕過不足なく丁
度よし。

きっぱね〔名〕あかの他人。「他
所のきっぱね」「どこんきっぱ
ねじゃり」。

きつらう〔動〕来たろう。来た
だろ。う。「きつろう」に同じ。

ぎとぎと〔形〕ぎらぎら。鋭く
光る。脂・油ぎったさま。

きどくいー〔形動〕奇特的な
に。

きどぐち〔名〕木戸口。屋敷へ
の入口。「かどぐち(門口)」に
同じ。

きどさき〔名〕木戸口を出たあ
たり。屋敷はずれ。「きどぐち」
に略同じ。

きどばた〔名〕木戸先。木戸
端。木戸口付近。木戸口周辺。

きなあれ〔動〕おいでなさい。
おいで。「きな一れ・きなは
れ・きなわれ」も同じ。

きによう〔名〕昨日。「きによ
ー・きによお」も同じ。

きぬた〔名〕上り框に据えた松
丸太材等の踏み台。上り台の
外、側面は打ち台としても利
用した。「きんた・砧」であ
る。

きねり〔名〕甘柿。きねり柿。

きのおって〔名〕昨日・一昨日
の意だが、1〜2日・2〜3
日前乃至はほんの数日前を漠
然と表わす場合に用いる事が
多い。「きのおっち・きのっ
ち・きののって」などという。

きのふれ〔名〕精神異常
(者)。気違い。「きふれ」に同
じ。

きのぼりなえ〔名〕苗代での
種蒔の播き方や育苗、苗の取
り方不良など根や葉先茎の不
揃い苗をいう。田植えに不都
合であるばかりでなく収穫に
も影響が大きい。水田稲作で
苗半作といわれる一理由にも
なる。

ぎば〔副〕水を一杯にたたえずぐそこに水際がある状況。

ぎばうつ〔形動〕容器の上限際まで水を一杯に溜めているさま。「ぎばぎば・ぎわぎわ」も同じ。碗・壺・池も。

きばちょーちん〔名〕騎馬提灯。鯨のひげの長い柄を付けた提灯。「きじょうちん」に同じ。

きび〔名〕(1)とうもろこし。(2)たかきび。(3)気味。「きびの悪か」。

きびしゃ〔名〕足のかかと。くびす。きびす。

きびしゃがかり〔名〕田畑の境界の崖の所有区分の決め方。崖に腰を下して「きびしゃ」のかかる範囲内は上の地主が所有権を行使できるとした。

きびしょ〔名〕(1)きゅうす。茶だし。(2)「きびしゃ」と同じにも用いた。

きびのわるか〔形動〕気味が悪い。

きびる〔動〕くびる。括る。束ねる。結ぶ。

きびれる〔動〕くびれる。

きほうやほー〔副〕とるものとりあえず。「ひほうやほー」も同じ。

きみる〔名〕ひのきばやどりぎ(桧葉宿り木)。海藻の「みる(海松)」に似た形態からの名。樹上の「みる」。「きみいーる」ともいう。

きむ〔動〕叱る。「そげんきむるな」。「きむる」に同じ。

きむる〔動〕叱りつける。いじめる。がる。ひどい目に合わせる。

きめきめ〔副〕きめ細やかなさま。「きめきめしちよっち美しか」。

きめざけ〔名〕結婚の話が決まると、酒や肴を相手方の家に贈り届けた。これをいう。「さだめのおみき・ひにちがため・かため・やくじょうざけ」と言い、この日正式に婚礼の日取りもきめた。

きも〔名〕心。意志。精神。覚悟。心臓。「きもん、きれちよる・細か」。

きもがきれる〔形動〕決断力がある。思い切りがよい。「きもんきる人」。

きもんふとか〔形動〕大胆。「きもんふとか人間・人」。

きもはらやく〔形動〕甚だしく気心配する。「聞え合うじゃろうかち思おち、きもはらやく(いえーた)」。

きもん〔名〕着物。衣服全般。「きもんようと着ちよかつさんと、いんま風邪ひくぞ」。

きもんきあざ〔名〕首の背部分にあるほくろ。このほくろのある人は良い着物を多く着れる生まれつきと。

きもんきる〔形動〕「きもがきれる」に同じ。

きやーぎやーに〔形動〕これはこれは沢山に。これは又沢山に。贈り物を受ける折謝辞に添えて用いる。





きやーころぶ〔動〕ころぶ。
転倒する。ばったり倒れころぶ。つまりき転ぶ。「けえーころぶ」に同じ。

きやーなか〔形動〕粗暴。腕白。荒い。「げえーなか」に同じ。

ぎやくし〔名〕逆修。生前に準備しておく自己の墓碑。

きやぐらしか〔形動〕気分もやもやとして興奮気味、落ちつかないさま。「やぐらしか(精神いらいら)」参照。

ぎゃんぎゃん〔副〕理非を弁えず罵り騒ぐさま。

きゅー〔名〕今日。「きゅーび」も同。〔動〕来る。来るだろう。「きゅーだい(来るだろう)」。

きゅーながし〔名〕灸すえの後でするささやかな馳走会。

きゅーび〔名〕今日。この頃。最近。「きょーび」も同じ。

ぎゅーらしか〔形〕ぎょうぎょうしく騒がしい。騒々しい。「ぎゅーらしい・ぎょーらしか」も同じ。

ぎょーさんに〔形〕沢山に。

きょーじん〔名〕力持ち。知恵者。人並みはずれた人。口達者な人。すぐれ者。「きょうじん」も同じ。

ぎょーせん〔名〕水飴。

きょーでー〔名〕(1)兄弟姉妹。(2)鏡台。「きょうでえ」も同じ。

ぎょーてん〔名〕雷鳴。

きょーび〔名〕「きゅー・きゅー

ーび・きょうび」に同じ。

ぎょーらしか〔形〕「ぎゅーらしか」に同じ。騒々しい。さわがしい。

きよごも〔名〕浄菰。神事に神前に敷く「まこも」や「わら」を編んだ菰。「やまこも」ともいう。

きよたきよた〔副〕忙しさにばたばたと動き廻るさま。

きらず〔名〕おから。とうふのかす。

きらん〔動〕着らん。着ない。

ぎり〔助〕と。「きりい・ぎり」とに同じ。「行くぎり・言わんぎりい」「早う戻らんぎり家で心配さす」。

きりえで〔名〕釣り用切り餌。魚肉類を切り釣の餌とする。

きりか〔名〕講中・谷・地区内の祭りや行事に各家から集める金銭・品物。「きりかもん」ともいう。

きりきざ〔名〕刻み目。刻み目に似たひだ。「きりきざ入る」。「ぎざぎざ」に同じ。

きりきし〔名〕切り岸。崖。

きりしたねんじ〔名〕キリスト教信者。転じて平身低頭する人。「あん人あきりしたねんじんごつさす」。形容詞的。

きりたてぐる〔名〕畑の土を深く掘りはね上げること。畑の低い方(こじり)に土は常に下がっていくので、畑の周辺に下った土をまとめて畑の中央部へ上げる作業。一方高い岸側(そね)部の土は鉄で

「はねぐる」にする。くる(くろ・周辺)に下った土を元に戻す方法として、きりたてぐる・はねぐるがある。壱岐の畑は大小にかかわらず中央部が高く中高の形をしていた。

きりだめ〔名〕野菜ほか料理材料品を切って入れる籠・ざるの別名。めご・さなごともいう。

きりと〔助〕きり。限り。「きり」。

きりどへー〔名〕土に「すさ」を混ぜ練り上げたものを土塀として積み上げ外面を刀様の道具で切り乍ら体裁を整え仕上げた部厚(40～50㎝)の塀(土壁)。「すさ」には藁を多用。牛舎の壁などに供した。

きりのーそー〔名〕のこぎりぞめ。魚名。「のこぎり・のこぶか」参照。「きりのーそー・きりのうそう」も同じ。

きりはた〔名〕伐り拓いた畑。切り替え畑。「きれはた」参照。

きりばん〔名〕切り板。まないた。

きりまつり〔名〕諸所の神の名を借り「おかけみ」として鯨肉を貰いに来たので、鯨組では一定の支給法を決め給与した。後には一定額の金銭で給与に対応した。鯨組用語。

きりもち〔名〕生餅を薄く平らに切り白砂糖などをかけ茶請けとした。

きりもちきったごつ〔形〕厳

格な人柄。物事が秩序整然と終始するさま。

きりゅうしゃ〔名〕他地域からその地区に新規に転入して来て住むことになった人。「きりゅう・きりゅうのひと」ともいう。

きる〔動〕(1)する。為す。「喧嘩きる・酔狂きる」(2)魚類を塩蔵する。「塩きる」。鯖を船中で塩蔵し、需要地に運送することを「鯖きる」という。「ちぎり」参照。(助動)できる。「死にきる」。

きれ〔助数〕田・畑の枚数を表わす。「一きれ・二きれ……」。「さわ」に同じ。(2)刺身・たくあん等の枚数。

きれーきさん〔形〕清浄に。潔白に。「きれーきさんなもん」。

きれずただいえず〔副〕切れず断たれず。連綿と。連続的に。物事が継続される状態。「きれずただいえずよう勉強しちよかなでけんよ」。

きれだおし〔名〕狭い小さな田・畑を寄せ広一枚ものにする。「こぎれ」を「おおぎれ」にすること。「きれだおす・きれだおしする」などという。

きれて〔名〕敏腕家。辣腕家。やりて。

きれと〔形〕(1)両端太く中細りにくびれた状態。(2)切れめ。

きれはた〔名〕ほんはたに対する小切れの畑。本畑を荒すと



切州として税を低減した。山を開いた者は無税。

きろぎろ〔副〕目を鋭くして見廻す様。

きろめく〔動〕まめまめしく立ち働く。一生懸命に働くこと。

ぎわうつ〔形〕水が容器・池・水田いっぱい溢れんばかりにぎわぎわ湛えられるさま。「ぎばぎば」に同じ。

ぎわぎわ〔形〕「ぎばぎば」に同じ。

きわむる〔動〕厳選すること。見究める。極めて入念にする。「夏あ食物飲み物きわむるこつがでーじ（大事）たい」。

ぎをんぎた〔名〕祇園祭前後に吹く北風。「ぎおんぎた」も同じ。

ぎをんやま〔名〕郷ノ浦八坂神社旧暦6月15日の祭礼に曳かれる山笠・山鉦をいう。現在では新暦7月第4日曜日とその前日に山見せ・前夜祭・当日祭に昇き山・曳き山として祇園祭が行われている。1737年（元文2年）に起り262年間の歴史を持つ（平成11年・1999年現在）。

きんかん〔名〕はげ頭。やかん（薬罐）ともいう。

ぎんぎし〔名〕真黒で滑らかすべすべの小石。

きんぎょそう〔名〕ひめひおうぎすいせん。あやめ科の草花。ごまのはぐさの「きんぎょそう」とは全くの別。

きんくーず〔名〕くさがめ。首

筋に黄金色の模様をもつ。「へひりくーず・へくーず」は体臭よりくる呼び名。

きんくなか〔名〕(1)人と人の交際情愛。「きんくなかんよか」。(2)仲の悪いこと。「あん人とは長うきんくなか」。

ぎんごり〔副〕丸まる肥えている。完全に・しっかりと、との意味も。

きんしろ〔名〕機織りの織り余りの縦糸を切り捨てたもの。これらの糸をつないで織った布が「きんしろおり」。

きんす〔名〕「きじり」の下の薪置場。農家のかまどや台所付近の薪置場もいう。「きんそ・きんそー」も同じ。

きんた〔名〕砧。「きぬた」参照。

きんたまうぐいす〔名〕魚の鰓付近を「うぐいす」と呼ぶ。この形に似た罌丸の吊り部の名に用いる。

きんたまをとし〔名〕男子41歳の厄祓い。「たまおとし」ともいう。

ぎんだらめえー〔形〕きりきり舞い。きりきり舞をさせられる程の多忙さ。

きんちく〔名〕ほうらい竹。たけ科。

きんちゃく〔名〕漁業きんちゃく網。(形動)口のきちんと締る物一般の表現に用いる。口の締まる袋・財布。

きんづち〔名〕砧用の槌。

きんづめ〔名〕小木片。こけら

(柿)。

きんとー〔形〕貸借・収支等厳格緊密なさま。「ごきんとーに有難う・きんとーな事申しましち」。「きんとーきんみつ」ともいう。

きんとーきんみつ〔形〕「きんとー」に同じ。

きんときだこ〔名〕金時風。上部半円形、下部一周り小さい半楕円形を組み合わせた竹ひごに和紙を貼り、坂田金時の赤ら顔を描き風とする。「おんだこ」の中間部を省き組み合わせた風。

きんのくすり〔名〕金の薬。珍宝。珍重するものの形容にも用いる。

きんりょー〔名〕秤。ちきり。重さ秤。

く

くー〔名〕甲。背。甲羅。

くーくー〔形動〕苦しみ堪えるさま。「年^{とし}かる年^{とし}中くーくー言うち働^{はたら}くばっかりで」。

くーず〔名〕亀。「きんくーず・へひりくーず・くーづ」など。

くーずる〔動〕昂ずる。病が悪化する。慢性化する。

ぐーた〔形動〕無精者。だらしない形。意気地なし。「ぐーたれ・ぐーたづく・ぐーたをなご・ぐうた・ぐた」。

ぐーたら〔形動〕なまけ者の気

力なし。「ぐーたれ」に同じ。
ぐーてーぼす〔動〕骨折り損。馬鹿働。

くーに〔副〕ぼんやり。ぼーっと。無考えに。うっかり。気抜け。放心状。

ぐーひきどり〔名〕鶏の鳴声の後「くー」と声を引くもの。この種の鶏の飼育を忌む。「ぐーひく」ともいう。

くーや〔名〕(1)紺屋。染色業者。「くーやぬ白袴」。(2)宮含。神社社務所や補助建物。「ごくーや」ともいう。

ぐーらしか〔形〕うっとうしい。蒸し暑い。もの苦しい。「生えかぶさ^{かぶ}ち^ちぐー^ぐら^らし^しか^か」。

ぐーらん〔名〕周辺。周囲。周り近辺。「ぐーらん^{らん}に^にや^や花^{はな}ど^どむ植^はゆ^ゆう^うだ^だい^い」。

くーり〔名〕氷。「いたがね」も同じ。「夕^{ゆふ}は寒^{さむ}か^かつ^つた^たと^とん^んく^くー^ーの^の張^はつ^つち^ちよ^よる^るば^ばい^い」。「くーりの如^{ごと}か^かた^たい^い」。

ぐいーぐいー〔副〕女・子供の泣き様。

くいーづき〔名〕食い杯。常用食器。

くいーまぜる〔名〕葬儀の際忌^い負^ふいの者^{もの}が一般者と^と同^{おな}じ座席^{ざせき}で食^く事をとること。これは忌むべきこととされる。「くいーまぜ(食い混ぜ)」ともいう。

くいーもさぼる〔動〕食欲不振で食^くい進^{すす}まない。「くいーもさぼ^ぼち^ち一^{いっ}向^{きやう}食^{しょく}い^いは^はせん^{せん}」。





「くいーむさぼる」も同じ。
 ぐいち〔形〕一緒くた。「何もか
 むぐいちしちゃでけん」。
 くうえ〔動〕食え。食べよ。「く
 よ」も同じ。
 くうず〔名〕亀。せんねんくう
 ず。くさがめ。「くーず」に同
 じ。
 くうや〔名〕宮舎。神社の付属
 建物。
 くえる〔動〕崩れる。「岸のくえ
 る」。
 くおっくおー〔名〕蟻の一種。
 貫。
 くおっくおーどり〔名〕ぼっ
 ぽーどり。かつこどり。ふく
 ろう。「むぎうませどり」とも
 いう。
 くおる〔動〕食べている。食い
 おる。「くをる」も同じ。
 くかり〔動〕締め括り。「小便袋
 めくかりの無うなった」しま
 り。
 くぎぬきぐさ〔名〕はくちよ
 うげ。あかね科。葉をしごき
 とり、もんで体に刺さった刺
 の上につけておくと吸いだす
 と。
 くぎねぶつ〔名〕念仏の一種。
 くぐしりこむ〔動〕もぐり込
 む。かがみこむ。
 くぐしる〔動〕もぐる。かが
 む。
 くぐむ〔動〕こごむ。かがむ。
 腰を曲げる。曲り込む。
 くこーびんつけ〔名〕貝に入
 った青色のびんつけ油。びん
 つけの一種。

くさ〔名〕病氣一般をいう。
 くさいえ〔助〕さ。よ。だ
 よ。「是がお前の下駄くさい
 え」。「くさえ」も同。
 くさえ〔助〕するのさの「さ」
 に当る語で、「くさな・くさい
 え」も同じ。
 くさかいきもつつかん〔形〕そ
 ぶりさえしない。隠しきって
 知らぬ振り通す。
 くさがら〔名〕田畑を犁き返し
 て集まった雑草類。草取りし
 て出た雑草。
 くさきばな〔名〕蔓珠沙華の
 花。
 くさきりばんぶ〔名〕竹の端
 に麻糸を付け、糸の先に小石
 を巻き草で結び竹を振ると、
 草が切れて巻き付けた小石を
 前方遠く飛ばせる仕掛け。「ば
 んぶ・ばんぼう」の一種。
 くさげえー〔名〕草飼い。牛馬
 を路傍に曳き出して草飼いす
 ること。
 くさげえーさん〔名〕軍越え
 神という軍神と伝えられ、宍
 岐住吉神社の摂社として住
 吉・深江・志原と三社ある。
 「旧暦4月28日神官騎乗して、
 三社巡拝の神事を行なえり。
 民間信仰としては牛馬神とし
 て、この日麦の初穂を供え、
 牛の病氣平癒退散や繁殖を祈
 願し、願成就には麦を持って
 詣でる」とある。「軍越神
 事」。
 くさごえしんじ〔名〕三摂社
 を巡拝する神事をいう（前項



参照)。巡拝三社では騎乗の神官が、「ひきだま・ひきひきだま・ひきひきひきだま・ひきひきひきだま・ひきひきだま」と鬨の声を挙げ、異敵降伏・国家安泰を祈願した。祭日は1月17日・5月28日・10月27日の3回。

くさしゅり〔動〕作物の雑草を取り種々手入れをすること。草修理。

くさたて〔名〕春秋季節変化の節目に草木と共に諸病も芽を出す。病気のことを「くさ」、病気にかかることを「くさふるう」という。

くさな〔助〕「くさ・くさいえ」に同。

くさなべ〔名〕なまぐさ鍋。精進鍋に対する語。

くさばらい〔名〕精進あげ(お祓い)。死者49日目を忌明と言ひ死者は仏となる。この法要の後に「くさなべ(魚料理)」でもてなす。これを「くさばらい」という。これで身も心も普段の生活諸式に戻る。

くさび〔名〕にしきべらの類。べら科の魚の名。

くさふるう〔名〕病気にかかる。

くさぼこ〔名〕叢(くさむら)。草の簇生したところ。

くさみ〔名〕(1)臭い。(2)香の物。香りの野菜他。

くさむ〔動〕臭いを嗅ぐ。

くさらかす〔動〕腐敗させる。「くさりかす」も同じ。

くさる〔助動〕する。してしまふ。「しくさる」「頼みもせん事しくさる」卑語的用法。(動)化膿する。「指のくさる・足のくさる」。

くされ〔助動〕(1)しろ。せろ。「くさる」の命令形。(動)も同じ。「根性くされ・くされもん(者)・くっされもん」。

くされもん〔名〕横着者。極道者。

くさいえ〔名〕草生え。作物の生立。

くじ〔名〕苦辞苦情。不平文句。争事。

ぐじぐじ〔形〕(1)腹が緩慢に痛むさま。「ぐじる」に同じ。「ぐじぐじ痛む」。(2)快く応諾せず色々小言を言うさま。

くじくる〔動〕他人の言行をとがめだてして理のない文句不平を言う。苦辞繰り返す言う。

くじなむ〔動〕仕事を嫌って互いに譲り合うこと。

くしのむね〔名〕(1)かつやま。黒糖を加え棒状に焼き上げた菓子。(2)櫛の歯に対し背部の名。

くしゃく〔名〕柄杓。ひしゃく。

ぐしゃぐしゃ〔副〕(1)物事の錯雑したさま。(2)小言をいろいろ言うさま。

くじゅうくたれえ〔名〕九十九盞。生児は生後99日間盞の湯を使わせ清拭するものとされてきた。大人と同じ風呂に入れるのは百日目からと。



くじりばり〔名〕茅屋根を葺く
のには屋根裏からの「はり」
を用いず、外から葺き稗を押
し分け、締め縄を通して葺き
上がる。普通の屋根葺きには
先端を片削にした丸竹製「は
り」を用いて刺し通し屋根材
に締結する。

くじる〔動〕ほじくりいらう。
ほじる。穴をほじくる。

ぐじる〔動〕緩慢に腹が痛む。

くず〔名〕亀。くーず。くう
ず。

くずな〔名〕あま鯛。いとよ
り。魚名。

くすぬる〔動〕盗む。ごまかし
て盗る。くすねる。

くずま〔名〕ひざら貝。「せくず
ま・くろくずま・しまくず
ま」。海岸の瀬に棲み殻色いろ
いろ。

くずれ〔名〕盲僧琵琶について
の語り物又はその琵琶師。

くせぬわるか〔名〕先天的悪
癖。「手ぐせ・足ぐせぬわる
か」。癖が悪か。

くせる〔形〕ねじれ。ひねり。
曲り。そる。「板がくせる・材
料がくせる」。

ぐぜる〔動〕ぐじぐじ言う。む
ずかる。苦情言う。「なしこえ
んぐぜるとじゃろうか（なぜ
こんなに……）幼児等」。

くそ〔接頭〕強意・軽侮の意に
用いる。「くそきばり・くそば
たらき・くそたれ・くそくら
え・くそくよ・くそんぼつに
もならん」等々。ほつ・発。

くそうり〔名〕からすうり。う
り科。

くそぎり〔名〕くそ義理。立て
るに及ばぬ程度の義理だて。

くそたか〔名〕鷹の一種。うし
のくそたか。

くそたれきげん〔形動〕自暴
自棄やけくそ気味の状態。

くそにぎり〔名〕手相の一名
称。手のひらの筋のうち掌の
下方から横向きに発した線が
人差指と中指の間に流入した
もの。貧相だとか。「ぜんにぎ
り」は吉相とか。

くそぶくろ〔名〕鶏ほか鳥類の
砂囊。

ぐた〔形動〕「ぐーた・ぐうた」
に同。

くだくだ〔形〕萎えしおれたさ
ま。くたくたの状態。

ぐたぐた〔形〕(1)物の煮えたぎ
るさま。(2)くたくたに萎えし
おれるさま。

くだしゃかる〔動〕くださる
の意の丁寧語。「くだしおかる
（おかれる）」。

くたづく〔動〕眠る。卑語。

くたふれ〔名〕病気。「くたふ
れの出し寝込ました」。ひどい
くたびれ。

くだる〔動〕在部から町部・浦
部へ出向く（売買・諸用で）。
「ようおくだり（下り）まし
た」。

くたわく〔動〕寝る。就床す
る。罵り気味「もうくたわく
とか」。くたばると関わる語
か。「くときる・寝くさる」な

どともいう。

くち〔名〕言葉。くちい。口。
〔動〕食うて。食って。「飯くち
かる来る（食事してから来ま
す）」。

くちあい〔名〕仏事供養時振舞
用の精進料理、酒食の肴。「く
ちいえー・くちえー」と発す
ること多し。

くちあき〔名〕漁期の解禁。「あ
わび・ひじき・めのはのくち
あき」。「くちあけ」とも用い
る。

くちい〔名〕言葉。「くち」に同
じ。

くちいえー〔名〕「くちあい」
に同じ。

くちえー〔名〕「くちあい」に
同じ。

くちかくる〔動〕言葉で相手を
罵り・からかい挑発する。喧
嘩の元になる。

くちきき〔名〕証人調べ。

くちぎり〔動〕病氣中食い忌み
する事。

くちけえーぬぐーちよる
〔形〕すまして素知らぬ顔の態
度とる。「いつの事取る又取っ
ち口やけえー拭うちよる」。
「くちやけえぬぐうちよる・ぬ
ぐちよる」も同じ。

くちさび〔名〕唇。口。「くち
さびとる（物欲しげに唇を動か
す）」。「くちさぶ・くちさぶ
とる」も同じ。

くちずもう〔動〕言葉言論でや
り合ったり・からかったりす
る言葉遊び。「口相撲とる」と

もいう。

くちなわ〔名〕蛇。青大将。く
ろた。「くちのう・くちのー」
も同じ。

くちなわし〔動〕口直し。苦い
薬・まずい味に合った後の、
後口直し。

くちのー〔名〕「くちなわ」に
同じ。

くちびでー〔名〕くちび鯛。た
ばみ。魚の名。鯛の一種とさ
れる。

くちへーじ〔動〕口答え。口返
事。抗弁する。「くちへーじす
るな」。

くちべほー〔形〕お追従の巧な
こと。

くちめ〔名〕蚤や蚊や虫刺され
の跡。

くちやくさってむ〔副〕口は
腐っても。決して言わない・
しない。

ぐちゃりぐちゃり〔形〕物の
ねやす（重く粘る）さま。

くちよごし〔形〕口汚し。僅か
しかない物・余りおいしくな
い飲食物をすすめる儀礼語。
「口汚しするしこむなか・口よ
ごしですが良かったら……」。

ぐつぐつ〔副〕家計の行詰るさ
ま。困窮するさま。「一生ぐつ
ぐつで通る」。

ぐつぐつびんぼー〔形〕平素
諸事ぜかぜかのみ言う者は貧
乏するとの意。

くっされ〔形動〕「くされ」に
同じ。

ぐっしゃり〔形動〕打ちしおれ



るさま。「話聞いちぐつしゃり」。閉口落胆。

くつしょくれ〔名〕くしゃみ。
くさめ。

くっそー〔感〕こんちくしょう。ちきしょう。

ぐつちよ〔名〕競争。競べ。遊びの中の競争ごっこ。「走り・泳ぎ・跳びぐつちよ」。「ぐつちよしゅうや」。「走りぐら（競べ）しゅう」。

ぐつつと〔副〕(1)かすかに接触する感。(2)魚の餌をひく感じ。「ごつつと」も略同じ。

ぐつつり〔副〕決して。絶対に。「ぶつつり」ともいう。

くで〔名〕屑。屑物。「野菜のくで」。

くでらむなか〔副〕愚にもつかぬ。

くでろ〔名〕屑。くで。「くでら」ともいう。

くど〔名〕竈。かまど。火口を二か所にしたものを二つ穴、三か所にしたものを三つ穴の「くど」と呼んだ。

くときる〔動〕寝る。「くたわる・くときるる」も同じ。

くねぶ〔名〕くねんぼ。九年母蜜柑。香橙。みかん科。

くねる〔動〕不平言う。言いがかりをつけ言張る。「ぐねる・ごねる」。

ぐねる〔動〕「くねる・ごねる」に同。

くのとん〔名〕未明。夜明け前。

ぐのみ〔動〕うのみ。丸のみ。

くによる〔名〕未明。「くのよるかる起けち働く」「くのより・くのとん」に同じ。

くびきれうま〔名〕妖怪の一つ。正体不詳と。「くびきれむま」ともいう。

くびり〔名〕割り付けられた括り合せの田畑土地。共有者の地・字名で「〇〇くびり」と呼んだ。

くびりいえー〔名〕地割りの折公平を期する為、上田・中田・下田を組み合わせ数人宛の共有にして与えた。この組合せを「くびりいえー・えー」。

くぶき〔名〕縄で編んだ吠様の物。牛馬に背負わせ運ぶのに用いた。

くへー〔名〕折れたものに添え(当て)をする添木。「くへーゆう(結う)」と言い、手足樹木枝に当て木し結ぶ。

くぼみ〔名〕墓穴。「くぼみいいく(墓穴掘りに行く)」という。

くぼる〔形〕くぼむ。へこむ。

くま〔名〕(1)ふくらみ。「餅のくまぬ髷か」。(2)供米。お供え物。お供米。

くまばち〔名〕熊ん蜂。すずめ蜂。

くみ〔名〕講中。さか。組。隣組組織。

くみがしら〔名〕講頭。組頭。隣組組織の責任者。呼び名色いろ。

くみかわ〔名〕井戸。柄杓で汲

む浅井戸。深井戸は「つりかわ・つるかわ」。

くみひき〔名〕嫁や婿養子の実家の親の死には、その家も地区講中の悔み(弔問)を受け、葬儀にはその一族に随伴して喪家に悔みに行く。即ち講組引き連れ立っての行為行動。

くみやま〔名〕組山。旧藩時代山林は大組に分割管理させた。燃料を採るだけで個人の所有権はなかった。年に日を決め薪を取った。薪の他に鋤床位は了解を得てもらっていたと。

くもくそ〔動〕後も見ず逃げるように立ち去ること。

くやす〔動〕破壊する。崩す。こわす。

くゆる〔動〕崩れる。「うっくゆる」。

くよ〔動〕食よ。食え。食べよ。

くようさま〔名〕供養様。諸所の路傍・辻に石塔類を並べ祭壇を作り諸霊を祀った。庚申供養・虫供養・ねずみ供養等々の総称。「いみ」の口には念仏組みにより念仏を唱える習わしもあった。

くら〔名〕(1)瓜・南瓜・西瓜・野菜等の栽培に土を高く盛って種苗を植えて育てた。(2)牛馬に荷を背負わす具名鞍の名から背負わせた荷の回数を示す語とした。〔動〕競べの「くら」。競争。競走。「押しくら・ねらみっくら・走りくら・舟くら(舟ぐら・舟ぐろ)」。「ぐ

ら・ぐっちょ」。

くらがい〔名〕楕円形の角付きや載せ蓋式の弁当用飯櫃。

くらかけ〔名〕家屋新築の当夜「大黒柱」から「をとしの柱」に渡した梁の上に、牛の鞍を架け、味噌桶もそこに据える。鞍は物をうせ込み、味噌桶は動かない縁起となると。

くらぎ〔名〕くらげ。海月。

くらすみ〔名〕暗がり。暗隅み。

くらする〔動〕打つ。叩く。

くらっと〔副〕事態が急変するさま。「天気がくらっと変わった」。

ぐらっと〔副〕「くらっと」に同じ。

くらは〔名〕麦類の穂にでる黒穂病。黒かびの麦穂。黒穂病の果穂。

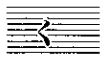
くり〔接頭〕「くり掛くる・くり干す・くり混ざる・くりこぼす」。「水は頭くんだりくり掛けられた」。(助数)相撲の番数や勝負の度数。

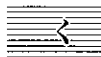
ぐり〔名〕壺。筒。缶。「茶ぐり」。

ぐりいし〔名〕石垣を積む石の安定のため内側に入れ込む大小の石。周りに入れる石か。「ぐるいし」とも。

くりえー〔名〕繰り合い。やりくり。やりくり算段。「くりいえー」も同。

くりかく〔動〕上から掛ける(綱・水)。ひっかける。「くりかくる」も同じ。





くりくり〔副〕(1)皮のよくむくれるさま。(2)むくれた様にくるりとしたさま。「目のくりくりしちよる」。

ぐりぐり〔名〕(1)腫物の丸く腫れ上ったさま。(2)りんば腺の腫れがでるさま。「ぐりぐりのでけた(出来た)」。(動) 水に溺れること。「ぐりぐりいうた」。「ぐるぐる」ともいう。

ぐりぐりずき〔動〕畑の犁き方に外側から鋤き始め螺旋状にぐるぐる廻り進んで中央部で鋤き終わる。

ぐりぐりゆう〔動〕水に溺れること。

くりこ〔名〕むさしあぶみ。「おしゃかのて」ともいう。山中に自生するさといも科の植物。

くりこみ〔名〕蟹の漁法。海中に潜る折、鉈を抱いて沈み、浮揚の際は滑車で繰り上げてもらう法。

くりっと〔副〕くりくりっと。「くりくり」に同じ。

ぐりっと〔副〕全局。一円に。ぐるり。「ぐりっと取り巻く・ぐりっと見ち廻った」。「ぐるっと」に同じ。

くりづり〔名〕鰯釣り漁法で、「たてぐり」の一種。餌はどじょうで手釣。

くりへえーばし〔名〕栗の小枝の皮を頭部は木皮を残して削る。正月の諸儀式にこの箸を用いる。12膳を単位とし、閏月年には13膳を準備した。「くりえーばし(繰り合い

箸)」。

くる〔名〕くる(畦畔)。くるはし(田畑の外周。〔動〕(1)行く。「おしが方へくるけん(お前の家へ行くから)」。(2)穴をえぐる。穴あける。(3)汲む。汲み出す。「あかくる(井底のあかを汲みだす・小便する)」。(4)刈く。巻く。たぐる。「綱くる」。(接尾)〔例〕混ぜくる・こねくる・ぬばくる(延ばす)・ぬりくる・なすくる(塗りつける)・すべくる(滑る)・なめくる・すっぽくくる・とっぱくる・とっぱすくる(ほら吹)。

くるあげ〔動〕畑の周辺に下った耕土を鋤で、かき上げ・はね上げて戻す作業。「くるこね・くるまぐり」と言う似た作業もあり完全に努める。

くるぶく〔動〕前かがみに下向く。うつむく。「くるぶいーち歩むな」。

くるまき〔名〕畑に種を播く時、最初に周囲に一畝ぐるりと播き、後は小口に畝を立て播き進む。この播種法を「くるまき」という。

ぐるめ〔副〕周囲を含めて全体。総て。〔動〕巡る。「田ぐるめ(田見廻り)」。

ぐるり〔名〕(1)周囲。周り。(2)牛を繋ぐ時の角輪を「ぐるり」という。(3)人が首に巻くネクタイ。

くれ〔名〕塊。土塊。(助数)材木の荒伐採量を表わす。

くれー〔名〕「くれ」に同じ。〔形〕黒い。暗い。「くれー豆・室」。(副)位。ぐらい。「こんくれー(これ位)」「今ぐれーで良か」。

くれーんに〔副〕知らぬ間に。いつとはなしに。「くれーんにのうなった(いつの間にか無くなった)」「くれーんに目えかからん事なった、あくせーなもんだあな」。

くれうち〔名〕塊打ち。長柄木竹製槌の農具名。(動)塊打ちを用いて畑の耕土を打ち砕く作業。

くれがやし(動)畑の作物収穫後を鋤くことを「あらばつけすき」、次にその畑を犁き返し耕すことを「くれがやし(塊返し)」・「くれがやしする」という。「くれがえし」も同。

〔名〕同じ事を掘り返し繰り返す事。

くれなはれ(動)(1)呉れなさい。ください。(2)やりなさい。あげなさい。「お呉れち言いおるもん、くれなはれな」。

くれはし〔名〕端。はしくれ。先つちよ。田畑山林・土地の端っこ。

くれはて〔名〕果て。遥かな先。「あしたあこんくれはてまじゃ行きゃきらん」。

くれんに〔副〕「くれーんに」に同じ。

くろ〔名〕「くる」に同じ。畦畔。(接頭)甚だ。甚だしく。(強意に)「くろたけり(甚しく

うめく)・くろにくみ(甚しく憎む)する」。

くろいげ〔名〕刺の鋭い「げずの木」。くすどいげ。柞。いいぎり科の植物。「そののいげ・そないげ・すないげ・すだいげ」の名がある。「三の段するかけずの木に登るか(何れも至難)」。

くろいを〔名〕黒色鯛に似た魚の名。「くろ」とも呼び、めじな科めじな。

くろうち〔名〕大きな厚身の料理庖丁。魚料理・肉料理荒切り庖丁。

くろぎ〔名〕柾。まさき。垣根に多用。

くろくち〔名〕(1)ちしゃだい。ひしゃだい。魚の名。(2)二枚貝の一種。くじゃく貝とも呼ばれる。

くろくちのー〔名〕「くろのー・くちのー」と呼ばれる長大な黒色の蛇。「くちなわ・くろた」ともいう。

くろげ〔名〕打身内出血の後の黒味色を帯びる。「転おじくろげん入った」。

くろご〔名〕死産児を「くろご・けが」という。「赤ちゃんにけがんでくるぎりい、親さんにもけがんでくる」と言って心配されてきた。

くろこがれ〔名〕熱烈にあこがれる。

くろた〔名〕「くろのー」に同じ。

くろたけり(動)病気に苦しみ



うなる。

くろなり〔名〕夕暮。夕方。「くろなりがけ・くろなりがた」も同じ。

くろにくみ〔動〕ひどく憎む。憎切る。

くろのー〔名〕「くちのー」に同じ。「くろの」ともいう。長大蛇。

くろばいゑ〔名〕5月頃の曇りや雨の日に吹く南風。「くろはえ」も同じ。

くろはるかき〔動〕殊の外に立腹する。

くろふじょー〔名〕死者による家族の受ける穢れ。漁師の間では出漁に気を使う。「あかふじょー」程ではない。

くろほいゑ〔動〕怒り散らすさまを罵り気味にいう。くろ吠え。やたぼえ。やたはるかき。犬の吠え狂うさまも。

くろみな〔名〕黒色の殻の蜷。くまのこがい。

ぐわいぐわい〔副〕(1)群生。群存状態。(2)かやがや騒ぎまわるさま。

くわいり〔名〕「くわはじめ」参照。

ぐわいりょー〔名〕医者の手術。「外療(外科療法)しち、ようならしたつちゅう」。

くわぐみ〔名〕桑の実。

くわくわら〔名〕さるとりいばら。拔蕒。此の葉を用いて、米の粉・小麦粉・蕎麦の粉の蒸し餅子を包む。いずれも「くわくわらだご」という。

くわしゃ〔名〕葬儀の列の^解立ち時や行列の途中で、魔の突風が雨と共に吹き来て屍をとることがあると信じられていたと。これをいう。「くわしゃ」とは何ものか。「火車」では。

くわたいきん〔名〕損失を与えた事柄に対する料料。「てんやく」などに課せられてきた。

くわたち〔副〕唯それ丈の目的で。わざわざ。「くわたち行たつばな」。

くわだち〔動〕企てる。計画する。

ぐわちめく〔形〕ぐわいぐわいと、はずむおしゃべり。女性のおしゃべり様。

くわつけ〔名〕火っ気。火の跡の温り。

くわつちよ〔名〕小鳥名。(1)「つぐみ」説と(2)「しろはら」説と2説がありいずれが正論か不詳と。「くわつちよ」と「しろはら」は同じとも聞く。

くわつちよわな〔名〕くわつちよを捕えるわな。此の小鳥がこのわなにかかると、次の様になる。〔形〕「くわつちよわなにかかつたようなもん・ただれくわつちよわな」となる。物事が支離滅裂して手のつけられない状況になると。こんな事の例えに。

くわつみてぼ〔名〕桑の葉摘み竹籠。

くわてー〔名〕報償なしの働き。報い。「楽したくわてーに、よう働かにゃ」。

くわはじめ〔名〕旧暦正月2日、農具の使い初め儀式。野菜畑（なぶたけ）に出て鍬で土を2〜3鍬掘り取り、跡に「むしやき」する。その項参照。

ぐわびろか〔形〕だだっ広い。

くわへん〔名〕神前に供える花木類。榊・松・竹・梅・桃・桜・柴・小柴花類を用いるが地域差がある。神前に小柴を仏前に椿を、神前に榊を仏前墓前に小柴を供える等々。

くわん〔名〕(1)わかめ・あらめ類の海藻の量を数えるに用いる。「ほん」に当る。(2)人の名に付して呼ぶ卑称。「刹くわん・良くわん」など。「しゅう・しゅう」に同じ。「良しゅう」。

くわんじもと〔名〕勧進元。盆綱引き・宮角力の発起者側。「よりき」に対する語。

ぐわんじり〔形動〕心から笑顔をつくる様。「ぐわんじりと笑わした」。

くわんそー〔名〕やかん。土瓶。「くわんす」ともいう。

くわんぞーな〔名〕やぶくわんぞう。千葉萱草。おにくわんぞう。ゆり科。

くわんでー〔名〕葬儀に棺を乗せ墓地へ運ぶ台。棺台。故人の近親者が昇ぐのと、講中・組から人がでて昇ぐのと慣習差がある。「がん台」に同。

くわんふり〔名〕「むぎやき」に同じ。「しょうやかか」と

もいう。魚名。

くをる〔動〕食いおる。食べている。「ようくをるばい(良く食ってるぞ)」。

ぐんし〔名〕策略家。「あん人あぐんしじゃけん油断なされん」。

くんしょうぐさ〔名〕やえむぐら。あかね科草。

くんそー〔名〕亀。「くーず・くうず」に同じ。「くんそーん這えをる」。

くんだり〔名〕下り。下り坂。「のんぼりくんだり(登(上)り下り)」。

くんだりこーべー〔名〕下り勾配。

け

げ〔助〕に。「見げ行く・米^貴えげ行く・踊しげいきをる」。

けー〔動〕(1)来い。「けー早よけー」。(2)発語。「けーころぶ・けーくりころぶ・けーなゆる・けーくりなえた・けー消ゆる(えた)」。(3)名(1)貝。(2)女性器。(3)籠。〔疑〕か。かい。「そりゃ何けー・いつ来るけー」。

げーか〔形〕生意気な。荒々しか。「げーな・げーなか」に同じ。

けーかたづく〔動〕片付く。意識を持ってきっちり始末つける。

けーがらしか〔形〕はがゆい。

け

邪魔くさい。うるさい。面倒くさい。もどかしい。

けーくり〔形〕「けー」に同じ。発語・強意的に用いる。

けーくりくやしか〔形動〕くやしく情けない。いかにもくやしい。

けーくりなゆる〔形動〕疲れ果てる。疲れてぐったりになる。

けーくりもどる〔動〕戻る。帰る。「けーくりもどれ」は命令形。

けーげー〔副〕片方から。一方から。

けーげーに〔副〕一方から順々に。「けーげーに食うちしもうた」。

けーけつよーに〔形動〕内心の動揺を外部に現わさず平気を装うさま。

けーご〔名〕蚕。「けーごじょー」に同じ。

けーごじょー〔名〕お蚕さん。

けーごろし〔名〕牛は農家にとり特に大事に扱われ飼育してきた。また年老いた牛は使役せず、飼ひ殺しといって終生牛舎で飼うこともあった。これを「かいごろし・けーごろし・けえーごろし」という。また「孫可愛がるよりや牛飼え」の「デーモン」も残っている程。

けーころぶ〔動〕転ぶ。つまづき転ぶ。

けーさし〔動〕(1)餅を搗き上げる前、餅をまとめ、臼や杵と

の切り離しの為湯を使い乍ら一杵毎に一人が手であしらい一人が搗き仕上げをいう。(2)物事をとりなしまとめる働きもいう。「けーざし・けーさしする・けえさし上手」。(1)(2)共難しい業。

けーさっぱり〔形〕すっきりさっぱり。心残りなくあつさり。

けーさね〔形動〕逆様。逆に。裏返し。

けーしね〔形動〕「けーさね・けしね」に同じ。反対に。

けーしょく〔名〕景色。見晴し。「けいしょく」も同じ。「けーしょくの良か(風光明媚だ)」。

げーずいげ〔名〕からたちの刺。

げーずのき〔名〕からたちの木。みかん科。

けーすぼる〔形〕肩身狭くちぢこまる。

げーずやぼ〔名〕くすどいげ。いいぎそ科の荒い木。

けーそ〔名〕畳作り用麻糸。けーそー。

けーた〔名〕代かき終わり田植準備完了の水田。〔動〕(1)書いた。描いた。(2)掻いた。(3)辟土してかきならす。

けーたからう〔形〕田植準備完了の水田をその口の内に植え残すこと。「うえたからう・けえーたからう・けーたはう」などという。

けーたて〔動〕田の畦塗りに、

畦の内側水面下の基礎部に土を掻き寄せる作業。特に棚田で水漏りを防ぐ大事な作業。この後水面下部・上部・畦上内側を鍬を用いしっかりと塗りあげる。「畦塗り」前段の重要作業。

けーち〔動〕書いて。「けーちうえちよく（書いて置きます）」。搔いて。「けーちおくれ（搔いて下さい）」。

げーった〔動〕元に戻った。修業・稽古を途中放棄する。「げえーった・げーらした・げーる」も同じ。

けーつみ〔名〕糸を績ぐと同時に撚りをかけながら巻き取る道具名。「けえーつみ」も同じ。〔動〕「けーつむ・けーつみする・けえーつむ」も同じ。

けーつんばり〔名〕突っ張り支柱。〔動〕けーつんばりかう（突っ張り支柱をする）。「けえーつんばる」。

けーつんもり〔形〕小さくつましやかにする。「けーつんまり」も同じ。

けーでこぎ〔動〕徒歩磯・島磯に小舟で人を漕ぎ渡すこと。磯とは潮干狩。

けーでする〔名・動〕多くは悪い企ての仲をもつ時用いる。「けーでこぎ」との関連があるのではとも聞くと。

けーどー〔名〕街道。比較的広い道路。「けーどーばた・ぶち（道路添い）」。

げーな〔形〕(1)何々のような。

「こげーな・そげーな」。(2)横着な・生意気な。「げーな坊・げーなもん・げーな奴」。「げーにある・げーか」。

げーなか〔形〕腕白な。元気ありな。「げーなか事する・げーか・ぎゃーなか・うんなか」に同じ。

けーなぶる〔形〕なぶり者にする。笑い者にする。「けなぶる・けーしらかす」も同じ。

けーなり〔名〕義理の間柄。

けーなりおや〔名〕義父母。

げーに〔形〕全く。のように。「そげーに・どげーに」。「げに」も同じ。

げーにかなう〔動〕実力相応に。「げーにかなうちよる（相応の技能・体に合っている）」。

げーにかなわん〔動〕実力不相応な。「げーにかなわん事するな（するもんじゃなか）」。

けーはく〔名〕おべっか。機嫌とり。

けーふく〔動〕(1)貝吹く。転じて子供が泣き叫ぶさま。「やんぼしのけーふくごつ泣きをする」。(2)徳利に口付けて呑むさま。ほら貝を吹く様から。

けーぶらっと〔形〕仕事・行動をぶらり感覚でするさま。

けーまつる〔動〕蹴つまづく。

けーもつれる〔動〕蹴つまづく。「けもつるる・けもつれる」も同じ。

けーもどる〔動〕帰る。さっさと戻る。

け

けーもはれも〔形〕後にも先にも。他に何も無い。「けにもはれにも」。

けーもん〔名〕買物。「けーもんに行たち来た」。「けーもね」も同じ。

げーもん〔名〕生意気者。「げーなかもん」の省略型。

げーらぶく〔名〕蛙の卵の入った寒天質の袋。「げーりぶく」ともいう。

けーらん〔名〕皮を薄くし餡を入れ平たく紅で着色した団子。菓子の名。

けーり〔名〕毛虫。「けーりのへーおる(毛虫が這っている)」。

げーり〔名〕おたまじゃくし。

けーりうつ〔動〕牛が寝ながら体をもがきまろぶさま。かえりうちもがく。

げーる〔動〕前に戻る。状況が初めの状態に戻る。事が中途半端に終わる。「げーらした」。「げーった」参照。

けーわら〔名〕飼原。牛を繋いで飼育できる草生地・野原。

げいじ〔名〕障害児(者)。「ふくじゅ」ともいう。体の弱い子・ひきつけを起こす児・てんかん・啞など近親結婚で生まれると言われてきた。

けいしょく〔名〕景色。「けーしょく」に同じ。

けえ〔名・動・疑〕「けー・けえー」に同じ。

けえころぶ〔動〕転ぶ。「けーころぶ」に同じ。

けえしらかす〔形〕馬鹿にする。「けーしらかす・けーなぶる」に同じ。

けえなぶる〔形〕なぶり者にする。

けえはい〔動〕早く来い。早よ来い。

けかし〔形〕農作物・漁獲物不作不漁。「せじょう」の逆。

けかち〔形〕飢饉。「けかし」に同じ。

けかちどし〔名〕飢饉不作不良の年。

けかちをなご〔名〕あばずれ女。すれっからし女。仕様のない女。

けぎ〔名〕平常着の衣服。「けぎきもん」ともいう。

けぎょー〔名〕準備方法。準備計画。

けきり〔名〕物事のけじめ。後始末。

けきりよか〔形〕けじめ・始末がよい。「けきりのよか」も同じ。

けけしる〔形動〕なま半可に知る。「けけじる・けすらばう」も同じ。

げさく〔形動〕下品な。下作下品な。

けさやく〔副〕今朝^{けさ}中。「けさやく筋ね廻った」。

けしき〔形〕動作荒々しく周囲に当り散らすさま。「けしきする・けしきづく・けしきけんまく」等と用いる。

げじき〔名〕(1)げじげじ。虫の名。(2)「とつとら・とつつき

むし・きちげーなどと呼ぶ衣服類にとり付く植物種子の一般名でもある。

けしきけんまく〔形〕「けしき」に同義なるも意を強め、「けしき」と「けんまく」の合成語。

けしけし〔名〕けんけん遊び。

けしね〔形〕促成で初物の意。「けしね野菜」「けしねしょよのみ」。

けじょ〔名〕凶作年には地主に小作料を軽減してもらい、不足分は労力の提供で補う。これを「けじょ」と。

けじょー〔名〕不作。「けかし」に同じ。「けじょどし・けじょーどし（不作年）」同じ。

けしらかす〔形〕「けえしらかす」に同じ。

げす〔名〕どん尻。最後尾。「げそ・げっそ」も同じ。〔形動〕心いやしいこと。「げす根性」。

げずのき〔名〕くすどいげ。幹・枝に鋭い刺をもつ。「すだいげ・すないげ」などともいう。

げずやぼ〔名〕「げずのき」に同じ。

けすらばう〔形〕(1)かすり傷程度の疵。(2)なま知り。「ちいっとけすらばうちよるちち、こしゃくな事言うな」。

げそ〔名〕「げす」に同じ。

けたくそ〔名〕縁起。「けてくそ」に同じ。

けたけた〔形〕忙しさにばたばたと動き廻るさま。「けたけたしをる・けたけたするな」。「き

よたきよた・じたばた」の意。けたつく〔形〕忙しくばたばたする。

けちゅうらしか〔動〕荒々しく落着きのない動作。

けちれん〔名〕死者初めての盆行事。新盆行事に受ける仏への見舞。「しんもー・けちれー・初盆」。

けっくう〔副〕やっど。「けっく」に同じ。

けっく〔副〕結句に。遂に。やっど。「けっくにでけた」。「けっこー」にとも同じ。

けっけもっけ〔形〕息を切らしているさま。「けっけもっけ言うち走っち来た」。

けっこーじん〔名〕お人好し。

げっそ〔名〕「げす」に同じ。

けっちょかまする〔動〕鶏の交尾するさま。「はねきする」に同じ。

げつつ〔名〕「げす」に同じ。

けっとー〔名〕毛布。毛套。

けつまぐる〔動〕「けつまづく」に同じ。つまづく。「けえつまぐる」ともいう。

けてくそ〔名〕縁起。「まん・ふ」に同じ。「けてくそん悪か」。

けでんまでん〔形〕あわてるさま。「けでんまでんしち行た」。

げどー〔感〕怒罵の声。この野郎。こん畜生。他人・犬猫等を罵る声。

げどーさり〔感〕「げどー・げどー」に同じ。外道。「こんげ

どーさり」[あんげどーさりや
どけうせたけー]。

けない [名] 家内。妻。

けなく [動] 嘆く。悲しむ。

けなげなつ [副] 対象を卑下し
たさまに用いる。「けなげなつ
俺ばあしろうた」。

けなぶる [動] 馬鹿扱いする。
侮る。ばかにする。「けーなぶ
る」に同じ。

げなもん [副] 様なもの。そげ
なもん。

けに [助] から。「行くけに。着
るけに」。「けん」「しえに・せ
に」に同じ。

けにもはれにも [副] よくも
あしくも。後にも先にも。「け
ーもはれーも」。

けね [名] 家族・家族一同。「け
ねぬ多しおし切れん (家族
多く養いきれん)」。

けねうち [名] 家族構成員。「け
ねうちのこてえたしよーんい
らんせわ (家族内の問題に他
人の不要のお節介)」。

けねじゅー [名] 「けね」に同
じ。家内中。

けねやね [名] 「けね」に同
じ。家内屋内。

けねやんご [名] 「けねやね」
に同じ。

けはん [名] 脚絆。きやはん。

けびき [名] 毛艶。色艶。「こん
牛のけびきの良さ」。

けぶく [名] 毛。「けぶく立つ・
けぶくまみれる」。草木のひげ
根。も。

けぶり [名] 煙。「けぶりの出よ

る」。

けぶрикаえし [名] 囲炉裡の
ある部屋は天井を張らず、煙
を排出する為に竹編みの箕の
子状の煙出しをとりつけた。
これを「けぶрикаえし」と。

けまつる [動] つまづく。け
もつる。

けもつる [動] つまづく。

けものみち [名] 狸の通る道を
「たぬきみち」、いたちの通る
程の更に狭い道を「ゆたてみ
ち」、曲りくねった細道を「く
ろのうみち」、まとめて「どめ
んみち」と呼んだ。その他湿
地内の道を「いっしゃくしん
でん」とか「じるみち」、悪路
は「ごしょみち」などと呼ん
できた。

げや [名] 家屋の壁を一方に小
屋根を取り付け建増した部分。
本体付きの小屋で物入れ・作
業場などに多用。「さしかけ・
さしをろし・さげ」。

げやぬいく [動] 初めの予定が
欠減して不足を来たし、予定
が狂うこと。「人数分しかうち
よつたばって、別い (予定外
に) お客の有っち、げやぬい
くごつなつた (準備の品に不
足を生じ困つた)」。

けん [助] 「けに」に同じ。「か
ら・すえに・せに・しえに」
などと同じ。[名] (1) 方位。方
向。「翼のけんかる吹いち来
をる」。(2) 捕鯨具の名。両刃で
2尺5寸 (75~76) 程の刃に
2間 (350~360) 程の桎の長



柄の包丁。その先端に「つきだし」という綱を付け、「はざし」が鯨体に柄が向う向きになるように突き立て綱を引いて肉を切る。これを幾度も繰返し鯨を仕止めるに用いた。
(3)料理のけん。

けんかいぶく〔名〕とらふぐ。

けんきいも〔名〕甘藷の一種。外皮の色により白げんき・赤げんきとあり、肉がたく貯蔵によい。げんき、とも。

けんきんさむれー〔名〕旧藩時代彦千両の献金をすれば誰でも十分に取立てられた。然し一般からはこんな渾名で軽侮されたとか。

けんくわきる〔動〕喧嘩する。

けんくわとーじょー〔名〕喧嘩の意を強めて言う時用いる。「けんくわとーじょーきる」と。「けんくわきる」に同じ。

けんくわぬきりわかれ〔名〕不仲になった儘親交に復れない状況。

けんけん〔名〕片足跳び遊。けしけし。

けんざわ〔名〕間竿。「そこみ」に使用する長柄の鮑採り鉾竿。

けんじ〔名〕「けんずいー(献瑞)」。

けんずいー〔名〕家屋新築祝い。に米・麦・酒・肴・魚類・金品を贈ることを献瑞するという。「けんずいー米・けんじ・けんじー・けんずえー・けんじびろう(披露)」等と用いる。

けんずいーびらき〔名〕献瑞披露。新築祝いやどうぶれめーに受けた祝いは翌日、親戚講中他当日加勢人すべてに披露し、改めてお礼の馳走を振舞う習わしである。「けんずいーびらき・けんずいーびろう・けんぜいびらき」という。

けんぞ〔助〕だからこそ。だからして。「俺じゃけんぞだまっちこらえちよとじゃ」。

けんたい〔形〕当然の事のように。平然として。横柄に。自分勝手な態度で。

けんたいぶる〔動〕威張る。横柄ぶる。

けんち〔名〕鰯などの小魚を量る一斗柄。「けんちます」ともいい正味一斗の量り柄。「かい(1)」を参照。

けんちゃん〔名〕野菜類を細かく切り豆腐を加え、葛粉を入れて煮込んだ料理。けんちん汁か。

けんで〔助〕からして。けんぞ。「面白かけんで見げ行たちみ」。

けんと〔名〕縁起。運。「けてくそ」に同じ。「けんとぬ(の)良か・悪か」。

けんど〔助〕けれど。けれども。「高かったけんど品あ良か」。

けんびき〔名〕肩胛骨あたりの腱・筋肉。「けんびきの痛か」。

けんもく〔名〕拳骨。握り拳。

こ

こ

こ〔名〕ごっこ。遊び。闘戯。競争。(1)使用する品・物により「ずぼっこ」「まてこ」「むくろこ」等。(2)使用する品物の個数により「一けこ・二けこ・五けこ」等など。

ご〔名〕豆腐の固まりのもとになる液を「にがり」を入れ寄せたもの。「ごが多か」「ご汁炊く」など用う。

こー〔接尾〕同等又は以下の者を呼ぶ名の後につけ「義こー・松こー・崎こー」等と。くん(君)。公。〔名〕講。お講。お講盛り。〔感〕「もし」「ちよつと」「あなた」などと軽く人に呼び掛けるときなど「こーあなた・こーちよつと」と用いることがある。「こーこー」も。

ごー〔名〕(1)旧暦正月4・5日宮又は寺で「しよめん」と一緒に書いてもらう護符。「ごー」は「の一ば」の藁に巻き付け荒神棚に供えて置き、田植えの時出して田の神を祀り豊作祈願する。(2)仏具。「しべ」を立てる台の名。三方の形で小さく台部に四角錐台の脚を付け台には小穴を開けて「しべぐし」を立てる。

ごーかき〔名〕ごー札を書いてもらうこと。

ごーかさま〔名〕おやかた様。

ごーかじょ〔名〕便所。

ごーかべ〔名〕家の壁の作り方塗り方。柱の外に「えつりをかき」柱を壁の中に塗り込める法。往時は専らこの方法がとられたと。

こーぎょー〔名〕講経。古書に「宍岐の国俗符章開眼を講経といいならわせり」と記されている。現在行われている各家の「まぶりかき」に同じか。「ふなこーぎょー」も参照。

こーけ〔名〕合飲木。まめ科の樹木。「こうけ」も同じ。

こーけがみ〔名〕飯の後に茶を飲まぬと、「こーけがみ」がついて、いくら食っても食い足らぬ様になると。「ひだるご」と同じとか。

こーさ〔名〕(1)卵焼き。(2)小麦粉に卵や砂糖を入れて練り焼きあげたもの。「こーさ」「こーさやき」「なべやき」などと呼ぶ。

こーさづけ〔名〕鍋に油をひき、米・麦・小麦の粉に卵を加えて練り広げて焼き上げたもの。「こーさ焼き」。そのまま食べるが、砂糖や餡を巻き込んでも食べる。盆にはこれに類したものを作り仏前にも供えるところもある。「ふなやき」ともいう。

ごーし〔接尾・副〕毎に。「年ごーし」「移りごーし(交替・交互に)」。

こーじばなだい〔名〕麴の色

の様に黄色味を帯びた鯛。瀬
淵に棲む。

こーしゃく〔形動〕(1)生意気。
「こーしゃく」に同じ。(2)言い
訳。「こーしゃくあいらん」弁
解ごとすること。

こーしょー〔名〕(1)香辛料。蕃
椒。とうがらし。(2)こーしょ
ーねんばの略。赤とんぼの類。
しょうじょうとんぼ。

こーじょー〔名〕蝶・蛾の幼
虫。地中に棲み作物の根を、
夜は地上に出て茎や葉を食害
する。根虫の類。

こーじょーとがめ〔名〕口上
咎め。他人の物の言い方を捉
え咎めだてする。

こーしょーねんば〔名〕蜻蛉
の翅体の赤色のもの。「こしょ
うねんば」。

こーじんさー〔名〕お荒神様。
家祭神。

こーじんさま〔名〕お荒神様
の祭り日。旧暦11月27日がお
出船、正月28日がお入船。お
入船の日、ご神体の石を「ゆ
り」に入れ供物をあげ、子供
達が各戸を持ち廻る。家々で
は供物や賽銭をあげ、最後に
これで子供達は共同飲食会を
する。荒神様は此の日子供
の神様で、この日子供を叱ると
親でも兄弟姉妹でも神の祟り
を受けるといい「子供天下の
日」という。勝本浦内一区宛
3社あり独特行事と。

こーしんさんばな〔名〕げん
のしょうこ。「こうしんさんば

な」に同じ。

こーすごーす〔副〕ごしごし
(こする)。ぐうぐう(眠る)。

こーせん〔名〕麦こがし。「こ
ーばし」。

こーだい〔名〕本鯛にならぬ寸
落鯛。

こーちはきでーたごつ〔形
動〕噛んで吐き出した様に物
事を明細に条理を尽くして説
明すること。「こーちはきでー
た如言うち聞かせにゃ解ら
ん」。

こーぢゅー〔名〕講中。近隣数
戸単位に作る互助組織(十数
戸もあり得る)。葬式はじめ祝
事・お講盛り等諸行事に隣保
互助活動執行の基本単位。「く
み・さか・たに」に同じ。「こ
ううち・くみうち・ほんこう
じゅう・つんこうじゅう」な
ど行事内容・関連に応じ機能
し合って現在に至る。

こーじゅーのなりこ〔名〕講
中のはしくれ。講中内での自
己の存在を卑下謙遜して用い
ることがある。

こーじゅーばか〔名〕講中の
人達の手で造られた仮墓。是
は後日自分の手で作りかえる
ところもあり、それを一七日
に、七七日に、一年忌にする
などいろいろ。然し一般的に
は本墓を切るまでそのままで
通すのが多い。

こーぢゅーより〔名〕講中で
集まってする相談会。葬儀執
行の打合せ配役の割振り確認



の他諸行事の為の集会。

こーちょー〔名〕講中の世話役。当番制順番制が多い。講長。まとめ役。

ごーずえー〔名〕梅・桃の細長く伸びた新枝(格)2本を揃え、先を少し割り「ごー(護符)」を挟み神に供えるほか、門口・家の軒・牛屋の入口などに挿す。

こーでらしか〔形動〕憶却がる。

こーと〔名〕香辛料薬味。「こーとー」も同じ。

ごーどーさがし〔動〕乱雑に掘り返すようにして物探すること。

ごーな〔名〕貝殻を棲みかのやどかり。

こーね〔名〕畑の中の高い部分。殆どの畑は中高に造成されていた。

こーばし〔名〕麦こがしの粉。裸麦を煎って粉にひき、湯で練ったり、飯に振りかけまぶして食べる。「こーせん・はったい粉」などとも呼ぶ。

こーばしみみ〔名〕耳垢が粉状で乾燥したもの。「じたみみ(湿り耳)」。

こーばしめし〔名〕(1)こーばしに塩味をつけ飯代りにする。(2)少量の飯にまぶして食べる。農民は米食できつ苦しい食生活の中で働いていた。

ごーばつ〔動〕器物類を乱暴に取扱うこと。ひどく人を打撃するにも用う。「ごーばつに

扱う・ごーばつな目に遭わする」。

こーばりつく〔動〕膠り着く。粘いものがくっついて干乾びたさま。

こーばる〔動〕(1)敷かいものが硬化する。(2)こびり着く。「こーばりつく」に同じ。(3)高張る。高値を付ける。

こーぶし〔名〕はますげ。香附子。

こーぼーさーねんじ〔名〕弘法大師像を祀り加持祈禱などする人。

こーぼし〔名〕はますげ。かやつりぐさ科の草本。塊根が生薬名香附子。

こーみょーへんじょー〔名〕殊更の説明や愚着せがましい口上を述べることを「こうみょうへんじょう言う」。

こーむく〔名〕鯢類の表皮に似て平らな体形の小型魚。皮はぎ。皮をはいて食用に料理する。

こーもぬがさ〔名〕こうもりがさ。

こーやごー〔名〕染色業者の間で用いる護符。「ごー(護符)」の一種。

ごーより〔名〕郷(舩)全体の会合。郷中寄り。

こーら〔名〕(1)流れ川。川。川原。「こうら」も同じ。(2)焙烙。

ごーら〔名〕田・畑に付属する藪地。

こーらがたつ〔形〕焙烙を火

にかけると立つ火気。この後に炒る物を入れる。「こうらだつ」ともいう。

こーらき〔名〕蛇のとぐる巻き。「こーらき作ちよる」。

こーらぬたつ〔形〕「こーらがたつ」に同じ。

こーらぬはゆる〔形〕長年携って事の巧者となること。「こーらぬをゆる」も同じ。

こーらまき〔名〕「こーらき」に同じ。

こーりかき〔名〕垢離即ち水浴びして身心を清め垢を取り除く。祇園祭に雨が降ると、若衆数十人が裸になり先ず国津意加美社に詣り、折り返し港に到り泳ぎ渡って八幡崎八幡宮に参り最後に元居八坂神社に参詣祈願する。この間の行動中は一切無言。この祈願行事を「こーりかき」といい、雨忽ちに晴れになると。

ごーりごーさつ〔副〕残りものの全部。

こーりょー〔名〕家屋の屋根材。棟木。屋根組の最長最大の用材。

こーりょく〔名〕報償。「こーりょくもらう・こーりょくが足らん」。

こーるい〔名〕柑橘類の一般的呼び名。

ごーんだ〔名〕郷ノ浦。島内8浦の一。

こいか〔形〕(1)単に仲良い間柄。家同士・親戚同士のつき合いの良いことにも用いる。

(2)男女相思相愛の間柄。

こいゑつ〔代〕こやつ。こいつ。此奴。

こいかつ〔名〕愛人。情人。恋人。「こいかつの居る(持つちよる)」。

こいまや〔名〕牛舎。まや。

こう〔名〕井戸。「かわ(井戸)」に同。

こうけのき〔名〕ねむの木。まめ科。単に「こうけ」ともいう。

こうしんさんばな〔名〕げんのしょうこ。ふうろそう科。「みこしぐさ」。

こうてー〔名〕小謡。謡曲の小謡が自然変化して、結婚式のほか諸祝賀の席で謡い継がれてきた。新築上棟式には大工棟梁が独特の節廻して謡う。

こうねがり〔名〕小畝刈り。稲を1列毎に刈り相互に立てかけ合って乾燥させる。湿田で行い「たながり」ともいう。2列刈り・5列刈りもした。

こうばる〔動〕高値をつける。「こーばる」(3)に同じ。

こうら〔名〕小丸竹を棟の長さに切り揃え、しゅろ縄で編み麦稈屋根の棟葺き、仕上げの棟包みに用いる竹すだれ。

こえかくる〔動〕声をかけ呼び戻す。死の直前生死の境をさ迷う人のいよいよ最期に耳に口を当てその人の名を強く呼ぶ行為。

こえくぶき〔名〕堆肥などの肥料を入れて運ぶかます。肥料



吠。

こえたつる〔動〕牛舎内の厩肥を集積して堆肥を作る作業で舎内掃除も兼ねる。「肥立て・肥立てする」も同。

こえに〔形動〕こんなに。「こえん」。

こえふつるる〔形〕肥えてふっくらしているさま。「こえふつれる」も同。

こえまつ〔名〕松の木が老木となり油脂がたっぷりできた部分。燃やすと油煙をあげ燃える。却って松根油も採取した時代があった。

こえん〔形動〕こんなに。「こえん太か」。

こがいえ〔名〕桶。「こがえ・こがいえ」も同じ。同類に「てこがえ」。

こがしこ〔副〕これだけ。「こがっしゃ」も同じ。

こかす〔動〕転がす。倒す。犯す。

こがたん〔名〕小刀。こがたな。

こがやす〔動〕家屋・舟船の古いものを改造して住まい・乗れるよう手を加えること。「家を・舟をこがやす」。

こがり〔名〕釜底に焦げついた飯。建築祝・どいぶれ等の祝事のこがりは加勢人中の担当者で配分し合う。

こがりつく〔動〕こげつく。こがれる。

こがれ〔名〕焦飯。「こがり」に同じ。

ごかんにち〔名〕元旦からの5日間。旧暦正月元旦頃は寒気厳しき続く。

こぎあげで〜こく〔名〕稲扱きを終わってしまった直後にする大黒祝い。各家中心に行う収穫祭。「よせで〜こく(寄せ大黒)」に対する語。

ごきちれー〔名〕慣例。ご吉礼(例)。「あぬ家のごきちれーちゅーたい」。

こぎづり〔名〕鯛釣り漁法の一。種。「まぎり・又はこぎの一」ともいう。

ごきどくいー〔副〕よくぞ。よくもまあ。ご奇特にも。めずらしくも。

こぎの一〔名〕船を走らせながら釣る。縄漁法の一。種。「こぎづり」に同じ。

こぎる〔動〕(1)値切る。値段を下げさせるよう仕向ける。(2)大きな物を小さく幾つにも切る。

こぎをじま〔名〕機^{ハタ}の^{ハタ}の目には、2本宛の糸を通すのが普通であるが、緻密にするために3本通して織ることがある。斯うして織った縞を「こぎをじま」という。

ごきんとー〔副〕借りた金品を約束をたがえずきちんと返して堅いこと。

こく〔動〕(1)言う。告げる。「ばかこくな」。(2)打つ。なぐる。「頭こくぞ」。(3)廻す。投げ廻す。「独楽こく(独楽を投げ廻しして競う)」。「独楽こきしゅ

うや」。

こぐ〔動〕(1)海に浮べた物を舟で曳くこと。(2)石や砂などを舟に積み運ぶこと。(3)坐って居眠るさま(舟こぐ)。

ごくーや〔名〕神社の神輿・祭典具の収納・祭典準備・炊事・社務を行う宮舎(供舎)。

こくいーまわる〔名〕石に廻る。壱岐の俵物は3斗2升入りであったが、実際には3斗3〜4升入れた。従って3俵で1石を上廻る量になる。

こくこく〔副〕(1)乳などよく出るさま。「どくどく」に同じか。(2)汁物・液状のものが濃厚なさま。

こぐさまつり〔名〕「こぐさももて」に同じ。牛の為の「ももてこー」。

こぐさももて〔名〕牛の「ももてこー」。牛の野出しする前に野草を浄め祓う祭りごとを行なった。牛への災いを除いてから野出しする慣わしである。

こくせん〔名〕藩主への上納米の運搬船をいう。

ごくたたず〔名〕穀・語句に立たぬ者。何をさせても諸事役にたたぬ者。

こぐち〔名〕「へーを」の上部に着けた綱の輪で、これを艀の「つく」にかけ舟を漕ぐ。

ごくっと〔副〕ぐっと。すっかり。きれいに。

ごくどー〔感〕怒罵の声。「ちきしょう・ちくしょう・げど

うさり・こん横着^{横着}が」。

ごくどーさり〔感〕「ごくどー・けどー」に同じ。こん役立たずが。

こくな〔形動〕残酷な。酷な。むごい。(動)言う勿れ。言うな。

ごくや〔名〕御供舎。「ごくーや」。

ごくろしか〔動〕小事にまでよく気を配って所作すること。

こけ〔名〕垢。あか。「こけんをゆる(いっぱい垢がつく)」。
〔代〕此処に。「こけけえー(此処に來い)・こけ居れ」。

こけー〔代〕此処に。「こけ」に同じ。

こけー〔名〕いら立ち。かんしゃく。腹立ち。「こけーぬわく」。

こげーに〔副〕こんなに。

こげーぬわく〔動〕腹が立つ。むしゃくしゃいらだつ。「こげんわく」。

こけぶく〔名〕垢。あか。「こけぶくまみれ(垢まみれに)」。

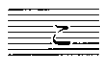
こけやらく〔動〕転がりまわる。

こげより〔名〕後家さん同士の夫婦縁。

こける〔動〕ころぶ。倒れる。ころげる。「白波のこける(転がるように次々と押し寄せる)」。「雪がこける」。

ごご〔名〕少女。女の子。「ごごしゃん・おごしゃん・ごごさん」も同じ。





ここしゅー(形動)気楽に。気安く。懇意にする。心安く。「ここしゅー言う(言わす)・ここしゅーする」。

ここりや(代)このあたり。ここ辺。「ここりゃ」も同じ。

ここれー(代)「ここりや」に同じ。[名]心得。心積り。

こころ(副)手加減。さじ加減。配慮。多少。少し。

こころする(副)手加減する。配慮して事に当る。

こころどけ(動)結んでいた紐がいつとはなしに自然に解けていること。

こざ(名)共同漁獲。一定日に浦人挙って漁獲し、共同漁獲物として浦の諸費用に充当する。受元を座方といい蟹集落で行なわれて来た。

ござー(接尾)御様。ござま。ござん。「嫁ござー・姉ござー」。

こざかし(形)気が利いてこまめに立ち働く。細部にわたり気配りよく要を得たさま。機転がよく利く。余り過ぎると嫌われもする性格。

こさがす(動)あちこち・あれこれ探し廻る。がさがさと探す。

こさぐ(動)がりがり・ごりごり掻く。ひっ掻く。「ごりごりこさぐ・ごりこさぎする」などと用いる。

こごこご(名)小仕事。雑用。雑事。「こごこご仕事(小さい仕事・又は幾つかの小仕事の

集まり)」。

こざつき(名)小正月の詠りと。か。旧暦5月3日、昔小座頭(坊主)が馬に乗って流された日で、この日は雨が降る。若し降らねば「馬鍬が天上する」と言われ、その年中降らぬとされてきた。又この日は牛馬を休ませ田の仕事をせぬならわしであった。

ござっする(動)ございます。

ござま(接尾)「ござー」に同じ。

ござる(動)(1)居るの敬称。「こけーござる(ここにいられる)」。(2)来るの敬称。「東京からござる(来られる)」。「助」いられる。おられる。「戻りござる(帰りおられる)」。

ござん(接尾)「ござー・ござま」に同じ。「弟ござん」。

ござんさる(動)「ござる」に同義で更に敬意を強める。

ごし(助・副)毎に。「ごーし」に同じ。交互に。「うつりごし」。

こしーばり(名)身体矮小の上気のいら立つ人。

こしが(名)「しが・しがてば」の小型のもの。行商用担ぎ籠。

こしかけだわら(名)腰掛俵。神楽白紙読みの折、2人この俵に腰掛けて読む。「ひざつきだわら」ともいう。古記に「腰懸俵二つ。但し一俵三升三合入り、本法は三斗三升」と記せり。「次第に簡略化になりたるものとみゆ」とある。

こしき〔感〕対者を罵ることば。横着。^{横着者}。「こしきかって・こんこしきが」などとも用いる。

こしぎ〔名〕牛を牽く綱（しよろなわ）の端に一尺余りの細丸い握り木を付ける。この木を持って牛を使役する。「こしぎ」には「ぐみ」の木を多く用いた。

こしきがき〔名〕「としゃくがら」に同じ。海浜に棲息する貝。

こしきかって〔感〕「こしき」に同じ。「かってこしき・こしきかって・こしきかってー」などという。

こしきご〔名〕横着な子。「こしきご（乞食児）」対者を卑下罵る語。

こしきみな〔名〕海辺の石に棲む小蟻。欠け刻みあり花形で蓋は赤く硬い。「はなみな」とも呼び、忌み食わぬという者や逆に食うと言う者あり。

こしきもん〔名〕「こしき・こしきかって」に同じ。横着者。

こしくわい〔名〕「こしきもん」に同じ。「こしゅくわい」ともいう。

こしこし〔形〕稍硬い歯ざわり手ざわりするもの。「ごしごし」「がしがし」に似る。「こしこし嚙む・磨く」。

ごしごし〔形〕「こしこし」に同じ。

ごじな〔名〕^{昔ながら}。むらさきうまごやし。うまごやし。クロ

ーバー。まめ科の植物。

こしのー〔名〕牛を耕作に使役する曳き縄。多くは棕櫚の皮を紡いで細縄を作り、これ3本更に拘い合わせ先端に「こしぎ」を付け、他端を「ぐるり（角に周した輪）」と右耳下で接ぎ、「ホイ・ヘシ・タタ・ワーワ」と「こしのー」を張り・緩め・振りして思う通りに駆使使役する。

こしば〔名〕(1)ひさかき。墓や石仏等に使え。所により神にも供える。つばき科の植物名。(2)「くろいを」の幼時期の呼び名で、木の葉の大きさ位の「くろいを」をいう。「うばくろ・せきもち・かたおし」参照。

こじゃ〔名〕小茶。午後に摂る間食。

こじゃく〔名〕渡良小崎浦の呼び名。

ごしゃく〔名〕鯨捕り船の縁に波除けに取り付けた板の名。一番から五番まであり、美しく色塗りのものであった。一番ごしゃくを「やまごしゃく」と呼んだ。

こしゃくこっぺー〔形〕高慢生意気な。

こしゃくのしんだ〔形〕高慢な。「こしゃくのしんだ事言うな」。

こじゅーはん〔名〕小昼飯。小昼。

こしょー〔名〕とうがらし。なす科。



こしょうかんだ〔名〕 せんにんそう。「かたただ」ともいう。蔓が辛いからの名か。きんぼうげ科の植物名。

ごしょうみち〔名〕 後生道。やま(墓地)に行く専用路。家毎に決まった路を設定利用。

こしょくる〔動〕 發育不良。こしょくれもん〔形〕 生育不十分で、奇形・矮小な形のもの。「こしょくれる・こしょくれ」も同じ。

こじょつこり〔形動〕 ささやか・つつましやかなさま。

ごしょばな〔名〕 (1)くさぼけ。しとみ。のぼけ。ちなし。(2)ひがんばん。蔓珠沙華をいうのもあると。

こしょべ〔形〕 こそばゆい。こちよこちよ。くすぐったい。「こしょべとる」。

こしょべのき〔名〕 さるすべり。みそはぎ科の木。「こしょべのき」参照。

こじり〔名〕 畑の高い部分「そね」に対して低い方を「こじり」という。

こしる〔動〕 作る。揉める。「こしるる」ともいう。

こしるる〔動〕 作る。こさえる。

ごしんさー〔名〕 神輿。「おごしんさあ」ともいう。

ごしんさんばな〔名〕 みこしぐさ。げんのしょうこ。

ごしんど〔名〕 ご苦労。ご身(心)勞。しんどい。「今日あごしんどおかけしましち、おお

きに有難うございました」。

こす〔助〕 こそ。「明日こすあ来ます」。

こすいーばり〔名〕 「こしーばり」に同じ。「ひでえーこすいーばりがあったもんたい」。身体小さく気いら立つ。

こずえーうば〔名〕 産婆。子添え婆。「とりあげうば(ばあさん)・はらもんばあさん(うば)・こぞえうば」も同じ。

こすか〔形〕 狡猾。こそい。こそか。こそこそ立廻って狡猾なさま。「こすかけえに油断なされんぞ」。

こずく〔動〕 (1)つつつく。ついばむ。(2)こつこつ音を立てる。(3)咳をする。

こずけのなが〔名〕 捕鯨用具。「てぎ」に付けた短い綱。参照。

ごすごす〔副〕 油断なく体を動かし立廻ること。「いっとき間なしのごすごすしちよらす」。

こずすさげ〔名〕 煤払い。旧暦12月13日煤払いし、糞をもつて受ける。この日神仏を祀る。「いえびがね」参照。

こすどーぐんち〔名〕 旧暦9月末日の里(地区名)祭。この年の最後の祭礼となり壱州の神々は出雲に集まれ、壱州は神無月に入る。「こすどーまつり」に同じ。

こすね〔名〕 味噌や酒を造る時、麴に合わせる大豆や米を煮(蒸し)た物。

こすびら〔名〕 はしこくて手に

負えないもの。小童。「こすびら」とも。

こすりきり〔名〕穀類を櫛で量るに縁一杯ぎりぎりにするこ
と。「やまもり」に対する語。

こすりびうち〔名〕燐寸。マ
ッチ。「すりびうち」に同じ。
(火打石から)。

こする〔形〕風刺する。あてこ
する。

こせくる〔動〕ほじくる。あら
探し。

こぜまち〔名〕小切れの田畑。
小面積。大切れ田畑は「おお
ぜまち」。

こぜる〔動〕ほじくる。あば
く。「こせくる」に同じ。

ごぜんしば〔名〕はまひさか
き。榊と共に神聖木として神
前乃至は仏前に供える。つば
き科の樹木。

こそか〔形〕ずるい。「こすか」
に同。

こそばい〔形〕こそばゆい。ち
よこばいか。「こちょペー」も
同義。

ごそごそ〔副〕何彼と事集めし
て動く。「ごすごす」に同じ。

こぞこぞする〔動〕頭髮を剃
り落す。理髪・調髪する。主
に小児用語。

こた〔助〕さ。とも。必ず決ま
った事だの意をこめて用いる。
「来るこた」。「見るこた」。

こだいこく〔名〕小大黒柱。大
黒柱の前、庭側寄りに立つ柱。
大黒柱と小大黒の間を「だい
こくあい(大黒合)(大黒間)」

と呼ぶ。

こたえん〔形〕堪え切れない。
堪えられない。堪らん。「暑う
し・寒うしこたえん(ば
な)」。

ごたかやす〔動〕混雑する。

ごたく〔形動〕厄介で手を焼
く。いろいろ迷惑をかける。
「ごたくとる・ごたくとらせら
れる・ごたくな目に遭う・ご
たくとるばっかりでひで一損
した」。

こたぐる〔動〕泥土やぬかるみ
を踏みこねる。踏み荒す。練
りこねる。

ごたまぜ〔動〕大勢で混ぜ返
す。混雑する。「ごたかやす」
に同じ。

こたゆる〔動〕骨身に沁みる。
しんどい。身にこたえる辛さ、
痛さ。

ごたる〔形〕ようだ。ようにあ
る。同じもの。似ている。そ
っくりだ。

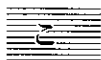
ごだん〔名〕法事供養の客に酒
席で、蕎麦やうどんを馳走と
して振舞うのが定法で、これ
を「ごだん」という。

こち〔名〕東風。こちかぜ。〔代〕
こっち。「こちけえ(こっち
へ来い)」。

こちきー〔動〕こっちにおい
で。

こちこち〔副〕小さい物の稍固
い歯ざわりや感触。「ごちご
ち」も略同じ。

こちゃ〔名〕事は。これは。こ
っちは。



こぢゅーはん〔名〕小昼飯。
こびる。朝食と昼食の中間に
とる軽い食事。午前のお茶ど
き。

ごちよーろ〔名〕船の鰭の名。
前鰭の左側に立て、手あきの
者から当るが、余り使うこと
はないとか。

こちょこちょ〔動〕くすぐる。
「こちょべー・ちょこちょこ・
ちょこべー・ちょこちょこと
る」など用いる。

こちよつこり〔形〕小さくつ
つましやかなさま。きちんと
してまとまりのあるさま。「こ
ちよつこりした暮し方しちょ
る(しちよらす)」。

こちよばいか〔形〕くすぐっ
たい。「こちよばしか・ちよこ
ばいか」も同じ。

こちよべ〔形〕くすぐり。「こ
しよべ」に同じ。

こちよべのき〔名〕さるすべ
りの木。みそはぎ科。「こしよ
べのき」も同。枝梢が繊細で
僅か触れてもよく揺れ動くこ
ろからの名。

ごちよみな〔名〕黒みなに似て
殻は褐色の小蠅。

こつ〔接尾〕事。こと。「ひでー
こつ・いかなこつ・いくえー
こつ・いけーこつ」などと用
いる。

ごつ〔接尾〕こと。事。「われー
ごつ(笑いごと)」。(助動)の
ように。如く。「鳥のごつしち
よつち鳥じゃなか」。

こつえー〔名〕こつあい。要

領。こつ。急所どころ。「こつ
えーん分つちよらん」。

こっか〔動〕腰掛ける。小兒
語。「あんべよこっかしちよか
しよ(きちんと腰掛けて置き
なさいよ)」。

こづかるとる〔動〕後髪を掴みこ
づく。

こっきり〔副〕ごそつと。ごっ
そり。すっかり。全部。「こっ
きんころり・ごっきり」とも
いう。

こっきんころり〔副〕全
部。ひとつも残さず。

こづく〔動〕「こずく」に同じ。
ごっくり〔副〕全部。根こそ
ぎ。根こさぎ。「ごつとり」に
同じ。

こづけえーせん〔名〕死者を
納棺・納骨する折、身内が供
え入れる硬貨。来世での死者
の小遣い銭。

こっけじー〔名〕老い呆けた汚
い人。

こっこ〔名〕糞尿の類。小兒
語。

ごっすら〔副〕全部。ごつと
り。こつとり。

ごっちゃん〔名〕半煮えもの。「ご
っちゃん飯」。

ごつつと〔副〕(1)かすかに相接
触する感じ。(2)魚の針糸を引
く感じ。「ぐつつと・こつつと」
に同じ。

ごつつりごもんめ〔形〕双方
両者相似て、甲乙つけがたい
さま。どっちもどっち。あいの
このさま。

こって〔名〕牡牛。「こってー・こってご・こて」ともいう。「ことい牛(特負い牛・牡牛)・こっとい牛」。

こってーうし〔名〕(1)蟻地獄の虫名。「こってこって・ちごってー・ちごってー」ともいう。「うすばかげろう」の幼虫。(2)こというし。こっというし。往昔、大きな力の強い牡牛を特負牛と呼んでいた。

こってーぞーり〔名〕(1)野良仕事に用いた草履。ぞうりの鼻緒の端を出して横緒と結ぶ。普通の草履は裏に戻して始末する。「あしなか」参照。(2)葬式野辺送りに身内が履くのも(1)式のぞうりである。(3)卑しき履き物との意味を持つ。「こつてじょうり・こつてぞうり」も同じ。

こってかれー〔名〕頑強な女。

こってこって〔名〕蟻地獄の虫の名。「こってーうし」(1)に同じ。

こってしば〔名〕たいみんなちばな。島内北目(風本方面)で使われているとか。やぶこうじ科。

こつとこつと〔副〕(1)物と物との当り合うさま。(2)的・予想的の中するさま。(形動)的確に。

こつとり〔副〕完全に。全部。余すところなく。「こつとり言い当てきした」。

こつとり〔副〕全部。皆。「こつとり・こつすら」に同じ。

こつとりこつとり〔形動〕ひとつ一つ次々順番に(結局全部・皆)。こつとこつとと当るさま。

ごつとんごつとん〔副〕互に当り合うさま。「こつとんこつとん」も同。

ごつね〔接尾〕毎に。毎々。「行く先ごつね留守拜うだ」「ごつね」。

こつば〔接尾〕事をば。事ば。「吾が出来むせんこつば、やぐやぐ言うな」。

こつば〔名〕木っ葉。落葉。松の落葉。

こつばうち〔名〕嫁に子を孕ませる為に尻を棒で叩く仕ぐさをする儀式。正月11日に・14日に・15日にか諸説色々あると。

こつばかきーやる〔動〕産児を間引くこと。往昔、貧困や多産(有る者ねえ一手の行く)からくる生活苦からの脱出に、食い扶持減らしの方法としての苦渋の選択肢に、これしかなかった由。悲しみの極み。「塩俵に入るる」など隠語もあった由。

こつペー〔形動〕生意気な。小癪な。

こつペーこく〔動〕自慢げぶって言う。生意気言う。

こつペーな〔形動〕生意気な。こしゃくな。「こしゃくこつペーな」。

こつペーぬしんだ〔形動〕「こつペーな」に同義だが、更に



対者を罵って。

こっぺーぬわるか〔形動〕体
裁調子・ばつが悪いさま。

こっぽー〔名〕強情。無法。横
着。頑固。「こっぽーもん」と
同義。

こっぽーもん〔名〕強情者。
頑固者。

こっぼね〔名〕端くれ。「親戚
のこっぼね（自己を卑下し、
親戚のはしくれ）」と用いる。
「きっぼね」同。

こづむ〔動〕沢山ある物を山積
みにする。小積む。場所を分
散して積み上げる。「稲束を小
積む・石小積む」。

こつんこつん〔副〕物の当り
合う様。

こて〔助〕ことに。のに。「こて
え」。

ごてー〔名〕(1)五体。身体。(2)
足・腰。「ごてーぬ叶わん」。(3)
亭主。夫。

こてがいえ〔名〕小型手桶。「こ
てがえ・こてげえ」ともいう。

こてがや〔名〕麦稈屋根を葺く
のに一把の麦又は小麦稈を二
束位に分けて結び、軒の下地
に結び付るもの。「こてがや葺
き」は麦稈屋根の保身に重要
な葺き始めの作業。

こてこて〔名〕交替。代わるが
わる。「こてごて・うつりごう
し」も同じ。「こてこてにやら
っさんな一な」。

ことかぎもん〔名〕急場凌ぎ
の間に合わせ者。急場凌ぎに
使う人や物。

ことぬくわじ〔形動〕物事を
仰々しく吹聴的に扱うさま。
「ことぬくわじのごつ言う
な」。

ことぼし〔名〕小灯火。手燭。
あかりたき。カンテラ。小灯
し。

こどり〔名〕助手。本職者の手
助けをして下働きする者。「こ
どりのこどりとる」。

ことりよせ〔名〕綱の結び目の
解けないように、更に小縄で
結び固めること。

ことわり〔名〕お詫び。謝罪。
「ことわり言うちよかなぞ」。

ことわりきかんのき〔名〕かん
このき。とうだいぐさ科の
植物。見かけによらず木枝が
裂け易く、この木に繋いだ牛
が放れて、他人の農作物を喰
い・荒したりした場合謝って
もなかなか許してもらえない。
農民なら誰でも裂け易い木で
あることは解っている筈。わ
ざと繋いだのだと誤解されたり
し勝ちだった由。お詫び聞
き入れてもらえない謂く付き
の木。

ことんくわじ〔形動〕「ことぬ
くわじ」に同じ。大げさな対
応のさま。

ことんことん〔副〕「こつんこ
つん」に同じ。「こつとんこつ
とん・ごつとんごつとん」よ
り稍弱い。

こな〔名〕間引き菜。各種葉物
野菜の成育過程途中に出来る
間引き菜。

こなから〔名〕2合半の量。「なから(5合)」の半分の量をいう。

こなす〔動〕物をいらい扱う。人を打撃しいじめる。「こなしものにする」ともいう。

こなれる〔動〕消化する。消化される。

こぬ〔代〕この。「こぬ男が」。「こぬをなごが・こぬお人じゃつた」。「こぬげどう・こぬ畜生」。「こん」も同じ。

こぬあと〔名〕この前。先日。

こぬおかた〔代〕この方。この人。「こぬかた」も同じ。

こぬる〔動〕こねる。捏る。理屈・苦情を言う。文句を言う。

こぬる〔動〕死ぬ。ごねる。参る。

こぬわれ〔代〕この人。お前。此奴。「このし」に同じ。「こぬわれが」となるとより荒々しくなる。

こねくる〔動〕捏ね廻す。

こねこね〔動〕捏ね廻す。小児語。「こねこねする・こねこねしち遊ぶ」。

こねん〔形動〕「こげに」に同じ。こんなに。「こねんなっちしもうた」。「こげんなったばな」などと同じ。

このし〔代〕この人。「こにし」も同じ。「このしと」ともいう。

こはぎ〔名〕鯨の骨に付いた肉をすき取った肉名。大きくすき取った肉を「おおはぎ・おーはぎ」と言う。

こばな〔名〕鼻の上部眉間の稍下低部の名。「こばな」を打つと危険。

こばやく〔動〕「木を焼くをいう」と壹岐国続風土記にある。不詳。

こびき〔名〕ひきがえるの子。おたまじゃくしが子蛙になったばかりのもの。注・「木挽き」は「こびきさん」と呼ぶ慣わしである。

こひじ〔名〕網船の「あばろ」の後方の魴。この「こひじ」「あばろ」の前の方に網を積む。

こびゆー〔名〕小日傭。時々その日傭い稼ぎ。

こびる〔名〕昼食前午前の間食お茶。

こぶ〔名〕(1)蜘蛛。(2)昆布。(3)鯨組の別当の居る団地裡の側。

こぶち〔名〕船の両側の縁。

ごぶてらしか〔形〕器物がしっかりして頑丈なさま。「ごぶてらしか箱」。

こぶと〔名〕鳥賊の一種。夏いか。

こぶのえ〔名〕蜘蛛の巣。「こぶのへ」も同じ。「こぶのえかけちよる」。

こぶる〔動〕ぬかるみの中の土を足で踏み崩し練り混ぜること。「じるくわちこぶるな」。「こたぐる」。

ごへーかぶり〔名・形〕大豆の葉は黄熟の後黄落するのがよいが、病的に白くなって落葉しないことがあり、一見御





幣」状になる。これをいう。
 ごべる〔形動〕液状の物の中味が濃厚にどろどろ状になるさま。濃密状。「ごべった・ごべちちよる」とも。

ごぼ一かため〔名〕神楽舞の一つ名。「ごぼ一ひらき」に同じ。参照。

ごぼ一ひらき〔名〕五方開き。「神代」「白紙読み」ともいい、採り物は弓を持ち一人で舞う。後、射手「乱れ舞」となる。

ごぼうがしら〔名〕酒宴の席のまとめ役をいう。

ごぼがしら〔名〕組頭。生活隣保組織の長。

こぼくる〔動〕自然徐々に腐蝕する。

こぼこ〔名〕麦稈屋根を葺く時屋根の四隅にあてる麦稈。長くて硬いのが良いとされ、多くは小麦稈が重宝がられた。

こぼねいごかす〔動〕小骨動かす。まめまめしく体を使い立ち働く。

こま〔名〕船の中の室名。「みなおり」と「ど一ふなばり」の間の船室。

こまい〔形〕こせこせして小さい。細い。こまかい事柄にまでこだわる。

こまぐらのき〔名〕にわとこ。たづのき。接骨木。すいかずら科の植物。

こまこき〔名〕独楽廻し。遊びの方法として、(1)木独楽を同時に投げ廻して時間の長さを競う。(2)地上に立てたり、

先に廻している独楽に投げ廻しで当てて相手独楽を割り勝敗を決める。割れない時は攻守交替して仕切り直して続ける。この場合の独楽の心釘は太く長めのものを付け鍵の先端は錐状・刃状にし独楽の木部は細目に細工して、喧嘩独楽化する。

こまたとり〔形動〕言葉の僅かな過誤を捕え取り上げの上手さ。「こまたとる」ともいう。「あげあしとる」にも似るのか。

こまで〔名〕節約家。儉約家。稍々けちん坊的存在。

ごみそーじ〔形〕物を荒々しく取り扱うさま。「そえんごみそーじのごつするな」。

こみみーはさむ〔動〕物事の片鱗を聞きだすこと。情報をそれとなく聞き識る。

ごむしん〔名〕折り入ったの頼み事。無理を承知での頼みごと。金銭借り。「むしん・むしんいう」。お願い。

ごめ〔名〕供米。神仏に供え祀るに用いる米や穀類等。

ごめー〔名〕白紙を四つ折りにして袋状に折り中に金銭を入れて、表に御年玉・氏名を書き、年始の礼の贈り物に添える「のし」。

ごめーもどし〔名〕「ごめー」を受けた方から相手方に返礼すること。

ごめごめのき〔名〕(1)はまくさぎ。くまつづら科。「びんつ

けのき」ともいう。(2)むらさきしきぶ。くまつづら科の落葉低木。「み(実)むらさき」の名もある。

ごめんおしつけらりませ
〔名〕ご免下さいませ。「ごめんおしつけられませ」も同じ。

こもーり〔名〕子づり。「こもーりする」。

こもかぶり〔名〕漁獲物の取引きは一定の間屋を通してなされるのに対して、問屋を通さない抜買人をいう。

ごもくおとし〔名〕住居の「なんど」や「よりつき」の部屋の床板の土間側の隅の一部を取りはずし式に作り、床を掃いて出る「ごみ」を一時的に床下に落しておく。後日・後刻まとめて取り除くようにした仕組みをいう。「ごもく」は「ごみ」一般の名。

ごもくぞ〔名〕塵芥。ごみ。「ごもく・ごもくた」などともいう。

こもそーかぶり〔名〕虚無僧。

こもちばら〔名〕出産後の女性は食欲旺盛になる。そのさまをいう。

こもの〔名〕雑魚。小魚。小物魚。

こやいり〔名〕家屋新築工事のかかり初め式。「かかり初め」ともいう。吉日(干支)を選び、大工棟梁以下全員「ちゅうのう(手斧)」を使い工事の安全完成祈願をする。親戚縁

者の祝い品も届き、後に祝宴も張る。

ごやさって〔名〕明々々後口。「ごあさって」ともいう。

こやね〔名〕軒の庇。ひさし。

ごよーしゃ〔名〕ご免下さい。今日はお許し下さい。他家訪問に先ずこう挨拶する。

ごよーしゃおしつけらりませ〔名〕「ごよーしゃ」を更にていねいに、主に年配女性多用した。

こら〔感〕おい。お前。呼びかけ語。

こらえじょーね〔名〕忍耐力。頑張り。「こらえじょーねんなか」。「これじょーね」とも用いる。

こらす〔動〕来るに幾分の敬意を含む表現。「こらすとじゃけえに待ちよかにやでけん」。

こらっしやる〔動〕来なざる。「ござる・こらる・こらるる」等同義語。

こらるる〔動〕(1)おいでになる。(2)行かれる。「こらる」も同じ。

こり〔代〕これ。「こりおくれ(これ下さい)」「こりばくれ」。

ごり〔名〕残り。滓。ごみ。屑。穢。「ごりこさぎする」「ごり炭集むる」。

こりき〔名〕薪木の小丸太類。ごりこさぎ〔動〕何もかも、底の底まで残さずかき集める。「がりこさぎ・がりがりこさぎ」なども同じ。

こりこり〔副〕手ざわり歯ざわ



り稍硬く反撥性もあるさま。
「しこしこ」も類語。〔代〕これ
これ（是々）。「こりこり章魚
菜」。

ごりごり〔副〕手ざわりしっか
りで丈夫らしいさま。部厚な
さま。〔形〕「ごしごし」に同
じ。

こりゃー〔感〕軽い驚きの声。
「これはこれは」。「こりゃーど
うけー」。

こりゃーいやーばい〔感〕こ
れはまあどうしましょう。「こ
りゃーばい」も同じ。

こりん〔名〕餅を細く塞の目に
切り乾燥させたもの。これを
煎って湯茶砂糖がけなどして
食する。

こるわし〔代〕此の人。「こぬ
われ」に同じ。対下級者用語。

これ〔代〕こちら。こちらさ
ま。お宅。お宅様。

これーえる〔動〕こらえる。我
慢する。忍耐する。がまんし
許す。

これーじょーね〔名〕耐える
気力。堪え性根。「これーにゅ
ーじ」も同。

これーにゅーじ〔名〕忍 耐
力。

これさん〔代〕こちら様。お宅
様。

これしこ〔副〕これだけ。これ
位。「これっしや・これっしょ」
も同じ。

これっしや〔副〕これ位。

これっしょ〔副〕これ位。

これはて〔動〕こりる。こりご

りする。懲り果てる。「これは
てん（ぬ）なか（同じ苦事を
繰り返す）」。

これはてぬこんじょー〔形
動〕懲りた気を強く表わす語。
懲りごりだ。

ころ〔名〕捕鯨船の鱸。うちろ
の後方の鱸。

ごろーじ〔動〕ごらん。見なさ
い。ごらんなさい。見て下さ
い。

ころえー〔形動〕頃合い。手ご
ろ。形態・大小・時間等々好
適なこと。

ごろごっとり〔副〕何もかも
全部。

ごろごろだご〔名〕米の粉を
主体に小指先大に丸めた団子。
新墓や盆などの墓参に各家で
作り供える。

ころっと〔副〕すっかり。完全
に。「ころっと忘れちよつたた
あな」。

ころび〔名〕海底に点々と散在
している岩礁や瀬石。

ころむね〔名〕着物の襟を合わ
せるのに一枚一枚別々次々に
重ね合わす法をいう。「ころむ
ねつくらう」。

ころも〔名〕子供。「ころむ・こ
ろん・ころんどむ・ころんど
ん」も同じ「こども」の意。

ごろりやっさ〔副〕全部。「ご
ろっと」に略同じだが、全部
をかき集めるという意を含み、
使用の場合や箇所に制限を感
ずる。

ころん〔名〕子供。



ころんろん〔名〕子供達。子供等。

こわい〔名〕強飯（こわい）。おこわい。糯米を蒸したもの。

こわね〔名〕音声。声音。言語音の個性。「こわねんよう似ちよるばい」。

こわり〔名〕(1)「こわい・おこわい」に同じ。(2)筋肉の一部が硬化し、硬張った箇所。「しこり」に同じ。「こわりの出来た」「肩んこわる(り)」。

こわん〔名〕汁用碗。

こん〔助数〕魚の匹数。本。尾。匹。「1こん・2こん」「鰯1こん」「一こん盛り」。(動)来ぬ。来ん。来ない。「こんちゅうたろうが(来ぬと言ったろうが)」。(代)この。「こん畜生・こん馬鹿が・こん下道」。

こんか〔動〕来ぬか。来ないか。「こんか、こんこん(来ないか、来ない来ない)(行かない行かない)」。

ごんがら〔名〕漁具名。長さ4寸(12～13匁)の太い針金に白布を巻き先端部に逆針を付けたもの。2尺5寸(70～80匁)の竿(はじき)に同じく2尺1～2寸(60匁余)の糸よま(丈夫な糸)を付け、丁度握るところに「ごんがら」が当るようにし、左右両手に持って操作する。「いかまきずって一」で二番烏賊を誘い寄せ浮かせて獲る時用いる。

こんがり〔形〕程よく焦げるさ

ま。

こんざがん〔名〕布を上紺に染め、濃いふのりを一面に塗り付け、巻いて叩き艶をつける作業。

こんくわい〔名〕盲僧又は芸人が稻荷祭りに奏するもの。内容不詳。

こんこ〔名〕米。米粒。「こんこ飯・こんこまま」と用いる。

こんごーぶく〔名〕河豚の一種。「はこぶく」に同じ。

こんごい〔名〕子供を負う絆天。

こんごる〔名〕此頃。「こんごるあやか天気」の続きをるばい」。

ごんじゅー〔名〕放屁癖の者。

ごんじょーばな〔名〕粘液濃厚な鼻汁。「ごんじょーばな」も同じ。

ごんじょーぼね〔名〕根 性骨。心根。真の精神。気構え。「ごんじょーぼねぬ(ん)よごうじよる」。

ごんじょーもん〔形〕性質温良な人。

ごんじょーよし〔形〕性質温良な人。「ごんじょーわり」に対する語。

ごんじょーわり〔形〕意地悪な性格の人。意地悪。「ごんじょーくっされ(くされ)」ともいう。

ごんたまぜ〔形〕ひどく混乱・混雑すること。

こんちよか〔形〕小さい。小さくかわいらしさもある。「こー

んちよか」も同じ。

こんみつ〔名〕紐で口を絞り括る様にした袋。穀類を入れる他、女性が身の廻り品を入れ持ち歩くにも用いた。手さげ袋。

こんなん〔代〕この人。

こんの一〔形〕(1)物を食べ尽す。嘔下し終ること。(2)一般に消化し終ること。

こんべりごんにやく〔形〕一緒くた。混ぜこぜ。混ぜくたちゃんぽんに。

こんぼ〔名〕花の蕾。こんぼし(よ)、とも。

こんめー〔名〕麦稈屋根の下に横に組む竹材。その上にたるき竹を渡す。「ひろごんめー」参照。

こんやさねー〔名〕今夜にかけて。

こんやさめー〔名〕今夜に。「こんやさねー」に同じ。

さ

さー〔敬〕様。さん。「柿さー・仏さー」。「小父さー」

ざーい〔接尾〕「ざい・ばい」に同じ。結果は否定形になる。「知らんざーい・聞かんざーい」。「ざん・ざーん」も同じ。

さーぜん〔副〕先程。「さいぜん」も同じ。

ざい〔接尾〕(1)「ざーい」に同じ。「いるわんざい(嫌なこつ

たい)」。(2)在。いなか。町部・浦部に対して農村部。在部。「ざいのもん(名)」。

さいごのすけ〔名〕(1)するやいなや。「見たがさいごのすけ飛びちいち来た」。(2)最後。最後の最後。「こりがさいごのすけ、もういるわんばい(これが最後だ、後はもう知らぬぞ)」。

ざいしょ〔名〕妻又は夫の実家。

さいはい〔名〕采配。指示。「すゑーはい」と用いることが多い。

さいもん〔名〕祭文。浪曲。なにわぶし。「さいもんかたり(浪曲師)」。

さえる〔動〕さえずる。「目白んようさえるばい」。「さゆる」も同じ。

さえん〔動〕かんばしくない。うまくいかない。はかばかしくない。物足りない。面白くない。

さおる〔動〕引つかかる。「木の枝えさおる」「さおっちょる」。「さをる」も同じ。

さか〔名〕「こーじゅー(講中)」の別名。「さか」が数組合わさって「くみ」というが、地域により異同がある。「おーぐみ」参照。

さかいじゅー〔名〕^{さかえ} 塙重。名の起りは大坂堺商人の考案の器からとの説がある。長方形の木箱にうるし塗り、箱蓋が付く。米・飯類・食物

料理品の贈答運搬容器として
重宝。米1升位から5升位ま
で小・中・大の3箱1組・5
箱1組・7箱1組の組み物で、
家紋入り豪華版迄色々。

さかえる〔動〕裁く。仲裁す
る。仲をとりもつ。「喧嘩さか
える(仲直りさせる)」。「さか
ゆる」も同じ。

さがき〔名〕牡蠣。地牡蠣。「ぢ
がき」に同じ。

さかぎょーくる〔動〕逆経繰
る。逆経を読んでする呪術の
一つ。往昔、「座頭」や「しの
んぼ」を怒らせると「逆経く
らるる」と恐れられた。

さかしか〔形〕健やか。達者。
威勢のよいこと。

さかしれ〔名〕乳児の下痢。

さかぜん〔名〕逆膳。普段平常
時には、膳の木目を横に使用
するが、葬儀(おくり)には、
木目を縦に使用する慣わしで
ある。「たかぜん・のべぜん(野
辺膳)」。

さかた〔名〕座方。蟹頭。蟹船
の群と同時に出漁して船中で
製造に従事する。

さかづら〔名〕牛の面旋(額の
巻毛)のないもの。農家はこ
の牛を嫌う。

さかとんぼ〔形〕逆さまに頭の
方から落ち込む形の姿勢にな
る。頭の方から突っ込む形に
なる。逆立ちする。

さかとんぼげー〔形〕逆立ち
状になる。「さかとんぼ」に同
じ。「さかとんぼげーりする」

も同じ。「げーり」は返り・帰
り・孵化(かえる)の意。

さかなえ〔名〕逆苗。逆さにな
った苗。誤って苗を逆さに植
えること。最もよくないこと
とし注意し、嫌う。

さかばち〔名・形動〕真逆様。

さかばちがやる〔動〕ひっく
り返る。

さかびわ〔名〕盲僧が呪咀の
為、琵琶を逆に持って弾くこ
と。人々はこれを大いに恐れ
た。

さかぼう〔名〕逆棒。葬儀の
折、「がん」や「龕台」を担ぐ
人は、棒の元を前に木先を
後にして担ぐ慣わしである。
従って普段一般的に棒で物を
担ぐには、元を後に木先を
前にし逆棒にしない。

さかほがい〔名〕神楽舞の一
つ。「とのほがい」の次に舞
う。御酒と土器盃を持ってひ
とりで舞う。「酒祝い」。昔はこ
の神楽の後に酒食の宴を催お
した。

さかむけ〔名・形〕爪際から肉
(皮膚)の一部がむくれる現
象。ささくれ。

さかめだつ〔形〕目尻を吊り上
げた意地悪な面相。

さかゆる〔動〕仲裁する。「さ
かえる」に同じ。

さがり〔名〕(1)風の名。「さがり
にし」の略とか。(2)地名。郷
ノ浦本町から北へ国津意加美
神社へ登る階段坂路を「佐賀
里」又は「佐賀里の坂」と呼



び、祇園山笠昇き山の名所の一つ庄巻の場である。(往昔は赤木写真館前の石段を登る昇き山であった)。

さがりにし〔名〕南西の風。「沖南風 (おきばえ)」に同じ。

さき〔名〕余地。場所。「考ゆるさきや無か」「寄りつくさきや無か」。

さきいき〔名〕将来。これから先。「さきいきのなか (将来性・将来の展望が見込めぬ (ない))」。

さきしね〔名〕先の方へ。前の方へ。将来へ。「さきしね行かんせな」。「さきさね」も同じ。

さきぬべ〔名〕(1)先延べ。先伸ばし。先送り。(2)俵物取引きの一方法。現物先渡しして、代金の受取りを俵物値上り時の最高値で勘定し取引きする。若し値上りのない場合には現物受渡し時の相場により支払う。

さきまわり〔名〕鯨組の網船の一手。沖の方に位置する。

さくおや〔名〕孤児などを親に代り引き取って農業の技術を教え育てた者達。多くは作男の形で訓練された。

さくはん〔名〕作半。資本家と労働者として利益を折半すること。「つくりわけ」参照。

さくらしか〔形〕ねばり気のない様。「柿の木はさくらしかけん用心せな」。

さぐりぼり〔動〕諸掘りなどで大きく良い物を探し当て掘り

とること。「かしらぼり」に似る。

さくる〔動〕(1)えぐり彫る。えぐる。彫る。大工道具に「さくりかん」などある。(3)裂ける。切れ分れる。

さげ〔名〕さしかけ。さしをろし。「げや」に似る。参照。

さげもん〔名〕鯨を捕獲した時、従業員に一定量の鯨肉を給与した。後には鯨肉の代りに金銭を支給した由。

さげる〔動〕所持する。持つ。

ざけん〔名〕座見。宴席での相伴役の後見をする役 (の人)。

さこる〔動〕栄える。繁栄する。「さこつちよらす・さこつちよる」。

さぎ〔名〕秋刀魚。魚の名。「さぎあみ・ささみ (さんま網漁)」。

ささぎ〔名〕ささげ豆。まめ科。

ささく〔動〕他人の悪口を言う。ひそひそ話をする。「ささやく」か。

ささくり〔名〕支障。さしさわり。

ささくる〔動〕(1)「ささくり」の動詞形。(2)流通。流動の意。「喉んささくる・喉んささくりの悪か」。

ささっぺり〔名〕衣類の縁取り。ささへり。ささべり。「赤かささっぺりば付けた (赤いささへりを付けた)」。

ささほーさ〔形〕支離滅裂の様。取り乱しまとまりつかぬ



状況。「ささほーさん目え遭うた(さんざんの目に遭った)」。

ささまい [名] 神楽舞。笹舞。笹を採り持ち一人で舞う。本地舞の末に乱れ舞となる。野槌の舞の笹と同じ。

ささみ [名] 茅。植物名。沓岐国統風土記に記載があるが詳細は不明。島内には「ささくさ」という浅い山中に生える竹に似た緑色の葉を5～6枚つける多年草で茎の頂にまっすぐな枝をだし、横にまばらに小穂をつける。又「ちぢみざさ」という山野の木の下などに生える一年草で、下方は地に這い節から根をおろし、笹に似た葉の縁の方に縮みがあり、元の方の葉しょうや花軸に荒い毛があり茎の頂の花軸に花穂を付ける。尚他に「こちぢみざさ」という「ちぢみざさ」に極く似たものがあるが、これには花軸に毛がないので区別がつく。いずれも「いね科」の植物で「ささみ」の正体とこれらとの関係を知りたいものである。

ささみ [名] 醤油などの表面に浮かび出る白い「かび」状のものの名。

さしかけ [名] 母屋から張り出した庇屋根部の名。

さしがね [名] 曲尺。まがりかね。大工道具名。

さしぎね (動) 物を白で搦いているとき、他者が別杵を挿し

込んで搦きに加わること。
〔形・副〕 転じて物事の成り行きに他者が加わっていく様。

さしげた [名] 高下駄。下駄の台に差し歯したもの。「ひっきり下駄」に対する語。

さしぞー [名] 若牛を田畑の農耕用に訓練する折、曳縄に代えて両側に竹竿を付け牽制しながら曳き廻し使入れし仕込む。この時用いる竹竿を差し竿(さしざお)という。

さしづち [名] 木製の小槌。「さいづち(細槌)」ともいう。

さしの一 [名] 牛馬に鞍をつけ荷を背負わせる時、一方の端を輪にして鞍に締めつける縄。多くは棕櫚縄を編み作った。

さしもん [名] 間仕切柱間の上部に渡す大きな松の角材。建築用語。

さしをろし [名] 「さげ」に同じ。

さす [名] (1) 炭葺屋根の他、屋根の四隅の柱から上に斜めに立て、先端は棟材と組む屋根材。(2) 炭や吹から穀類を抜き取るのに用いる先端を尖らせた竹製筒。杓。(3) 篩し込み物を担ぐ棒。天秤棒やおうこうの類。(4) 醤油のかび。〔助動〕 される。する。なさる。「いらんこつばさす」。

さずえー [名] さざえ。貝の名。「さぜー・さでー」などともいう。

さずえーかみ [名] 「ねこざめ」といわれる魚の名。「さぜか





み・さでかみ」も同じ。さざえを噛み割る程の魚。食用にしても美味。

さすがしら〔名〕旧藩時代各触役の頭。1触に1人いて上納米取り立て時の初取り頭の他触内の諸事ト達や触民の世話役も努めた。

さすり〔名〕旧藩時代の地割りに際し、地域内住民を召集して協議し、すり合わせをすること。

さする〔助動〕させる。

さたやみ〔名〕物事が途中で、うやむやになり中断すること。沙汰止み。

ざつけ〔名〕宴席で本式の食膳に就く前に軽食させること。「むなづけ」などともいう。

ざっしゃる〔動〕される。なされる。

ざっしょう〔名〕盆・正月節句伯叔父母の家に挨拶に行く時持参する食物類。「ざっしょ」ともいう。

ざっとー〔名〕他から彼是批判指図する形で口入れすること。「てんさつ」に同じ。

ざっぱそーどー〔名〕大騒動。大のごたつき。大のもたつき。

ざっぱもん〔名〕価値のないもの。がらくた。雑把物。

ざっぱりげんすけ〔副〕さっぱりわからぬ・すっかりだめの状況。

さっぺ〔名〕味っ気。塩っ気。

さでー〔名〕さざえ(栄螺)。

さでかみ〔名〕ねこざめ。魚

名。

さどむ〔動〕よどむ。中絶する。完成しない。

さなご〔名〕目の荒い浅い竹籠。「ざる・めご・きりだめ」も同じ。

さなぶり〔名〕田植え完了の後の祝祭の宴。早苗振舞。早苗祝り。^{はなぶら}祝。

さね〔助〕の方に。へ。「あちさね行た」「まっと先さね行け」。「さめ・しめ・しね」に同じ。

さねもりぎとう〔名〕「さねもりおくり」とも言い、蕨人形や幟り幡を拵え、鉦や太鼓を叩いて田畑の病害虫の駆除退散を祈禱して廻る地区行事。齊藤別当(1111～1183)は平安時代末期の武士で、源氏に仕えて来たが、治承4年(1180)京に上り平氏に属し寿永2年(1183)、平維盛に従い北陸に木曾義仲を攻めた。戦に臨み白髪を染め錦の直垂を着け壮者に列して出陣したが、平家敗走手塚太郎光盛に討たれた。義仲は部下の樋口次郎兼光にその首級を洗わせたところ、忽ち白髪の老人の頭となり実盛であることが確認された。その時染めていた髪油が水田に流れ込んで田の虫(稲の害虫)が駆除されたという。又さねもりの名は「実を守る」に通ずることから、別当の供養と害虫駆除に田の守り神として祀ることになっ

たと(町内間取り一説)。尚島内で行なわれてきた「さねもりぎとう」の由来と祀り方について、(1)斎藤別当実盛の人形を作り、田畑を巡り、害虫駆除の祈願をする。実盛は田に落ちて死に害虫になった。それを追い滅う為の祈禱である。(2)帆と舵を付けた精霊船を作り実盛人形を乗せた。人形は藁で2体作り、茄子ととうもろこしで男根を付け、刀を差し、顔は虫がびっくりして逃げだすようにできる丈恐い顔を作った。船には酒を入れた竹筒のお樽12本、するめ2枚と2本のろうそくを立て、先ず神社で鉦・太鼓を叩いて「なんまいだあ・なんまいだあ」を唱えた後、鉦3人・太鼓2人・船・幡持ちの行列をつくり「チンガン・トンガン・サネモリトンガン」と唱えながら、田畑の畦を廻り、田の神さー(水や川の神)前で幡4本を立て、海岸の鼠供養の塔の前で、田の虫を乗せた船を海に流した。残りの幡2本はそこに立てた。その後一同は再び神社に戻り、「ろくせいねぶつ」を唱えた後、一同で宴会した。(3)雨の少ない年だけに「さねもりさん人形」を作った。竹の骨に藁を巻きつけ浴衣を着せ、半紙で髪を作る。さねもりさんはあぐらをかき、両手を股においた姿勢で大人より少し小さめに作っ

た。直立したさねもりさんもあった。鉦と太鼓の他竹に吊した半紙の幡を作り、人形を担いで廻り、田毎に立止って祈禱をし幡を1本ずつ立てた。全部巡り終ると高い山の辻(山頂)にさねもりさん人形を担ぎ上げ、そこで燃して祈禱供養を終った。(4)又或る地区では等身大の藁人形の頭に「まげ」を結び、木で男根を作りとうきびの陰毛を付け、さねもりさんに仕立て証を叩き乍ら地区内を祈禱して廻り最後は僧侶に供養してもらってから燃した。この時は寺から「南無阿弥陀佛」と書いた紙幡をもらい大人20~30人位参加していた。さねもりさんを焼く時、田の虫はボカンと口を開けて見ていると。(5)別の地区では藁人形になすび(茄子)の男根ととうきびのひげをつけ、槍や刀を持たせ寺で、「しん」を入れてもらい触中を練り歩き、最後に人形を決りの川の中に立て祈禱を終った。この日は実盛が草に隠れて難を逃れた故事により草取りはしないとのことであった。

さばきぐし〔名〕梳き櫛。髪をすく櫛。他に女性の櫛には「さしぐし」髪飾りの一種で髪にさす櫛、「すきぐし」は髪の汚れや虱を梳き取る細い目のはめ込み式の竹櫛、「すじぐし」は髪を好みの線で適当に分けて整える分け櫛などが用いら



れてきた。

さばく〔動〕(1)魚や鶏を荒料理する。(2)鯨を解体解剖する。

(3)髪を梳る。

さばくる〔動〕仕事がかばかしく適切に処理される。捌ける。

さばけて〔名〕捌け手。仕事上手の人。敏腕家。

さばけん〔動〕仕事が上手にできない。思う通り物事が進行しない。

さばさばつ〔副〕正調なこと。

潑刺なこと。さにあらざるを

反語的に表現するのに「病気

でさばさばつ物が食われん」。

さばぶく〔名〕河豚の一種名。

さばわけ〔動〕無統制に我れ勝ちに分け取ること。

さび〔名〕味っ気。「さぶ」も同じ。

さびなか〔形〕味気がない。塩っ気がない。何か一つ物足りない気分。

さぶ〔名〕「さび」に同じ。

さぶさぶ〔副〕果物など歯ざわり質感さわやかで柔軟さもある状態。

さぶなか〔形〕「さびなか」に同じ。

ざぶる〔動〕川や海や水に浸し、出したり入れたり揺り動かし物を洗う。「ぞぶる」ともいう。

さべー〔名〕うりはむし。「うりばえ・はむし」の類の総称。

さま〔名〕狭間。のぞき窓(穴)。「さまからのぞく」。「は

ざま」。

ざま〔名〕なれの果て。ぶざまな状況(態)をのしる語。

みじめ。

さまし〔名〕鮮魚類の日増し物。

さまた〔名〕竹・木の棒3本を括り開いて立て物の支えとする仕組み。「さまた結う」。

ざまむなか〔副〕(1)とてつもなく大きい(太い)。巨大な。(2)みっとも無い。無格好な。常態でないさま。

さみいー〔形〕寒い。「さみいー夜」。

さむ〔動〕木の外皮を削り用材にする。「木をさむ(斧で外皮を削る)」。「さむる・さめる」も同じ。

さめ〔名〕うろこ(鱗)。「さめんをゆる(鱗が生えた様に垢が沢山付く状態)」をいう。〔助〕に。へ。「ここかる右の方さめお行きまっせー」。

さめいわし〔名〕にしん。鰺魚名。

さや〔名〕鯨の舌の呼び名。

さやぎ〔名〕はまびわの木。この木が刀剣の鞘作り材に用いられた。くすのき科。

さやぬかみ〔名〕塞の神。古来男根の形を作り献じ諸願をかけて来た。

さやまめ〔名〕枝豆。

さゆ〔動〕(1)寢席等でよくはしゃぎ騒ぐさま。「ようさゆるごつならした」。(2)小鳥のよくさえずり鳴く事。「さゆる」も同

じ。
さゆる〔動〕さえずる。はしやぎさわぐこと。「さゆ・さえる」も同じ。
さよなる〔名〕さようなら。挨拶語。
さら〔名〕(1)膝頭。(2)頭蓋骨。(3)女性性器。
さらか〔形〕皿の様に浅い形のもの。器物の底の浅いこと。「こん鉢はちやさらか(この鉢は浅い)」。
さらきやらく〔動〕歩き廻る。徘徊する。「しらきやらく」も同じ。
さらく〔動〕歩く。「さるく・しやらく・されーちくる・されーた」など「さらく」の表現いろいろ。
さらしん〔形〕真新しい。「さらはち」ともいう。
さらねぶり〔名〕振舞はるいの翌日の片付けごと。「ぜんざれー」に同じ。
さらはち〔形〕「さらしん」に同じ。
さらわる〔動〕皿割る。攫さらわる。処女の状態を犯される。「あなばち」に同じ。
さり〔接続〕されば。それだから。即ち。「さり、今言うつろうが」。
さりいまゆう〔接続〕だからつまり。今言った通り。結局。即ち。「いまゆー」に同じ。
さりた〔助〕された。しなさった。さした。なされた。した。
さる〔動〕する。本来は敬語で

あるが、卑語の如く用いて「ひとりで、さるとちゅう(すると言う)」。**〔名〕**桶状甕で物を蒸す時、底の穴あな(穴)を覆う小さな笠状の物。

さるうで〔名〕猿腕。肘が外反している腕の人。弓の上手が多いとか。

さるかきやば〔名〕じゃけついばら。かわらふじ。まめ科の植物、枝に鋭いとげがあり花は黄色5弁、実有毒。

さるすべり〔名〕かごのき。樹皮に白い斑紋が出て、鹿の子の木名になった由。滑らかな木肌。くすのき科。

さるとりにし〔名〕申西西の風。西南西の風。

さるふう〔名〕いすのきに寄生する虫の巣。いすのふしあぶらむしの虫こぶ(虫えい)。微硬く小児の吹く笛にもなると。

さるる〔助〕される。なさる。

さわ〔助数〕田地の枚数を表わすに用いる。「され」に同じ。

さわだけじぶん〔名〕竿竹一杯の高さに太陽が立ち昇った時刻(時間帯)。

さわり〔名〕(1)病氣。患い。禍い。(2)冷め(神仏その他の)。

さをる〔動〕物が木や屋根高所にひっかかり落ちて来ない状態。「毬が屋根にさをる」。「さおる」も同じ。

さんげーき〔名〕神楽舞の一種。猿田彦と天鈿女あめの女の舞。山鼻鬼。腰に柿と御幣をさして出、舞う。

さ

さんがいばん〔名〕三界萬霊。「さんがいばんさん」ともいい、「さんげばんげ」に同じ。
さんげばんげ〔名〕三界萬霊仏。各墓地内の一隅に祀られる無縁仏や餓鬼どん諸霊の墓。如何なる供物も同時同様に、この霊に祀らなければ、仏達総ての受納するところにならぬと信じられている。

さんざんのいーごつ〔形〕惨々たる状態。滅茶苦茶状。「父親あ死なすし、借金なあ残っちゃうし、さんざんのいーごつじゃった」。

さんすな〔動〕しなさんな。するな。「しゅんすな」に同じ。

さんせん〔名〕寶銭。「おさんせんあぐる」。

さんちく〔名〕竹の一種。根方の節不規則に変形し珍奇。主として釣竿などに加工重宝がられた。

さんとく〔名〕財布。袋状の銭入れ。

さんなる〔接続〕それなら。それでは。「すんなりや・すんなる」も同じ。

さんによー〔名〕計算。勘定。

さんば〔名〕晩の別れの挨拶。「さんばしゅーか・さんばばな（何れも帰り時刻になったよと促し合う語）」。「さよなる」に同じ。

さんみょーねん〔名〕再来年の翌年。再々来年。「米年・再来年・再々来年・三明年」。

さんや〔名〕物入れ袋。財布。

さんやぶくろ〔名〕(1)僧が必要品を入れて首にかけ持ち歩く袋。(2)社寺参拝時に寶銭や供物を入れ持廻る袋。(3)死者に持たせる布袋。鋏を使わず手で白布を引き裂き「はちけん針」という縫い方で袋を作り、中に米粉の団子・米粒・銭・線香・糸・針・櫛・紅の他、故人の好物の菓子・煙草や下着・足袋などを入れ持たせる。「ひろしまいきは三文たい」と言って、穴開き銭3枚かせいぜい5枚。多くは入れない。中には「49文たい」と言って49枚入れる所もある。現在では身内や親交のあった人が、あの世での小遣い銭といって思いの金銭を入れて野辺送りする。死者に持たせる「さんやぶくろ」を「いっさいぶくろ（一切袋）」ともいう。

さんろうがん〔名〕参籠寒。「往昔旧曆正月に各神社において、大般若經の転読あり。一般人も参籠せり。折からの寒氣強きを例とす。故にこの頃の寒を斯く言うならわしなり」とある。

し

し〔助〕「ほど」に添えて「ほどし」などと用いた。「死ぬほどしのこつじゃけん」。〔名〕人の

意。「あのし」「このし」「よかし」等々。

しー〔名〕(1)小便。尿。「しーまる・しーしーまらする」。「しい」も同じ。(2)正体や中味がわからないが、牛が最も恐れるものと。「牛がしーに遭うたように」など用いられたと。

しーし〔名〕(1)「しー」に同じ。(2)しんし。布を染色したり洗い張りに用いる突張り針。紺屋用語。「しーし張り」。

じーじ〔名〕魚。煮・焼・料理した魚もじーじ又は「じーじー」と言う。主として幼少児用語。

しーしんぼー〔名〕つらら。垂水。

じーとる〔形〕腫物の為周囲が広く地腫れて痛むこと。

しーばり〔名〕とげ。刺。針状の竹や木の小片。「しーばりの立った」。「すいーばり」も同じ。

しーばりつく〔動〕しがみつ。しっかり吸い着く。「章魚んしーばりちいーた(たこが吸いついた)」。「すいーばりつく」も同じ。

しーばりづよか〔形〕頑張り強い。辛抱強い。

じーやん〔名〕おじいさん。「じいー・ちーやん・じーさん」も同じ。

しーら〔名〕しひな。「しーら米・しーら豆・しーら麦」。「しーらん先走り(軽薄な者が弁えなく軽はずみに行動する・しー

ら米は充実した米よりも軽く先に飛びでてくる)」。

しーれ〔動〕技を仕込む。教え身につけさせる。しつける。「しいるる・しいれる・しいれする・つけえいれ」も同じ。「牛をしーれする(農耕に使えるように仕込む)」。

しあげめえーり〔名〕仕上げ詣り。葬儀埋葬を終り一同家に引きあげた後、組(講中)により新墓の体裁を整えて貰い諸事完了を受けると、遺族は更めて墓参りする。これから49日間の夕詣り朝参りがはじまる。又この詣りから「四十^{じゅうし}九^く日^{にち}団^{だん}子^ご」を供え祀る。尚、朝・昼・夕の3回墓参りの地区もある。

しあさって〔名〕明後々口。「しやさって」も同じ。

しいのき〔名〕榎。「すだじい・いたじい・ながじい」の名がある。ぶな科の植物。

しうをらつ〔副〕十分に塩気を利かすこと。「しうをらと」も同じ。

しえる〔動〕強要する。しいる。酒食を無理にすすめる。

しえんぼん〔名〕酒宴盆。酒宴の席に料理品を載せる大盆。

しおい〔名〕神に供え用いる潮水。「おしおい^{しん}波^{なみ}み・振^ふり」。「しをい」。

じおうぐさ〔名〕きらんそう。しそ科の植物。

しおけ〔名〕惣菜。酒の肴。お茶請。





じおし〔名〕土地を台帳に引き合せ丈量（一丈単位に測量）すること。「ぢをし」も同じ。

しおどーらいり〔名〕塩俵入り。往昔産児制限の一つとして塩俵に入れ間引きしたと。産児間引きの隠語。「お前やあ塩俵に入れられちよったつば、爺やんの助け出さしたつちゅうばい」。「しをどーらいり」も同じ。

しが〔名〕魚類の行商人。「うら」から「まち」や「いなか」に「しがてぼ」と呼ぶ竹籠で魚を売り歩いた。

しかう〔動〕準備する。作る。用意する。設置する。「夕飯しかう」「しかうちよくけえに……」。

じがき〔名〕自生牡蠣。養殖牡蠣に対し、海岸岩礁に自棲する小粒の牡蠣は、天然物として味がよく評価が高い。地牡蠣。

じかきむし〔名〕舞いまい虫。鼓虫。水すまし。

ししかし〔副〕滅多に……でない。あまり……でない。「ししかし来たこたあ（事は）無か」「ししかしかう知らん」「ししかしかうなか」。

じかじか〔形〕(1)とげ類で突き刺すさま。(2)疼痛するさま。(3)松葉や針で小児を刺す真似をして、たしなめたり、からかったりして「じがじがするぞー」と。「じがじが」も同じ。

ししかしかむなか〔形動〕しょうもない。やくざな。やつかしいな。「ししかしかむなか事言うな」「ししかしかむなかような品物持っち来ち」。「しかとむなか・ししかしかもなか」も同。

じかた〔名〕島から見た対岸。本土。船上から見た本土・本島。

しがてぼ〔名〕魚行商人の荷いてぼ。「てぼ」は竹製箆籠。「しをてぼ」の意とも言い「六尺」天秤棒で担ぐ。

しかとむしれん〔形動〕粗末な。気に入らぬ。つまらない。たいしたものでない。

じかのか〔名〕貨幣を指で廻して急に掌で覆い表か裏かを言い当てさせる賭けごと。

じがばらかき〔名〕僅かの事にすぐ腹を立てる者。「じとばらかき」ともいう。

しかぶる〔動〕大小便を洩らすこと。

じかよー〔形〕刺す真似をして小児をおどしたり、たしなめたりするさま。「痛いわよー」に当るか。

しがらしか〔形〕寒気の為肌を刺す様に感ずること。「こん頃大分しがらしか如なり申した」。

しがるる〔形〕枯れる。麦・大豆等が立枯れ状になるさま。「しがれる・しがれちしもうた・しがれちよる」などと用いる。

しかんに〔副〕嚴重に。しっか

りと。

しかんにかまゆ〔形動〕緊張した態度で待ち構える。「しかんにかまゆる」も同じ。

しき〔助〕しか。しこ。だけ。〔動〕しく。あぐらかく。

じぎ〔名〕辞儀。辞退。遠慮。「そげんじぎばっかりせじいおあがりよ」。

しきくさ〔名〕田の苗床に地肥等として入れる青草。

しきごめ〔名〕富者の葬式は米俵2俵又は4俵の上に棺を据えて行った。この米を「しきごめ」と呼び、後日祠堂料(米)として寺へ献納された。

しきのー〔名〕敷布。夏季飯ぞうけの底に敷いた。「しきの」ともいう。「ふきのー・ふきの」は拭き布。

しきゆーれい〔名〕海上に現われる妖怪の類なりと。「しきゆーれー」。

しきりかぎりもなか〔副〕際限なし。

しきりほーじ〔名〕死者49日目の寺送り法事。「しきり」「てらおくり」ともいう。49日目が死後3月目にかかるのを忌み2か月内に「しきり」を済ませるのが慣習である。

しく〔動〕(1)あぐらをかく。「皆さんおきまっせー」「ご免蒙^{うか}つちしきまっしょうや」。(2)宿の意か。夫々やるべき所にやり、落ちつくべき所に落ちつく。「子供達もしくじくいつけさした(養子や嫁にやり職に

も就かした)」。

しくみ〔形〕「しくむ」に同じ。

しくむ〔形〕漏るるともなく水ものが泌^{しみ}みでるさま。

じぐらをどり〔形〕子どもが泣きわめいて、おどり狂うさま。無規則なりズムや仕ぐさで勝手踊りするさま。「じぐらをどりし泣きをする・じいぐらをどりしをらす」などと用いる。

しくり〔名〕田畑・家屋敷・公道にさしかかり邪魔や妨げになった樹木。これらの樹木や枝梢は「しくりぎり」して取り除く。①所有者。②公署。③所有者の了解や許可承認を受けて。

しくる〔動〕(1)時化する。(2)生育不良になる。しけ兒。「しける」も同じ。

じくわじくわ〔形〕水分多過でぬかるみ、ぐちゃぐちゃ状のさま。「じくわじくわ」も同じ。

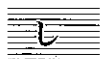
じくわつく〔形〕「じくわじくわ」になるさま。

しぐわつび〔名〕四月日。旧暦4月の日照。麦^{こむぎ}収納の日和りなりとある。

しけ〔形〕妊娠初期のわずらい。

しけけん〔名〕子供遊戯片足跳び。「けしけし・けんけん」に同じ。

しけご〔名〕乳児を抱え乍ら、次の妊娠をし、為に乳児の発育が阻害された立場の乳児を



いう。

しけこむ〔動〕(1)ひたり込む。酒色に溺れる。「いりびたる・つかりこむ」「女のもとにしけこむ」。(2)船舶漁師等時化の為、船出不能になる。「しけこまれる(れた)」。

しけつりだす〔動〕少量の誘発により一層欲望を駆り立てられ、そそられていく動き(飲食物等々)。

しげの一〔形〕並以上に。普通以上に。一層。「しげの一酒好き」。

しげり〔動〕船霊様の「しげり」に「大漁しげり」と「難^{なん}波^はしげり」の2通りがあると。船の中にて小虫か、謎の噂する如き小さな声のすることあり。海士や航海者は海上異変の神告なりという。これを「船霊様のしげり」とか「船霊様がしげらっしゃる」というなり。とある。「ふなだま」参照。

しける〔動〕(1)海が荒れる。(2)痩せおとろえる。(3)動植物の発育不良。

しげる〔動〕「しげり」に同じ。

しけん〔名〕四剣。神楽舞の名。往昔には「してん」と言ったとか。剣(刀)を持って4人の神官が舞う。

しこ〔接尾〕だけ。「あれしこ・これしこ」「しき」に同じ。「是っしや・あれっしや」なども同義。

しこー〔名〕仕方。構え。用意。試行。趣向。準備。「しこ

一ん悪か」。

しこう〔名〕死講。死者がでると要請に応じて講中から葬儀執行に伴う手伝いに出る。これを「しこう」といい、講中の相互扶助活動である。

じこさん〔名〕お利口さん。利口者。「じこもん」ともいう。しこしこ〔副〕元気よく歩くさま。「しこしこし戻っち来た」。すっきりはっきりしたさま。「しこしこしちよつちうまか(った)」。

しこっばら〔副・形動〕充分に。腹いっぱい。

しこつべらしか〔形〕しかつめらしか。「しこつめらしか」も同じ。

しこな〔名〕渾名。あだな。あざな。

しこぶつ〔名〕丈夫。頑丈。元氣者。

しこもよ〔動〕構えをする。準備する。「しこもよー・しこーもよー・しこー」も同じ。「しこもよーばかりで……でない」。「趣向模様」か。

しこる〔動〕(1)力む。繁る。茂る。勢を増す。「そうしこるな(力むな)」。(2)陰茎の勃起をいう。

しこれ〔名〕嵩。「しこれが少なか・しこればかりで……がない」。

しこん〔名〕いぬむらさき。植物名。

ししかぶ〔名〕根株の畑に残った物。残った根株そのもの。

「白菜のししかぶ」。

ししだまり〔名〕微量な収穫物。

ししたわさり〔感〕「しったり」同。

ししな〔名〕うまごやし。螺旋状に巻いた果の縁に毛状突起がつく。獅子のたてがみを連想した名。まめ科。

しじゅーくだご〔名〕死者があると49日間は毎日小さい団子49個宛を紙包みして墓参りする。然し多くは49日分を一度に作り供えて、墓参りするだけに簡略化されている。この団子は死者の旅路の途中悪魔につけられた折投げ与えて難を逃がれる為と。

しじゅーくんちもち〔名〕四九日の寺送りに新仏と一緒に寺に供える餅。

しじゅーしちくさ〔名〕(1)肩とあらゆるいろいろの病氣。(2)いろいろのもの。くさぐさ。

じしんましん〔名〕真実・実際の意。総ての場合に用いられ「じしんましんのきょうだい」などと言うと。

しずく〔名〕吸物。酒宴の後半のもてなしに「吸物」をだす。相伴人は「粗末な汁物ですがの意をこめて」「しずく」云々と客に案内しすすめる。「したじ・おすいー・お汁」ともいう。吸物の付く宴席は正式法。

じぜーかぎ〔名〕自在鉤。囲炉裏にぶら下げ、湯沸し・煮炊きに用いた。「じぜかぎ・ぜぜ

かぎ」等とも呼ぶ。

しせつ〔名〕正月・盆などの節日。

じぞーみみ〔名〕(1)大きな耳。地藏様の耳のように大きい耳は福相耳。(2)他人の言をよく聞きとれる良い耳。(3)聞き洩らしのない人の例え。

じだ〔名〕地面。「ぢだ・ぢで」も同じ。「じだ(じでえ)物置くな、汚れちまおうが」。

じだがり〔動〕稲刈り法の一つで、全部を刈り倒して、地面に並べ乾燥して収納する。乾田で用いた法。

したき〔名〕牛馬の糞尿敷藁等の混り合った厩肥。牛舎肥。堆厩肥。

じたくわち〔名〕じたじたの地面。「じたくわつちょ」ともいう。

したじ〔名〕汁。吸物。煮物・汁物の汁。「おつけ汁・おしる」の意にも用いる。吸物の案内にも「しずく・お吸物・おすいー」と同様に用いる。

しだしがおーごつ〔形動〕支度おめかしを済ませ送りだすまでが大仕事。

じたじた〔副〕水気・湿気多くじつとりとなったさま。

したべら〔名〕牛の鞍・てーきの下に敷く敷物。牛の背中肌当て(肌敷)の上に、多くは藁で分厚く編んだ鞍当てを背の両側に置き鞍を胴に締め付け安定させる大事な鞍下敷物。鞍やてーきの大きさに合わせ



長方形に作り鞍部に結び付けてある。

したゆ〔名〕 焼酎・酒類の搾り滓汁。牛馬に与えるよい汁物飼料。

じだらっか〔形動〕 自墮落的。ふしだらな。じだらくな。

したる〔動〕 こぼれる。あふれる。しずくとなり落ちる。「すたる」同。

しち〔接頭〕 強意発語。「しち面倒な・しちやかまし」。「動」して。為す。「悪か事ばっかりしち……」。

しちくじゅー〔形動〕 良い加減な。でたらめ。順不同。七九十。

しちこしゃくな〔形動〕 強意の小癪さ。

しちどにしめ〔形〕 物がすっかり汚れ古びた色調になるさま。七度着染。「しちどーにしめ・しっどーにしめ」などともいう。

しちへんまかねえ〔名〕 七遍賄い。盆の15日仏の発ち日には仏様への賄いを7回もするが、「七遍賄うても八遍飢えさす」と言って、盆中の女性の多忙さも又格別であった。

しちまんはちまん〔形動〕 数々の悪口雑言。

しちめんどろ〔形動〕 とても面倒。

しちや〔動〕 した。為した。「しち」の動詞に同じ。

しちやかましか〔形動〕 やかましい。面倒な。うるさい。

「しっちゃんかましか」と用いることが多い。

しちよーろ〔名〕 脇纏。「わきろ」に同じ。「わきろこぎ」を「しちよーろおし」という。

しちよる〔形動〕 している。「しちよるしちよるで(は)、やつちよる」。

しちよろー〔形動〕 したろう。

しつくる〔動〕 第二子以下の子を他に屋敷を求め一家を構えさせる。「しっくる・しつけさす(さした)」も同じ。

しっけえ〔副〕 決して。絶対に。全く。「しっけー」も同じ。

しつけもん〔動〕 季節・時期毎の農作物の作付け。

しっこ〔名〕 小便。しょんべん。主として小児語(一般的にも用いるが)。

じっし〔名〕 真実。実際。本当。「じっしな話・親子・母親・子・親」。

しっしりこんがり〔副〕 根気よく。丹念に。「しっしりこんがり一日かっち、しち(して)しもうた(終った)」。

しったーさりいるわん〔感〕 全くいやだ。全くもって嫌だよ。同類語下記の通り。「しったーさりいるわんいえー・しったーさりいるわんな・しったーさりいるわんばい・しったーさりいるわんばな」。

しったーり〔感〕 「しったり」に同じ。

しったり〔感〕 全く。全く何で

もない。「そげな事^{こと}しつたりねえ、そげな事のあるもんけえ」。そんなこと嫌だの意で、「しつたり。わが(自分)でおし(しなさい)」。『しつたり・しつたりさり』とも言う。

じつたり〔名〕ぬかるみ。「じつたりい這入^{はい}っちしもた」。「じたくわち」に同じ。

しつたりいるわん〔感〕全く嫌だ。「しつたりいるわんいえー・いるわんばい・いるわんばな」も同じ。

しっちゃこっち〔形動〕あべこべ。反対に。逆に。「すっちゃこっち」に同じ。

しっちゃめえり〔名〕七社参拝。島内各所に170社以上祀られている神社の中で、昔から崇敬の篤い由緒の七神社を徒歩順拝した。「しちしゃまいり」ともいう。七社とは、当国(彦岐)一之宮興神社(印鑑大明神・国府社・湯岳興触)・白沙八幡神社(筒城八幡宮・筒城白沙浜)・住吉神社(旧国幣中社・住吉東触)・国片主神社(国分天満宮・国分大神・国分本村触)・本宮八幡神社(八幡宮・本宮西触)・聖母神社(香椎大明神・聖母大菩薩・勝本正村)・箱崎八幡神社(海裏宮・海裏八幡宮・釘之尾触根抵)である。(彦岐国神社誌・昭・15彦岐国神職会刊による)。

しच्चよる〔動〕知っている。

しつとー〔名〕(1)痕跡。跡形。

「かさ(おでき)のしつとー・しつとーがはげる」。「つー」「どー」に同じ。「しつとーがさ(梅毒性かさ)」。

しつとーにしめ〔形〕「しちどにしめ」に同じ。

しつとう〔名〕七島蘭草。茎が三角形、縦に割いてござや畳表に編む。蘭草より軟かい。い類、いぐさ科。「しちとうい・しつとー」も同じ。

じつとばら〔名〕短気。何でもないことに腹を立てる。嫉妬腹か。「じつとばらかく・じがばらかく」。

しつとば〔名〕落穂。落穂拾い。

じつともしゃぐわつともす〔形〕少しずつと思つて注ぐと、ぐわつと沢山溢れ出てこぼれるさま。

じっぱ〔形〕立派。「ぎっぱ・ぢっぱ」も同じ。

しっぱさっぱ〔副〕食物をさもうまそうに食べるさまの表現。「しっぱさっぱに食ちしもうた」。

しっぱれー〔名〕親の葬儀。親の別れ。「今日は私の親のしっぱれーですけえにゆつくり飲んじ(飲おじ)おくれ……」。

しっぱーぐち〔形〕への字形に口をひき結ぶさま。

しっぱこき〔名〕じゃんけんで勝負を決め勝者が敗者の手の甲を打つ遊び、2人以上数人1組で興ずる。

しで〔名〕(1)下。下方。手許の



方。「して川」「してよま・して縄」。(2)資金。資産。「してん薄か(資金不足)」。

して一ちとる〔動〕濡れたりただれたりした水分を紙や布片にしみ込ませて吸い取らせる。

してがわ〔名〕汲みかわ(井戸)の下部に付随して構えた水堀。この水で洗いや雑用水をまかなう。「して川」ともいって流れ出る仕組である。

してなわ〔名〕牛を山野に連れ出し繋留する継ぎ足し用の牛縄(棕梠縄)。

してよま〔名〕舂揚げや釣りで手許に持っている擦麻(糸)の余裕部分。

してん〔名〕四天。神楽舞の名。「西剣」と呼ぶ神楽の昔(旧)名。

しと〔動〕水を撒いて潤すこと。「しとする・しとる・しとらせる」。

しどいか〔名〕やりいか科のじんどういか。頭足類烏賊。

しとき〔名〕粳米を搗き砕き粉状にして水練り団子状にしたもの。祭りや新建築祝いに神前に供え、祝いの一品として料理に添える。糰。黍餅。

しときもち〔名〕遠見番所の報告を役所に伝達する使者の名。尚藩からの通信船も斯う呼び帆は用いず、七丁艀の早船であった(藩政時代)。

しどけ〔名〕節度。「しどけ無し(節度・しまりのない生活態度

者)」。精神的・物質的・金銭面・生活全般で。

しとしと〔副〕湿気ばんだ状態。「こん着物なあしとしとしちよつちい着はされん」。

しとみ〔名〕竹を芯にして藁で編み舟の側に取り付ける物。葎(建具)。

しとり〔名〕織機の部品名。縦糸を「まきた」に取り付ける時、糸と糸の間にはさむ竹片。

しとる〔形〕湿る。乾燥物が次第に湿気を含む。「塩が・海苔がしとる」。

しな〔助〕の時。折り。「帰りしなに立寄っちお呉れ」「しね」も同。

しなない〔名〕漁夫と船主(資本主・親方)側との雇傭条件等の関係。総水揚げから雑費を引去り、残額を2分してその1を船主側、他の1を漁夫及び船で分け取るとり決め事。

しなしな〔副〕しなやかで軟らかい。

しなな〔名〕肛門。「しなの」も同。

しなのがき〔名〕信濃豆柿。実が小粒、熟後乾燥黒変した物を食用する。

しなのす〔名〕「しなな」に同じ。「しりのす」ともいう。

しにぐ〔名〕死にぎま。死に方。

しにぐさ〔名〕死因となった病氣。「もとくさ」ともいって、「しにぐ」と同義にも用いる。

しにまく〔名〕葬儀入棺に要す

る儀式的諸道具類。仕舞い道具とも言う。

しね〔助〕「しな」に同じ。帰りしね。「しねー・しねえ・しねえー」も同じ。「こっちしねえー来え」。

じねんぼこ〔名〕生え抜き。土着者。生粋のもの。「じげもん」も同じ。

しのー〔名〕収納。米・麦・大豆他各種作物を「せんば・ぶり・箕」等で脱穀収納すること。「しのう」も同じ。

じのかみ〔名〕地の神。各戸屋敷神として、屋敷内や背戸山に祀る。

しのがら〔名〕麻の茎の表皮をむいた稈。盆の仏の簀や、まこもの座の下に編んで敷いた。「しのがらばし・あさがらばし」。くわ科の植物。

じのかんさー〔名〕「じのかみ」に同じ。「ちのかみ・ちのかんさー」に同じ。

しのぶ〔動〕(1)片付けする。掃除する。(2)格納する。しまい込む。処分する。「道具しのぶ・茶碗しのぶる」。「しのぶる」「なわす」「しのべる」も同じ。しまつする・片付ける。

しのまき〔動〕綿を糸に紡ぐ為小さい棒に巻付け、棒を引抜き管状にしていくこと。

しのりかかる〔動〕反抗してくっつく。「こーまかなりしちよつち、しのりかかち来たばな」。「むくりかかる」に似る。

しのんぼ〔名〕盲僧。「しのんぼう」。

しば〔助数〕綱引きの勝負度数を表わす語、喧嘩にも用いた。

じばいえ〔名〕南東風。多くは雨を伴ない、漁師はこの風を嫌う。「じばえ・やまぜ」と同じと言う者もあるが、「やまぜ」は冬季の南風と。

じばえごち〔名〕じばえのやや東風がかった風。東南東風か。

しばかき〔名〕「むぎやき」に同じ。

しばく〔動〕叩く。打つ。なぐる。「しばくぞー・うっしばく・うっしばかるぞー」などという。「しまく」も同じ。

しばとり〔名〕時刻による鶏の鳴き。一番どり・二番どり・三番どり・四番どり（しばとり）が鳴く頃は夜が明ける。「しば（しばん）鶏」。

じばり〔名〕(1)鯨組の地方に位置する網船の一手。(2)家屋の建設で胴突きが終ると建物の広さに合わせ「しめ縄を張り巡らし、中央に竹4本を立て、大工が墨壺で墨を打つ。これを地張り・地墨・地貰い等ともいう。

しば〔名〕(1)藻のはかま屑。稲のはかま。「わらしば」。(2)きわだと呼ばれる魚の名。「まぐろ・びんが・しばがつ」ともいう。

しばがつを〔名〕鰹に似て稍小振り。

しばとばな〔名〕死人花。彼岸

し

花。

しびり〔名〕痺。しびれ。「しびりのしち歩まれん」「しびるる」も同。〔動〕少しずつ洩れる。「しびり出る」「しびる」も同じ。

しぶき〔名〕楊梅。やまもも。染料としての名。やまもも科の樹木。

じぶく〔名〕家屋建築の土台下地石。礎石。「地伏石・地行石」。

しぶる〔動〕しゃぶる。「赤児ん乳しぶる」「指しぶる」。

じぶんづかい〔名〕吉凶のふれめえーに招待した客に、更に開宴案内の使いをだすこと。

じぶんどき〔名〕食事時刻。「じぶんどきですけえにどうぞ、おあがちおくれませー」。

しべ〔名〕割り竹を細めに削りあげ房状に切った紙を巻き付け、頂に紙花を作り付ける。葬儀や仏事供養毎に僧侶作り、「ごー」に立て供えた後、墓の花筒に挿す。「やなぎばな」ともいう。「しべー」も同じ。

しべぐし〔名〕「しべ」を作る軸心となる1尺2〜3寸(30〜40厘長)の竹串。「しべーぐし」も同じ。

しばい〔形〕強い。頑健。丈夫な。

しばか〔形〕「しばい」に同じ。「からど(だ)んしばか」。「ばばんなーしばかな、引いちゃ見いず(おばあさんはお元気ですか、引っ張って見たこと

も(此の所)なく、ようわからん。と、おじいさん曰く)」。

じまい〔名〕地舞。神楽舞の名。太鼓・笛の音楽につれ4人四方で舞う。多くは舞の本、前段に舞う。「みだれ舞」に対する本舞即ち「ぢまい」。

しまく〔動〕「しばく(叩く)」に同。

しますするな〔助動〕なさいますな。しないで下さい。「しまっするな」も同じ。

しまだい〔名〕ちしゃだい。ひしゃだい。「くろうち」ともいう。魚名。

しまつ〔名〕節約。儉約。しまりや。「けち」の意にも。「ありやしまつやじゃけえに(あの人は……)」。

しまひきがつを〔名〕結入り纏。

しまよせ〔名〕遠くの島々が近くに見える現象。「島寄せしちよる・島ん寄せちよる」という。こんな日はこの後天候下り坂、雨になると。

じみ〔名〕灯火の芯となる布や木片。「ランプ・カンテラ・ことぼし」類灯火の芯。「とーしみ」ともいう。

しみのいる〔形〕熱心度がでて、真剣になるさま。「此頃仕事いも、しみのいるごつなつた」「仕事たあしみいれちせにやでけんぞ」。

じみのき〔名〕(1)はないかだ。みずき科の植物。(2)はくさん

ぼく。すいかずら科。(1)(2)とも灯心様の白い髓（し）がとれる。

じむ〔動〕じみる。その様子になる。「所帯（し）じむ」。

しめーざけ〔名〕死者納棺に当り、その場で各自左手酌で酒を呑み、死者の顔にも振りかけて納棺にかかる。これを「しめーざけ（仕舞い・（し）酒）」という。それ故普段酌をする時は、左手でしない戒がある。

しめーしょうにち〔名〕一年最終月師走に迎える故人の命日。心して墓参する。

しめえ〔名〕物事の終り。終結。

しめえーのみずまつり〔名〕葬儀埋葬が終って墓地から戻り、血筋の者は衣服を着替えて、水・米・ごろだご・線香を持ち新墓参りする。これを「しあげ・又は・しめえーのみずまつり」という。

しめおろし〔名〕神社祭礼前に新しい注連縄を配置する神事。上部に枝の揃った男竹2本に新注連縄の両端を神幸の道幅に合わせ結び要所に立てる。鳥居の注連縄は各社決めた日に行なう。勝本聖母宮は旧暦8月7日に行ない、「ふなぐろ」の乗子も決めていた。

しめし〔名〕おむつ。おしめ。

しめぼし〔名〕標し。海藻類を海岸に干したり、堆積したものに所有標として挿し立てる。柴や竹の類。

じめんとり〔名〕地面取り合い

遊び。大きめの釘で交互に次々に投げ立て進む。相手の投げ立てが失敗したら続けて進み、相手の出を抑え乍ら自己の地を線で結び拡大していく。

しもいも〔名〕表皮赤く肉質軟かで甘味もよく降霜の頃収穫する甘藷。

しもかぶり〔名〕11月12月と年の瀬も押し詰って出生する児をいう。

しもぎやし〔名〕大霜の降りた後には多くの場合雨となる。この雨を「しもぎやし（霜消やし）」の雨と呼ぶ。

しもけ〔名〕春先朝露が多いと南風の嵐となる。これを「しもけ」と呼び、露の多い程風も強いとされている。又冬霜の多いのも「しもけ」と言い、風の前兆とされる。

しもつ〔名〕水田や河川の堤防工事用材をいう。生木を伐って杭として「しがらみ」を作る。この材料を「しもつ」という。

しもつる〔名〕失敗する。主として家業の不振不成績に終るのに用いる。

しもばれ〔名〕冬季の手足等の凍瘡。「しもやけ」ともいう。

しもりくじら〔名〕死鯨の腐敗して海岸に流れ寄ったもの。

しもる〔動〕鯨が死んで浮き沈み流れること。

しや〔名〕(1)箸。箸（しや）という程の意。「しやとしやの出合」さ

し

て結末は。(2)組合組織。「しやを作っち仕事する」。

じゃ(助)で。「で・あ」の結合音。「猫じゃつた・金じゃつた」。ぢや。

しゃー〔名〕葉。お菜。せー。せえ。大根・人参等を千切りにして、醤油酢塩砂糖味噌等々好みに味付け和えたもの。生のままと煮上げ物がある。「かつかん、しゃーかむ(母さん、菜が食べたい)」と息子いわく。

じゃー(助)それでは。「そいじゃー行くけん」「そいじゃー又おいでな」。では。

じゃがたる〔名〕じゃがいも・馬鈴薯。「じゃがたるいも・じゃが」。

じゃがたるみかん〔名〕夏蜜柑の一種。皮薄く味強い。「じゃがたらみかん」も同じ。みかん科。

しゃかねぶつ〔名〕念仏の一種名。

じゃき〔名〕おはじき遊び。

じゃきゅー〔名〕たわむれの言行。「じゃきゅーするな」。「ぞーたん(じょうだん)」に類する。

しゃくしずってー〔名〕木製ずってーの一種。上端に鉛の錘を取付け、海中で斜になるように装置したずってー。漁具名。

しゃくしな〔名〕杓子菜。筍菜。

しゃくしにぎる〔動〕家計・

台所の支配権を握る。会計をにぎる。

しゃくしゆるす〔名〕嫁が姑の隠居などにより本家の経済等を譲られる。

しゃくだけ〔名〕物差。尺竹。尺丈。

しゃしゃぶ〔名〕しゃしゃんぼの木や実。わくら。ちゃせんのかき。「しゃしゃぶのかき」ともいう。つつじ科。

しゃしゃり〔名〕刺蟻。すがり。刺毒強い。蟻の一種。

しゃだつ〔名〕「そーがい」の帆柱に括りつける為の短い柱。鯨組用語。

しゃたるばかり〔副〕ほんの僅か。

しゃちこぼる〔形〕固くかしこまる。しゃちほこぼる。緊張し固くなる様。

しゃつきりしゃんと〔副〕きちんと。はっきりと。態度正しく。「しゃつきり」「しゃんと」。

しゃつちいー〔副〕しきりに。切に。

じゃによって〔接〕そんなわけ。それだから。

しゃばふたぎ〔名〕老人の甚だ長生きを自ら卑下し自嘲的に発する語。婆婆塞ぎ。「早よ死にやよかにとしゃばふたぎしち死にもせん」と自ら。

しゃはる〔形〕糊付けされ硬ばる着物。

しゃびく〔動〕釣糸を曳いたり緩めたりして魚を餌にさそう

動作。
 しやま〔敬〕様。「お父しやま・姉しやま・亀しやま」。しやん。ちゃん。
 じゃみ〔名〕お手玉。「じゃみする」。
 じゃもねえ〔助〕のものに。だもの。
 しやらきやらく〔動〕歩き廻る。「しやらきやらくな(歩き廻るな)」。
 しゃらく〔動〕歩く。あちこち歩く。〔名〕物事の結末。「しゃらくつけにやでけん」。
 じゃらりくわらり〔副〕なまけの形容として添える。「のらりくわらり」に似る。「じゃらりくわらり」も同じ。
 しゃり〔助動〕なさい。なさい。なされ。「行かつ・米らっしゃりた」。
 しゃりき〔名〕車力。大八車。荷車。
 しゃりしゃり〔副〕織物等手障りさらさらとしたさま。「しゃりつと」。
 しゃりつく〔副〕手障りさらさらと。
 しゃりつと〔副〕「しゃりしゃり」に同じ。さらさらと快い手障り。
 しゃりむり〔副〕無理矢理。遮二無二。是非に。
 しゃる〔助動〕される。なされる。「行かつ・米らっしゃる」。しゃり。
 しゃん〔名〕しあん。思案。
 しゃん〔接尾〕「とと・かかしや

ん」「幸しやん」。「ちゃん」に同じ。
 じゃんくお〔形〕あばた。「じゃんくおでけ・じゃんくおづら」。「じゃんこ」も同じ。
 じゃんけんちよす〔名〕「じゃんけんばい(ん)」。じゃんけんのかけ声。
 しゃんす〔名〕情人。「あいかり・ありかり・ばかのしゃんす待ち」。
 しゃんすな〔動〕しなさんな。
 しゆー〔接尾〕人を呼ぶ名に付く。目下・同輩を「武しゆー・兼しゆー・和しゆー」と。「さん・くん・くわん」などに同じ。〔名〕升。「酒ーしゅう・焼酎二しゆー持ち来た」。
 じゆーぐらりん〔名〕周囲。「じゆーぐらりんに集まれ」。「家んじゆーぐらりんに松の木植えた」。
 じゆーさんちずーすいー〔名〕師走・正月・盆月の13日に作る雑炊。米小豆団子野菜類を入れ雑炊にし、神仏に供え家人もこれを食べた。十三日雑炊。
 しゆーじ〔名〕家と家の間を抜ける路地。裏通りに通じる小路。
 じゆーする〔動〕萎縮する。恐縮するにも用いる。ちぢこまる。
 じゆーつくる〔動〕長いものが丸くちぢこまる。ちぢこまり動かないさま。寒い日家に閉じ籠るさまにも用いる。「蛇



がじゅーつくる・猫がじゅーつくる・いそぎんちゃくは触るとすぐじゅーつくる。

じゅーなづき〔名〕時雨月。旧暦10月を言う。

じゅーねんわり〔名〕旧藩時代の地割り制度。10年毎に田畑耕地の割り替えを行ない農民の土地私有はなかった。10年割り。地割制度を参照。

じゅーはちがさ〔名〕幼少年時頭や顔に出る湿疹状吹出物。医療では治せなかったが、17・18歳頃になると自然に治ったと。異性に触れられたり、息を吹きかけられたり、なめてもらったりすると治ると言った。

じゅーめんつくろ〔形〕幼児等泣き顔(面)になること。泣きだしそうになる。洗面つくる。

しゅうぎ〔名〕婚礼。結婚式。「しゅうぎのありよる」と言えは結婚式に限る表現。「しゅうげん」も同じ。

しゅうじ〔名〕入り口。家と家の境界。小溝。浦町で用いられたが、その時々で内容も変った。「しゅーじ」に同じ。

しゅえんぼん〔名〕酒宴の席の座敷中央に料理品の盛り鉢を飾り載せる大角盆。「しえんぼん」が一般的。婚礼の席に出す「しえんぼん」には人参や大根で作った高砂の翁・姫の人形、鯛の浜焼き、魚の湯びき、にぶたし等々の盛り鉢

が揃えられる。

しゅし〔名〕酢。

じゅずつなぎ〔名〕数珠のように長く連なり継ぐこと。

しゅみせん〔名〕鯨のひげ・山棕櫚の長い葉柄を薄くはいだ皮などを弓に張り鬼鼠に負わせて揚げ、喰りにした。現在はゴム・ビニール等を用いるようである。この弓張りを言う。

じゅるい〔形〕じるい。湿気多過道。

しゅんかん〔名〕精進料理の皿盛り。飯の時、二の膳として、大根・人参・牛蒡・里芋・山芋・蓮根・蒟蒻・干瓢・揚豆腐・錦麴・銀杏・扇麴・蕨・椎茸・蜜柑・昆布などの中から適宜偶数品目組み合わせ平皿に盛り付け配膳する。「しんかん」と同じ。この皿を「しゅんかんざら」「しんかんざら」といい、大きめの平皿。

じょー〔接尾〕(1)人を呼ぶ接尾辞。本来は「さま」位の敬称。「姉じょー・妹じょー」。(2)対者を軽侮して「隣の兼じょーはどけ行きをるじゃりーる」。「後家じょー」。

しゅーいのみ〔名〕醤油の実から来た名。「しゅーゆのみ・しゅいのみ・しょうゆのみ」の呼び方がある。「もろみ」と世間一般名で呼ぶ物。醤油の搾り滓に似るところからの名。

しゅーかぐら〔名〕小神楽。祭主共5人で勤める。四本



幣・二本幣・神舞・真神の4
神楽を幣神楽と呼び、その他
に、野槌・鉦舞・八咫鳥・橘・
幣納め・殿^{とん}祝いの6座を加え
たものを小神楽という。奉納
経費は普通玄米一俵（3斗2
升俵）と言われていた。

しよーく〔名〕小工。木挽き。
大工に対し、前段の建築材を
山採りし調製する工人。

じよーくお〔名〕藁蛙。

しよーくわ〔名〕松の花の花
粉。団子に付けて黄粉の代用
にする。

しよーけ〔名〕竹で編んだざる
籠。「そーけ」も同じ。

しよーけい〔名〕むぎやき。魚
の名。

じよーこばん〔名〕荒神様の
灯明台の引出しのある箱の名。

しよーさん〔名〕流産。お産。

しよーじあげ〔名〕灯籠あげ
の日に行なう精進あげの行事。
二十日^{はつか}盆に行なう。

じよーしき〔動〕言い付けに背
く事。強情張る。頑固を通す。

しよーじきめ〔動〕桶・樽等
の板と板の目をきっちりと合
わせること。「しよーじきめか
る水が漏る」。

しよーじきもん〔名〕秤。天
秤。

しよーじみな〔形〕生新しい。
生じ身な。「しよーじみな体
ば、どーしち切らるるちゅー
なな（生き活きしている身
体を、どうして切開手術など
できようか、おお恐い話

だ」。

じよーじょう〔名〕草履。小
児語。

しよーじんあげ〔名〕49日寺
送り法事を終えた後や翌日・
盆の17日に、長い間の精進料
理生活を廃し、なまぐさを用
いる平常生活に戻る事。又、
灯籠あげの日の後に行なうと
ころもあるが近年は簡略型が
多い。

しよーじんあぶら〔名〕精進
用揚げ油。

しよーちょー〔名〕焼酎。「お
しょうちょう」ともいう。

しよーなじょーね〔副〕銘々
それ相応に。「しよーなじょー
ね、娘どむも嫁げえ行たちし
めえーましたつ……」。

じよーに〔副〕常に。平常に。
不断に。平生に。「じよーに働
かにや……」。

しよーにち〔名〕死者の命日。
忌日。「たちび・あたりび」と
もいう。

しよーにやく〔名〕耐久力。
「腹入減っち、しよーにやくの
無か」。

しよーぬはしっちょる〔形
動〕気性がはげしい。性の馳
っちょる。

しよーぬよか〔形動〕粗悪な
さま。お粗末な。「おろよか」
も同じ。

しよーねとる〔動〕むづかる。
世話やかせる。心配させる。

じよーのー〔名〕上納米。小作
料。



じょーびったり〔副〕常に。しよつちゅう。「びったり」「じょーに」。

じょーめ〔名〕正月14日「まつたて」の行事。「鬼の夜」に立てた「たら」の木を1尺(30糎)ばかりの長さに切り、皮を削り螺旋を描き、「みーれ・みーれ」と唱えつつ笠箱・俵を叩く。地域により果樹や寺の門柱の根元も叩き繁栄を除けを祈る。又これを家の門口・神前にも供える。「みーれ」は実入れ・増殖せよ、と。

しよーむく〔名〕原液。しょうもく。

しよーもく〔名〕酒類・薬品等々生粋の原液をいう。焼酎のしょうもく。

じょーもぬ〔副〕悪因には悪報あるはさも当然。当然の報い。「あれーにゃあんくれーん事は無かりやこて、じょーもぬたい……」。

しよーもんさー〔名〕(1)聖母宮の別称。(2)神功皇后の意でも用いる。聖母宮の祭神。

しよーやぬかか〔名〕「むぎやき」に同じ。魚名。「くわんふり」とも呼び、食っても食わぬ振りますところは、気位高い昔の「庄屋のかかさんに似る」とかの話があったと。

しよーやますどり〔名〕年貢上納前、庄屋にいて「うちばかり(内量り)」の枈取役の名。

しよーゆのみ〔名〕小麦麴に大豆又はそら豆等を煎り挽き

割って加え水・塩で軟らかに仕込み造る一般の名の「もろみ」をいう。

しよーよのみ〔名〕「しよーゆのみ・しよよのみ」に同じ。醤油の実。

じょーら〔名〕女郎蜘蛛。「じょーらこぶ」ともいう。「こぶ」は蜘蛛。

じょーらめん〔名〕神楽舞面の一種。

じょーり〔名〕草履。ぞうり。

しよーろーごも〔名〕盆の霊祭に使用する「まこも」編みの菰。

しよーろーねんば〔名〕うすばきとんぼ。渡りをする蜻蛉で盆の頃増数。

しよーろーぶね〔名〕(1)海で死んだ者のみ乗せて流す舟。(2)盆の15日の夜、墓場又は三辻に火を焚き送り物の棚を作り供え、又川や海岸近くでは、木や麦・小麦稈で舟型を作るなどして、盆中の供物・線香・灯籠を灯し、水祭りをして送り出す。地域的慣習もあり、色々の盆送り方をしているのが実情である。この折準備する台・舟・舟型を一般にいう。

しよーんよか〔形動〕「しよーぬよか」に同じ。「しょうによか・しよんよか」ともいう。

しよいと〔動〕しているの。

しよーゆてば〔名〕(1)漁師が防寒や出漁時、70糎角の「ねる地」の布を筒状に縫ったものを頭からすっぽり被った。

頬被りにも襟巻きにもなる便利品のこの布筒をいう。(2)醸造した醬油瓶の中に挿し込み、もろみと分離し醬油を汲み取るのに用いる竹編み丸筒。「すめてば」ともいう。

しょうゆのみ〔名〕「しよーゆのみ・しよーよのみ」に同じ。

しょうゆのみのかぶつき

〔名〕しょうゆのみに、鰯の焼身他魚の焼身をほぐして入れ、「しょうが」や香辛料の刻みものも加え混ぜ合わせた副食材。「しょうのみのかぶつき」とはしよつてもいう。

しよかた〔名〕形式。形ばかり。「しよかただけで済ます」。

しよく〔名〕机。高机に限らず低い机にも用いる。

しよくおさえ〔名〕食後の一杯の酒。「しよくおさえ」ともいう。食抑え。

しよくしよー〔名〕(1)食いあたり。食傷。(2)食い飽きする。物事に飽きる。こりごりする。「しよくしよーした」。

しよけん〔名〕世間。他地区。他国。「しよけん知らん・しよけんのせばか(人の世の苦労や人情何も分っちゃいないんだ)」。

しよこくととー〔名〕広い世間うち。「しよこくととーの人間の集まり」。

しよしき〔名〕諸式か。冠婚葬祭等の諸入用品。「しよしきが揃わぬ」。

しよじこじ〔副〕いざこざ。細々した説明や言訳。「しよじこじじゃ要らぬけえに、借った物あ早よ戻せ」。

しよたるる〔形〕塩垂る。垢汗などでしとしとしたさまになる。しめっぽくなる。「しよたれ・しよたれる」も同じ。塩樽浜を「しよたれ浜」と呼んでいる。塩樽は塩垂るなの

か。

しよつくわい〔名〕人を軽く罵る語。

じよつこ〔名〕草履。履き物。

しよてー〔名〕世帯。生活。暮し。

しよてーたつる〔名〕炊事を別にして暮す。家居は別にしても食事を共にする間は「しよてたつる」とは言わぬ。「寝泊りだけ別」ということになる。生計を別にして独立すること。「しよてたてる」も同じ。

しよてーまわり〔名〕暮し向き。食生活。暮し。「しよてー」に同じ。

しよていり〔名〕結婚後婿嫁揃って双方の親戚と新たに交際を開く為、正月や祭行事、何かの祝事の機を利用して挨拶に訪れること。又婿が嫁の家の親戚と新たに交際を開くため機を見て挨拶廻りすること

も言う。

しよならしか〔形〕動作のしとやかなさま。

しよば〔名〕蕎麦。そば。

しよびく〔動〕引っ張る。「そ



びく」に同じ。

しよぼくる〔形動〕小さく縮こまる。みすばらしい姿形になる。

しよぼくれる〔形動〕落ちぶれみすばらしいさま。「しよぼくる」に同じ。

しよむ〔動〕染まる。浸む。しみ込む。「色んしよむ」。

しよめん〔名〕護符の一種。「蘇民将来」の略とか。「しよめんかき」の日神社又は寺で書き与える。各人はこれを襟に付ける。又「ほげんぎょ」で焼いた「ほろむかし」の小枝に結び神前や家の戸口に挿す。「いちやまぶり」参照。

しよめんかき〔名〕旧暦正月5日の頃、神社や寺でお守り札（護符・しよめん）を書き諸人に与える。「ごーかき」ともいう。

しよろ〔名〕棕櫚の木。しゅろ。「しよろのき」ともいう。やし科。

しよろふた〔名〕棕櫚の木の幹。棕櫚^{シュロ}。しよろのほた木。しよんしよん〔副〕愛らしい。愛児。

じよんじよんしば〔名〕たぶのき。たまぐす・いぬぐす・やぶにつけいなどの名がある。燃すと音を立てよくもえところからの名と。

しよんどん〔名〕愛し児。嬰兒への愛称。おたから・おたからしよんしよん・しよつきんなどの名がある。「しよんしよ

ん」に同じ。

しよんべん〔名〕小便。尿。「しよんべんまる（放尿する）」という。

しら〔名〕真実。純粋。ひたすら。「しら真剣・しら病み（病氣・発熱甚だしい）」。

しらかす〔動〕嘲笑しからかう。「しーらかす」ともいう。

しらかずら〔名〕つるうめもどき。にしきぎ科。

しらかみよみ〔名〕神楽舞の名。神代語として白紙を読む。「ごぼーびらき」に同じ。

しらくさ〔名〕あきめひしば。あきをひしば。共に斯う呼ぶ。「めひしば（雌日芝）・をひしば（雄日芝）」いね科の草本。

しらけ〔名〕白米。

しらこ〔名〕魚類腹子の白色のもの。

しらこもち〔名〕生まれたばかりの子鯨を連れた鯨。肉肥え油脂多く高価もの。白児は海面近くを泳ぐので発見され易いと。捕鯨用語。

しらざらく〔副〕病氣等により皮膚が部分的に白く曝けた色になること。これを「しらざりくる（ける）」という。

しらじー〔動〕知らずに。「しらじー良かもんか・しらじー通った」。

しらしめ〔名〕精製した上質菜種油。

しらしも〔名〕霜。「しらしもん降っちよる」白い粉を撒いたように真白に降りた霜。「し

らしもん降れたごつしちよる」。

しらしんけん〔形〕真剣そのもの。

しらずかずら〔名〕つるうめもどき。てりはのつるうめもどき。共にいう。

しらずもね〔副〕不用意に。

しらせ〔名〕「よろずかがす」の根元に付け本船に取付けた芋麻。捕鯨具。

しらめ〔名〕しらみ。虱。

しらやみ〔名〕激しい病熱。

じり〔名〕土地跡地。しり。「屋敷じり（宅地だった跡を田畑にした）」。「いやじり」も参照。

しりいーほかくる〔動・形〕早々に退散する。逃げ腰になる。尻に帆。

しりぐすね〔名〕尻骨。「ころーじ、しりぐすね突き上げた」とん（見て……）。

しりぐせ〔名〕物事の後始末の仕方。淫奔ぐせ。

しりぐせぬわるか〔名・形〕（1）履物・戸障子の開閉・物事の後始末の悪さ。（2）淫奔な行動の多いこと。

しりくちかるもんゆー〔動〕二枚舌を使う。前後相反する言行。尻と口の二箇所で。「しりくちから……」も同。

しりくよくわんのん〔形〕後は野となれ山となれ。勝手にせいの心情。

しりくりめえー〔名〕独楽など正常廻りせず尻すべりに廻

ること。転じて正常の動作振舞のできぬさま。「しりくりめえーしをるばい……」。

しりくりもぬ〔副〕お役目的なさま。しょうことなし・いやいや乍ら。「しりくりもぬ」も同じ。

しりご〔名〕河童は人間の「しりご」を欲しがり取る。かっぱのために死んだ者は「しりご」を抜かれ、尻には穴が開いていると。

しりざし〔名〕尻指し。田地割り替えの折、上田に下田を配する。この下田を「しりざし」という。

しりしょーど〔動〕腰をしっかり据えて身構える。「しりしょーどし仕事せろよ」。

しりだ〔名〕「しりざし」に当てられた下田をいう。

しりたかみな〔名〕巻貝の一種。海辺岩石の間に棲む馬蹄螺科の貝。「くまこがい」にあたるのか。「かまわらし（釜割らし）」にも用いる。

しりだごつく〔動〕尻出す。忙しくて天手古舞する。

しりとんぼげー〔動〕手をついて尻を上げ逆立ち状態になる。尻天向姿。

しりなすび〔形動〕子が親にびったりくっつく。「尻いなすびのさがる」も同じ状況を言う。

しりにげ〔動〕こそこそと逃げようにして帰る。「しりにげした」。

しりのす〔名〕尻の穴。肛門。



巢穴。

しりのはぐる〔形動〕化の皮がはげる。うそいつわりがばれる。「しりのかわんはぐる」ともいう。

しりびき〔動〕尻すだりする。土瓶や徳利の中のものか注ぐ度に尻引く。

じりみみ〔名〕耳の中が湿りただれ気味になること。

しりもったつる〔名〕昼に顔をすり付け尻を立てる姿。泣き悲しむ仕草。

しりやけ〔動〕根気が続かず物事を途中で放棄すること。

しりやけどり〔名〕「うぐみどり」が卵を途中放棄する。人間の「しりやけ」にも「しりやけどり」と。

じるい〔形〕土地の過湿状態をいう。「じるか・じったり」も同じ。

じるくわち〔名〕ぬかるみ地。「じるくわつちよ・じるたんぼ」も同義。

しれー〔形〕白い。「しれー入」。
しれこ〔名〕軽い柔軟な土質。「しれこ畑じゃけん扱けえよか」。

しれたもん〔副〕何程の事も無い。た易い。簡単な。わずかなもの。

しれちよる〔動〕わかつている。言わずともよい。

しれんもん〔形動〕そうかも知れぬ。多分そうだろう。ほぼ違いあるまい。多少疑問を残し乍らも大体了解。

しれんよれん〔副〕うやむや。あいまい。はっきりさせないさま。「しれんごれん・んに・んで」等用いる。

しろ〔名〕(1)苗を植える為、耕しならされた田面。植え代。「しろかき」。(2)小児の歯が二重に生え出たもの。

しろあえ〔名〕野菜類・蒟蒻など切ったものと、すりつぶした豆腐を和え味付けしたもの。精進には必ず。

しろいか〔名〕鳥賊の一種で霜月から翌年如月の頃までよく獲れるいか。

しろいを〔名〕ぎやふ。魚の名。

しろかき〔名〕代掻き。「なかしろ」の後更に丁寧に「まが(馬鍬)」などを縦横に用い、土を細かく碎き軟らかに平に均す。「うえしろ・ほんしろ」となる。又それまでの作業として、水田毎に周囲の草切り・くわどり(鍬取り)・あぜぬりを順次行ない、水対策も並行的に進めて行く。

しろかきのめし〔名〕田植えの「しろかき」は最も腹のきれる重労働であるので、特に腹もちのよい食事を工夫し用意した。これを「しろかきのめし」という。

しろさけ〔名〕(1)川の神祭に使う神酒で、黍を作った後に酒を注ぎ造る。(2)3月の雛の節句に造る。甘酒に清酒・糯米を混ぜ白で搗き合わせ造る。

「しろぎけ」ともいう。

しろづき〔名〕眼疾。眼球に生ずる白斑。「しろづきの入る」とも言う。

しろはいえ〔名〕晴天下に来る南風。「しろばいえ・しろばえ」も同じ。「くろばいえ」に対する語。

しろはら〔名〕(1)白痢。病氣の名。(2)「くわつちよ」は「つぐみ」だ、いや「しろはら」だ。2説あり不詳。小鳥の名。

しろほぐさ〔名〕からむし・まを・くさまを・しなそう・ねせば等の呼び名がある。いらくさ科の草本。

しろみ〔名〕鰯肉の内皮の白身の部分名。鯨の脂肪質の内皮名。

しわがるる〔動〕しおれる。草木のしなびれること。

しわしわ〔副〕(1)胸部に感ずる空腹感。「ひだるーし胸んしわしわしち来た」。(2)食物の口ざわりの滑かならぬこと。

しわつく〔動〕「しわしわ」の動詞的用語。しわしわすること。

じわり〔名〕(1)地割り。土地配分制度。平戸藩地割替制度。藩政時代の土地配分方法で廻り作・十年割など藩独自の方法があった。「ぢわり」。(2)漁獲物の分配法式。地曳網漁の漁獲物は半分を元方、半分を網子方全体に配分する。子供には歩合を決めて減じ、これを他の強い者への配分に回す。

これを「かた」という。元方では全体の1割を自分の分け前から出し、「かた」を与えられる者以外の全部に分与する。

しを〔名〕好時季。好機。「しを時」。

しをきらする〔名〕平滑な小石を海面添いに投げ次々に石を跳びはねさせる遊び。小児は互にその跳数を競う。「みずきらする」も同じ。

しをざり〔名〕魚の塩蔵。船内で直接塩蔵して遠隔地に輸送する。

しをけ〔名〕お茶じを。お茶菓子的な漬物類。又酒の肴やつまみもの等。

しをてほ〔名〕長い紐を底で十字に交わらせ「ろくしゃく」で前後に担ぎ物を運ぶ竹製籠。「しがてほ」も同じ。

しをどーらかぶり〔名〕往昔産児間引きとして塩俵に入れ捨児にしたと。間引き産児。「しをどーらに入る」も同じ。

しをどきしごつ〔名〕(1)潮の干満に合わせて急ぎ仕上げを要する仕事。(2)最適の条件で最上の仕事をする事。「ひとはなしごつ」にも似る。

しをゆだり〔形〕小児が涎を多く垂らし、衣服の前もぼろける程になる。「しをゆだり」する児は強健の証と。「ゆだり」は「よだれ」。

しん〔名〕(1)根性・心根・性情。(2)気温。中央部の内実。「温

し

かごたるが、しんのわるか(しんな冷たか)。

じんがらばち〔名〕じか蜂。
蜂の類。

しんきく〔名〕春菊。野菜名。
「しんぎく」も同じ。きく科。

じんきちがしよー〔名〕きり
ぎりす。「じんきち」ともい
う。鳴き音から。

しんけえー〔名〕気違い。狂
人。

しんこ〔名〕三方向から摘まみ
上げて作る米の粉の小団子。
祝事用。

じんじく〔名〕秩序。始末。整
理。「昨日引越しち来たばっか
りで、じんじくがつかん」。

しんしよ〔名〕財産。身代。暮
向き。

しんず〔動〕進呈する。差し上
げる。「貰方えしんずるたあ
な」。

しんずこんず〔形〕切れ切れ。
微塵。

しんずる〔動〕進呈する。あげ
る。与える。「しんぜちよく・
しんぜる」も同じ。

しんそこ〔名〕心の底から。「し
んそこほれちよる・しんそこ
好かん」。

しんだ〔接尾〕罵りの意を強め
る語。こしゃくな・生意気な。
「こしゃくのしんだ」「こっぺ
ーぬしんだ」等と用いる。

しんだい〔名〕神楽舞の名。神
代語の略。「ごぼーひらき」に
同じ。

しんたく〔名〕第二・第三子等

の分家。二番屋敷。

しんち〔名〕新地。新地屋敷。
本家に対する分家。「でーなか
いえ」参照。

じんちしば〔名〕こしょうの
き。じんちようげ科。「じんち
よしば」も同じ。

じんちよばな〔名〕はなちよ
うじ。こしょうのき。りんし
よしば。白瑞香。じんちよし
ば。じんちようげ科。

しんつち〔名〕分家して初めて
受けた割地。「今年しんつち受
けた」。

しんでんどい〔名〕沼地・海
浜・河川を利用して耕地を造
成する時築かれる堤防を新田
土居という。島内各地に長く
短かく散在している。島の民
謡にも「……新田土居でも畑
の畦でも……」と読み込まれ
ている。

しんでんばん〔名〕新田中の
小作代表。下に4人の手下を
持つ。小作料高は田毎に一定
していたが、小作人の繰り替
えは新田番の権限にあった。
田割りと言って3年に1回
(後には2年に1回)小作人を
更新した。水旱損の検分も新
田番の手心にあつたらしい。

しんど〔名〕心労。辛労。辛
働。疲れて苦しい。「ごしんど
かけましち」「ごしんど振りに
……」など挨拶語に。

しんとー〔名〕(1)神道。神式に
より葬儀など執行する。(2)し
んと一柿。渋柿の一種。早生

種を八月しんとう、晩生種を霜じんとうと呼び甘味が上品で熟柿及びねり柿として珍重賞味される。

しんどー〔名〕「しんど」に同じ。「しんどか」も辛く苦しいの同義語。

しんどもんど〔名〕辛苦困苦。

しんね〔名〕(1)心根。心の奥底。「しんねん悪か」。(2)新根。芋・諸類に新しく出来た芋。「新根^ベん入^ベちよるばい」。

しんばい〔名〕世話。相談。斡旋。「しんばいする(事件・事柄の解決や相談世話事に協力助力し立廻る)」。

しんぱん〔名〕新規。新しく。「しんぱんにやり直す」。

しんびきご〔名〕「せんびきご」参照。

しんびきづら〔名〕「せんびきづら」参照。

しんびきとーされ〔名〕「せんびきとーされ」参照。

じんべ〔形動〕奇特なこと。

しんべー〔名〕蓼を編んで作った雨除け雨蓑。「すだる」参照。

じんべいにいー〔形動〕奇特の事に。「じんべいに」きどくい」に同じ。

しんもー〔名〕新盆。初盆。「しんもー受くる(親戚^知己から新仏の新盆の見舞等を受けること)」。「けちれん」ともいう。

しんもーどーろー〔名〕新亡。灯籠。往昔は新盆を迎える家

では、盆の十三日に親戚中から寄って灯籠を2個作り1個は家に、他の1個は墓に灯した。箱形を作り紙を貼り立てたろうそくを吊り下げようにし、これを3年間続け、3年目にはこれを全部焼き捨てた。新盆・中盆・炊き上げとなる。(現在では盆月の初めから・又は地域の慣習で既製品を適宜に)。

しんもらつ〔副〕しんみりと。しみじみと。おっとりと。「しんもらつした^{縁御}さあばいなあ」。

す

す〔動〕賭博で勝者から第三者が幾何かのものを貰うこと。「俺え一杯すわせれ」。「すー」ともいう。

すー〔動〕(1)「す」に同じ。(2)「いーむし」に同じ。「ふいじんむじ・ふゆむし」ともいう。参照。

ずーくび〔名〕首。罵り言う語。「ぞーくび」ともいう。「ずーくびひん抜くぞ」。

ずーすいー〔名〕雑炊。「ずーしー・ぞーすいー・ぞーしー」も同じ。

すーら〔名〕(1)そら。すら。嘘。「すーら泣き・すーら寝入り」。「すうら」も同じ。(2)幾分。うすうす。「すーら腹ん立

すー

つ・すーら干し(生干し・生乾き)・すーら煮やり・すーら覚え。

すいーくりあがる〔動〕落ちかかつたものが勢いを盛り返し元の位置・地位に戻る。風揚げにも起る現象。

すいーくる〔動〕それる。「鉄砲の弾がすいーくる」。「すいくる」も同じ。

すいーぱりつく〔動〕吸い付く。かがりつく。「しーぱりつく」に同じ。

すいーぱりづよか〔形〕頑張り強い。辛棒強い。「しーぱりづよか」も同。

すいか〔形〕酸い。すっぱい。

すいきょーきる〔動〕酒に酔い理由もなしに周辺の他人に言いがかりを付けたりからんだりするさま。

すいしほ〔名〕船の帆の名。帆前船型の帆名。袋帆に対する語。「まざり帆」ともいう。壱岐にこの種の帆が入ったのは、明治の末頃とか。

すいた〔名〕舟内の敷板。簀板。

すいばのかずら〔名〕すいかずら。すいばかんだ。にんどう(忍冬)。すいかずら科の草本。

すいぱり〔名〕棘。とげ。「すいーぱり・しーぱり」ともいう。

すいひんからひん〔形〕骨と皮ばかりに衰弱し切ったさま。

すいり〔名〕産卵期の魚。「すい

り鯛・すいりいっさき・すいりいか」。(動)素潜り。素潜り漁。

すいりいか〔名〕旧暦3月下旬から漁期に入り4月を最盛漁期とする。昔は夜間だけの漁が、近年には昼間も獲る。昼間漁は深い海で漁も大と。

すいりいっさき〔名〕昴星が出だすと、いっさきは瀬から下りて浜にでる。この頃の内っさき(いさき)をいう。昴は二十八宿雄牛座の星集団。

すいを〔名〕酢漬けた魚一般の名。

すうえーだんぼ〔名〕据え大桶。野外に備えた肥料の溜め桶。下肥の他魚屑・臓物等も投入し腐熟させ液肥として作物栽培に用いた。「すえだんぼ・すいえだんぼ」等と発音する。

すうどん〔名〕具の入らないうどん。

すえー〔助〕でさえ。だに。すら。「昼すえー見えにくかもぬの、夜さりどうしち見ゆるちめーない」。「すえき・すえきや・せに・せか」なども同じ。〔名〕大根・人参等を細長に切り、魚肉なども混じ、味噌・醤油や胡麻など好みに味付け調理した菜。

ずえー〔名〕采。采配。「ずえー振り・振る」。「ぜー」も同じ。

すえーいを〔名〕菜魚。漁夫に当日の食用として配布される副食用魚。「せーいを」も同

じ。

すえーえん〔名〕菜園。野菜畑。

すえーく〔名〕細工。こまごまとした人工の切り込み作業。

「せーく」。

すえーくわもん〔名〕厄介なこと。「食うにや食われず、ずえーくわもんたい」。

すえーぐわんじ〔名〕せいぐわんじ念仏。念仏の一種の名。

すえーに〔助〕だから。故に。「すえー・すえに・せに・せん」も同じ。「違^{ちが}なつたすえーに行かん」「言わんすえーに見せろ（他言しないから見せなさい）」。

すえーび〔名〕歳暮。「せーび・せーび」も同じ。

すえーれー〔名〕^{まぐら}巻貝の一つ。

すえーわぎ〔名〕幸木。せえわぎ。さいわぎ。径3〜4寸の松丸太を5〜6尺長に切り皮をはぎ、縄紐12筋を結び物を吊せる如して荒神様の側土間に両端を別縄で吊す。正月前に諸種の山海の食材を吊し正月中に使っていく。平素も何かとこれに吊し利用する。家の主人死去の折以外は新たに作り替えない。

すえか〔助〕でさえ。「すえー・すえきや・せか・せき」も同じ。

すえきや〔助〕でさえ。「あたしすえきや知らぬもねえ、誰が知つちよううか」。「すえ

に・せか・せき」。

すえだんぼ〔名〕「すうえーだんぼ・すえだんぼ」も同じ。必要に応じ移動して利用できる便利さがある。

すえに〔助〕だから。故に。「すえーに・せに・せん」に同じ。

すえまい〔名〕神楽舞後段の舞。「もとまい（本舞）」に対する語。多くは乱れ舞となる。

すえる〔動〕(1)神仏に供える。置く。(2)野糞する。「すえちやる・すわちちよる」など隠語的に用いる。

すか〔名〕砂地の干潟。「すかはま」に同じ。

すかし〔名〕鳥賊漁法。竹針に魚肉を刺して入れ、いかがりついたところを静かに引き揚げ、手網で掬い獲る漁法。

すかすか〔副〕(1)的確に命中する事。突き刺すさま。「すかすか言い当てた」「矢が的にすかすか立った」。「ずかずか・ずがずが」も同じ。(2)刃物の切れ味のよいさま。「すかすか切れたばい」。

すかっと〔副〕すっきりと。きっちりと。「ずかっと」も同じ。

すかはま〔名〕砂地の干潟。すか。

すがもり〔名〕正月の「おかままつり」の行事。唱え詞をして「へわ」を3度くぐる。主人はじめ女・子供家族一同くぐる。「せんすがもり」ともいう。

す

すがやす〔動〕着物の裏表を返して縫い直し更生する法。

すがり〔名〕蟻の一種。刺し蟻。「しゃしゃり」に同じ。

すかんすかん〔動〕小児のする「いやいや」。

すかんたらしか〔形〕いやらしい。「すかんたらしか男・女」。

ずきずき〔副〕(1)物を切るさま。(2)疼痛を表わす。「ずきずき痛む」。

ずぎずぎ〔副〕軟らかな固形物を食べる状況。「ずぎずぎしち食われん」。

すきとなり〔名〕お互い同士の馴合い婚。恋愛結婚。

すきのみ〔名〕炊用鋤先にはめ込む金具。

ずくしのき〔名〕天仙果。いぬびわ。いちじくに似た果実を「ずくし」という。別名いたぶ・いたび・こいちじく、とある。くわ科。

ずくずく〔副〕(1)物を突き刺すさま。(2)疼痛のさま。「^{骨節}骨節のずくずく痛む」。

すぐすんのー〔形動〕満足な。完全な。「すぐすんのーな皿は一つもなか」。

すくたれ〔名〕能なし。馬鹿たれ。役立たず。罵ることば。「こんすくたれが」。

ずくっしょー〔名〕つくりっしょう。つくつくぼうし。蟬の名。

ずくねる〔動〕すねる。むずかる。

すくばる〔動〕硬くこわばる。
すくぼる〔動〕すくむ。細る。こわばる。

すくもあい〔名〕たまあいに対するぼろぼろの藍。

すぐやりまだら〔名〕用が済んでも家に帰らず、次々と遊び廻ること。

すくる〔動〕寒さにすくむ。こごえる。「すくるる・すくれる」も同じ。

すぐる〔動〕よりすぐる。良いものばかりを選びだす。「葉すぐる」。

すくるる〔動〕「すくる」に同じ。

すくれべ〔動〕寒がり屋。

すくれる〔動〕「すくる」に同じ。

すくわちょー〔形〕麦など熟れ切って稈が折れ倒れたさま。「すくわちょーになっちょる」。

すげ〔助数〕番い。「鶏の^二すげ」。
〔名〕蛇の脱皮殻。〔動〕死ぬ。「死す」を露骨に言うのをはばかり又、幾分の敬意をこめて、「到頭おすげましたそうで……」。「はしる・いく」ともいう。「すげ」の原形は「すぐ」。

すけぐち〔名〕頗長くしゃくつた門。

すげぬく〔動〕蛇類の脱皮。
すげる〔動〕さし込む。はめる。「道具の柄をすげる」。

すごき〔名〕兵児帯。

すさ〔名〕家の壁は柱間に縦横

に組み編み合わせた竹を芯に「えつりかき」し、藁を切って混ぜ練りあげた土を建物の内側・外側と順次土の乾き具合に合わせて塗り上げた。この土に入れる「つなぎの藁」を「すさ」という。この後壁は中塗り・上塗り・漆喰塗りと手を加え仕上げる。

すざき (動) 鰯等の小魚は臓物や頭を除き洗ひ上げて、中骨や皮をはがし取る。この作業を「すざく」といい「すざかれた肉」を「すざき」という。フライ・てんぷらは皮付きの儘がよいが、刺身的には「すざき」を醤油・味噌等で好みに調理する。

すざく (動) 魚を「すざき」にする作業。素手で裂(割)く。

すざる (動) 後にさがる。しざる。

すじ (名) てぐす。漁具のひとつ。

ずし (名) 屋根裏。天井裏。づし。

すずだま (名) 数珠玉。すずこ。川殻。実を通し数珠にする。いね科。

すすめー (名) 「せじょーまつり」のほか諸種の講に各戸から切出す米。

すずめがくれ (名) 苗代他作物の芽がわずか2～3寸伸びた頃、雀等の小鳥が隠れる程度の草丈をいう。

すずめぐち (名) 稲の実入りがかったもの、そろそろ雀の口

にも入る頃。

すすりけ (名) 家屋新築棟上げ祝いと火難防止を祈り、当主夫妻に頭から水をかける儀式を行うことをいう。

すすりげえー (名) 家屋新築棟上げ当夜、各柱根に粥を炊いて祀り祝の詞を述べ、その粥を口に含み辺りに吹き散らす。この粥は必ず新築家屋内で煮る。「すすりこ」という地区もあり、「おかゆたき」ともいう。

すすりこ (名) 「すすりげえー」に同じ。

すずる (動) 皮膚が破れたたれる。

すずれる (動) 「すずる」に同じ。

すそ (名) 末っ子。すそ児。すそ息子。すそ娘。

すそこ (名) 末っ子。

すだ (名) こしだ。うらじろ科しだ類。「へご・へごしだ」ともいう。

すだいげ (名) くすどいげ。「すないげ・そないげ・すなやほ」の名有。

ずたきち (形) 身形のだらしない相。

すたすた (副) (1)刃物の良い切れ味。「すたすた切るる」。(2)歩きさまの良さ。「すたすた歩き」。

ずたずた (副) (1)氷に濡れしずくの垂れるさま。(2)挙動の甚だ不活潑さ。

ずだずだ (副) 「ずたずた」に

す

同じ。

すだたり〔名〕滴り。滴^{しず}。汁の垂れ。

すだち〔名〕素建ち。杵建ち。

すたっと〔副〕きっぱりと。「すたっと切り落した」。「すぱっと」に同じ。

ずたっと〔副〕だらりと。

すたぶ〔動〕漁獵に獲物なく手ぶらで帰ること。「素手振り」状況。

ずだべこ〔名〕ゆるみ切った襦。「ずたべこ」も同じ。

すだむる〔動〕器の中のものを最後の一滴まで出しきる。有りったけを傾け尽す。「すだめる」も同じ。

すだる〔名〕藁又は小竹を編んで小屋の入口に縦に吊したものの。「すだれ」か。藁を蓑状に編み横に吊した雨覆いは「しんべー」という。

すっか〔動〕するか。やってみるか。

すっかるか〔形〕全く軽い。とても軽い。軽いの意を強める語。

すったぬはげたぬ〔副〕何とか彼とか言いがかりを付ける。言を左右に。

すったり〔副〕すっかり。全く。「すったり止めた・すったりじゃつた」。

ずったりずったり〔副〕挙動の極めて緩慢なるさまをいう。

すっちゃこっち〔名〕逆様。反対。「すっちゃこっちー・すっちゃこっちゃ」も同

じ。

すっちょ〔形〕ずるい。すれっからし。「すっちょー」も同じ。

すっちょぬかわ〔名〕すれっからし者。「すっちょー・すっちょんかわ」も同じ。

すつつもんず〔形〕すりつもみつ。寄り添い縋り、もつれ合うさま。

すって〔名〕胴を鉛で棍棒状に作り、羽二重金巾を巻き、頭に逆針を付け尻端に釣糸をつけたもの。海中に入れ鳥賊を釣る漁具名。「すってー」。

すってんからくり〔名〕すれっからし者。「すっちょ・すっちょぬかわ」などに同じ。

すっぱっぱー〔名〕「うっぱっぱー」に同じ。

すっぱり〔副〕すっかり。全然。皆。全く。「すっぱり釣れーせん」。

すっぺこく〔動〕言を左右に何彼とごまかし言い訳する。

すっぺこっぺ〔副〕あれこれ色々と言を左右にする。「すっぺこっぺ言うな」。

すっぱー〔名〕出まかせの嘘。ほらふき。嘘つき。「すっぱーくり」。

すっぱーはた〔名〕最下等の畑。

すっぽくわぬぐる〔動〕すっぽ抜ける。すぽと抜ける。抜け落ちる。

すてがちいする〔形動〕捨て勝ちにする。無頓着捨てもの

にする。

すてがちれー〔名〕見捨てられ勝ち。

すてぬこてー〔副〕危い事に。危機一髪。あわや。「すんでんこてー」。

すてぬめえーおおた〔形動〕とても危い目に遭った。

すてぶり〔形〕手に何も持たない様。空手空拳。「すたぶ」参照。

すどー〔名〕通り路。抜け路。「本町すどー」「風のすどー」。

すとぐち〔名〕出入口。「すとぐちい立つな邪魔えなる」。

すたとすど〔副〕無遠慮に歩き振舞うさま。「すたとすどやっち来た」。

ずなし〔形動〕法外に大きいこと。〔名〕足袋の最大級型。文数なし。

すなぶく〔名〕海岸に近い海に棲む河豚の一種。「はまぶく」に同じ。

すなやぼ〔名〕くすどいげ。鋭い刺を枝幹に持つ灌木。「くろいげ・すだいげ」などともいう。

すななか〔形〕すんなり長い。細長。すっぽななか（す長い）。

すぬぐ〔動〕(1)抜く。引き抜く。抜き取る。「良かつかるすぬぐ」。(2)抜ける。抜け落つる。「いつの間えかすぬぐる」。「すぬげ」も同じ。

すのかみ〔名〕すれっからして手に負えぬ者。「すっちょぬか

わ」に同。

すのこ〔名〕鯨肉「うね」の内側肉。

すばいゑー〔名〕漁師「つなうち」で大綱を扱うのに用意する小綱の一本一本を言う。この小綱一本の長さ「すばいゑー何尋」で表わす。

すはやか〔形〕す速か。早い。速か。

すばる〔名〕四方に開いて反り返った4本股の鉤。海中の綱や網を探り引き揚げに用いる。

すばるごもり〔名〕長縄が瀬にかかった折、すばるを入れて掛けはずし取る。時によると「すばる」自体が瀬にかかることもある。これを「すばるごもり」という。

すびく〔動〕(1)歯がしみる。(2)手足が寒さで刺すように痛む。(3)経済的負担がかかって来て身にこたえる。

すびら〔名〕つるぼ。さんだいがさ。綿褌児。ゆり科の草本名。

ずぶっと〔副〕物のつぶれるさま。「ずぶっと踏みつぶした」。

ずぶとがいゑ〔名〕少しの付け金も付けずそのまま交換すること。等価交換。「すぶとがいゑ」も同じ。

すべ〔名〕海底の岩間に棲む海栗状の物。人が触れると毒する。

ずべずべ〔副〕湿りをもつ滑ら



かさ。粘液のため滑らかになるさま。「すべすべ」は乾性「ずべずべ」は湿性。

すべた〔名〕多情女。

すべらしか〔形動〕滑らかなこと。すべすべしたさま。

ずぼ〔名〕ちがや。白茅。つばな。ちがやの穂。花穂の若いうち抜き取り小児ら食べる。「ずぼがや」に同じ。

ずぼこ〔名〕「ずぼ」を用いてする小児の遊び。賭事遊び。

すぼすぼ〔副〕すぼりすぼっと抜き挿しできるさま。「すぼすぼ抜く」「すぼすぼ入る」。

すぼっと〔副〕「すぼっと」「ずぼっと」に同じ。

すぼっと〔副〕たやすく気持ちよく入ったり抜けたりできるさま。「すぼっと入った・すぼっと抜けた」。

ずぼっと〔副〕(1)すぼっと抜き挿しできるさま。(2)深々とかぶさるさま。(3)すっぽり入る(落ち込む)さま。

すまる〔動〕醤油・油などを精製する。すめる。〔名〕「すばる」に同じ。

すみくら〔名〕隅っこ。隅。暗がり。

すみこくら〔名〕隅の暗がり。「すみくら」に同じ。

すみそしる〔名〕具の少ない味噌汁。

すみどーらかれー〔名〕炭俵からい。背部に黒点を持つ風の隠語的別名。

すみとりぼ〔名〕「やほ」の次

の長三角形の舟の帆。

すみばしら〔名〕家屋建築の折、四角に立てる柱。「かどばしら」とも言い、最も重要な柱。

すみら〔名〕すびらだ、すみれだ、の2説がある。壱岐国続風土記には、「方言すびらのことなり。且つこの草を食べば馬肥ゆとも言えり。而して或人はその草は量なりと言えり」と。

すむ〔動〕造りこんだ醤油がめに「すめてぼ」を挿し込み、粕と液とに分離精製すること。「すむる・すめる」に同じ。「しょうゆてぼ」参照。

すめ〔名〕(1)醤油。(2)醤油味で作っただし。

すめぎ〔名〕椿油・菜種油を搾り精製するのに用いる木製の内側1枚を可動にし、両端部を別材で3枚の板に通し搾る袋を一方に挟み他に楔を打ち込んで袋部に圧をかけ乍ら搾る。

すめしる〔名〕(1)醤油味のだし汁。(2)精製した醤油。(3)搾り精製した汁。

すめてぼ〔名〕醤油を精製するため仕込み瓶に挿し込んで汲みとる円筒形の竹製の底なし籠。「しょうゆてぼ・しょうよてぼ」ともいう。この形の布製のものは防寒具として頭からすっぽり被り漁師が同名で用いる。

すめる〔動〕「すむ・すむる」に

同じ。

すもとり〔動〕角力取り。力士。

すもどり〔動〕目的所用を達せぬ儘立戻ること。

すもとりばな〔名〕すみれ科の「こすみれ」。すもとりぐさともいう。この花を双方掛け合わせ勝負する。

すものたむ〔副〕着物を着汚して内も外も、晴も曇も区別のないこと。

ずもり〔名〕どもり。吃る人。

ずもる〔動〕吃る。どもること。

すや〔名〕新墓の上に据え置き位牌や供物をする白木の厨子。喪屋・位牌箱などともいう。

すより〔動〕沢山の人の寄り集まり。「人間のすよりしちよつた」。

すら〔名〕(1)真に対し偽。真似事という程の意味。賭事で実際に金品を賭けない形だけの遊びを「すら」即ち真似事「ほん」に対する「すら」。(2)似せ。そら。うそ。「すら泣き・すら寝入り・すら事・すら辞儀・すら酔い・すーら酔・すらく」等。

ずら〔名〕怠惰。(助)ずつ。「三つずら取れ」。

すらかす〔動〕打ちのめす。「すらかすぞー・すーらかすぞー・うっすーらかすぞー」と用いる。

すらくく〔動〕嘘を言う。

ずらくく〔動〕なまける。「ひ

でーずらくく人間ねえ」。

すらごつ〔名〕そらごと。うそ。「すらごつ言うな」。すらごと。

すらすつつ〔副〕すらすら順調に物事の運びさま。

すらども〔名〕千石船の鰻に取り付けた「とこ」の外覆い。

すらなき〔名〕泣き真似。

ずらりくわらり〔副〕無為に朝夕を・時間を過すさま。

すり〔副〕直ぐ。言う間もおかず。「たつたすりたあな、そんな位^{ほん}事」。(名)縄を縛う時、仕上げの体裁を整える為、縄をかけ更に2～3度抜く。この扱きに用いる具。縄を太目に短かく縛い二つ折りして掌の中に入れ間に挟んでこする。

すりかくる〔動〕酒気を帯びる。ちよつと一杯酒を呑む程度。

すりからし〔名〕すれっからし者。

すりがらし〔名〕からし業。実を摺りつぶし香のものとす。あぶらな。

すりきりめし〔名〕大きめの椀に飯を一杯に盛り押しつけて椀の縁で切り、打ち出して作る。これを2個合わせて椀に盛り「せじょうまつり」の講員に平等に分配した。

ずりくりおつる〔動〕すべり落ちる。「すべりおつる」ともいう。

ずりくる〔副〕操作・運用・工面工夫の中で物事が何んとか

す

漸うように運ばれていくさま。
すりざん〔名〕戸障子の闕に当
る横棧。戸車を取りつける横
木。

すりすり〔副〕(1)すれすれ。辛
うじて。「すりすりて船ぬ聞え
合うた」。(2)熟睡するさま。「す
りすり眠っちゃう」。「すーす
ー」に同じ。

すりつけぎ〔名〕燐寸。マッ
チ。おらんだ。「すりびうち」
ともいう。

すりはれー〔副〕すり切り。物
を枡や容器に入れるとき、上
縁一杯の線までの量を表わす
に用いる。ぎりぎり一杯。す
りはらい。

すりびうち〔名〕マッチ。おら
んだ。

すりみみ〔動〕行きずりに耳に
する。「すりみみ聞いたこっぱ
って……」。

すりみみいはさむ〔動〕詳し
くきちんと聞いた訳ではない
が、ひょつこり聞き知った範
囲では。噂話程度で。

すりながこつ〔形動〕微小な
こと。ちょつしたこと。「ずら
けえち、すりながこつもしや
せん」。

する〔助〕させる。「取らする・
行かする・言わする」。

するい〔名〕粥の実も摺りつぶ
してどろどろにしたもの。病
人食とする。

するせん〔助〕するから。「旅
行するせん家にゃ居らん」。

するせんちよす〔名〕じゃん

けんぼんのかけ声。

するちゅーと〔接〕そうする
という。そうだということ
になる。「そうするちゅーと」
も同じ。

ずれずれ〔副〕不揃い状況。「行
きにゃ一緒に行たつばって、
戻りにゃずれずれえ戻った」。

すわい〔名〕酔和え。「すわいえ・
すわえー」も同じ。

すわたる〔形〕そわたる。空間
ができる。「布団がすわた
る」。

すをげえ〔名〕海底砂中に棲む
紫色の二枚貝。食用となる貝
の一種。

すんいた〔名〕寸板。鯛の大き
さにより規格を決める測定板。

すんがり〔副〕すんなり。すら
っと。「背丈んすんがりしちよ
らす」。

ずんぐりかぶり〔副〕毛布や
着物を頭からすっぽり被るこ
と。

ずんだりずんだり〔副〕挙動
の極めて緩慢なさま。「ずんだ
り」も同じ。

ずんだるる〔副〕きちんとした
しまりのつかないさま。「ずん
だれ」も同じ。

ずんだれ〔形〕しどけないさ
ま。きちんとしまらないさま。
「ずんだり」ともいう。

すんでぬこてー〔副〕危機一
髪。「たったいま、んこつ・す
んでんこてー」も同じ。「あぶ
ねえところじゃつた」。「たっ
たいま(あぶない)」の意味。

ずんどべー〔副〕言行のてきば
きせぬさま。

すんなら〔接〕それなら。それ
では。

すんなりやー〔接〕それでは。
それなら。「すんなら・すんな
りや・すんなる」「そんとき
ゃ・そんなら・そんなりやー・
そんなる」等同じ。

すんにむけえーにむあたらん
〔形動〕代償としては何程の価
値もない。「すんにもけーにも
あたらん」も同。

すんばく〔名〕蛸たこに類し、体
茶色の細長い虫。こうがいひ
る科の虫。塩を振りかけると、
体全体が溶けて流れ形もなく
なり死滅する。

ずんべり〔形〕船に荷物の充分
積み込まれたさま。「あん船に
やずんべり荷の入こっちょるば
い」。

せ

せ〔名〕(1)瀬。漁業者の漁場は
「瀬」とか「曾根」と言い、発
見者の名を冠して呼ぶ。漁場
の位置は「やまたて」して決
める。陸地の目立つ高い山を
第一基準にとり、距離・位置
を割りだす三角測量の応用で
ある。海上での自船の位置も、
「もたれ」「だし」「われ」な
どの用語を併用し正確に割りだ
し確認して来た。現在では漁

群探知レーダー・通信方法の
画期的な発達により漁獲法も
大きく変った。(2)暗礁。〔助〕
「し」の変化として用いる。「貸
せち呉れ・貸せなわれ・貸せ
る」などと用いる。

せー〔名〕(1)大根なます・酢和
え・短冊切り大根の油いため。
「せえ・しゃー」ともいう。(2)
所為。原因。おかげ。理由。
結果。(3)貝の一種。せい。石
華。かめのて。せーくろ。

せーく〔名〕細工。大工のする
切り込み細工。こみ入った部
分の細工や部品作り。

せーくろ〔名〕かめのて。せ
い。石華。「せー」の(3)に同
じ。

せーしんで〔形動〕為なたい放
題。言いたい放題。気儘。自
由自在になるとの意。「せー
しんでせろ・どがし取ろうとせ
ーしんでたい・腹はらん立つなら
せーしんで打て」。「せーしん
でー」も同じ。勢次第・所為
次第か。

せーせー〔名〕(1)蟬。せびとも
いう。(2)息せき切るほどの激
しい息遣いを「せーせーとる
(とった)・せーせーつかわ
る」などという。

せーせーだこ〔名〕蟬せみ。蟬
を型どった風。

せーそく〔名〕催促。

せーたか〔名〕コスモス (の
花)。

せーちよる〔動〕(1)花が咲いて
いる(2)実(種)が成っている。

せーでち〔副〕急いで。早く。急く。懸命に。せく・精出すか。「せーでつ」も同じ。「せーでつ来え」。

せーなる〔動〕世話になる。世話をかける。「せーなるばっかりで済まんなあ」。

せーび〔名〕歳暮。「すえーび」に同。

ぜーふり〔名・動〕采を振る人(事)。綱引き・競技会応援の旗頭。

ぜーもく〔名〕材木。

せーりぼんぼん〔動〕せりせり遊び。せり合っこ。「せりせり(する)」。

せーれ〔名〕気力。「せーれー」ともいう。

せーわぎ〔名〕幸木。歳の晩から松立て(正月14日)又は20日小正月までは、「にわ」の荒神横に吊した幸木に、大根・蕪・昆布・するめ・鰯・鯉・鰻・まびき(しいら)等家毎に決った山の幸・海の幸を満潮時に角結びした吊縄12本(潤年13本)に吊正月の家飾りの一つにする。これを正月中順次に食べていく。「せーわぎ」は古くなり黒光りするまで取り替えない。取り替えはその家の主人死亡の折か、家そのものを建て替えた時である。昔、「せーわぎ」は、本来墓地に棺を運ぶ棒であったが、或時これで運んでいた死者が途中で生き返った。一同「これは幸い」と喜び合ったこと

から、幸木と呼ぶようにもなったと。「すえーわぎ」に同。
せいよーあをい〔名〕てんじく葵。もんでんじくあおい。ふそろそう科。

せえ〔名〕「せー」に同じ。

せか〔助〕しか。「こりせか知らん」。でさえ。「俺せか知らんもねえ、誰が知っちゃろうかい」。

せがい〔名〕網船の艫艫の一つ。「おーども」の後の「ともろ」。鯨組用語。

せがき〔名〕施餓鬼。「仏の供養」に墓に吊す紙の小幡。半紙を縦に二つ切りにして継ぎ合わせ、一方を尖して折込み、こよりの紐を付け経文や仏名を僧が書き墓に吊す。「施餓鬼幡」というのを簡略した。

せかする〔動〕急がせる。

せかせ〔名〕物の安定緩衝の緩和物。

せかせか〔副〕忙しく動き廻るさま。

ぜかぜか〔副〕「せかせか」に同じ。「い一つもぜかぜか言わす」。「やぜやぜ」も度々口うるさいさま。

せかせもんいるる〔動〕せかせに緩和物を入れる。「せかせいるる・せかせする・せかせもんする」も同じ。

せかつく〔動〕「せかせか・ぜかぜか」する。「ぜかつく」も同じ。

せがむる〔動〕意地悪くいじめる。なぶる。いじめからかう。

「せびらかす・せぶらかす」ともいう。

せからしか〔形〕うるさい。騒々しい。やかましい。「せからしか事言うな」。「せからし・せからしい」も同じ。

せき〔助〕だけ。しか。「これせき知らん」。**〔名〕**余地。「考えるせきやなか」。

せきあう〔名〕口論。口論する。

せきころさるる〔動〕腹の激痛死ぬかと思う程痛む。激しい腹痛の末死ぬ。「せきころす」も同じ。

せきせたぎ〔副〕あわて急ぐ。「せきせたぎしち戻っち来た」。「せかする・せきせかする」等も用いる。

せきだかずら〔名〕ていかかずら。葉の形状が糞物の「せきだ」に似る。「せったかずら」も同じ。夾竹桃科。

せきたん〔名〕石炭油。石油。

せきたんあぶら〔名〕石油。略して「せきたん」と呼んだ。

せきとー〔名〕墓石。石塔。石棹。

せきばんふき〔名〕ひとつば。うらぼし科のしだ植物。古くに使われていた学習用具石板拭きに似るところからの名か。石板・石筆。

せきもち〔名〕くろいをの大型魚。「うばくろ」の次に位する。「かたおし・こしば」参照。

せきやう〔動〕言い争う。「親子でせきやう」。語尾は終止か連体と。

せきよま〔名〕漁具に用いる糸よま。絹の細糸で密に巻いたもの。「まきよま」ともいう。

せく〔動〕(1)閉じる。締める。「戸をせく」。(2)飯炊きに容量能力を超え不出来にする。「釜せく」。(3)腹痛。

せぐいー〔名〕土地割り渡しの際各戸の墓地には範囲標示杭を立てさせ、杭1本に対し3銭宛地割費用を負担させた。この杭を「せぐいー」という。

せくる〔動〕厳しく催促する。せきたてる。「貸金をせくる」。

せこ〔名〕(1)船底に設けた漁獲物貯蔵の区画。(2)農家が米麦ほか穀物を格納する箱。(3)容器の中を二重にし作った箱類。せこ板で間仕切る。

せご〔名〕衣服の背中にはぎ足す布。

せごし〔名〕鯨の漁獲高に段階をつけ、目標に達すると祝をした。或鯨組では、一番せごし7本・二番10本・三番20本・以下10本増す毎にせごし祝いをした。せごしいうえー。鯨組用語。

せさき〔名〕海岸近くの土地。瀬崎。

せし〔名〕施主。責任主となる者。「せし持つ」。

ぜし〔名〕是非。

せじょー〔名〕豊穰。豊作。農

作物の豊作。「せじょ一歳・せじょ一祭」。

せじょーのかみ〔名〕勝本港外天ヶ原に年1回旧暦6月29日忌の日、ちがやに砂を包んで巻いたものを農家が供え祀った。

せじょーまつり〔名〕初午祭と併せ行なう農家行事。切り米して「すりきりめし」の他、酒肴を作り組中全家族会合宴会する。太鼓を打ち唄をうたい甚だ賑う。酒宴に先立ち代表数名講中の各戸の祀る屋敷神・地の神・水の神・稻荷社を順拝し、供物神酒を捧げ、豊作・息災・繁栄を祈る。豊かに実る豊穰のさまを「せじょう」と。どんな文字で書くのか知りたい。生穰・成穰・盛穰。？。

せず〔動〕煎ずる。せずる・せざる。

せせかう〔動〕一時一所に事柄が集まり混雑する。同時同日に物事が重なる。割り込んで錯綜混雑する。

せせくる〔動〕混ぜる。いじくる。

ぜぜんき〔名〕「流し・たんもと」から流れでる炊事汚水の混じる下水溜。「ぜぜんき・せぜんき・せぜんき・せぜんき・せぜんき・せぜんき」等所・人により呼び名一定せず。

せせる〔動〕吸う。刺す。「虱のせせる」。「骨せせる」。あさりつつ突く。

せだい〔名〕主に瀬に棲む鯛。体色稍黒味を帯びる。

せたぎせたぎ〔副〕慌て急ぐさま。「せたぎせたぎ飯だけ食うち戻った」。

せたぐ〔動〕急ぎあわてあせる。「せきせたぎする・せきせたぐ」。

せち〔名〕各戸正月は日をトして家祓い（大祓い）の儀をなし、この日に親族を招き祝宴を張る。「せつ日」。

ぜちみよー〔名〕(1)のつぴきならぬ状況。絶対絶命。(2)「てこ」などの物理を応用して物を動かすのを、「ぜちみよーにかくる」という。

ぜつ〔名〕呂律。説。舌。「ぜつがもとらぬ」。

せつか〔名〕牡蠣。

せつき〔名〕年の暮。年の瀬。年末。「せつきしわす」。

せつくわ〔名〕牡蠣。かき。せつか。「せつくわうち行た」。

せつくをんにち〔名〕盆正月節句等親族間の交際をすべき日の総称。

せっしょー〔名〕鏡淵。

せつなか〔形〕息苦しいこと。悲歎の極み。「胸んせつなか」。

せど〔名〕各戸家宅の背後に山を控えさせその南面に家居を構えた。この北（西）面の山地を「せど・せどやま・せどんやま」という。

せどくら〔名〕家と背戸山の間。

は狭く暗い所が多い。せどの暗がりの意味の他「せどぐる」の意ともいう。「くる・くろ」参照。

せなか [名] 人の負った運命・生まれつき・生まれ合わせ。「せなかかるうち来ちよらすけんあ・あれむこれむせなかたな・あん人むせなかが悪かもんなあ」。

せなばる (動) 背なを張る。抱かれたり負われたりした児が背中を反りかえしてむずかる。

せなわ [名] 海中の瀬に延べて、あら・あこー・鯛などを漁る延縄漁。餌の多くは章魚とか。

せに (助) 故に。から。「まーだ早かせに、ゆっくりしもうち行かすがよか」。

ぜにみがき [名] かたばみ。すいものぐさ。「ぜんみがき」ともいう。この草で銭を磨いた。又すいものぐさとは、酢物草で草の汁に酸味があるところからの名とか。かたばみ科。

せぬぎり (動) しないと。「そえんこつあせぬぎり」と良かるとにええー。「せんぎりい」も同じ。

せばか [形] 狭か。狭い。

せばたくら [名] 狭苦しい場所・部屋。「せばたくらに入っちしめた」。「せばたくれ」も同じ。

せび [名] 蟬。

せびのやま [名] ここが頂上の意。

せびらかす (動) からかう。なぶる。いじめ泣かせる。「そえんせびらかすもんじゃなか」。「せぶらかす」も同。

せぶち [名] 陸地続きの瀬で淵となった海岸。単に海岸近い土地もいう。

せぶらかす (動) 嘲弄する。嫌がらせ。

せまちだわし (動) 狭い田の畦畔など崩して一枚田にすること。

せまつり [名] 瀬祭り。漁師が海中に神酒・米などを供え龍神や恵比須を祀る祭事。

せもうち [名] 網で囲み曳くと同時に船から石を投入して魚を追込む漁法。

せもん [名] 瀬で獲る鯪類の総称。

せりせり [名] (1)小児のせり出し遊。「せーりほんほん」参照。(2)座が詰って人と人がせり合う程の状況。

せりだす (動) 仲間はずしして除け者扱いする。単に押し出す。

せりふね [名] 舟の競漕。ふなぐろ。

せりおとす (動) (1)競売品を買取る。(2)他人を計画的に失落させる。

ぜる (動) 反動的にせり返してくこと。

ぜれ (動) 牛に後退・後しざりを命ずる時に発する。「ぜれ・ぜれぜれ」などという。「ぜろ・ぜろぜろ」も。

せわむせじょーむなか〔形動〕苦勞知らずの極楽とんぼ状。

せわやく〔名〕(1)何かと親切に世話する。(2)心配しせわやきこがれる。(3)家族を亡うこと。「1年に2人もせわやく」。(4)せわ役を努める。

せん〔助〕「せに」に同じ。故に。から。「来ちよるせんよかろうが」。(動)しない。「そげえーなこつあせん(と)」。

せんぎもんぎ〔名〕色々と詮議する。

せんきゅー〔形〕顔一面にあばたのあるさま。

せんきょー〔名〕先日。先頃。「せんきょーかるお願えしちよりました事……」。「せんきょーからあお世話なりましちどうむこうむ……」。

せんぎりい〔動〕しないと。しなかったら。「そえん事せんぎりい良かつちよるとに……」。

せんぐりまんぐり〔動〕いろいろ工夫や工面して事を運ぶ。順繰りして事を了える。「千繰り万繰りしち持ちち行た」。

せんぐりもち〔動〕順繰り持ち。

せんごほう〔名〕千切り牛蒡。

ぜんざれー〔名〕膳洗え。膳洗い。法事供養の翌日、親戚隣人加勢人寄り集まって後片付けの後慰勞の馳走を受けた。

ぜんじのう〔副〕錢收納。金錢をはたいて物事の始末処理をすること。有り金全部吐きだ

し使い果たすさま。

せんじゅーせんべん〔副〕同じ事を何回も何回もくり返す。度々繰返す。

ぜんしょー〔名〕(1)小児がだだこねる。(2)女性神経系の発作症状(実態不詳)。

せんすがもり〔名〕「すがもり」参照。

せんすところ〔名〕先祖所。墓地。

せんすもと〔名〕先祖元。婚嫁養子により家族となった者の父母の実家。

ぜんぜん〔名〕錢。お金。小兒語。「ぜんぜんお呉れ(お金頂戴)」。

せんそく〔名〕入浴行水より簡単に肩脱ぎ上半身や手足を洗い拭く。

せんぞく〔名〕栓篋。鉋鎌や道具の柄元に打ち込む木栓鉄栓。

せんちゃじゃわん〔名〕大きな茶碗。

ぜんつき〔名〕並列のものが将棋倒しに倒れぬがむこと。

せんと〔動〕しないこと。「せん」。

せんどうもつ〔名・形〕^{かぶ}頭。頭になる。

せんどうより〔名〕船頭の寄り合い。浦中の漁業に関わる諸事を協議決定する機関。更には大船頭数人を選出し事に当らせる。

ぜんなく〔名〕善惡。事の良否。

せんねんくーず〔名〕亀。く

さ亀。

せんの一〔名〕毎年漁期の初に
その年中の骨頭を前金で先売
りする。鯨組用語。

せんばいうえー〔名〕千把祝
い。農家で稲千把以上収穫し
た時内祝いし神祭りした。

せんばこぎ〔名〕稲や麦を脱穀
する手振ぎの農具。「せんば」
ともいう。

せんびきご〔名〕性格情緒等ね
じけて素直でない小児。「しん
びきご・しんびきづら・せん
びきづら・せんびきとーさ
れ・せんびきはがれ・せんめ
ーはがれ」など同義。

ぜんぶた〔名〕栄螺の石蓋。

せんぶほーじ〔名〕懺法行事。
仏法供養の一儀式名。

せんめえー〔名〕(1)ぜんまい。
うらぼし科のした類。(2)「せ
んびきご」に同。(動)しない
だろう。するまい。「もうにや
せんめえーだい」。

せんめえーはり〔名〕「せんめ
えーはがれ・せんびきご」に
同じ。

せんめえーはる〔動〕言われ
ても言われても言うこと聞か
ない言動を続ける。

ぜんもん〔名〕乞食。

せんりょう〔名〕碌砂根。まん
りょう。やぶこうじ科。但し
壱岐では、せんりょうと言え
ば赤実のまんりょうを指し、
まんりょうと言えは白実を指
す。

そ

そ〔名〕麻。「まそ・かたそ・け
ーそ」等熟語として用いる。
「そ」単独使用例は見当らぬよ
うだとのこと。

ぞ〔名〕(1)妊婦出産の気配。「ぞ
の近まった」。(2)潜伏期の症状
に用いられる。「ぞ病み」。(助)
か。「誰ぞ加勢に來ち呉る者
のありや……」。

ぞー〔名・助〕「ぞ」に同じ。

そーがい〔名〕捕鯨の網船は「み
とぶね・しばり・さきまわり」
の三手に分かれ、各2艘宛を
以て編成される。捕鯨用語。

ぞーくび〔名〕首。「ずーくび」
に同。

そーけ〔名〕箧。「しょーけ」に
同。

ぞーさ〔名〕法事供養に贈られ
る全品。志。「沢山にごぞーさ
戴き……」。

ぞーさく〔名〕麦稈屋根葺き、
又は葺き替え作業をいう。「ぞ
ーさく屋根師」「ぞーさくこと
り」。

ぞーさくことり〔名〕(1)屋根
師の指示を受けて屋根裏に入
り「はり先」の手伝い役。秀
でたことりは屋根表の屋根師
のひと声で意図通りの位置に
針を指し戻し、次々屋根材に
結縛して仕事を手際良く処理
して呉れる大切な仕事士。材

そ

料準備や取揃え等忙しく「こどり」の良否が仕上がりに大きく影響する。(2)「てんじょうべら」と呼ぶべら科の魚名。海上部を動き廻ることが多いから？

そーしたりゃー〔接〕 そうしたなら。

そーじゃき〔名〕 塵焼。塵焼場。塵捨場。在部では木戸先やなぶたけの一隅に場所を設けそこに集めて置き各家毎に焼却処理し、灰分は畑に還元利用した。「そーじゃき」も同じ。

そーじゃすえに〔接〕 それだから。そんなわけだから。「そりじゃけに」も同じ。

そーず〔名〕 雑水。食器・食材調理時の屑類は内容吟味の上貯えて牛馬の「はみ」と共に与えた。この雑水をいう。

そーずくれえ〔名〕 そ(そー)づくらい。ある機運を待つ下準備。「鶏が卵をもつ(産む)、そーずくれえしをる」。「ぞずくれえーする」も同。

そーするちゅーと〔接〕 然うすると。「するちゅーと」も同じ。

そーたん〔名〕 冗談。戯事。悪戯。戯言。「ぞーたん」とひょうたんなあ成り口が違うとぞー。

そーつく〔動〕 うろうろうろつく。

そーですけえに〔接〕 そうですから。

そーですすえに〔接〕 上に同じ。

そーですばっちか〔接〕 そうですが。

そーですばってか〔接〕 上に同じ。

そーですばってん〔接〕 そうですが。

ぞーてぼ〔名〕 山や田畑に仕事にでる折背負い、何によらずこれに取り入れ運搬に用いる大きい竹製の籠。

そーなりゃー〔接〕 そうなれば。

ぞーぬくそ〔名〕 象の糞ほど多量に。

ぞーはぎ〔名〕 みそはぎ。千屈菜。みそなぎ科の植物。「そうはぎ」同。

ぞーひょーどる〔動〕 準備に彼此と手間暇がかかる。

ぞーひょーもんじょー〔動〕 準備万端整える。

ぞーみ〔名〕 鯨の臓物名。

ぞーよー〔名〕 掛けもの。諸掛け。手間暇。諸費用。

ぞーよーいり〔動〕 手間ひまがかかる。金銭他諸掛け負担増となる。物要り。

ぞーよーどる〔動〕 「ぞーひょーどる」に同じ。

そーゆーたちち〔形動〕 そんなに言われましても。

そーら〔名〕 たわし。古くは縄を丸めかがって作り用いた。

〔感〕 そうれ。そうら。そうれ見よ。ほら。

そーりゃ〔感〕 そうら。そうら

見よ。

そーれえー〔名〕葬儀。葬礼。葬式。

ぞーわた〔名〕臓腑。臓物。腹わた。

ぞーんくそんに〔形〕「ぞーぬくそ」に同じ。多く。沢山に。

そいぞい〔名〕添いぞい。連れ合い。夫婦。「こりが私のそいぞいの墓ですたい」。故人となった夫を妻が。

ぞいぞい〔副〕虫の這うさま。ぞよぞよ。ぞろぞろ。

そうれ〔感〕そーら。そーりや。

そいえつ〔代〕そ奴。そやつ。そえに〔形動〕そんなに。そえん。

そえもぬ〔名〕添え物。副食物。

そえん〔形動〕そんなに。

そおしうえち〔接〕そしておいて。それから。そのあと。「そーしうえーち・そーしちうえーち」も同じ。

ぞおわた〔名〕「ぞーわた」に同じ。

そがしこ〔形〕「その程度の量(物)」。

そかた〔形〕形ばかりの心遣い。印。形。心ばかりの品(物)。粗形。素形。

そぎる〔動〕削る。削って先端を尖らせる。そぎ切る。「とぎる・とぎりかす」も同じ。「鉛筆そぎる」。

そく〔助数〕(1)縄・竹類の束数。縄は「10かた」を1束と

いう。ひとかたは20^ツ尋又は30尋とする。(2)膳・碗・皿等10人前を1束という。

そくー〔動〕穴や隙間を埋め修繕する。「鍋・釜の底をそくーちもらう」。

そくいー〔動〕修繕する(人)。「そつくいー・そつくおー」も同じ。

そくう〔動〕繕う。つくろいする。

そくだち〔名〕密生。束になり生える。「竹ぬそくだちしちよる」。

そくなう〔動〕そこなう。失う。悪くする。「そげん食うたら腹そくなうぞ」。

そげーに〔形動〕そんなに。「そげーにするな・そげーに有るもんか」。「そげに・そげん」も同じ。

そげーんなもん〔形動〕そんなもの。「そげーんもん・そげなもん」も同。

そげん〔形動〕そんなに。「そげんするな・そげんこつば言うなよ」。

そこいら〔代〕その辺。そこら。

そこすんだり〔副〕それっきりだめ。「あん男^{おとこ}え金^{かね}食^たえたりい、そこすんだりたあえ」。

そごそご〔副〕身体がそくそくっと悪寒するさま。「そごつく」も同じ。

そこに〔接尾〕ただひたすらに。一心になる。熱中。集中。「遊びそこにする・急ぎそこに

そ

そ

しち戻っち来た・働きそこに
しをつたとに死んだつちゅう
ばな。「そこね」も同じ。「働
きそこねの男じゃつたてー」。
そこみ〔名〕舟の上から「箱め
がね」を用いて海底を見乍ら
鉾漁をする。「ふないそ」とも
いう。

そこりえ〔代〕そこらに。その
辺に。「そここれ」も同じ。「そこ
りえ置えちよけ」。「そこら・こ
こら・あそこらに助詞（に・
へ）が付いて変化」。

そこりえー〔代〕そここれ。

そこりや〔代〕その辺。「そこ
りや」も同じ。

そここれ〔代〕そこら辺に。

そぎす〔動〕し損ずる。「書きそ
ぎすなよ」。

そそくる〔動〕ざっと間に合わ
せ修繕する。「屋根ばそそく
る」。

そそめく〔動〕ひそひそと耳う
ちする。「そそめく」も同じ。

そそめきごつ〔名〕ひそひそ
話。

そそる〔動〕丁重に撫で育て
る。「そそり育つる・そそり立
つる」。

そちがう〔動〕違う。食い違
う。

そつ〔名〕無駄。手抜き。粗
末。「そつの無か・そつがい
く」。損失。

ぞっき〔名〕横着。生意気。「ぞ
っきな男」。「ぞっけ」も同じ。

そっくおー〔動〕破れ・割れを
繕う。「そっくおーする・そく

ー・そくう」も皆同義。

そっくび〔名〕うしろくび。

そっここ〔副〕直ちに。即刻。

「そっここ戻っち来たばな」。

そっさく〔形動〕ぞんざい。「そ
っさくな物の言いようさす」。

そっしょー〔名〕悪口。蔭口。
「人のそっしょーはせぬこ
つ」。

そっちのけ〔名〕差別し除け者
にすること。

そでおとし〔名〕幼児の葬儀。
親の着物の袖にくるみ包んで、
ごく内輪的にねんごろに葬っ
たという。

そでとりがみ〔名〕袖取り神
さん。祈願事の願ほどきに袖
を上げるとよいと。河童に袖
を捉えられた折、袖を振り切
って逃げ難を免れたとか。

そとがま〔形〕爪先を外様に足
を踏みだし歩くさま。女性の
歩きとして特に忌まれて来た。
「うちがま・うちがも」に対す
る語。左右平行に足を運びだ
し歩くのが良いとか。

そないげ〔名〕とげ鋭く荒い。
いいぎり科の植物。

そにし〔代〕その人。

そぬ〔代〕その。「そぬ男。そぬ
女・そぬ下道さがり」「そぬお
方が」。

そぬだんじゃなか〔副〕そん
なことに構ってはおれない。
そんな余裕などない。「そげん
こて構うちおらるるか、そぬ
だんじゃなか」。

そぬはてぬこつ〔副〕当然の

結果。当然の報い。当然の帰結。

そぬわれ〔代〕その人。

そね〔名〕(1)畑の高みの方。田畑の崖側。「そねに土もつ」。(2)海中の岩石群がり魚群棲息の好漁場。

そのしと〔代〕その人。

そばいえ〔名〕にわか雨。通り雨。「そばい・そばえ・そばえー・そべー」も同じ。むらしぐれ。しぐれ。

そばきり〔名〕生そば。短かく幅広めに切り作ったそば。「そばきり打って食おうか」。

そばばち〔名〕側杖。とばちり。「そばばちくう(かぶる)」。

そばひら〔名〕附近。近く。周辺。「そばひらが、ほそい迷惑じゃつた」。

そばもち〔名〕蕎麦粉のはたき餅。そば粉を用いた団子。「はたく」参照。

そびき〔接頭〕罵りの意を強め「そびき死ね・そびき戻れ・そびき止める・そびき破れ」等々。お前などさっさとどうにでもなれ……。

そびきそくなかす〔動〕引き散らし引き乱れさすこと。

そびく〔動〕曳く。引つ張る。そっばる。「そえんそびくな切るたい」。

そびらかす〔動〕症状を悪化させる。そぼくれかす。

そぶる〔動〕水に浸け振りゆさぶる。「そぶるぞー」。「ざぶる」

も同じ。

そべー〔名〕にわか雨。「そばいえ」に同じ。

そぼくる〔動〕完成(出来)そこなう。失敗する。「言いそぼくる」。

そぼくれかす〔動〕完成完治させえず、却って悪化させる。

そぼくれる〔動〕し損じる。悪くなる。出来そこなう。

ぞめく〔動〕にぎやかにはずむ。ひやかす。鳴物入りで騒ぐ。「ぞみく」も同じ。

そやす〔動〕そらす。斜め方向にかたむく。

ぞやみ〔名〕病気の潜伏期発熱状況。「痘瘡はぞやみ5〜6日はある」。

ぞらく〔形動〕粗末に取り扱う。ぞんざいにする。だらしなくする。

ぞらくち〔名〕藁で編み上げ紐を付けた籠。農家はこの中に物を入れ運搬に用いる。

ぞろっか〔形〕だらしが無い。「ぞらく・ぞらくか」など同義。

ぞらよま〔名〕釣糸に「びし」の付かない部分名。空纏麻。釣具の名。

そり〔代〕それ。「そりお呉れな」。

そりあがり〔名〕調子に乗りすぎ者。のぼせ著。「そりあがり著」。「てんじんさー・そりゃがり」も同じ。

そりかちゅーたちち〔接〕そうは言っても。

そ

そり～そる

そりかる〔接〕それから。「そりかるどうしたち言いをと……」。

そりくりかやる〔形〕人・物がそり返る。威張る。そりくりかえる。

そりこすけて〔形動〕それこそ決して、そんなことは有り得ない。

そりじゃ〔接〕それでは。「そりじゃー・それじゃ」も同じ。

そりじゃけに〔接〕それだから。それ故に。「そりじゃけん」も同じ。

そりじゃすえに〔接〕そんな訳だから。そんな訳で。

そりじゃによって〔接〕そんな訳で。

そりそり〔副〕(1)それぞれその通り。(2)そろりそろり。「そりそりお帰^{かへ}りまっせなもし」。ゆっくり気をつけ。

そりそれえする〔動〕夫々片を付け落付く所に落付かせる。「そりそれする」も同じ。

そりで〔接〕それで。

そりですけにい〔接〕それですから。

そりですすえに〔接〕それですから。

そりですばっちか〔接〕そうではありませんけれど。そうではありませんが。「そりですばってか」も同じ。

そりですばってん〔接〕そうではありませんが。「そりですばってんか」も同じ。

そりとぬ〔接〕それなのに。然

るに。それだったのにどして。「そりとむ・そりとん」も同じ。

そりのあわん〔形〕うまが合わない。相談ができない。気性が合わない。

そりばっちか〔接〕そうではあるが。「そりばってか・そりばってん・そりばってんか」も同じ。

そりべくそーろー〔形動〕物事の結末がうやむやに終る。それっきり音沙汰なしの状況。

そりみろ〔形動〕それみたことか。いわぬこつじやなか。

そりゃー〔感〕軽い驚きの声。それはどうも。「そりゃーばい・そりゃーまー」などとも発する。

そりゃーそーですばっちか〔接〕それはそう、おっしゃる通りですが。「そりゃーそーですばってか・そりゃーそーですばってん・そりゃーそーですばってんか」など同じ。

そる〔代〕それ。「そるとむこりゃどうなあな（それともこれはどうですか）」。

そるそる〔副〕そろそろ。恐る恐る。静かに用心しながら。「そりそり」。

ぞるぞる〔名〕そう麺。「ぞるぞる食るか」。麺類一般の呼名。小児向。〔副〕大勢連立つさま。群集の流れ動くさま。「ぞろぞろ」に同じ。

そるべくそーろー〔形動〕「そりべくそーろー」に同じ。

そるわし〔代〕その人。
 ぞれ〔名〕(1)果樹・樹木の徒長枝。落。『梨のぞれ伐る』。(2)少し斜面になった崖。崩れ落ちた崖。
 そろく〔動〕身体がなえて利かぬ。
 そろくる〔動〕(1)身体がなえて利かなくなる。「足がそろくる」。(2)崩える。「そろける」も同じ。
 そろっと〔副〕そろりと。静かに。
 そろっと〔副〕一緒に。一度に。そろそろと同時に。
 そわそわ〔副〕気持ちの落ち付かないさま。「そわそわしち手えつかん」。
 そわたる〔動〕添いの悪いこと。「布団がそわたる・そわたるもんで眠られん」。「すわたる」ともいう。
 そわつく〔動〕そわそわして態度落ちつかない。
 そんな〔名〕血統。子孫。系統。血筋。
 そんなくい〔名〕竹や木の伐株の尖ったもの。削ぎ杭。「かなくい」も稍似る。
 そんじむよらん〔形動〕思いも寄らぬ。全く意外なこと。
 そんな〔副〕際限なく多量に流れるさま。
 そんだんじゃなか〔形動〕そんなことに拘わる余裕など全くない。
 そんなちやうさんぐさ〔名〕むらさきかたばみ。ききょうか

たばみ。かたばみ科。「めらさんぐさ・よこたさんぐさ・あめりかかたばみ」など呼び名色々。
 そんときや〔接〕それでは。
 そんとしや〔接〕それでは。
 そんなに〔代〕その方に。その人に。「そぬかた・そぬなに・そぬなん」も同。
 そんなりや〔接〕それでは。「それなら・そんなら・すんなる・さんなる」などと同じ。
 そんなる〔接〕それでは。「そんなりや」に同じ。

た

た〔助〕い。け。「こっちさね来た(来い)・早よ行た(行け)」。動詞の語尾に付いて命令の意を表す。
 たー〔助〕「たーな・たーいえ・たーえ」等と同義でやや親しみ易さがある。「昨日やった(渡した) たー」。
 たーいえー〔助〕「たーいえ・たーえ・たーな」と同義であるが、同輩や以下に用いる。「知れたこつたーいえー」。「たーえ・たーな」も同じ。
 たーしやらく〔動〕うろろう目的もなく遊び(動き)廻る。うろつく。「たあしやらく・たわしやらく」も同。
 たーった〔副〕次第に。段々に。余計に。「たーった足の痛

た

うなつた」。「いちべ・いちべー」等と同義。

たーん(動)落ちる。「たーんするぞ」。幼少児に用いる。

たい(助)ねえ。なあ。「よかた

い」。

だい[名] 船の「こぶち」の外側に取り付けられた波除けの板囲い。(助) だろう。だろうね。「米うだい」。反語や念を押す意も伴う。

だいか(形)だるい。本来は「だゆい」か。「眠られんごつ足のだいか(つた)」。「だいかけん歩まれん」。

だいかぐら[名] 大神楽(8名で奉仕する)。太鼓始・神遊・四本幣・二本幣・注連・真神・鉾・八咫鳥・篠・幣納・四剣・二剣・四弓・二弓・五方開・猿田彦・弥散供米の17座。この他に折敷・神角力・漁取を加え20座とする者もある。昔は全部を入れたのを基本の法としたが、現在では希望によって入れるとのこと。経費は米2俵(3斗2升俵)とされた。

だいくい[名] 神官。神職者。「だいくい・でーくい・でーくいー」さんも同じ。

だいくじ[名] 大官司。神官。

たいげ[名] 大概。おおよそ。適当。適度。いい加減。「たいげにしちよく・たいげえー・たいげえーたい・たいげえーのこつたい」等と用う。

たいげーたい[副] いい加減

すぎる。

だいくくあげ[名] 刈り上げ祭り。「でーくくあげ」も同じ。祝事する。

たいこはじめ[名] 大神楽の初めに奉納される「かぐらはじめ」とも呼ぶ神楽名。

だいさま[名] 神の憑く人。神がかりになる人。

たいそー(形動) 多量に。「たあいそう」ともいう。

たいたい[名] 互角。「たいたいじゃつたばな」。

だいだいかぐら[名] 大々神楽。12人で奉仕するのが本法であるが10人ででもできる。大神楽の他に岩戸神楽即ち湯立・思兼・太玉・天児屋根・手力男・鉦女を二弓と五方開の間に入れる。経費は玄米4俵とされた。

たいてーしれたもん[副] 大抵の事は判っていた筈なのに、全くけしからん、承服しかねる。横着するにも程がある。「たいげしれたもんたい・たいてーなもんばい」とあきれる。

だいねんじあいえ[名] 大根他野菜を油いためし味付けたもの。

だいはたけ[名] 前畑。「だいはつけ・でーばたけ・でーばつけ」ともいい「まいえはた」に同じ。「なぶたけ」参照。

たいふし[副] 充分熟睡している。ぐっすり眠る。「たいふし顔ちよる」。

だいまよーだけ[名] 軟弱な

竹。
 たいらに〔動〕ゆったりくつろぐ姿勢になる。あぐらをかく。「どうぞおたいらに」と勧められて寛ぐ。
 たいわんじょう〔名〕台湾棕櫚。びろうやし。勝本町仲触にこの老木があり、土地の人がそう呼んでいる。
 たえーた〔動〕紛失した。たやす。
 たえーなし〔副〕他愛なし。たわいなし。当にならない者へ「こんたえーなしが」と罵り言う。
 たおっちょる〔形〕しなっている。ゆるやかでなめらかな曲り具合。
 たおる〔動〕(1)曲る。しなう。傾く。(2)紛失する。
 たか〔名〕觚。〔助〕たい。度い。「見たかねえ・仕たかばい」。
 たがい〔名〕船の鰭の「は」と「うで」とを括り合わせる芋綱。上部を「上たがい」下部を「下たがい」と。
 たかおれ〔名〕女性の髪型高島田髷。
 たかがしら〔名〕天候や気温の関係で頭痛の起る癖のある者。「たかがしらもち」ともいう。
 たかかぜ〔名〕北西の風。あなぜ。一般に北に廻る風を「高くなる」、南に廻る風を「さがる」という。
 たかきび〔名〕とうもろこし。きび。

たかげた〔名〕足駄。「さしげた」。
 たかしを〔名〕潮の最も高く満つ時季の満潮。
 たかたで〔名〕せんになそう。きんぼうげ科。牛馬は全く食わない。針で刺すような辛さがあると。
 たかっぱ〔名〕北と西の間の風。北西風「たかかぜ」に同じ。
 たかぬつめ〔名〕ひざら貝に似て褐色の細長い貝。
 たかば〔名〕形は「かさご」に似て薄紫、横に淡い縞模様のある魚名。
 たかばち〔名〕「たかばつちよー」ともいい、商品・物の値段を高く付けて言う人。「たかばつちよーばつかり言わす人」。
 たかばり〔名〕小竹を縦割りして薪や柴を束ね結うに用いる割り竹。「たくばり」ともいう。女竹を使う。
 たかばる〔動〕「こーばる」に同じ。
 たかひざ〔名〕両膝を地につけ踵を立てて臀部を乗せる姿勢。「たかひざつく」という。
 たかみち〔名〕高満ち。高潮の満潮。
 たがみまつり〔名〕田神祭。主として旧暦6月29日忌の日、小麦団子・飯・酒等を持って田の神祀に廻る。田の神は天神様だと言われている。「みとだ」参照。

たかやく〔名〕高価な品。
たかり〔名〕高み。高い所。畑
 等高低のある土地の高い部分。
たき〔名〕崖。断崖。「落岸」。
だき〔副〕だけ。「そりだきしか
 知らん(ばい)」。
たきいびり〔名〕炊事。炊きい
 びり。
たきこみめし〔名〕魚・鳥肉
 に野菜を切り込み醤油等で味
 付け炊く飯。
たきそくねー〔名〕盆の精霊
 様に上げる供え物。米・麦・
 大豆・小豆等の五穀を取り混
 ぜて炊き十五日に供えた。(物
 によって煮える時間差があり、
 煮上った物・未だしの物色々。
 「炊き損い飯」状になっている。
 意図的にそうする理由が
 あつてのこと。
たぎとー〔名〕田祈禱。虫祈
 禱。「さねもりぎとう(実盛=
 実守り=種実を守る) 祓いの
 祈禱」。
たきな〔名〕島や海岸の断崖に
 生える「うど」に似た草。ほ
 たんぼうふう。食用になる。
 せり科。滝菜。
たきほし〔名〕麦ばかりを炊い
 た飯。米又は粟と混ぜ「むぎ
 めし」となる。「たきほし」と
 もいう。
たぎる〔動〕腹を立てぶつぶつ
 小言を言うこと。「そげーんた
 ぎるな」「蟹がたぎる(ぶくぶ
 くと泡を吹く)」。
たきわり〔名〕焚き割り。大石
 を割るのにその周りで火を焚

き膨張させた後、水をかけ冷
 却させ割る方法。
たくじんさい〔名〕宅神祭。
 「まぶりかき」参照。
だくだく〔副〕恐れのため胸さ
 わぎすること。「胸ぬだくだく
 しち、じーっとしちやおられ
 ん」。
たくぬる〔動〕当てもなく探
 す。尋ねたずね探す。
たくばり〔名〕「たかばり」に
 同じ。
だくぼり〔名〕地面のくぼみ。
 窪地。へこんだ(凹)地面・
 場所。
たぐらのむ〔動〕貪り食う。「久
 しぶりにたぐらの一だ」「たぐ
 らのむごつち食おった」。
たくりがさ〔名〕筍の皮で覆い
 頭につける竹製の編み笠。す
 げ笠の類。「たこぬがさ」とも
 いう。
たくりたたる〔形〕たぐり寄
 せられうず高く積み重なった
 さま。
たくる〔動〕たぐる。まくる。
 まくれる。めくる。「たくりた
 たる」も同。
たぐるー〔動〕尋ね求める。探
 し求める。「たぐるる・ききた
 ぐるー」も同じ。
たぐるめ〔名〕田の見廻り。水
 のかけひき・稲の生育状況の
 見廻り。
たくわり〔名〕「たかばり・た
 くばり」に同じ。
たけすえぼ〔名〕竹切れ。竹棒
 切れ。「たけせえぼ・たけせぼ」

も同じ。

ただけ〔形動〕分相応。たかだか。それ相応。「ただけに仕事しち来ちよる」。

たけのこわり〔名〕分配給与の率が上に厚く、小者に及ぶ程薄くなる制。

たけり〔名〕鯨の陰茎。

たける〔動〕苦痛の声をあげる。大声をだす。叫ぶ。「狂いたける」。

たご〔名〕(1)池郷の者。他村・他地区の者。(2)桶。たが。(3)大食漢。「たごへー(大食い者)」ともいう。

だご〔名〕団子。芋だご・蕎麦だご・黍だご・かんころだご・米だご・小麦だご等団子状の物は「だご」と言い「だんど」とは言わなかった。

たことばし〔名〕風揚げ。風飛ばし。

たこぬかさ〔名〕竹の笠。竹を割って削り骨組とし、筍の皮を鉢状に張って作り、蓑と共に農作業に用いる冠り笠。「たぐりがさ(手操り笠)」「たこのかさ(蛸の笠)」も同じ。

たごへー〔名〕品を選ばず多量に飲食する者。略して「たご」とも言う。

たこよま〔名〕風揚げに用いる縫麻。風とばし用の糸。「よま」参照。

ださん〔動〕ださない。できない。しない。ださぬ。「中々会いださん」。

だし〔名〕「やまあて」して漁場

や海上での自船の位置を知るのに用う。遠くの山と近くの島を重ねて横にすれ違う関係をもとに位置を割りだしていく方法。漁業者用語。

だしかきりか〔名〕舢・講中で金品を切りたて出し合つて目的の諸事に充てる時の各戸の負担金品。又その行為そのもの。(負価・荷・課・科)。

たじそ〔名〕ゆきみそう。みぞこうじゅ。田紫蘇の意。しそ科。

たじなか〔形〕少ない。足りない。

たしなむ〔動〕(1)貯える。大事がつて保有する。「物をたしなむ」「米をたしなんじ食う」。(2)少しずつ大事に大事に扱い用いる。

たじなわ〔名〕野に牛を連れ出して繋留するに用いる足し縄。その長さは制限するところ、しない所ある。大体4尋から9尋(7～15米位)。

たしのーじ〔動〕「たしなむ」に同じ。

たしよ〔名〕血縁につながらない人。

たしよーたにん〔名〕他生他人。非血族者を強調して表わす語。「たしよ・たしよたにん」に同じ。

たしよいらず〔名〕身内・内輪だけの水入らず状態。

たず〔名〕(1)つた。なつづた。ぶどう科。(2)つたうるし。うるし。「うるし」にかぶれるのを「たずまけ」という。

たすきばり〔名〕紐で胴をかか

た

り締めて打つ太鼓。「うけぱり」ともいう。祝い事に持ちだし宴席で打ち鳴らされ唄で囃され賑合う。

たすきめえ〔名〕 襷舞。「折敷舞」の地舞。神楽舞の名。一人で赤綿布を持って舞う中、とんぼ返りと同時に持った布を襷にかけて起き上り、此の後盆を持って「をしきめえ」の本舞に入る。「おしきめえ」も同。

たずねもつきやく〔動〕 ひどく必死に探し尋ね廻る。「たずねもつきやくする」。

たずる〔動〕 たでる。「できもの」などを薬や薬湯で治療する。

たた〔名〕 牛の行動を左方向に転換指示する命令語。因みに右は「へし」。

たたかう〔動〕 仕事・用件が同時に同所に発生殺到するさま。

たたく〔動〕 頼む。「悲しか時にゃ神たたく」。「ただく・ただき」も同じ。「悲しか時の神ただき」。

だため〔名〕 境界。「だためがわからん」。

ただもね〔副〕 次第に。「ただもん」も同じ。かえって。次第に。「早よ行かにやただもね(ん)遅るとぬ」「病人なただもね(ん) 悪うなるばかり……」。

たたり〔名〕 鋤(犂)床から立上って「ねり」を支える部品名。

たちかけ〔名〕 船の「かんばん」前の船梁の名。

たちぐらみ〔名〕 めまい。立ちくらみ。

たちげーし〔動〕 行つてすぐ帰る。

たちばなまい〔名〕 橘舞。神楽舞の一種で昔の花舞。

たちび〔名〕 死者の命日。祥日。忌日。あたり口。

たちほいえ〔名〕 犬の長啼き。「たつほえ」も同じ。犬が向いて啼く方向に死人がでるとか。「犬のたち吠、烏の夜鳴き構やあせねど気にかかる」。

たちまいえ〔名〕 家屋新築当日。この日から屋根葺き完了(葺き冠り)の日に向け、一般祝意を受け祝いの金品が届けられる。「葺かぶり・棟上げ・葺きおろし」ともいう。

たちやど〔名〕 婚礼における婚家の仮宿。遠方からの婚礼には仮り宿を設け、茲で諸準備を整え婚礼に臨む。

たちゅー〔名〕 同輩。同年。仲間。「私共たちゅー・武生水たちゅー」。

たつ〔名〕 建具類の両側縦の枠組み。

たづ〔名〕 つたうるし。「たず」に同。〔動〕 (1)薬・薬湯・湯で患部を浸し治療する。(2)いじめる。

たっかくもっかく〔副〕 方々歩き廻る。さらきやらく。

たつこがわら〔名〕 荒石原。

たった〔動〕 やっと立ち上る。「たったした」。幼児への語。

〔副〕 ほんの少し。今すぐ。只

の。

たつたいま〔副〕今しがた。つ
い先。

たつたいまのこつ〔副〕危機
一髪。すんでのことに。

たつたすり〔副〕直ちに。たち
どころに。すぐさま。

たつたりすんだり〔形動〕仕
事するでもなく遊ぶでもなく。
あいまいな姿勢態度。

たつち〔動〕立って。「たつた」
に同じ。多く幼児に對し用い
る。「たつつすんず」も同じ。

たつちよる〔動〕建つ（立つ）
てる。

たつつすんず〔形動〕立っ
たり坐ったりぐずぐずするさま。
「たつつすんずで格別の事あ
せじゃつた」。

たつのー〔名〕俵に掛ける縄。
祝事用は太縄を飾り、凶事そ
の他用は普通大の縄を掛ける。
「たつ縄通す」。

たつぱ〔名〕鯨の鰭。

たつぱかやす〔動〕大の字型
に寝る。

たつびき〔形〕風姿。かつぶ
く。「たつびきの良か」。「かつ
びき」ともいう。

たつぼえ〔名〕立ち吠え。（古
来凶兆として来た）。

たつみごち〔名〕辰巳東風。南
東風。「おしあなごち」に同
じ。強南東風。

たつす〔動〕牛馬鮮魚を船で積
出す。

たて〔助数〕航海度数。

だて〔形〕身体を着飾ること。

たであぐ〔動〕いじめ抜く。

たておみき〔名〕神前に供える
神酒。神に酒を献ずることを
「おみきたて・おみきをたて
る」という。

たておみき〔名〕舟・船底を焼
く「ふなたで」には神酒をあ
げて船霊様を祀って行なう。
この神酒をいう。

たてかや〔名〕屋根葺きの時屋
根えつりに添って敷く麦稈。

たてぐり〔名〕釣漁法の一つ。
「はじき釣り」に對する手釣り
法。「てぐり」に同じ。

たてしを〔名〕真水に食塩を混
じ作る塩水。これに對し海水
を「うしを」。

たてつち〔名〕壁用・竈用の練
り土。「つちたて」参照。

たてづり〔名〕鰯釣り漁法。「く
りづり」に同じ。

たてのー〔名〕野原に草を立て
ておき（生育させ）秋に刈取
って冬期の牛の飼料とする。
この草地野草を。

たてび〔名〕舟の舳。「にゅーし」
ともいう。「たてば」も同じ。

たてぼー〔名〕船たでに用いる
棒。

たとー〔動〕潮の満ち湛えるさ
ま。「潮ぬ今、たとーちよ
る」。湛う。

たどー〔名〕部落・地域・地区
という程度の意味らしい。水
田の灌漑水の及ぶ地域範囲。
或る水源から水が引ける範囲
に水田を所有している者同士。
「田同・田同士」では。

た

たとむ〔動〕折りたたむ。「着物
たとむ」「薙たとむけん加勢し
ちくれ」。

たないけ〔名〕種籾を浸す池。
神が祀られていた。

たなおろし〔名〕籾種播き。種
播き。

たながり〔名・動〕人手による
稲の刈り方の一つ。深田の稲
はこの方法で刈り、干してきた。
「かりかけ」参照。後には
掛け干し法が導入された。

たながわさー〔名〕天手長男
神社（柳田鎮座神）の敬愛俗
称。手長男様。

たなし〔名〕肌襦袢。袖なし肌
着。

たなづと〔名〕小さな俵を編ん
で種籾を入れ天井に吊し大事
に保管してきた。種菰という。

たなつら〔名〕棚のあたり。棚
の周り。棚の前面。「たなつら
ば見つけち見ろ（棚の周辺を
探してみろ）」。

たなぬたわるる〔形〕西瓜が
熟れすぎて内部に空洞ができ
たさま。

たに〔名〕小地区内。「わだ・く
み・こうじゅう」などと同義
に用いる。地域名を付け「〇
〇だに」と呼ぶ。

たにがしら〔名〕「とりごえや
しき」と同じに用いられる。
住宅地としては余りよくない
とされて来た。「たに」の一番
高い土地に構えた家宅。「とり
ごえやしき」参照。

たにびき〔名〕親が死亡した

時、その子達はそれぞれの嫁
ぎ先や住んでいる地域の講中
からの悔みを受け、この講中
のひとと共に親の葬儀に参列す
る習慣があった。これを「た
にびき」又は「ひとりいちご」
という。「たに」の人々を引き
連れての弔問。うるわしい光
景だったが現在は殆んど行な
われていないようだ。

たにやきごめ〔名〕種籾を水
に浸し芽が出たものを日光に
当て乾かし、搗いて殻を除い
たものをいう。煎って茶に浸
して食すると。

たにわたり〔名〕ねずみもち。
樹名。

たぬもと〔名〕棚元。農家の台
所の小さな板の間。「たんも
と」も同じ。

たねおろし〔名〕苗代に種籾を
播き付ける時の祝い事。往昔
は親・子供招き合い小宴を開
き祝い合ったと。

たねかし〔名〕種籾を水に浸し
芽切り（発芽を促がす）させ
ること。これを種をかすとい
う。水温・気温他諸条件によ
り「かす」日数は数日から十
数日となる。その後用意した
苗代の苗床に吉日を選んで
籾々播きをする。現在では水
田の大型化・農業の機械化等
により育苗・田植え・耕作法
全般の大変革に伴い往時の姿
は見られなくなった。

たねご〔名〕子のない夫婦は、
親戚などから養子を迎えた。

これをやしねえご・たねたま
ご・たねご・あとみだしとい
った。こうすると実子に恵ま
れると。後日実子が生まれて
も養家から帰すこともなく実
子同様に処遇された。

たのき〔名〕狙。たぬき。

たのきのちょうちん〔名〕さ
ねかずらの実。赤く熟した果
の垂れ下った状態からの名。
もくれん科。

たのも〔名〕八朔の節句にその
年女兒が生まれた家では色紙
で雛を切り（作り）親戚に配
った。受けた家ではこれを梁
に貼り付け祝意を表わした。
これを「たのも」という。

たばこ〔名〕休憩。小休息。「こ
こいらでたばこしましょう
や」。

たばこばな〔名〕やぶたばこ。
天名精。さく科の植物名。

たび〔名〕宅岐島及属島以外の
国内の地の総称。

たびこかた〔名〕「たび」を更
に強く意識して用いる語。「た
びこかたばっかりさらきやれ
ーた」。

たびのひと〔名〕島外の人。島
外から来た人。「たびのもの・
たびのもん」ともいう。生え
抜きは「ぢげもん」。

たぶ〔名〕手綱。たば。たも。
柄を持って掬う綱。

たぶら〔名〕ぶたぶたした肉。
首たぶら。尻たぶら。

たばこ〔名〕たばこ。煙草。

たほどき〔名〕「いながら」を

犁いた後、田に水を入れ犁き
返し水田化する働き。

だま〔名〕お手玉。「だましゅう
や（お手玉遊びしょうよ）」。

たまあい〔名〕搗きかためた藍
だま。藍。「すくもあい」に対
する語。

たまぐわる〔動〕驚く。びっく
りする。「たまがる・たむが
る・たんぐわる・うったんぐ
わる・つつたんぐわる（大い
に驚く）」。

たまけー〔副〕大事に。「たま
けーに使う」。

たまけに〔副〕大事に。「たま
かに・たまたしけに」など同
じ。

たまし〔名〕やる気。根性。勤
勉心。「たましのある・たまし
もん（者）」。「たましが無い・
たましなし」。

たましか〔形〕らしい。

たましなし〔名〕なまけもん
（者）。「しょうねなし」ともい
う。物事に積極的に取組む意
欲の起きない者。やる気のな
いぐうた者。

たましもん〔名〕精励努力の
人。

たまたしけー〔副〕「たまけー」
に同じ。「たまたしけーしもう
ちよく・なをしちよく（大事
に保存・保有しておく）」。

たまとる〔動〕猫・子猫等のじ
ゃれ遊ぶさま。人にも用いる。

たまよばわり〔名〕人の死に
際に大声で名前を呼び、体を
揺するなどして呼びかけする

こと。「ことだま・かけごえ・こえかくる」とも言い、「きばらにやでけん」と呼び戻す。

きょうだいや親戚・親子のはたらきかけをいう。

たまをとし〔名〕男子数え年42歳は厄年とされ、厄まぶりがき（厄祓い）して祝宴を張る。「きんたまをとし」ともいう。

たまな〔名〕たにし。田螺。河川・水田に棲む蛸。

たむがる〔動〕驚く。びつくりする。「たまがる・たんぐわる」ともいう。

たむもと〔名〕炊事場及び流し。農家の台所の小さい板の間。「たんもと・たんもとんすみ」など同義。

ためしおけ〔名〕把手付きの手桶。取り扱い便利で量が運びつつわかる。

ためつすけつ〔副〕おどしたりすかしたり。

たやす〔動〕紛失する。「釜をたやす」。「たやした（紛失した）」は「たえーた」となる。

たよだよつ〔副〕絶えだえと。ものあわれ気に。かほそく可憐なこと。「たよだよつ泣きおる」。

だらごえ〔名〕^{うんち}。人糞尿肥。

たらしか〔接尾〕形容詞格となる。すかந்தらしか。憎たらしか。あこぎたらしか。（憎々しい・執念深い）。

たらたて〔名〕旧暦正月6日、家の入口・神前に「たらの木」

を立て邪を祓う行事をした。**たらんたしこ**〔副〕物の不足分。

たらんたらん〔副〕「たらんたしこ」に同じ。

だり〔代〕誰。「だりが言いおらした」。「だる」も同じ。

たりかぶる〔動〕下痢する。腹こわす。「はらたりかぶる」も同じ。

たりぎれ〔名〕不漁が続くと大漁の船から魚をもらい、その魚2匹を腹合わせにして船霊様に供え大漁を祈る。これを「たりぎれ」という。

だりほしかりほし〔名〕小児や欲しそうな人に物を分けるとき遊び的にこの呼びかけをして、真先に「私欲し（俺ほし）」と答えた者に与えるゲーム。

たりめ〔名〕かじき網は、あば網に網を取り付けるのに結付けを出して前後自由に遊動するように、ただ吊すだけにする。これを「たりめ」という。

たる〔動〕たれる。する。ひる。「糞たるる」。「たるる」も同じ。

だる〔動〕〔代〕誰。だれ。「だり」に同じ。

たるいれ〔名〕家屋新築祝い・船おろし・大漁祝い等に樽酒を持参祝意を表すること。一般に祝酒を献ずることをいう。

だるか〔形〕身体がけだるいこと。

たるきだけ〔名〕麦稈屋根の材

として、「こんめー」の上に縦に渡す竹材をいう。「こんめー・ひろこんめー」の項参照。

たるる〔動〕垂れる。「悪たるる・塩たるる・くそたるる」。動詞格付与。

たるわず〔名〕低能者。「たるわずのごたる」。

たれ〔名〕盥。たらい。「たれー・たれえー」などと呼ぶ。

だれずれ〔形〕不揃いのさま。「だれずれ戻ち来た（散々伍々に……）」。「だれずれー」も同じ。

だれむかむ〔副〕誰も彼も。皆。「だれむかむ泣かん者あおらざった」。「だれむかれむ」も同じ。

たわいたわい〔形〕泥酔したさま。「酔うちしもちたわいたわいで戻ち来た」。

たわしこむ〔動〕倒れ込む。落ち込む。「あんだめえーあぶねえこつたわしこむとこるじゃつた」。「溝えたわしこんだつばい」。

たわしやらく〔動〕あちこち歩き廻る。「さらきやらく」に似る。

たわす〔動〕失う。紛失する。「たえーた・たわえーた」ともいう。

たをたを〔形〕たわみにたわみ揺れるさま。

たをる〔形〕たわむ。しなう。「枝んたをるごつ柿の成った」。

たんかみ（さあ）〔名〕田の

神さま。

だんきゅー〔名〕らっきょう。薤。作物名。

だんぎり〔名〕鮎の一種。大材を挽くの用に用いる荒切り鋸。

だんぐいー〔名〕乱れ。

たんぐわつた〔形〕大いに驚いた。びっくり仰天した。「たんがった・たんぐわつた・たんがる・たんぐわる」。

たんぐわもん〔名〕自分の物は使い惜しみ、他人の物はむやみに勝手に使用したがる者。

だんごーしか〔形〕騒々しい。「らんごーしか」に同じ。

だんさん〔名〕段差。相違。差異。原本には「段棧」とある。「段差ん(の)」と考えてもよいのでは。

たんじいる〔動〕熱中する。「本読みいたんじいる」。

だんしゃん〔名〕坊ちゃん。お子様。目上の人の子を呼ぶに用いる。

たんだゆ〔動〕辿りたどり求める。「先祖たんだゆち見たばって、ようわからんじゃつた」。「たんだえる」と同じ。

たんたん〔名〕卵。鶏卵。「たんたん食ぶるか」。小児用語。

だんだん〔副〕色いろ。ずい分。ずっと。いつものように。「先日からは、だんだんにお世話になりました」。

〔名〕段々。石段。階段。

たんと〔名〕端途。途端に。「家出たたんとに車ん米ち、危ねえ所じゃつた」「波の引いたた

んとに渡らにゃ渡りゃされん」。

たんなん〔名〕可愛い子供よ。幼児をあやす折等に用いる。

だんなん〔名〕旦那。檀那。主として町家の主人に対して用いられた。

たんのー〔形動〕満足。飽満。堪能。「たんのーする丈食よ（食えよ）」。

だんのま〔名〕だんの間。船（舟）の「たちかけ」と「二番がぬき」との間。ここに「かんばん（甲板）」がある。

たんぼこ〔名〕いたどり（虎杖）。たで科の植物。

だんばちがやる〔動〕四肢を打ち振って仰向きに寝転がる。小児がむずかり抗するさま。

だんばれー〔名〕(1)葬儀を終えた後のお祓いの式。(2)廻払い。新仏の座は七・七日に寺送り法要の後撤去して持仏檀に納めるのが普通であるが、都合・事情により49日前に寺送りの儀式をし新仏の座を取り払うことがある。これをいう。

だんぶ〔名〕らんぶ。灯火。だんぼ。

たんぶつこう〔名〕嘆（歎）仏供養。元本は曹洞宗の寺院で僧侶が声（こゑ）明して来た嘆仏（仏をたたえる）であったが、次第に他宗派の寺院や僧も加わり、独特の「壺州嘆仏」の名で知られるようになった。現在導師以下6名以上の僧数

で営まれるのが基本で、僧衣に盛装した僧侶が色々の樂器を用い、賑やかに極めて敬虔に長い時間をかけ、祈りや仏の讃嘆の儀式行為を繰返し捧げる。毎年の各寺院の十夜供養や晋山江湖会に寺で営まれる他、年忌供養に個々の在家においても営む希望は多い。

だんべー〔名〕荷舟・荷足舟（船）。「だんべえ・だんべせん」ともいう。

だんぼ〔名〕下肥・魚汁を貯蔵する大甕。大桶。埤込みや地上据置等々。大型の水肥用貯蔵桶類の総称。

だんぼ〔名〕らんぶ。灯火。「だんぶ」。

たんぼこ〔名〕樹木の空洞。うろ穴。

たんぼつ〔名〕竹製の筒。水を入れられるように切った竹筒。「たんぼ」ともいう。

たんもと〔名〕(1)かまどの側からの上下口。(2)炊事場・流しの総称。たんもとぬすみ。流しに続く居間の奥・隅。

ち

ち〔助〕て。「行たち見ろ・見ち来た」と。「猫ち思うた」。てち・ちちとも用いる。〔名〕血縁。「ちたーな（血縁故の……）」。

ちー〔名〕里子の意。「ちーにやる・ちーに出えた・ちーうば」など。

ちーうば〔名〕乳母。「ちうば・ちーば」も同じ。

ちーくわちーくわ〔副〕談笑し騒ぐさま。「ちーくわちーくわ言うち騒ぐばっかりで、決して仕事あせん」。

ちーだり〔名〕小止みなく降る雨。

ちーち〔名〕(1)幼児の後頭部に一つまみの髪を剃り残しておく。こうしておくで倒れたり転んだりする折、荒神様が写し止めたり引き起したりして下さると。剃り残し髪をいう。(2)幼児衣類の後部襟下に小布片を縫い付けて置いた。これも「ちーち」と呼んだ。

ちーちきり〔名〕鼠切りの意と。低能力者の事を言うのに用いた由。

ちーに〔副〕遂に。まるで。宛がら。

ちーやん〔名〕祖父。「ぢやん」も同じ。

ちあげ〔動〕庭の土面は長い間に雨水や雨垂れにより次第に流失する。これに客土して整地する働きをいう。

ちあった〔助〕してあった。「蒔えちあった」。

ちある〔助〕してある。「花活けちある」。

ちあろー〔助〕してあろう。「作っちゃあろー」。

ちいーた〔動〕着いた。「ちー

た」も同じ。

ちいーたち〔名〕朔日。ついたち。

ちえねつ〔名〕乳幼児に菌が生えだす頃、原因不明の発熱をすることがある。これを「ちえねつ・ちえじり・むしねつ」などと呼んでいる。

ぢかた〔名〕海上から陸地・海岸よりの地をいう。「沖つ方」に対する語。

ぢがた〔名〕この島から九州本島を指していう。

ぢがみなり〔名〕放屁。屁。

ぢがも〔名〕地鴨。渡りをしない鴨類の総称。かるがも。

ちぎり〔名〕鰯を移送するのに防腐法として臓腑を抜き、その血を全体に塗り付ける。これを「ちぎり」といい、「ちぎり」した鰯を「ちぶり」という。

ちけ〔名〕血気。婦人に血の道の気があるのを「ちけもち」ともいう。

ちけせん〔名〕お使い賃。小遣い銭。「つけえせん・つけせん」も同じ。

ちごー〔名〕知行。支配地。扶持。

ちごさん〔名〕青年がそばにおき特別の可愛がりをする少年。

ぢこさん〔名〕怜利な子。良い子。「ぢこもん・りこさん・りこもん」も同じ。

ちごってー〔名〕蟻地獄。「こって・こってこって」ともいう。「うすばかげろう」の幼虫

屋敷神様。背戸山の一角に小祠を祀る。

ちのはな〔名〕嬰兒の顔や頭に出る吹出物の小さなかさ。血の花と呼び特に手当てせずとも自然に治ると。

ちば〔名〕稚齒。幼児の初生齒。

ちびる〔動〕磨滅する。「錐先がちびる」。

ちふいーちかかる〔形〕真剣に物事に取り組む姿勢。血吹いて係る。

ちぶり〔名〕「ちぎり」に同じ。

ちぼ〔名〕(1)一般的に乳頭状突起物をいう。「ちぼがある・ちぼ付くる」。羽織の紐掛け布輪。(2)ろくじゃく棒の両端に取り付けた止具の栓。

ちまき〔名〕「まこも」の葉に包み2本宛括り合わせて作る。5月の節句にはこの外に「からすのまくら」と呼ぶ「ちまき」も作る。(形がからすの「まくら」に似ている)。

ちめんとり〔名〕大きめの釘を土面に投げ立て進み相手の土面を押え乍ら自面を拡大し合う。投げた釘が倒れた所で攻守交替となる。「めんとり」ともいう。

ちや〔助〕で。では。「猫ぢやなかった」

ちゃー〔名〕(1)さま。さん。「ばあちゃー」。(2)幼児と顔ののぞき合いして発する語。「おちゃー・ばあー」などに同じ。

ちゃうけ〔名〕来客にお茶を出

す折添える梅干し・漬物・香の物等々をいう。「おしをけ・ちゃじを」ともいい「ちゃうけぼん」又は「ちゃうけぜん」と呼ぶ脚付きの高膳にのせたりした。

ちやきごんず〔形〕血まみれ状。「怪我しち、ちやきごんずになった」。

ちやきちやき〔副〕(1)殃のよく切れるさま。(2)物事のてきばきとよく捌ける人の形容。

ちやくと〔副〕秩序整然と。準備万端整ったさまに用いる。

ちやぐり〔名〕茶筒。茶つぼ。

ちやごめ〔名〕茶供米。正月の餅の贈答に、上に茶に髪をかけて包み添える。これをいう。

ちやぎね〔名〕お茶の中に、へぎ餅やこりん等を入れて客に出すことがある。この時入れられた品をいう。

ちやしゅうぎ〔名〕婚礼を急ぐ場合や経済的理由もあつて略式による結婚式を運ぶ場合を「本祝儀」に対し「茶祝儀」という。

ちятаき〔名〕(1)老人のもらう後妻を「ちятаきやとう」と言った。「ちятаきうば・ちятаきばば・ちятаきばあさん」などともいう。(2)嫁屋新業祝いに親戚等から酒肴・赤飯などを贈り届け祝意を表わすことを「ちやてーち(茶炊いて)行く」という。

ちやだし〔名〕土瓶。薬罐類。

ちやつけ〔名〕(1)熱い飯に香の

物やごま等で味付けし、醬油に浸した好みの魚の刺身を入れ濃い茶を注いで食べる食事。(2)宴席に招かれた折「ごつけ」として本席前に受けるもてなしを「ちゃづけ」又は「むなづけ」と呼ぶ。お茶程度の軽食の意。

ちやつけちやわん〔名〕茶づけ茶碗。宴席の本膳には椀(木地椀)が用いられるが、前段の「ごつけ」には磁器碗が用いられる。この碗をいう。

ちやつた(助)(1)なかった。「行かちやつた・見ちやつた」。(2)だった。「牛ちやつた・見るとちやつたとに」。

ちやつちやくちやら〔形動〕減茶苦茶。散々の目に遭うさま。

ちやと〔名〕茶湯。茶を煎じたもの。(動)仏前にお茶を供える事。「おちやとする・ちやと一する・ちやとうする」も同じ。

ちやとぶつけ〔名〕お茶湯する仏具茶碗と供えるお茶と湯。仏具は「ぶつぐ」又は「ぶぐ」と読むのが正しいこと。茶湯(ちやとう)具。尚(なほ)茶(ちや)湯(とう)と点茶とは意味が全く異なる。又「ちやとぶくげ」とも聞くがこれこそ壺(か)州(しゅう)的訛(し)りの別例といえる。「ぶくげ」参照。

ちやのこ〔名〕朝食前にさらっと軽くとする食事。

ちやのみ〔名〕葬式の折、組(講中)の協力に対する返礼とし

て、寺送り法事の後招いてもてなしをする。「ちやのみに招ぶ」という。故人とのつながりの深かった隣人は「水まつり客」として別案内し供養の席に招く。

ちやぶれー〔名〕(1)茶篩い。竹で日荒に編んだ収納具。米・麦・大豆等の脱穀収納に用いた。(2)入れた物が簡単にすぐ洩れて行くような器を「ちやぶれーのごたる」と例える。

ちやぶれーみみ〔名〕茶篩耳。(1)何度聞いても聞かせても簡単にすぐ忘れ勝ちの者。(2)大事な事を聞き洩らし勝ちの者。(3)つまらぬことは聞き知り大事を聞き洩す者、等々。

ちやま〔名〕ちやぼ。矮鶏。(2)矮小な人。こびと。

ぢやりいる〔助〕であるやら。「ぢやいろ・あるにろ」も同じ。

ぢやろー〔助〕であろう。じゃろう。

ちやわん〔名〕精進料理の名。飯の折、二の膳に人参・牛蒡・青み・塩麴等を茶漬け茶碗に盛り客に添えられる料理。

ちゃん〔名〕風合戦に用いる風縵に硝子粉を糊でまぶし付けたもの。麻糸を心にしたもの。針金を心にしたものを「はりがねちゃん」という。〔接尾〕愛称として「さん」同様名前に「幸ちゃん」と。

ちゃんかけ〔名〕(1)風合戦の風

糸の切り合い。「ちょんかけ」ともいう。(2)物事のもつれやからみ合いにも用いる。「ちゃんかける (かけられた)」。

ちゅー〔助〕という。「来らすとちゅー」。(名)「つー(燗蓋)」に同じ。又、果実の蒂や巻貝類の蓋(蓋石)も。

ちゅーぎはずれ〔名〕いつもなしに時を考えずに。「ちゅーぎはずれに罷り越しましち……」。「ちゅーびはずれ(調子はずれに)」略同義。

ちゅーぐう〔名〕中宮。神社祭礼のお下りに、馬場先やお下り先に設けられている神輿の行宮・行在所。

ちゅーし〔名〕調子。具合。

ちゅーしもん〔名〕お調子者。調子に乗り易い者。

ちゅーじゅ〔名〕鰯科のきびなご。魚の名。「ちゅーじょー」ともいう。

ちゅーしょー〔名〕駐鉦。念仏講の役職名。農漁村地区には「たに・くみ・こうじゅう」単位に念仏講があり、その組織は同一ではなかったが、一例を示すと、隠居・駐鉦(一番鉦)・二番鉦・三番鉦役があり、これらの人を「鉦下げ」又は「鉦下げ連中」と呼んだ。隠居は先輩格で主として緊急時の代理(駐鉦の)役を勤めた。従って駐鉦が組織の中心で組頭で、鉦打ち・念仏の先唱(導)者であった。駐鉦には経験・年数を積んだ者から順

次就任担当し受け継いできた。

ちゅーしんぼーび〔名〕一漁毎に一番羽刺しは各員の勤惰を主人に報告しその注進の功に従って一番鉦の羽刺しに支給される褒美。鯨組用語。

ちゅーたちち〔動〕と言ったとて。言っても。「そげんなったちゅーたちち誰が突(つ)ちよろーかい」。

ちゅーちゅー〔名〕主として蛾を指して呼ぶ。「ちゅーちゅーん飛びおる」。蝶にも用いるが。〔形動〕(1)物を吸ったり飲んだりの音として。「乳ばちゅーちゅーのおだ」。(2)移り行く様子。「^{おな}魚ぬちゅーちゅー泳えじ行た」。

ちゅーに〔形動〕^{くう}空に。出に。「ちゅーに言いえた・唄いえた」。

ちゅーのー〔名〕手斧。ちょうな。てうな。「ちゅうのう」も同じ。

ちゅーはん〔名〕昼飯。中飯。

ちゅーび〔名〕調子。具合。「身体んちゅーびんよか」。「ちゅーび」が狂ったり悪化したりするさまを「ちゅーびはずれ」と。

ちゅーぶく〔名〕調伏。呪うこと。

ちゅーべー〔名〕おべっか。機嫌とり。「ちゅーべーばっかり言う」。

ちゅーぼー〔形〕手調子。格好。女性の裁縫の手つき手なみ。「ちゅーぼ」も同じ。「ちゅ

ち

一ほーん良か」。

ちゅーらべーら〔副〕中途半端。適当あいまいさの中で。

目的意識の判然としない処置処理。いい加減に。

ちゅーり〔形動〕直ちに。すぐに。

ちゅんちゅん〔副〕(1)小川の流れのさらさらと流れるさま。ちよんちよん流れるさま。「清水のちゅんちゅん流れおる」。(2)鉄瓶の湯のたぎるよい音。「しゅんしゅんたぎる」に同じ。

ちよー〔名〕父。おんちよーの略。

ちよーうち〔名〕3尺程(1m)離れた位置から開いた扇子を、要が親指の上になるようにつまんで、蝶と呼ばれる台上的的を狙い打ちし落す遊戯。的の落ち方・扇子の開き方や的との位置関係から決められた点数を争う。蝶打ち・投扇興といい江戸後期から流行したと。

ちよーくらかす〔動〕愚弄する。ごまかし笑いものにする。

ちよーさいな〔名〕祇園山笠曳きの掛け声と。古老は「ちよーさいな・ちよーさいな」「ちよーさいさい・ちよーさいさい」「おっせーおっせー」「よーかいた・よーかいた」と繰り返していたと。

ちよーさいぼー〔動〕なぶりものにする。人を愚弄する。「ちよーさいもん」も同じ。

ちよーじ〔名〕鯨の胃袋。

ちよーじゃどん〔名〕七星天道虫。

ちよーず〔副〕丁度。「ちよーず良か」。(名)手水。手水鉢。

ちよーせん〔名〕わからずや。「こぬちよーせんが」。

ちよーせんうば〔名〕ひめこばん草。ほもの科の草本。いね科。

ちよーせんすびら〔名〕さふらんもどき。「ちようちんばな」ともいう。ひがんばん科。

ちよーせんびき〔名〕蛙。あかがえる。にほんあかがえる。「ひやくけんびき」ともいう。

ちよーせんふーすぎ〔名〕たまさんご。ふゆさんご。なす科の植物。

ちよーでーもーす〔動〕(1)丁重すぎる振舞。「あんまりちよーでーもーすもんじゃけにつけあがる」。(2)頂戴するを更に敬語化する語。「遠慮なしいちよーでーもーしましたつですばな」。

ちよーな〔名〕手斧。ちような。「ちゅーのー」に同じ。

ちよーねえ〔名〕町内。町部・浦部における講中(組)の働をする組織。

ちよーびらき〔名〕帳開き。旧暦正月11日の町家の行事。前年の元旦に歳徳様にあげた紙から、本年分の帳簿を新調し、帳場の鏡餅をもって雑煮を作り祝う儀式。新年事始め。ちよい〔動〕坐る。「ちよいし

た」。

ちよいする〔動〕(1)坐る。(2)留置・拘留される。「ちよいさした・ちよいされさした」。

ちよいちよい〔動〕(1)坐る。(2)留置される。(1)(2)共「ちよいちよいする」。(3)幼少児におすわりさせるのに「ちよいおし・ちよいちよいおし」などと用いる。

ちよき〔名〕舟の一種「間たらず」の呼び名。北部では多く「てんと」、南部では「ちよき」呼び分けてきた。何れも小舟で「間足らずの舟」と。

ちよきつと〔副〕ちよきりと。「ちよきつと坐つちよれよ」。

ちよくいーいる〔名〕気に入る。期待に添う。「ちよくいーたぎりこむ」ともいう。

ちよくつと〔副〕ちよろつと。少時。

ちよくならん〔名〕気に喰わぬ。「ちよくならんちち腹けえ一た」。

ちよこちよこ〔形〕くすぐる。「ちよこちよこする(とる)」。「ちよこちよこ」に同じ。

ちよこつと〔副〕(1)ちよこなんと。「ちよきつと」に同じ。(2)ほんの少しばかり。

ちよこばいか〔形〕くすぐりたい。ちよこばいいい。ちよこペーか。

ちよこペーとる〔動〕くすぐる。

ちよこまめ〔名〕矮小な人。「ちよこさい・ちよこまん」とも

いう。

ちよたまわす〔形動〕自由勝手に酷使する。なぶりものに。する。「ちよたまわさるる・ちよたまわされた」。

ちよつきり〔副〕ちよこなんと。きちんと。「ちよつこり」に同じ。

ちよつこり〔副〕(1)ちよこなんと。(2)感心に。意外の結果に感じた。「ちよつこりやつちよるばい」。

ちよつた〔助〕ていた。「雨ん降つちよつた」。

ちよつちよい〔動〕坐る。「ちよつちよいしちよかしよ」。「ちよい」に同。

ちよびつと〔副〕ほんの少しばかり。「ちよこつと」に同じ。

ちよぼ〔名〕乳房。乳首。

ちよぼつと〔副〕少しばかり。ひとつまみ。点在。「ちよぼつとでむ良かけんお呉れ」。

ちよる〔助〕ている。「行たちよるめえー」「知つちよる筈」。

ちよろー〔助〕ているだろう。「行たちよろーだい」。

ちよろがあがる〔動〕酒焼酎の酔が表われ気が浮かれてくるさま。

ちよろちよろ〔副〕(1)氷がささやかに流れるさま。(2)人や動物や物があちこち動き廻るさま。「ちよろちよろ」に同じ。

ちよろつと〔副〕少時。「ちよくつと」に同じ。「ちよろつと来た(行たちくる)」などと用いる。

ち

ちよろりごーり〔副〕
時々。時折り。しばしば。「ち
よろりごーり旅しおる」。

ちよん〔名〕(1)愛称として猫の
普通の呼び名。「ちよんこい
(けえ)」。 (2)猫の固有名とし
て多く用いられる。(3)可愛い
子牛に「ちよん米い・ちよ
ん子・ちよんこ牛」と。

ちよんかけ〔名〕「ちゃんかけ」
同。

ちよんがら〔名〕ちよぼくれ祭
文。「ちよんがら節・ちよんが
ら語り」。「ちよんがれ」も同
じ。浪曲語り。

ちよんぎん〔名〕かいつぶり
(鴨)。「ちよんげん(鴨)・つん
ぐり(鴨)」など呼び名多い。
水鳥。

ちよんする〔動〕独楽廻しす
る。

ちよんだれ〔名〕手水盥。洗面
桶。「ちよんだれえ・ちよんだ
れー・ちよんだらい」などと
もいう。

ちよんちよん〔副〕小さい流
れがよく流れるさま。「清水の
ちよんちよん流れをる」。気持
ちよく流れる。

ちらし〔名〕絵。模様。「良かち
らし(模様)の入っちょる(画
いてある)ばい」「^{手拭}ちら
しの良さ」。

ちらんばらん〔副〕散り散り
ばらばら。「ちらんばらんに逃
げちしもた」。

ちりかき〔名〕ちり取り(具)。

ちりこ〔名〕「ちじこ」に同じ。

ちりちり〔副〕^(画) 恐れ^(画)の念をもっ
てその一顰一笑をうかがい心
の落ちつかないさま。「ちりち
りしち、あたり寄り付きもせ
ん(えん)」。

ちりまき〔名〕つむじまき。「ち
じまき」に同じ。

ちろちろ〔副〕「ちりちり」に
同じ。「ちよろちよろ・ちらち
ら」ともいう。目がちらちら・
ちかちかにも用いる。

ちろり〔名〕何時何処へともな
く物が紛失する時、これを「ち
ろり」という。一種の魔の所
為とされている。

ちわちわ〔副〕(1)嬰兒が乳をむ
さばり呑むさま。「ひだるかつ
たよーそで、ちわちわ呑うだ
ばな」。(2)荷を担いだ天料理の
たわむさま。

ちわつく〔副〕「ちわちわ」に
同じ。

ちわとむいわせん〔形〕(1)き
つちりきちんとして一点のす
きまもないさま。(2)周囲から
雑音をがたがた入れさせない
構え対応。「ちわとむせん」。

ちわとむせん〔形〕担い棒が
重い荷に充分堪え、がっちり
したさま。転じて物事に動じ
ない、物事のゆるぎないさま。

ぢわり〔名〕地割り制度。じ割
り。

ぢをし〔名〕「じおし」参照。

ちをや〔名〕乳親。「ちづけおや」
ともいう。生児は生後数日間
他人の乳をもらい呑ませるを
例とした。その人を「ちをや」

といい、一生特別の交わりをしてきた。今はない。

ちん〔名〕一般に犬のことをいう。

ちんくわん〔感〕対者を罵る下級語。

ちんこ〔名〕「ちじこ」に同じ。

ちんこしばい〔形〕諸事小規模の催しや事業のたとえ。

ちんじゅ〔名〕ちぢれ髪。ちんじゅー。

ちんだい〔名〕鎮台。兵士。兵営。「大阪鎮台負鎮台、そこで勲章九連隊（呉れんたい）」などと聞いたもの。

ちんだはんだ〔形動〕組物が離れ不揃い、ちくはぐになったさま。「ちんだはんだで役立たんごつなつた」。

ちんち〔名〕美しい衣服。（小児語）。

ちんちくりん〔形〕衣服の裾を短かく着たさま。丈に合わない短小衣服。

ちんちねね〔名〕晴着。きれいで可愛い着物。〔形〕ちんちか。

ちんちへーもん〔名〕平伏しひれ伏すさま。恐縮しきってひれ伏す。

ちんちもんぢ〔名〕粉微塵。「ちんちもんぢ砕けちしもた」。「ちんぢやもんぢや」ともいう。

ちんちょ〔名〕陰茎。陽物。男根。「ちんちょー・ちんぽ・ちんぽー・ちんちん」など色々。

ちんちらめー〔動〕てんてこ

舞い。「ちんちらめーさせられた」。

ちんちろばな〔名〕つゆくさ。ほうしばな。「びんつけばな」に同じ。つゆくさ科の草本。

ちんちん〔名〕(1)肩車。「ちんとんかんめ」ともいう。(2)男女の性器を呼ぶに用いる。(3)あをじ・くろじと呼ぶ雀の通称。「ちちん」に同じ。

ちんとんかんめ〔名〕肩車する。

ちんびりかんびり〔副〕ちびりちびり。少量ずつ。「ちんびりかんびり飲うじしもた」。

ちんぶく〔名〕河豚の一種名。「もんぶく」ともいう。とらふぐに当たると聞く。

ちんぽ〔名〕「ちんちょ」に同じ。

ちんまい〔形〕細い。小さい。細くかわいらしいものを「ちんまか・ちんちょか」などという。「ちんちょ」に通ずるのか。

つ

つ〔助〕の。と。「来たつか・買うたつばい」や。「あれつこれつしたばい」。

つー〔形動〕油断ならぬ奴。「つーにある・つーな男」。「こすか」に似る。〔名〕(1)「とーなりとー」に同じ。参照。(2)かさぶた・瘡蓋。



づー〔名〕頭。「づーが高っか」。

つーたん〔名〕銭。

つーつー〔形〕(1)疼痛の状態の形容。「腎臓のつーつー痛む」。(2)密通。「いつの間えかつーつーしちよった」。

つーだり〔形〕雨の小止み状態、又は小雨状態の継続をいう。更に小雨状態に降り続く雨を、「つーだりなしに降る」などという。

つうび〔名〕女性性器。

つか〔助〕のか。とか。「そりで良かつか(それでよいのか)」。

つかいえ〔名〕穢れ。近親者の死・出産・月経等の時をいい物忌みした。

つがう〔動〕だめ押しする。はつきり約束し、確認をとる。「念がつがう」。

つかえ〔名〕「つかいえ」に同じ。「つかえんでけち来ら(行か)れんごつなりました……」。「つかえる・つかえんおこる・つかえんでくる」も同じ。

つかさ〔接尾〕^{たづな}々々。「親子づかさ・うまご(孫)つかさ・年寄りつかさ」などと用いる。

つかさん〔名〕塚さん。古塚と呼ばれ田畑や山中、路傍に在り、落人や武士の無縁仏の墓という説や言い伝えがある。多くの場合簡単な石積みや数本の樹木、うっ蒼とした草むらや小藪を形成して目立つ祭

祀対象物は見当たらないことが多いが、触れたり切ったり手を加えたりすると、崇られたり咎められ病気になるたり原因不明の発熱や障りに遭うと畏れられている。

つかする〔動〕滞り詰って流通せぬこと。いっばい溜って停滞する。

つがま〔名〕機会。「話すつがまが無か」。

つかりこむ〔動〕ひたり込む。酒色に溺れる。「いりびたる・しけこむ」も同じ。「雪という女につかり込む」。

つがろしか〔動〕油断がならぬ。気がおけぬ。

つき〔名〕鬼ごっこや小児の遊戯の中での休息所。安全地帯。「ひかーい」に同じ。

づき〔名〕食器。坏。「猫づき」「食いづき」。

つきあげ〔名〕油揚げ。てんぶら。つけあげ。

つきいそ〔名〕船上から鉾を用いて魚貝を漁る法。船磯。底見。

つきいど〔名〕地中深く掘り地下水を湧出させる井戸。掘抜き井戸。

つきがね〔名〕釣り鐘。撞き鐘。

つきだし〔名〕(1)「けん」に付けた孚綱。鯨体に「けん」を打込みこの綱を曳いて肉を切り鯨を弱らせ捕る。捕鯨用語。(2)埋立て築出した土地。

つきたて〔名〕月の最終日。月

末日。つごもり。
 つきちょーし〔名〕坏銚子。
 「とのほがい」に同じ。神楽舞の名。
 つきつき〔副〕突慥倉に言行するさま。「つけつけ」ともいう。
 つぎはぎ〔名〕衣服類その他に小布を多く継ぎ足し使用したもの。「つぎはぎ着物・つぎはぎだらけ」。
 つきばな〔名〕葬具としての花籠。葬列進行中柄を地に突いて花を散らせ葬列を飾る。紙花の外紙包みした銭も入れて散らし恵みを与える家もある。地域の慣習もあり色々。
 つぎみと〔名〕鰯漁での網の構造の一種。初めに「がわ」だけで建て廻し、引締めて「ふくろ」を入れ鰯をのせて獲る仕組み。
 つきよりさしより〔副〕折りに触れては。時に応じて。しばしば。
 つく〔名〕(1)船の艀の「うで」にはめ込んだ木の把手。これに「へーを」の小口(輪)を掛けて船を漕ぐ。(2)溜池の堤に取付けた堅樋に挿す木栓。(動)「づく」に同じ。「ぎすつく」(威張り歩く)。
 つぐ〔動〕注ぐ。盛る。よそう。「酒つぐ・飯つぐ」。
 づく〔接尾〕動詞格を与えて「ぐーたづく・とんびんかんづく(のぼせ調子に乗る)」。「つく」に同じ。

づくしのき〔名〕からびわ。天仙果。植物名。
 つくしょー〔感〕畜生。怒罵の声。ちくしょう。残念。意に反する結果への自嘲。
 つくしょーばら〔名〕畜生腹。双生児以上の多生児を産んだ人(女性)。
 つくっしょー〔名〕つくつくほうし。蟬の名。「つくりっしょー」も同じ。
 つくなう〔動〕間に合わせる。補う。体面を保つ。とりつくらう。「こりじゃ足らんばってつくなうちよこー・こりじゃどうしてむつくなわれん」。
 つくなむ〔動〕しゃがむ。うずくまる。「つくぼむ」に同じ。
 つくばる〔動〕坐る。つくばう。つくぼむ。「這つくばる」。
 つくぼし〔形〕成育不良のさま。農作物に用い「麦がつくぼしなっちしもた……」。
 つくぼむ〔動〕坐りうずくまる。しゃがむ。つくばう。
 つくらう〔動〕きちんと正す。「胸つくらう」。服装を正す。
 つくりっしょー〔名〕つくつく法師。
 つくりわけ〔名〕小作料を地主と小作人で実収量折半処理する。
 づくわあがらず〔形〕頭があがらぬさま。詰問などされ恐縮したさま。
 つげ〔名〕蓄い。雌雄一組。「つげー・つげえ・つげえー・す



げ・すげえ」も同じ。

つけえ〔名〕使い。「つけえ^行たちけえ」。「つけえ」も同じ。

つけえいれ〔名〕農耕用として牛を訓練すること。鼻ご通した若牛を引いて歩くことから始め、次に後方から手綱を曳いて、「へし・へし（右折・右廻り）」、手綱を軽く叩いて「たた・たたたた（左へ廻れ・左折）」、手綱をゆるして「ほい・ほーら（前進）」、同じくゆるして引いて「わー・わー（止まれ）」の基本動作を仕込んだ後、「てーき（鞍）」を背に取付け馴らす。犁を接続して一人が前で牛の口縄を持ち後からひとりが犁を操作し前と後で呼吸を合わせ、前進左右方向変換など覚えさせる。少し仕込みが進んだら口縄とりを廃し、手頃の細長い竹を口縄部に結び後方から牛縄と竹の両方で、前進・停止・廻れ左右・方向変換など自在にこなせるようになり、やがて手綱一本で働く農耕牛となる。牛の背に取付ける鞍（てーき）は腹帯と呼ぶ布泥りの編帯（幅10㎝程）で腹に巻いて固定し、同様の胸帯で後から引く力への抵抗を与える。鋤や馬鍬は「てーき」から「牽き緒」を通して耕具としっかり取り付け操縦する。

つげく〔名〕消息。便り。「つげくなし」。

つけせん〔名〕小遣い銭。「ち

けせん」ともいう。

つけだけ〔名〕つけ木。隣す。

つけつけ〔副〕突慥貪。「つきつき」に同じ。「つけつけ言う」。

つげつげ〔副〕言葉つきの邪険なさま。「あげんつげつげ言われちゃ……」。

つじ〔名〕辻。山や丘の頂上。峠では山を「何々の辻」と呼ぶのが多い。これは山の頂上にも道が通じ、高さも最高で213米そこそこ。山と呼ぶに相応しくなく峠の辻と考えたのか。「岳の辻・久美ノ尾の辻・横山の辻・鹿ノ辻・御津の辻・高田の辻・火箭の辻・神通の辻・麦上の辻・大平の辻・滝山の辻・遠見の辻・高尾の辻・平野の辻・原の辻」等々。

づし〔名〕天井裏。屋根裏。「づしい上れ」。

つじまき〔名〕つむじまき。ちじまき。

つしまぞーけ〔名〕策の一種。井型の小さなざる。対馬特製。農作業用に移入された。

つしまめ〔名〕烏賊の一種。二番いか。「がんせき」ともいう。

つしゃ〔接尾〕副詞格を与える。「あれつしゃ・これつしゃ」。「これつしよ」ともいう。

つしよ〔接尾〕「つしゃ」に同じ。「しこ・程・だけ」の意をもつ。

つず〔名〕(1)唾。つば。つば

き。「つんのみ」参照。(2粒)種実。「つずの太か」。「つづ」も同じ。

づす〔名〕留守。

つずあつづいかずあかずい
〔副〕ひとつ一つ拾いあげて言い立てするにいう。「ねえーごつしてむ(どんな事をしても)、つずあつづい(粒は粒に)かずあかずい(数は数に)、文句ばっかり言わす(それぞれについていちいち文句を言われる)」。

つずみ〔名〕船板をはぐのに鼓形の入れ木をくさびに入れること。

つずらいし〔名〕蓆・蓆を編む時、編縄を巻き桁の両側に垂らし錘りとする石(堅木片)。「つずらいし」も同じ。

つちがね〔名〕土質。「つちがねん良か・つちがねん良うなか(悪か)」。

つちけえ〔名〕土埴い。中耕土寄せ。

つちたて〔名〕壁土・屋根土・竈土を練る(こねる)こと。練りこねた土を「たてつち」といい家屋新築上棟への重要作業であった。「つちたて」ともいう。

つちのしはい〔名〕土の支配。土地一切の事項に関する公的な世話を斯う言った。この役は往昔、庄屋と初頭とで当たった。藩の役人というより村の百姓の代表という立場だった。つちもち〔名〕土持ち。土の運

び上げ作業。昔は実質面積を少しでも広める為、中高乃至は傾斜のままの畑が多く、周囲の低部に土が自然に次第に下り、高部の耕土が浅くなる。これを元に戻すため数年に一度の割で「土持ち」又は「ほどき」をした。人手は「結い」で相互に協力し合ったり、親戚の若衆が集められる。用具として竹製担架「もっこ」を用いた。

つつ〔接頭〕動詞に付いて強意。「つつくやす・つつ立つちよる」。

つづ〔名〕(1)「つず」の唾・粒。(2)溜池の水落しには「いび」に付けた木栓を抜き挿し配水を調節加減する。この堅樋の「いび」の木栓を、「つく」「つづ」と呼ぶ。

つっかけぜん〔名〕本膳での賄いの前段の軽めの食事席。

つつく〔動〕ひどく痛む。疼痛。心配事や難問題では「頭んつつく」ともいう。頭がいたい。

つつくじる〔動〕突きこわす。「くじる」を強意的に表現の役も。

つつくやす〔動〕「つつくじる」に略同じ。

つっくり〔形〕ずんぐり。「つっくりまんまるか・つっくりみじかか」。

つづしる〔動〕綴り合う。「傷口のつづしる・着物のほこれ(ほころび)つづしる」。「つづ



しりあう」も同じ。

つつたち〔名〕着物の身丈。

つつたつ〔動〕棒立ち状。

つつたむがる〔形〕大いに驚き魂消る。おったまげる。「つつたんぐわる」もよく用いる。うったまげる。

つつちよる〔形〕(1)すぐれている。上位にある。「つる」に同じ。(2)つり上っている。「着物の裾んつつちよる」。

つつつ〔形〕美しい着物。「うつつ・ちんち」に同じ。

つつとほくる〔形〕全く何も知らぬげに振舞いとぼけた姿・対応。

つつぼー〔名〕筒袖。つつぼう。「つつぼーそで・てっぼうそで」。

つづぼし〔名〕脱穀した麦を今一度晴天に乾燥して俵詰めし、後更に夏の土用干しする。農業用語。

つつみ〔名〕(1)包み金・お布施等。謝礼金。祝金。(2)堤。溜池。

つつべ〔名〕女陰。「つうび」に同。

つと〔名〕苞。一握りの「すぐり藁」を中央部で括り、根の方を折り返し末の方にかぶせ、その端を一つに括る。中央部を折り開き舟形にくぼみを作り中に料理品を入れ外括りした。慶弔の折々唯一の「みやげづと」として、貴重さを發揮した。農家は稲藁を神聖視し、大事に取扱って来た。

つとずね〔名〕脹脛。ふくらはぎ。

つとぶリー〔動〕苞振い。苞に入った品は苞藁に引っ掛けて一度に出し難い。従って苞を振って中の品を出すことが多い。この事から物事を隠すことなく洗いざらい話してしまうこと。「つとぶリーしち話えち聞かせた」。

つなうち〔名〕(1)細縄数本を練り(縫り)合わせて太綱を作る作業。(2)漁船の若衆は旧暦10月10日金比羅様の縁日に決める。又正月7日に「のりわかれが行なわれ新に乗組が決まる。この日を「つなうち」という綱を作ることなく、船霊様を祀る神事などが行なわれる。「のりわかれ」参照。

つなくり〔名〕蟹用語で、作業中の蟹が海底から浮揚する際、船上で引き揚げの綱繰りをする役目の者。潜水流業でも用いる。

つなひき〔名〕毎年盆3日間を中心に島内各地で行なわれて来た。盆踊りならぬ「盆綱引き」は、盆に新仏の腰を引き立てるとともに、平素祀られない諸霊をなごめる「亡者祀り」としての、祈祷供養として地域の若者が中心となり供養様と呼ばれる綱引き場で行なわれて、現在も受け継がれているところがある。「いしゅうぼんうた」参照。

つなひきうた〔名〕綱引き唄。

「盆の十五日にや綱引き見げ
行こうや、綱引きゃかこつけ、
袖を引こ」と唄われている。

つなひきでーこ〔名〕綱引き
太鼓。(1)綱引きの催しを知ら
せる「寄せ太鼓」と、(2)「^{はし}麻太
鼓(綱引き合いに士気を鼓舞
する)」の打ち方がある。

つなわらきり〔名〕綱引き綱
用の藁・竹・縄などを地区内
各戸より寄付を受け、集め廻
わること。これは、村や地区
内の少年の役日であった。

つの〔名〕幼児の額や頭部に出
来る先の尖った、角状の吹出
物。

つのがくれ〔名〕仔牛が逃げ出
して数日間も戻らなかったり、
成牛も綱が離れて行方不明に
なることがある。これを「つ
のがくれ(した)」という。

つのご〔名〕「の一そう」と呼ぶ
魚の一種。博多商人は名を「ふ
か」と呼んでいると。

つのごーり〔名〕角草履。鼻緒
を上で「つの結び」に仕上げ
た草履。「こってごーり・つの
んごろぞうり」ともいう。

つのむすび〔名〕縄・紐の結び
方名。再び解く必要のない所
や、強く結びきるに用いる。
結び目を2本の角を出した形
にする。

つのもり〔名〕不明になりかけた
血族関係を判然とすること。
「親子のつのもり・兄弟のつ
のもり」。

つのわた〔名〕鮑の臓物。大い

に美味。

つのわたよごし〔名〕鮑の肉
を煮て賽の目に切り、豆腐を
しばって加え、味噌とつのわ
たで和えたもの。美味。

つのをとす〔動〕抱腹絶倒する
こと。「久方振りいつのをとす
ごつ笑うた」。「つのおとす」も
同じ。

つば〔名〕(1)唇。くちびる。「つ
ばん腫れた」。(2)唾。「つば吐き
散らす」。

つばしめし〔名〕死を確認した
死者に、茶碗に汲んだ水を綿
布片に浸し唇に濡してやる儀
式。

つばた〔名〕津端^{つばた}。海沿いの
地。海辺。「つばた住い」。「つ
ばな」も同。

つばつるぎ〔名〕饒舌家。主と
して女性対象に。「あん女はつ
ばつるぎじゃ」。

つばな〔名〕津端^{つばた}。「つばた」に
同じ。

つばぬる〔動〕(1)干し物の蕨を
両端から折り込み干物を覆い
込むこと。「両方からつばぬる
ぞー」。「つばねる」も同じ。(2)
おしゃべりする。「仲々ようつ
ばぬる娘じゃつたばい」。

つばねやわする〔動〕つばね
合わせる。蕨の上の物を四方
から中央部に集めて、たたみ
込むこと。「餡ばいっぺえよう
入れち、がわばようとつばね
やわするとぞ(団子作り)」。
「つばぬる」(1)参照。

つばもつれむせぬ〔形〕少し



の淀みもなくすらすらと弁じ
たてるさま。舌のもつれもな
くさわやかに話す。

つぶし〔名〕(1)膝。膝^{かひ}。物を
押さえつけたり、こわしたり、
つぶしたりに使ってきた部位
からの名か。昔嬰兒の間引き
に、ここを使つたなどと聞い
た。(2)生魚・腐敗魚・又はそ
の骨頭や臓物・洗い汁・煮汁
を集めて肥料にした。これを
いう。

つぶれやしき〔名〕家人が死
に絶え相続者が無く戸の資格
を失うこと。これにより地割
りの権利も失うが、二・三男
を持った者は、養子の形で子
供名義を保ち幾割かをもらっ
て来た例はあると。

つぼごいえ〔名〕麦・菜種を蒔
く時、堆肥に下肥をかけ、種
実を混和してよく切り返した
ものを畝に播く。その為畑の
周辺に前もって小積んで置く
堆肥の小山を坪肥という。農
用語。

つぼぬー〔動〕破れ目をかがり
寄せて縫い合わせること。「つ
ぼぬう」。

つぼね〔名〕息子夫婦に相応の
信頼を覚えるようになれば、
両親は小住宅を構え別居する。
この住居を「つぼね」といい、
本家・隠居と別れる。

つまぐる〔動〕指先でもてあそ
ぶ。

つまぐる〔名〕鳳仙花。ほうせ
んか。ほうせんか科の草花。

「つまぐれ」も。

つましい〔形〕物を粗末にせず
万事につつましやかなこと。
倭約節儉型であるが単なる
「けち」ではない。「つましか」
も同じ。

つまゆる〔動〕「つばぬる・つ
ばねやわする」に同じ。「つま
える・つめゆる」も全く同じ
に用いる。

つまらん〔形〕いけない。駄目
だ。役に立たない。「そえん事
したらつまらん・つまらん事
するな」。

つみ〔名〕糸を通す管を挿す鉄
針。糸車の道具部品。

つみきりそう〔名〕松葉ぼた
ん。折ったり、つみ切って土
ざししてもすぐ根付くところ
からの名と。「爪切り草」「摘切
りぼたん」ともいう。すべり
ひゆ科の草花。

つみやくし〔名〕積役衆。旧藩
時代平戸より年貢積取りに立
合う役方士一人が、船頭・御
手廻取りを従え来島していた。
この役方武士をいう。

つむる〔動〕(1)摘む。摘み切
る。刈りとる。(2)痛む。「胃の
つむる・腹んつむる」。(3)結め
る。詰め込む。「箱え物詰む
る」。「つめる」も同じ。

つめきり〔名〕色つけの飴菓子
の名。

つめくそぬしこばかり〔副〕
物の量が極めて少いさま。「つ
めくそぬしこむなか・つめん
くそぬしこばかり・つめくそ

んしこ」等すべて同じ。

つめとぐ〔動〕爪研ぐ。準備を整えて。「爪で一（研い）ぢ待つちよつた」。「つめて一ぢ」。

つめひばち〔名〕爪火鉢。瓦質に焼き上げた丸縁の内側に三方向から廣めの爪を出し、五徳の用を果しこの上に大きめの薬缶や鍋も載せることも出来重宝がられた。商取引きの上の名は「正作火鉢」と呼ぶが産地不詳。

つら〔名〕西瓜・南瓜・甘藷類他植物の蔓。蔓性植物のつる。「藷づら・ぼーぶらづら・西瓜のつら」等々。

づら〔助〕づつ。ずつ。宛。「団子あ3つづら分ける」。「つら」も同じ。

つらうり〔動〕魚類の取引きに目方をもってせず数で売買すること。

つらそー〔動〕義務的に顔をだし座に着いていること。「一日中つらそーちよつた」。

つらつかます〔形動〕恥をかかせる。赤面させられる。「つらつかませられる」も同じ。

つらつかむ〔動〕恥かく。赤面する。

つらづけ〔名〕面付け。祝・不祝儀時の関係者役割名等人数一覧表。

つらはる〔動〕外部との交際を派手に見栄張りたがる。「あんまり面張るもんじゃけに、面張り倒した」。

つり〔名〕(1)釣り針。(2)釣り銭。

つりがらし〔形〕長い時間無為に待たされる。吊り枯らし。「つりがらしの目え遭うた」。

つりかわ〔名〕釣瓶を用いて水を汲み上げる深井戸。「つるかわ」も同じ。因みに浅井戸は「くみかわ」と。

つりしば〔名〕ゆずりは。とうだいぐさ科。正月飾りに用い「つるしば」ともいう。交譲木の名あり。

つる〔形〕優れている。比較し上位にあること。「余っ程つちよる」。

つるいにせ〔名〕船型名。舳茶筌型船。肩七八九尺。縄(縄)船。

つれ〔名〕仲間。同士。

つれなむ〔動〕同行する。連れ立って行く。「あん人たあつれなむめえ」。「つれのーじ・つれのーで(連れなんで)」と用いることが多い。

つろー〔助〕であろう。だろう。「痛かつつろー・来つろー・言うつろーが」等々。「つろろ」も同じ。

つわ〔名〕つわ蒨。きく科の草本。

つわかす〔動〕水に浸しあく抜きしたり、軟らかくしたりする。浸す。

つわりいも〔名〕貯蔵藷が発芽して食期を過ぎたもの。変味して味悪し。

つわりまめ〔名〕発芽したり、



しかかった豆類。豆としての食期にない。

つわる〔動〕動物類の発情。「牛が猫がつわる」。「つわりごつて一人を突く」。「つわり」も同じ。

つんぐり〔名〕松傘。松毬。「まつふぐり・つむふぐり・つむぐり・つんぐり」と詠ったとか。

つんぐりがも〔名〕かいつぶり。つぶりがも。鴨の一種。「ちょんぎり・ちょんぎん・ちょんげん」がも等呼び名色々。頭から水没し、ひょいと水面に浮上。水面に営巣。小型鴨。

つんぐりまんぐり〔副〕あれをし、これをして何んとなく時を過す。

つんこぶ〔名〕お手玉。

つんごみ〔名〕小児の遊戲。まます。

つんつく〔動〕手足を引っ込め縮こまること。「冷とうし一日つんつくしちよつた」。

つんのはし〔名〕農具つるはし。鶴嘴。

つんのみ〔名〕しろだもの木・実。くすのき科の樹木。〔動〕唾呑み込み。食欲起り唾液頻りに出るのを呑み込み呑みこみすること。

つんばり〔名〕突^{つっかい}支棒。支柱。

「つんばりかう(つっかい棒をする)」という。

つんばる〔名〕突っ張る。踏ん張る。頑張る。「何んとかしち、つんばるごつ言うちみゅうだい」。

て

て〔助〕のに。で。でしょうに。「おやかましかつたろーて、おーさん」「来らしたろーて」「寒かつたろーて済まんこつじゃつた」「今かるじゃ遅すかるーてよかじゃろーか」。

で〔助〕(1)です。語尾に付いて強く言い切る。「今かるすぐ行くで」「私がそう言うちよくけんで」。(2)か。ですか。親しい間柄で「聞いたで・知らんとで」等疑問を表す。

てー〔助〕のに。〔て〕に同じ。「風ん吹きをるて一戸も締めずいー・頼みもせんてーいらん世話たい」。(名)鯛。「てーてーんいを」。

でー〔助〕〔で〕に同じ。〔名〕台。宅地の後方左右に築いた防風用築地又は小高い土地。低い台地。

てーあげ〔名〕仏式に依る死者最後の年忌供養法事。四十九回忌。「てあげ・てーあげぼーじ・てあげぼーじ」等々という。「てーあげ」は「弔いあげ・といあげ」で、弔い供養の終

りを意味する。「てーま」ともいう。従って墓参りはするが、その仏に対する法要供養は一般には行なわれない。正しく「てーあげほーじ」也。

てーあげそとば〔名〕吊上げ卒塔婆。「てーあげほーじ」には、椎の小木を枝葉付き（うれつきとうば）で伐り、幹を削り僧これに経文戒名等を書き墓石に添えて建てて。用いる木は椎の木その他さんご樹等、何れもすんなりと伸びた樹種が使われてきた。「うれつきとうば」の項参照。

でーいなもん〔副〕大事な物。捨てたり処分するには余りに惜いと思えるもの。ひと思いは捨て難い物。「でいなもん」も同じ。

でーき〔名〕牛を農耕に使役する折背に負わせ胴から腹に廻した帯で括り付けた木製の鞍の一種。この具の両側から曳き緒を伸し、後方の犁や馬鍬の取付具と締結して牽かせる。

でーく〔名〕大工。大工さん。

でーくい〔名〕大宮司。神官。神職。宮司。「だいくい・でーくい」でーくじ」さん等色々に呼んで来た。

でーくぶれめー〔名〕大工振舞。家屋新築が始まると近い親戚関係者は大工への振舞と新築完成を祈念し祝意をこめて、多くは親戚中で申し合わせ合同で行なった。

でーぐらやみ〔名〕大暗闇か。

真暗闇。真暗がり。

てーこ〔名〕太鼓。

でーこくあげ〔名〕稲の穫入れを終った日の祝い事。稲の小束を荒神様に初穂として献じ、御飯を一升鉢に入れ神酒を立て供え穫入れ豊作を祝い感謝する。田の神は大黒様と呼ぶところからの名と。

でーこくさー〔名〕大黒様。

(1)「でーこくあげ」と同じ意味に用いる。(2)単に神の名として用いる。

てーこつ〔形動〕手に負えない。手にあまる難儀ごと。「てーこつてやまし・てやまし・てーこつばしら」など同義に用いる。「大きな目え遭うた。こぬ児にやてーこつした」。

でーこつ〔名〕退屈。物事に飽きる。

てーこつてやまし〔形動〕「てーこつ」「てやまし」に同じ。

てーこつばしら〔形動〕「てーこつ」に同じ。

でーこん〔名〕大根。「でーこんのうーか（大根の量が多い）」「でーこんがこんころ（大根の切り干し）」。

でーこんひき〔名〕臆病者。殊の外の淋しがり屋。

でーこんもち〔名〕大根餅。節分の夜神々に紅白の大根を輪切りにして重ねてあげる。餅を搗かぬ前に節分がくると大根餅を上げるともいう。

てーじ〔動〕研いで。「爪てーじ待ちちょくぞ」。

てーじょー〔名〕生児の初誕生日の祝いをいう。紅白12個宛の餅を一斗栴に入れて荒神様に供え、その後生児に3回踏ませる(2つの一升栴に入れて)。閏年には餅は13個宛にするなど地域や家庭の慣習差があると。

てーす〔名〕亭主。主人。

てーず〔名〕大豆。

てーつめーつ〔動〕解いたり巻いたり。衣装彼是の身拵え。「てーつめーつばっかりしちよつたち、でけんたあな」。

てーでー〔名〕橙。俚謡に「今じゃでーでも(今ではだいたいでも)」と唄文句にもある。

てーでくしょーてーでくしょー〔名〕盆遊びの子供唄の囃子ことばの文句とのこと。内容不詳。

てーどならす〔名〕前以て吹聴する。

てーどる〔動〕目的に合わせ料理・処理する。大まかに荒切りする。「魚てーどる・でーこんてーどる」「松材てーどる・材料てーどる」。

てーなかいえ〔名〕本家・分家の間。

てーのいを〔名〕鯛の魚。鯛。「てーんいを」ともいう。

てーは〔名〕蕎麦のある時期に、甘蕎麦に粟・蕎麦粉を混ぜて炊く。さつまいもを2cm大の厚さに小口切り水炊きし、煮上ったところで、塩・砂糖で味

付けし蕎麦をつぶす。次に熱いところに蕎麦粉を加えよく煮て出来上る。食べ方・(1)熱いところをフーフー言いながら食べる。(2)冷えたものはフライパンで焼いて食べる。(3)抹茶を入れ茶巾しぼりにして冷し食べる。「でーは」とは、代飯即ち主食代わりの「だいはん」が「でーはん」と訛り「でーは」となったのではと、見て来たような当推量が罷り通れば。

てーばつけ〔名〕前畑。「だいはたけ・でーばたけ」などともいう。「なぶたけ」参照。

てーむはれーむ〔形〕褻にも晴にも。褻は普段着・晴は晴着の意。持っているだけ全部。一般的には「手にも腹にも」の意からにとられているが、本来は「しえにもはれにも」から来た語。後にも先にも。

「てーもはれーも」ともいう。

てーめき〔名〕(1)雷鳴。「今朝ぬでーめきで出鈍った」。(2)腫物の座の範圍。「こぬ腫れもんのでーめきで、ここまで赤うなった」。「どよめき」の語から出来たものでは。

てーもん〔名〕諺。たとえ。格言。

てーらとる〔形〕手間どる。混乱する。混乱し手間どる。同義語に「ごたく・ごたくとる・てーら・てーらてやまし・てーらてやましとる・みのてーら」など用いる。困惑の態。

でーりゅー〔名〕やすで。体臭の嫌な小虫。「でーりゅーのふう(亀虫)笑え」。どちらも悪臭を放つ虫同士の笑い合い。

我が身を省みよ。「人の振り見て我が振り直せ」の戒。

てーろ(助)とか。「茶てーろ飯てーろ色々出さしたばな」。

「てろ」も同じ。

でーわり〔名〕費用を出会者の頭割り平等負担とすること。平等割勘定(わりかん)。「ひかりする」も同。

てあう〔動〕仕事の仕組みや仲間の構成人員配置協力関係等合理的に配する。「手合った仲間同士」「てあい・てえー」ともいう。

てあぜ〔名〕田の畔に添うて株間に細い手溝を作り水を通し易くする。「てあぜきる」ともいう。

てあまし〔形動〕手に余る程の時間。「てやまし」に同じ。往生とる。

ていえー〔名〕手合い。仲間。互に伴侶となる意。「男ていえー・職人ていえー・中野郷ていえー」。

ていえーしごつ〔名〕手合い仲間が揃ってしか出来難い仕事。「てえーしごつ・てえーごつ」などともいう。

ていし〔名〕長縄の「よまめ」7〜8本毎に1つ宛付ける錘石。

ていとーかき〔名〕抵当書き。旧藩時代上納が不足すると

「初願」が、前畑なり割地なりを年限売りにして抵当に引き当てた。この手続きや処置をいう。

ていやわいや〔副〕寄ってたかって。皆で寄り合い手を貸し合って。「ていやわいやしち作り上げちしもた」。

ていれめし〔名〕つまみ食いすること。「てごめ」ともいう。

てうちやわせ〔副〕右から取って左に渡す様、直ちに。左右の手を打ち合わせるように直ぐに。即刻即座に。

てえもん〔名〕「てーもん」に同じ。昔からの言い伝え・言い慣わし・先人の智慧・体験経験に基づく教訓やいましめ、等。

てがき〔名〕正月に行なう蓬萊飾り。

てがきばち〔名〕蓬萊は中国の神仙思想で説かれる想像上の仙境。東方海上に在り仙人が住み不老不死の地と信じられた。蓬萊飾りは新年の祝儀として床の間に飾ったり、年始の客に出したりする飾り物。三方の上に白米・熨斗鮑・伊勢海老・勝栗・昆布・野老・馬尾藻・櫂等を盛り付け蓬萊になぞらえて作った飾り物。この蓬萊飾鉢を「てがきばち」という。

てかけ〔名〕妾。妾妻。二号夫人。

でかりかす〔動〕出来さす。仕上げる(さす)。成功・完成さ

て

せる。「到頭でかりかす事んでけた（でかりけえーた）」。

てぎ〔名〕(1)鯨体に綱を付ける為に2〜3尺の木の棒を鯨の内部に貫き通す。この棒を「てぎ」という。捕鯨用語。(2)「てんぎ」(1)に同じ。参照。

てぎね〔名〕棒の両端を杵状にし、中央部を細身に握り部とし一方の重みを利用して杵として用いる。味噌用煮豆を搗き崩したり粉をはいたり利用多才。上下を入れ替え使用しても突いている形態には寸分の違いもない。状況に少しの変化進展のないさまを「手杵取り直した様なもん」という「てえもん」もある。

てぐせ〔名〕手癖。悪い手癖ある。

てぐせぬわるか〔形動〕盗癖がある。手癖悪に用いる事が多い。

てくほめし〔名〕左の掌に少し飯を盛り、右手は茶や漬物で軽い食をとるさま。縁側や戸外で行なう風習。

てぐむ〔動〕共謀する。悪事を働くことなどに多く用いる。手組む。

てくり〔名〕筒袖上衣。襟を折らずに着る普段着。「でんちゅう」と同。

てくる〔動〕てくてく歩く。歩く。「てくしーい(タクシーならぬ)」。

てくる〔名〕手苦勞。懇に手入れる。「てくろが届く(届か

ぬ)」。

でけつふせつ〔形動〕良い時(事)悪い時(事)とか際立っていて一定せぬさま。「善か人ばって、でけつふせつしち、でけん(困る)」。

でける〔動〕最初の妊娠をいう。「でけさす・でけさした」も同じ。囚みに、2回目以降の受胎を「かたる(加わる・入る)」という。

てこがいえ〔名〕手桶。把手を付けた小桶類「てこがい・てこぎえ・てこぎえー・てこげー・てこげえ」も同。

でござす〔助〕です。でございます。

てこしんで〔形動〕横杵次第。自由自在。舵とり次第で。やり方一つで意の尽に。「てこしんでならぬ(思いの尽に事が運ばぬ)」。

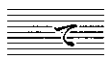
てこぼし〔名〕手拳。拳。「てこぼして打たれた」。

てこれわき〔名〕幼児を失った直後の悲嘆や恐怖心。「子供の^{こども}患うちくれち、てこれわきじやあつたし、いけえーこつ心配じゃつた」。

でざいしょ〔名〕嫁や入婿の生家。出在所。

でざく〔名〕自己の居住地区町村外に所有する耕作地に出向きする農耕。

てさび〔形動〕手先の器用不器用さ加減。手先の不器用なさまを「てさびなか」、物の味気・趣き・風情・深味ないさ



まを「さぶなか・さびなか・てさぶなか・てさびなか」などという。

てざりめざり〔形動〕手障り目障り。目の前で「てやんご」して目障りになる。「めめぐるしか」に似る。「てざりめざりなこつぱっかりする」。

てしきあわん〔形動〕手に負えぬ。「てしけおよばん・てやまし」も同。

でじま〔名〕額の髪が生え際のでっぱり部名。

てしよー〔名〕父。てーす。たいた。「たいしよー・てえーしよー・てしよー」か。

てしをざら〔名〕手塩皿。小皿。略して「てしを」ともいう。

てずえかな〔形〕器用な。「てぜかな・てずえかな・てじゅーぼー」も同じ。

ですけに〔接〕ですから。「ですすえに・ですせんか」等いろいろ。

てずつ〔形〕不器用な。「てづつ・てずち・てつくおー」も同じ。

てずま〔名〕手品。

てだしする〔動〕仲間関係のことで自己一人の負担として出金する事。

でたち〔名〕葬儀出棺。

でたり〔形動〕人をだます手段。「でたりに乗らさした」。

てち〔助〕「ちち」に同じ。とて。「言うたてちどむならん」。

でちがう〔動〕行き違いにな

る。留守にする。「こん前かるは、でちがうちよりましちすいませじやつた（せんこつでした）」。

てぢゅーぼー〔名〕手つき。

手なみ。「ちゅーぼー」に同じ。

てぢょん〔名〕手・指だけで独楽を廻らすこと。「ちょん」参照。

てっきゅー〔名〕背中にあるあんまのつぼ。

てっきりてばしこ〔形動〕てきばき手早く。くずくずしないて手際よく。

てつくおー〔名〕女性で裁縫に利かない者。「てっこー・いしでつくおー」ともいう。

でつけ〔名〕出来毛。作物の結実状況。「でつけぬ良か（悪か）」。

でっしよー〔助〕でしよう。

でっする〔助〕でございます。

です。「そげんでっするとちいますばな」。

てっぼーしば〔名〕珊瑚樹の木。「てっぼーのき」ともいう。「てっぼうしば・てっぼうのき」も同じ。この木の実は小児おもちゃの竹鉄砲の弾として遊ぶ。すいかずら科広葉樹。

てっぼーそで〔名〕着物の簡袖。

てっぼーをどし〔名〕大風。急に吹き直ぐに止む強風。「をどし・をとし」は突風の古名。

てつぼなわし〔名〕菜種子栽培で初生時に大体の間引きを

て

し全体の秩序だてをすること。
てて〔名〕父。雄鶏。雌鶏を「はは」。

ててかう〔名〕偶然のことから両者がかち合うこと。鉢合せのさま。

ててかり〔名〕父子在り。一家に父と子壮健に揃って仕事の出来るさま。「あん家はててかりで、よう仕事んでけち、良からすたい」。

ててくりやう〔動〕密通する。「ててくりやうち児まででけさした」。「ててくる」も同じ。

ててどり〔名〕雄鶏。

ててなしご〔名〕父親の判然としない児。

ててわん〔名〕飯碗。汁碗に対する飯碗。

てとり〔動〕手間・心配をかける児。迷惑をかける。「てとりですばってよろしゅー……」。「てとりむすこ（家族や親戚にまで心配迷惑をかける息子）」。「てとる」も同じ。

てとる〔動〕自ら手を下して物事の処理に当る。

てな〔助〕そうな。そうですね。てね。「行たってな・見たってな」。「ちな」に同じ。

でな〔助〕で。な。「とでな・とえな・といな」など同じ。

でな一〔助〕(1)ですか。「行たつでな一」。(2)そうですねえ。ねえ一。「でなあ」も同じ。

てながだこ〔名〕飯蛸いかたけの仲間です。手長のもの。

でなぶたけ〔名〕菜畑は宅地の

前に付いているのが本法であるが、事情により宅地から離れて配されることがある。これを出菜畑という。

てにもはれにも〔形〕「てーむはれーむ」に同じ。

てぬか〔名〕米糠。糲。

てぬき〔名〕腕抜き。腕通し防護具。

てぬげえー〔名〕手拭い。タオル。「てのぞい・てんげえー」ともいう。

てのはれいるる〔副〕掌の中に入れる事で、大事な物。大切がるもの。

でばい〔助〕ですよ。「するとでばい・いやでばい」。

てはればこ〔副〕これっきり、他にはない。一つより他に持たぬ物（時）。

てひー〔名〕父。

てびしょ〔名〕手先の動き・働き。「てびしょぬ良か（手先器用）」。

でびてー〔名〕出額。聡明の印。「でぶてー」ともいう。「出額に馬鹿なし」。

てふし〔名〕手先の仕事。器用の意に用いる。

てぶら〔名〕手土産無しでの訪問・帰宅。「すでぶり」参照。

てぼ〔名〕竹製のざる。籠一般。「しがてぼ・丸てぼ・磯てぼ」等々。

でぼ〔名〕出額。おでこの出張った頭。「でぼちん」などという。

てほしがる〔動〕挑発行為行

動。誘発し相手になりたがる態度をする。

てまりこ〔名〕こでまり。麻毬。「でまるか・でまるくわ」ともいう。ばら科の花木。別名すずかけとも。

でみず〔名〕泉。泉の水。湧き水。「でみず口（泉の湧出し口）」。

てみぞ〔名〕田の水が乏しい時、手で土面をかき水を流す。「てみぞかく・てみぞきる」という。

てむ〔助〕とも。ても。「遅なつてむ来る・行てむ呉れず、来てむ見ず」。「酔てむおれず…」。

でむ〔助〕でも。「木でむなか草でむなか」。「でん」も同じ。

てめー〔名〕人を欺く為の手前事。

てもはもつかぬ〔形動〕手のつけようのない乱れたさま。

てもやし〔名〕手製（自家製）元麴。「京もやし」に対する語。

でや〔助〕ましようや。しょうではありませんか。「遊ぶばうでや・行こうでや」。

てやまし〔形動〕手に負えない。厄介な。「こぬ子にやてやまし」。

てやましとる〔動〕面倒な仕事。世話をかけること。おおごと。

てやんご〔動〕手遊び。いたずら。「てやんめ」ともいう。

てよーめよー〔名〕手のしぐ

さ目の動きによる合図。芸事の表情。動作。

でより〔名〕外出するのに何かと悶着して、すんなり出かけないこと。「でよりばっかりしち出はせぬ」。

てらあげ〔名〕盆正月2期に白米白麦を寺に納めていた。

てらおくり〔名〕人の死後49日目に供養して位牌を寺に送り仏となる儀式。死後49日目か月に亘る折は2か月内に日を設定して寺送りする。

てる〔助〕したやら。「行てる・言うてる・食うてる」。

てるてのひめ〔名〕美人。

てれっと〔副〕安閑と。ほんやりと。だらっと。「てれっとしち待ちゃおられん」。

てれんばれん〔副〕あつちでぶらぶら、こつちでぶらぶら。為すこともなくだらりぶらぶら。「てれんばれんで口は暮れた」。

てろ〔助〕とか。「目てろ耳てろあちこち診さした」。「てーろ」も同じ。「行くてーろ行かんてろ言いてこつばっかり言うな」。

てんぎ〔名〕(1)小児の「いしこどり・むくろこき」などの遊びに各自が使用する「小石」又は「無患子」をいう。「てぎ」も同じ。(2)転じて、資本金・報償金の隠語としても使用。

でんぎ〔名〕摺りこ木。

てんきらする〔動〕石投げ・風揚げで距離より高さの位置

てん～てん

を競うこと。

てんぐばな〔名〕野老の果実。

やまいもの果。小児好んで鼻や額につけて戯れ遊ぶ。やまいも科。つる植物。

でんぐりがやす〔動〕ひっくり返す。「でんぐりがやる」も同じ。

てんぐりてんぐり〔名〕幼児をあやすのに、両手を目の前で交わり廻わすしぐさ。幼児大いに喜ぶ。

てんぐりもち〔動〕多人数で次々転送し乍ら物を運ぶこと。「せんぐり・せんぐりもち」ともいう。

てんぐるま〔形〕怪物が宙を物運ぶ時、極めて速いと想われ「天車に乗せる」と形容した。

てんげ〔名〕手拭い。タオル。「てぬげー・てんげー・てんでん」とも。

でんこん〔名〕蓮根。

てんさつ〔名〕他から彼此批判し、指図すること。「わきかるありこりてんさつあいらん」。

てんじんさー〔名〕(1)田の神さま。(2)のぼせ者。「そりあがり・そりやがり・そりやがりもん(者)」とも。

でんちゅー〔名〕筒袖の上衣。袖無し羽織。「てくり・てくりのきもん」などという。

てんと〔名〕てんと船。小型漁船。和船の一種。「てんとぶね」と言う。

でんどー〔名〕鯨のあごの面白い肉名。

てんとーさー〔名〕お日さま。太陽。「おてんとうさん」とていねいに。

てんば〔名〕最上端。梢の先端。石垣・どのはの最上段。

てんべ〔名〕おてんば。「てんべたたく・てんべおなご・てんべ娘・てんべー」などと用いる。

てんぼこ〔名〕椿の葉にできる虫玉。不規則瑠璃白色の球状物で内は軟らかな繊維質でできている。

てんぼこさんぼこ〔副〕甚だしく怒り散らすさま。「てんぼこさんぼこ腹^{はら}けえた」。

てんぼさんぼ〔副〕乗るかそるかの思いつ切り。当るかはずれるか。

てんみどり〔名〕樹木のとてっぺん。「松のてんみどり(新芽の最先端)」。

てんむく〔名〕天目茶碗。湯呑茶碗。

てんめのつじ〔名〕天芽の辻。絶頂。

てんやく〔名〕天役。公事に無報酬での従事従業。「天役じゃけに…」。

てんやくあんだめ〔名〕公共性も構えも大きな「溜池・堤」の手入れは、水利関係者が水田所有面積に比例し、天役作業に従事する。「あんだめ」は小溜池を、堤は溜池そのものを指す。

と

と(助)の。つ。「行ったとです・話しましたと」。

ど [名] (1)人。「やてど(傭人)・かせど(加勢人)」。「手」ともなる。(2)記憶という程の意。「どが無く・ど忘れ・どなし」。

と一 [名] (1)膳蓋。(2)果実が枝に着いた部分名。「成りと一」。「つー」ともいう。(3)神祭りの当番家。講・仲間があり頭がいる。「と一の嫁」。

ど一 [名] 胴。鼈。太鼓に用いる。「大ど一・小ど一(大・小太鼓)」。

ど一あん [名] 社寺参拝に同行すること。「誰某とど一あんした」。

と一いも [名] みずいも。里芋に似、専ら茎部を食用する。

と一うつぎ [名] はこねうつぎ。錦帯地。植物名。

ど一か [副] どこか普通の状態でない。「ど一かある(何か様子が違う)」は(形動)か。「どこんど一あると・頭んど一かある」。

ど一がし [副] 何んとか。「ど一がししち、手に入れても一もん」。

と一がしら [名] と一仲間の頭。

ど一かちゅーと [接] 結局。

つまり。「どうかちゅーと・ど一かちゅーに」も同じ。

と一きび [名] とうもろこし。玉蜀黍。とうきび。いね科一年草。

と一きょーみする [動] 子供の頭を両手で挟み持って吊り上げる悪戯。「と一きょーやお一さか」ともいう。

ど一ぐど一さ [名] 道具諸式。道具類扱い。「ど一ぐど一さばかりで、本法な仕事あてけはせん」。

ど一ぐひょーし [形] 腕前より道具持物に気を遣う者を笑って言う時に用いる。てーもんに「宮よりゃとんびよし」というのがある。嘲笑気味。

ど一げし [副] 多量の意。

ど一こー [名] 銅壺。銅製の湯わかし器。箱火鉢に埋込む耳付き提柄なしの湯沸し器。「ど一うこ・ど一うこ一・ど一うこ一・ど一うこ一」も同じ。

と一こーじゅー [名] 2組の講中が平素は何等関係はないのに特に葬式他特殊状況に限り協力加勢し合い対等に関係をもつ場合。

と一ごんりゅー [名] 鉤繩の「いけばえ」に同じ。漁法として比較的新しく明治初期導入といわれる。

と一さん [名] 陶盞。即ち焼物の盃。酒をすゝめるのに「おと一さんでどうぞ」などという。「杯」に対する語。

ど一したもんでっしょーか

〔接〕それでは。願い・依頼を
込め「そんな訳でお願いです
が…」。

どーしまっしょーかい〔名〕
恐縮した謝辞。ありがとうございます
ございます。

とーしみのき〔名〕はくさん
ぼく。がまずみ。すいかずら
科植物。又、みずき科の「は
ないかだ」も「とーしみのき」
と呼ぶと。

とーしろ〔名〕大型の黒蟻。「と
ーしろー・とーしろあり」等
とも呼ぶ。

とーじんがみ〔名〕唐人神。
島内処所に祀る。性病・縁結
びを祈願、男根の絵や作り物、
金属の小華表等を献納する。

どーずこーず〔副〕どうやら
こうやら。あれやこれやで。
どうか。やっとのことで。
「どーやこーや」も。

どーするちいーますなあ
〔副〕これはどうも。ありが
と。恐縮です。「どーしまっ
しょーかい・どーするちゅー・
どーするちゅーなー・どーす
るちゅーなー・どーするち
いますなー」等々相手との関
係で末句色々。

どーだのき〔名〕榎。〔どーだ〕
という時は木も実も指す。ぶ
な科。

とーたりごつ〔名〕たあいな
いこと。

どーちけえー〔感〕どう言っ
ているのか。「どーちなー(な
ーえ)」も同。

とーでー〔名〕灯台。灯火台。
とーとー〔名〕(1)にわとり。(2)
鶏を呼び寄せる呼声。(3)幼児
へ排尿を促すさそい声。

とーな〔名〕唐菜。たか菜。野
菜名。

どーなっと〔副〕どうなりと好
きに。

どーなっとはたせ〔形動〕ど
うなりと勝手にしやがれ。好
きにせよ。

どーなりこーなり〔副〕苦心
惨憺やっとのことで。

どーなわ〔名〕鯨を「もっそー」
にかけける折、鯨の胴にかけける
縄。捕鯨用語。

どーぬま〔名〕船の船頭の居
間。「たちかけ」と「どーふな
ばり」の間の間。胴の間。

とーねご〔名〕当年児(仔)。
今年生まれの一歳児。牛馬家
畜に多用。

とーのよめ〔名〕「とー」の儀
式に侍り奉仕する少女。

とーひーらぎ〔名〕唐柊。柊。
もくせい科の植物名。

とーふなばり〔名〕「みなおり」
の次の船梁。船の用材名。

とーふのかす〔名〕おから。
卵の花。

どーぶりー〔名〕伊勢参宮下向
祝い。一生一代の大事と大盤
振舞した。「どーぶれー・どー
ぶれめえー」も同。

とーへー〔名〕「はも」に似た
魚名。

とーぼし〔名〕田畑に出した堆
肥小積み覆う山形の藁囲い。

- とぼし。
 とーまめ〔名〕そらまめ。蚕豆。
 とーまめもち〔名〕そら豆を煮て甘藷黒糖を加え搗いて餅に握り丸める。
 とーまる〔名〕しゃも。斗鶏。
 とーむこー〔名〕当事者間同士。
 どーむこーむ〔副・感〕どうにもこうにも(困り気味)。甚だ。「どーむこーむ暑し堪えん・どむこむな」。
 どーめ〔名〕(1)米櫃。(2)氷田の泥中に棲む白く細長関節体虫。人を刺し一瞬激痛走る。まつもむしという。
 とーや〔名〕お籠り(講盛り)の当番宿。当家・当宿。
 とーやは〔名〕(1)薔薇。ばら科。唐薔。藤薔。(2)野ばらも指す事有。
 どーゆ〔副〕何んとゆう。ほんとに。「どーゆ面白か本な一な」。どーゆー。
 どーゆーけー〔副〕どう言ったら良いやら。なぜかならば。発言の前に殆んど意味を持たず、単に接続詞的使用も多い。
 とーら〔名〕俵。「とーら積み」。「とーらう」も同じ。
 とーらい〔名〕鬼ごっこ(小児語)。
 とーらがに〔名〕倭蟹。砂の中に棲み、足短かく体形丸味。かにの一種。
 とーらづみ〔名〕俵積み。農家の戸口を入った土間壁側に木

- 製の通しの台「はりあげ」を作り、板を張るなどして収穫した米俵(3斗2升入り)を積みあげ数を誇り見栄を張った。米俵丈でなく麦や雑穀類も置いた。「はりあげ」参照。
 どーらん〔名〕腹巻。胴巻。財布。
 とーりもん〔名〕(1)通り雨。にわか雨。「とーりもんのしをる(した)」。(2)芦辺浦住吉社の祭礼に出される山車で「はやし・にわか」の類。
 どーれむ〔副〕何れも。どれもこれも。全部。どれも。
 とーろーあげ〔名〕(1)盆灯籠は旧暦7月29日仏を祀り、この夜を限りにとり除く。これを「灯籠上げ」。(2)家と墓の両方に、盆の13日から灯し、20日盆を最後にとり除く。(3)新盆の家では「しんもーどーろー」といって7月はじめから灯し、15日の晩にはありったけの灯籠を墓に灯す。3年目には全部焼き捨てにする。(2)(3)共に「とーろーあげ」という。これらの慣習は地域や家により仕方が色々で一例にすぎない。
 とーろーぐわし〔名〕(1)盆に仏前に供える菓子灯籠。(2)華奢な男女の盛装振りを「とーろーぐわしのごたる」と言っただと。
 とーろーとぼし〔名〕盆の15日の夜墓地で灯籠を多数連ねて灯すこと。「とーろーあげ」

の(3)に同じ。「とーろーとべし」ともいう。「とばし・とべし・とばす・とべす」は灯す。
とーろーやめんどー〔名〕いつ、なぜともなく子供達が灯籠を灯して、「とーろーやめんどー」と叫び乍ら遊び的に歩き廻ったと。

どい〔名〕池・沼・堤の堤防部の名。民謡の一節に「新田どいでむ畑ん畦でむ…」とある。馴染多い場所なり。

といな(助)のですか。「とえな」に同じ。「するといな・行くといな」。

といばい(助)のですよ。「とえばい」も同じ。

とう(動)届く。達する。「手のとう・竿のとう・足のとう・背のとう」。

とうしみのき〔名〕はないかだ。ままっこ。みずき科低木。若葉は食用になる。「ずい」を抜きだして灯芯としても遊ぶ。「とーしみのき」。

どうするちゅー〔副〕どうしよう。しようがない。どうしようか。「どうするちゅう」も同じ。

どうするちゅうなあな〔副〕どうしようもない。どうしたらよからうか。

どうだかし〔名〕こなら。ぶな科。

どうだかしわ〔名〕かしわ。ぶな科。

どうちゅう〔副〕どうだろうか。

どうづき〔名〕胴突き。土掘き。(1)家の新建築に欠かせないのが柱根の土台石を据える地面の突き固めである。大きめの松丸太材に丈夫な縄紐を数本取り付け、櫓を組み引き上げ、急直下地面に落し搦き固める。又大きい据りの良い石の周囲数箇所に横穴を穿ち丈夫な葛を巻き、それに数本の引き縄を取り付け一同で引き上げ打落す。特に支柱や隅柱の下は念入りに突き固め大きめの土台石を据えつけた。

(2)「どうづき」は家の建築のみならず、溜池の堤防の水洩れ防止、道路側面の補強等の土木建設工事に絶対欠かせない工法であり、すべては人数を要する共同作業で支えられて来た。この作業の進行に欠かせないのが「どうづき唄」である。「エーイ エーイヤ今日は日もよし のんがほい ヤットコセーヨーイヤナーあら胴突きはじめよいとねヨイヨイ アーラ シーチャコリヤ ヨイトコ ヨイトコネー ヨイヨイ」と音頭とりの発声に合わせ一同で。

とうふのかす〔名〕「とーふのかす」に同じ。おから。うのはな。

とうやぼ〔名〕のいばら。ばら。

とうれる(動)取り込む。とり入れる。「干し物をとうれる」。

とうろうすえ〔名〕新盆の灯籠焚き初めは、6月29日から7月1日からである。この焚き初めの日を「とうろうすえ」という。尚焚き終りは15日・20日頃迄・7月終り迄など地域や各家慣習があるが、新盆外では七夕から20日頃迄が一般的のようである。

とえー〔名〕丈。たけ。長み。「とえーん長んか」などと用いる。

どえいつ〔代〕ど奴。「悪さばっかししをととはどえいつか」。

とおりもん〔名〕「とーりもん」同。

とか〔助〕のか。「どーするとか」。「とな」に同じ。

とかけ〔名〕掌の筋の一つ。富裕相。

どがし〔副〕どれだけ。どれほど。「どがしこ・どがっしゃ・どがっしゃ」も同じ。どれ位。

どがしむる〔動〕処罰する。

とかまゆる〔動〕捕える。掴まえる。「とかむる・とかめる」も同じ。

どがむる〔動〕立腹する。腹曲げる。

とぎ〔名〕(1)通夜。(2)おき火。赤熱した炭火。「火のとぎ」ともいう。

ときしらず〔名〕麻疹に似て肌一面に発症、子供に多く出る。皮膚病。土団子を年齢の数だけ作り便所の神に供え祀れば良いと聞いた。

ときたつる〔形〕間歇的な痛み。「腹んせきのときたつる(腹痛間歇的に起こる)」。

ときに〔接〕ところで。さて(偕)。

とぎる〔動〕削り尖る。とがる。そぐ。そがりかす。とがりかす。

ときわ〔名〕かんすすき。ときわすすき。防風用にもなる大型かやくさ。

どくじ〔名〕心根。「どくじの悪か人間」。「どくじーどくずいー」も同じ。

とぐち〔名〕住家の表側出入口。家の横や裏の出入口は「うらとぐち」。

どくつべらしか〔形動〕悪意に満ちた。「そげんどくつべらしかこつ言うもんじゃなかよ」。

とくなう〔動〕(1)内密に懐に入る。盗む。ぬくむる。(2)やもめ達の情事関係。「あん男ととくなうちよらしたつちゅうばな」。

どくなもんじゃなか〔名〕人でなし。悪い奴じゃ。ろくなもんじゃなか。一筋縄ではない。あきれ果てた悪。

どくびーな〔名〕すべりひめ。すべりひめ科の草本。

どくみ〔名〕儀礼として他人に酒をすすめる折、初に自から一口飲み中味を確認吟味する事。筆者も一度酔を吞まされたことがある。毒見。

どけ〔代〕どこに。「どけー」も

同じ。「どけ^や行^やたちよつたけえ
ー」。

どげ〔名〕びり。最下位。最後
尾。「どべ・どん・どんけつ・
どんじり」。

どげーし〔副〕どれ位。どれほ
ど。「どげし・どげしこ」も同
じ。

どげーに〔形動〕どんなに。「ど
げーん・どげーんで・どげに・
どげん」も同じ。

どけーぬたっか〔形〕香気や
味濃厚すぎるさま。

とこいえ〔名〕掛軸。床絵。床
の間の掛軸類。「とこえ」も同
じ。

とこいも〔名〕(1)蒔蒔「げんき
いも」を畑に植え込み、肥大
更新させたもの。(2)蒔蒔を育
てた後の種蒔にも同様の現象
が現われる。(1)(2)共に更新部
を食用等に利用した。

とこそこ〔副〕どうという訳で
はないが何んとなく。只何ん
となく。「とこそこ似ちよら
す」。

とこてん〔名〕ところてん。「と
こてん」ともいう。

とことこ〔名〕かすみさんしょ
ううお。ひのびうすの一種の
同棲類。山中の暗い湿潤な朽
葉の下に棲み、鶏が食うと直
ちに死ぬと聞く。

とことん〔名〕最後。いや果
て。「とことんまぢ、行^やたち見
にや分らん」。

とこばしら〔名〕床柱。住家の
座敷と呼ぶ一室には、床の間

を作り、上床・下床に区切る
時はその境目に、一つの時は
次の区画との間に、他の柱と
は異なる材質仕様特製の床柱
を立てた。これをいう。

とこやき〔名〕死者の使用して
来た衣服や寝具・畳等は墓地
近くの野山や河川海岸に持ち
出し焼却処分した。これを「と
こやき」という。

どこりや〔代〕どこの辺り。ど
の辺。

ところ〔名〕所。「どこる」も同
じ。「ところどころ」。

ところが〔接〕ところが。とこ
ろで。

どころか〔接〕どころか。「家
どころか屋敷まぢも入手え渡
ったちゅう」。

ところで〔接〕ところで。

とこるてんぶさ〔名〕てんぐ
さ。「ところてん」を作る原材
料の海藻。

ところのひと〔名〕同地区に
住んでいる人。近所の人。「と
ころぬひと・ところんひと」
も同じ。

どさど〔副〕どさどと一度に沢
山に。

どさどさ〔副〕荒々しく振舞う
さま。「どさどさ歩まん」と。
「どすどす」も。

どし〔名〕(1)同士。仲間。連
友達。(2)年齢。年。「同どし(同
年・同輩)」。

どしいえで〔名〕魚釣りの餌に
同種魚の肉片を用いること。
「いえで」は餌。

としがみ〔名〕歳神様。元旦の朝牛の寝た向きの方向から来るといふ。

としぎ〔名〕歳木。節分の日にとり6本宛12本立てる。神様には1本宛あげる。

としぎみ〔形〕仲間にそそられ気味になる。「としぎみいなっち、よう飯ば食う・としぎみいなっち、ようあばるる（騒ぐ）」。同土気味。

としぎれ〔名〕同質同柄の布片。

としぐいー〔名〕(1)獣や虫が仲間同士で体を食い合うこと。(2)転じて人間の食事等にも比喩的に用いる。

としこ〔副〕どれ程。どれ位。いくら位。「どれしこ・どれっしや・どれっしょ」も同じ。

としこー〔名〕歳功。最年長者。「亀の甲より歳の功」。年嵩。

としごもり〔名〕地区内の青年が大晦日の晩神社に徹夜のお籠りをした。

としぜり〔名〕仲間同士の争いごと。

としだま〔名〕贈物を受けた折、何か適当な小品を添えて返礼する。これを「としだま又はおうつり・うつり」という。

としのとりげむなか〔名〕年のとり甲斐もない。年甲斐がない。

としのぼん〔名〕大晦日。

としのもち〔名〕年の餅とし

て、白い餅と小豆を着けた餅を一重ねにして渡す。この餅をいう。

としび〔名〕生まれ年の干支に当る日。諸事を慎しみ控えめに過す。

としゃく〔名〕藁・海藻・堆肥の類を戸外に小山積みし、雨露風霜等を防ぐ覆いを施したもの。「稲藁としゃく・藻としゃく・肥としゃく」と。「とぼし」ともいう。

としゃくがら〔名〕荒磯の岩石に付いた「としゃく」の貝。こしき貝。

としゃくとり〔形〕(1)物をうず高く積み上げたさま。(2)品物が沢山あるさま。「としゃくとりしこある」。

としゃけち〔名〕来年。「としやきち」ともいう。

どしょーぼね〔名〕土性骨。肝っ玉。度胸。胆力。「土性骨・ん据っちよる」。

とじる〔動〕穀物が虫に食われ綴じ合されること。「虫のとじる・虫のとじっちよる・とりやう」という。

としをり〔名〕年寄り。としおり。

とすべり〔名〕いぼたの木。とすべりのきともいう。水蠟樹。もくせい科の植物名。

とぜんなか〔形動〕わびしい。淋しい。虚しい。徒然ない。

どだい〔副〕もともと。元来。まるで。「どだい間違うちよる」。

どだいいし〔名〕土台石。柱石。根石。家屋建築の土台に石を用いて来たのは、大小手近に揃い吸湿性も小さく加工もし易く数々の利点あり。

どぢきか〔形〕横太りがつちりたくましい形。「どぢきな(頑丈な)」も同じ。

とちとち〔形〕よちよち。「とちとち歩む」。「とぼとぼ」にも似る。

どちみち〔副〕いずれ。結局。最終的には。どうせ。どっちみち。どのみち。「どちみち助かる命じゃなか」。

とぢりむし〔名〕穀類をとぢり合わせその中に巣くう白い裸虫。「とぢりやう・とぢる」も「とじる」に同じ。

とちるる〔動〕あわてる。まごつく。「とちれる」も同じ。

どっか〔代〕どこか。

どっかかり〔名〕最初。とりかかり。

とっかむなか〔形動〕途方もない。法外な。「とっけむなか・とっけくちもなか・とっけもなか」も同じ。

とっかり〔副〕突然。丁度真正面に。「とっかり出遭った」。「ほっかり」も同じ。予期しない時と場で急に。

どっかりで一ち〔副〕とても及ばない。とてもではない。とんでもない。「どっかりで一ち、うーばんげえな」。「どっかるで一ち」も同じ。

どつきり〔形〕満腹状態。「餅

3つ食うたりやどつきりした」。「どっけり」も同じ。

とっけ〔形動〕変り者。朝夕で気分変化のはげしい人。「とっけもち」。

とっこ〔名〕縄やしゅろ縄を組み編んだ石材運び具。底を田の字形に太く丈夫に組み、四隅から強い紐を伸ばして輪2本にし石材を乗せ棒を挿し入れ、2人又は4人で運ぶ。このほか、土・石・土石を運ぶ道具として縄編みの「かるこ」や、2本の竹棒に割竹を編み付けた担架式の「もっこ」などがある。

とっこぶ〔名〕突瘤。身体特に頭部を打って出た瘤。

とっさん〔名〕父。とうちゃん。おとうさん。「とっさんな(呼びかけ)」・とったん・ととしゃん(やん)等々。

とったり〔名〕柔術。柔道。

とつつじ〔名〕頂上。てっぺん。突上。

とっとら〔名〕「とつつきむし・きちげえ」ともいい、衣服等に取付くと容易に落ちず。子供らはこれを衣服にとり付け、文字や画にして遊ぶ。

とっとらこぶ〔名〕蜘蛛の一種。夕方から出て巣を張る。昼間姿を見ぬ。

とっとらもち〔副〕手に余す。往生とる。「どうむこうむ、とっとらもち取つちしもた」。

とっば〔名〕うそ。ほら。うそつく。ほらふく。「とっばい・

とつばいくる・とつばす・とつばする・とつぱー」など同義語としてまとめた。

とつばな〔名〕最先端。岬の先端。真つ先。最初（とつばなあ誰けえ）。

とつびん〔名〕豆腐。

とつpegがっしゅーある〔形動〕腕白である。腕白者。

とつば〔名〕(1)襦。「孫をとつばに入れち抱た・とつばに入る」。内ふところ。(2)筒袖の着物。

とで〔助〕ので。「とです。とですか・とですな・とでつしょうか」も略同じ用法。

とてつものなか〔形動〕とてつもない。法外な。「とほーとてつものなか」に同。

とと〔名〕えのころぐさ。おおえのころ。あきのえのころ。ねこじやし。いね科の草本。

ととー〔名〕浦町の昔の船着場。人の乗降・荷物の積み下し場。潮の干満に應ずる石段が築かれ、船を繋ぐ石柱を立て、灯台（照明）設備もした。「大ととー・小ととー・庄屋ととー」など特殊目的の「ととー」もあった。渡頭（渡し場）。

ととばし〔名〕とばしり。とばちり。「ととばしかけられた・ととばしのかかった」。

ととめく〔動〕ささやく。「ささめく（古語）」に同じ。

ととらげ〔名〕ととら毛。頭髮等毛が薄くひよろひよろとし

たさま。「ととらととら（とほとほ・仙台浜藪・石巻方言）」。

とな〔助〕のか。のですか。「とで」に同じ。「行くとな行かんとな・行かつさんとな・来らつさんとな」。

となか〔名〕わだ中。沖中。「沖のとなかに舟ん（の・ぬ）をる」。

どなし〔形動〕物忘れの強いさま。「ひでーどなしになったもん・どが無か」などと用いる。

とんだ〔名〕戸籠。

となり〔名〕「たに（講中・組）の中でも特に親しく平素からつき合っている家を他家と区別して「となり」と呼ぶ。又両家で共有共用している「もやい井戸・つるかわ」を持つ場合等も互に「となり」と呼び合った。

となりさと〔名〕隣近所。付近の家。

どにし〔代〕どの土。どの人。「どぬおかた・どぬかた・どぬわれ・どのしと・どるわし・どんなに（だれ）」等使分け用いた。「どぬ（どの・どの人）」。

とぬ〔助〕だが。「兄貴や惻口者とぬ弟あやをいかん」。

とのほがい〔名〕神楽舞の名。殿祝粥。幣納といい、鈴2個を持ち本地舞・中扇子・末乱れ舞と続く。酒祝粥に続く舞で「つきちょうし」ともいう。

どのみち〔副〕どうせ。「どのみち暮れた日たあえ、急えだ

ちゅうち…」。

とばい〔名〕くさばけ。土梅の意か。ばら科の草本。「ごしょばな」に同。

とばこつ〔名〕ほけて辻褄合わぬ言。もうろくしてする言行。「とばごつ・とばやごつ・とばこと」も同じ。

とばしこむ〔動〕落ち込む。とびこむ。「めとんば廻えち、とばしこむなよ（とばしこますなよ）」。

とばす〔動〕(1)灯す。とぼす。「ともす」の転訛。光をとばす(投射する)。灯火・灯光をさしつけて物を見せる(光をとばせ)。「提灯とばす(せ)」。(2)放尿する。「縁かるとばす(せ)」。

とばとば〔形動〕前後の考えもなしにしゃべり散らすこと。「とばとば言うもんじゃなか」。

とばや〔形動〕ぼんやりして気の抜けたさま。「とばやぬ(の)ごつなつた(なつちよらす)・とばやごつばっかり言いをらすとちゅうばな」。

とびて〔名〕聖母神社祭礼舟ぐる(舟競漕)に、対岸へ着船と同時に陸へ跳び上り、幣をとり勝負を決める役目の若者。

とびやらく〔動〕飛び廻る。「へー(蠅)んとびやらく」。

とひょーむなか〔副〕とんでもない。とてつもない。

どぶざけ〔名〕どぶろく。濁り酒。

どぶつく〔形〕泥土がどぶどぶぬかるさま。

とぶとぶ〔副〕足元を気にせず無頓着に動き廻るさま。

どぶどぶ〔副〕水中・泥土中をどンドン踏み動き渡るさま。

とぶらう〔動〕関連する。辿る。経巡る。「とぼらう」ともいう。

どぶる〔動〕踏み混ぜる。踏みこねる。「こたぐる・こたぶる」も同じ。

どぶんどぶん〔副〕水中に物の落ち込むさま。「どぼんどぼん・とぼんとぼん・とぼんとぼん」も同じ。

どべ〔名〕どろどろの泥土。泥。

どへー〔名〕土塀。どべい。牛舎の壁は二方又は三方を土で厚く塗り上げて作るのを常とした。「すさわら」を切り込み土と混ぜこねあげた土を築き上げ厚さ一尺以上の土壁にした。

どへーあげ〔名〕精選した土に切り藁を混ぜつなぎにし練り上げた土を大きめに丸めて次々に叩きつけ積み上げ両面は長刀状の道具で切り整えながら土塀を作り上げるのをいう。「どへー切る・きりどへー」ともいう。

どべつく〔形〕どべどべした状態。

どべどべ〔副〕ぬかったべとべと状。「どべる・いどる(沈没状)」も同じ。

とほ〔副〕 ぼんやりして気の抜けた状態。「とほ状になるを(とほくる)」。

とほーくちもなか〔形動〕 法外なさま。常識はずれ。途方もない。「とほーとてつものなか・とほーむの一」などともいう。

とほくる〔名〕 (1) 物事の道理や感覚が薄れたり失われてぼんやりとなる。年老いたり病気によりほける。もうろくする。「とほけやらく(ほけて放浪)・とほける・とほけださず(ださした)」等もうろく状となることさまざま。(2) 意識的にそ知らぬ振りをする。とほけた様子で対応する。気付かぬ振りをする。

とほし〔名〕 (1) 藁・麦稈・ときわ等を用いて各種としゃく類の雨覆いとして屋根形や漏斗状に作り被せたもの。(2) 灯火笠。漏斗状に組んだ竹の骨に紙を貼り油を塗って桶の中に点した灯火にかぶせる笠。多くは漁師作業上の照明具として使用された。

とぼす〔動〕 灯す。「とばす」(1)に同じ。

とぼらう〔動〕 関連する。辿る。「とぶらう」に同じ。「戦とぼらうち手の腫れた(戦・ひび、あかぎれが関連し合い寒さで皮膚が破れ腫れた)」。

とまりばと〔名〕 (1) 夕方時に就く鳩。狩猟用語。(2) 小児が睡気がさしてふらふらするさま

を「とまりばとが来た」などと用いる。

とまりもどり〔名〕 泊り帰り。初泊りともいい、婚礼から1か月位のうちの適当日、嫁がひとりで生家に戻り一泊する慣わし。

とまりやど〔名〕 青年男女の遊び宿。

どみく〔動〕 声高に話し騒ぐこと。どよめく。「どめく」ともいう。

とむ〔助〕 とも。「いつとむの一来る人間じゃねえ」。

どむ〔助〕 (1) でも。なりと。にても。「酒どむ呑もうか・本どむ読みおれ」。(2) 複数を示す。ども。たち。「あれどむ(共)・これどむ(達)」。

とめー〔副〕 共に。ぐるみ。「箱とめーあげます・袋とめーよござりますけんで…」。

どめきごえ〔名〕 どよめきの声。「どめきごえんしをととぬ、ねえどつじゃろーか(何事ならん)」。

どめきどーり〔副〕 声高に談笑しながら通るさま。「どめきどーりしち戻っち来た」。

ともおし〔名〕 船の「ともろ」を漕ぐ人。船頭の次の位の者が当る。帆船では舵を執る者。船頭の相談相手。

ともすぎいし〔名〕 屋根庇から落ちる雨垂れ線上に厚さ1寸5分幅1尺の石を敷き並べ、土の流出を防いだ。この雨垂れ下の敷石をいう。麦稈屋根

と

に樋を付ける習慣は殆んど無かった。海岸から拾った石や平戸石なども並べ「ともすぎいし」にしたが、何年かに一度は土を搬入して突き固め軒下や「ほかぐる」の土の流失の回復に心掛けて来た。

ともぬま〔名〕 鱸の間。「ともおし」の居間。「とこ」と「みなおり」の間の間。

ともろ〔名〕 船の鱸にたてる鱸。「ともおし」が専ら清く鱸。

どや〔副〕 量が多く集積するさま。「どやうつ」という。「鱸が大漁、どやうった」。

どやす〔動〕 威嚇する。いじめる。いためつける。なぐる。「どやすぞ」。

どやらむなか〔副〕 うっかりしているさま。「どやら一んに(うっかりと、ぼんやりとしている)」も同じ。「どやら一んに聞いちよつたりゃ」「どーやらん・どやらん」等も同じ。

どよぎょー〔名〕 土用経。夏の土用に邪気を払う為、「しのんば・ゆり」に祭壇を設け、琵琶を弾き祈禱をしてもらうこと。「ゆり」参照。

どよーぼし〔名〕 夏の土用中に麦を日干しする。どよぼし。「つづぼし」参照。麦だけでなく、食品・衣類・家具・畳等の土用干しは大事な手入れ作業である。

どうようふじ〔名〕 のうぜんかずら。

とらし〔動〕 油をたらしして海面を澄まし、海中のものを獲る漁法。

とらす〔動〕 押え込む。打つ。叩く。「とらすぞー・とらするぞー」などと相手を威嚇する。「くらする」に同じ。

とらする〔動〕 載せる。押えつける。「重石とらする・石とらする・とらせちよけ」などと用いる。

とり〔接頭〕 強意のはたらき。「とり失う・とり忘る(すっかり・全くの意として)」。

どり〔代〕 どれ。「どりでむ良かつ取れ」〔名〕 鳥類の肺臓。「とりは食うてむ、どりゃ食うな」。

とりあぐる〔動〕 出産を助けること。

とりあげうば〔名〕 産婆。助産婦。「こずえーうば」ともいう。

とりおき〔名〕 死者の納棺。葬送。

とりけ〔名〕 鳥気。沖の海上に鷗などの海鳥の群がること。「とりけ」のあるところ、魚群あり。

とりけとる〔動〕 言質をとり対者を責める。「とりけとっちはるかく」。「いんねんつくる」に似る。

とりごえやしき〔名〕 鳥越屋敷。谷の上部の屋敷で諸鳥飛び越えとび交う道筋に当る。「たにがしら」ともいう。昔は仕合せ(幸)よい屋敷ではな

いとされて来たと。

とりこなす〔動〕自分の物としてしまう。盗みとりおぼす。「とりこなしや得んさ」。

とりざかな〔名〕(1)祝事の神酒に付ける。三方に半紙を敷き昆布と鰯を刻み、梅干と共に三所に盛る。勝栗を添えることもある。(2)酒席の中央に酒宴盆や鉢台を置き、酒肴を盛り並べ酒客に供応する料理品。相伴人が客にはさみ、客相互の献酬にも用いる。「くちとり」ともいう。

とりたたる〔動〕堆積する。持ちかける。

とりつきは〔動〕口さしはさむ機会。「とりつきはがなか」。

とりとばす〔形〕機会や利益を失う。「時間とりとばす」。失言する。うっかり秘密的なことを洩す。「うっかりとりとべた」。

とりもつ〔動〕もてなす。紹介する。仲介する。

とりわけ〔動〕收穫物を折半する。「とりわけえする」。

とる〔動〕する。「てやましとる(てこずる)・よとぼしする(仕事の終りが夜にかかる・としゃくとる(うず高く積みあげられる))」。

とるとる〔副〕(1)緩やかな勾配の坂道を足速に下るさま。「あぬ坂ば、とるとるっち下ったぎりいぢきですけん」。(2)火が静かに不断にとるとろ燃えるさま。(3)脂でつるつるして掴

み難いさま。

どれむかむ〔副〕どれもこれも。すべて。「どれむかむ腐っちしもうちよる」。「どれむかれむ」も同じ。

とれめ〔名〕收穫量。穫れだか。

どろーじん〔名〕田畑・作物の神。「いかなる神なるか知らずも、忌の日に祀る」と言われ祭られてきた。

どろくさび〔名〕旧暦5～6月の海の濁った頃によく釣れるくさび(べら)。この頃がこの魚の最漁期と。

どろにし〔名〕春先から吹く湿っぽい黄砂を混じえた西風。「さがりにし」ともいう。「かつれにし・すばりにし」に同じ。

とわたし〔名〕肛門と陰部の間の名。

とわん〔動〕屈かない。敵わない。叶わない。応じ切れない。「背がとわん・いくら有ったち金んとわん」。「とう(屈く)」参照。

とをる〔動〕取り入れる。「とをる・とをれる」などと用いる。

とん〔名〕子どものかくれんぼ遊び。見付かった子は「とん」と鬼に指される。鬼に探される前に誰かに陣をとられると鬼は再度鬼役を。最初に「とん」された子が次の鬼に等々。「とんしゅうや」〔助・接〕だが。のだが。「走っち行かしたつとん、聞合わしたじゃろー

と

か」。

どん〔接尾〕さん。やん。(1)軽い敬意で「^{おやなつ}兄どんな・親父どんな」。(2)解悔の意を含み名に付けて「佐助どん・伝七どん」往昔の百姓に対する名残りて姓には付けぬ。〔接頭〕意義の強調に「どん腹・どんがめ・どんじり・どん詰り」等々。〔名〕巖。

どんか〔形〕鈍い。鈍か。

どんがめ〔名〕大きな亀。大甕。大酒豪。肴がめ。

とんから〔接〕ところが。であるが。だがしかし。

とんきゅー〔名〕烏賊の一種。しどいかの一種という者もあると。

とんきょーづら〔名〕驚きびっくり、きょとんとした顔つき。

どんざり〔名〕糞。特に野糞をさして用いた。「どんざりの掘っちょるぞ」。「たいほう」とも言ってきた。

とんぎん〔名〕物の先端。頂。てっぺん。「山のとんぎんぎん」とも。

どんぐらまぜ〔動〕大騒動。大混乱。「どぐらまぜ」ともいう。

どんぐり〔名〕漁具おもり。釣糸に付ける鉛の錘り。「どんぶり」ということが多い。

どんくわち〔名〕どんくお。どんこ。はぜ科の魚名。

どんぐわんずっぱり〔副〕物事のきりが付かないさま。

どんくわんとんくわん〔名〕葬儀葬式。小児語として用いることが多い。

どんぐわんどんぐわん〔形〕物音の騒擾しいさま。

とんころ〔形〕着物を着た俢寝る。

とんころとんころ〔形〕物の転がるさま。

どんざ〔名〕どてら着物。裏表なく重ね縫いし密に刺して仕上げる。仕事着・防寒着としても重宝。

どんざびき〔名〕つち蛙。蛙の一種。

とんすい〔名〕さじ。

どんぢゅーどこそこ〔名〕何某の何何という所。

とんと〔副〕全く。一向に。遂に。

とんとな〔副〕全くもって。ほんとに。まぎれもなく。

とんどりぼんどり〔副〕ぼつぼつ。ゆるゆる。「とんどりぼんどり一人戻ろうか」。

とんとんござ〔名〕死者を棺に納める時の座。「やまござ」ともいう。

とんのうま〔名〕蟾蜍。かまきり。「ほとけぬ(ん)うま」ともいう。

どんばら〔名〕腹。肥満・妊婦の大きな腹。「どん腹掘っちょる・どん腹かかえちよる(ちよらす)」。

とんぴだこ〔名〕虱の一種。骨を十字に組み四周に糸を張り、紙を貼り絵を画いて揚げる。

「はた・長崎とんび」ともいう。

とんびん〔名〕軽率。ひょうきん。おだてに乗る。「とんびんかん・とんびんしゃん・のぼせもん・びん」も同じ。「とんびんかんづく・ひよろきんづく・とんびんづく」等々。

とんぼ〔動〕尻高にして前屈する。「とんぼする(するなよ)・もーする(牛の寝姿勢に入る形)・欲すりゃとんぼする・日とんぼ廻す・鼻とんぼ」。

な

な〔助〕(1)何ですって。反問。「な、何ですな」。(2)は。「碗な有るばって箸や無か」。

な一〔感〕はい。同輩・目上に対する応諾のことば。「な一い・うんな一・うんな一い」。「な一い」も同じ。

な一いえ〔助〕ことだろう。ことよ。「どーゆー腹ん立つ事ちゆーな一いえ」。「な一え」も同じ。

な一にも〔副〕何んにも。全部。残らず。「机ん上人物あな一にも持つち来ちおくれ」。「な一んも」も同じ。

な一もし〔助〕(1)ねえあなた。念を押す気持。「そーでつしょーが、な一もし」。「なも・なもし」も同じ。(2)ですか。でしうか。やゝ反問的。「こん魚

^{す・(し)}
あ 好 いちおいずるな一もし」。

な一んか〔形〕長い。長か。「な一んか魚」。「なんか・なあ一んか」も同。(副)何か。「な一んか食うもな無かる一か」。

ない〔感〕はい。応諾語には「な一・な一い・ないない・んな・んな一・んない」等々。

ない一え〔感〕いいえ。否定打消しとして「ないいえ・ないえ(ない、いいえ・くはいと軽く受けた後で否定する壱州人の被支配者型島民性か)」。

ないえりぐいえり〔形動〕病弱で起居さばさばすつきりしないさま。「此頃あないえりぐいえりしちよりまつるとですばな」。

なうたけ〔名〕菜畑。「なぶたけ」に同じ。

なえる〔形〕疲れる。弱る。

なおす〔動〕片付ける。収める。しもう。格納する。しまい込む。

なおる〔動〕(1)座を移す。坐る。居場を移す。「どうぞおなおりませ」。(2)月越す。転居する。「家をなおる・屋敷をなおる」。「なをる」も同じ。

なかいれ〔名〕中休み。休憩。「ここいらでなかいれしゅーか」。

ながさきとんび〔名〕とんびだこ。

なかざし〔名〕地割制度用語。上田と組み合せる中田をいう。中指し。

な

ながさび〔名〕ぎんあなご。魚名。

なかしろ〔名〕「あらぐれ」から「しろ」「田植え」までの間に田を耕す作業。牛に犁を曳かせると土は左側に起き倒れて行く。犁く方向を変えたり交互に犁いたり、馬鍬をかけたりして土を砕き土面を平にする中間の耕耘作業をいう。

なかすどー〔名〕真中通り。中央通。

なかだちおや〔名〕結婚取り決め仲介役をいう。「なかだちにん」に同。

なかづり〔名〕鮪網漁具。あば縄に網を吊す「ちなわ」と「ちなわ」の中間を吊る縄紐。

なかく〔名〕(1)兄弟姉妹の中間の者。(2)作物の中生種。

なかどーろあげ〔名〕旧盆18日に特別に仏記りを行なう。この日をいう。「なかどーろーあげ」も同じ。

なかなけ〔副〕いっそ。なかなか。「なかなか今夜は泊っち明日お帰るな」。

なかなし〔名〕なけなし。他に有りもしないもの。ほんの少ししかないものを。

なかぬくち〔名〕農家の表の入口の部屋。「よりつき」ともいう。

なかぬま〔名〕(1)巾の間。なかんま。「よりつき」と「ぎしき」の間の部屋。(2)船の「わきのま」「こま」ともいう。船の「かつせき」の間。ここに「ひや

ま」を置く。

ながのー〔名〕延べ縄漁。漁法の名。

ながぼかけ〔名〕丸鬘。女性髪型名。

ながむし〔名〕蛇類一般の忌み詞。

なかゆるり〔名〕昔は各家に囲炉裏が造られていた。部屋に造られた「いろり」をいう。

なから〔名〕物事・物の量の半分程度の状態をいう。五分通り。五合目。

ながる〔副〕ながら。乍ら。「居ながら旅しおるごたるばい」。

なきびす〔名〕泣き虫。めそめそ泣きする児。すぐ泣く児。

なきわ〔名〕桶類にはめる一番下(底部)の輪(たが)。

なく〔動〕桶類の輪(たが)が切れること。逆に子供が泣く事を「輪が切れる・輪の切れた」という。泣くが「なく」に通じて。

なぐる〔形〕和らぐ。おさまる。「どーしてむ腹ん立ちのなぐれん(おさまらぬ)」。

なぐるる〔動〕流浪する。落ちぶれる。流れる。「なぐれる」も同じ。「なぐれ者(もん)・不良な流浪者」。

なけー〔名〕田畑の畔畔に付属する草生地。

なげうち〔動〕怒って物を投げける事。

なげもいえー〔名〕投げもやい。捕鯨の折、網船は2艘ずつ3組から成り、その2艘が

互いに接近し合うとき相手船に綱を投げ引っ張り寄せ合うこと。捕鯨用語。

なご〔名〕名子。庄屋の触使役。使丁。用務員。小使役。

なごし〔名〕夏越し。旧暦6月29日は1年前半歳の最後の日。農家は業を休み井戸を浚え、牛や農耕具を洗い、田畑・水の神を祭る。この日一日は河童も出ない、子供は水辺で遊ぶ。何がしかの馳走も作る。丁度盆月に入る日、秋から冬への1年後半への準備期。味噌や醤油をはじめ家庭生活見直しの大事な一日であった。「なごーせ」ともいった。

なごねがや〔名〕麦稗屋根の棟に高く巻き付け、体裁を整え雨の浸入を防ぐ為、藁を横に長く寝せて用いる。

なごや〔名〕海辺の岩石に付着して生え糸の如く細長の海藻。「ふのり」の代用とし、「したのり・ながむかで」ともいう。むかでのり科の海藻。

なごり〔名〕余波。「嵐のなごり・喧嘩のなごり」。

なさり〔動〕為す。なさい。なさる。「おいけ（鰐い・寝る）なさりまっせ」。「なされ・なされまっせ」。丁重語。

なし〔副〕何故。なぜ。「なしそえん（そんな）事ばかり言う」と。

なしからちゅーと〔接続〕何故かと言え。なぜか（なしか）。結局。「なしからちゅーに」

も同じ。

なじる〔動〕永患いすること。一進一退の病状の続くさま。

なすくる〔動〕なすりつける。塗り付ける。「墨なすくる・白粉なすくる」。「なすりやり・なすりつく・なすりやらく」など同じ。

なずてむなか〔副〕相手をないがしろにする言行。「然うなずてむなかこつ言うもんじゃなか」。

なざる〔動〕撫でる。

なだ〔名〕海。沖。灘。「なだ渡っち来ました」。

なたきりむし〔名〕こめつきむし。叩頭虫科全体に用いる名。叩頭の度に鉋で木を伐るに似た音を出すによる名と。

なだずり〔動〕途中順次幾度も立寄り乍ら行く（来る）こと。「なだずりしち戻っち来たばな」。

なついか〔名〕烏賊の一種。「こぶと」ともいう。夏季に入り獲れだす。

なっか〔動〕泣くか。「なしなっか（なぜ泣くのか）」。

なつがん〔名〕あをさぎ。鳥。**なづけする**〔名〕名付けする。結婚の約定・取り決めをする。

なっせ〔助〕なさいませ。ください。「お取りなっせ」。

なつて〔名〕形ばかりのもの（事）。真似事。格好。形。模倣。謙遜遠慮気味に「祝事いわいことのなつてしましたっす（形ば

な

かりの祝事を…)」等に用いることが多い。「なつてー」も同じ。

なつと〔助〕なりと。でも。「お菓子なつとおとりまっせ」。

なつぶれめー〔名〕夏振舞。
農家では夏季に屋根葺きをし、その機会に親戚や親しい隣人に、馳走を作り送り届けた。これを「なつぶれめー」という。「なつぶれめ・なつぶれめえー」も同じ。

なでうす〔名〕木製の搗臼。大臼。「なでぎね」を用いて搗く。

なでうつ〔名〕著名。定評がある。「なでうつ良か男」。

なでぎね〔名〕柄を取り付けた杵。手杵に対する語。「てぎね」参照。

ななー〔助〕なーな。なあな。「知らんとななー」。

ななしのずんだれ〔名〕だらしのない児や姓名不詳の折、又は罵り卑めていうことば。

ななつきご〔名〕妊娠7か月で出生した児は育つが、8か月で出生した児（やつきご）は育ちにくいと言われる。母体内での胎児の位置の違いによるものとか。

ななはたぎもん〔名〕七機着物。七種類の布を縫い合わせて作る。6か月前に歯が生える児は「おにご」。知恵入り早く、はきはきとして足が強く獣のようだともいい、魔除けのため「ななはたぎもん」を

着せたと。

ななひろもん〔名〕背美鯨の一本ものの称。是を標準として各種鯨の品格を定めた。七尋は12～13米程。

なにけー〔感〕何か。「なによー」もほぼ同様「何を・何か」に用いる。

なにとむのー〔副〕どんな物でもよいでは承知出来かねる場合に用いる。何でも彼でも適当に(では不可)。「なにとむのー食するなよ」。

なにばしのここれ〔副〕余程の事のような気持で。余程の事でもあるかのように。たいした事もないのに。「なにばしのここれ、お暇どりましたち(何程の馳走もできませんでしたのに態々お出で下さいまして…)」。

なのり〔名〕勝名乗り。角力での賞金・賞品受け。

なのりあう〔名〕逢引き。「前なるなのりあうちよらした」。

なば〔名〕きのこ類の総称。「なばん生えちよる」。

なばくわす〔動〕だます。「なまくわす・だまかす・だまくわす・だまくらかす」等同じ。

なはり〔助〕なさい。せよ。「行きなはり・米なはり」。「なはれ」も同。

なはる〔助〕なさる。なされる。親愛の情をこめて、「遊びい米なはる」。

なぶたけ〔名〕菜畑。各戸の前面に一枚の大きめの畑を配し、

野菜や日常生活用の緑深い作物を主作した。「なうたけ・まえばつけ・まえばた」とも言う。地害制度関係。

なべすけ〔名〕鍋敷。釜敷。

なべとり〔名〕藁で草履型を2個編み繋げて鍋の耳に当がい掛け降しに用いた。

なまここぎ〔名〕海鼠漕ぎ。海鼠漁。縄網を竹枠に取付け、船で海底を曳き廻る漁法。

なみだあざ〔名〕目の下のほくろ。このほくろのある人は涙もろいとか。

なむ〔動〕食う。食べる。〔生魚なむ(刺身食べる)〕。「なむる」も同じ。〔鰯なむる(鰯の刺身を食う)〕。

なめくじ〔名〕鰻牛のこと。「なめくじ」と言ってしまうと。

なめくる〔動〕舐め廻す。「なめくりまわす」ともいう。

なめなめ〔形〕(1)ぬめぬめ。(2)言葉つきがやさしく軟らかさの中に、いやらしさの感じられるさま。

なめら〔形動〕優柔にして図々しい。「なめらづく(づくな)・なめらごつぱっかり言う(言うな)」。

なめらしか〔形〕滑らか。すべすべするさま。

なめる〔動〕食べる。「なむ・なむる」に同じ。

なも〔助〕言葉の終りに付き軽い確認・念押し・問いを表わす。ですか。でしょうがね。

「なもし・なあもし」などと共に終りにやさしく付け加えられ、ていねいに用いられる。
なよ〔助〕否定命令。語尾に付く。「米らすなよ・行きどむさすなよ」。

ならし〔名〕細竹を程よい長さに切り、両端を紐で吊し衣服類を掛けるようにしたもの。

ならべむくらべむなか〔副〕比類なき。ならびなきすぐれもの。

なりき〔名〕成り木。果樹一般。

なりきり〔形動〕そのままの状態。「起けたなりきり出ち行た・着たなりきりい寝ちしもうた」。

なりくだもん〔名〕果物一般。

なりこ〔名〕風態。なれの果て。対者を罵り哀れみ賤しむ折の発語。「人ん言うこつば間かんけん、なりこ」。「なりこん果て・ざま・ざまみろ・なるこ・なるこんはて」も同様。

なりつく〔動〕保障される。決まったようなもの。

なりと一〔名〕果実の枝につくところ。「つーと一」ともいう。

なりなりふーで〔副〕成り放題。一切構わない状態。「なりなりふーでなろーだい」。

なりもふーむなか〔副〕恰好も体裁も構わない。

なるかす〔動〕教える。「なるかすばって、人にや言うな」。「なるかす」も同じ。「なるか

な

せ・なろかせ（教えろ）」も同類の用語。

なるへそ〔副〕成る程。

なれち〔名〕習慣。くせ。「なれちいなつちよる」。馴れっこに。

なれなれ〔名〕成れなれ。正月14日の行事。正月7日の夜に立てた「たらの木」を一尺位の長さに切り、皮を削り、螺旋線（旋）を画き、「みいーれみいーれ（増えよ殖えよ）」と唱えつつ、金箱や俵物や果樹の幹を叩いて廻り、家の門口や神前にも立て供える棒。「みいーれみいーれ・じょーめ・ぼーせんぼー」ともいう。「なれなれ」は果実や実が成り、金品財貨が増え繁栄繁殖を願う呪術的行事。「みーる・みーれ・みいーれみいーれ・ぼーせんぼー」等参照。

なわかまする〔動〕「にえいゆのまする」に同じ。煮え湯吞まする。

なわす〔動〕入れる。しまう。格納する。片付ける。「本なわす・筆子に^{筆子}なわす」。

なんか〔形〕長い。長か。「なんちなんか橋じゃろうか」「なーんか」同。

なんかかる〔動〕もたれかかる。寄りかかる。

なんがり〔助〕しながら。途中ずーっと。だらり状態が継続するさま。「こっかるなんがりおいでまっせ（ここから先へずっとお進み下さい）」。

なんぎ〔副〕何の気。何んとなく。「なんぎなしの出来ちよつた」。

なんぎー〔名〕一厘錢を投げ二錢銅貨を狙い打ち取る博奕の類の正月遊。

なんこ〔名〕酒席で、小石又は箸を小さく折ったものを数個持ち、手早く両手に握り分け相手に数を当てさせる。負けた者に罰盃を課す遊び。「荷個：1個とか2個とか」対者答。

なんごら〔形動〕なごやか。おだやか。「なんごらした良か口いなりましち」。

なんち〔感〕何んですって。何ですか。反問に用いる。「なんちけー・なんちち・なんちでー・なんちなー・なんでー・なんなー」相手や状況や場に応じて使い分ける。

なんちゅう〔副〕何んという。「なんちゅう美しか（きさなか）もんで」。

なんちゅうなあな〔副〕何んと言ったらよいのか。どう言えばよいのか。内実が不詳不明よくわからないさま。

なんでんかんでん〔副〕どんなこと（もの）でも見さかいなく。どうしても。全て。どうあっても。無理してでも。とも角ごつそり。

なんど〔名〕農家の座敷奥の裏部屋。家具衣類置場の外寢室でもある。「うらや」とも呼ぶ。

なんとむしれん〔形動〕とんでもない。心外な。

なんともこけん〔形動〕何んともいえぬ。「こけん・こく(告)：告げる」立派なことだ(時には嘲弄の意で)。

なんのくそぬぼつ〔感〕罵り拒否するに用いる。糞くらへ。馬鹿野郎が。無能の意に「なんのくそほついわならん(役立たずが)」。『なんのくそ』も略同義(そんなことはないさ)。

なんのぐわんじゃりいる〔副〕罵りながら、何の用事(為すこと)があるというのだろうか。何の関係(かかわり)があるというのか。「頼みもされん事ば、なんのぐわんじゃりいる、ごくろうなこつ」。

なんのじょー〔副〕案の定。思わぬことではない。思惑通りに。果たして。「なんのじょー負けつろーが」。

なんのぼつ〔感〕「なんのくそぬぼつ」に同じ。

なんのもののばちかぶってるい〔形動〕何の因果によるというのだろうか。何物(者)の罰を蒙ったというのか。

なんば〔名〕黴毒。

なんもかんも〔副〕何も彼も。全て。みんな。「ごつとり・ごろごつとり」等の意もある。

に

に〔名〕煮又は煮汁にじと言ひ、飯の折二の膳に付く吸物・汁物料理の名。吉凶共に客席の食膳に付く。

にーあげ〔名〕縫い上げ。ぬいあげ。着物の丈を合わせる調整のため、腰や肩付近を縫い込む法。「にーやげ・にーあげ・にやげ・肩にーあげ」。

にーじん〔名〕人蔘。野菜名。

にあれー〔名〕餅や団子につける餡。煮あん。「あれ・あれー」も同じ。

にいえゆのまする〔動〕進退の自由を制するため急所を衝いたひと言をいっておくこと。「なわかまする」。

にが〔接頭〕小さいの意を表わす語。「にが竹(女竹)・にが榮螺にがい・にが鮎にが」。にがさずえー(榮螺特有の角の未発達のもの・極小さざえ)。

にがしろ〔名〕発赤膿をもつ腫物。「にがと・にがとー・ねぶと」も同。

にがたけ〔名〕女竹。なよ竹。山竹。のべ竹。篠竹。細竹の種類名。

にがふな〔名〕鮎の一種。かわたなご。まふなに対する語でもある。

にき〔名〕そば。側。傍。「ねき」。

にきゅー〔名〕二刀。神楽舞の名。採物は弓、2人の本地舞。昔は六將軍と呼んでいた神楽と。

にぎりぎんたま〔名〕けちん坊。ひどく物惜しりする者。
吝嗇家。

にぎりだご〔名〕片手で指の形をつけたまゝ握り固めて熱湯でゆで上げ、外鎧をつけて食べる。

にくさと〔副〕折悪しく。生憎。「今、にくさと主人が出違うちよりました…」。

にくじゅー〔副〕対象が嫌うことをわざと言ったりしたりする。他人を嫌がらせる言行。「にくじゅーする」。

にくみ〔名〕にきび。

にけん〔名〕二剣。剣を持って一人で舞う神楽。昔は二天といったと。

にしたり〔感〕全く何もない。「しったり・すったり・にしたわさり」等同義語もある。

にしのおとし〔名〕強い西風。これに遭うと漁船も危く、「やまぜのかわし」とも呼び恐れられている。

にしみな〔名〕「にし」も「みな」も貝・蛸を表わす語。「甘にし・辛にし（食べる時の味に甘辛）」がある。

にしむけひがしむけ〔名〕諸種の虫の蛹は体を左右に振り動かしてひょこひょこ動く。児童はこれを遊びに使って動きの度に「西向け東向け」と声

を掛けた。

にしめ〔名〕種々の魚菜を味付け煮上げ、切って器に盛り宴席に出す。祝宴のを「ひろぶた」という。「ひろぶた人蔘後残り」と言い、後残りする物（者）への警告。何故か「ひろぶた」に盛られた人蔘が食われず最後まで居残ることが多いとか。

にじる〔動〕床や物に身をすりつけながら動くこと。ずりくる。なすりつける。塗りつける。

にしんとり〔形動〕復讐的な言行。「にしんとりされた」。

にしんな〔名〕血族の。じっしな。真実の。「にしんな兄弟（姉妹・兄妹・姉弟）」。

にぜえー〔名〕煮菜。葬儀・仏事の野菜料理の煮物を「にぜえー・にぜえー・にぜえー」と呼んでいる。

にせえご〔名〕普通仔牛は「べんこ・ちょんこ・おべ」、牝牛は「うの一」、牡牛は「こつて一」と呼ぶが、生後2歳牛を「にせえご」、3歳牛を「さんぜえご」と呼びわける。牛の売買取引（牛市）で意味をもつ。今年生まれの牛の仔は「とーねご（当年仔）」という。

にだんがき〔名〕新墓の周囲には、生竹で横に2段の竹垣を作り付ける。平素は2段を忌み奇数段にする慣わしである。「おりかけ」ともいう。

にちを〔形〕顔が赤くなってほ

てること。「面^{つら}んにちをになる
(なっちょる)」。

にっちらつ〔副〕充分加熱する
こと。「にっちらつ、湯たぎら
かす・にっちらつ日の照りで
一た」。

につつきろしか〔副〕巨大な
もの。太く気味の悪い感のあ
るものにいう。「につつきろし
か目付きしちよる・につつき
ろしか蛇^{ながへし}のをった」。

にってんぐわつてん〔名〕太
陽に月。

にっばーろっばー〔副〕あて
どもなく方々を歩き廻るさま。
日^{いちにち}がな一日にっばーろっばー
たわしやれ一た」。

にてん〔名〕二剣の神楽舞に同
じ。

にのいる〔動・形〕(1)積荷す
る。(2)積荷で船の吃水が深く
なっている。(3)人が充分馳走
にあい食べ込むこと。

にねー〔助数〕担い。棒で物を
担いだ回数。「ひとにねー(一
担い)・ふたにねー(二担い)」
等々。主として括ったり、束
ねたりした物に用いる。桶入
り・籠入りの物は「荷」を用
い、一荷・二荷・三荷と数え
る。

にねえーぼう〔名〕担い棒。
天秤棒。六尺(棒)。「にねぼ
う」も同じ。

にねて〔名〕担い手。担う人。

にねんごもち〔名〕二年子持
ち(つれ)。捕鯨用語。二年子
を連れた親鯨は肉痩せ脂肪減

じ、商品価値大いに劣る鯨。
これに対し「しらこもち」は
上鯨。

にはんなこつ〔名〕二枚舌。
急に前言をひるがえすこと。
「そげんにはんなこつ言うち
もろうちゃ困る」。

にばんぐんち〔名〕旧暦では
一か月を普通29日間とし、30
日間ある月を「ぬび(延び)
のある」(月)という。この30
日目を「二番九日」という。

にばんぜえ〔名〕二番添い
(妻)。後妻。「にばんぞい」と
もいう。

にびる〔動〕延びる。延滞す
る。遅れる。「牛の産がにび
る・にびり牛の夜ごって一」。
「貸しのにびっち困る」。

にぶたし〔名〕煮浸し。大平釜
(大鍋)に大きな鮮魚の内臓を
抜き、尾鰭胸鰭等を張り、形
をこわさないように煮上げ、
大平鉢に盛り葛や卵黄の粉末
状のものを振りかけ飾って宴
席に出す。宴後段に入り相伴
人頭を見計らい客にほぐして
はさむ(配る)。宴席間もなく
お開き合図ともなる。

にやく〔名〕脈搏。みやく。「に
やくとる」転じて一般事象で
余地余命の意に用い、「にやく
のある(なか)」等と用いる。

にやらん〔動〕(1)ならん。(2)煮
えない。

にやる〔動〕煮える。「いだ
る」。

にやをん〔名〕猫。「にやをん

に

の来るよー(小児用語)。「にゃおん」も同。

にゅー(動)寝よう。「もうにゅーか」。

にゅーし〔名〕舟船のみよし。舳。

にゅーじ〔名〕虹。

にょーじょーげえー〔名〕やくしまだら貝の類。宝貝科。

「ぼばげえー」ともいう。

にょーにょー〔名〕お唱え。

お経。「にょーにょーいう(神仏を拜む)・にょーにょーさー(神様・仏様)・にょーにょーくわんじょー(くわんにょー)」は共にお唱え、お経に同じ。

によこによこ〔副〕嬌小な者の急ぎちょこちょこ歩きするさま。「によこによこしちやつち来た」。

にる〔助〕やら。「白にる黒にる分らん」。「いる・いろ・える・にろ」に同じ。「どうにろ、こうにろ済んだばな」。

にわ〔名〕農家住い家屋内土間の部分の名。外庭は「ほか・ほかぐる・そと」と呼ぶ。

にわあげ〔名〕作物の収納祝い。夏の畑作物の収納祝は、田植え後の「さなぶり」と兼ねて行ない、秋の稲の収穫後には「だいこくあげ・でーこくあげ」として共に作物の「にわあげ」を祝ってきた。

にわうし〔名〕大黒柱から「をとしのはしら」に渡される梁をいう。家屋新築祝いの折、

ここに鍋を吊して「かいぼげー」の粥を炊く。また「にわうし」には大黒柱の方に角があるとツノ言われていて、鞍も大黒柱の方に向けて掛ける。従って材料梁の本末の方向も決まっている訳である。

にわくど〔名〕家の内庭の土間に造った竈。平素はこの上に荒神様を祀る神棚があり「かざりくど」ともいう。

にわちよー〔名〕庭帳。上納を記録する庄屋の帳簿の一つ。本帳簿に記録することで唯一上納済み証となり領収証の交付もされなかったと。

にわもち〔名〕屋内の土間には人の出入りにより次第自然に土が持ち込まれ、踏み固められて瘤状の凸起物となる。これを「にわもち(庭餅)」という。是の生ずるのを吉相と。

にんにく〔名〕きけまん。みやまきけまん。きすみれ。けし科の植物。

ぬ

ぬ〔助〕の。「此ぬ犬・酒ぬ呑みたか」。

ぬーなし〔名〕能無し。精神の確固たらざる様。「太かばつかしぬーなし」。

ぬいやげ〔名〕着物の縫いあげ。「にーあげ・にーやげ」に同じ。

ぬかす〔動〕言う。荒い言い。
「何をぬかす」。

ぬかぬすみ〔名〕「ぬかわぬすみ」に同じ。参照。

ぬかぶく〔形〕糠埃り。ぶくは埃。「ぬかぶくいまめつつちよる」。「こけぶく(垢だらけ)・ひげぶく(髭ぼうぼう)のさま」。ぬかぶくは糠まみれに汚れたさま。

ぬかわぬすみ〔名〕農家の内土間(にわ)の隅。表寄りの一隅は「ゆーなび(夜なべ)」の仕事場、塵の一時的掃付け所・小道具・小臼・手杵などの常備場。「ぬかぬすみ・ぬかんすみ・ぬかわんすみ」等と呼ぶ。

ぬき〔名〕船の用材名。「うわだな」を横に貫き締めた木材名。家の壁柱間に入れた材もぬきと呼ぶが方言ではない。

ぬくさり〔名〕温暖の季節。「ぬくさりいつきました(温かく安定した季節)」と挨拶する。

ぬくたまり〔名〕日当りの良い場所。

ぬくぬく〔副〕うまうまと。まことしやかに。「ぬくぬく俺^{おれ}ばえらけえーた(えらかす・騙す)」。「ぬっくり」同。

ぬくむ〔動〕(1)盗む。わが物にしてしまう。「ぬくむる・ぬくめる」も同じ。(2)火にあたたまる。

ぬくもり〔名〕女性性器。

ぬけさく〔名〕間拔野郎。おろか者。ぼんやり者。

ぬすとがやし〔名〕鶏が飼主の知らぬ間に知らぬ所で雛をかえすこと。転じて女性が私生児を産むにも用いた。

ぬすとごつ〔名〕うそ。嘘言。騙す。

ぬすとは〔名〕農夫が山行き野良仕事に背負う竹製大箆。道具他色々の物が予想外に運べて便利であった。「ぞーてば」ともいう。盗みに関わりはない。

ぬた〔名〕(1)どろどろの土。泥沼土。ぬかるみの土。のたのような土。(2)のた。味噌に砂糖・酢を加え味付けゆるめた汁。魚・菜にかけて食す。

ぬっ〔接頭〕動詞に付き状況形容に副える。「ぬっ立つ(立ちよる)・ぬっ坐る(据ゆる)」。

ぬっけらきょーん〔形動〕そしらぬ顔。物に動じない振り(構え)。「ぬっけり・ぬっけらん」の状況を更に強める表現。

ぬっけり〔副〕平気・平然たるさま。

ぬっすゆる〔動〕据える。「うっすゆる」も同じ。

ぬったつ〔動〕突っ立つ。

ぬったり〔副〕愚図ぐずなさま。ぐずで気の利かぬさま。

ぬったりぬったり〔副〕ゆるゆるした動きや歩きさま。

ぬばくる〔動〕延ばす。のべる。「仕事ぬばくる・借金返しを言いぬばくる」。

ぬばこば〔副〕手ぬるくまだる
っつい。

ぬび〔名〕「にばんくんち」に同
じ。「ぬびのある」ともいう。
〔動〕延び。のびる。のばす。

ぬべあい〔名〕新しい藍に半ば
使用した藍を混和したもの。

ぬべだご〔名〕延べ団子。平べ
った丸型に延ばし煮上げた団
子。外側に餡や砂糖類をまぶ
し皿にのせ箸で食べる。「握り
団子・平団子・のべだご」な
どともいい「包みだこ（餡を
包み込み全体を丸めに仕上げ
蒸す）」に対する名。

ぬべぬべ〔副〕ぬめぬめ滑らか
な。「ぬべらしか・なめらしか」
なさま。しつとりとつやのある
さま。「すべらしか」など略
同じ。

ぬべりびーな〔名〕すべりひ
ゆ。馬齒莧科の草本名。「のべ
り・はいとりぐさ」ともいう。

ぬべる〔動〕延べる。延期す
る。「都合でぬべるこてーしま
した・来月さめえぬべる事し
ましたけん…」。

ぬらりおーどー〔形動〕おと
なしいようで横着なところあ
り。やをいかん（一筋縄では）
者。

ぬらりくわらり〔副〕ぬらり
くらり。のらりくらり。「ずら
りくわらり」ともいう。

ぬらりぬらり〔副〕行動の緩
慢なさま。「ぬらりぬらりしち
一向らちの（か）あかん」。

ぬりくる〔動〕塗りまくる。塗

りたぐる。ひどく塗りつける。

ぬりぼー〔名〕妖怪の一種と。
夜間道端の山から突き出して
くる。出る場所も特定されて
いるとの伝えあり。

ぬる〔動〕(1)寝る。「もうぬるぞ
ー」。(2)発酵する。「かびのぬる
（生える）」。

ぬるい〔形〕鈍い。「頭んぬるい
（か）・どーいぬるい（か）もん
なーい」。

ぬるべ〔名〕ぬるみ。ぬるめ。
「ぬるべー」も同じ。ぬるま
湯。

ぬるべんいる〔形〕少し温ま
った状態になる。ぬるま湯状
になる。

ぬれしょぼたる〔動〕濡れそ
ぼつ。濡れくさる。すっかり
濡れてしまう。「ぬれしょぼた
るる」も同じ。

ぬれしろ〔名〕羽刺し等の沖務
者が漁獲高に応じて受ける特
別給与。鯨組用語。

ぬれぼし〔名〕蛙面洒水の横着
者。

ぬれゆき〔名〕濡れ雪。霰。み
ぞれ。

ぬれをなご〔名〕海或は沼から
出るとされる、全身ずぶ濡れ
女性の妖怪。「ぬれおなご」も
同じ。

ね

ねーごつ〔名〕何事。「ねーご

つちゆうないえ・隣やねーご
つの有りをとるじゃろーか、
ひどぎゅうらしかとん。

ねーじょる〔動〕風んでいる。
風も波も静か。

ねーつけーつ〔副〕泣き悔む。
「ねーつけーつ愁嘆がる・そげ
んねーつけーつするなえ」。

ねーと〔名〕尻に付けた紐の部
分名。「ねしと・ねしを」とも
いう。この先に「たこよま」
を付け尻揚げする。

ねーもつ〔動〕根に持つ。恨み
心を深く持つ。

ねーよ〔助〕ね。よ。「ねーや・
のーや」とも用いる。

ねーる〔動〕眠る。寝入る。

ねいし〔名〕家屋建築時柱根に
据える石を根石・地^{（もと）}石とい
う。柱石ともいい、大黒柱の
下には他より大きいしっかり
した石を用いる。側柱の根元
の石も据り柱立ちの良いよう
に上面を加工し、確かりと胴
突きした土に安定的に配置す
る。

ねいをつき〔名〕夜間^{（夜間）}松明を明
りに舟や海岸に出て睡眠魚を
突く漁法。純漁師は嫌忌する
が、半農半漁の士は趣味実益
を兼ね行つた。

ねうー〔動〕隙をみて狙う。味
を知ってしばしば窺う。「ねう
ーち猫ん来た」。狙う。

ねえしゃん〔名〕姉さん。小間
使いの娘。若い女性。

ねおずむ〔動〕夜間、眠ってい
た子どもなどが突然急に眼を

醒ます。「ねおぞむ」ともい
う。

ねおらす〔動〕病気や不快等に
より床に就くこと。「ねおらす
とちゅう」。「ねおらす（床に就
いておられる）」も「ねおらす」
に同じ。「ねおらるとばな。ど
ーむこーむ、心配な事たーな
（可成り重い病臥）」。「ねおる」
も、病み臥すの意が強く単な
る就寝ではない用い方をする。
「ねおるとばな」となると可成
り心配。

ねがける〔動〕日がける。ねら
う。「ねんがくる・ねんがける」
ともいう。

ねかす〔動〕麴・藍等を発酵さ
せ熟成を促がすはたらき。「ね
かする・ねする」も同じ。

ねき〔名〕そば。傍。側。「にき」
に同じ。

ねぎた〔名〕北東風。多くは雨
を伴ない、漁師忌む。子^{（こ）}の方
向の風は北風「まきた」の筈
であるから「ねぎた」は「子
北」ではなく「寝北」の意と
解すべきである。いずれにし
ても「ねぎた」は「おしあな」
と共に恐れられている風であ
る。

ねきぶき〔名〕縄・藁で編み上
げた厚手大型の農用蓆でひと
りでは持ち運び難い重さもあ
る。籾の他穀物の干物用で貴
重品。「くぶき・ねぶき・ねく
ぶき・ねこぶき」とも呼ばれ
た。

ねきもん〔名〕商品の疵物。

ね

ねくさる〔動〕寝そべる。寝る(た)。「ねくたわす」ともいう。くたわく。

ねこ〔名〕(1)綱子。ねりこ。綱引きの綱を練るため藁を程良い太さに束ね尻も尖らせ巻いたもの。これを組み太綱に練り上げる。(2)湯たんぽ。「ゆねこ」ともいう。

ねこかぶる〔動〕ねこかぶり。表面だけ真面目そうに取りつくろうこと。

ねこぐるま〔名〕運搬用の一輪車。

ねこさぎ〔名〕根こそぎ。全部。根つ子からかきとる。「根こそぎ取っち行た」。「ねこすり」も同じ。

ねこじた〔名〕猫舌。熱い飲食物の苦手の人。

ねこだまし〔形動〕一時的な勉励(家)。

ねこづき〔名〕猫坏。猫用食器。

ねこどり〔名〕梟。鳥の名。

ねこのしゃみせん〔名〕ひめこばんそう。花穂の形からの名か。いね科。

ねこるばしりい〔副〕寝起きるとすぐに。「寝起こり走り」か。「ねこるばしりい街まじ行た」。

ねざし〔名〕「へー」を舟の「かく」に取り付けた綱。舟の用具名。

ねじこり〔形動〕子どもが眠気を催おしてむずかること。

ねじりばな〔名〕ねじばな。も

じずり。うす紅色の小花が細長い軸にねじれに咲く。らん科。

ねす〔助〕です。「そうねすとばな」。

ねすぬぐる〔動〕布団はそのまゝに体だけ起きて抜けでること。寝素抜。

ねずみ〔助数〕つまみ。「ひとねずみ入れる」。(動)ひねる。ねじる。「ねずむ・ねづむ(振る)」も同じ。

ねずみくよー〔名〕各地区各所には色々の供養様が祀られ、供養講中の祭り場が路傍や辻に設けられていた。鼠供養も村人の祭り場の一つで、石仏や石標を立て花を供え物をあげた。

ねずみのき〔名〕ねずみもち。いばたの木。たまつばき。もくせい科。「ねずみしば」ともいう。ねずみの糞の色・形に似た実をつける。

ねずみのもち〔名〕鼠の為に供える正月の飾り餅。昔人の心遣いだらう。

ねせば〔名〕麴をねかす(発酵させる)時、保温保湿の為に室内に持ち込み被せた「からむし(いらくさ科)の葉」を「ねせ葉」といった。

ねそ〔名〕「よろずかがす」を「よろず」に取り付ける小さな芋綱。

ねそむ〔動〕嫉む。

ねたむぐわり〔名〕小児が睡眠中夢魔におそわれ、突然泣

きだしたり恐がったりすること。「ねたまがり・ねたんがり・ねたんぐわり」する等という。

ねだをとし〔名〕長居（永居）癖のある人。「長尻たれ」ともいう。「ねだおとし」も同じ。

ねち〔名〕粘土質の強い土質を「ねちの悪か」とか「ねちちょーぬ悪か」という。転じて人の性格にも用いる。「ねちねち」も全く同じ。人の態度や話し振り等ねばっこいさま。

ねちはちまき〔名〕捻り鉢巻き。鉢巻き。〔形〕威勢のよいさま。「ねぢりはちまき」。

ねぢまくとる〔動〕乱雑に物の堆積すること。「鼻糞^{はなふ}ねぢまくとる」。

ねぢもこぢもされん〔形〕立錐の余地もないさま。「人間ばっかりで、ねぢもこぢもされん」。

ねぢりぐわし〔名〕餅糖^{もちとう}を種々細工して作った菓子。

ねっこ〔名〕根っ子。根元。根本。

ねっしょー〔名〕根っ性。根性。〔助〕でしょう。「そうねっしょー」。「でっしょう」も同じ。

ねっする〔助〕です。でございます。「そうねっするとすばな」。「でっする・ねっすると・でっすると」。

ねっちょー〔名〕根性。性質。精神。「ねっちょーん良か」。「ねっしょー」に同じ。

ねっつりねっつり〔副〕口重い話振り。「ねっつり」も同じ。

ねつびとり〔名〕眠った女性を犯すこと。

ねとぶく〔動〕寝とぼける。ねぼける。「ねとぶくる・ねとぼける」も同。

ねね〔名〕着物。「うつねね（美しい着物）」。「べべ・おべべ」も同。「ねねきする（着せる）・ねねきる」。

ねのでちふく〔形〕音の出で吹く（風）。音を立て吹き荒ぶ風。

ねはぐる〔動〕眠りの時期を失い眠れぬ。ねそびれる。

ねばし〔名〕真綿。

ねびたし〔名〕幼児の寝具の敷物。

ねぶい〔形〕眠い。「ねぶか」も同。

ねぶか〔名〕根深葱。太葱。

ねぶつ〔名〕念仏。島内は古くから念仏が甚だ盛んで、講中主体に在浦共念仏講が組織され、葬儀・供養・盆や祈禱・祈願に年中行事的に行なわれていて、組頭を「駐^{ちゅう}鉦^{しやう}」と呼び鉦を打ち先唱した。念仏にはあみだねぶつのほか、うせい・うた・くぎ・こねえぶつ・しゃか・すえ（せ）ぐわんじ・ななつご・はくまい・はなづき・ろくせいなどの念仏があり、ご詠歌もねぶつと言ったりした。ろくせいねぶつは祈願や祓い、せいぐわん

じは盆や墓前で、はくまいは葬儀や新盆に、こねえぶつは法事供養で唱えられてきたという。現在でもあちこちに継唱されている地区もあるが昭和30年代を境に姿を消していった。同時に念仏講組織も崩れた。

ねぶつこー〔名〕触や講中の中に組織され、念仏活動の推進母体であったが消滅状態は念仏と同様。念仏講。

ねぶりのき〔名〕合歓の木。葉の睡眠運動からの名。まめ科植物。

ねぶる〔動〕(1)眠る。(2)死ぬ。(3)祇める。

ねぼすけ〔名〕寝坊助。朝寝坊。寝とぼけ者。ぼんやり者の意にも。

ねほりはほり〔副〕根掘り葉放り。物事をこと細かく聞きただし、詮索するさま。

ねまる〔動〕飲食物が腐敗する。人がぐったり状に陥込むこと。

ねむし〔名〕根虫。夜盗虫。作物の根にひそみ、夜地上に出て作物の茎等を食害する。

ねやる〔動・形〕土質の重粘するさま。

ねらむ〔動〕にらむ。

ねり〔名〕(1)犁床から立ち上った棒の「たたり」にはめ込み「てーき(轆)」から延ばした縄紐に取付けた「ひじぎ(弓き木)」と連結して牛に犁を引かせる為の棒状の横木名。先端

には「ひじぎ」の穴に通した縄の輪に掛ける「ちぼ」を付けている。(2)田畑を犁く時、数区に分けて犁くことがある。その区画を示す用語。(3)船を潮流と風に抵抗させつゝ一定位置に清ぎ止続ける作業を「ねり・ねる」という。

ねりがき〔名〕渋柿の渋を抜いた柿。渋抜きには温湯・焼酎・たで草・木灰など用いる。たる柿・さわし柿。

ねりぎ〔名〕あきになれ。材質に粘りがある。「ねれぎ」ともいう。にれ科の植物、盆栽のよい素材。

ねりこ〔名〕蟹や鉾突き漁の舟の漕ぎ手。「ねり」の(3)の仕事に携わる重要な働きである。

ねりどへー〔名〕練り土塀。土壁技法の一。長めのすきを加え練り上げた土を藁包みし煉瓦状にしたものを積み上げて厚さ一尺前後の土塀を作る。両面は広刃の刀様の道具で切り揃えた。牛舎の壁は殆んどこの方法で。

ねりもん〔名〕雑穀類の粉を材料に釜の中で練り乍ら炊き上げられる代用食の一般名。「でーは」もその一つ。

ねる〔動〕(1)渋柿をそのまま灰湯や温湯や焼酎等で渋抜きすること。「柿をねる」という。(2)麴の発酵を促す。「麴がねる(をねする)」。(3)かびが生える。「かびのねる(ぬる)」。

ねるる〔動〕渋柿が自然又は人

工的に渋味が無くなり甘味を持つようになること。「柿のねるる(ねれちよる)」などという。

ねれもどす〔動〕牛の反芻動作。「牛のねれもどす・ねれもどしをる」。

ねれもどる〔動〕甘柿やねり柿に渋味が戻り渋柿化する事。

ねをらる・ねをる〔動〕「ねおらす・ねおらる・ねおる」等に同じ。参照。

ねんがく〔動〕狙う。めがける。「ねんがくる・ねんがける」も同じ。

ねんけ〔名〕ほとぼり。残り気(香)。「ねんけんある・ねんけんさめた」。

ねんごろ〔名〕木の剣・太めの釘を用い、地面に打ち立て、打ち倒し合い乍ら互いに争う子供達の遊び。

ねんしゃ〔名〕物事に殊の外念を入れ過ぎる人。きちょうめんすぎる人。

ねんじゅーさんぽー〔副〕いつも。しょつちゅう。年がら年中。「ねんじゅーさんぽ」も同じ。

ねんつがう〔名〕念を押す。確認。

ねんねこ〔名〕負うた子に被せる綿入れ衣類。「つつんべい・かめのこ・かぶせ・ごんべい」等の名がある。

ねんば〔名〕(1)とんぼ。蜻蛉。(2)竹とんぼ。竹をプロペラ型に削り中央部に柄を刺し掌で

廻し飛ばす。「えんば」ともいう。

ねんびゃくさんびゃく〔副〕しょつちゅう。常に。いつでんかつでん。「ねんびゃくさんびゃく遊びいさらく」。

ねんぶん〔名〕年中分。一年分。年分。

の

の〔助〕を。「新聞の見たか・酒の呑みたか」。が。「犬の来た・手紙の来た・敵の現われた」。
〔名〕頃。「今の来たちゅち…遅すか」。

のー〔名〕(1)漁具。延縄。(2)役立つ。「のーする・のーせんばい」。「買うたばっかりで一向のーせん」。

のーあげ〔名〕長縄漁の終了。長縄を海から揚げ格納する。

のーさば〔名〕鮫類の一種。「のーそー」と呼ばれる魚に同じ。

のーしろがん〔名〕苗代に稲播きする頃に来る春寒。

のーずり〔名〕釣り糸を操りすべりをよくする為船梁に渡した丸竹。

のーそー〔名〕鮫類の魚名。湯引き(湯じろめ)・生あらい(みじろめ)等にして酢味噌のた・醤油で食する。

のーだけ〔名〕しいら漁をする時、魚を寄せるため沖中に仕掛ける竹束。



のーち〔名〕^後後。後刻。後程。
「のーちさめ来(行き)まっしょう」。
のーつれかかる〔動〕屋敷内の
の果物を盗り荒すこと。
のーて〔名〕畷。田と田の間の
道。田の畦畔路。
のーで〔名〕役立つ。効能がある。
能する。「のー」に同じ。
のーとこぜまち〔名〕苗代を
置く田。
のーなる〔動〕(1)無くなる。(2)
紛失する。「金んの一なる(の
一なった)」。(3)じくなる。死
す。「親んの一なる」。
のーの一さん〔名〕神・仏の
外、拜む対象となるもの。「に
よーによーさー(さん)・あと
さん」に同じ。
のーば〔名〕早苗の括り藁。苗
把。正月にこの苗把の穂先を
粥に浸し、穀殻をつけ、護符
を巻き付け神前に供え置いて
いたものを田植え時に取りだ
し、その年の豊作祈願に用い
る。
のーや〔助〕何々ですか、との
問い。
のーれ〔名〕正月の雑煮。
のーいえ〔名〕木や竹の伸び具
合。のび。「のーいえん通つちよ
る・のーいえんよか・ようのい
えちよる」。「のえ・のえる(竹
木の他身長伸び)」も。
のき〔名〕家の庇。
のぎく〔名〕あぶらぎく・しま
かんぎく・あわこがねぎく・
きくたにぎく等の総称。きく

科の植物名。
のきだり〔名〕軒垂れ。庇から
の雨垂れ。「のきだれ」も同
じ。
のぐ〔動〕脱ぐ。
のぐるめ〔名〕のぐるみ。くる
み科。
のけづら〔名〕顔・頭をのけず
らした姿勢。威張りきった姿
勢。「のけづらん高か(態度威
張り横柄)」。
のこぎり〔名〕鮫類の魚のこぎ
りざめの名。「のーそー」の一
種。「のこぶか」ともいう。
のこのこ〔副〕洒々としたさ
ま。
のじ〔助〕の氏。の字。同僚間
の呼称に名前前の頭字を付け用
いる。信の氏(字)。行の氏。
明の字(氏)。謙の氏。安の
じ。吉のじ。
のしば〔名〕芝。芝牛。いね科
の草。
のす〔名〕尻。けつ。「しりの
す」。(動)伸ばす。延ばす。「の
すぞー・のばすぞー(相手を
威嚇して発す)」。
のすけえー〔名〕^お尻買い即ち女
郎買。淫売婦買い。「女郎けえ
ー」も同じ。
のた〔名〕(1)どろどろ状の土。
(2)ぬた。のた酢味噌。
のだち〔動〕山野での樹木の生
育状況。「のだちの良か(悪
か)」。
のだつ〔動〕山野で成育中の樹
木。
のちぜー〔名〕後添え。後妻。

「うるうがか」ともいう。
 のつ〔助〕と。「走るのつきつか」。のが。「俺のつが良かばい」。「のと」に同じ。

のつきったもん〔名〕乗り切った者。甚だしい英断。すばらしい頑張り（屋）。

のつけ〔名〕最初。「のつけかる成っちゃらん」。

のづち〔名〕野槌。神楽舞の一種。古記に「山人」とあるのも同じだろうと。「真榊」に連続し、真榊が終らぬうちに一人笹を持って出る。笹には小さい「さがり」をつけ、手元を紙で包み「こより」で結ぶ。昔は稲穂を持って舞い、名称も「やまいり」と言っていたと。

のつづあん〔名〕後産。後産の処理の仕方によっては、生児の寿命に関わりがある等と言って、地区や家の慣習により後産のないようにとその処置は慎重適切に扱われて来た。「のつざん」とも言う。

のつべり〔名〕肉や野菜類を細かく切り、取り混ぜて煮、葛など加えて味付け煮上げた料理名。

のでえまめんおゆる〔副〕喉に豆が生える程長い時間待たされ待ちくたびれるさま。

のと〔助〕上に付く名詞の尾音節で変化する。「俺のところが良か（俺んと）」。「のつ」に同じ。

のどひめごじょ〔名〕のどぼとけ。のどちんこ。懸壺垂。

「ひめごじょ」ともいう。
 のとらへーとら〔副〕ぐずつてらちがあかず、恥も外分も構わず振舞う人。「のとらへーとら」も同じ。

のどわ〔名〕鯨ののど笛肉。鯨組語。

のなか〔名〕総額。無尽利息に「のなか四厘歩」などとする。総金額に対する利息四厘歩との意と。

のねんぶつ〔名〕葬式の折墓地で埋葬直後組・講による念仏が唱えられた。これを「のねんぶつ」という。

のの〔名〕麻布。布と読ませたとも。

のばり〔名〕牛を野に出して繋ぎ飼いすること。「うしだし」に同じ。

のび〔名〕皮膚一面に出来る遍行疹。「ぬび」ともいう。広がると命盗り。

のびきやし〔名〕たいとごめ・つまきりまんねんぐさ・はなつづき等と呼ばれる、べんけいそう科の草。「のび消やし」のびの治療に特効があるといわれる。

のふーぞ〔名〕野放図。横着者。野放途。「のふーぞ者・のふーぞな事する」。「のふーず」も同じ。

のべー〔形〕平坦な野辺。広めの原。「のべーになっちゃう・のべーぬよか」等と用いる。草生地に限らず一般土地に対しても用いる。



のべのー〔名〕延縄漁法。縄を浮かべてその下方に鉤をつけ鯛や鰯を釣る漁。「のべのう・ろうはえ（いえ）」ともいう。鰯漁にはこの他に「ほろこぎ・ぼんぼんこぎ」や「飼い付け漁」などの一本釣漁法もある。

のべり〔名〕のびる。のべりひーな。のべりびーな・はいとりぐさ。等の呼び名がある。すべりひゆ科の草本。馬齒莧科。

のべりびな〔名〕のべり。「ぬべりひな・ぬべりひーな」ともいう。すべりひゆ科の草本。

のぼす〔名〕てんす。魚の名。
のぼりいうゑー〔名〕幟り祝い。長男子第一年の五月の節句は極めて盛大に祝う。但し、古くは浦部町家だけで、在部農家ではさ程ではなかった。
のぼりたて〔名〕登り口。登り坂入口。

のぼん〔固〕ぼんやり。「のほぼん」。

のみえり〔名・動〕(1)鑿を使ってする細工・工作。大工仕事。(2)「のみ」を「飲み」に代え、酒呑みを表わす。「のみえり上手（大酒呑み・酒好）」。

のやま〔名〕野山であるが、畑を意味することが多い。「野山仕事」は「畑仕事」と解する。

のり〔名〕傾斜。「のりとり・のりをつける（傾斜をつける）」。

のりかう〔名〕細々と工夫をこ

らし生計をたてる。

のりがめ〔名〕死者を納める甕。

のりきのさす〔動〕お調子に乗る。「のりくれのり」も同じ。

のりこし〔名〕峠。尾根。屋根の棟。勾配。「のりこしのきっか」。

のりそり〔名〕優劣の差異。「のりそりのなか（優劣・上・下・高低・出入等の無いさま）」。

のりだち〔名〕(1)為し栄え。出来ばえ。「のりだちのせん（出来ばえがよくない・すっきりしない）」。(2)決意のはっきりしない者。仕事の埒があかない者。「一向にのりだちのせん男」。

のりわかれ〔名〕漁船の若衆の新たな乗り組みは、正月7日の「つなうち」の日に決めた。この日餅を掲げ問屋や近隣に正月の神酒の返礼として配った。西部方面では正月17日に総沖止めをして、この日に「のりわかれ」の行事をした。この日は「はなげの観音様」の祭日でもあった。

のれ〔名〕雑魚。

のんぎょー〔形〕丈の際立って高いことにいう。

のんぢ〔名〕(1)野の地。野。野原。(2)下畑の意もある。前畑の品の上・中・下及び広狭の差を補い調整の為「のんぢ」を当てた。地割制度用語。

のんぢのはる〔名〕野の原。

野原。人家のない広い野原。
「はる」は原。
のんぼり〔名〕上り。登り。「くんだり」に対する語。
のんぼりくんだり〔名〕(1)上り下り。(2)あっちやこっち。往ったり来たり。

は

は〔助数〕(1)鮎の数に用いる。(2)鱧の具成の目を数えるのに用いる。(3)鱧の下半身部の名。「ろば」に同じ。
ば〔助〕を。「鳥ば掴めた・川ば下った・牛ば売った・酒ば呑みをつた」。
ばー〔名〕婆。婆さん。ばばあ。
ば一つと〔形動〕彼是騒がしく罵り合い評定し合うさま。
ばーばー〔名〕(1)雨。「ばーばーん降りよる」。(2)お婆さん。ばーばん(祖母)。(1)(2)共に幼児語。(形動)「ば一つと」に同じ。「ばーばー言うたちや同じこつ。ばーばー言うな」。
はい〔形〕早く。早よう。「はい来はい」。「はよ」に同じ。
ばい〔助〕よ。「ですばい・ですとばい」。「ばな」も同じ。
はいえ〔名〕(1)南風。(2)うぐい。魚の名。「はえ・はや」ともいう。(3)岩盤の突出した地形。「出ばいえ・長んかはいえ出ちよる」。(1)(2)(3)共に「はえ」

とも用いる。
はいえこち〔名〕南東風。はえこち。
はいえさげ〔名〕女兒は前後左右に髪を少しずつ残して剃ったりした。これを「生え下げ」と言う。「ちーち」参照。「はえさげ」も同じ。
はいえにし〔名〕南西風。「はえにし」。
はいえぬかぜ〔名〕南風。「はえ」。
はいすぎ〔名〕這い杉。そなれ。はいびやくしん。矮松。ひのき科。「へーすぎ・へえすぎ」の名を多用。
ばいせん〔名〕大きな帆船。
はいとりぐさ〔名〕のべりに同じ。ぬべりびなともいう。すべりひゆ科。「へーとりぐさ」と呼ぶ。
ばいばい〔名・形〕(1)饒舌。「ばいばい言う(言うな)」。「ばやばや言う」も同様に用いる。(2)雨。「ばいばいの降る」。「ばーばーん降る」も同じ。
はいやぶし〔名〕往古より祝宴の席で謡われて来た民謡。太鼓を伴う祝い謡。「牛深はいや」の流れを汲むのか。壺州はいや節。「ハイヤ・オイ」と納める。
はいを〔名〕(1)かじきまぐろ。魚名。(2)鰯を掛けて漕ぐ綱の名。船具名。文字「早緒」と当て「はいを・はやを・へーを」と呼ぶ。中でも「へーを」最も壺州的方言といえるので

は。

はえ〔名〕(1)南風。はえんかぜ。はやんかぜ。(2)陸地から続いた瀬。潮干に姿を現わす程のもの。(3)糞物を積む山数。「ひとへえ」は50俵とか。旧藩時代上納米の受け渡しに用いられたと。

はえぬき〔名〕昔からその土地に先祖代々住み着いて来た者を「はえぬき」又は「じねんぼこ」という。「はえぬき」はその土地柄に明るく詳しい。「じねんぼこ」は養子などにより途中から転入した人とを区別する場合に用いた。

はおろし〔名〕かくれみの。はこぼし。うしのはおろし。うこぎ科。

ばかいあう〔動〕奪い合う。「ばかう」も同じ。先権を争う。

ばかごつ〔副〕おろかなこと。お粗末なこと。みだらなこと。「ばかごつ言うな(するな)」。

はかぞーり〔名〕墓草履。盆の仏迎は表の入口から、仏様は墓地から草履を履いて帰って来られる。盆の12日か13日の朝迄に死者の数だけ墓前に供えに行く。おとなの墓には「かみぞうり(障子紙を巻いた白い横緒・鼻緒の藁草履)」を、こどもの墓には赤や紅白のこども用ぞうりを供える。「はかぞーり」は「葬式草履」と違い、打藁を使って作る。普通履の草履と異なるのは横緒鼻緒共藁を用いるところ。現在

では塩ビニ他色々の素材品が多い。昭和62年(1987)盆車で1足150〜200円が10年後の平成10年頃には1足250〜300円位であった。

はがつを〔名〕鯉の一種。魚名。

ばかぶか〔名〕鯰類の一種。「ばかざめ」とも呼ぶ。

はがま〔名〕釜。飯炊き用釜。かまどに掛ける羽が洞の周りに付けてある。「はまが」とも呼ぶ向きがある。

はかめえーり〔名〕墓参り。葬式後の墓参りは49日間、普通1日朝夕2回参る。朝参り夕参りと言い、夕参りに灯火を点じ、翌朝参りに消して持ち帰りの繰返しである。又浦部では昼参りも加わり1日3回の「はかめえーり」する地もある。この墓参りには鎌を必ず持って参るものと。

はかりだし〔名〕枴で量り売りする場合米・麦1斗に対し2・3合を添える。これは生産者の手から売る場合で、商家はしない。はかりだしの量は、地区や人毎に差異がある。

はかわら〔名〕墓地。墓原。集合墓。

はぎ〔名〕色仕掛けで相手の財宝類を狙う者。「はぐ」は「はぎ」の動詞形。

はきき〔名〕(1)その地方の勢力家。(2)神仏を念じ加持祈禱をする人で効験のすぐれた者。

はぎし〔名〕上下顎部。

はぎしこむ〔動〕歯ぎし噛む。全力を注ぎ氣力で物事に当る。残念がる。「はぎしこーじきばる・はぎしこーじくやしがる」。

はぎしり〔動〕歯噛み。歯噛みする。

ばく〔名〕牛馬の仲買・売買業者。「ばくさん・ばくりう・ばくりゅう・ばくりょう・馬喰・博勞」。

はくとー〔動〕嘔吐。嘔吐する。「あぐる・あげる・えづく・えつる・はくど・はくどー・はくとーとる・はくどーとる・もどす」も同じ。

はくり〔名〕ほくら。しゅんらん。花は「はくりばんさん」ともいう。春蘭。らん科山野自生種。花穂薬用。

ばくる〔動〕ばくる。だまし取る。すばやく盗む。「ばくらるる(れた)」。

はげあめ〔名〕梅雨末期半夏生前後の篠突く大雨。この雨が来て梅雨明。

はけぬり〔形〕ひどく垢のついたさま。襟等に垢がつき光っているさま。刷毛で塗り付けた感もあるひどさ。

はこひばち〔名〕箱火鉢。木製の長火鉢の内側に金属板を張り銅壺や鉄瓶等載せる火台を据え置く。

はこぶく〔名〕河豚の一種。「こんごーぶく」ともいう。体形長方形の箱型。

はこべえら〔名〕はこべ。「は

こべら・ひよこぐさ」ともいう。春の七草、なでしこ科の二年草。

はぎ〔名〕間。はざま。

はざぐいー〔名〕間食。はざぐい。

はざひく〔動〕間引く。「はざひき」も同じ。(1)野菜・作物の間引き。(2)産児の間引き。

はさみ〔名〕水門両端の水止め具。粘土を棕櫚の皮に包んだものを堅く打ち込み止水する。

はさみぐち〔名〕果実を取り落さないように竹の先端を削り二つ割りにして割り元を締める加工を施した竿。

はさみごもち〔名〕座頭鯨は雌雄の間に子鯨を挟む形で連れ泳ぐ。雄鯨は荒く捕え難いが、雌鯨(鯨)は子を思う情深く子鯨の周囲を去らぬ。但し子が死ねば再び寄りつかない。捕鯨者用語。

はさむ〔動〕宴席で相伴人が客に酒宴盆上の料理品をつぎ分けもてなすこと。「肴をはさむ」という。「取り肴(客が自由自分達でとって肴にする分)は、はさみまっしょうが、ご加勢振り(自由)にお取っち、お上つちお呉れまっせえ」と奨める。

はし〔名〕鯨の顎の部分の肉名。

ばし〔助〕でも。さえ。「猫ばし居ったか・絵ばし描きゆるばしのごつ・見ばししたごつうな」。

はしか〔名〕稲・麦類穀物の芒。牛の飼料としても重用される。

はしかい〔形動〕(1)粗暴。粗野。はげしい。粗い。荒っぽい。人の気性性格行動等荒々しいさま。(2)いらかゆい。ちかちか刺されるようなかゆみ。稲・麦の穀物芒に刺されるいらかゆさ。「はしかか」ともいう。

はしかいん〔名〕はしかい犬。誰彼と見さかいなく吠えたり噛み付いたりする犬。まさに狂犬的。人にも例えて「はしか犬のごたる人」と評し、君子危うきに近寄らず。

はしかごや〔名〕「はしか」も溜め置く牛の飼料小屋。多くは牛舎に併設する。「はみごや・はみどや」とも呼ぶ。

はしからみ〔名〕鯨を「もっそー」にかけるとき、柱の端にからめる綱。鯨組用語。

はじき〔名〕釣竿。「はじき釣り(釣竿を用いての釣り)」。

はしらがい〔名〕柱粥。新築家屋のお祓い行事として、藁を折り編んで作った「ひんがんごうら」と呼ぶ一種の苞に、これも新築屋内で炊いた粥を、12個よそい、これに更に刺身・なます・神酒を添えて、一番柱から六番柱まで唱え言をしながら供えて廻る。五番柱まで一個ずつ同じ事を繰り返すが、六番柱では残り7個をまとめて供え祀る。但しこの

儀式は、地域・地区・家の伝承により方法や内容に相違がある。例えば、(1)粥を口に含んで壁に吹きかける。(2)4本の柱と大黒柱の根元に供える。(3)又粥を炊いている施主に「すすりけ(すすりげー)します」と言い乍ら桶の水を屋根上から掛ける。この水が大黒柱にもかかると「火の用心」になる。この外「すみ塗り」は祝宴の中で棟梁や酌に来た女性が、鍋炭を集めて来て、「お祝いあーお祝いですけえに」と言い乍ら施主や祝客の額・頬・顔に塗り付け廻り大いに祝意を表した。

はしらぐし〔名〕柱串。家屋新築の折、床下の柱丈を決定する為、割竹を作り一本毎に墨をして測り、これを当て、柱の根方に合わせ切断する。これを「はしらぐし」という。後この竹串は束ねて、柱根に祀った「ひんがんごうら」の供物の器を置き、屋根裏に刺して大事に保存する。

はしらる〔動〕人が死すること。「はしらした・はしらり(れ)た」も同。

はしり〔名〕台所流し台。小丸竹を編んで柵を作り流し台とする。

はしりぐつちょ〔動〕徒競争。ぐつちょは競争(競ぶ・競べ)。

はしりだし〔名〕新しく事に就いたばかりの状態。

はしる〔動〕(1)はじける。破裂する。「莢がはしる・燃え竹んはしる・炒り米がはしる」。(2)人が死ぬ。他界する。「はしらす・はしらりた・はしらる・いかした・いく」等同じ。

はず〔名〕「そーがい」の柱を舐むの方に引っ張った綱。鯨組用語。

ばす〔名〕嘘言のこと。嘘言。「ばすくる(嘘言う)」。

はずけ〔名〕牛舎から引き出した牛を繋留する昼間の休息場。「はずけ」。

はぜ〔名〕こはぜ(小鉤)。足袋・脚絆類に付ける爪型の止め金具。こはぜとは言わず専ら「はぜ」。

はぜっぼ〔名〕はぜ(沙魚)。「すずき・どんこ・まはぜ・むつごろう・日はぜ・よしのぼり」等はぜの仲間。「はぜっぼー」ともいう。

はぜぶた〔名〕長方形の浅い木箱。正月・祝事・葬祭の他年間の諸行事に欠かせない。料理材料・料理品の調製必需容具。「もるぶた・もろぶた」とも言い、蓋はない。互いに重ね合わせて蓋となり身となる。「もるぶたは盛る蓋・もろぶたは諸蓋」か。現在では、木製以外の材質のものにとって代わられている。

はそで〔名〕着物の袖口に縁をとったもの。これは「ねじりそで」にのみ付ける「ふちどり」と。然し時には袖口その

物を「はそで」と言う。

はた〔名〕幟り幡。のぼり。おのぼり。「おはた通し(神社祭礼に幟り幡を競い合ってそれぞれ思いの要所に立てる)」。

はだかだご〔名〕物の葉などに包み込まない団子。(ひら・のべ)だご。

はたきだご〔名〕粳米の粉を団子にして蒸し、更に餅に搗いた団子。

はたく〔動〕粳米・蕎麦かんころ等を砕き搗いて粉状にすること。「かんころはたく」「はたき」も同じ。

はたくち〔名〕海辺の急に深くなった渚。「かたふち」ともいう。

ばたぐるー〔動〕もがきあばれる。苦しみもがく。

はたけまつり〔名〕「なごし」の日小麦稈の苞に小麦団子を挟み、各畑毎に祭事をして廻る農家行事。

はだしき〔名〕肌敷き。牛に「てーき」や「鞍」を負わせる時、背中の肌当てとして敷く麻布や毛布等々の鞍下敷布の類。

はたす〔動〕為す。する。失う。

はたせ〔動〕為せ。せよ。「どーなっとはたせ(いいようにせよ)」。

はだせ〔名〕褌。「はらせ」に同じ。

ばたばた〔副〕少時の間に事を仕終えることに用いる。「ばたばたにしちしもうた」。「ばた

ばた」も同じ。

ばち〔名〕めんこ。「ばちしゅうや」「ばち・ばちする」も全く同じ。

ばちかぶる〔動〕罰を受ける。罰をこうむる。罰が当る。「そげんとろえ坐ったりしたら、ばちかぶるぞ」。

はぢき〔名〕釣り竿。

はちこ〔名〕蟹が作業中腰に巻く物。藁で腰に二周巻き付けのように作る。

ばちつく〔動〕ばちばち言う。

ばちばち〔副〕(1)多弁な話し振り。「ばちばち言うな」。(2)凌飯の口に荒々しきさま。(3)柴や枯木等音を立て乍ら燃えるさま。

ばちぶくる〔動・形〕腫れ膨上ること。「ばちぶくる・ばちぶくれる」も同じ。蜂や虫刺されによる腫れ上り。

はついいり〔名〕商家の朝の初客。縁起をかつぎ重んずる。

はっかけ〔名〕着物の裾裏地。

ばっかし〔助動〕ばかり。「ばっかり」。

はつかひろめ〔名〕嫁いで来て20日間位、嫁は一生懸命働いて家風家事に慣れるよう努力する。この間に嫁の世間評価がなされる。これを「嫁御のはつかひろめ」と言った。今は昔のおはなし。

はつぎとー〔名〕初祈禱。新年最初の講中念仏会。「かねおこし(釘起し・おでこー(菩提講))」。

ばつぎょー〔名〕罰行。罰として課せられる仕置き。こらしめ・たしなめ・反省指導措置。「ばつぎょーさせられた」。「ばちぎょー」も同じ。

はつく〔副〕桶の板部が乾燥し過ぎ、たが(輪)がゆるみ水漏れを起す状態になるさま。「はつくる・はつけた・はつける」も同じ。

ばっくな〔副〕格段の相違のあるさま。「ばっくな遅え・ばっくなもん」。

はつけ〔名〕畑。「はつけん草取り・はつけえ行たち来た」。「はつけ」も同じ。「やせ(野菜)ばつけ(畑)」。

ばっけ〔名〕血すじ。血統。縁続き。

はつごもり〔名〕初講盛り。「ももて講」に同じ。「ももて」参照。

はつさかつき〔名〕正月の初祝宴。在部での正月の「せち(節)」に同じ。

はっしゅー〔名〕ふじまめ。せんごくまめ。野菜豆の一つ。「はっしょう・はっしゅうまめ」ともいう。「はっしゅうに松葉・はっしゅうに目鼻(或る事柄の例え)」等と用いる。

はっしらっ〔副〕お茶の湯・汁物の塩気熱加減・酒の燗等必要十分のさま。「はっしらっ燗つけろ・汁あはっしらったぎりかせ」。「はっしら・はっしらと・はっしり」も同じ。

はったいこ〔名〕麦こがし。麦

こうばし。こーばし。

はっち〔名〕物乞い。乞食。

ばっち〔接〕だが。けれど。しかし。とても。ですが。「ばっちか・ばって・ばってか・ばってん」も同じ。

ばっちょ〔名〕未婚のまゝの女性。後家になり独り身の女性をもいう。「ばっちょー(う)」も同じ。男性の独り身は「おんちょー(う)」という。

ばってーうつ〔動〕四肢五体を振り動かして暴れ苦しみもがく。

ばってーとる〔動〕(1)「ばってーうつ」に同じ。(2)ごたごたの事件を起し処理対応に手間手数料がかかる。ごたくとる。「ばってー」も同じ。

はってんぐわし〔形〕物の極めて大きなさま。「はってんぐわしのごたる」というと。

ばっと〔副〕漠然としたさま。掴みどころのないさま。「ばーっと」ともいう。「ばーっとした話じゃった」。

はっとぬはれー〔形動〕甚しく忌み嫌うこと。「おーゆー好かんもん(物・者)な無か、はっとぬはれーしゅーごたつた」。

はつどまり〔名〕新嫁は「みつめ」も過ぎて数日を経て「はつどまり」といって親元へ泊りがてらに帰される。双方の事情により日時は決まる。

ばっぱ〔名〕(1)煙草。(2)煙管。〔動〕消え失せる。「ばっぱし

た」。「ばーっぺ・ばっぺ」ともいう。

ばっばん〔名〕祖母。おばあちゃん。「ばっばん」ともいう。

はつる〔動〕端からほぐれる。ほつれる。削りとる。開く。はずれる。

はつをはっさき〔副〕初穂初先に。真先に。一番に。飲食物に最初に手をかける者の発語。「はつをはっさきいー頂きまっしょうか」。初を初先。

はて〔名〕涯て。「くれはて」参照。

はと〔名〕波止。防波堤。埠頭。

はとうち〔動〕山野で糞すること。鳩糞ちも山野に坐り込み飛来を待つ。

はとんはな〔名〕波止の先端部。

はな〔名〕(1)端。先端。(2)角力や芝居演芸興業に贈る金品。花打つ。

ばな〔助〕「ばい・ばよ」に同じ。

はないけ〔名〕専ら神前に供える花瓶をいう。花木・樹木を挿す瓶。仏前用花瓶は「はなたて」と呼ぶ。

はないり〔名〕花煎り。粉を煎って花の如くにはぜさせたもの。旧暦2月15日釈迦の日仏前に供える。

はないろぎがん〔動〕布を薄く花色に染め、ふのりを一面に塗り巻いて叩き艶をつけること。「こんぎがん」。

は

はながや〔名〕麦稈屋根を葺く時、棟の両端に当てる飾物的、麦・小麦稈。

はながら〔名〕つゆくさ。つゆくさ科の草本。

はなかんだ〔名〕牛の鼻輪。鼻かずら。牛の鼻輪を刺すに用いる蔓植物。「はなぐり・はなづる(づら)」に同。

はなこーじ〔名〕花麴。花糍。

はなごちょ〔形〕言語音声が鼻にかかってでるさま。

はなさき〔名〕(1)先端。突端。(2)目のすぐ前。鼻先。

はなさし〔動〕仔牛の鼻に「はなぐり」を刺し鼻輪を付けること。昔は仔牛3歳で刺したが、今は2歳の2月か8月に刺すという。

はなさしもち〔名〕正月の飾り餅は14日の「まつたて」にさげて、親や子達に分け贈る。又当夜それらの餅を「はなさしもち」といい焼いて皆で食べる。荒神様のおさがり餅は、他の餅にのせて配る。この餅をさする(さす)真似して食べるのだともいう。ここから起こった名とか。

はなしば〔名〕櫓。しきみ。もくれん科。仏前・墓前に供える花や柴一般をまとめて「はなしば」ということもある。

はなずさねぶつ〔名〕念仏の一種。「はなづさねぶつ」も同じ。

はなずもう〔名〕角力のとりはじめに勝負を度外視した祝い

角力を催し幼少年児に勝者・敗者双方に同様に「はなをうって」角力開きをする。

はなたご〔名〕墓参用の小水桶。

はなたて〔名〕仏前用の花瓶。

はなちらし〔名〕旧暦3月3日は、桃の節句、4日花散らし、5日花寄せといい、女兒中心に料理を携え野に遊ぶ。花見の外・風揚げ・潮干狩などおとももこどもも楽しんだ。

はなつげ〔名〕はくちょうげ。満天星。つげに似た花をつけるあかね科。

はなつつ〔名〕花筒。墓前の花挿し。竹で作る。葬式から49日迄は7日毎に1対の花筒を供える。一年忌や各年忌供養・盆にも新しい花筒を1対作り供える。花筒を打込む音があの世の仏達に届いて喜ばれるという。花筒から芽が出るのを忌み、呪いとして中央に鉋目を丸く入れ、下に3本注連様の鉋目を入れる。「はなづち」ともいう。

はなつみぶくろ〔名〕未婚青年男女死亡の折、「てらおくり」に小さい袋を作り、途中花を摘んで入れて送る。この袋は寺の仏壇に納めるといふ。

はなつんば〔名〕臭の嗅ぎ分けのできない鼻。嗅覚の利かないこと(人)。

はなとんぼ〔動〕前のめりになる。「はなとんぼつく」。「あぶねえはなとんぼつくところじ

やつた」と用う。

はなぬはしる〔動〕(1)糶がよく熟しできること。(2)炒り米がよくはぜること。(3)糯米に特有の色彩(乳白色)がよく出ること。

はなのす〔名〕鼻の穴。鼻腔。「はなんす」ともいう。

はなまい〔名〕神楽舞の一種。花舞。橘舞ともいう。

はなみずかえ〔名〕月経。

はなみずこし〔名〕舵の下方に付けた、舵引き揚げ用の綱。「はねみずこし」。

はなみな〔名〕「こしきみな」ともいう。参照。貝の名。

はなよせ〔名〕「はなちらし」参照。花散らし程の賑いはないとか。

はなわ〔名〕藁を材に編った縄。わらなわ又は単に「なわ」という。縄は材種によって「しゅろなわ(棕櫚の皮)」「苧縄(苧麻材)」等ある。「はなわ」の名は材料の違いによる縄の種類や用途の区別上から来たもの。

はなんきれ〔名〕(1)妊娠5か月目に入ると生家から帯祝いとして赤い帯が贈られた。これを「花の布」又は戌帯・岩田帯・茜と言う。長さは、3尺3寸・7尺5寸3分・8尺・1丈と。赤・紅白・白と色はまちまち。(2)茜の産着を「あかきもん」又は「はなんきれ」と言う、ともある。

はねきする〔動〕鶏や鳥類の交

尾を「はねきする・はねきせる(羽根着する(せをる))」という。

はねぐる〔動〕畑の畔の土を鉤などを使いねあげる作業。壱州の畑は全体的に中央部が盛り上って(排水・面積)いた。従って年間には耕土が低い方へ流れる為、各畑毎に周辺に下った土を元に戻す必要があった。この作業を一般的には「くるあげ」と呼んでいるが、「そね」部は「はねぐる」、「こじり」は「きりたてぐる」で、又3～4年に1度は「土もち」をして、大がかりに、畑の周辺に下った土を戻す作業をした。これには「もっこ」という竹編み担架を用い2人1組で数組の若衆を揃え行なった。

はねのくる〔動〕手で物を払い除く。力で他を排除する。

はねみずこし〔名〕「はなみずこし」に同じ。

はは〔名〕専ら鶏のめんどりをさす。「てて(おんどり)」に対する語。

はば〔名〕はばのり。わかめに似ているが全体として小振り。食用になる、そとみ科の海藻。

ばばうち〔名・動〕神社祭礼に先立ち氏子が集まって社殿・神域・供舎をはじめ神社馬場(社前)・神幸路・中宮(摂殿)等の清掃手入れ注連縄張り等祭典直前の諸準備とその作業。

はばしか〔形〕はげしい。

は

ははどり〔名〕鶏のめんどり。
はは。
はばり〔名〕小石。砂利。
ばばん〔名〕老婆。おばばん。
 おばあさん。祖母。「ばやん」も同じ。
はぶ〔名〕だつ。魚名。
はぶつ〔動〕怒って顔をふくりますこと。「はぶってやすか・はぶって面・はぶつる・はぶてる」とも言う。
はぶてくさる〔形〕親しい間の中で怒って機嫌もよくならず、すねる。
ばぼー〔名〕(1)一般に男の子をいう。(2)兄。(3)下男(若い使用人)。
ばぼん〔名〕癩患者。
はま〔名〕瀬・そね以外の海辺の地の呼び名。砂地・がた地・小港等。
はまち〔名〕鯛。小鯛。
はまどん〔名〕神のお旅所。浜殿。離宮。神社祭礼時の神幸先。中宮。
はまぶく〔名〕海岸近くに棲む最小型の河豚。「すなぶく」ともいう。
はまやき〔名〕大鯛の尾鰭を張って丸焼きにし、鉢に食塩を敷いて盛り酒宴の席に飾り肴とする。
はみ〔名〕牛の飼料一般名。わらや青草を細かく切り、味噌や残飯水を混ぜ糠やふすまの類を加え作る食み。
はみおけ〔名〕はみを入れ牛に飼料を与える常備桶。

はみくさ〔名〕牛が好んで食む青草雑草類の総称。「あおぼり・あぼり・あをぼり」などとも言う。
はみどや〔名〕はみにするわらや青草類を置く小屋。「はみどや」である。
はもはも〔名〕横坐りして伏せる姿勢。牛の寝たさまに擬す。
ばや〔助〕「ばい・ばな・ばよ」に同じ。
はやし〔名〕綱曳き中に伴奏し、士気を昂める太鼓音楽。「はやし太鼓・寄せ太鼓」の別がある。囃す。
ばやばや〔副〕彼是と罵り評定して騒ぐさま。「ばいばい」に同じ。
ばやや〔名〕小型の鯢。
はやを〔名〕船具「はいを」に同じ。
はや〔形〕早よ。「はよせろ・はよせんか・はよしなあれ」。
ばよ〔助〕「ばな・ばや」に同じ。
はやけえ〔動〕早く来い。
はやけえはい〔動〕早く来い早く早く。
はやをそ〔副〕早過ぎる時刻に。「はやをそ起くるな(余り早く起きるな)」。
はら〔名・助数〕(1)鳥類巢籠りの度数を示す。「ふたはら目の抱卵・三はらかえ一た」。(2)多妻者の子とその母親との関係語。「本妻ばら・先妻はら・後妻ばら・妾妻はら」。
はらうみ〔名・動〕妊婦。妊娠

する。

はらうむ〔動〕(1)動物が孕む。妊娠する。(2)植物の孕状態。「稲がもとはらうむ(稲の出穂直前状況)」。

はらかく〔動〕立腹する。怒る。「はりかく・はるかく・はりけえた」。

はらせ〔名〕禪。「はだせ」に同じ。

ばらてぼ〔名〕大型の竹製背負かご。

はらぬむし〔名〕腹の虫。時による気分の違いや納まり様の悪さ加減。「腹ん虫の居所の悪か…」。

はらふーで〔形動〕腹放題。腹一杯。思う存分。「はらふーで食た」。

ばらぼ一さ〔副〕ばらばら状態。離ればなれ。散々ばらばら。「柄ぬ輪の切れち、ばらぼ一さえなっちしもた」。

ばらもんだこ〔名〕凧の一種。ばらもん。鬼凧の別名として用いられるところもある。宍岐の鬼凧には用いない。

はり〔名〕麦稈屋根葺に段を追って屋根に並べた稈を屋根裏材に締め付ける縄を通す為の針竹。先端を削り縄通しの小穴を開け、屋根師と小取(補助役)が屋根と屋根裏との間で協力し乍ら葺き進んで行く。建築材としての桙とは全くの別もの。

はりあげ〔名〕(1)農家の「にわ」には米俵等を年中高く積み上

げておくことが誇であり、一種の見栄でもあった。戸口を入った土間の壁側に張り出しの台を取付け板張りにし、「とうらつみ(俵積み)」の場にした。ここを「はりあげ・はりやげ・はりゃげ」等と呼んだ。俵を幾段にも積むには「くらしき・まくらしき」棒を置き、中の穀物が傷まないように空間をとるようにした。又ははりあげは「ほんまや(物置き)」内にも取付けた。(2)住家の屋根裏は天井裏であり年中煙でいぶされて絶好の場所であった。屋根葺きに大事に使い込まれた「はり(針竹)」他諸道具・材料の保管場所で「はりあげ」と言う。

はりきり〔名〕「れんこ」に似た鯛の一種。小鯛より稍大きめ。本鯛は頭の前から尾の割れまで1尺2寸あるのを一枚とし、以下7合5勺、5合と階級付けし、それ以下を小鯛。

はりこむ〔動〕仲間に飲食物を張り切って振舞うこと。きばって他に対して散財する。「はりこました・はりこーじよらした」。

はりじり〔名〕磁石の北(子)の逆南(午)の方向をいう。

はりだし〔名〕(1)針出し。麦稈屋根を葺き進むには、屋根裏で縄を通した針竹を受け屋根材に廻し、稈に載せた竹材とでしっかり締め付け稈を固定し上段へと葺き進む。(2)この

は

鉢出の仕事に当る小取人をいう。(3)本体から床を張出して座席を臨時的(どーぶれめえ一等)広げて作る席をいう。

ばりばり [副] (1)噛み砕き、引き千切る音。(2)威張って威勢のよい様。

はりまげ [名] かんこのき。とうだいぐさ科の本木。別に大戟科の「かんこのき」ともいう。

はりむかう [動] 反抗する。抵抗する。かかっていく。向かっていく。

はる [名] 原。野原。開けた土地。「原の辻・高野原・棚江原」。

ばる (動接尾) (1)あくばる(飽きあきする)。(2)高ばる(物の値段を高くいう)。(3)硬ばる(軟らかな物が硬くなりこびり着く)。動詞格を与える接尾のはたらきをもつ。

はるあすび [名] 春の野遊び。「ももの節句・はなちらし・はなよせ」等の春の遊山。「はるたて」とも。

はるいたみ [名] 春季になり出る体の不調や病氣。

はるいちばん [名] 春一番。春一。冬から春へ季節の移り変わりの中で、立春の後最初に吹き込む強い南風をいう。安政6年(1859)2月13日五島沖へ出漁中の郷ノ浦元居の漁民53名がこの強風により遭難した。以来春一番の語は気象用語として全国的に用い

られている。元居港頭八幡崎には遭難者の供養塔が祀られ高台には春一番の塔が建ち漁民のみならず多くの人々が訪れる慰霊の聖地となっている。

はるぎと一 [名] 春祈禱。気候風雨の変調や悪疫流行の予兆を喰い止め平穩無事の人々の暮らしを願って、春季に夫々の念仏講が中心となって、念仏祈禱を行なってきた。

はるごもり [名] 春講盛り。初午祭。はつまともいう。右部では多くは、「せじょうまつり」と呼ぶ豊饒(穰)祝を兼ねて行なった。

はるしあめ [名] 春始雨。春を呼ぶ雨。待ち遠い春厳しかった冬からの脱出を願う春遠からじの雨。

はるばえ [名] 春一番の後に吹いてくる南風をいい、一度吹き始めると仲々止まない。夏の「はるのかぜ」はおだやかに雨を運び、冬の南風は「やまぜ」といい大雨が降り、やがて突風の西風に変わる。これを「やまぜのかわし」といい、この時の大風を「にしのおとし」ともいう。然し、「冬のやまぜが別れ風」と言って、冬から春への季節の別れ目ともなるという。

はるはた [名] 秋に植付けをせず、翌春に大豆を植えるため、あけておく畑を「はるはた」という。

はるび [名] 腹帯。牛馬に鞍や

て一きを背負わせ固定するため、腹に廻し反対側で締め付ける。布を裂いて丈夫に絣った棕櫚繩に巻き、带状に平たく組み編んで肌ざわりよく作り上げる。この外胸に廻す胸帯も同様の形に作る。「はるび」は「はろび」ともいう。

はるる〔動〕(1)廻れる。(2)晴れる。

ばるる〔動〕露見する。ばれる。隠しておいた物(事柄)が表面化する。

はれー〔名〕腹へ。「たしのうじ、ねまらするよりや、はれー(腹に)入れちよけ(ちょかし)」。「はれえ」も同。

はれーし〔名〕^{はれし}敷い酒。葬儀の弔問者に施主側から供される浄めの酒。「はれーしゅ・はれえしゅ」も同じ。

はれもねあたるごと〔副〕痛い腫物にさわるようにびくびくして。相手の気を損じないように注意して。

はわく〔動〕掃く。「^{うちうち}屋内はわく」。

はんきゅー〔名〕土曜日。半休。

はんぎり〔名〕^{へい}鹽状の浅底炊事用桶。平桶で一般桶に比べ深さ半分以下。

はんけ〔名〕半毛。普段収量の半作。

ばんげ〔名〕晩。晩方。

ばんけもち〔名〕ばたもち。餅の上に餡をまぶした餅。

はんこ〔名〕半分。5合。酒・

焼酎の量に用いる。「焼酎ははんこお呉れ」。

ばんこ〔名〕(1)涼み台。(2)表の横戸の最下部を^{かど}檻に開くように取り付け、他方に脚をつけ、開いて縁台とする。昔、番地を番戸と言っていた。「お前の家の番戸は」「はい、松の木ばんこであります」と。「ばんこ」違いでした。

ばんごーし〔名〕ほとるのき。ほとるのき科の植物。

はんずる〔動〕はずれる。離れる。

ばんぞーする〔動〕仕事を企て、工面工夫して推進する。

はんちゃ〔名〕(1)半端。中途半端。ちくはぐ。(2)逆。反対。裏表逆。(3)半纏。袈裟。短かいうわっぱり。

ばんじゅー〔名〕頭丸く黄色の魚名。鯛の一種と。

はんで〔名〕はずれ。端。「^{はっ}畑んはんでえうえーちよけ(置いておけ)」。

はんでん〔名〕野良着・山着として腰丈長の仕事用上衣。単衣・袷など季節により着分ける。

はんど〔名〕水甕。井戸も遠く水道の設備のない時代の各家で、大きめの水甕を準備し飲料水炊事用水を確保してきた。主役はこどもや主婦。「はんどー・はんどがめ」ともいう。

はんによもんによ〔名〕半狂乱に近い行動をすること(する者)。

はんにな [名] 芸妓・酉婦等の口入れをする仲介人。

はんね [名] 風の種類。「とんび風」と同じ。

はんばくめし [名] 麦米半々(等量)に炊いた飯。半麦飯。

ばんばしら [名] 番柱。家屋建築で最初に立てられる柱を一番柱又は番柱という。竣工式に意味を持つ。

ばんぶ [名] 小児の遊具。2〜3尺の小竹の一端を割り、小石等を挟んで振り遠くへ飛ばす具。

はんべ [名] (1)裸。(2)腹這い。小児語。

はんぺら [名] 半片。半切れ。

ばんまえ [名] 巡ってくる順番。機会。順番。

ひ

ひ [名] 火・悲・忌などの文字が当てられる。死人がでるとその血族に「ひ」がかかるといって、神詣・祝事に出のを忌み諸事を慎む。親の「ひ」は子にはかかるが、子の「ひ」は親にはかからぬ。「ひ」は上にはかからず、下・横にかかり「いとこ」までかかる。「ひ」を報ずることを「ひをつぐる・ひ告げ」といい、必ず2人で使者に発つのが慣習であった。「ひ」のかかる日数は、(1)親の死50日間・同居家

族の死49日間・(2)伯叔父母の死35日間・(3)兄弟姉妹の死30日間・(4)従兄弟姉妹の死7日(又は3日)間といってきたが、地域差があり一定していないのが実情。

ひーな [名] いぬびゆ。ひゆ科草本。

ひーなぞーすいー [名] 盆にひーなを入れた雑炊を作り仏に供える習慣があった。

ひーなだち [名] ひとつ身の着物をいう。

ひーなる [形動] 火のように燃える。甚しく興奮したさま。「ひーなっちはるかく」。

ひーひー [副] 痛み・悲しみ泣く。

びーびー [名] (1)吹いてびーびー鳴る玩具。びーびーとも呼ぶ笛。(2)水。「びーびー飲む」。(1)(2)とも幼児用語。[副] 痛み・悲しみ泣くさま。「ひーひー・びーびー」に同。

びーびー [名・副] 「ひーひー・びーびー」に同じ。

びーびーをらび [形動] びーびーと激しく声をあげて泣き叫ぶさま。「びーびーおらび」も同じ。

ひーらぎ [名] ありどうし。あかね科の小木。幹に細長く鋭い刺を持つ。老人は殆んどこの小木を「ひーらぎ・ひいらぎ」と呼ぶ。いわゆる柵とは全くの別物。

びーる [名] 蛙。水中動物。体色は黒・黒褐色で扁平体。ひ

らひらと泳ぎ廻り、人畜に吸い付き血を吸う。

ひーろ〔名〕(1)蚕の蛾。(2)山間木の葉の上にいる或種の蛾も同様と呼ぶ。

ひあい〔名〕(1)日数。(2)日限。(3)日没迄の時間。

ひあき〔名〕「いみあき・ゆみあき」に同じ。忌明。きあけ。

ひいえ〔名〕^毒。毒。「ひえ」も同じ。

ひいえぐす〔名〕さびしがりや。「でーこんひき」と言うのに同じ。「ひえぐす・ひいえぐそ・ひえぐそ」も同じ。臆病者。

ひいえぶくろ〔名〕胃袋。「ひえぶくろ」も同じ。

ひいれぎいん〔名〕町村議会議員の新参者は古参議員の火鉢の火入れ役程度だったとの意。発言力や実績のない名ばかりの議員の意でもあった。

ひうち〔名〕(1)網の外側の綱。(2)隣す。マッチ。

ひおい〔名〕ひ負い。ひ負いの範囲は、死者の子・孫・兄弟姉妹・甥・姪・従兄弟姉妹とするが、地域により範囲や期間にも多少の差がある。「ひがかり・ひがかかる・ひくい・ひのかかちよる・ひのう(ひ負う)」などという。「ひをう」も同じ。

ひかい〔名〕(1)舟を内側に漕ぎ廻すこと。(2)休息所。休息。「ひかえ・ひかいえ」も同じ。

ひかいえ〔名〕子ども達の遊び

の中の用語。休息・休み・つきと言いつつ一時的に相手の追及をのがれる。現在の「タイム」。「ひかーいえ(え)」と叫び、タイムをとる。

ひかき〔名〕ト能。火掻き。炭火や灰等の処理に用いる電用品。

ひがないちんち〔名〕朝から晩まで。一日中。「ひがなひじゅー・ひして・ひしてじゅー」も同じ。

ひがます〔名〕甚だしくやせている。骨皮の状。干鰯。「やせ干鰯の如く」。

ひからう〔動〕ひがかかる。ひおう。

ひかりする〔動〕費用を出会者の頭割りにして負担し合うこと。「でーわり・ひかり・わりかん」ともいう。

ひかりもん〔名〕稲妻。閃光。光物。「ひかりもんのしおる(する)」。

ひがんぐみ〔名〕彼岸念仏の組。講中より更に小さい隣り組。「ひがんさか」とか単に「さか」ともいう。この組内で唱えられてきた念仏を「ひがんねぶつ」というが念仏の種類や内容は不詳。「ひがんぐみ」も同。

ひがんばんな〔名〕(1)蔓珠沙華。(2)「ごしょばん」即ち「くさぼけ」のことを言うともある。

ひがんぶー〔名〕彼岸頃に吹く風。

ひがんぶく〔名〕海岸近く藻の



中に棲み体色茶の小型ふぐ。
「もぶく」。

ひき [名] (1) 定置網の錘として
縄の網袋に石を入れ適所に沈
める。これを「ひき」といい、
作業を「ひき入れ」という。
(2) 蛙。「ちょうせんひき・どん
ごひき」など。

ひきあるかぶ [名] 小型の「か
さご」をいう。「あらかぶ」参
照。

ひきおや [名] 無尽講の主催
者。単に「親」ともいう。講
加入者を「子」といい「むじ
んのおや・こ」で成立。

ひきぎ [名] (1) 曳き木。犁を牛
に曳かせる折、綱に取り付け
てある「く」の字型の横木を
いう。この横木の両端は「て
一き」の左右から伸ばした2
本の曳綱の先端の輪に固定さ
れている。曳木の中央部にも
丸い小穴を開け、丈夫な棕
縄の輪を付け、この輪の中に
犁の「ねり」の先端に刺した
「ちぼ」を掛け牛に犁を曳かせ
る。(2) 粉曳きの石臼や粳摺り
の大臼を廻す「L・T」字形
の把り手。

ひきずり [名] 日和り下駄。ひ
きづりげた。こまげた。

ひきつく (動) 痙攣する。ひき
つけを起こす。

ひきとをし [名] 鶏・鳥・魚の
肉骨を炊き味付け、野菜各種
や麺類を入れ煮込み、鍋を
つゞき乍ら食べる。「ひきと一
し・ひきとおし」などといい、

主に冬季に囲炉裏を囲む団ら
ん食。郷土料理として好評。

ひきの一 [名] 曳き縄。ひき
の。犁・鋤・馬鍬等の農具を
牛に曳かせる為、「て一き」の
左右に取り付けた2本の曳き
縄(綱)。この綱の先端の輪と
農具とを連結する。「曳木」参
照。

ひきめき [名] 頭の前頂部の
名。幼児の未発達部として「ひ
くひく」と動くのでよくわか
る。「ひくめき・ひこめき・ひ
よめき・おどりこ」等といい、
ここを強く打つと命にかかわ
ると大事にする。

ひぐらし [名] あぶら蟬。午後
から夕方にかけて鳴くことが
多い。いわゆる本来の「**蟬**」
とは全く別である。本来の「ひ
ぐらし」はその鳴き方から「か
なかな」と呼び「かなかなん
鳴きおる」と別扱いで、声が
聞かれるのも人里を離れた限
られた山地内で。

ひぐれのとそー [名] 夕暮れ
時。

ひぐれまぐれ [名] 夕刻。意
を強めた用い方。「ひぐれえま
ぐれまかりでましち…」。「ま
ぐれ」参照。

ひぐわし [名] 小麦粉を練り中
に黒糖の餡を入れ、上に食紅
を少し刷いた菓子。これと「へ
そぐわし」は春の彼岸参りに
欠かせない菓子。

ひけえー [名] 控。ひかえをと
る。柱・棒など倒れないよう

三方四方へ綱を張り支えをする。「ひけえーする・ひけえーとる」という。

ひけつく〔動〕恐れおののく。「ひけひけする」ともいう。

ひけづな〔名〕「ひけえー」用の綱。

ひげぶく〔形〕もじゃもじゃした毛。「ひげえぶくいまめつちよる」。

ひこずる〔動〕引きのばす。言を左右にしてあれこれと事を引き延ばす。

ひこひこ〔副〕間断なく動き出入りするさま。「ぴこぴこ」も同じ。

ひざ〔名〕膝を折って正座すること。「おひざ・おしぎ・ひざする・ひざたてちすわる」等と用いる。

ひざたつる〔動〕正座する。

ひざつきだわら〔名〕膝付き俵。「こしかけだわら」参照。

びし〔名〕釣具。鉛の錘。

ひじぎ〔名〕肘木。農具。「ひきぎ」に同じ。

ひしてごーし〔名〕一日おき。隔日。

ひしてぞーさ〔名〕一日造作。一日がかりの仕事。「ひしてぞーさで済んじ良かった。二日もじゃつたら…」。

ひしなぶる〔形〕干上りしなびる。しなびてなよなよになる。

ひしゃぎだけ〔名〕麦稈屋根葺きの仕上げ棟包みに、太い呉竹を棟の大きさに合わせ切り縦にひしぎ開いて「かわら」

と呼ぶ竹編みを表裏の方向に押さえ止めるのに用いる。棟飾りの役もあり、奇数箇所につける。

ひしゃぐる〔動〕ひしげる。ひしく。つぶれ変形する。へこむ。ひっこむ。俚語に「石原菊^{いしはらきく} ひしゃげて出るわい」。「ひしゃげた・ひしゃげる」も同じ。

びしゃご〔名〕みさご。鷹類の鳥名。

ひしゃだい〔名〕ちしゃだい。ちしゃでー。「ひしゃでー・くろうち」ともいう。魚の名。

ひじゅーばた〔名〕日中機^{ひちゅうき}。機をその日のうちに立てその日の中に織り下すこと。生児の歯は下歯から生えるが、もし上歯から生えることがあったら、七機一反^{ななきはん}の着物を着せるか「ひじゅーばた」を織って着せねばならぬと。

びじんかずら〔名〕さねかずら。もくれん科。美人葛の意で、これを潰した糊状物を洗髪剤に使ったと。

びすご〔名〕赤ん坊。びーびーびすびす泣く児。「びつちよ」ともいう。

ひだい〔名〕赤味を帯びた鯛。

ひだりぎつちよ〔名〕左利き。「ぎつちよ」ともいう。

ひだりごーね〔名〕つむじまがり。

ひだりめえ〔名〕左舞い。勝手不如意のさま。「ひだりめーばっかりしをる」。

ひだるい〔形〕ひもじい。空腹だ。「ひだるか」も同じ。

ひだるご〔名〕ひだる神。時々食事をせず空腹でいると「ひだる神」がつくといい、子供に対して用いる。

ひつ〔名〕鍬や斧や道具類に柄をはめ込む穴の部分の名をいう。

ひっ〔接頭〕多少の強意と動きを表わす語。「ひっかくる・ひっからう・ひっさぐる・ひっさらう・ひっつかむ(る)・ひっかけちよく」。

ひっかがみ〔名〕「つとずね」の下部の名。

ひっかく〔動〕引き搔く。ひっさく。

ひっかけえゆる〔動〕ひっ抱える。抱える。

ひつぎ〔動〕「ひ」を告げる。「ひつげ」に同じ。死を告げる事であるが、敢えて「死」の語を明らさずに用いなかったのでは。「ひつぐる」も同。

ひっきりげた〔名〕胸下駄。「さしげた(さし齒の高下駄)」に対する語。

ひっくりなうえーち〔動〕後帰りする。「ひっくりなうえーち戻ち来た」。「あとぐりがえーち・ひっくりかえーち」。「ひっくり直して」。

ひっけしか〔形〕内気な。「ひっけしか女子」。

ひっこき〔名〕女が髪を束ねて

きりきり巻きにする結い方。

ひっこさぐ〔動〕搔く。ごしご

しと搔く。

びっしり〔副〕きっちり。密に。手厳しく。びしと。びしり。

ひっしょーらしか〔形〕荒々しく叱るさま。

びっしり〔副〕密生するさま。「びっしりをえ(生え)ちよる」。「べらびしり(一面に)・べらべたり」。

びったし〔副〕常に。いつも。しょつちゅう。

びったり〔副〕常に。不断に。年中。「びったり来ちよるとんなしけえー」。

びっちょ〔名〕嬰兒。赤子。「つうび(女性)」と「ちんちょ(男性)」の「び」と「ちょ」の結語、「びちょ」から生まれた語と解する人ありと。

ひっちんたぐり〔動〕鶏が産卵しようと頻りに巢を探すさまその行動。

ひっつかむ〔動〕掴む。しっかりと掴む(捕える)。ひっつかむる。

ひっぱり〔名〕血統。血縁。親戚。

ひつまぶり〔名〕櫃守り。櫃に納めてある着物の中の最高級品。

ひづら〔名〕顔を火のように真赤に。

ひづらはる〔動〕赤面して立腹する。「ひづらはっち、はるか」。

ひてー〔名〕^{ひて}額。「ひてーぐち・ひてえ・ひてぐち」も同じ。

「ひてじろ（額白）」。

ひでー〔形〕ひどい。極めて厳しい。「ひでー寒か・ひでーせからしか」。(名)「ひ代・ひ米」。死者の血族は葬儀の日、「ひのめし」として別火（別釜）の賄を受ける。その為飯米として白米一升（一生の別れ）を香典の他に持参し供える。これを「ひめー・忌み米・ひでー」という。「ひでー」を供する人は、死者の子・兄弟姉妹・甥姪・従兄弟姉妹の血縁者。別説に、49日寺送り法事の際の親族知己からの供えを「ひでー・ひめー」というともある。又香典の外には何もしないとする地区もある由。

ひでくる〔動〕ひりひりと強く痛む。「ひでる」より更にひどい痛み。「ひでくりやらく」ともいう。

ひでる〔動〕ひりひり痛む。「どーいひでるもんない」。

ひどか〔形〕(1)無残な。残忍な。残酷な。(2)生命が危ぶまれる。むずかしい病状。「こりゃーひどか」。

ひとかたき〔名〕一食。一回の食事。

ひとぎとー〔名〕人祈禱。虫祈禱に対して、人々の無病息災・健康を祈る祈禱。毎月1日・15日地区のお堂（釈迦堂・阿弥陀堂・大師堂等）で念仏を唱える。一般寺院でも行なう。月3回の人祈禱もあると。

ひどこ〔名〕舟・船の上での「か

まど」台となるもの。箱の中に土を塗り込めて作り炊飯料理床とした。

ひとたま〔名〕一滴。極く少量の水や飲物。「俺えもひとたま飲ませろ」。

ひとつこつ〔名〕同じ事。「ひとつこつこつ同じこつたい（たえ）」。

ひとつしば〔名〕ひとつば。うらばし科の羊歯植物。

ひとつも〔副〕全然。少しも。ちっとも。全く。「ひとつも知らん・ひとつも聞いたこと無か・ひとつも言わん（決して言わん）とばい」。

ひとつもん〔名〕同じ物。同一形・同一内容のもの。「ひとつもんな無かった・ひとつもんな同じもん」。

ひとてがた〔名〕一手形。前畑を年売りするのに、6年間までは一手形で、10年間になれば二手形になるきまり。手形証書書替更新時の用語と。

ひとはな〔名〕少時の間。少しの時間。「ひとはなきばった（働いた）・どー、ひとはな加勢しゅうか（手伝おうか）」。

ひとはなしごつ〔名〕一時的な急ぎの仕事。「しをとときしごつ」に似る。

ひとままじん〔名〕好人物。お人好し。他人の言いなりになり易い人。「ひとままにある」ともいう。

ひとよにし〔名〕冬季の南風を「やませ」といい、雨が降り夜



半から突風の西風に変わる。
この西に変わる突風を「ひと
よにし」とか「にしのおとし」
という。

ひとりだろ〔名〕一人占めする
こと。「甘か物なひとりだろす
る」。

ひとりゆーど〔名〕一人者。
親も子もなく家業を為す男手
が主人一人きりになること。
「ひとりゆーどで、毎日仲々忙
しか」。

ひどる〔動〕穀物その他、物を
さっと拭けて日光に当て干す
こと。

ひな〔名〕雌鯨の陰核をいう。
ひなわる〔動〕悪くなりかけた
天候が次第に回復し好転する。
「ひなおる」。

ひにちきめ〔名〕婚礼のH取り
を決める。「きめざけ」の日に
仲人と婿嫁双方の親で話し合
い決めた。婚礼は春秋と正・
二・四・八・十一月の前半の
大安の日が多く選ばれていた。

ひねりみの〔名〕蓑の「ずぼ」
を抜いて作った蓑。毛布・毛
套流行前の他所行き用雨具だ
った。

ひのうち〔名〕死に伴う血族
者の忌み慎しみの期間。普通
は49日間。

ひのおき〔名〕熾火。熱した炭
火。「ひのとぎ」も同じ。炭
火。

ひのし〔名〕当り日。命日。火
の日。

ひのてりあめ〔名〕日和雨。

晴天の日天の一角から降る通
り雨。

ひのとぎ〔名〕薪が燃えた後の
炭火。真赤に燃えている炭火。
おきび。

ひのふつくら〔名〕火の懷。
鍛冶の金を焼く所（中心部）。

ひのめし〔名〕死者葬儀の日、
「ひおい」の血族が受ける施主
側からの賄。「ひ・ひでー」参
照。

ひばずーしいー〔名〕干（乾）
葉雑炊。大根の干葉等を入れ
て炊いた雑炊。「ひばずうし
い・ひばぞうしい」。

ひばづけ〔名〕大根の葉茎を日
干しして米糠や味噌に漬け込
んだ漬物。

ひばつを〔名〕蔭膳。「ひばつ
お・ひばつほ・ひわつほ」な
どという。旅・他国・戦場に
赴いた者の無事安全を祈り留
守宅でする食膳湯茶。

ひはんになち〔名〕半日。

ひびく〔動〕(1)ひび割れする。
割れ目がつく。(2)負担がかか
る。何がしかの影響を受ける。

ひぼ〔名〕ひも。紐。「ひぼん解
けちよる（ほとけちよる）」。

ひぼーやぼー〔副〕とるもの
とりあえず。すぐに。「きぼー
やぼー」に同。

ひぼかし〔名〕魚類の干物を焼
き軟らかにほぐしたもの。

ひぼこし〔名〕火を熾し具。火
吹き竹。「ひおこし竹・ひぼこ
し竹」も同。

ひぼこり〔名〕日向ぼっこ。

ひぼせん〔名〕紐銭。生児33日目の宮参りの後、親戚知人から紐に通した穴あき銭を着物の後襟に付けて祝いを受けた。「産銭・祝袋」等ともいう。

ひぼつ〔名〕水持ちの悪い状況。「乾干す」である。水持ちの悪い水田を「ひぼつだ（乾干す田）」という。乾田。

ひましーなっちょる〔名〕飲食物・魚類が日時を経過して、食用に不向きになったもの。「ひましーなる・ひましもん（日増し物）」ともいう。

ひまづやし〔名〕暇費やし。たいしたことででもない事柄に貴重な時間や労力を費やさせる（やす）。対者への恐縮又は謙遜を能める儀礼語として添え用いることが多い。

ひまどり〔名〕暇取り。手間隙かける。他の為時間労力を提供する。「おひまどりしましち、どうも…」。

ひまひっかぐ〔名〕暇を欠く。暇をつぶす。自分の時間を他の為に使う。「ひまひっけーち」ともいう。

ひみずしゃくだけ〔名〕日見ず尺竹。柳の木で作った物差しは、衣類裁断に口を選ばない。

ひむし〔名〕手足の裏に小穴状のものができる皮膚病。

ひめー〔名〕(1)ひ米。「ひ・ひでー」。(2)穀類の乾燥度。干目。「ひめーん良か・良うなか（悪るか）」。

ひめごじょ〔名〕(1)のどびこ。のどちんこ。懸壺垂。(2)女兒を得た初八朔の節句に紙雛を折り、親戚知己に配る。この紙雛をいう。姫御女。

ひめつばき〔名〕山茶花。つばき科。

ひめとこ〔名〕ささのはべら。やなぎば。べら科の小鱼名。

ひもーり〔名〕口廻り。右廻りに事を進めるに用いる。東から南・西・北方向の太陽の移動方向順に諸事を運ぶ。逆方向の進行を忌むことあり。

ひもとき〔名〕満3歳（数えて4歳）の11月15日、紐着きから腰あげした着物に帯を結んだ。着物は生家から贈られた。

ひもんだち〔名〕(1)火物断ち。自ら精進潔斎すること。(2)来客に何の鬱忝もせず帰すること。

ひゃくかんめもち〔名〕百貫目持ち。金持ち。長者。「ひゃくくわんめもち」も同じ。

ひゃくけんびき〔名〕蛙の一種。「ちょうせんびき。ひゃつけんびき」も同じ。

ひゃくひろ〔名〕大腸小腸。腸。百尋。長い消化器管の名。

ひゃくまんべんのでーこ〔名〕百萬遍の太鼓。「さねもり祈禱」に打ち鳴らされる祈禱の太鼓拍子。

ひやしりこぼし〔名〕無節制に笑う者。

ひやしる〔名〕冷汁。味噌を冷水に溶き、胡瓜・紫蘇などを入れた汁物。夏季の料理の一

品として喜ばれる。

ひやひや〔名〕 情人。よか人。

「ひやひや持ちちょらすとちゅうばい」。

ひやま〔名〕 「てんとぶね」の「なかのま」に設けた炊事床。舟で鍋釜・かまど・水・炊事用具を置く間。

ひやめし〔名〕 (1)夜遊び習俗に伴う語。「ひやめし食わされた(他の男と接した女に後から接する)」。(2)拙劣半人前の技能職工。「ひやめしでーく(冷飯人工)」。間に合せ。

ひゅーつら〔名〕 片面。真正面を外れ片面。「ひょーつら」も同じ。「帽子やひゅーつらへかぶつちよる」。

ひゅーとり〔名〕 日傭い稼ぎの人。「ひゅうどり」も同じ。日傭労働者。

ひよ〔名〕 轆。「ひよん来た」。

ひょーぐ(動) おどける。「ひょーぐる・ひょーげる(ふざける)」も同。

ひょーじょー〔名〕 評定。相談。準備。打合せ。「ひょーじょーもんじょー(準備相談)」も同じ。

ひょーり(形動) ふざけた態度言動。こっけい。のぼせもん。「ひょーりのような事するな」。「ひょーぐ」の同系かと。

ひょうじょうのき〔名〕 ばくちのき。ばら科の植物。名前がわからず評定の末の命名とか。

ひょくつと〔副〕 急に。突然

に。「ひょくつと戻つち来たつばな」。

ひょくひょく〔副〕 予告もなく度々。

ひょくりひょくり〔副〕 唐突に起こる事象・言動。ひょくひょくに発生。

ひよけ〔名〕 水田に入る冷水や清水を一時的に遮断し水温調節する小溝。

ひよこ(形動) 落着きのないさま。

ひよこぐさ〔名〕 はこべ。はこべら。春孵化したばかりのひよこへの草。

ひよこつと〔副〕 突然。急に。思い出したように急に。「ひょくつと」。

ひよつくり〔副〕 今すぐに。急に。「ひよつくりの間えにや合やせん・ひよつくりの事じゃなか」。「ひよつくりひよつと」も同じ。

ひよひよ〔名〕 青二歳。未熟者。

ひよりひより〔副〕 うろつき落着きのないさま。

ひよりもうし〔名〕 晴天祈願の催し。

ひよろきん〔名〕 剽軽者。調子に乗り易いもの。「ひよろきんたん・ひよろきんたんづく・ひよろきんづく」。「とんびんづく・とんびんかんづく」も同じ。

ひよん〔名〕 おどけ者。「生まれつき、ひよん・ひよんな男」。「ひよんかい・ひよんかい」著

も同じ。

ひら〔名〕(1)平。祝宴の本膳に付く野菜物の盛り合わせ料理。「おひら」と呼ぶ。但し仏事ではこの種の料理を「煮菜」と呼び(材料野菜は略同一)区別する。(2)辺。辺り。側。「びら・へら・べら」と同じ。「あっちひら(びら)・こっちひら(へら・べら)じゃ見かけんお人のよう…」。

ひらあじ〔名〕かいわり。魚名。

ひらかす〔動〕搗いた丸麦は先ず別炊して割れ開き目をつけておく。それを白米と合わせてご飯に炊き上げ食膳に上る。後に精麦法が機械化されて「押し麦」ができ、「ひらかす」過程が各家庭で省略されるようになり随分助かった。「押し麦」は「ひしやぎ」又は「ひしやぎ麦」と呼び、「ひらかし麦」は農家からも消えた。

ひらくち〔名〕まむしと呼ぶ毒蛇。他種に比べ頭部偏平、三角形横広。

ひらくちいちご〔名〕へびいちご。野いちごは食べられるのが多いが、この「ひらくちいちご」は食えない。

ひらくちむし〔名〕山野・畑の草木の葉につく蚕のような虫全体を呼び、色彩形態各種各様。

ひらくちわら〔名〕ひらくちの巣窟帯。何故かひらくちの多い所がある。

ひらす〔名〕ひらまさ。魚名。
ひらたぎ〔名〕錦木。幹に羽根をもつ。にしきぎ料の植物。紅葉美有り。

ひらだご〔名〕小麦粉・米粉をこね平たく延べて煮上げる団子。「ぬべだご・のべだご」とも呼び外館で食べる。

びらびら〔名〕旗・布・紙など風にひるがえり動くものの総称。「ひらひら・びらびら・びれびれ」も同じ。

ひりつける〔動〕産みつける。「へーご(蠅の卵)ひりつける」。

ひる〔動〕(1)箕・唐箕の類を用いて穀物の種実と殻とを選別する。(2)排泄する。出す。「屁ひる・糞ひる」。

びる〔名〕蛭。ひる。「びーる」に同じ。水中に棲む虫。

ひるー〔動〕拾う。ひるーた(拾った)。「ひるう」も同じ。

ひれー〔形〕広い。「ひれー屋敷」。

ひれーもん〔名・動〕拾い物。「ひれえーもん」も同じ。物を拾う。

ひろーず〔名〕がんもどき。ごぼう・にんじん・他野菜類と潰した豆腐を混ぜ味付けし、丸めて油揚げした料理品。「ひろーず」ともいう。

ひろぐ〔動〕尋をとり数え乍ら物を測る。一尋は成人男子が両手を左右に開いた長さ1.8米(一間即ち六尺)位とされる。

ひろごんめー〔名〕軒先屋根
下に張る板。建築用語。

ひろしまいき〔名〕人が死ぬ
こと。「とうとうひろしまいき
さした」。広島県宮島の人^はは島
内に墓地が置けない（全島厳
島神社神域）為、対岸の広島
市側に葬られる慣習である。
它岐島でも昔からこれを借り、
人が死亡することそのことを
「広島行き」と。

ひろつく〔動〕物欲しげに子ど
も達がうろつくさま。ひろひ
ろする。

ひろどる〔形動〕手間隙がいろ
いろかかる。披露どる。雑用
諸掛りがかかる。手数がかか
る。

ひろぶた〔名〕祝宴の席に「に
しめ」を盛る器及び盛られた
料理品を指す。凶事にはこの
語は用いないで「にしめ」。

びろめく〔動〕人の動き歩きが
人目に触れるようになること。
「永う見えおらじゃつたが、こ
ぬ頃又びろめくごつならした
（びろめきださした）」。

ひわ〔名〕枇杷。在来種山野自
生の小粒のびわを「ひわ」と
いい、「びわ」と区別して呼ん
でいる。

ひわかれ〔名〕やまかがし。蛇
の一種。この蛇に噛まれると
その日のうちに死ぬと言うが、
毒はない。「ひばかり」とは異
なるが名はそれから来たのか。
黄・紅・青等のはっきりした
色彩紋様をもつ。

ひわずいー〔形〕ひ弱な。病弱
な。弱々しい。「ひわずか」も
同じ。

びわなく〔動〕接ぎ口が離れて
隙間を生ずること。「あぐちゃ
く」参照。

ひわるる〔動〕ひびわれる。割
れる。

ひをすえー〔名〕火抑え。大黒
柱と小大黒の間の小障子。ひ
を（お）さえ。

ひん〔接頭〕稍強意。「ひん舐め
る・ひん曲ぐる・ひんよがむ」
等々。

ぴん〔名〕おだてに乗り易い
者。「ありゃぴんじゃけに」。
「のぼせもん・そりゃがりも
ん」などと同じ。

ひんがんどうら〔名〕家屋新
築上棟式に「すすり粥」を炊
き、藁で編んだ「ひんがんど
うら」と呼ぶ苞様の物12個に
盛り新築柱根に供え、一番柱
に「かい（粥）」を進ずる時は
「地の神所」「火の神所」「宅・
田の番神」「家棟権現」「家大
神」「作れば狭ばし又せばし、
また一軒造って、ふーらんし
ょ」。同様の祭詞を五番柱まで
繰返し行ない、六番柱で残り
7個の「ひんがんどうら」全
部を供え同様に祭詞を唱え納
める。この祀り方にも地域差
家風の違いがある。ひんがん
とは「いびつな形」、ごうらは
「かわらけ・土器」で「いびつ
な形の容器（ひんよがんだか
わらけ状の入れ物）」という事

なり。

ひんがら〔名〕すが目。やぶに

らみ。斜視。「ひんがら目」。

ひんがん〔名〕春秋の彼岸会。

「ひんがん、参り・団子・供養・の中目」。

びんぐしこでー〔名〕髻櫛程

の小さい鯛。小鯛。髻櫛はび

んの髪のはつれを整える小櫛。

びんごーり〔名〕髻行李。化粧

箱。

びんこしゃんこ〔副〕一端上

れば他端下り、他端あがれば

一端下るといふ具合に安定

せぬさま。

ひんごよんご〔副〕曲りくね

るさま。

ひんす〔名〕貧相。「ひんすひっ

かるうちよる（いかにも貧乏

相を背負い込んだ姿だ）」とも

いう。

びんた〔名〕横^{よこ}面。頬。「頬た

ん・びんたん」も同じ。

びんつけのき〔名〕はまくさ

ぎ。こくさぎ。常山。「うしく

わず・ごめごめのき」ともい

う。くまつづら科。

びんつけばな〔名〕つゆくさ。

「ちんちろばな」に同じ。つゆ

くさ科の草本で花を指すこと

が多い。

ひんなぐる〔動〕投げる。引張

り投げる。

ひんなむ〔動〕食う。「ひんな

むる」も同じ。「ひとりてひん

なむる」。

ひんなめけーなめ〔副〕ひん

なむに同じ「食う」だが、「残

りやあ奴がひんなめけーなめ

食うちしもた」と。

ひんねぶる〔動〕(1)死ぬ。ねぶ

る。(2)開いた目を閉じる。目

をつぶる。

ひんのむ〔動〕ぐっと呑み込

む。「ひんの一だ」も同じ。「種

ひんのむ（ひんの一だ）」。

びんばた〔名〕巫女。市女。

びんびん〔名〕絃楽器。〔副〕

(1)鋭刺さ。人の健康さ。(2)魚

肉の新鮮さ。

ひんまぐる〔動〕曲げる。押曲

げる。

ひんまげけーまげ〔形動〕い

い加減適当に処理する。「よか

くれーん・まげつくる」など

に同じ。「ひんまげけーまげ、

よかくれーんに作った」。



ふ

ふ〔名〕運。まん。めぐり合

せ。「ふの良か（悪か）」。

ぶ〔名〕部。厚味。「ぶ厚か（薄

か）」。

ふー〔名〕ふー虫。かめ虫。悪

臭ある害虫。くさがめ（色・

形各種）。

ふーいー〔名〕風容。体裁。

風采。「ふーいー・ふーえ

ー・ふーよー」。

ふーかぶり〔名〕頬かぶり。ほ

ほかむり。「ふうかぶり」も同

じ。

ふーかぶりしちよる〔形動〕

知らぬ振りする。交際の義理を怠り知らぬ顔を通す。ほほかむりしている。

ふーがまで〔名〕かまち。一隅。周辺。

ふーく〔動〕惚ける。馬鹿づく。正常判断を失つての言動。「ふーくる」。

ふーけ〔動〕ほけ。ぼんやり。夢中になり我を忘れる。「ふーけづく」。

ふーけごと〔名〕たわごと。

ふーけもん〔名〕ぼんやり。馬鹿者。

ふーずき〔名〕ほおずき。なす科。

ふーずきのき〔名〕いぬびわ。くわ科。

ふーぞく〔名〕外見。「麦のふーぞくが良うなった・ふーぞくが悪か」。

ふーぞくとーされ〔名〕意地悪者。

ふーたぬっか〔形動〕なまぬるか。ちがひ明かぬ。気が張らぬ。「ふーらぬっか・ふーたぬるか」も同じ。

ふーだま〔動〕食物を頬張り食う。

ふーだまとる〔動〕いかにもうまそうに物をがぶがぶ食うこと。

ふーたん〔名〕頬。「ふーべた・ほーたん」も同じ。「ふーたん張るぞー」。

ふーづき〔名〕ほおづき。玩具・植物・海のほおづき共にいう。頬ずき。

ふーつらかやす〔動〕怒って頬をふくらます。「ふーつらく」も同じ。

ふーつらこ〔名〕ふくれ面する子。

ふーで〔副〕放題。名詞に従い副詞格を与える。「腹ふーで（腹一杯）・口ふーで（口はばったい）・寝たかふーで」などと用いる。

ふーてぬるか〔形動〕生ぬるい。「ふーらぬっか」も同。「はっしらつ」と。

ふーはんで〔名〕風はずれ。他人といつも行動を一つにしない者。

ふーめく〔動〕自慢する。

ふーやく〔名〕簡略。省略。こみにする。他の物で代行（用）するを「ふーやくする」という。略式で済ます。

ふい〔名〕冬。「ふいよりや風が寒か」。

ふい〔名〕鰯。魚の名。「ふいなめなあれ（ぶりの刺身を召しあがれ）」。

ふいえふき〔名〕(1)みずかまきり。水棲動物名。(2)ふえふき鰯。魚名。

ふいえん〔名〕生魚。鮮魚。「ぶえん」。ぶえんは無塩即ち塩漬でない物の意。

ふいじんむし〔名〕「いーむし・すー・ふゆむし」に同じ。参照。

ふいとし〔名〕昨年の冬。迎春の後年末・暮れの頃を呼ぶ名。「ふゆとし」に同じ。「ふいとし

時分な色々と…。

ふいふい [名] 昆虫等の虫一般名。「ふいふいのへーをる(這ってる)」。幼少児用語。

ふか [名] ぎんざめ。魚の名。

ふかし [形] 深い。「昔かるふかしが間柄たい」。

ぶかぶか [副] (1)煙草をふかすさま。(2)喇叭を吹くさま。(3)物が水に浮く。

ふかり [名] 深み。「ふかりい候る」。

ふきかぶり [名] 新築家屋の屋根葺。吉日を選び祝い事をする。「ふつかぶり・ふきおろし・むねあげ」ともいう。屋根で太鼓を打ち祝謡・餅撒き・柱粥・すすりこ・祝宴・鍋墨塗り等々大工・施主・祝客大いに賑う。

ふきげ [名] 顔・首等のにこ毛。「ふくげ・ぶつげ」ともいう。

ふきつくる [名] 吹き付ける火起こし。枯松葉等に火の熾をのせ息を吹きかけ火を焚き付ける。

ふきの [名] 拭き布。拭巾。「ふきのー」も同じ。「しきの(ー)」参照。

ぶく [名] (1)忌服。「ぶくの内」。(2)泡。泡ぶく。ぶくじょう。「ぶくじょーん立ちをる(ぶくぶく泡立つ)」。

ふくいり [名] 福入り。正月4日の行事。餅と米と野菜類を材に雑炊を炊き、神仏に供え家族も共に食べる。家に福の

神を入れるとして座敷の外縁の戸・障子も少し開く。これを「福入り」と言い雑炊を「ふくいりぞーすいー・ずーしー・ぞーしー」などと呼ぶ。「ふくいれ」も同じ。

ふくいれもち [名] 福入り雑炊に入れる餅。正月餅を搗く時、臼から上った餅を千切り、揉まず丸めずそのまゝにして12個(閏月のある年には13個)月数だけ別に作る。尚一臼から12個(13個)とるのを忌み、少なくとも二臼以上から作る慣わしである。

ぶくげ [名] (1)仏具(ぶつぐ・ぶぐ)・仏前に供える器具、饌具ともいう。(2)仏供(ぶつぐ・ぶつぐ・ぶく)・仏に供るもの、特に米の飯や香華。この2つの仏前用容器名(ぶつぐ・ぶぐ)と供え物名(ぶつぐ・ぶく・ぶつぐ)が互いに転訛し合って、「ぶくげ」と呼ぶようになったのでは。尚「ぶつげ」とも言い、「ちゃとぶくげ・ちゃとぶつげ・ちゃとぶつげ」と日常的に用いられている。

ふくざけ [名] 福酒。元日に甘酒を造り神に供え、家人も飲んだ。

ふくじゅ [名] 障害児。「げいじ」に同。

ぶくじょー [名] 泡。ぶく。「ぶくじょ・ぶくじゅ・ぶくじゅー」とも。

ふくぞーり [名] 福草履。正月



に履くぞうり。大晦日の朝庭(土間)に揃えて用意しておく新ぞうり。

ふくだたみ〔名〕福量。正月には座敷神前に是非一枚は新畳を買い敷く慣習があった。

ふくだむ〔動〕膝を折って坐り前に伏せること。

ふくと〔名〕河豚。ふぐ。「ふくとう・ふくとー」ともいう。

ふくふく〔動〕(1)内心に憤懣の情を藏するをいう。(2)氣息が絶えかかって奄奄たるさま。

ふくましか〔形〕腹が張り、ふくれ氣味を強く感ずる状態。

ふくら〔名〕ふくらみの入った状況。「ふくらぬ入っちょる」「ふくらぬいる(ふくらみが入り袋状になる)」。

ふくりゅーち〔名〕触の共有地。山割りの折に出た端数地を公平の為、触の共有地とした。

ふくろご〔名〕異状分娩の一つで袋子で生まれる。袋子は幸せになると。

ふくろにへーる〔動〕袋に入る。封じ込め状になる。昔、井条植え前の田植えで、植え遅れ一人だけ封じ込め状になることがあった。

ふくろぼ〔名〕舟の帆の名で、日本在来型の帆をいう。

ふけ〔名〕深田。深く泥のぬかる田。

ふけぬいる〔動〕穀類やお茶っ葉にかびが生えること。「ふける」も同じ。

ぶげんしゃ〔名〕長者。資産家。分限者。ごうかさま。おやかたさま。

ふし〔名〕親方子方風の団体。父子。小崎番は肥後屋・泉屋の二つの「ふし」に分れ、問屋と漁士の間は親分子分、主従に似た関係で結ばれていた。

ふしのき〔名〕ぬるで。うるし科。

ふしふし〔副〕さめざめと泣くさま。

ぶしめえー〔名〕諸事季期に間に合わず仕上り遅延するさま。不仕舞。

ふしゃく〔名〕朽杓。ひしゃく。

ふじょーにち〔名〕不成就日。悪日として種子播き等を忌避する日とす。

ぶしょうのき〔名〕むらさきしきぶ。くまつづら科の植物。

ふじょうばれえ〔名〕不淨戒。講中の山役が墓穴を掘り上げた後、戒酒を飲み交わしたり、海岸近くでは海水を浴びたり、喪家の風呂を浴びたりして不淨を祓い清める行為や、葬儀参列者が受ける施主側からの祓酒や、埋葬・葬儀の後西向きに立たせ人々の背後から読経する「おはれい」も不淨戒。その上49日寺送り法事供養後にも更に精進戒にして従前の生活諸式に戻し区切りをつけている。

ふす〔動〕植え込む。「種をふす・

諸をふす。「ふする・ふせる・ふせこむ」も同じ。
ふすこく〔動〕ぐずぐずとむずかる。
ふすぶる〔動〕いぶす。煙で熏す。「ふすべる」も同じ。
ふすぼりにし〔名〕「どろにし」に同じ。参照。
ふする〔動〕当てをして衣類・網の破損を繕う。「ふせる」も同じ。
ふせ〔動〕繕い。「ふせる・ふせする」も同じ。「ふせぎれ(当て布)」。
ふせてぼ〔名〕「ふせぎれ」入れ簗。
ふぜむせん〔動〕素振りもせぬ。風情もせぬ。顔にも出さない。「ふぜもせぬ」も同じ。
ふたいし〔名〕「かぶりいし」に同じ。
ふたぐ〔動〕塞ぐ。遮断する。
ふたところね〔名〕うたた寝。
ふたほめ〔名〕二穂目。(1)「あらき」にはじめて作る麦が一穂目で、次にその後に作る大豆を二穂目という。「あらき」の土地は痩せているので肥料を充分に施す必要がある。そうしておけば二穂目の大豆もよく穫れる。(2)「あらき」の次の年に作る麦も二穂目という。畝を太く種子を少なく播くのが要領である。
ふたまた〔名〕人力で土を掘り起こす二本爪の農具名を二又。三つ又・四つ又等も目的等によって使い分ける。因みにT

字形の「つるはし」、L字形の鋭い根切り等一本爪の掘具も色々。
ふだもん〔名〕札者。旧藩時代の法定下人。農民を徴用支給した。
ふちかた〔名〕食い扶持。食糧。
ふつ〔名〕^{フツ}艾。きく科の草本。「ふつ餅(団子)・くさ餅(団子)・よもぎ餅(団子)の材料の一」。
ふつぎれ〔名〕嫌悪。「ふつ」は全くの・全然の意味働き。「ふつ嫌れーしち来もせん(全く寄りつきもしない)」。他の用例不詳。
ふつくら〔名〕懷。ふところ(具合)。「ふつくろ」も同じ。
ふつくらつ〔形〕豊かでふくよか。ふんわり軟らか。「ふつくらつ」も同じ。「ふつくらつ肥えちよらす・饅頭がふつくらつでけた・飯がふつくらつ炊けた」。
ぶづくり〔名〕土地を引き当てに金を貸し、その利息として作物を無償で作り穫る。年限内に元金を返済しない場合は、その土地は債権者の所有となる。
ふっさり〔副〕ぐっすり。「ふっさり寝入った」。
ぶっさんこ〔名〕ぶらんこ。「ぶっさんこする・ぶっさんする」も同じ。
ぶっしょ〔名〕供養・水祭り済ませた後、僧の指示で、仏前



に供えた飯の類を膳ごと受け持ち廻り、血すじの者の間を数粒ずついただく。膳は一廻り終るまでおろさないでこの儀式を終る。「おぶっしょ」戴くという。

ぶつつく〔動〕顔や頬をふくらませて、ぶつぶつ不平をいう。

ぶつつり〔副〕決して。絶対に不可・不承知を「あいや、ぶつつり」と言い切る。「ぶつつりばな・ぶつつりやめた」などと用いる。

ぶで〔名〕針箱に類する女性の小物入れ箱。婚礼用具の一。現在は使用しないと。

ぶでーこー〔名〕菩提講。仏様の正月といい、新年初めて仏に念仏をあげる。旧暦正月18日の行事。「かねおこし・ぼでーこー」ともいう。

ふてーこつ〔形〕横着な。ふてぶてしい態度。「ふてぶてしか」も同じ。

ぶてぶて〔副〕絹織物などずっしりと重々しいさま。

ぶと〔名〕(1)烏賊の一種ぶといか。肉厚の良品。(2)あぶ(魷)の一種。人畜を刺し害する。

ふとたま〔名〕太玉。神楽舞の名。大々神楽の一つ、榊と鈴を持ち舞う。

ふとなる〔動〕育つ。成長生育する。大きくなる。身長が伸びる。「ふとる」も同じ(肥満の意味でなく、成長で)。背丈の伸びを競い合う「ふとり石」もある。

ふないそ〔名〕舟を使つてする磯物獲り。

ふないわい〔名〕船祝い。旧暦正月2日乗組が集まって各員所定の位置に就き、明きの方に向つて乗り初めをする。大船では一同座に着いて船頭の音頭で祝い唄を唄う。その後盛大な酒盛りが始まり、問屋・親戚・近隣から祝い酒も贈り届けられる。「ふなおろし」ともいい大いに賑う。

ふなぐろ〔名〕舟の競漕。氏神社祭礼に漁村において行なわれてきた。「ふなごろ・みーきぶね」ともいう。子供達の遊び競走に「みちつぐろ」というのがある。つぐろの「ぐろ」のものは「くらぶ・くらべ(競べ)」であろう。「押しくらまんじゅう・走りくら(ぐら)しゅうや(しようよ)」。自然、くら・ぐら・ぐろ・ごろと転訛したものと解したい。

ふなしとぎ〔名〕吸盤で船に吸い付く種類の魚の名で、この魚が沖中で船を止めて人間に害したり、綱を伝つて船に上ってくるなど漁士の間では考えられていたと。

ふなたで〔名〕舟船を陸揚げして船底に付着した貝殻を取り除いたり焼いたりして整備する作業。「ふねたで」。

ふなだま〔名〕舟霊・船霊様として帆柱座に祀られる女性神という。船霊様が漁師の篤い信仰を得ているのは、船の守



り神・海上安全の神様と信じられて来たことによる。舟・船と玉・魂・霊の字が当てられている。

ふなだまさまがしげる〔名〕

(1)漁が時化たり、大漁になる前には船の周りや本柱の周囲で笛を吹くような声、チリンチリンという音が右廻りに移動しながら聞こえたり、漁師の袖を引いたりもする。これを「ふなだまさまがしげるとか(しげらっしゃる)」という。嬉しい時は嬉しく、心配な時は悲しそうに。(2)船霊様は波静かな夜の港の船着場では、「チーン・チーン」とか「リーン・リーン」という音をたてると言われているが、時化などがくる2〜3日前からは「チン・チン・チン」「リン・リン・リン」「ジリ・ジリ・ジリ」と激しく鳴り災いを知らせてくれる。船霊様の魂を扱うのは船大工で、新造船進水の前夜満潮を見計らい、棟梁の手で魂入れが行なわれる。この後は船に魂が宿っているので船霊様の嫌われることはできないとされてきた。船霊様の御神体は木材をくり抜き、色紙で折った男女の人形・柳の木の賽子2個・饅頭米・塩・賽銭12文(枚) 閏月年には13枚を扶った箱穴に納め船主と共に祭事をして蓋をし、船に安置する。此の時賽子は、「天一地六中」に二(荷)を積み、表

三(見)張らせ、共(鱸)に四合せ(幸)、外はご(五)とご(五)と波の音」に組み合わせる。柳の木は、柳に風折れ無し縁起という。現在は人形ができず、人形を省略しての船霊様が大勢だとも聞く。(3)ふなだんさあのこと。船玉さまは女性神で弟橘姫だともいう。小箱の中に賽子2個・梅干し3個・麻・口紅・白粉・米・餅を入れ塩を振って清めた後、船梁の横に設けた箱穴に納めた。現在は操舵室に納めている。賽子は四の目を合せ(幸せ)で納める。尚進水のとき船大工は梅干し3個・塩8合・米8合を船玉様に供え(荷を八分目に安全に)拜むという。

ふなだまさまのまつり〔名〕

正月2日「船祝い」に祭る。

ふなとー〔名〕(1)漁師という意味に用いられ、多分に卑下して使われて来た。「あまふなとー」の語もある。(2)みずすまし。水棲動物の名。

ふなばり〔名〕船梁。「ぬき」の上「こぶち」にかけ渡された梁の名。

ふなやき〔名〕小麦粉に卵や砂糖を加え溶いて焼いたもの。「こーさやき」。

ふにこ〔名〕ふじなまこ。なまこ類。

ふにゃふにゃ〔副〕弱々しいさま。

ふね〔名〕菜種類の莢。



ふねたて〔名〕「ふなたで」に同じ。「ふねすえ・ふねやき」等ともいう。

ふむ〔動〕履物を履く。「靴ふむ・下駄ふむ・草履ふむ（何れも履く）」。

ふゆ〔動〕大根・牛蒡等の根菜や野菜が時季を過ぎ肉質が粗になり繊維質化がすすみ空洞化すること。「ふゆる・ふえる・ふえた・ふえちよる」などという。「大根がふゆ（る）」。

ふゆなか〔形動〕物事を億劫がって不始末になること。「ふゆうなか・ふゆうなし・ふゆなし」も同じ。

ふゆなじろう〔名〕ふゆながる男（者）。「ふゆなぼう（坊）」ともいう。

ふらきん〔名〕下着・禪無着装。

ふらする〔動〕碇を一方だけに入れ風・波・潮のまゝに舟を移動させるかかり方。

ふらふ〔名〕旗。漁船に掲げる大漁旗や船名旗をいう。

ぶらぶら〔副〕吊した物が揺れ動く。

ぶらんぶらん〔副〕「ぶらぶら」に同じ。

ぶり〔名〕連枷。脱穀に用いる農具。竹の柄の先端に廻転穴を開け軸木を通し、それに数本の棒（又は太い針金棒）を組み軸木に回転するよう取り付け（ぶりの子という）。柄を持って打ち振り廻し乍ら莖

に広げた穀類の穂を叩き脱穀する道具。

ふりがかり〔名〕船を綱を長くして繋留し碇泊させること。

ふりかけずーすいー〔名〕普通炊きの雑炊に穀類の粉を振り掛け攪拌しながら炊き上げた雑炊。

ふりかけめし〔名〕麦飯に小麦その他の穀粉を混和して炊きあげた飯。麦こがしや魚のぼぐし身や粉末を加えることもある。

ぶりぶり〔副〕物を振り廻すさま。

ぶる〔動・形〕威張る。「ぶらす・ぶるきる」など批判的に用いる。

ふるー〔動〕患らう。病気になる。「くさふるー・くさふるー・ちよらす」。「おこりふるー」も同じ。

ふるしゃちく〔名〕降る最中。降車軸。車軸を流す大雨。

ふるつみ〔名〕だに。牛馬の皮膚に喰い込むだに虫。

ふるてほぬごつ〔副〕ひどく物におびえてぼ一つとなること。「頭んふるてほぬ（ん）ごつなっちしもた」。

ふるねじる〔名〕古根汁。芽を出させた苗蔓を切り取った後の種蒔の新芽化した部分を汁の実として用いた。往古の百姓の困苦を知る生きる術。

ふるふる〔副〕甚だしく。心底。「ふるふる好かん」。「ふるふるしょうげ」と言うのも略

同じ。

ふるろ〔名〕網船の最も舳側の前後2挺の櫓に共通した呼び名。鯨組語。

ふれ〔名〕舳。地区・地域区画名。大字を更に小区域に分けた名称。壱岐独特の呼び名として残っている。藩政時代の村の舳役の管轄範囲内ともいわれている。

ふれめえー〔名〕振舞い。馳走。馳走の宴。「ふるめえー」ともいう。

ふろ〔名〕船上で使用する竈の呼び名。鋳物製。火床の上に置き炊飯用。

ふわふわ〔副〕軟らかく反撥性のあるさま。「ふわふわ」も略同じ。

ぶん〔名〕別。別枠。別に。「こりだきゃぶんにしちおくれ（これだけは別扱いにして…）」。

ぶんじゅ〔名〕ふしだらな者。らち（埒）のあかない者。自墮落者。

ぶんぶ〔名〕(1)こがねむし。針を持たない虫一般にも用いたりする。虫名。(2)かながしら。「がしら」ともいう。魚の名。「ぶだい・ぶんぶのいを」ともいう。(3)竹とんぼ。昔からの名と思われる。

ぶんぶくさ〔名〕をどりこそう。野芝麻。早春花の少ない頃桃色の花を次々集まり咲かせる。この花に「ぶんぶ」や、その仲間の昆虫が集まるとこ

ろからの名。

ぶんぶのいを〔名〕かながしら。ぶだい。魚の名。

ぶんぶん〔副〕甚だしく怒るさま。「ぶんぶんはるかく（はりかく）」。

ぶんぶん〔副〕「ぶんぶん」に同じ。

へ

へー〔名〕(1)罏。はえ。「へーんをる」。(2)灰。「へーん溜っちょる」。「からへー・かるへー」も同じ。(3)杯。はい。「一ペー・二ペー・三ペー・四ペー・五ペー…」。(1)碗の盛数。(2)船の隻数。を数える用いる。(1)(2)(3)共に「へえ」も同じ。

ペー〔名〕(1)藩貝の一種。つめた貝。「ペー拾・ペー踏み（ペー貝採り）」。(2)杯。三ペー。

ペー〔名〕一ペー・六ペー・十ペー。

へーかぐら〔名〕幣神楽。神楽舞。祭主共5人でつとめる。四本幣・二本幣・注連舞・真櫛の四座で成立つ。最も簡単な神楽。経費は玄米半俵。「へいかぐら」も同じ。

へーくりをくる〔動〕這い起きる。起きる。寝た（又は転んだ）姿勢から起き上る。くると起きる。

へーくりをるる〔動〕這い降りる。



へーぐわ〔名〕鋤の一種。柄短かく、柄と身の間も狭く這う形で使用する農具。

へーご〔名〕蠅の卵。「へーご産み付けちよる・へーごひりつくる」。

へーごしき〔名〕灰汁をとる甌。紺屋の染物用具。甌とは呼ぶが実は桶。

へーごにんぎょー〔名〕這兒人形。布製で這っている幼児を模した人形。

へーごひりつくる〔動〕私生児を孕むことにも用いた。

へーし〔名〕(1)疾発的に吹く大風。(2)疾風等を防ぐ屋敷周辺の築土塁。

へーじ〔名〕返事。応答。「だまっちゃらじい、へーじなっとせろ」。

へーす〔動〕紙を貼った張箆を作る。

へーすぎ〔名〕這い杉。そなれ。いわだれねず。はいびやくしん。桧科。

へーずき〔名〕畑犁きに用いる鋤。地面に這った形で犁すすむ鋤。這鋤。

へーすべり〔動〕這い廻り。平身低頭の意に用いる。「へーすべりしち物言う人間」。

へーせんもん〔名〕「へーす」法で作った箆。張り箆。

へーぜんだな〔名〕(1)厩膳棚。大勢の客賄いに膳部を載せる棚を、雨戸や広い板類を用い急造した。(2)転じて、棚田の意味にも用いる。

へーだす〔動〕這いだす。這い始める。「赤兄んへーだすごつなつた」。

へーとりこぶ〔名〕(1)蜘蛛。蜘蛛の一種。(2)人にへつらい頭を下けたがる人。「へーとりぐもんごつさす人間」。

へーどれ〔動〕(1)仕事をし乍ら働き死すること。「へーだをれ」。「あの人もへーどれさしたつちゅー」。(2)へとへとに疲れたこと。「へーどれしち戻つた」。

へーにじり〔動〕這いにじるさまから抱腹絶倒する様子。「へーにじりしち笑うたつばな」。

べーべ〔名〕牛の子。「べべんこ」に同じ。

へーほりねこ〔名〕竈の中に入り灰に汚れ切った猫。猫は寒がりて余熱のある竈に入りたがり炭や灰に汚れて出る。汚れの目立つ人間にも例えて「へーほり猫のごつしちよる」と。

へーめえーづく〔動〕這い廻るようにあたり中をうろろう動き廻る。

へーもち〔名〕はぎもち。かきもち。薄く切って乾燥させた餅。「へぎもち」も同じ。

へーもり〔名〕幣守り。聖母神社祭礼時の舟ぐるの「とびて」の補助役。

べーら〔名〕燃料に用いた枯葉枯枝。

へーる〔動〕入る。

へーを〔名〕舟を漕ぐ艫の把り

- 手部に掛ける緒。「へーお」も同じ。
- へいおさめ〔名〕幣納め。神楽舞の名。昔は幣串の元を削って屋根裏に投げ立てたという。茅屋根故にできた。「とのほがい」に同じ。今は「へいおさめ」の舞の後に酒食の席を設ける。「へい」は「幣立て米」に立てて納める。
- へいたてまい〔名〕幣立米。幣納神楽の後、幣を立てるのに米の山を作りこれに立てる。古記に「幣立米三升三合」とある。
- へかく〔動〕蜘蛛が巣網を張る。「こぶのへかく・こぶのへけえちよる」などという。「へ」は巣網。
- へがさるる〔形〕苦痛が軽減される。「痛かんとん、ちいったへがさるるごつた」。
- へかつつく〔動〕へくわへくわと体力が抜けて崩れ込む状態になる。「べかつつく・へくわつく・べくわつく・べぐわつとなる」も同じ。
- へぎ〔名〕(1)菓子などを盛る薄いそぎ板。盆。(2)片。切れ。枚。へぎ餅(餅をそぐ様に薄く削ったもの)。
- へぐ〔動〕そぐ。削る。切る。はぐ。
- へくさりかんだ〔名〕へくそかずら。蔓性草本。この草本は不快な臭いを発散し、「へかんだ・へくすりかんだ・へくそかずら・へくそかんだ・や

- いとばな」など色々の名をもつ。尚「かんだ」は「かずら」である。
- へくさりのき〔名〕はまくさぎ。くまつずら科の植物。「へひりのき」とも。
- へぐら〔形〕鍋釜の焼炭を顔や手足につけたさま。「へぐらとる・へげろ・へげろとつちよる」などという。
- べぐわべぐわ〔形〕(1)地に尻を下して坐るさま。(2)矮小な者がよちよち急ぎ歩くさま。「へくわへくわ」も同。
- へけえかく〔動〕腰巻にかく。女房が亭主を尻に敷くこと。「へこかぶする・へこかぶせられちよる」も同じ。
- へげる〔動〕はがれる。削りはげる。めげる。
- へこ〔名〕(1)男の褌・女の腰巻共こう呼ぶ。(2)床^{とこ}の肉の周りにあるひれ膜の名。
- へご〔名〕こしだ。うらじろ科のしだ植物。「へごしだ」ともいう。
- へこかれえ〔名〕婚礼行列に花嫁の手荷物類を持ち従う少女。
- へこづま〔名〕褌・腰巻の端。
- へし〔名〕牛に対する方向指示語。「右へ・右」の意。「へしへし・へしと」などと声を掛け、後方から右耳辺に結んだ曳綱を「引く」。又左への指示はこの綱を振り叩き「たた・たた・たた」と声をかける。充分に訓練された成牛は少しの指示合図で前進左右方向変換停止



廻転自在である。

へしくずす〔動〕押し崩す。こわす。相手をくさす。くさしてとり合わぬ。「へす(こきおろす)」も同じ。

へずる〔動〕削る。けずり減らす。

へそぐわし〔名〕小麦粉をねり黒糖を入れて、ばい独楽の形にし食紅の色付けをして焼いた菓子。春の彼岸の仏詣りの供え物・みやげ物。

へた〔名〕へり。端。縁。そば。辺。「道のへた・海のへた」。

べたなぎ〔名〕少しの波風も感ぜず海面おだやかなさま。

へたへた〔副〕(1)「へくわへくわ・べぐわべぐわ」に同じ。(2)遠路をはるばる歩き疲れるさま。

へたる〔形〕弱る。萎える。へたつく。へたばる。

へたろく〔名〕あぐら。あぐらかく。ぞんざいな形のあぐら。「へたろくどむしち、ねえーごつけえー」。

へち〔名〕別。反対。逆。「へち向く・へっち向くな」。

べちー〔名〕別に。別に。他に。

へちこち〔名〕反対。逆。あちこち。「へちちやこち・へちちやこち」も同じ。

へちへち〔副〕荷を担ぎ持つ姿がひどく重苦しいさま。

へつくわり〔副〕背丈の低いさま。「ちつくわり」ともいう。

べつくわり〔副〕尻を地につ

け、ゆるりぐったり坐り込むさま。

べっそり〔副〕ひどく量の減るさま。「べっそり瘦せた」。

へっばく〔名〕差しで口。余計な指図。無用の口出し。邪魔だて。おせっかい。「べっばく言うな・いらんへっばく」。

べっぺ〔形〕汚い。汚いもの。小児語。

べっばー〔名〕一方。片方。別の方。反対方向。一隅。傍。「ひょうつら・べっばう・へら・べら・へり」も同じ。

へつぼね〔名〕小さく粗末な隠居所。「つぼね」は局・隠居した者の住居。「へつぼね」ともいう。

へつり〔名〕辺。周辺。周囲。

へつる〔動〕減らす。「へずる」に同。

へつんぐり〔形〕体躯の矮小な者を表現するのに用いる。「身体はへつんぐりのごっしちよるばって力は強か」。

へつんばり〔形動〕突っ張る力が弱いさま。突っ張りの役に立たないさま。「へのつんばり」も同じ。「へつんばりいもならん・へのつんばりいにもならん(全く何の役にも立たぬ)」。

へでむなか〔副〕何の造作もない。た易い。気にもかけない。平気だ。「そん^だんこつ、へでむなか」。

べとー〔名〕「別当」の文字を当てる。鯨組用語で支配人格の



者。普通一人を置くが、「くちのこぶとなかのこぶ」の二人を置いたこともある。

へどら〔副〕物事の秩序正しく進行しないさま。へともどする。「へどら廻される・へどら廻う・へどらとる。」

へなぶりさき〔名〕部屋の上り口に設けられている踏み上り板。「へなぶり・へんぶり・へんぶりさき」ともいう。入り口側の土間からの上り縁。

へぬるか〔形〕まだるっこい。「ふーてぬっか・ふーてぬるか」に同じ。

へのかす〔形動〕無力で頼みにならぬ（もの・こと）。役立たず。

へのごたる〔形動〕反応のないさま。手応えのないさま。

へひりがんど〔名〕放屁者を占う子供達の遊び具。木枝や竹片をかぎ形に折り、手で廻し「へひりがんどひりがんど、へひった者へ打ち向かせ（又は、うち当れ）」などと唱へ、かぎの向いた方の者を次の占い者に（真偽にかかわらず）仕立て遊びを続ける。

へひりめえ〔名〕形がいびつで整わぬ繭。蚕室で放屁すると「へひりめえ」ができるといい憤しむと。

べべ〔名〕(1)着物。「ねね」に同じ。(2)仔牛。「べべのこ・べべんこ・べんこ・べーべ・べんちょ」とも呼ぶ。

べべか〔形〕きたない。小児

語。「べべか・べべたか・べべたか」も同。

べべらしか〔形〕手触りよく、すべすべと滑らしいこと。

へらおろし〔動〕魚の側身を背骨から切り離す。三枚におろす。「へらおろす・へらおろしする」も同じ。

べらっと〔副〕総て。根こそぎ。「べらっと取られちしもた」。

へらなめ〔形〕優柔で図々しい。「なめら・なめらづく」等同じ。

べらびっしり〔副〕一面に。残りくまなく。「べらべっしり・べらべったり」等も同じ。

へらへーてー〔副〕まんべんなく。一面に。「へらへーとー」も同じ。

へらへら〔副〕訳もなく笑うさま。

べらべら〔副〕(1)舌で舐る。(2)物が火に焼ける。(3)多介にしゃべる。(4)ひるがえり揺る。ひらめく。

へりかべ〔名〕農家の居間と座敷との間の仕切り壁。

へりのもと〔名〕へりかべの所帯。この辺りを寝所のひとつとする。

べろ〔名〕舌。

へわ〔名〕(1)蒸し物の折、釜とせいろの間の隙間に敷き蒸気の漏れを防ぐ藁や細縄で編んだ輪。(2)海に棲む軟体動物「うみうし・あめふらし」の方言。食べる人は少ないが食える。



へわへほー

へわつく〔動〕へわへわと動く。

へわへわ〔形〕物のしない動くさま。「べわべわ・べわべわ」も同じ。「梯子んへわへわしち登られん・渡り（歩み板）んべわべわしち、きびの悪うし歩ま（渡ら）れん」。

へわる〔形〕弱る。力の抜けたさま。へなへなの状態。

へん〔名〕きり。まま。だけ。「行たへん、戻っ来はせん・いっぺん行たへんですけえにようわかりまっせん・お守のねずみで、今朝（袈裟）食たへん」。

へんか〔名〕返歌。「言い返し」という程の意。「返事・返事する」の意味で用いられることもある。

べんかぶらさす〔形〕顔色赤味を帯びる。べん（紅）かぶら（蕪）・紅蕪。

べんこだい〔名〕れんこだい。魚名。

べんさしゆび〔名〕薬指。紅さし指。

へんちゃ〔名〕逆。逆様。「着物なあへんちゃ着ちよらす（裏表逆に）」。

べんちゃら〔名〕おべっか。おしゃべりや。おてんば。おべっか言ひ。

べんちょーらい〔形〕顔の赤いさま。「少つとぬ酒で、面あべんちょーらいなった」。

べんとうかれえ〔名〕弁当からい。手持弁当で、諸種の天

役や奉仕活動に出夫させられた。地区・触・谷の賦役に終日従事する時は昼食弁当持参となる。そんな時の連絡示達は「明日あ弁当かれえーですけえに」と。

へんどする〔動〕遍途する。遍路するに同じ。

へんぶり〔名〕上りぶちの板の名。「へなぶり」に同じ。農家の土間（にわ）から表の間に上る所に床よりも一段低く板を取り付けてある。これを「へんぶり」といい、普段の米客や用事者はこゝに腰を下し諸用を済ます。一服のお茶もここで出す。

へんろする〔動〕道に迷い難渋しながら尋ね歩くこと。

ほ

ほー〔名〕鶏を追う掛け声。「ほーほー」と繰り返し用いる。〔感〕軽い驚きの声。「ほーこりや、誰かち思うたら…」。「ほほー」も同じ。

ぼー〔名〕綱を数える接尾数詞。紡。「碇綱二ぼー入れた」。「ぼう」も同じ。

ぼーき〔動〕老耄して言行異状のさま。ほけによって起こす異常行動。

ぼーくぼーく〔形〕遠慮もせず思いのままどしどし言行する。「ぼくぼく・ぼかぼか・ぼ

ーすぽーす・ぽすぽす」も同じ。「かんまんけん、ぽーくぽーくやらっさんな」。

ぽーぐみ〔名〕仲間。団体。

ぽーけ〔名〕ふうけ。ほうけ。呆け。あほう。ばか。ほうけ著。

ぽーじょ〔名〕螢。小児語。

ぽーじょー〔名〕方丈。和尚。僧侶。ほうじょうさん。

ぽーずえー〔名〕かにもりがい。細長く小さな貝。多くは淡水の注ぐ海浜に棲む。

ぽーずからげ〔名〕着物の裾を尻のところから折り返し、両裾を前にはさみ込むからげ方。坊さんからげ。

ぽーすけ〔名〕呆助（介）。間抜け。ぼんやり者。

ぽーすと〔副〕いっしょに。一度に。みんな。全部。「ぽーすと手放ねちもた・ぽーすと売りとベエーた」。

ぽーせんぼー〔名〕正月14日「まつたて」に行なう「じょーめ・みーれみーれ」に同じ。参照。棒で寺の門柱などを叩く年はじめの行事。

ぽーそーがみ〔名〕疱瘡神。疱瘡は抜い出すといって、鉦や太鼓を打ち鳴らし抜い出し路傍の塚などに納める行事をした。

ぽーそーとぎ〔名〕疱瘡伽。疱瘡は野狐が来て舐るとよくならないと言って、大勢寄って徹夜で伽をし見張りした。これをいう。「やこ」は「夜狐」

か。

ぽーだつ〔名〕竈の前口両側に立てる前口を整える支え石。

ぽーたん〔名〕頬。「ふーたん」も同。

ぽーどー〔名〕里芋の大型種。中味がぽやっと軟らかで大味白色。

ぽーとくなか〔形〕手ぬるい。まどろっこい。手間どり間に合いそうにない。頼りない。いらだちを覚える。

ぽーふぽーい〔名〕仔牛親牛を呼び寄せる声。「ぽーぽい・ぽーいぽーい・ぽふぽーい」強く弱く場に応じ。

ぽーぶら〔名〕南瓜。かぼちゃ。唐茄。「ほうぶら・ぼんぶら」とも。

ぽーぶらざね〔名〕鯛や鮒等の魚の子の呼び名。かぼちゃの種子大の魚の子は形大きさが、かぼちゃ種に似ている。

ぽーべー〔名〕朋輩。友達。仲間。同年代者。同上。

ほーり〔名〕(1)神祇祭祀時に神主の手助けをする役割の氏子人。祝とは神官・神主で、「ほーりを手伝う人」が簡略化され、単に「ほーり」となったのでは。(2)附近。便宜さ。「ほーりの良か（悪か）」。

ほーりぽーり〔名〕同じ地区・地域。それぞれの地区。「ほーりぽーり相談しち、やっちょくれ」。

ほーりや〔感〕ほーれ。そうら。それみろ。「ほーりやー・

ほ

ほうりゃ」も同。

ほーろく〔名〕素焼き鍋。鋳物鍋。煎り物鍋。「ほーろくなべ」も同じ。

ほあし〔名〕舟の帆の下付属綱具。

ほい〔名〕牛の前進命令語。「ほい、ほい・ほい行け、ほい・ほいさ」等。

ほいえつち〔名〕膨軟な肥沃土。

ほいこらほいこら〔形〕(1)甚だしく疲れ切った者の行動。(2)牛の使役語。

ほいっぺー〔形〕帆・杯に。全力で。

ほいとー〔名〕ほいと(古語)。乞食。山地と平地の間を定期的に移動して、生活・生産用具を物々交換等して廻遊していた非定住者を言う。本来的な意味をはずれ対者を罵るに用いられ、馬鹿者の意に使われていた。「ほいとーづく・ほいとーん来をるぞ、泣きをつたぎりい連れち行かるぞ」。

ほいほい〔形〕(1)小動物の群集するさま。(2)老人などもずもずもたつくさま。〔副〕のろのろとうごめく様。

ほいばする〔動〕子どもが母親の後をしたい行く。「母追い」では。「あとうゑー(後追)」参照。

ほいほぶし〔名〕民謡の一つ。物部辺りで唄い継がれていたと。

ほいよりほいより〔形〕老人病人等行動がよぼよぼ緩慢なさま。「よぼよぼ・ほよりほより」も同じ。

ほうこう〔名〕奉公。他家に住み込みや通いで家業・農耕・家事・子守等を手伝う。住込みは、一年毎の契約が多かったが、通いでは(1)半分奉公(月に15日間)、(2)三合奉公(月10日間)、(3)二合半奉公(月7日間)等があった。

ほえづら〔名〕吼え筒。泣き面。「ほえづらかく」も同じ。苦境に立つ。

ほえる〔動〕泣く。泣きわめく。

ほえる〔形〕膨軟になる。ほかほか軟らか。ほくほく軟か。「ほえちよる」。

ほお〔名〕はまごう。くまづら科。

ほか〔名〕家の前庭外庭。南向きのほかは、日当りよく農作物の収納や乾燥の好作業場である。「ほかぐり・ほかぐる」は周辺部も含め「ほか」に同。

ほがう〔動〕神をめで祝う。寿ぐ。

ほがけ〔名〕女性の髪形名。丸髷。

ほがす〔動〕(1)穴を穿つ。穴開ける。(2)犯す。「ほげほうちゃく」参照。

ほがな〔形〕甚だしく多い。過多な。法外な。「ほがな儲けようじゃなか」。

ほきほき〔副〕木枝などの折れ

る音。

ほぐ〔動〕穴の開くこと。「ほぐる」。

ほくそいゑむ〔動〕内心喜悅しほほえむ。「ほくそ笑う」等とも用いる。

ほくち〔名〕火打ち石で火を起こす時、黒い綿状物(ほくち)と一緒に、火付きを良くするもの。

ほくとー〔名〕棒。棒きれ。木方ではない。

ほぐる〔動〕牛が頭や角^{ツノ}を用いて突きかかることを「牛のほぐる」という。「牛の土塀ほぐりおる」。

ほけ〔名〕(1)湯気。「ほけん立つ・ほけん出おる」。(2)外に。他に。しか。だけ。「足ほけ使わん・金ほけ要らん」。「ほけち」ともいう。

ほけだし〔名〕うさばらし。

ほげほーちゃく〔形〕甚だしく破れ穴開き状になったさま。「ほげほーちゃくしちよる」。

ほける〔動〕嘔る。鳴く。「鶯のようほけるばい」。

ほける〔動〕蒔・芋の類が中まで膨軟になり、ぼやけほくほくになる。

ほげんぎょ〔名〕奉獻行。正月の鬼火。どんど焼き。左義長。鬼の骨ふすべ。色いろの呼び名があり方法にも地域差がある。昔は各家の門口の道の真中に小竹や麦稈や小枝の類に火を付け、榎の生小枝を焼き、「しよめん」を結び護符とし、

焼け燃える竹などがはじける度に「ほーげんぎょ・ほげんぎょー」と呼び行なった正月6日の夕刻後の行事。この火で餅も焼いて食べ合った。

ほげんぎょのき〔名〕ほーげんぎょーのどんど焼きに「榎の小枝」を用いる。この「いぬがやの木」をいう。「ほろむかし」の名もある。いぬがや科。

ほこ〔名〕麦稈屋根の葺き替え(屋根替え)には、最下段の屋根庇から順次古稈を抜き取り、その後に新稈を挿し入れ、一定の厚さに揃えて並べ丈夫な押えの女竹(2本単位)を通して置き、屋根材とこの竹で麦稈をしっかりと縄で結びつける。この作業を一段・二段と繰り返して葺き上って最後に棟を包んで仕上げる。この葺き上がる段数を「ほこ」といい「ひとほこ・二ほこ…」と数える。又葺き上るに従い、屋根師の足場に杉の丸太材(これを道^{ミチ}という)を屋根材から縄を垂らし付け足していく。屋根葺きは、雨の心配の全くない夏の土用中心に行なわれるので屋根師・小取り他手伝人の酷暑に苦しむ一日。

ほこだけ〔名〕麦稈屋根葺き替えに用いる。麦稈押え締めつけ用の女竹。すんなりして火きき適当を好竹時に準備する。「木六竹八石二月」(旧曆)。

ほこてんにたつ〔形〕ひどく

ほ

怒った様子。「ほこ^{ほこ}天に
(向かって) 立っちはるか
(立腹する)」。

ほこまい〔名〕鉾舞。採物に鉾
での神楽舞。「のづち」の二人
舞が弓引き続き舞う。本末乱れ
舞となる。本来神楽舞は一座
一座、本座に戻ってから更め
て出て行き舞うのが正式であ
るが、今は略して直ちに次の
舞に入る形になっていると。

ほこゆけのぎょうじ〔名〕住
吉神社軍越神事の一。ほこ田
に酒を醸し、その上に矛を立て
右廻しに3度廻す。松島
(社) 家一家相伝の秘事なり
と。この酒を4月28日の軍越
神事に開いて用いると。

ほこるる〔動〕衣類がほころび
る。綻びる。「ほこれる・ほこ
れた」も同。

ほこれ〔名〕(1)ごみ。ほこり。
(2)破れ。ほころび。「ほこれー」
も同。

ほさ〔名〕陰陽師。

ほざく〔形〕物がふやける。

ほさほさ〔形〕物の質が粗で軟
弱な。

ほさら〔名〕麦しのうして、種
実を篩い獲った後に残る穂軸
かす類。「ほすら」ともいう。

ほし〔感・名〕犬をけしかけ奮
いたたせる時のかけ声。「ほし
ほし」も同。

ほし〔名〕(1)麦類の穂実を包ん
でいる殻。苧。(2)帽子。「暑か
せに、ほし冠っち行かにゃ」。

ほしか〔名〕乾燥魚粉。

ほしかう〔動〕犬に「ほし」と
声をかけること。「けしかく
る」に同じ。

ほしくるめ〔動〕乾燥の手入れ
方。「ほしくるめん良うでけち
よる(足らん)」などと用い
る。

ほした〔名〕乾田。あげ。あげ
た。おか田。乾干し田。水は
けのよい田。

ほじる〔動〕掘り返しあさる。
「ほじくる」に同じ。

ほしわら〔名〕麦稈屋根の頂上
棟の仕上げには「なごねがや」
の上に更に藁を覆うて包み、
雨水の侵入を防ぎ、棟の体裁
を整えるに用いるわら。

ほす〔動〕物言う。口たたく。
言う。「あぎたたく・あぎほ
す・あくねとる・あくねほす」
等同意語。

ほすかつ〔名〕小さい方。お子
さん。

ほせえー〔形動〕多量に。大変
に。「ほせえー心配じゃなかつ
た」。「ほせえーしこ」ともい
う。「ほそい」に同。

ほそ〔名〕(1)筋。(2)家屋家具類
の組み立てに入れる切れ込み。
「ほぞ」に同。

ほそい〔形動〕多量。多数。大
きに少なくない。「ほそいし
こ・ほそいなしこ・ほそいな
もん・ほそいしこじゃなか・
ほそい喜び(心配)ようじゃ
なかつた・ほそいしこん人間
じゃなかつた・ほそい難儀じ
ゃなか」。

ほそしか〔形動〕細しき。少し。「ほそしかもんじゃなか(莫大なもの)」「ほすかしこ」も同じ。

ほその〔名〕臍の緒。

ほそり〔名〕細身になった部分。細った部位。「あぬ畑のほそりにゃ大石のある」。

ほた〔名〕ぼろぼろぼさぼさに腐ったもの。「ほた木」。「ほたん目合う」。

ほた〔形〕粗大醜惡の状。「ほた船・ほためばる(魚)・ほた足(象皮病)」。

ほたうき〔形〕ほかんと水面に浮ぶさま。

ほたうち〔動〕櫓木を斧で打ち取る。

ほたうちがに〔名〕湾内の潟地に棲み、干潮時多数集まって、はさみを上下している蟹。しをまねき。

ほたくり〔動〕放棄や落ちこぼれる様を強意的に表わす。「ほたくる」も同じ。「ほたくりかやす(ひっくり返す)・ほたくりこぼす(こぼす)・ほたくり止める(放棄)・ほたくり捨てる(捨てる)・ほたくり倒す」等々。

ほたつ〔名〕かざきり。かざきり。海中に群を成し棲む。濃紫色2～3寸大の魚。天竺鯛科。尾先は二つに分かれる。この科の魚種は多い。

ほたなぎ〔名〕全くの無風静穏な海。

ほたゆき〔名〕わた雪。しっと

り雪。

ほたりすつる〔動〕投げ捨てる。

ほたんめ〔副〕さんざんのめ。「ほたんめえ遭うた」。

ほち〔名〕餅。ほっち。ほっちん。

ほつ〔副〕役・為・支え(にならぬ)。「ほつのごつ言われた・何のほついもならん」。

ほっかり〔副〕「とっかり」に同じ。突然。思いがけぬ中に。ひょっこり。

ほっかり〔副〕多大に。「ほっかり賭けた(減った・損した・取られた)」。「ほっくり・ほつくり」も同じ用法。

ほっけ〔名〕飯を円錐形に盛り固めたもの。手で丸く握り固めた物も。

ほっこりほっこり〔副〕徐々に次第次第に力をだしてくるさま。

ほっこりやき〔名〕焼き蕎。

ほっしょ〔名〕女陰。「ほっぱ・ほっぱじよ・ほば・ほばじよー」。

ほっしり〔形動〕安堵ほっとのさま。

ほつつり〔副〕決してしない。「ほつつり知らん・ほつつりいるわん(嫌)」。「ほつつり」に同じ。

ほっとりほっとり〔副〕ほつほつと。そろりと。少しずつ。ゆっくりと。「ほっとりほっとり」も同じ。

ほっぱい〔名〕大うそ。ほら。

ほ

「ほっばー」も同。「ほっばい
(ほっばー) くる・ほっばーく
り・ほっばーづく」等々。

ほっばーどり〔名〕ふくろう。
くおっくおーどり。むぎうま
せどり。

ほつりほつり〔副〕そろりそ
ろり。「ぼとりぼとり」に同
じ。

ほつる〔動〕もつれる。ほどけ
もつれる。「糸がほつる」。「ほ
つるる」。

ぼでーこー〔名〕「ぼーでーこ
ー」ともいい「ぶでーこー(菩
提樹)」に同。

ほてなか〔名〕最中。真盛り。
「夏のほてなかに旅しち来
た」。火照る中。

ぼてぼて〔副〕着物の袖や裾が
重々しいさま。「ぼとぼと」と
もいう。

ぼてぼて〔副〕物のこぼれ落ち
る様。

ほど〔名〕背丈。身長。「ほどん
高か」。せい。たけ。

ほどき〔動〕「つちもち」に同
じ。

ほどく〔動〕耕す。「田ほど
く」。

ほときさー〔名〕仏様。「ほと
きさん」も同じ。

ほとけづら〔名〕仏面。人の死
顔の無情なさま。

ほとけぬうま〔名〕かまきり。
盆の頃家の周りに多く見かけ
る。仏の馬。「ほとけんうま」
も同じ。

ほとけぬぶく〔名〕きぬばり。

ばり。はぜ科の魚名。海中に
棲み2〜3寸大の淡紅色に黒
の横しま入り頭丸味。

ほとけばな〔名〕彼岸花。「ま
んじゅしゃげ・しびとばな」
ともいう。

ほとびかす〔動〕水に浸しふや
けさす。穀類を湯・水に浸し
軟らかにする。「ほとびらか
す・ほとべらかす」。「ほとび
る・ほとぶる・ほとべる」な
ど同義に用いる。ほとび(べ)
た。

ぼとぼと〔副〕「ぼてぼて・ぼ
てぼて」に同じ。

ほとめく〔動〕親密にひそひそ
話す。

ほねしょーぐわつ〔名〕骨正
月。二十日正月ともいう。幸
木に吊した正月来の飾り魚野
菜も正月20日ともなると、魚
は骨だけになる。この骨頭を
処分する正月の後始末の宴。

ほねやみ〔名〕平素身体をひど
く使う者がたまの不調で休ん
だりすると急に全体の骨節に
痛みを感じ病気状になる。「ほ
ねやみの出た」という。

ほのくそ〔名〕首筋の後中央部
のくぼみ上。「ぼんのくぼ・ぼ
のくぼ・ほのくも・ぼんのく
そ」等という。

ほびく〔動〕農作物の良い種子
を採る為、選穂して穂を引き
抜くこと。

ほほげえ〔名〕やくしまだら貝
の類。「ほほげえ・によーじ
よーげえ・によーによーげえ」

ともいう。

ほまいえ〔名〕「こくせん」の帆係。

ほまち〔名〕臨時の収入。へそくり。

ほまわり〔名〕船の帆に付く小道具。

ほみく〔形〕蒸し暑い。うっとうしい。「ほめく」も同じ。「ほみきまっするなあ・ようほめくですなあ」。

ほめほーちゃく〔動〕無上にほめる。「我が兄ばほめほーちゃくさす」。

ほや〔名〕ほやのり。海藻。海岸岩石に付着し、先端数枝に分かれ「ふのり」の代用にも、食用にもなる。

ほやけ〔名〕先天性の痣。赤・黒の色にでる。「赤ほやけは火事と、黒ほやけは人の死と係りがある」と言うが。

ほやほや〔形〕蒔・芋・南瓜など肉質の軟らかさ香味の良いさま。

ほやらしか〔形〕やさしく親切さがあるさま。軟らかな感觸のある物。

ほよりほより〔形〕よほよほと。

ほらがちはく〔形〕鰯が群がり集まって海水面が血を吐くように赤く見えるさま。

ほりた〔名〕畑の畦外に堀の如く作った地割外の小水田、堀田。又畑地の間や屋敷周辺の湿気のある所を掘って作った小田とも。これらの田は「割

地外」の田で、課税対象外、即ち「ほまち田」であった。「ほまち」は「へそくり・臨時収入」の意であるので、へそくり田でもあった。

ほるほる〔副〕悲しみはかなむさま。「どうしたる良けえりちち、ほるほる言いをらす」「ほろほろ」に同じ。

ほるほる〔副〕(1)群がり出るさま。(2)こぼれ落ちるさま。「ほるほる・ほろほろ」も同じ。

ほろ〔名〕羽毛で釣針を包んで作った大型の偽餌。「ほろ」を曳いての漁を「ほろこぎ」という。小型のほろは「かばり」という。

ほろ〔形〕粗大醜悪なもの。「ほろ着物・ほろくそ・ほろもうけ」。

ほろくそ〔形〕完膚なき迄の罵倒。

ほろこぎ〔名〕絹や麻を縫って柿渋で固めた糸に鉤を付け「どじょう」の餌を付け船を帆走させ鰯の一本釣をすること。

ほわり〔名〕穂割り。土地の年限売りにおける利息の算出法。元利金の返済を出来高穂に割り当てる方法。

ぼん〔名〕(1)大便。糞便。「ぼんぼん」。(幼少児語)。(2)ばか者。能なし。「ぼんの如言うな」。

ぼんぎた〔名〕旧暦7月盆頃から北風に変わる。この北風をいう。

ほんぐだち〔形〕威猛高になり

ほ

怒る。

ほんけます〔名〕1杯が3升2合入りの榼。往昔1俵は3斗2升であったので、この榼10杯で1俵になるように作られていた。この榼の名。

ほんこ〔名〕老ぼれ。老牛。老朽化。

ほんこう〔名〕自家が所属している講中組みをいう。又平素から協力関係の特に深い隣講中を「次講」と、本講を「くみうち・本講中」とも言う。

ほんごほんご〔副〕ほかほかじんわり次第に温まるさま。「ほんごりほんごり」ともいう。

ほんこほんこ〔副〕荒々しくはね飛ばすように。「ほんこぽんこ投げた」。

ほんさー〔名〕坊さま。僧侶。

ほんしゅーぎ〔名〕諸式に則った結婚式。略式に「ちゃしゅーぎ・あゆみぞめ」などあり、これに対する語。

ほんせき〔名〕盆石。菊銘石。

ほんたい〔名〕頭先の先から尾ひれの先まで長さ1尺3寸重さ2斤半以上の鯛。「ほんだい」も同じ。

ほんながれ〔名〕盆の後初めて降る雨をいう。仏はこの雨の流れに乗って帰ると。「ほんながれ」の雨が降らず、盆幡(施餓鬼幡)がひらひらし続けるのはよくないことという。

ほんねぶつ〔名〕盆念仏。念仏講が中心となり、講中内各家

毎盆中に念仏を唱えて廻っていた。

ほんの一〔名〕大きな鳶位の鳥の名。痴鈍な鳥とのこと。和名不詳。

ほんはた〔名〕本畑。切れ畑に対する名称。地割り制度。

ほんぶり〔名〕本鱈。頭先の先から尾のつけ根まで長さ2尺4寸以上の鱈。格落ちの鱈は太さにより5合・3合3勺・2合半の3段階に分けられた。

ほんべこ〔名〕盆兵児(腰巻)。盆肌着と共に盆お中元として子から親に届ける贈り物。暮には歳暮物として、肌着・足袋・手拭い等贈った。

ほんぼ〔名〕本当。本法。真実。「ほんぼー・ほんぼう」も同じ。

ほんぼん〔形〕火が勢いよく燃える。どんだんに似る。

ほんぼん〔副〕手当り次第に放棄する。「ほんぼん投げ出しをったばい」。

ほんまや〔名〕農家の物置き倉庫。「うしのまや(牛舎)」に対する語。「ものおき」ともいう。

ほんや〔名〕茅家。本屋。母屋。居住家屋。

ほんよりほんより〔形〕行動緩慢なさま。「ばいよりばいより」に同じ。

ま

まーだ〔副〕まだ。未だ。
まいえびろ〔副〕前もつての披露。前々からの用意知らせ。前案内。前びろめ。早々の予告。前びろ。
まいえろ〔名〕前臈。「ともろ」の左方の臈。「かっせき」その他弱い者から押す臈。「まえろ」も同じ。
まえおろし〔名〕昔男子が17歳に達すると、羽織・袴の正装で神社参拝し一人前の扱いを受ける祝事をした。「まえおろしの祝い」という。女子は16〜18歳で一人前と認められた。
まえかけむじん〔名〕女性だけで組織した無尽講であったのでこの名付けとなったと。一定額を掛け込みひとりずつ次々に落札し、各人の実用的な物希望物品を購入した。前掛無尽。
まえはた〔名〕地割制度の中で各家に割り当てられた前畑。菜畑。「なぶたけ・まえざれ」とも呼び、野菜他日常生活の重要な生産場所の中心。
まが〔名〕(1)馬鍬。鋤で牽き起こした耕土を更に碎土し、雑草類もかき集めて整地する牛に曳かせる農具の一。(2)「魔」という意。墓穴を掘った後、

埋葬する迄の間、その穴に「まが」が入らないようにと竹を渡し、その竹に葉のついた生木の枝を吊す。これを「まが」という。

まがくそ〔名〕牛に曳かせ「まが」を操作すると、「まがの齒」に雑草その他の不用物がかかる。これをいう。また「くさがら」ともいう。

まがさし〔名〕自家には内密に他家で甘いものを調え食べる行為。

まがのこ〔名〕(1)砂浜に棲み1〜3寸大の体長で、背砂色の魚。体形が馬鍬に取り付けた爪金具に似ている。(2)農具馬鍬には長さ4〜5寸の四角錐形の鉄製の爪が櫛の歯状に10本近く取付けてある。これを牛に曳かせ碎土・除草に田畑を搔かせる。この鉄爪を馬鍬の子・「まがんこ」という。

まがり〔名〕海浜の岩石に輪状に付着して棲む管状の貝。「へびかい」とも。

まかりでました〔動〕やって参りました。

まき〔名〕蒔き。播き。田畑の面積を蒔き付ける作物の種子の量により表わす助数詞。3升蒔・5升蒔・1斗蒔という。1升蒔は2畝とか1畝8合とか聞く。別に畑の1升蒔は50歩(約1.7畝)、田の1升蒔は40歩(約1.3畝)とも聞く。田畑の良否は土質・水はけ・肥沃度・日向き・風当り等の諸



条件により異なるから、そこに蒔く種子の良否も加わり、同一面積であっても蒔く量に差異を生ずるのは当然の成り行き。限定した地域内での大略の目安であったと思う。

まきがわ〔名〕周囲を石で築き上げた井戸。「かわ」は井戸。掘抜き井戸に対しての名。

まきするめ〔名〕鯛に手足や昆布をしっかりと巻き込んで外もしっかり巻き締めて煮上げ、薄い小口切りの輪を作る。正月や祝い事の肴や飾りの一品とする。

まきた〔名〕正北風の意である筈だが、^北の風ではなく^北に寄った北東風乃至北北東風を指す地方が多い。単に^北風と云えば、北の方角からの風一般を指す、おおらかさがあり、「きたかぜ」の中で、特に強く寒さを感じる北東風や北西風は農漁民の最も恐れて来た風である。「まきた」とはそんな人々の恐さが加わってきた風の名ではないのだろうか。

まきたをし〔名〕巻き倒し。根無しかずら。菟糸。他の草に巻き付いて伸び倒していく草。ひるがお科。

まきどへー〔名〕土塀の一種。「ねりどへー」に同じ。

まきよま〔名〕漁具に用いる糸よま。「せきよま」に同じ。

まぎり〔名〕舟を帆走させ乍ら鰯を釣る漁法。「こぎの一」ともいう。この舟に用いる帆を

「まぎりぼ」といい帆前船型の帆。「すいしぼ」も同じ。

まぎれまってー〔形動〕「間違いなし」との強い意志を伝えるのに用いる。「まぎれまってーなし」と。

まく〔動〕井戸を掘り周りに石を築くことを「まく」という。

まぐ〔動〕鶏姦（男同士の性行為）。男色。「尻をまぐ」。

まくさ〔名〕住家の土間への入口上に横に渡した材。最大材木を用いる。

まぐじ〔名〕目やに。目やね。目臈。

まくばる〔動〕案配する。塩梅よく配置する。「苗をまくばる」。

まくらなわし〔名〕人死すれば北枕に直し顔には白布を被せ、夜具の上に^{かぶ}敷を置く。「まくらがえ・うらをむく（け）る」ともいう。従って常には北枕に寝るのを忌む。

まくらばこ〔名〕漁師の持つ長方形の小箱。一端に紐を付け、中には煙草・護符・医薬品を入れ、休息・休眠時の枕にも用いる。

まくらめえー〔名〕枕米。産婦の枕元に米俵を置き、寄るかへらせた。

まくる〔動〕(1)痛む。せく。「腹んまくる・腹んまくりでーた」。(2)かぶれる。うるしまけする。「^{かぶ}櫃にまくる」。草木の毒気にかぶれる事。

まぐれ〔名〕夕方。夕暮れ時。

「けえーまぐれ・ひぐれまぐれ」。

まげつくる〔動〕仕事を大概のところで加減（適当に）し、片付ける。「大概にしちまげつくる・ひんまげけえーまげまげつくる」等と用いる。

まけもん〔名〕うるし・毒草などに触れてできるかぶれ一般名。「うるしまけ・つたまけ・はぜまけ」類。「かぶれもん（物）」も同じ。「まける」も同。

まこ〔名〕魚類の腹子・卵。

まこち〔名〕正東風。

まごめ〔名〕真米。もち米に対するうるち（し）米。

まさかき〔名〕真櫛。神楽舞の名。採物に櫛を持ち一人で舞う本地舞。「のづち」に連続して舞うと。

まさきかずら〔名〕ていかかずら。きょうちくとう科の植物。往古来「まさきかずら」は「ていかかずら」であるとの考証が成立している点から、壹岐に本種の古名が生き続けていることになる。興味深いことだ。

まさご〔名〕(1)浜石の小さなものの総称。(2)「いみ」の日に海辺に行き小石を小麦稈の小苞に包み、それを2本股にして括り合わせたものを「まさご」という。(3)同様の苞に小麦粉の平団子を挟んだものを1本宛作り、神前と田畑の神に供える。これら(2)(3)の苞を

作ることを「まさごつつみ」という。「いみ」の日の神事。

まじ〔助〕まで。「どこまじ行たつじやろーか」。「まち」も同じ。

ましけおよばん〔形動〕手に負えぬ。

まじまじ〔副〕もじもじして行動の敏捷ならざるさま。

ましょく〔名〕間尺。寸法。計算。

ましょくにあわぬ（ん）

〔形動〕間に合わぬ。「ましょくいあわん」も同じ。

ますもん〔名〕穀類一般。枳で測る物。「ますもの（枳物）」。

まずる〔動〕来客一時に殺到混雑するさま。「せせかう」状態になる。

まぜくる〔動〕混ぜまぜし混乱する。

まぜにし〔名〕南風から西風に変わる風をいう。又南風とも西風もつかない浮動風を言うとも聞く。

まぜまぜ〔動〕「まぜくる」に同じ。

まぜめし〔名〕五目飯。まぜごはんとも言ふ。

まそ〔名〕麻糸。

またかる〔副〕今度から。次から。二度と。再び。「またかる来るな」。

またぎ〔名〕流船の漁具類を掛ける為、船梁に設置の股木。

またくら〔名〕股。内股。股座。

またけ〔名〕竹の一種。箭竹。

矢竹。

またこあま〔名〕頼れる稼ぎ多い海女。

またこがい〔名〕鮑の雌雄中間性種。「またこげえ」が方言。

またらず〔名〕間足らず(船)。「てんと船」より更に小型の漁船。「なかの間」を欠く4間長さの船。

まちうるうえー〔名〕待ち潤。降雨を期待し見込んで農事(播種・植付け等)を進捗すること。農用語。

まちくだり〔名〕「いなか(在部)からまち(浦部)へ、米・麦・野菜・薪・果物を売りに、序に日用品や魚等を買ひ求めに行くことをいう。「あきないくだり」も同じ。

まちでーこつ〔副〕無為に待たされ続ける。長時間待つ(待ちななか)こつ。

まぢゃー〔助〕までは。「ここまぢゃー」。

まちょー〔名〕余裕。余裕。「まちょーんあれば借りたか」。

まっくろさんげ〔形動〕一生懸命。「まっくろさんげ走っち来た」。

まっこ〔副〕丁度。

まっしゃ〔名〕(1)本宮の末社。(2)一族の中のそれに連なる下級者。(3)一族中の子や孫大勢。「まっしゃまち、大勢んごつ参りました…」。

まっしょー〔助〕ます。ました。

まっする〔助〕ます。まする。

まっせー〔助〕ます。ませ。なさい。

まっせば〔助〕下されば。「まっしゃ」。

まつたて〔名〕一般には正月14日、松の内が経つ日。一切の正月飾りを取り払う。婚家から子孫達が親元を訪ね祝事となる。「まつたて」も同じ。

まっと〔副〕もっと。今以上に。「まっと前さね出る」。

まつな〔名〕すぎな。つくしの親株。とくさ科の草本。

まっぶくれ〔名〕満潮時。

まっぼし〔副〕真正面。真っ向。正面きって。直接に。いきなり。

まつめじろ〔名〕きくいただき。小鳥の名。

まつら〔名〕舟の内側の底板から棚板にかけ「くの字型」の用材を打ちつける。この木材をいう。

まつりまき〔名〕祭礼祝いに贈られる品々。多くは鮮魚が用いられると。

まて〔名〕木及び成る実をいう。まてばしい。まてがし。まてのき。ぶな科の木。この実を用いて独楽遊びをする。「まてこき・まてーこ」という。勝負を競う賭事遊び。

まてしばしのなか〔形動〕気がいら立って心に余裕がないこと。

まてどくらせど〔動〕待っても待っても。いくら待っても。

まどう〔動〕償う。弁償する。
 まどろしか〔形〕じれったい。
 まないたおこし〔名〕振舞の加勢人が、自身たらふく飲食すること。加勢人の勝手次第。
 まないたながし〔名〕祝宴の翌日、加勢人へ慰労お礼の宴を張ること。
 まにし〔名〕正西風。西方向の風ではあるが、申西風（南西風）と言うなど捉え方に地域差あり。「まきた」参照。
 まねかた〔名〕真似。略式。謙遜の気をこめ「ほんのまねかたですたい」。
 まねきべい〔名〕招き幣。祭礼の神幸行列に、竿の先に扇を竿で括り付け奉持して進む。これという。
 まはいえ〔名〕正南風。「まはえ」も同じ。
 まび〔名〕土用中は畑の土を屋根等家に使用するのを忌むが、土用中でも「まび」といい幾日かは忌み明きの日があると。この日をいう。
 まびーいった〔形〕「まびい入った」。予期せぬ馳走に預った喜びのさま。
 まびき〔名〕しいら。シイラ科の魚名。「まんびき」ともいう。
 まびしか〔形〕まぶしい。まばゆい。「まぶしか・まべしか」ともいう。
 まぶり〔名〕お守り。護符（社寺）。
 まぶりがき〔名〕家毎に正月に家の神・屋敷（宅地）神・地

神・水神・火神等を神官を招いて、家内安全と繁栄・無病息災・招福を祈願し、悪魔退散の神事を執り行ない、神酒・山海の幸を供え親戚を招き祝宴を張る。「宅神祭」ともいう。
 まぶる〔動〕(1)守る。祭る。(2)頼る。養育する。養ってもらう。
 まま〔名〕飯。ご飯。「かつかん（母さん）まま食う（ご飯が食べたい）」。「まんま（小児語）」も同じ。
 ままゆ〔名〕飯湯。釜底の飯粒に熱湯を注ぎ粥状にしてすり込む。
 まめ〔形〕小さい。少ない。「まめこぞう・まめぞう（小僧・小男）」。
 まめず〔動〕まぶす。混ぜ入れる。添加攪拌する。
 まめずり〔名〕少年男女の淫事の真似事。「まめずる」も同じ。
 まめる〔動〕加わる。参加し仲間として行動する。まみれる。「まみる」同。
 まや〔名〕物入れ庫。倉庫。本まや。牛舎・牛小屋は「うしのまや」と区別。
 まる〔動〕放出・排泄。「小便まる」。
 まるーと〔名〕眼疾名。そこひ類の目の病。「まるーと焼き（治療法の一）」。
 まるーとやき〔名〕「まるーと」に患ると背中に小吹出物がで

ま

る。これを灸で焼くと眼疾が治るという。

まるぎり〔名〕鯨を胴門部で胴切りにした下部の名。鯨組用語。

まるっと〔副〕全部。すべて。まるごと。「まるっと私を買うちしもた」。

まるぼーず〔名〕丸裸。無一物。

まるめ〔名〕丸薬。

まるやま〔名〕子どもの頭髪を円形に刈り残す刈り方をした。地域により「かぜ」とか「やきもち」とも呼ぶ。

まれか〔副〕稀。希。「まれかに来る」。「まれき・まれき」も同じ。

まろく〔副〕完全に。まともに。「まろくい一物ん言えさっさん」。

まわし〔名〕(1)鯨の大骨の接目肉名。(2)男の褌に同じ。

まわしいとらる〔動〕多勢の中から数名の者が責任を負わされる。貧乏くじを引き当てる。「まわしいとる」。

まわす〔動〕往時上納米の品質容量を検査するため、一部落毎に一纏にして積み、その中から適宜数俵を引き抜き検査し、若し不足の場合には関係全部に増量させた。現在の売買取引きにも同様用いられている。〔副〕よく働かれる。よく動かれる。

まわりざく〔名〕廻り作。(1)一定の田畑を順次交替して耕作

すること。(2)地帯制度の下で年限を決めて耕作地の配分替えがある。この事をいう。

まわる〔副〕よく働く。「ひとりで良うまわるばい」。

まん〔名〕めぐり合わせ。運不運。「まんの良か(悪か)った」。

まんがうるうえー〔副〕稀な潤い。たまさかの降雨。

まんがまれき〔副〕極めて稀に。「まれき・まんがまれき」も同じ。

まながれえー〔名・動〕物を背に紐で括りつけ負うこと。長紐を首の左右後へ周わし、荷の外を上から下に引き、首の輪と引き合わせて脇の下で体にしっかり締め背中荷を安定させる。「まんがらい・まながれえー」ともいう。

まんぐり〔名〕(1)間繰り。繰り合せ。「まんぐる(都合よく繰り合せ)」も同。(2)煤払いに用いる「いえ(え)びがね」。

まんこ〔名〕饅頭作り用粉(饅粉)。小麦粉。「饅粉団子(小麦粉団子)」。こめんだご(米粉団子)・きびだご(黍粉団子)等(参考)。

まんさん〔名〕満参。満願。最後。

まんさんねぶつ〔名〕盆の最後念仏。往時は各地区念仏講の人々が、高所に集まって念仏を唱え諸仏・精霊様の盆送りをした。

まんじゅばな〔名〕ひなぎく。

きく科の草花名。

まんと〔名〕かすぎめ。魚の名。この方言は割り合いに新しいのでは。

まんなわし〔名〕不仕合せを祝い事で好転させること。神を祀り酒宴を張る。特に漁業者に多いと。

まんぶ〔名〕まんぼう。魚の名。

まんべんのう〔副〕残すところなく平均に行き渡らせる。「まんべん」も同。

み

み〔名〕箕。穀物を入れあはつて殻やごみの雑物を除き精選するちりとり状の広く大きい選別具。人が前に両手で抱え、腰の高さに保持し煽る。「みー・みい・みい」等と呼ばれる。

みーきぶね〔名〕御幸舟。神幸船。(1)祭礼時海上神幸に御輿座乗の船。(2)祭礼の折行なわれる舟(船)競漕をいう。「ふなぐろ(ごろ)」ともいい、一の舟には神官坐乗、二の舟と港の対岸を目指し競漕する。

みーく〔動〕探す。見付けさがす。「もーく・もーくる」も同じ。

みーる〔名〕みる。みる科の海藻名。食用となる。〔動〕殖える。増す。「みーれ(殖えよ)」

同義。

みーれみーれ〔名〕正月14日「まつたて」の行事。「をに(鬼)の夜」に立てた「たらの木」を1尺長に切り皮を削り、これに螺旋を描き、「みーれみーれ(殖えよ殖えよ)」と唱えつつ、金箱・米俵等を叩いて廻る。地域により果樹なども叩く。「たら」は門口・神前に立て供える。豊稔豊作を祈願する行事。「じょーめ・ぼーせんぼー」等参照。

みがい〔名〕実飼い。牛の飼育に餌として穀類を多用すること。

みかじむる〔動〕采配する。取締る。後見する。監督する。

みぎわ〔名〕その前後。「盆のみぎわ」。

みくしゃくさんげんばり

〔名〕三九尺三間梁。壱州間の家屋建築の基準は(9尺×3=27尺=4.5間)の間口に奥行3間・即ち13.5坪を基本と、これに半間と1間大の畳、半間幅の戸・障子をきっちり建て付ける寸法になっていた。

みこざけ〔名〕漁船乗組員の妻が妊娠した場合、当人は1週間船を降り、酒を1升出して船霊様に祀り、一同に振舞ってその忌みを浄める。この酒を「みこざけ」という。

みこしぐさ〔名〕げんのしょうこ。ふろうそう。ふろうそう科。「こうしんさんばな」ともいう。

みこしぐさのうばきじょー
〔名〕つぼくさ。せり科の草本。

みこしにゅーどー〔名〕妖怪の一つ。夜間歩いていると頭上で「わら・わら・わら」と笹の音。その時だまって通ると竹が倒れかゝって死ぬと。この時「みこし入道見抜いたぞ」と言えば消え失せると。

みこなす〔動〕軽侮する。「俺ばみこなすか、やるぞ」。「みさぐる」も同。

みこの〔名〕蛇の一種。管程もない黒・褐色の小蛇。「六寸釘」の名もある。

みさき〔名〕(1)山・川・海みさき等あり、七みさきともいう。山野河川海辺に充滿している諸亡霊の意。(2)別説には、山にあると信ぜられる神霊で、陰陽道に属する神霊やうのものともいう。(1)(2)いずれも「みさきさま」とあがめまつる。又、みさき神の崇りに会うことを「みさきいーあう」という。みさき神を「みさきさん」とも。

みさきかせ〔名〕みさき神の崇りは遊あそ行する一種の悪い風に当たると考えられている。

みさきまつ〔名〕老松に瘤の生じた松をいう。「みさき宿る」ともいう。

みさきまつり〔名〕山の親木を伐る時は「みさき神」を他の木に移す。この神事を「みさきまつり」という。

みざめする〔形〕身の気もよだつ思。身ぶるいする思。

みざれ〔名〕水田の上部から流入した水の方で周辺の耕土流亡し、あずや土石・雑物が流入して堆積し荒されるところの名。大雨などに起こる。

みじゃく〔動〕打ち砕く。細かく崩し潰す。「みじゃくる・みじゃける」も同じ。「むじゃくる(ける)」とも言う。

みじょうか〔形〕無上に可愛い。可愛らしくて仕方がない。「むじょうか・むじょうしこたえん」に同じ。

みしらがいえーちよる〔形動〕我関せずの態度対応をいう。「みしらがえーちよる」も同じ。「見知らぬげの顔している」ということか。

みしりげ〔名〕生まれた児が親を見知りかける頃、母親の毛髪が抜けはじめると。この毛をいう。

みじろめ〔名〕鰻・鱈類の魚肉を薄く切り冷水にさらして食べる。

みじんかずら〔名〕びなんかずら。南五味子。草の名。

みずあげ〔動〕「あなばち・さらわる」に同じ。

みずかけぎもん〔名〕水かけ着物。死者があると「みつかあれえ(三日洗い)」に洗った当人の着物を北向きの陰場に7日間吊し、毎日それに水をかけ乾かぬようにしておく。死者は死後7日間に「火の山」

を越すとの事。

みずくり [名] 「くろくち」の小さなものの呼び名。魚の名。

みずこ [名] 生後1年以内に死亡するのを水子という。この子は生まれ代ってくるものとされ、仏の扱いはしない。

みずこーぼし [名] こごめかやつり。水辺に多く生える。かやつりぐさ科。

みずこし [名] 舵につける綱。船具。

みずこぼし [名] 墓前に供える水鉢。

みずじろめ [名] 「みじろめ」に同じ。

みずたで [名] しろばなのさくらたで。たで科の草本。水辺に多い。

みずたな [名] 竹で編んだ台所の流し台。水棚。

みずとあきない [名] 品物を見て吟味もなしに買うことを「見ずと商い」という。親達が決めた相手と半ば強制的に結婚するのに例える。「見ずと飽きない」で、却って互いに飽きが来ないで幸せが来ると。

みずのこ [名] 祖先の供養に供え物として、粳米の粉の小さく丸めた団子を作る。御水粉と表書きした水祭り料を関係者からは供えて法要に列なる。

みずはり [名] 妊婦の胎児を包み羊水と共に胎児を守っている子袋。

みずぶか [名] よしきりぎめ。「みずぶか」の名は九州で多く

用いられると。あおなぎ・よしきり・みず・みずぎめ・あおぶか・あおた等、それぞれ各地で呼ばれている。普通体長3〜4m、背紺青色の鯨。

みずまつり [名] 仏の供養に、膳に水鉢と生米と飯を入れた重箱を用意しておく。読経の終りに僧の指示を受け、重箱の生米と飯を添えの箸で水鉢に入れ、鉢に添えた杉の小枝で水と共に3度程かき廻して拝む。杉の小枝の他に菊の花柄や季節の花や楊柳等適宜に用いる。

みぞ [名] 畑に作物を仕付けた後、畝に斜に「そね」から「こじり」に向い大きめの溝を3間隔位に繋ぎ入れる。この溝は「どろーじん」さまの遊び道とも、悪い風を払う道とも。

みぞご [名] 溝。溝川。みぞつぼ。溝は、しばしば川となる。

みそこぼし [名] (1)すばる星。すばるの名は古事記・万葉集の他、古記にも見える。二十八宿昂宿にあたる。(2)烏打帽子。ハンチング。

みそつちよ [名] みそさざい。焦茶色で日本産最小鳥の一つ。尾羽を左右に振ってはね歩き乍ら、くも・ごみむし・蠅の卵・小昆虫類を食べ、茂みの間・がけ・民家の縁の下の薄暗い所を、チチ・チチ・チョツチョツチョツとさえずる。「みそさぜー」ともいう。みそ



さざい科の小鳥。

みたつる〔名〕葬式の野辺送りに参加し伴する。「みたて」ともいう。

みたて〔名〕診断する。「医者さあのみたてはどうじゃつた」。

みたみなか〔形〕みつともない。はずかしい思いをする。みててはずかしい思い。「みたぬなか・みたむなか・みたんなか」も同じ。

みだれおーし〔動〕貧困の中で多くの子を養育していくこと。「みだれををし」とも言う。「おーし・ををし」は養育する。「おーし」は「おおい」。

みだれまい〔名〕神楽の舞い方。4人一緒に二重に舞う。多くは末舞の舞い方。地舞に対する語。又、前段の舞を「本・本舞」、後段の部を「末・末舞」と言う。

みちしき〔名〕道路に付属した空地。旧藩政時代からの用語。道敷。

みちしば〔名〕ちからしば。これと混生する「かぜくさ」も指すことがあると。共にいね科。

みちつぐろ〔名〕同じ方向に二道ある場合速さや距離の長短の競争・くらべをする。「みちちょぐろ・みつちょぐろ・みつつぐろ」等とも言う。別掲「ふなぐろ」の「ぐろ」同系。

みちなんがり〔副〕道すがら。「道なんがり、そりばっかり考

えち来た」。

みちよけ〔副〕見ておれ。今に俺だって。馬鹿にするんじゃないぞ。

みっかあれえ〔名〕三日洗。人の死後3日目に、死者の身の廻り品をその子達が寄り集まって洗い仕末などすること。「みづかけぎもん」参照。

みつかど〔名〕茎は太く三角柱状のたまがやつり。かやつりぐさ科。

みっかもどり〔名〕婚礼後3日口、「おやおれめえ」の翌日、嫁は島田を丸髷に結び、酒に世乞餅(みっかもどり餅)88個・茶・米・赤飯・鯛や肴類を持ち婿と共に里帰りをする。「みつめ・かえりぞめ・みっかもどり」と言い、婚家の両親を伴うこともある。家庭の実情地域の習慣によって異なり一定の方法のもとに行なわれていた訳ではなかった。

みつくみさかづき〔名〕結婚式での盃ごとは仲人が執り仕切った。みつさかづきともいい、新郎新婦の三三九度の盃をいう。親戚の男女児が選ばれ、雄蝶雌蝶となり、酒器(さかづき)に酒を注ぎ、その間に仲人が祝謡(いわ)小謡を謡った。その後親子のかための盃などへ移っていった。

みつくり〔名〕いしだい。魚の名。

みつくる〔動〕探す。探し求める。

みっしなる〔動〕滋養になる。
みつばかんだ〔名〕くず。くずかずら。「かんねかんだ」に同じ。まめ科蔓性植物。
みっばったいーごつ〔名・形動〕あからさますぎる争い事。見張った言事。側からは何等手を加える必要もない中味のはっきりしている争い事(事柄)。「みっばったこつ」ともいう。
みつばのうばきじょー〔名〕おにみつば。みつばに似た、せり科の草本。
みつびょー〔名〕3俵で1石となる俵物。三つ俵。往昔1俵は3斗2升俵であったが、添えを加えるのが当時の常識。3斗3升以上入っていたので3俵で1石は当然と。「こくいーまわる」参照。
みつぶかんめ〔名〕旱魃等で生育不良の稲の穂が、わずか2～3粒程しか実付きしていないもの。
みてかわる〔形動〕予想と反した。以前と様変わりした。案外な。
みてぐらさま〔名〕田の神。田の神は天神さまだ、という。
みと〔名〕綱引きの綱の中心点。綱のほか、長さのあるものの中心点を表すにも用いる。
みどころ〔名〕身どころ。肉どころ。魚等の肉身の部分一般(骨頭以外の)。
みとさー〔名〕「かみだ」又は

「みとだ」の神に捧げる祭具。神の「よりしろ」「みてぐら」の一種と見るべきもの。田植えの折、笹を束ねたものを「たかばり」で括った物を平年は12、閏月年には13個作って特定の田畦に立て6月29日忌の日に「かみだまつり」を行なう。

みとだ〔名〕「みとさー」を祀る特定の田(地区毎に決められている)。地区により「かみだ」又は「みとぜまち」と呼び名も異なる。

みとぶね〔名〕2艘1組三手から成る捕鯨網船の中心(中央)に位置し鯨の進路に当る網船。3組協力して網を張る。捕鯨用語。

みな〔名〕貝。蛸。にな。

みなおり〔名〕船の用材名。「とこ」の次の船梁。

みながら〔名〕蛸類の殻。「みながらんようなあせ(蛸殻の様な大粒の汗)」。

みなくち〔名〕水の出入口。田の畦に設けた水の取入口を「いで」放水口を「みなくち」又は取入口を「みなくち」放水口を「したみなくち」と呼ぶ等、地域差もあるようだ。

みなだこ〔名〕(1)磯辺に棲む小型の章魚。(2)鰯の一種。「いかだこ」ともいう。「よーちょー」を骨を強めにし、下端に尾を付け揚げる鰯。

みなみめ〔名〕沓岐島南部地区一帯の呼び名。「きため・にし

め・ひがしめ」あり。

みなわ〔名〕帆を巻き上げる綱の名。

みのうえもち〔名〕正月餅搗加勢人に持たせる祝餅。小豆をぬり付け特大につくる。又白餅と小豆餅の一重ねを分配するとも。「みのういえもち」。

みのくさ〔名〕すずめのてっぽう。いね科の草本。

みのてーら〔形〕衣服その他身辺のものが身に添わず、身もだえする。

みのぶろしき〔名〕三布風呂敷。3枚の布を縫い合わせた大風呂敷。唐草模様・松竹梅・木葉模様・鶴亀・生家家紋・住所・父母名・持主の旧姓名等を主として紺色染めにし渡した。「嫁入り風呂敷」でもあった。

みのめえーかき〔名〕三布前掛。三幅布で膝より少し下までの丈の巻きスカート状腰巻き。木綿やネル地で作り、普段は帯をせず「へこ」の上にこの「みのめえーかき」をつけ、動き易い作りになっていた。

みまきかんだ〔名〕おおつづらふじ。つづらふじ科の蔓性植物。穀類の選別精選用の農具「箕」の縁巻仕上げ用として利用されていた。

みみかど〔形〕耳の機能能力。聞きさにとることの敏なるを言う。「耳かどぬ強か・耳かど

ぬ立つ」。単に耳の機能の良さだけではなさそう。

みみきき〔名〕捕鯨中、舟の小縁を叩き音を立て網に鯨を追込む作業。

みみご〔名〕耳垢。耳翼。耳のくそ。

みみずばれ〔名〕血管が現わに腫れ出し状になること。蚯蚓腫れる。

みみだれ〔名〕耳の病気。耳の中から粘液膿様の臭汁がでる病。

みみなば〔名〕耳茸。きくらげ。

みみのす〔名〕耳穴。耳。

みみのは〔名〕耳朶。耳たぶ。

みみむかせ〔名〕形体小のむかで。曷の数目などにいて子供(人)の耳に入に害を与えたりする。蜈蚣の一種。

みやげだご〔名〕盆の15日仏送りの仏のみやげとして、多くは「あかめがしわ」の葉に包んだ団子を作り供える。(1)1枚1枚の葉に団子を包み、棕櫚の葉を裂いて括る。(2)包んだ団子を葉柄を使って括る。共に蒸しあげて、15日の夜半から16日にかけて、山村部では各家毎に近くの川辺や水辺で、小麦稈の舟型「しょうろふね」を作り「みやげだご」の他数々の品を積み込んで送る。

みやごもり〔名〕宮(神社)で行なう講盛りをいう。

みやすい〔形〕たやすい。易い。「みやすか」も同じ。

みやぢ〔名〕(1)神社(宮)地。
(2)宮司宅。「みやじ」も同じ。
みゅーと〔名〕めおと。夫婦。
みろ〔助〕してみよ。みなさ
い。「取っちみろ・見ちみ
ろ」。「みろ、良か(良うなか)
ろうが」。「みい」に同。

む

む〔助〕も。「あれむこれむ」。
むいかぬしょーぶ〔名〕旧暦
5月6日の遊楽。「むいかんし
ょうぶ」も同。
むかえかぐら〔名〕神迎え神
楽。旧暦11月初め各神社にお
いて催す。出雲の地以外は旧
暦10月は神無し月。この日浦
部では浦中の船頭寄りをを行い、
各流期中の米の値段等を協議
す。
むかご〔名〕やまいものつるに
成る実(子)。
むかし〔名〕昔話。伝説。お伽
話。「むかしむかし」で始まる
ところからか「むかし語っち
聞かする」と言い、昔話が始
まる。
むかしよぼで〔形〕いつとも
知らぬ者だが、という程度の
意を表すのに。
むかぜ〔名〕(1)百足。むかで。
虫名。(2)鱗の両体側後半部に
並ぶ「ぜんご」と呼ばれるぎ
ざぎざ状のものをいう。
むかばるる〔動〕病氣等により

顔などにむくみ腫れの出るさ
ま。「むかばれる」ともいう。
むかむかする〔動〕怒気に胸
がむしゃくしゃする。体不調
で胃がむかつく。
むかわり〔名〕今から1年後の
同月同日。「むこーりづき」と
もいう。
むぎあき〔名〕麦の収穫時期。
麦秋。
むぎうませどり〔名〕梟のこ
とにも、かつこう鳥のことにも
用いる。この鳥が鳴く晩
春初夏の頃麦の色着きがはじ
まる。
むぎから〔名〕麦稈。麦わら。
むききる〔動〕亀頭を頭わにむ
き出す。「かりかりむき(す
る)」ともいう。
むぎしょー〔名〕さきのはべ
ら。てんじょうべら。「庄屋の
嫁・喰わぬ振・むぎしょー」
などと言う。
むぎたながし〔名〕麦田流し。
水田裏作として麦を栽培し、
これを刈り穫った後に水を張
り犁起し水田に戻す作業。又
この時期の纏った降雨名。
むきやう〔動〕向き合う。男女
関係をいう。「むくりやう」と
もいう。
むぎわらだい〔名〕麦が黄熟
する頃によく獲れる鰯。近海
で多く獲れる。
むぎをろし〔名〕竹を割って編
んだ麦の種実精選用篩。農具
名。
むくぎ〔名〕むくげ。むくげの



木。ぜにあおい科の花木。

むくじる〔動〕皮をむく。はぐ。中味をあらわにする。「茨をむくじる・爪でむくじる」。
むくりかくる〔動〕抵抗しかかっていく。「むくりかくるばかりでどおむこおむされじやつた」。

むくりこくり〔名〕沓岐の方言そのものではない。「むくり」は蒙古、「こくり」は高句麗。沓岐は894年新羅の賊に、1019年刀伊の賊に、続いて文永11年(1274)、弘安4年(1284)の役に来襲した蒙古・高句麗連合軍により島民全滅皆殺しに近い殺りくに遭った。以来「むくりこくりの鬼が来るぞ」と聞けば泣く児も黙り恐れられてきた。

むくろう〔名〕むくろじ。むくりこ。この木及び成る実をいう。無患子。「むくろー・むくろ(むくろう)こき(むくろじを用いた小児の遊び)」。

むこーづめ〔名〕祝宴の膳に付く「二の膳」の小鯛の丸焼き。向う詰め。

むこーづら〔名〕額。「むこうづら」も同じ。

むこーばのしをけ〔名〕向う菌の塩気。ほんの少しばかり口にする塩気物。「向う菌の塩気んしこばかりですばって、お上っちみちおくれまっせ」。

むこかくし〔名〕婚礼の行列に加わり婿と共に嫁を迎えに行く男の一人。

むさぶりつく〔動〕うるさく縋りまとわりつく(小児等)。

むじ〔名〕散弾銃に詰める小粒鉛弾。

むしぎとー〔名〕「さねもりぎとー・たぎとー」などと同じ。

むしくれ〔名〕真鯛の中型のもの。この鯛が獲れる頃から、その口中に寄生虫の発生がみられる故の名と。

むしやき〔名〕旧暦正月2日の農耕行事。この日「なぶたけ」に出て「くわはじめ」の行事をした後、穴に糊殻を焼き真竹の小さいのを2本又は3本交叉して立てる。

むしやみ〔動〕未熟果実が害虫に犯され、部分的に枯死状況になること。

むじょーがる〔動〕こよなく愛する。可愛がる。「むじょか・むじょがる・みじょーか」も同じ。

むじょがりころす〔形〕耽愛する。

むしりつく〔動〕縋りつく。

むしろ〔名〕畳。「むしろ敷く(畳ひく)」。

むしろぼし〔名〕庭の上に拡げ干し乾すこと。稲の刈り取りに「架干し法」が導入されて、籾の乾燥は向上したが、それ以前は、刈り取り脱穀の後、好天下に庭に広げて干し上げ収納した。平成11年代の今農業の大型化機械化に伴い「むしろ」も「むしろぼし」にも日にかかれぬ実状。

むじん〔名〕無尽講。頼母子講。地域や講中の任意の有志が、経済的救済や、宮参り・工事・事業費の資金や人員調達等の目的で一般に呼びかけ賛同者を募って組織運用した。名称には発起者名や目的名の他、雑穀無尽・出来穂無尽・賦役無尽・骨無尽・めーかき無尽等々が付けられた。「めーかき無尽」は女性しか加入でなかった。無尽は最後に受取る者が一番儲る仕組でこれを「満回無尽の流れ込み」という。

むしんこむしん〔動〕平身低頭嘆願すること。「むしんこんごー」も同じ。

むすび〔名〕草角力の三役取組と賞。

むっくりこっくり〔形〕眠ったような醒めたような状態。

むつけ〔形〕嘔吐を催しむかく。「むつけんきた」。むくけ。

むつけんぎょー〔形〕むっとして無愛想になるさま。

むなぎ〔名〕棟木。麦稈屋根では、「さす」の上に棟に添うて横に渡す材木。屋根材の名。

むなづけ〔名〕「ぎつけ」に同じ。

むねくちひばる〔形〕着物の前をはだけること。

むねぬとろか〔形動〕心の働きの鈍いこと。「むねんとろか」も同じ。

むねぬふとか〔形動〕心が大い。「むねがふとか(ふとか

らす)」も同。

むねぬまくる〔形〕食物によって腹から胸にかけて焼ける感じや痛み。

むのー〔名〕長縄の幹糸。漁業用語。

むらゆり〔名〕5舢以上の村庄屋を大庄屋といい、大庄屋にするため小村では隣接の大村と境界を融通し合って5村にした。このように村の高低の大小を調整することをいう。

むりひどか〔形動〕無理非道なさま。無理な。「むりひどかこつするもんじゃなか」。

むりむくてー〔副〕全く何も無しに。全く零の状態に。

むりむり〔副〕全く。有無を言わず。「むりむり見捨てられた」。

むんからいえ〔名〕昔の家の屋根は殆んどが麦稈葺きであった。稲藁や茅で葺く家もあったが、総じて「むんからいえ(麦稈家・麦藁家)」と言った。屋根の葺き替えは3年毎に1回目は表と一方の「つま」、2回目は裏ともう一方の「つま」を葺いた。三九尺三間梁の標準家屋で1回に麦稈約150把を要した。一度に全部を葺き替えることを「丸葺」と言った。

むんずり〔動〕かすかに動くさま。「むんずりとむせん・むんずりいごき(うごめく)する」等と用いる。

むんずりこーり〔形〕何を為

すともないさま。とやかくやと朝夕を過す。

むんでえ〔副〕満更。全く何々でない。「むんでえ知らぬ事じゃあるめえ」。

むんでこたなか〔副〕全然だめだということはない、若干の望はあるのでは。

め

め〔名〕海藻わかめ。「めのは」ともいう。「めかぶ・めきり」。「めー」も同じ。

めー〔名〕姪。「めーうばき・めーむこ」。(助) まい。「行くめー」。

めーあう〔副〕(1)間に合う。「めーあうた」。(2)ひどい目に合う。「おーきなめーあうたつばな」。

めーかき〔名〕前掛け。農家女性が仕事着の上から腰前に垂らす前掛け。「めーだり(前垂れ)」ともいう。

めーげ〔名〕眉毛。「めーげん濃か」。

めーこ〔名〕貝の名。食用にもなる。「めーこみな・しただみ」ともいう。

めーす〔名〕おべっか。

めーず〔助〕しない・すまいだろう。「行くめーず」。

めーずいえ〔名〕舞杖。猿田彦の神楽に使用する。3尺程の小竹の両端に「はたき」状の

和紙の白房をつけ、舞い乍ら杖にしたり、担いだり、頭上を廻したりする。

めーぼこ〔名〕麦稈屋根の棟を押える「ひしゃぎ竹」を挟み固定する竹。

めーめー〔名〕まいまい。かたつむり。まいまい科陸棲軟体貝。

めーもち〔名〕(1)正月に嫁の生家に贈る大丸餅。一斤分をその俵丸め、これを2個作り一重ねとして持参する。生家では1個だけ受取り1個は婿家に返礼するのが通礼であった。生家が片親になると1個だけ贈り、両親共に亡くなると自分の年間仏壇に供えた。又「めーもち」には米や酒が添えられた。「親餅」ともいう。(2)正月餅そのものを「めーもち」という地区もあると。

めーら〔名〕(1)部屋仕切りの板張り襖の類をいう。目荒の格子戸に全面板を張り、表はうるし塗りや木地のままのもの、裏面襖紙を貼り手を加えたものの、家の実情に応じた仕様で。(2)泣き虫の児。めめそ泣きの児。

めーる〔動〕参る。詣る。

めあこ〔名〕夜明け。明るくなつて。

めあて〔名〕家屋敷や土地境界の目印物(石・標柱類)。

めいっぺー〔名〕目一杯。見える限り。見ての判断。「めしようはり」。

めいぬだち〔形〕雌犬だち。雌犬が発情し雄犬の後をつけまわすさま。人にも例えて「めいぬだちおなご」「めいんだち・めいんだちしちよる」。

めかど〔名〕目先がよく利くこと。「めかどぬたつ・めかどぬある」と。

めかぶ〔名〕海藻わかめの茎根元部に出来る胞子のう。細かく刻んで、とろろ状にし食用にする。

めかぶら〔名〕目の上。まぶた。目被り。目冠り。

めがましか〔形〕見るもの聞くものにうるさい程細々と聞き糺すくせ。

めかめか〔形〕病気で目が、しか目ただれ目状になること。

めがらみ〔名〕乾燥わかめを洗いもどして刻み、酢醤油で食するもの。

めくじらたつる〔形〕目尻をつり上げ怒るさま。

めぐすりのしこ〔副〕極めて微量な「めぐすりのしこばかり」ともいう。

めくらこー〔名〕無礼講。

めくらじま〔名〕盲縞。極めて細かい縦縞模様。

めけたる〔動〕無気力な状態。「めけたるる・めけたれちよる」も同じ。

めご〔名〕底を基盤目状に編んだ浅めの竹籠。

めこすりなます〔形〕手易く直ぐ物事を処理してしまう。訳なくやってしまうさま。「ね

えーごつもなか」。

めざけ〔名〕碎け米。みじゃけ米。「めじゃけ・めじゃけ米」も同じ。

めざけだご〔名〕碎け米やしいら米を粉にして作った団子。農家の平常食の一つ。甘くなかった。「めじゃけだご・みじゃけだご」も同じ。

めしーら〔名〕女の児。「めしーら」も。

めしつぎ〔名〕飯櫃。「いびつい飯櫃」。

めしよー〔名〕眼力。

めしよーはり〔形〕目一杯。見た通りのさま。論より証拠。

めじりさぐる〔形〕目尻さげる。男の女に対する甘すぎるやさしさ、対応。

めしる〔名〕目汁。涙。「目汁・鼻汁」。

めじろばと〔名〕あをばと。鳩。

めた〔名〕目の病氣。目ただれ。「めたくわち・めたくわつちよ」も同。

めたたき〔動〕またたき。まばたき。

めただれげえ〔名〕ながにし。蟻の一種。「みがきほら貝」もいう。

めだち〔名〕芽吹きはじめの若芽。「めだつ芽吹く」芽を出す〔動〕。

めだめだ〔形〕薄くてなめらかな手ざわりのさま。

めちか〔名〕鯉の一種。「しび」参照。



めつきしゃつき〔形動〕きつぱりと左右何れかを決すること。

めつくおー〔形〕編み目のつまったさま。「てぼがめつくおーしちよる」。

めつくわする〔動〕そのまま放っておくこと。

めつけ〔名〕吠。かます。藁製袋。

めっこー〔名〕真っ向。「めっこーくらするぞ」真額。「めっこう」も。

めっそー〔名〕日測。日分量。目加減。「めっそーで物売る・めっそー言う(言うな)」。「めっそう」も同じ。

めっそうな〔副〕思いもよらぬ。

めっちょ〔名〕盲目。盲人。〔形〕物事の判断が正常に出来ない人。「めっちょー・かためっちょ」等用いる。

めっちょうえ〔名〕適当に距離間隔を目測でとり乍ら「めくらめっぼう」に植え進む。田植えにはこの外に、投げ植え(2〜3粒の粃を土団子にして)、苗を2〜3本ずつまとめ振り撒く、「ぐうらんうえ」(田の周囲から中央に向かい渦巻状に植え進む)とか、「みゅうとだうえ」(田の真中に一文字に縄を張り、それを目印に左右から中央縄に向かい植え進む縄の線で折返す)とか、其後正条植えにより「すぎり(しぎり)」植えの時代を経て、

手植えは機械化し、育苗も全く様相変わりして、「めっちょうえ」は棚田や田の隅での補植法として残っているだけ。

めつつら〔名〕目面。目や顔。「こぬ頭あめつつらえもかからんが」。

めって〔副〕(1)めったに。殆んど。「めって来たこつあなかった」。(2)度々。何度も。「めってえ行くごつなつたが、あくせえなもん」。

めとんぼ〔名〕油断。ぼんやり。「めとんぼまわす(な)(ぼんやりする(な))」。

めなが〔名〕がんのみ。かにのめ。小豆に似て細長、蟹の目を見るような豆。「がんのみ」が通用方言。

めあう〔副〕ひどい目に遭う。「めえあう・めえーあう・めーあう」。

めのす〔名〕目。目の穴。※「尻のす」。

めのは〔名〕わかめ。海藻。

めのはなさき〔名〕眼のすぐ前。「めのはなさき一有るもねえ見えちよらん」。

めのほときさん〔名〕ひとみ。瞳。

めのまたかやす〔形動〕狡猾なさま。ずるいやり方。

めばしい〔形〕まばゆい。まぶしい。「めばしか」も同じ。

めはる〔動〕着物など古びて織目もゆるみ目荒になること。

めひら〔名〕お転婆な女。「めしーら・めしら」にかかわりあ

る語か。

めぶくろ〔名〕眼窩の外周部名。

めぼたる〔名〕目の玉の意か。「めぼたるがとばし出しち(憔悴の状)」との解説が見えるが、目螢が飛ぶ状態への身体^{めぼ}の老化(体調変化)からくる衰えをいうのでは。「目螢が飛びだすようになったち、どおむこおむ…」。

めめ〔名〕外見。外聞。見栄。

めめえー〔名〕目まい。

めめぐろしか〔形〕目の前をちらちら(ちろちろ)して邪魔になるさま。めまぐろしい(しか)。めめんらしか。めめんぐろしか、などと用いる。

めめじょー〔名〕女陰。

めやね〔名〕自脂。「まくじ」に同じ。

めよま〔名〕長繩の枝糸。これに釣針が付く。漁具名。

めらさんぐさ〔名〕むらさきかたばみ。かたばみ科の草名。繁殖力強い。

めれたか〔形〕目出度い。

めんがくいー〔名〕免囲い。旧藩時代田畑の防風林として植えられた樹木。個人の勝手伐採は許されず。

めんだしか〔形動〕珍しい。

めんだりかう〔動〕無駄口たたき相手になる。「めんでー」に似る。

めんで〔形動〕相手の面倒も介せず聞き糺ししゃべり追及する。「めんでー・めんでーとこ

ぼし(説く小法師)・めんでーこく(告ぐ)」等同じ。

めんどー〔名〕めんどはぎ。鉄掃帚。まめ科の草本。「めんどう」も同じ。

めんどうばし〔名〕めんどはぎで作る「亥の子節句」用の箸。この草の幹部の葉花柄を取り、いのこ節句餅や団子に添え神前に供える。又盆の仏の飯盛り^とに立てるところもあると。

も

もー〔名〕牛。「もー・もーちゃん」。「もう」も同じ。小児語。

もーかりや〔動〕そんなに早くから。「もーかり行くと、早よなかで…」。「もーかる・もうかり・もうかる」同。

もーく〔動〕詮索する。探す。見付ける。「もーくる・もーける」も探し見付ける行動。「もーけち見ろ(探せ)」。

もーげする〔形〕気持ち^もが錯乱する。「もーげ・もーげとーげ(強意語)」も同。忙しく混雑し気持ち錯乱状になるさま。

もーし〔感〕他家訪問最初の発語。「御免下さい・いらっしゃいますか」の意をこめて。「もーし・ご容赦おしつけりまっせ」と丁寧に婦人は。

もーしあげ〔名〕告げ口。介解。言い訳。「もーしあげばつ



かりする。」「もーしゃげ・もうしゃげ」も同じ。

もーしおくり〔名〕「触れ言」を隣から隣へ口伝えに言い継ぎすること。大事な伝達手段だった。「もうしょくり」ですねえに（ん）。

もーじゃまつり〔名〕(1)盆の綱曳き行事をいう。無縁有縁の諸霊諸仏を祭る村人の心から発したもので、綱曳きはその地区の供養様や辻で行なわれてきた。(2)盆の15日の夕刻浜に作った棚で無縁仏を祭り送った。

もーす〔敬〕動詞の後に付き、して上げる。上げもーす。やりもーす。「うち（我が家）かりやおばばんばやりもーすつもりいしちよりますけに（ん）」。

もーする〔形〕四っん這いになる。「とんぼする（せろ）」に同じ。前屈み尻高にする。牛（もー）は初めに前脚を曲げて後、後脚を曲げ寝る。起きるのはその逆順。

もーせ〔敬〕しなさい。「お礼申せ」。

もーねんばらい〔形〕皆無のさま。

もーり〔動〕守り。子守り。

もーる〔動〕洩る。漏る。「雨んもーる」。

もいえきり〔名〕薪の燃え残り。「もえきり」も同じ。燃えさし。

もえもん〔名〕共有物。もやい

もの。「もえーもん・もやいもん」も同じ。

もえる〔形〕ほてる。赤面する。(動)種子が発芽する。芽がでる。

もがり〔名〕(1)張り物を張る為両方に横木を設備したもの。(2)牛の仔の出入りを防ぐため木や竹を組んで作った柴折り戸。

もがりとおす〔動〕理非を無視して自己主張を頑強に押し通す。「もがる・もだかる（子供の我侭）」も同じ。

もきり〔名〕漁網の縁網。鱸網など上下の縁に太糸で荒目に編んだ部分。

もくさくちもなか〔形〕多量に。沢山に。「もくさくちもなかしこお菓子もろた」。

もぐらもち〔形〕物のもつれ乱れたさま。「もぐらもちのごつなつた」。

もぐり〔名〕(1)詐偽師。三百代言。「もぐりもん」。「もぐる（詐偽取財）」も同じ（人をだまし計略に乗せ利得する）。(2)潜水漁業者。潜水業者。

もしぶり〔名〕藻しぶり。海中藻の間に棲む鰈科の「あなはぜ」。魚名。

もじゃくる〔動〕揉んで皺くちやにする。乱れる。「もじゃくれる」も同じ。

もじよがる〔動〕可愛がる。「むじよがる」に同じ。

もたさる〔動〕支えられること。

もだま〔名〕(1)海藻に生ずる堅い玉。(2)茶褐色平頭の「の一そー」の一種。「みじろめ・ゆじろめ」にして共に美味。魚名。鮫の類。

もたれ〔名〕島や陸地の山を並べ、又は重ねして船の海上での位置や漁場を見定める漁業用語。「何々もたれ」。

もちうち〔名〕みーれみーれに用いる「たらの木」に螺旋を画いた棒名。

もちもち〔形〕何んとなく粘着性の有る食物の味や感じを表わす用語。

もつ〔動〕産む。「子をもつ・鶏が卵もつ」。

もっこ〔名〕持つ籠。畚。竹を割りはいで、2本の竹棒の間に編みつけた担架様の2人1組で土砂類を運ぶ農具。

もっしょうつ〔形動〕熱心に。

もっそー〔名〕(1)鯽網に1回20本以上獲れた場合、網主から鯽1本と酒を慰労として漁師方へ贈る慣習があった。これを「もっそー」と言う。他の魚漁にも類例がある。(2)舟2艘の間に吊り浮けて漕ぐことをいう。

もったつる〔形動〕持ち寄り集めて高く積む。

もっちょらつ〔形〕餅・団子の類が程よく煮えて軟らかく、ねばり気もあって甘くなった味を表わす語。

もてー〔名〕元居。本居ともかく。郷ノ浦町郷ノ浦元居地区

の名。春一・春一番の語発祥の地。

もてーかんだ〔名〕ていかずら。きょうちくとう科の植物。

もてん〔形〕やり(堪え)切れぬ。

もといかけ〔名〕女性の髪型。いちょうがえし。

もとくさ〔名〕死の直接原因となった病気。「もとくさふるう」。「しにぐさ」も同じ。

もどす〔名〕離婚すること。「帳面はずれさした(さす)・鳴鳥(娶) 飛べえーた」等とも言った。

もとだ〔名〕地割りの基本として割り付けられる上田。これに「なかざし」「しりた」が加わり、上中下が揃って各家の割高が決まった。地割語。

もとばら〔名〕稲の出穂前、茎の元に穂を孕み茎がふくらむ。これを稲が「もとばらうむ(うんだ)」という。

もとまい〔名〕本舞。神楽舞前段の舞い方で地舞を舞う。末舞に対する語。末舞は乱舞となる。

もとよま〔名〕縄釣の釣糸の手元の方で「小びし」の付かない部分の名。

もどりいか〔名〕初秋に獲れる鳥賊。東の方に行ったものが再び西方に戻る折獲れる鳥賊。

もね〔接尾〕ものに。ものを。「やたもね」「しりくりもね(いやいや乍ら)」。

ものいー〔名〕(1)挨拶。(2)海み



弔問。(3)集会等での発言者。

(4)口賢い者。

ものけ [名] もののけ。生^{いき}霊^{たま}
死霊の災い。物のたたり。

ものごつ [名] 祝・弔共に「も
のごつする」という。「もんご
つのありをる・ものごとしを
らす」などという。

もひき [名・動] 海藻ほんだわ
らを肥料として、長い竹竿2
本にからませて切り取り浜に
揚げて干す作業。

もぶか [名] 鮫類の一種「のー
そー」の黒色のものをいう。
魚の名。

もぶく [名] 海岸近くの藻の中
に棲み、茶色小型の河豚をい
う。「ひがんぶく」ともいう。
ふぐ科魚名。

もみづき [名] 粳を臼に入れて
搗き白米にする。一般的には、
粳は摺って玄米とし、玄米を
搗いて白米に。不注意・勝手
不如意で暮し向きに計画性が
なく、物心共に貧困陥すべき
事に考えられてきた。

ももじり [名] (1)尖った形の臀
部と嘲笑する語。(2)長い時間
正座できない者と嘖う語。

ももたぶら [名] 股の内側の膨
らみ部分の名。「たぶら」参
照。

ももて [名] ももて講。旧暦正
月11日又は20日、いぬびわの
木の弓と竹の矢を作り山の神
を祭る行事。

ももてこー [名] 百手講。「初
講・初講盛り(守り)」とも言

い、氏神に参り講盛りする。
射的は神官が行う。後下向祝
いとして、頭屋で飲食する。
この講が終わらなければ他の
講はしない。新しい年の初め
の講で弓矢を作り用いるのは
一般的だが、この講を同族の
祭りにする、藁牛を作って射
る、護符を作るなど、講盛り
の内容方法には地域差が多い。

ももね [名] 股。もものつけ
根。

ももぶし [名] 足のくるぶし。
もやきげえ [名] 鮑の肉をはが
し砕けないよう静かに叩いて
肉を軟らかにし、砂糖醤油等
で味付けした珍味。

もやすか [副] た易か。見易
か。易い。「もやすい」ともい
う。

もやもや [名] 心気性の病の一
種。精神状態の「もやもや」
とした症状。

もやりかかる [形] 一斉に群
がり集まる。うるさくまつわ
り付く。

もようちよる [名] (1)寡婦が
亡夫の弟と再婚する。(2)寡夫
が亡妻の妹と再婚する。この
いずれも「もようちよる・も
ようてござる」という。(3)兄
弟姉妹同士^{ごうせいのう}の交換婚の場合も
「兄弟姉妹もようちよらす
(てござる)・もやわした」な
どという。

もよぎ [名] 萌黄。もえぎ色。

もらし [名] 太めの竹の一端を
削いで作り、俵に刺し中の穀

類の検査等に利用する。「さしもん・さす」ともいう。又、「もらし」を用いて中の穀類をとりだすことを「もらす」という。

もりもり〔副〕(1)盛り上ったさま。(2)肥大したさま。(3)元氣力強いさま。

もる〔動〕盛り立てる。籠る。講は当(頭)屋があつて宿元となり講を行なう。講を行なうことを「講をもる」という。無尽講も親元(親)又は落札者が宿元となり「無尽もる」と。無尽の創設總會を「もりたて」という。

もるぶた〔名〕「はぜぶた・もりぶた・もろぶた」ともいう。参照。

もろざっしょ〔名〕諸造所。新築祝に酒と赤飯か、酒と餅の組み合わせで、祝品を贈ること。

もろむき〔名〕「うらじろ」と呼ぶしだ類で、正月飾り蔵^{くら}縄・鏡餅に付け用いる。左右に末広がり相のしだ。

もろむきはずし〔名〕正月14日松発つ日「まったて」といい、正月飾りすべてを取り払う。これをいう。

もん〔助〕もの。「来るもんな・追付くもんな・な、うえ一つきやえん」。

もんく〔名〕抗弁。言いがかりをつけ理屈をならべること。

もんぞりこーり〔副〕もじもじと動くこと。「もんぞりこー

りで暮れた」。

もんちゅーより〔形〕寄ってたかって一緒になって。門中寄りしち。

もんどー〔動〕戻ろうよ。歸ろうよ。「早よ、もんどーや(戻ろうや)」。

もんの〔助〕ものの。くせに。「知りもせんもんの黙っちよけ」。わずか。ほんの。「もんの5分間ちゃ経っちよらん」。

もんび〔名〕喪の日。地区内・講中の死者葬送の日。裁ち物・種播きなど忌む日としていた。

もんぶく〔名〕河豚。「ちんぶく」ともいう。「とらぶく」に当るとか。

もんろー〔動〕戻る。「もんろー」に同。

や



や〔助〕(1)対者の心情意向伺い同意求めの助詞。「行きまっしょうや・食いまっしょーや」。(2)やら。「[打]つや蹴るやの…」。(3)あれ。あつても。ところか。「いかなことや・死のうことや生け^{はな}えちよる」。

やーこらやーこら〔副〕さつさと。元氣だして。「やーこらやーこら歩め」。「やーやー」も同じ。「やーやーあゆめ・やーや歩まにゃ・やーやせにやでけん」。「せーでち」も同じ。

やー～やけ

やーた〔名〕八幡。八幡浦。やわた。

やーと〔名〕灸。「やーとすゆる(灸すえ)」。「やいと・えーと」も同じ。

やいや〔副〕(1)いやいや(そんなことはできぬの否定形)。対等以下に用いる。「やいや、そりゃ買うちや呉れ得んばい」。(2)いやはや。これはこれは(驚歎の意)。「やいや、こりゃたんぐわるたい」。「やーや・やあーや」も同じ。

やうーいかん〔形動〕(1)簡単にはいかない。た易く事が運ばない。「やっちみると、仲々やうーいかんばい」。(2)傑出している。「あん男あーどーしどーしやうーいかん」。「やおいかん・やをいかん」も同じ。

やうか〔形〕軟らかな。「やおい(か)」も。

やうち〔名〕(1)屋内床上全部を指す。(2)家内うちの暮し向きの状況。(3)「には」に対する語。

やえなる〔動〕重複する。無駄に。

やから〔動〕子どもが我侬言い張る。「やから言う」。「もだから・やくじょー・やくじょう」も同じ。

やぎのしょー〔形動〕負けぬ気の気質。

やきもち〔名〕子供の頭髪を円形に残し刈る法。「まるやま」に同じ。

やきやきする〔形〕気持ちい

ら立つ様。

やく〔名〕月の量。

やぐさ〔名〕せんだんぐさ。種子の頭に刺がある。矢草か。きく科。

やくし〔名〕生きている間に自分の墓を建て戒名を刻む。逆修。「いきばか(いけばか)きる」ともいう。こうすると長生きするともいう。

やくしもん〔名〕貴重品。「何のやくしもんちゅうない」。

やくしゃ〔感〕軽く対者を罵る気味に「やっぱやくしゃあ役者ばい・やくしゃじゃけん、やるこたやるばい」。

やくじょうながし〔名〕悪疫流行時祈禱して海に祭り流し悪病退散をする行事。「さねもりぎとう」等、「やくじょう流し」の一つ。

やくじん〔名〕6月15日に祭る神とのこと。神名不詳。旧暦6月15日は郷ノ浦八坂神社祇園祭であったが、「やくじん」は厄神・疫神(疫病退散の神)ではなからうか。

やくてくちもなか〔副〕きりがいいこと。無際限。「やくてむなか」とも。

やくばん〔名〕葉煙草を刻む台板。

やぐらしか〔形〕うるさい。「うぜらしか・やぜらしか」に同じ。鬱うつ。

やけ〔接尾〕やかに。「高やけ話す・細やけ聞く」〔名〕朝焼・夕焼。「朝やけ雨なる・夕やけ

日なる」。

やけなみ〔動〕羨みそねむこと。

やけんやんばち〔形動〕やけくそ状になる。やけっぱち。

やこ〔名〕野狐。狐には目に見えない霊怪があり、人にとりつくものと信じられていた。「やこに憑かれた者」を「やこづき」といい、精神病的症状を示すとか。

やごさん〔名〕分らず屋。相手を罵り言う時に用いる。

やさしか〔副〕た易い。「やさしかこつじゃなか」。

やしねえーご〔名〕神仏の貰い児。不運な生まれ・体の弱い・もっと幸せにと願って神仏の養い子となり信仰により特別の加護を受け運勢好転を日さす。

やしゃく〔名〕夜食。

やじろしか〔形〕うるさい。

やす〔助〕ます。「行きやすけに」。

やず〔名〕かんばち。鯽小型もの。

やすえ〔名〕野菜。やすえー。やすえー。「やすえーくさ(野菜類)」も同じ。

やぜくらしか〔形〕面倒くさい。「やぜらしか」参照。

やせぜわ〔名〕いらぬおせつかい。

やせひがます〔形〕甚だしく痩せているさま。「やせひがますのごたる・ひがます」も同じ。干しかます。

やせひっぱる〔形〕痩せて骨が出て皮ふを引っ張り合っている感じ。

やぜらしか〔形〕(1)体が無性にかゆいこと。「こまがさんでけちやぜらしか」。(2)精神的ないらいら。

やた〔接頭〕弥々。「やた呑み・やたきばり(はたらきに働く)」。

やたがらす〔名〕八咫鳥。神楽舞の名。鳥面をつけ一人で舞う。「やまごころ」に同じ。

やたこね〔動〕(1)粉をよく練る。(2)弊杭を揺り根元をぐらつかせる。(3)話を色々曲折させこねる。

やたさらき〔動〕あちこち方々を歩き廻る。「さらきやらく」も同。

やたもがり〔動〕頑強な否定。

やたもね〔副〕やたらと。やたらに。しきりに。ひどく。「やたもね水の欲しかった」。「やたもんに」も同じ。

やぢ〔名〕家地。屋地。屋敷々地。

やっさそびき〔名・動〕引きに曳く。壱州民謡に「やっさそびきぞるぞるぞる」とある。

やっさもっさ〔副〕弥々益々。「やっさやっさ」も同じ。

やっさやっさ〔名〕どんどん益々。綱曳き終末、ここぞこれから勝負の別れ機に「やっさやっさ」の合唱で引きに曳く、に用いるかけ声。

やつちゃ〔名〕八つ茶。おやつ



茶呑。

やっちゃーおーでけ〔名〕よくぞやったぞ大出来だ。演劇・芝居の演技に観衆があげる声援。

やっとかつと〔副〕ようやく。辛うじて。どうにか。

やっこせー〔名〕^{よとこいそ}弥々永久に。益々繁栄を。胴突き唄の合の手に「やっこせーよいやな、よいよい」と。又、亥の子節句餅搗きにも用いたと。

やっぱ〔副〕矢張り。「やっぱー・やっぱし」も同じ。

やてーど〔名〕傭人。人を雇う。

やなおり〔名〕転居。引越。やなわり。

やなぎは〔名〕あをべら。あかべら。べら科の魚名。「くさび」の名で通る。

やなぎばな〔名〕葬式・供養法事に仏前に供える紙花。僧侶がその都度作る。「しべ・しべー」ともいう。参照。

やなわ〔名〕小型船に付けた綱。

やなわりぶれめえ〔名〕新築落成の家移りは人安吉日を選び、神官のお祓いを受け、最初に神棚・仏壇を入れ、極く親しい人を招いてお茶飲みなどした。これを「家移り・家簀かすり舞」という。後「家固めかため守札かき」をすると。

やにくも〔副〕むやみやたらと。無理矢理。がむしゃら。

「やんくも」も同。

やねし〔名〕屋根師。麦稈屋根を葺く職人。専業ではなく農業と兼業。

やの〔名〕脛の緒。乾燥させ、名前・生年月日を記し、母親の簞笥の抽斗・匣戸裏の自在鉤に括りつけたり・天井にあげて保存したりした。脛の緒は簞笥のお守りだとか、身の守りといい、本人病気で命にかかわる時は煎じて飲ませたり、結婚には持たせたりしたと。

やのはぎ〔名〕錦木。にしきぎ科。幹・枝に矢の羽根状のものがでる。

やのはしかくる〔副〕矢継早に次ぎ次ぎ催促をかける。「やのはしかけち催促する」も同じ。

やぶたちばな〔名〕山茶。「やまたちばな」も同じ。

やぶれがさ〔名〕かさがや。かやつり草。

やほ〔名〕本帆の次の帆。

やほ〔名〕茨。藪。茂み。構成植物により、竹やほ・草やほ・とうやほなど呼び分ける。又、とげのある植物を一般的に「やほ」と呼ぶ。

やぼさ〔名〕民間信仰神の一。陰陽道に属する神。「やぼさがみ」も同じ。

やぼせび〔名〕「やほ」に同じ。

やぼん〔名〕嬰兒。赤ん坊。

やま〔名〕墓地。葬式時に限り

用いる。

やまあて〔名〕山・島・大木・大石など目立つ物を見合せ沖中での漁場の位置等を知る法。漁業者用語。

やまいき〔名〕田畑に農作業に行く。

やまいり〔名〕(1)「わかきむかえ」に同じ。(2)神楽舞「のづち」に同じ。(3)「やまどり」に同じ。夫々参照。

やまうつ〔動〕積上げたものが上荷となり崩壊すること。堆積物の倒壊。

やまおけ〔名〕死者を納める桶。「早桶」ともいう(手早く作る桶)。

やまおとし〔名〕突風。「をとし」参照。

やまぎめ〔名〕墓穴の位置を決定すること。家主が墓地内に地所を決め鶴嘴を一打ち入れ、米と銭を供え神霊を祭り、後は講中山係に一切依頼。

やまござ〔名〕死者納棺の折に敷く蓆。「とんとんござ」に同じ。

やまごんにゃく〔名〕天南星。てんなしょう科の植物名。

やまぞーり〔名〕葬式に喪主と妻が履く。家族近親者も履くところあり。「からわら」を用い尻を割って鼻緒は角結びにする。「やまじょうり」も同じ。

やまぜ〔名〕冬季の南風は決まって北風に変り突風になり暴風を伴うと。この北風を「や

まぜ」という。又南から南西・西から北西と変る強風を「にしのおとし」とか「やまぜのかわし」と呼び大変恐れられてきた。

やまたか〔副〕たかだか。たかが。「やまたか(たかだか)知れちよる」。

やまだち〔名〕奥山に棲む怪物。獣ではなく人間に近い体形の物と想像されていると。

やまたつひめ〔名〕なめくじり。壱岐国統風土記にあるが実態不詳と。

やまたにせ〔名〕船型名。舳が「つるい」の如く曲らず、切切りで黒塗り。

やまで〔副〕まるで。最初から。「やまでえ売る気じゃなかった・どん位えん人間か、やまで解つちよる」。

やまてらし〔名〕はくさんぼく。すいかずら科の植物。

やまてらせ〔名〕自生躑躅。

やまどり〔動〕建築作事用材の見積り及び伐採作業。木挽棟梁の役目。

やまなし〔名〕うしころし。かまつか。ばら科の植物名。

やまなすび〔名〕をなもみ。植物名。

やまにんじん〔名〕(1)やぶにんじん。(2)しゃく。こじゃく。(1)(2)とも、せり科の草本。「やまにんじん」と呼ぶ類似種があるが別物。

やまぬかみのたうえ〔名〕旧暦5月12日、この日は牛を使



役するのを忌むと。山ノ神の
田植。

やまねんば〔名〕山中に棲み小
型のとんぼ。色種類も多い。
蜻蛉の一種。

やまばかり〔名〕杣山盛りに量
る。山のもの椎・栗・かてし
等は山盛りに山量りする慣習
があった。

やまはじめ〔名〕「わかきむか
え」に同じ。参照。

やまひーらぎ〔名〕ありどお
し。針状の鋭い刺を持つあか
ね科の植物。

やまぶき〔名〕ひがひ。魚の
名。

やまほーぜー〔名〕山中の
湿地腐葉の下に棲む煙管状の
細い貝。海の「ほーぜー」に
似る。「やまほーぜー」も同。

やまやき〔名〕山で女性を弄ぶ
こと。

やまやく〔名〕山役。山係り。
葬儀の折、穴掘りなど墓地を
担当する役廻りの講中（組）
の人。土葬時代の重要役。輪
番制で順次分担してきた。

やまんばのせんたくび〔名〕
山姥の洗濯日。山姥は年に1
度、12月20日に洗濯するとい
う。この日人々は山に入ると
を忌み、山・田・畑に出ると
怪我をすると恐れた。いつも
身の廻りを汚くしている人を
「山姥・山姥んどたる」と言っ
た。

やみくも〔副〕「やにくも」に
同じ。

やむ〔動〕果実が成熟域に達し
皮や殻がはじけ開く。「栗・椿
がやむ」。

ややくろしか〔形〕ごてごて
複雑に紛れ易くなる。ややこ
しい。「ややくろしい」も同
じ。

やらく〔動〕意識の強弱を加減
する。(1)歩く。「さらきやら
く・たわしやらく」。(2)廻る。
「こさぎやらく・をらびやら
く」。

やらず〔名〕何事でもやれば上
手に出来るのに仲々実行に移
さない者。

やらずごけ〔名〕未婚女性の独
り者。「いかずごけ・ばっちょ
ー」に同じ。

やりかん〔名〕やりっぱなし
漢。ふしだら人間（主に男
性）。「やりかん坊」ともいう。

やりかんぼー〔名〕両側から
流通し合って隔がない。「表も
裏も戸も壁も取り払うち、や
りかんぼーしちよる」。

やりぎ〔名〕唐臼を廻す把手。

やりくわんぼう〔名〕(1)竹の
筒3尺程の棒の名。鯨組の船
上で、おやじはこの棒を杖に
動揺する船で体を支え立って
指揮に当たった。又、中を筒
状にし紐を付け、竹筒に小用
を足し、後は海に流して洗ひ、
杖として用いた。(2)家でも部
屋から竹筒を外に出し、寝な
がら小用を屋外に放出する仕
組をしていたと。これも「や
りくわんぼう」と言った。正

しくやりっ放し。
やりたかぶし〔名〕やりたい放題。したい放題の調子。無頓着に任せる。
やりたてやりたて〔副〕ひっきりなしに。次々に。次を追いつつ又次を追う。「やりたてやりたて、請求する」。
やりのやんずえー〔名〕ふしだら状。
やりやり〔副〕次から次に順を追ってきばきと。「やりやりい仕もうた」。
やれ〔助〕あれ。あつても。やら。「いかなこつやれ・死のうこつやれ、まあだ生けちよつち働きをる」。
やろーじん〔名〕家の中に入る蛇。家主神とも言い殺すことを忌む。殺すと家に不幸を招くという。屋根裏等に入り鼠を獲るが、人には無害。
やをいかん〔副〕(1)簡単に事が運ばない。容易ではない。(2)一筋縄ではいかない手恐さ(人も物も)。「やをいくこつじやなか」も同じ。
やをる〔形〕和らかになる。落ち着く。勢力が衰えおだやかになる。
やん〔敬〕人の名につけ敬称とするも「さん」より低い。「どん」に同じか。
やんくも〔名〕無茶を押し通す人。〔副〕「やにくも」に同じ。
やんけん〔名〕じゃんけん。
やんけんちよす〔名〕じゃんけんぽい。じゃんけんぽん。

(かけ声)。
やんしゅー〔名〕悪い意味でのいい似合。
やんぼし〔名〕(1)お化け。恐い者(物)。(2)禪法師。山法師。山伏。虚無僧。「やんぼしの連れげえ来るぞ(子供へ)」。
やんぼしげえー〔名〕法螺貝。
やんぼしのけえーふく〔動・形〕ほら貝を吹く様に、おんおんと子どもが泣き続けること。「やんぼしのけえーふきをる(よる)」などと用いる。
やんぼしのごたる〔形〕蘭法師の様。(1)容貌・服装・出立ち奇異・尋常ならざる者の姿。(2)髪を異常に長く伸ばした者の姿。「やんぼしのごつ・(ごつしちよる)」も同じ。
やんめ〔名〕(1)病み眼。結膜炎。眼病の名。(2)生まれつき持っている持病や癖の意に用い、どうあつてもそうせねば気の済まぬ人の行為を指して周囲は「やんめじゃけにしかたなかつ」などという。

ゆ

ゆ〔名〕い草。蘭草。「ゆ田(い草を植えた田)」。植物名。
ゆー〔名〕ぼんやり(人)。「ゆーとーくわん・ゆーにある」等と用いる。
ゆーし〔名〕(1)啞。啞者。(2)鰯



この入らぬ餅。

ゆーたちち〔接〕そうは言っても。

ゆーちゅー〔名〕アルコール度の低い焼酎。

ゆーとーくわん〔名〕ぼんやり人間。ぐず。気の利かない人間。「こん息子はゆーとーくわんで、でけまっせん」。「ゆうとうくわん(かん)・ゆーとんくわん(ゆうとんかん)」も同。

ゆーなび〔名〕よなべ。夜業。夜なべ仕事。「ゆーなびする」。

ゆーなびする〔動〕昼間の予定が終らず、夕方から夜にかかる仕事。

ゆーばはなか〔形〕口出し口添えする場面や必要が全くない上々吉状態。「ゆーばは無かが、よー注意おし」。

ゆーべ〔名〕昨日の夜。昨夜。

ゆーめし〔名〕夕飯。「よーめし」。

ゆさゆさ〔副〕あほるように揺れ動くさま。「よさよさ」に同じ。

ゆしょーべん〔名〕大小便。多くは病人・老人の場合に用いる。

ゆじろめ〔名〕鮫類鰻類を熱湯でゆがき、表皮などを除き小切ってゆであげ、水にさらして酢味噌・醤油など好みの味付けで食する。美味なり。

ゆすぎ〔名〕死者埋葬後、家の入口に用意した塩と水で、口

をすぎ身とを洗って家に入る。所によっては海浜に行き身を清め口をすぎ、足を洗い草履を脱ぎ捨てる。一般に草履は墓を出るところで脱ぎ捨て履き替えて家に入る。葬儀に参列した者が自宅にはじめて入る折も「ゆすぎ」を行う習慣である。

ゆたて〔名〕(1)いたち(鼬)。動物名。(2)神楽舞の名。湯立て。夜半12時神社の馬場に杵3本を打ち5升焚き釜をかけ水を入れて焚き、湯の初臈を入れて参者に渡す。参者はこれを祭主に渡し祭主はこれを神に献ずる。祭主が下る時鉦女の舞を始める。舞と共に笹を湯につけて振る。四方に振る。「大々神楽の内なり」とある。

ゆだり〔名〕涎。「ゆだれ」も同じ。

ゆだりすけ〔名〕よだれ掛け。

ゆづけ〔名〕粥状の飯で軽く食事をとること。

ゆっさんこ〔名〕ぶらんこ。

ゆて〔名〕入浴用手拭い。

ゆねこ〔名〕湯たんぽ。「ねこ」も同。

ゆのもとぶんちん〔名〕木製胴紡錘型の独楽。首細く頭尖る。尻尖り穴を穿ち紅等で着色周用に簡単な紋様がつく。首に「よしる(紐)」を巻き投げ廻しする。「木独楽」とか「ぶんちん独楽」ともいう。湯ノ本によい製作者がいたという。

ゆぶゆぶ〔形〕腫物が化膿して

張り切った皮膚の状態。

ゆべし〔名〕柚子の皮を細切し
砕いて煮詰め各種の味付で煉
る柚子味噌。

ゆぼーず〔名〕温泉の湯壺に出
る妖怪の一種と。

ゆみあき〔名〕忌み明き。生児
33日目に、産児を連れ産土神
に詣る。この日は神社鳥居(華
表)の外から拝むとする等地
域により慣習色々。7日目を
「ゆみあき」とする地区もある。

ゆみはりだこ〔名〕とんび風。
「ながさきとんび風」に同じ。
風の種類。

ゆめうたう〔形〕安心し切って
平気であること。

ゆり〔名〕(1)地震。「ゆりの米
た」。(2)「へぎ」で作った楕円
形の器物。陰陽師の呪法には、
これに供物を盛り祭壇を作る。

ゆりたか〔名〕野地を開墾した
時は高の割り高な所に入れて
地名もその新開墾地に付けた。
その為同名の地が各所に飛び
とびに在ることになった。

ゆりなり〔名〕楕円形。

ゆる〔動〕(1)得る。もらう。与
えられる。(2)可能。できる。
「子供でむ書きゆる・俺でむ作
りゆるばい」。

ゆるかす〔動〕離す。「ゆるか
せ(かすな)・しっかり捕ま^{とら}え
ちよかしよ、早よおそゆるか
(さ)すなよ」。

ゆるかせ〔動〕離せ。手離せ。
「早よゆるかせ、早よ、は

い」。

ゆるり〔名〕囲炉裏。いろり。
爐。くど。

ゆるりがまち〔名〕竈の炉縁。
「ゆるりがまて」も同。

ゆるりばた〔名〕囲炉裏端。横
座の竈の前の座。「よこざ」参
照。

よ

よ〔助〕命令語の末尾に付く間
投助詞。「せろよ・来えよ・来
らしよ」。(名)財産。身代。暮
し向き。世。「良かよしをら
す・よが良うなった」。

よーい〔名〕おーい。目下に呼
び掛ける声。「よい」ともい
う。人名に付けて「熊公よー
い(よい)」等と。

よーいとこよーいとこねえー
〔名〕胴突き唄(地搦唄)合
い音頭。

よーがましか〔形動〕厳格で
小言が多いこと。

よーしちよる〔形〕動かずじ
いっとしている。「よーしちよ
れよ(らしよ)」。

よーちょー〔名〕(1)病弱ひ弱な
者。(2)風の種類。紙を四角に
切り、対角線上に縦骨一本割
竹を貼り付け、稍弱めの竹を
横にしなうように当て糊付け
し、両竹の交点と縦骨の下端
に「ねしを」の紐を結び、左
右と下端に紙房をつけ揚げる。

よ

「よーちゅー・ようちょう」等という。

よーと〔形〕良く。「よーと見ちよけ・よーとやっちよけよ」立派に。

よーなび〔名〕よなべ。夜業。

よーめし〔名〕夕飯。晩飯。

よーよし〔副〕やっつ。ようやく。「よーよし出来た」。「よーよしかよし」も同じ。

よい〔名〕「よーい・おい」等と同じ。

よいほーじ〔名〕宵法事。仏式供養を法事といい、前口夕方旦那寺の僧「ご絵掛け・しべ・幡作り」と読経に来る。「絵掛け法事・逮夜法事」ともいう。ご絵は仏の絵。

よいよいごいえ〔形〕よいよい声。威勢良いかけ声。よいよいごえ。

よいよいよいよいよーいしよ〔名〕綱引き始めの合図として、双方に力を合わせ開始の意を伝える。この直後同時に号砲一発。

よいらかす〔動〕養生し治癒に向わせる努力をする。よい方に向わせる。大事をとって治療に専念する。「よじらけえーちおおりまっせ」という。「よじらかす」は「よいらかす」に同じ。

よか〔形〕(1)不要。不用。いらない。拒否・制止の意。「来んじよか(来なくていい)」。(2)良い。「どーいよかもんで(とても良い)」。

よかいえみ〔名・形〕お人好し。器量よし。笑顔が可愛い。馬鹿正直者。

よかくれー〔形動〕好い加減に。出鱈目という程。「よかくれーんこつ言いをる(言うな)」。

よかし〔名〕身分のある人。家柄のよい人。

よかしこ〔副〕自分の好いだけ。好きなだけ。欲しいだけ。

よかったあなもし〔副〕いいじゃありませんか。

よがなよじゅー〔名〕一晩中。

よかのした〔名〕床の下。「よかんした・ゆかんした」も同じ。

よがまた〔名〕しわやはず。あみぢぐさ科の海藻。「しわやはぜ」も同。食用ともなる。

よがむ〔動〕ゆがむ。「よごーじよる(ゆがんでいる)」。

よかもん〔名〕良い物。よい人。

よかよ〔名〕ゆとりの生活。裕福。楽な暮らし向き。「よかよしちよる・よかよしをる」などと用いる。

よがらよじゅー〔名〕一晩中。「よがなよじゅー」に同じ。

よかりおる〔形動〕気持ち良くありつつある。「よかりをる」も同じ。

よかりそーなもん〔形動〕良さそうなものに。

よがれ〔名〕精液。

よかろーこーべ〔形動〕好い加減。調子良くうまい具合に。「よかろーこーべばかり言う」。「よかろこうべ」も同じ。「こうべ」は勾配。「でたらめ適当に」の意を含む。

よき〔名〕斧。おの。

よくせき〔名〕余程の。よくよくの。「よくせきの事じゃなけりや腹かきやせん者が」。

よくどーしん〔名〕胴欲。欲深者。

よくな〔名〕けちな。「いきよくな」。

よくもとんぼむなか〔形動〕利害など考えておれない場合や状況。

よけ〔名〕溝。小溝。山麓からの湧水は低温で、途中で水路を設け温めてから水田に導入する。この水路を「よけ・日よけ」といい、溝を作ること「よけを切る」という。

よけえーなる〔動〕人が横になる。寝る。うたたねする。「よこえなる」も同。

よげよげつ〔副〕物を与えるのに惜気もなくするさま。「余計余計に」。

よけらふる〔動〕知らぬ顔で打合ぬ。

よける〔形〕良いだろうか。よける。「此の頃機嫌なよけるという」。

よごーじよる〔形動〕ゆがんでいる。

よこがみ〔名〕船の艫の「とこ」に立てる帆柱もたせという。

よこがみやぶり〔名〕物事の進行に横車をおす者。常識習慣に逆行するような行為。

よこぎ〔名〕農家の居間の炬のそばの席。

よごし〔名〕あえもの料理名。野菜類他を主に味噌味で混ぜ和える。

よこづち〔名〕横槌。堅木の丸太の一端を把手状に削り、穀物の脱穀収納の外、藁打ち等に欠かせない用具。

よこづちがつを〔名〕めちか。魚名。横槌状の鯉か。体形小型。

よこね〔名〕鼠けい部名。下腹部の脚の付根。

よこねする〔形〕理非に拘わらず放棄して相手を困らせる。「よこねしち、どーむされん」。「うんねまる」も同じ。

よこばんきる〔副〕物事の途中で方向(態度)を変更(反対)する。

よこひーき〔名〕偏愛。えこひいき。

よこひぎ〔名〕正座姿勢を横すべりに臀部を下に落した坐り。

よごもち〔名〕世乞餅。「よんごもち」ともいう。嫁三日戻に生家への餅。「みっかもどりもち」も同じ。

よこら〔名〕余分に。予定外に。

よこを〔名〕横緒。草履・下駄の緒。鼻緒に対する語。

よさばたかり〔形〕股をはだかり広げ気味に歩くさま。「揺

よ

りはだかり。]

よさぶる〔動〕揺り動く。ゆさぶる。

よさよさ〔副〕物の揺れ動くさま。

よしろ〔名〕独楽を廻す組緒。「よひろ・よんしろ」ともいう。

よせ〔名〕群小する腫物が部分部分に集まり大きな腫物となったもの。

よせごろ〔名〕父なし児。私生児。

よせづわり〔名〕牛の発情。「あてづわり」参照。

よせでーこ〔名〕寄せ太鼓。盆の綱引きを遠く近く周辺に知らせる太鼓。尚綱引き競技最中の土気を高める「囃太鼓」打ちもある。

よせでーこく〔名〕稲の収穫を終って行なう大黒あげを「寄せ大黒」という。稲の「抜き大黒」に対する語。

よそなふり〔名〕他人事のように一向気かけぬ振舞。

よそもん〔名〕他国者。島外者。「たびのもん(ひと)・いりゅうど」も略同。

よだ〔名〕物が腐りかけた時ひく糸。「よだひく・よだひーちよる」という。

よだき〔名〕夜焚き。灯に寄せて釣る鰯釣り漁法。

よたつ〔動〕立つ。

よだり〔名〕涎。「ゆだり」も同じ。

よだりくちたるる〔形〕涎を

だらだらと垂らすさま。

よぢゅー〔名〕一晚中。「よぢゅー泣きをつた・よぢゅー雨ん降りおった」。

よぢゅーくどき〔名〕夜中口説き。夜を徹して話すこと。

よっかし〔副〕多量に、沢山に。

よっしよいどり〔名〕ねこどり。「よっしよいねこどり」ともいう。

よった〔助〕ていた。「仕事しよった」。

よつぢゃ〔名〕四つ茶。午前の中間食。

よっつしぎつつ〔形〕寄ったり退いたり。躊躇するさま。

よっとりよっとり〔形〕足許の定まらない歩き。

よつぱり〔名〕寝小便する。四つ張り網(漁業)は夜に出す。子供の寝小便も夜。寝小便を「よつぱり網」と。

よつまたあぐる〔形〕四肢を上げて仰臥するさま。

よてなし〔形〕しだらな。だらしない。「あの子はよてなしじゃ」。

よとぎ〔名〕通夜。近親・親交者が死者の枕辺に寄り添い夜を通して葬うこと。「よとんぎ・よとに」も同じ。

よとぎひととぎ〔名〕昼夜付つきり状態にあること。夜伽日伽。

よとぼし〔名〕仕事の終りが夜になること。「よとぼしとる・ゆーなび」も同じ。

よなび〔名〕「よーなべ・いゆーなび・よなべ」も夜業、よなびに同じ。

よなよな〔副〕わざわざ。

よなわし〔名〕離婚状態にあった者を復縁させること。「よなおし」も同。

よなわしざけ〔名〕「よなわし」の相談がまとまると、関係者一同で飲み合う。手打ち式の酒（宴）。

よのく〔動〕立退く。「よのけ」は命令語。結果は一つ（同じ）。

よべ〔名〕夜這い。「よべー」も同じ。

よべーご〔名〕よばい児。私生児。

よべーど〔名〕夜這いにさらく者。

よま〔名〕繕麻。撚麻。麻の繊維は大変丈夫で、繕り合せて「糸・よま・紐・縄・綱」などとして利用されてきた。

よまさり〔形動〕待ち構えた仕事も何もかも手につかないことの続く状態。悩みなど心にかかる事の継続する事。「よまさる・よまさればたず（極みに達する）」ほどの状況に陥る。

よみあき〔名〕「忌み明き・ひあき・ゆみあき」に同じ。

よみぎさあ〔名〕お嫁さん。（よめぎ）。

よみちげえり〔名〕蘇生。死出の旅のさ迷いの途中から生き返ること。

よむし〔名〕水田稻の害虫。

よめあぎ〔名〕(1)そばかす（顔のほかにもでる）。(2)布に出る黒点かび。「よめあぎんふつちよる（出ること）」。

よめくそ〔名〕極めて物の少量なことの例えに「よめんくそんしこばかり」という。農家の嫁はその昔、十分な食もなく苛酷な労働に泣かされ、量も極めて少なかったのであろう。

よめごくばり〔名〕嫁御配り。嫁を迎えた家では3日目に盛装させ近隣親戚へ姑に付添われ挨拶廻りする事。

よめむかえ〔名〕婿入り。大方は婚礼当日、婿が仲人らと酒肴を携え挨拶と儀式を行ないに行き嫁を迎える。

よもーちよる〔動〕迷っている。

よらっと〔副〕ゆるやかに。軟らかに。「手はよらっと握っちゃれ」。

より〔動〕繕り。撚り。「よりかくる（よりをかける）・よりもどす」〔名〕寄り合い。集会。「よりの有りおる・よりい行たちくる」。

よりえー〔名〕寄り合い。会議。

よりき〔名〕角力・綱引き行事に企画側（勧進元）の呼びかけに応じて参加協力して呉れた人々を与力と。角力・綱引きには、勧進元と与力側があって成り立っていた。

よ

よりくりなわる〔動〕(1)行きかけていたものが写し返す。

「よりくりな～る・よりくりなおる」。(2)態度を変えて硬化すること。「よりのる(直る)・よりくりかわる」ともいう。

よりつき〔名〕炉端の客座席。

よりづき〔名〕陰暦で13か月になる年の重なる月。閏月。3月閏・8月閏。

よりつきは〔副〕寄り付くはずみ。

よりのきねん〔名〕神降しのわざ(行者)。「かりしばとり」に同じ。

よりのく〔動〕立場を後退する(させる)。「よのく・かかりのく」も同じ。

よりのりけえーのり〔動〕立返っては近づき、近付いては離れ又来る。「よりのりけえーのり遊びくる」。

よりのる〔動〕寄り直る。

よりもつつきもされん〔形〕乱雑で手のつけようがない。寄り付く場もない。「よりもはもつかん」も同じ。「取り散らけえちよつち、寄りもつつき(寄りもは)もされん」。

よりよし〔副〕仲良く一緒に。共に協力して。「よりよしおやり」。

よる〔助〕ている。「花ん咲きよる」。「ちよる。おる。をる」も同じ。

よるこぶ〔動〕喜ぶ。

よるとさわると〔副〕機会ある毎に。絶えず。いつも。

よろー〔助〕だろう。「まあだ(未だ)寝よろーばな」。

よろくそ〔名〕馬鹿もん。親不孝者。役立たすが。横着者が。対者を罵る語。「ごくどう(者)・よろくそ者」。

よろず〔名〕筧。漁具。

よろずかがす〔名〕鉈に付けた芋網。

よろっか〔形〕やわらかな。「およろっか品」。

よろっと〔形〕丁寧に。静かに。やわらかに。

よろりがっくり〔副〕よろけて倒れそうな様子をいう。

よわる〔形〕魚・肉など生鮮なものが腐りかかるさま。

よんがらよじゅー〔名〕一晩中ずーっと。「よんがよじゅー」も同じ。

よんごもち〔名〕「みつかもどりもち」に同じ。「世乞餅」ともいう。嫁は嫁家の紋入りの「三日戻り着物」を着、88個の餅と茶・米・赤飯などを「みのおろしき」に包み負い、鯛を持ち、酒は婿が下げ持つ。地域や家の慣習があって、初めの嫁の「里帰り」形態や時期も色々で一定ではなかった。

よんしろ〔名〕独楽廻しの「よま」。「よしろ・よひろ」ともいう。

よんどころのう〔副〕止むを得ず。仕方なく。

よんべ〔名〕昨夜。昨夕。ゆうべ。

よんぼりよんぼり〔形動〕老

人・病人などゆっくりよぼよぼに頼りなく行動するさま。
よんよんごいえ〔名〕「よいよいごいえ・よいよい声・よんよんごえ」も同じ。

ら

らう〔助〕動詞の語尾を「ろー」と発音せず「ら」「う」と。「笑う(わ・ら・う)」「払う(は・ら・う)」。
らく〔名〕あぐら。あぐらくむ。あぐらする。「らくに(おらくに)おしまっせー・おたいらに・おしまっせー・おひきまっせー・おくずしまっせー」も同じ膝を崩しらくに。
らしか〔形〕らしい。
らす〔敬〕られる。「走らす・来らす・戻らす」。
らっしゃる〔敬〕られる。「らす」の一層のていねい語。「来らっしゃる」。
らり〔助動〕られ。「おし(仰せ)つけられまっせ・行きおられますとです」。
らる〔助動〕られる。「らす」に同じ。
らるる〔助動〕(1)受身。られる。「捨てらるるとたい・止めらるる」。(2)可能。できる。「朝ぬ3時かるとむ起けらるる」。
られ〔助動〕「らり」に同じ。
らんきゅー〔名〕らんきょう。「だんきゅー・らんきゅー」も

同じ。ゆり科の植物。
らんごしか〔形〕騒々しい。

り

り〔接尾〕名詞化の働きをする。「高り・深り」。「高りい土もつ・深りい^井落て込む」。
りー〔名〕血統。「りーひく」。
りきしば〔名〕力柴。なぎ。まめ科の植物。葉の強さからの名かと。
りきばり〔名〕「こーりよー」と呼ぶ棟の大梁の下に横に渡す梁材料。家屋建築屋根組み材の梁の一種。
りこさん〔名〕側口者。お側口さん。「ぢこさん」ともいう。いい子。
りこもん〔名〕伶俐な子。側口者。「ぢこもん」ともいう。
りゃんりゃん〔形動〕男の物の気負うさま。
りゅー〔名〕(1)木材軸心の赤身の部分名。(2)母屋の軒下角に向い竜頭の如く彫刻した屋根支え材の名。
りゅーきゅーいも〔名〕甘藷。さつまいも。ひるがお科の性植物。
りゅーたつ〔名〕葬具の一。節を中に丸竹を切り、一方の両側を削り、竜の口に見立てて歯形の切り込みを入れる。他方上部に外向きに小穴を開け、枇杷の葉を差し耳とする。こ



れを細い目の竿に差し込み竜頭にする。その下部竿に白紙を輪にし、墨筆で鱗の波形を入れ葬列の先頭を進ませる。口には舌の形の赤い紙を付けるところもある。

りょーけんにおよばぬ〔形動〕この上なく立派で言うことなし。

りょーど〔名〕漁をする人。漁師（士）。

りょーなわし〔名〕墓の改葬をすること。

りょーばしちば〔名〕漁士集落。

りん〔名〕(1)船の引上げ下げ、大きい物、重い物の移動に下に敷く輪軸。(2)物を地に据え置く時、下に敷く土台となる丸太や角材。「りん敷いち下せ(置け)」。

りんくび〔名〕梢。

りんしょしば〔名〕「じんちょばな」に同じ。参照。

た」などという。

るすごつ〔名〕留守事。主人の留守中に妻が「かくしごと(家庭生活上の)」をすること。

るる〔助動〕れる。「人かる笑わるる・こぬ菓子なりや病人にでむ食わせらるる」。

れ

れ〔助〕よ。ろ。「見せれ・呉れれ」。

れんぎ〔名〕すりこぎ。「でんぎ」ともいう。

れんこ〔名〕れんこ鯛。鯛の一種と。「べんこ鯛」ともいう魚の名。

れんこんくう〔形〕蓮根食う。蓮根には穴があり、先を見通し見透かせる。先を推測して気を利かす言動。

ろ

ろ〔助〕よ。れ。「見せろ・書かせろ」。

ろー〔名〕気力。精神力。判断力。「ろーん戻っちしもた(気力・精神力・判断力他精神の衰え)」。

ろーびき〔名〕漁具に使う綿製の糸。

ろーんもどる〔動〕老^お還する。

ろく〔名〕あぐら。「ろくする・

る

るい〔名〕系統。血統。「るいひく・るいよぶ」。「ひっぱり」ともいう。〔動〕出る。「るいぞ(出るぞ)・るいりい(出るでる)」。

るすおがむ〔名〕訪問先に目当ての人不在、訪問先自体留守で目的が達せられない。「るすおごうだ・るすおがませられ

ろくしち坐る。「らくいおしまつせ」も。

ろぐい〔名〕鱸杭。舟の「とこ」。船梁に取り付けた鱸の「いれこ」をはめる脰。「ろぐいー・ろぐい」ともいう。

ろくぐわつながし〔名〕旧暦6月に降る大雨。一度は必ず降る大雨とされてきた。六月流し。

ろくしゃく〔名〕六尺。担い棒。てんびん棒。一間長の棒の両端に止めの木栓をさし、棕梠縄の紐を十字につけた竹籠（てぼ）を前後に吊し担ぎ荷を運ぶ棒（多くは杉の小木）。

ろくしょーぐん〔名〕六將軍。神楽舞の名。昔の呼び名は「二弓」という。

ろくたいちぞう〔名〕六体地藏さん。六人地藏さんとも。一石に6仏体彫り。

ろごし〔動〕舟を漕いでいて鱸ではね込まれること。

ろしか〔形〕らしい。がましい。

ろば〔名〕舟に用いる鱸の下半身。水を切る羽が付く。単に「は」とも。

わ

わ〔名〕牛に対し「止まれ」の指示語。強く指示するには「わ」と強く短かく発声、静か

にゆっくり目には「わー」とか「わーわ」とか「わーわー」と声の大きさ幅を加減する。

わいた〔名〕^子（北）方角から吹く8・9月頃の強風の名。（動）引き裂いた。鋸で挽き割った。「わく」に同じ。

わいわい〔副〕騒擾しいさま。「わやわや・がやがや」等と同じ。

わえ〔名〕駄目。めちゃくちゃ。「わえなる・わえなった」。「わや・わやくちゃ」も同じ。

わが〔代〕(1)お前。汝。君。あなた。(2)自分。我。私。

わかき〔名〕若木。正月元日、山から伐ってくるという説。伐りほがすといって、塞りの方位の山から伐ってくるものと。2本迎え14日（まつたての日）地の神さんに納めると。

わかきさー〔名〕若木様。旧暦正月2日「若木迎え」に迎えられた神様をいう。山から迎えて来た「まてがしい」の小枝を縁柱に結び、傍に雑煮神酒を供えて祀る。

わかきさげ〔名〕わかきさー^をとりさげる行事。正月14日年籠や門松正月飾りと同時に下げるとするのが一般的であるが、別に18日に下げるという家もあるとか。

わかきむかえ〔名〕「わかき・わかきさー」は、一連の正月行事として捉え、若木に宿る

わ

新生の氣と天地自然の神靈を迎え、歳の初めを寿ぎ加護を願う民衆の営みの根源である。「やまいり・やまはじめ」の行事とも関連深いものと解される。

わかしらご〔名〕若白髪。若年にして頭髮に白髪が混るのは願ってもない吉相吉祥であるといわれる。

わかて〔名〕若人。若者。若手。青年。わかかし。わけえし。等々。わかてのうち、18～20歳、こわかて21～30歳、なかわかて31～35歳、わかてそうだと細分したところもあった。

わかてやど〔名〕「とまりやど」に略同じ。遊び仲間だけでなく、先輩後輩仲間づくり、社会人としての生き方や職業人としての研修など広く社会教育の場であり、男女それぞれに目的的な場であった。

わかなえ〔名〕田植え終りに苗幾束かをよく水洗いし家の荒神棚に供える。この苗束をいう。この苗束は保存しておき、牛の病氣などの折、刻んで食わせると良いという。

わかびゆる〔動〕若返る。「後家なっちかるわかびゆるごつならした・わかびえさした」。

わがまえ〔名〕田植え・稲刈りが人力中心であった頃、各人銘々の受持ち範囲をそう呼んだ。

わかもち〔名〕新年早々に搗く

餅。往昔は搗くのを例としたが現在は余り搗かない。伊勢講で稀に搗くとか。

わかれこーじゅー〔名〕大きな講中組みが2組に分かれることになった時、互いに相手講中を「分かれ講中」と呼ぶ。大組（大講中）を参照。

わきご〔名〕わきが。「えーこ」ともいう。

わきのま〔名〕舟の「なかのま」の別名。

わきろ〔名〕鱸の一種。「ともろ」の後方にたてる「ろ」。〔四丁〕鱸押し〕係りの「ろ」。

わく〔動〕(1)分く。別く。裂く。割く。木材を板に挽き別ける。(2)魚類・動物が群集したり発生したりすること。

わくだち〔名〕家屋建築で、屋根も壁も未だの柱立ち（素建ち）状態をいう。

わくどー〔名〕墓。蛙。じょーくおー。びき。「おたまじゃくし」を「わくどーさんのこ」という。

わけくち〔名〕理屈。物事の道理。

わけこうじゅう〔名〕相互に協力し合う関係にある講中同士を互いにこう呼びあう。

わけつくる〔動〕分け付ける。それぞれにきちんと分配する。「わけつける」も同じ。

わご〔名〕「わさ・わなご」に同じ。「わご入るる（わご結びずる）」。

わさ〔名〕紐結び法。紐・縄の

一端を引けば自然次第に締るよう別端の輪を通して結ぶ。この輪を「わご・わさ・わなご」などと呼び、結び方を「わさ・わなごいる」という。

わざ〔名〕(1)障り。ささわり。いたずら。「^{わざ}傍かるわざするもんじゃなか」。(2)本祝儀結婚式の花嫁行列の途中道に、藁束・雑草柄・木材・木枝・藪茅などの障害物を持ち出し行列を止めて「祝儀見」を楽しんだ。祝意をこめたわざで、礼を言い片付けながら進んだものだ。

わざくら〔副〕わざと。わざわざ。「わざくらここまち送っち来ち呉れたつばな」。

わざつごつ〔動〕故意にわざとする行為。「わんざつごつ」ともいう。

わじゅー〔名〕あたり一帯。「こころわじゅー・そこらわじゅー」。

わしわし〔副〕音を立て噛み・掻くさま。「わしわし音立てち食た・わしわし掻えた・わしわし噛うだ」。「わりわり」も同じ。

わた〔名〕動物の内臓物。臓物。「ぞうわた」ともいう。

わだ〔名〕小範囲の地域。小地区。班。たに(谷)。組うち。

わだくぼ〔名〕谷間。谷合い。土地の凹所。「わだくぼり」も同じ。

わたしがい〔名〕旧暦12月1日、粥を炊いて神前に供え、

親里へ贈り届けなどした。「わたりがい・かいわたり」等ともいう。新しい年へのよりよい渡しを願った年末行事か。
わたぼし〔名〕葬儀で近親女性が被る「かづきわた」をいう。わたぼしを被った人を「わたぼしかぶり・かづきにん」とも言う。

わぢゅー〔名〕「わじゅー」に同じ。輪中(わぢゅう)。

わっかし〔名〕若衆。漁船の乗組員。船頭に対する名称。若い士。

わっしり〔副〕一掴みにしっかりと握むこと。一口にしっかりと噛むこと。「わんじり」ともいう。

わっぶ〔名〕割り勘。割前出し。「わっぶで酒呑みした」。

わなご〔名〕「わご・わさ」に同じ。

わに〔名〕大きい。「わにをらびする」。「わんわん声で」の意か。

わにばたかり〔形〕股を広く開いてはだかるさま。「わにはたかり」も同。

わのー〔名〕割り縄で区画割りした水田。境界畦のない水田。田植時縄を境界線上に張って定める。1年毎に交替するのが一般的。地割制度の置きみやげ。「わのー」は山林や畑にもあって、1枚の土地を分割するのに大きな石や丈夫な杭を打ち込んで目印とした。「わのう」も同じ。

わ

わのきるる〔動〕桶の輪(たが)が切れることを「なく」という。子どもが泣くことを「わのきるる・わが切れた」などという。

わや〔形〕駄目だ。無茶苦茶だ。「わやわんにゅう」ともいう。

わやくる〔動〕愚弄する。まぜっかえす。

わらしび〔名〕わらしべ。しび。

わらすぐり〔動〕刈り取った稲には「はかま」や「しべ」が多く付いた俣で、藁縄や藁草履外藁の利用に邪魔になる。これらを取り除く作業が「わらすぐり」である。この「すぐりわら」を用いて目的物作りに利用。

わり〔名〕(1)お前。きみ。汝。われ。(2)土地私有制度の最初に各戸に割り当てられた土地(田畑・山林)の割り前。土地割り替え制度も参考に。(3)「さずえーかみ」に同じ。魚の名。この大きなものを「おおわり」という。

わりー〔形〕悪い。「わりーひと(人)」。

わりき〔名〕割木。薪。焚き物。

わりどむ〔名〕お前達。汝等。

わりゃー〔名〕お前は。

わりわり〔副〕(1)音声高く烈しい。(2)状態が烈しく荒々しい。(3)盛んに稼ぎ働く。「わりわりをらび・わりわり泣く・わり

わり働く」。

わるー〔動〕笑う。「わるーな(笑うな)」。(形)悪く。「わるー言いをる(悪く言っている)」。

わるわるる〔動〕笑われる。「そえんこつ言いをつたぎりいわるわるるぞー」。

われ〔代〕(1)お前。汝。「わが・わり」に同じ。

われえーかぶる〔形動〕満面の笑顔。「われえーかぶっち写っちよらす」。

われえーご〔名〕笑い顔。笑顔。「われえーごんどーゆーよかもんで(笑顔がとってもいいですね)」。

われえーごつ〔名〕笑い事。軽々な事。「われえーごつで済んじよかった」。

われまし〔副〕我先にと競うさま。「われましーい出ち働れえーた・われましーいしち取っち行た」。

わろ〔名〕奴。「あんわろ(あの奴)・猫んわろが盗っち逃げた」。

わんかご〔名〕碗・箆。炊事道具全体の総称。

わんぎ〔名〕仲違い。不和。「わんぎする」。

わんきゅー〔名〕風の一種。をにだこ。

わんざつ〔副〕わざと。

わんざつごつ〔副〕自分で企てて仕上げた事と同じ(結果)だったという時に用いる。わざと事みたいだ。

わんざん〔副〕(1)婚礼の行列に

対し、道に石や藪や雑物を取り出してする悪戯（一種の祝意ではある）。(2)わざとらしい。迷惑な。邪魔な。「わんざん雨・わんざん日和」。

わんじり〔副〕「わっしり」に同じ。

わんど〔名〕堀り切り。ほら穴状。「わんどー」ともいう。「かんど（空洞）」の意に同じ。

わんどー〔名〕深い堀り割の中の道。洞穴にも用いる。

わんめご〔名〕碗類を入れる目簞。碗や簞。

を

を〔名〕麻。芋。麻糸。

をーこ〔名〕木・竹の両端を削り尖らせ物を前後に突き抜いて担ぎ運ぶ棒。「をーこー・をこー・おーこ・おーこー・おこー」などという。

をーどもん〔名〕横着者。「をーどーもん・をーどか・おーどか・をーどーか・おーどーか」も同じ。

をいえぐ〔動〕泳ぐ。「をえぐ・をやぐ」も同じ。およぐ。

をけごしき〔名〕桶甑。餅焼きその他の蒸し桶。桶底に小穴を開け釜の上に据えて蒸す。穴の内側にはざるを伏せて置き、米・粟等洩れないようにする。

をこーばり〔名〕布団さしなど

に用いる大型縫い針。「をーこばり」も同。

をこつる〔動〕それとなく誘い出す。それとなく要求する。「をこつち酒出さする・をこつらるる」。「おこつる」も同じ。

をさ〔名〕魚の鰓。「おさ」も同じ。

をさい〔動〕櫓の漕ぎ方。ろかじを外側に押す。舟は反対側に廻る。「をさえ」も同じ。「ひかい（え）」の逆。

をさうっさぐる〔形〕安堵の思いして安閑とするさま。

をさゆ〔動〕「をさい」に同じ。

をし〔代〕お前。汝。おし。同輩又は後輩に用いる語。「をしたち・をしどむ」は複数系、同義語。

をしや〔代〕お前は。「をしやをれや」と「おしやおれや」は同義。

をすえー〔助〕押え。作物を連枷して脱穀する際の一回の量を「^{ひと}をすえー」と数える。「をせー」も同じ。

をすえーつくる〔動〕押えつける。犯す。「をせーつくる」も同じ。

をすえーつむ〔動〕切迫する。おし迫る。「年がをすえーつむ」。

をすえーつむる〔動〕愈々最後というまで遅延させること。をせーつむる。

をすみつく〔動〕(1)目が醒める。目ざめる。(2)蘇生する。

を

(3)思い当る。自覚する。「おずみつく」も同じ。

をずむ〔動〕目が覚める。目ざめる。

をだる〔動〕鎮まる。余勢がおとろえる。静かになる。「をだれた(落ちついてきた)」。「おだる」も同じ。

をつく〔名〕奥。「をつくん方ば、よう見ちみる…あつつろうが」。「おつく」も同じ。

をった〔助〕いた。「雪の降りをとったばな」。「おった」も同じ。

をてぎし〔名〕岸。急に落ち込んだ岨。

をてこむ〔動〕落ち込む。「そげん所まじ行たらをてこむぞ」。「おてこむ」も同じ。

をてをてつ〔副〕おちおちと。気楽に安心のさま。「をてをてつ寝もされん」。「おておてつ」も同じ。

をど〔名〕雄猫。「をーど・をーどー」「おーど・おーどー・をどねこ」も。

をとこ〔名〕男。「おとこ」も同じ。

をとご〔名〕末っ子。「をっこ」ともいう。「おとご・おっこ」も同じ。

をとこし〔名〕男。男衆。男子。「おとこし」も同じ。

をとし〔名〕(1)大便所下の受け甕。雑排水や魚の臓物類も投入液肥として腐熟させる壺。「おとし」も同じ。(2)落し錠。戸を締めると代が閤の穴に落ち込み施錠となる仕組。(3)突

発的に吹いてくる突風(強風)。多くは雨を伴う。(2)(3)に「おとし」も同じ。

をとしざん〔名〕落し棧(落し錠)。「をとし」の(2)に同じ。「おとしざん」も。

をとしのはしら〔名〕大黒柱と相対して土間側に立つ柱をいう。「おとしのはしら」も同じ。

をとて〔名〕一昨日。おととい。「おとて」も同じ。

をどりかし〔名〕案^ト子。一般鳥おどし。「おどりかし」も同じ。

をとろしか〔形〕恐ろしか(しい)。「おとろしか」も同じ。

をなごし〔名〕女。女性。女子。「おなご・おなごし」も同じ。

をなだちら〔形動〕女だてらに。女の分際で。「をなだちら、男ん上えいたち坐るもんがあるか」。「おなだちら」も同じ。

をにだこ〔名〕鬼^{オニ}座。「おにだこ」も。

をにのいわや〔名〕古墳。全島には数百基散在していたが、現在では百数十基確認されて、年々失なわれている。古代の島の支配者達の墳墓横穴円墳式が多い。享保(徳川中期)の頃に成った宮岐国続風土記には、島内に三百五十基の分布記録がある。「をにや・おにのいわや・おにや」も。

をにのざ〔名〕鬼の座。周囲に

お歴々ばかり、その中心に居住する者の心境立場をいう。「おにのぞ」も同じ。

をにのよ〔名〕鬼の夜。正月7日夜門口・神前に「たらの木」を立て、煎豆もこの夜に撒く。招福悪魔退散の行事。「おにのよ」も同じ。

をにみそ〔名〕強いこと・強がり。平素は口にするのに、いざとなれば恐れひるむ者。「おにみそ」も同じ。

をねどし〔名〕同じ年齢。同年輩。「おねどし」も同じ。

をやかた〔名〕(1)兄。(2)親方(傭い主)。「おやかた」も同じ。

をやぐ〔動〕泳ぐ。「おいえぐ・おやぐ・をいえぐ」も同じ。

をやこ〔名〕(1)親子。(2)親類。親戚。

をらす〔動〕おられる。「おらす・ござる」に同じ。「今日は家えをらすじやいい」。「おらす」も同じ。

をらびやらく〔動〕叫び散らす。大声をあげる。「おらびやらく・おらぶ」に同じ。

をらる〔動〕おられる。している。「寝をらる(ていられる・ちよらす)」。

をり〔代〕俺。自分。「おり」に同じ。相手が同輩以下対象に用いた。

をりしく〔動〕折敷く。屈服させる。「病気をりしく」。「おりしく」も同じ。

をりめん〔名〕神楽に使用する猿田彦の面。又一般に仮面の

ことにも用いる。「おりめん」も同じ。

をる〔動〕(1)居る。いる。おる。(2)汁など塩辛いものを薄める。(3)盆の綱曳きの折、一時的に綱を強く押圧して守勢に立ち動に転ずる機とする事。「をるぞーをるぞーをつちよけをつちよけ」と撒をとばす。(代)俺。おり。「をるがやるけん」。

をろ〔副〕少し。少量。少々。

をろう〔助〕だろう。しよう。「先い降れをろう」。「おろう」も同じ。

をろうまか〔形動〕余り甘くない。うまくない。おいしくない。

をろよか〔形動〕良くない。悪い。劣る。「おろよか」も同じ。

ををしあばりかす〔形動〕耽愛して手に負えなくする。「おおし…」も同。

ををす〔動〕育成する。育てる。「子どもをををす・病気やををすもんじゃなか(悪化・進行させるな)」。「おおす」も同じ。

をん〔代〕俺。私。僕。「をんが…」。

をんだこ〔名〕^{おにざこ}志岐の鬼麻は専ら「をんだこ」と呼んできた。武者姿の百合若大臣の兜に、首を刎ねられた鬼が、がおりと囁みついた絵柄。百合若伝説にまつわる独特の形。風の大きさは貼る和紙「たけなが」

をん～ん

の枚数により小は半枚から

1・2・3…枚と大型まで。

最近では飾用掌大の物から。

をんどむ〔代〕俺達。

をんのいわや〔名〕おにのいわや。

をんをん〔副〕(1)声をはりあげ高く低く調子づけて泣くさま。「をんをん泣きおる(しおる)」。(2)勢いが盛んになるさま。「火がをんをん燃え出た・風のをんをん吹きでえた」。「おんおん」も同じ。

ん

んーな〔感〕はい(そうです・肯定)。「んーなー」も同じ。

んーなーい〔感〕はい(そうです・肯定)。

んーない〔感〕はい(そうです・肯定)。

んーんにゃ〔感〕いいえ(違います・否定)。いいえそうではありません。

んなー〔感〕はい(そうです・肯定)。「んな」も同じ。

んなーい〔感〕はい(そうです・肯定)。

んにゃ〔感〕いいえ(ちがいます・否定)。

んんにゃ〔感〕いいえ(ちがいます・否定)。

ん

壺州で一もん編

あ

赤背うそ口（良牛の相）

あがり蚕^ごのごて

秋^{なすび}茄子あ嫁にも食わするな（すな）

秋^{にし}西風雨・秋西風水おて

秋^{えび}の風傍（蕎麦）が堪らぬ

秋野の観音

秋の口^{なた}の鉈落し

秋のぼたいっさき

秋の夕焼鎌を研げ

秋日照すりや犬も喰わん

悪銭身につかず

朝起き貧乏費用の神

朝^{おなご}女（凶兆）

朝^{がみなり となり}雷あ隣家まじも行くな
（の歩きもでけん）

朝^{こち ばえ}東風昼南風夕^{にし}真西風

朝^{こぶ}蜘蛛あ喜^{よるこぶ}ぶ夜蜘蛛あ焼^{こぶ}蜘蛛

お（親え似ちよつてむ焼け）

朝^{でく じゆうべ}人宮司夕坊主

朝の^{かば}一つ火は風えなる

足形は残らんでむ手形は残る

あした^{あした}明日は出帆背中にい苦

足い塩包む（無精者）

芦^{いんどう じ}辺鳥に瀬戸鳶印通寺仏に見
せるな

芦^{いんどう じ}辺鳥に瀬戸鳶印通寺仏に風本
ばあばあ

畦えあがる

畦這うたも田這うたも同じこつ

あたらし^{あたらし}新 昼も叩けば埃^づの出る

当らぬ先の矢^{ごた}応え

あた^{あた}触らん蜂や刺さぬ

とこる^{とこる} くら^{くら} 当る処が凹む

後ん鳥が先いなる

あつだ^{あつだ} 厚田で粟取れ 薄田^{うすだ}で米穫れ

姉さん女房は意外とまし

あひる^{あひる}家鴨のちんちよて宵かる出し



阿呆鳥飼う馬鹿植木買う

甘か物え蟻のつくごて

あまで
天棚え三年も奉公したごつ(て)

雨小豆日米(日ささぎ)

雨夜の星

雨夜の日照り

阿弥陀も銭ほど

網の目も風

ありかり^{しいら}の靴 笑え

ありかりの節句働き

蟻のきんたま

蟻のきんたま十六い割ったしこ
むなか

有るごつしち無かつが^金無かご
つしち有るとが借金

あわせ日^{はつか}い二十日

合わせ物^{もな}あひつつけもん

あわれな浄瑠璃

案ずるよりや産むが易か

あんぱんたんの棒振り切ったよ
うなもん

い

言うにや来る(噂をすれば影)

家の中のモメも宝のうち

いか(烏賊)にもたこ(章魚)
ぜえ(菜)

行き当りばったり

いまいを^{いまいを}
生魚に相場なし

生き物に油断ならぬ

いぐちにも物着せろ

医者がとらねば坊主がとる

医者にかからんも半養生

医者の不養生

医者も保佐もいらぬ

壺州教員島原巡査

壺州^{こやし}の肥料とり侍

急ぐ蟹穴まどう

痛し痒し

一くぐみ二天ぞり三笠かぶり四
しで太り五ふしまら六でんぎ七



ちいまら八やけまら九糞まら十とけまら

一黒二かり高三白四長五さき太と六根太七天ぞり八くぐみ九先細り十とんと太いのが馬のまら

一章魚二巾着三唐橋四饅頭五茶碗六毛開七ぎしぎし八とべら九瘦開十とんとつまらぬ戸立て開

右三左三上六下九雀の小躍り鰻の背登り終りは山茶花の乱れ突き

一壁二薙三畳 (家評価)

一工面二仕事三慾四仕末

一工面二働

一座敷二風呂

一度見た鬼が良か

一の裏は六

一富士二鷹三茄子四葬礼五雪隠

一枚びっしやり

一飯焚き二別当

一文拾いの百文落し

一焼二生三膾棄ちゅうよりゃ煮ち食よ

一焼二膾棄ちゅうよりゃ煮ち食よ

一様が万様

一漁二搏打三女

一口の遅れは十日の遅れ

一日のさがりは十日のさがり

五日二十日の章魚獲り汐

いっさきの生腐り

一尺の縄は宝のうち

一升徳利の中ぬ暗かうちかる

一升徳利は唐まじ行てむ一升ほけち入らぬ

一生八月常月夜小菜の汁に米の飯

一寸遠けりや目ひつ張る

一寸二寸なこけのうち

一ちょうそうそく

五歳違いはいつも良か (丁度よか)

一匹の牛の死んだちゅううち田作らん著あおらん

井手口かる浸す



行てぬ (の) 五里

糸切る暇むなか

稲妻に油

犬にも食せず^く棚^{たね}えも上げず

犬のたつ吠鳥の夜啼^{かま}き構^{かま}やせね
ども気にかかる

犬の道中口々^{べえ}一杯

犬ののろいに鳥かぶらず

犬の歯に蚤当り

犬の星まぶるごて

亥^いの子^こ節句は夕節句

忌すりゃ盆する

芋団^{だご}子盗うでむ子種は盗めぬ

嫌がありゃ応がある

いやしだろくに糟食わせろ

いらぬ渡世話他人のへっばく

いらぬへっばく他人の肥汲み

入日拜もうよりゃ裸で (夜) 明
け待て

海豚の千本がち

入れてふくるる風船まら

色せば顔せろ

鰯や目ただれ鰯 (味) や良かろ
う

鰯や目ただれ鰯あくされ

う

卯^う亥^い巳^{あひつじ}米に爪切るな

浮世 (憂世) 知らずの南^は風^{かぜ}ん風

牛売って牛いならず

牛飼えばかいばあり

牛に乗っち来た

牛の一突き

鵜匠鷹匠御口上も役のうち

うしろ別嬪前見てびっくり

牛を七遍替えると杭だけえなる

抱^{うだ}くち言やかるわるるち言う

内はだかりの外すっぽり

鵜の羽根重ね

うびかる先だす

う〜お



うびも魂もとび出た

うまか^{もな}物あ手の先い

うまご^じ 可愛がろうよりゃ牛飼え

うまご^か 孫 養おうよりゃほかん子^か養え

馬に乗ってもふぐり休まず

馬の上からはっち

馬は馬連れ牛しゃ牛連れ

梅田枇杷麦

瓜の番すりゃ噂とらるる噂の番
すりゃ瓜盗らるる

売物にゃ花咲かせろ

噂をすれば影

うんなか^{もん}者の盆くたびれ

え

越中富山の反魂丹鼻くそ丸めて
万金丹

得手に帆あぐる

えての五郎助

絵に^け描えた餅

えび
海老で鯛釣る

縁の下の力持ち

縁は異なもの味なもの

お

老月の出ぐさり若月の入りぐさり

追手に帆（えてに帆）

い^{いな}
大犬あ小犬せがむる小犬あくそ
せがむる

多か風は手えたまらん

大風かわすか海じゃちんとるか

大風^{ふい}ん吹ち通った後んごたる

多かごつしち手えたまらん

大釜飯に小鍋の汁

大きな家にや火きな風

大敷大損大潰れ

と^{んび}
大島烏に沓州 鷹 生月がんどに
もの言うな

大勢の烏にや鷹も敵わん

う^う
負うた兄よりゃ抱えた子

大鳥^と捕るちちや小鳥^{そく}も捕り損な
う

人松^{せーせ}い蟬

大雪降りの明けの日にゃ思う子
船乗せろ

お〜どう九遍に正直一遍

お一目遠目傘の内（嫁遠目・夜
目遠目）

奥歯^{もん}に物のはすまったごつ（ご
たる）

桶屋の足や大名の八人力

お荒神さんのもの教え

お荒神さん持たず

伯叔父^{おじきよめ}嫁にかかろうよりや榎木
いかかれ

おじきよめに養わるるよりや春
の焼野に行け

遅^{おす}か者^{もん}の手柄とったことなし

お寺の鼠で今朝（袈裟）^{くさ}食たへん

男と烏は黒いが上

男^{おなご}は女かる（から）

踊三人見手八人

女^{おなご}が口たたけば牛の値が下る

女さかしゅうして牛売りそくな
う

女ん横座は百いなってむなか

鬼の女房にゃきじんがなる

鬼の留守に豆拾い

同歳^{おなとし}や買うてむなか

親の意見^{なすび}と茄子の花は千に一つ
の無駄もなか

親の羽織で手がでぬ

親のもの（ん）見たごつ（て）

親はあんどんさま

親腹七日子腹九日

か

飼^{けえ}い犬に足（手）かまるる

かいのもとから肝まじ捨^{すた}りなし

嫡庄屋

かからん方なし（に）桜の木
いかかる

かかりもんの無かりや桜の木い

か〜

でもかかる

餓鬼も人数

学者禪^{へこ}かか^{たかへこ}ずかけば必ず高禪なり

神楽見のごてせるな

欠^{ほうちく}け焙烙にも用がある

風本狂言日がない日がない

火事の後の火の用心

火事場には煙草の火もなか

鍛冶屋^{いちでーつるぎ}一代の剣

鍛冶屋恨むな研げ剣

加勢^{しでー}人の勝手次第

片口^{くじきば}聞いち公事捌くな

河童に尻^{ことず}ご言^{ことず}伝けたようなもん

風本街道は線香三本持っても持ち代えねば行かれん

悲しか時の神ただき

蟹^{がに}の手むしられたようなもん

蟹^{がに}は甲^{くろ}に似せち穴を掘る

壁に昼

壁に耳

壁に耳あり障子に目あり

花へんな枯もんはんど甕は空もん小便壺はどぶどぶ

かまの前都

かみそりでまら切ったごて(つ)

神にも仏にも言うち見にやわからん

神の知らぬのつと(祝詞)

上町山^{かみ}のさねはがれ

甕^{かき}(亀)尻抱えろ

甕焼きは家焼く元方は世話やく

亀屋にかかるかげずの木に登るか

痒^{かゆ}いところ搔くようなもの(ん)

烏の黒雲あて

烏は口故憎まるる

借る時の仏面^{つら}戻す時の閻魔面^{えんまづら}

枯木は早よ伐れ

考え作人(百姓)物獲らず

肝腎要の臍の下

神主や七乞食の筆頭

看板たわされ

く

き

祇園だて（鮮魚の値よし）

祇園南風ぼえ吉がぼうぶら成った如きち ごと木で鼻擦った如こす ごと

杵から頭剃る

木の毒（気の毒）は蔓かんだ九州の連れ小使しよんべん

経繰りの経くるごて

兄弟姉妹は他人のはじまりきょうでえ

兄弟姉妹は道連れ

義理立つりや損する

義理張ろうよりや頬張れほ木六竹八石二月今が弁慶の首の
斬（伐）り時（旧曆）

木を買おうば道を買え

きんたまとり

食う物もなあ宵食こたよ言う事ことあ朝言え

くうやのあさって言葉

九月大宮司霜月坊主でくい草生え褒めて出来穂待つのは馬
鹿のうち

鯨一頭獲りや七浦脈やう

薬九増倍

口に風とり

口持ちよりや京にでむのぼ上らる
る口くちはよごうでむもなあ真直ぐ言
え口説くどきほっぽう絵すらごと

苦髪染爪

九百九十九後家はあってむ千後家
はない久美くみノ尾人辻や岳の辻より扇一
本だき低か

雲が下あ雨と見ろ



く〜こ

^{くらげ}
海月もさらけば骨に遭う

久留米三年肥後三日大村平戸は
朝茶の子

食わぬ腹探らるる

花へん柴と嫁御はいくら見立て
ても無か

食わん楽貧楽

^{くんち}
九日の栗飯腹張り裂く

け

芸者とちんばはひく方に傾く

^け
飼え犬あ主似る

今朝食た辺のお寺の鼠（袈裟）

げすの片食い

げすの子と黍団子は三つまで

げすの子の腹え実の入りや仰^{おお}なく

げすの知恵は後かる（後知恵）

下駄箱からい（かれえ）

^{けね}
家内うちのばくち

こ

郷に入っては郷に従え

肥馬難なし

肥たごに肥柄杓添えたようなも
ん

肥混^{ぼく}ぜ木とうで取直しが出来ぬ^{でけ}

五月のぼーぶらで投げ倒す

ごけ合わせ

^{ごご}
娘五人

志は韭の葉

小細工貧乏（器用貧乏）

五勺雑炊八勺粥

後生かる火種取り米たごたる

胡椒の噛みかけ

小せいに高荷

ごつつり五匁

^{こつてうし}
牡牛でうせ込もうよりゃ口一
つ取^けち除る

こと欠きに古嫁

ことば
言伝け荷いならず

ことに事かつる

こども もつ おじき
子供一人産たぎりい伯叔父も惚
るる

小取の小取りとる

木挽のひった糞は犬も食わぬ

小船が難する

ごへだ嫌うたら又御幣田

米嚙む犬は打たれず糠なむる犬
は打たるる

ごもく溜あせると蚯蚓掘りだす

五郎様の花売り

ころうでむ只は起けん

今生飾れば後生かざる

紺屋の白袴

さ

境あせりおると野辺の領あせり
だす

さがもんの通った後にや草も生
えぬ

先のちんばにや追いつかん

作事も公事のうち

桜切る馬鹿梅切らぬ馬鹿

桜三年枯木なしどうだ椿に生木
なし

酒買えば人が来る火焚けば風が
くる

笹の葉につけて振るしこばかり

里芋雑炊で親も子も食う

砂糖の餅

鯖の生け腐り

寒さ小便ひだるさ欠伸

皿なりや割りはな藷なりや炊き
はな

さんとりし け いぬ つら
申酉時化は戌の面干す

申酉降って戌の面干し

三月の朔日汐三から三汐

三九二斗七

三間に三九尺（三九尺三間梁）

三合飯に二合ずし

三十後家は通さるるが四十後家



さ〜し

は通されん

三十七歳のやつ児

産する時きや穴の淵

三造が喧嘩の仲裁で折合わんすな

三造が喧嘩の仲裁折合わんすな
で元よりや悪うなる

三造が仲直りで折り合わんすな
(せな)

三太郎^{ごつて}牡牛

三年前生まれの鼠を今年生まれ
の猫が捕る

三の段するかげずの木い登るか

三夜暗みに四日降り四日に降ら
ねば五日にどっさり

三里に火いける

し

仕合わせは牛のまやより

思案にしくなし坊主に嬬なし

しいら^{さね}柿い実あり貧乏人に児あ
り

しいら児先だち

しいらの先走り

しいらの高上り

姑の相^{むこんれめえ}婿振舞

鹿の神楽できりなし(鹿大明神)

じき
食より口

しけつり出す

仕事は仕事がる

四五蚤六七蚊八九蠅十^{へえ しらめ}虱

四十^{おなご}女にまら見るな

四十暮五十明き

治蔵さんのかじめ汁ちゃんとし
ゃんと

七月の棚見潮(棚見・七夕)

しっと穂して牛に喰わする(落
穂拾)

十方曇って雨降らず

しとき餅のごて

しに^{しにご}死児顔よし

死人に口なし

死ぬ罰はよか罰

死のうちちゃ目のくぼる

師の影を踏まず^ず (死の影)

芝居は悲しう出来^でちよる

しまつは臭い

わがもん^{くんだりきか} 自分^{いつまん}の物と下り坂はいつまで
でむ

島のがぜ噛み

しもて^し 下手雨には苦しち待^てちよけ

しゃとしや^{でえー}の出会い

しやかせ^{おいて} 幸福は追風から

十九の黒星

十三皿割り十四へっくわりげ十六本

十七日の月さがし (立待ち)

姑無ければ村姑

十八日の坐り待ち (居待ち)

正月あ^み三月倒^{だわ}し (物金要り)

正月の神様^{かんざー}曲りなりきり

しょうこつ無し^しの米の飯

正二月の手のうら返し (正月二月)

正二月の投げ捨て松

しょうにち^し 祥 日い声囁らす (念仏坊)

小便一町くそ一里

小便に屁雨には風

庄屋牛に当てごうたごたる

庄屋の婢達や粟飯食わんちゅう
ちほたくり返えさした

書物借す馬鹿戻す馬鹿

じようけえ^み 女郎買え^{そぜー}の味噌菜

しょうのき^し 棕櫚木千本長者のうち

虱の親も親

かさ^か 尻瘡の痒いかつと一人婿の可愛
かつあ忘れられん

尻切って頭につぐ (尻・知り)

尻くじつてむ勝ったが手

尻に帆かくる

志原鍛冶^{つるぎ}の剣

志原庖丁と夏の擧丸切れるごっ
しち切れはせぬ

し

し〜そ

潮時知らずの満蟪^{みな}拾い

死んだ風のぞつ

死んじかるの医者迎え

死んでの長者より生けてのかつて (乞食)

急^せいてもせきまで急かでも関^{せき}まで

関^{せき}の小刀^{こがたん}

赤飯枕^{せき}にかつえ死に

急^せく釜たぎらん

雪隠と養子は永居りやでけん

雪隠の口の小判

銭は馬鹿隠し

千あば一あば

千貫目のかてえたこぬ筈

千句一言

船頭^{うづ}多かぎりい山^{やめ}えのしあぐる

千人^き居ってむかかり子は一人

す

須恵に日養生に行く

捨つる神ありゃ助くる神あり

すっちょの皮 (すっちょん皮)

すってんからくり

脛一本まら一本

すばる九つ横関や七つ

すばる天上潮あがり

すらごつと坊主頭はゆうたこつが無か

摺鉢蓋なし坊主に嬬なし

せ

せえせん
蟬の目ん玉

そ

惣助どんの湯ノ本行き行たち来
ました

象んくそ

草履取ったり天下とったり

惣領ぬ子ぬ十五ぬ時が貧乏の最
中

そしるそしる嫁えかかる

蕎麦一升に粉八合それを食たれば腹八合

蕎麦一升に粉八合団子^{だご}に作って四十八六人家内に八つ^{やぶつ}宛

蕎麦^{ので}は喉^{へえ}え入^いつちみにや分らぬ

算盤ごつすり米六俵

算盤はじきは兎の糞はじき

そんは笛吹く（血統・子孫）

た

大黒の尻い味噌

大黒^{さん}様の首い掛けさすような物置き

大蛇^{へえ}の蠅^{へえ}ねぶったごたる

代書代人すりもぐり

鯛たかばにあらあんばく

鷹^{べえ}が飛^{べえ}べは糞^{べえ}も羽^{べえ}づくれえ

高みに土持ち

薪物^{たきもん}とらずの背中あぶり

たぎり湯に水

丈だけ相応

岳の辻から尻あぶる

鯛^{たこ}魚^{あなめ}ん糞^{あなめ}ん頭えきりあがる

たしなみや谷の食う

たしなむ者^{もな}あ他人^{ひと}の物^{もん}は食う

他所^{たしよ}の飯^{から}は辛か

立った人形は値がせん

立っちょろば親を使え

だての薄着は風邪の元

他人の食い寄り親類の泣き寄り

狸の石投げ行たところまで

狸のため糞

煙草入れ一つで大敷出す

たましなし女^{おなご}の磯^{おなご}企ち

だまり^{こつてえ}牡牛人^{こつてえ}を突く

だんぼは掘起^{こがえ}してむ桶^{こがえ}にやならん

ち

爺つ婆の寝ぐそ

ち

ち～て

血気もちの血のわぎ四つまで寝
せちよけ

ぢっともしゃぐわつともす

千尋一尋

茶売りの川えたわしこうだごた
る

茶腹もいつ時

茶屋の飯もすすめにや食われん

中日ごころは立ち心

長者三代続かず

長者の朝寝

長者の車も借れば三年

ちよつとの用事に良か事なし

血よりきたな汚かものはなか

ぢりきた北風

ちんぢゆのたこぼぼ

つ

ついでち
一日雨は三日もうり（廻り）

月と潮とはよつき四月のすり違い

月に雨傘日に日傘なし

月の天上港に潮なし

月の昇りに日のくだり

月のまんどき満時港に瀬なし

月も照れば潮のがわし

月夜に提灯馬鹿か大名

筒城のだて哇

つつきはしり

椿どうだに生木なし

つぶれた上えひしゃぐる

づ
出る釘は打たるる

つんばの立聞き

て

でいそ
出魚入り鳥運が良か

でえりゅうのふう笑え

てーす
亭主好きなりや釜伏せてでも

亭主の好きは釜は伏せておいて
でも焚かにな

亭主の好きぶれめえー振 舞

亭主喜ぶ^{わだ}部落の災難

出がた無し^{なから}の入りかた知らず

手杵取り直えしたごつ（何も変らず）

手杵の取り直し

出た目が鼻たい（芽・花）

出月八合入り半分満ち

手取り足とり鴨^{すいもん}の吸物

出日^{もな}拝む者あ有ってむ入日^{もな}拝む者あなか

出^{でけてえ}額に馬鹿なし

照るごくにち降るくさる

天神様の刀でそり上る

天朝の三日規則

と

堂がゆがんで経が読まれん

豆腐にかすがい

豆腐は売れずい豆腐の粕が売る

棟梁もめ

遠か親戚よりゃ近か他人

十日の月の入らすまで廿日の月の出さすまで

遠かも品あり

土方殺すに刃物はいらぬ雨の三日も降ればよい

研ぎ賃に身流す

時の役人日の奉行

時をみて狩りをする

毒を制するには毒をもってする

所かわれば品かわる

ところてんを馬に乗せたごて

ところ掘り

年齢^{とし}が薬

年とりづくしょう

年のいたちろうの戻る

年寄りの言うことに屑はなか

年寄りのやせ世話

どっちもどっち

隣^{となり}家の牛糞で法事する

と

と〜な

^{とんび}
鳶が鷹もつ

鳶のすがってん

鳶の山越えてすりすり

鳶も物見にや舞わん

飛ぶ虫しゃ飛ばせる這う虫しゃ
這わせる

^{とほう}
十方に暮れて降りつぶす

鱸綱を解く

寅と八日に物裁つな

寅と八日に物裁てば袖に涙の干
る暇もない

^{とらどん}
虎殿な今な

獲らぬ狸の皮算用

鵜は食うてもどりは食うな

烏もちで馬さす

飛んで火に入る夏の虫

泣えちや笑えわれ尻くじっちゃ
舐めなめ

長いものには突き当る

仲立ちや門（口）まで

^{なかんごう}
中野郷牛の行き戻り荷

中野郷牛のごて

無か物あ殿様もとらっさぬ

泣く児も年中は泣かぬ

^{なすび}
茄子の蔓に瓜は成らぬ

灘が遠か

夏木戸冬井戸春窯秋飯舎（修改
築忌む）

夏の雨は片袖濡るる（らす）

夏の鳥賊は目につく冬の鳥賊は
手につく

夏の冷飯食わにやねまる

夏の昼寝は一寸肥えて二寸痩せ
る

夏の夕焼井手はずせ

^{なつもん}
夏作物作るよりや産むほうが易
か

七つあ泣き別れ

な

な

なあんか長崎ひろうか広島

^{われ}
泣えちや笑えわれくそくちや茶
飲み茶呑み

七月児は投げてむ座わる

^{ななつ}七歳までは神の子^{なば}茸の跡には茸が生える

鍋釜にあたる

なめくじは宵から

習うよりゃ馴れる

難儀するのは我が身から

に

似合うた釜に似合うたこしき甑

似合え坊にたれぼう

二月あ逃げ月

にが虫噛み潰したごて

憎しや叩かん

憎まれもん者柵え上らず (仏壇)逃げいを魚太し二十三夜は九つ四合 (九つ・12
時)二十三夜は人事あ言うとむ横寝
はするな

二十三夜は降らでも曇る

^{にせえ}二歳じけ

似たり寄ったり

二度ある事は三度ある

にびり牛よごってえの夜牡牛にやをんと言うたりゃ鼠に健ど
ん

人間あつての神仏

ぬ

ぬうなしの節句働き

ぬうなし太り

糠船も船頭

ぬきもさしもならん

^{ぬすと}盗人恨むより綱取りうらむ^{ぬすととか}盗人挿めちなわねえ縄綯

盗人の一番子

塗り箸ところてんい心天

ぬ

ね

の

ねうし とらう
子丑のしけは寅卯にかかる

残りもんに福あり

猫きみゅうよりや猫 開いせろ

ので お
喉え豆ん生ゆる

猫に ぜん (小判)

喉元過ぐれば熱さ忘るる

猫ん片足 (僅少の意)

野虎這虎

つら めう ほつきく ぬ
猫の面は仲でむ八朔は延ばん

のぼ くだ
上り知らずの下り土産

つれ に や
猫ん面え縫い上げ

おおどつ
登り詰めれど下りが大事

ふうかど
猫ん頬冠り

もん きか
呑み得ん者の酒恨み

猫よりやまし

蚤の子も蚤

根掘り葉はり

蚤の夫婦

寝耳い水

のみ い さしづち
鑿ち言や指槌

もな
眠った者あ起さるるがおずうだ
者あ起されん

い
飲みより吸うに入る

寝る子に目見せろ

飲め供養

根を掘って葉を枯す

飲め食よ働け

ねんば
蜻蛉ん尻喰い

飲め心

ね ぶつぼう
念仏坊の祥日 (祥日い声嘸す)

糊のついでに帽子の洗濯



は

這うてむ黒豆

這う虫も一生飛ぶ虫も一生

馬鹿でむ惣領早生まれ

馬鹿と剃刀は使いよう

馬鹿^{あつ}の熱風呂

馬鹿のしいら^{われえ}笑

馬鹿のしゃんす待ち

馬鹿は風邪ひかん

馬鹿^{としと}は年老らん

馬鹿をたずぬるなら親たんでろ

馬鹿ん節句働き

馬鹿ん昼むかし

ばくろう ほん こた
馬喰の本な事あ今日よか天気と
悪か天気

ば けうてよう ふてり
馬鹿打合たざりい馬鹿ん二人で
くる

はしかは命さだめ痂瘡はきりよ
う定め

走り馬え鞭

はたち
二十歳過ぎた子への意見と彼岸
過ぎの肥料

二十歳過ぎての親の意見彼岸過
ぎての麦の肥料

八十の手習い

八十八夜は毒が降る

蜂の喧嘩で刺しつきされつ

蜂の巢に鎌（切り込うだごて）

二十日おなど

二十日正月骨正月

二十日嫁御

はつしゅうに松葉

八せんの牛降り

はてつの化物で今でる今でむ

鳩の巢かけ

鳩^{つけえ}の使ん豆

鳩の早合点

鼻切れの涙

話聞こうば日和しんで

は

は〜ひ

^{かのえさる}
話は庚申

鼻まら口ぼぼ

花嫁の二十日べらめき

腹うみのつび

腹の皮が張れば目の皮がだるむ

腹を痛めにゃ胸を痛むる

針の穴から天ねらむ

針の先きや杵んごつ

針は^{こも}細うしてむ吞まれん

春の^{ひとえにし}一重西風

春の^{にし}一重西風や^{しし}猪の^{つの}角吹き欠ぐ

^{はるばえ}
春南風池干す

はんどがめが動けば雨が降る

番屋から火をだす

ひ

彼岸坊主の大糞流し

^{びき}蛙の^{つれ}面え小使

^ひ引き^ば張り^{ぎえ}北風^{ばえ}にたてえ南風

^{きさげ}
日大角豆雨小豆

肥前船はずんど切り^{わたし}私や今度ぎり

左想いに右そしり（耳）

左めっちょに右ちんば（縁起）

^{ひつじおなご}
未 女に^{きるをとこ}申 男

^{ひと}
他人の痛さは百年でも

^{ひと}
他人の上の一寸は見えてむ^{わが}自分
上ぬ一尺は見えぬ

人の食^{もな}う物あくそでむ

一人^{くわ}口は食れんでむ二人^{くわ}口は食
るる

一人^も子産ったぎりい伯叔父も惚
るる

一人^{でーく}大工^{せつちん}の雪隠作事

人使おうば火焚かせろ

人喜ばすれば神喜ぶ

一人娘と春の日はくるるごつし
ちくれはせぬ

人を恨めば穴二つ

^{なけ}
火の中え油

^{ひばこしだけ}
火起 竹かる天を見る

秘密は沙汰のはじまり

日傭取りの目と山芋掘りののす

昼飯食おうよりや^{どろ}鉄の土あやせ^{のれ}拾え分けたごたる

広いものには包まれろ

^{りん}貧すりや^{じん}貧する

貧すりや論する

貧すりや論する論すりや苦勞する

貧乏人の炊く粥あ粥までやうか

貧乏人の味噌でなる時きや^の無うなる

ふ

夫婦喧嘩^{きとかげ}と北風^{はやんかげ}(南風)は夜風
ぎする

夫婦喧嘩は犬も食わぬ

覆水盆に還らず

^{おなご}福は女がかろうちよる

福は寝て待て

ふぐりに金箔

ふぐりも引き方

武士は相見互い

降^{よきなた}ったち雨斧鉦降るじゃなし二人口は瓢箪^{たて}の尻叩えちでむ食
わるるふなとうぬのぞき^{あきねえ}商売

舟がら三里に帆がら七里

船盗人かちから

船たて三日は厄病神も追いつか
ぬ

ふゆな坊の重荷

冬の高屈やしけのもと

冬の土用塵流す雨が降りや夏の
土用にや材木流す雨が降る

冬よりや風が寒か

不漁の大漁は下手がする

古^{かわ}井戸に水絶えず

古船へ釘

禪のくそと貧乏人の正月餅ちや
搗かんつかんち言うてむどげし
こかはつく

ぶんぶの火に舞(迷)え込んだ



ふ〜ま

ようなもん

へ

へ〜とりこぶ
蠅取蜘蛛のごつ

へぎ餅や下人に焼かせろ魚は上
人に焼かせろ

へくそ^{かんだ}蔓も花盛り

へたくわち（屁と火事）や言い
だし

へたちゃ言われち扇や叩き破つ
ち

へたの細工でかげがつく

へたの鉄砲で（も）数撃ちや当
る

下手の横好き

屁ひっち尻すばめ

ほ

法事は鍋借り

ほぎ餅や猿に焼かせろ魚は猫に
焼かせろ

ほっしょ^{ひてぐち}の額口い手被せたよう

なもん

仏の面も三度まで

仏の目尻に宮の前四方下りに北
下り中窪屋敷に谷頭

ほど程に無駄はない

頬の中の紅

惚れてしまえばあばたも笑くほ

ぼろ屋のぼろ儲け

^{ぎた}
盆北風

ま

蔀かぬせじょうは待たれぬ

播かぬ種は生えぬ

負けてむ花

孫可愛がるよりゃ牛飼え

馬子にも衣裳

待てば海路の口和り

まな板おこし

豆も打つときやさゆる

萬の蔵よりゃ子が宝

み

みいらとりのみいらになる

身から出た錆

身捨つる山はあつてむ子捨つる
山はなか

みずのえね
壬 子の雨は六十四時間降り続
く

水の中の土仏

味噌桶が動けば雨が降る

味噌かる尻拭う

味噌喰い世倒し

ぬす
味噌盗人手かずむ

見たがりの寂したがり

みつさむらい
三月武士

みつご
三歳児の魂百まで

みつ
三月じょうさん

みつとうか ぐち
三月十日の百人口

みつ おじき
三月の中の十日は伯叔父の面も
見忘る

みつ
三月の血下り

みつ
三歳違いは身(見)切り合う(見
捨られる・見るも嫌)

みつ味噌たいら酒(みそ・酒仕
込み吉)

見ても見ぬふり

身ひきや皮痛し皮ひきや身痛し

蚯蚓はみみずただく

宮よりゃとんびよし

見れば目の毒

見んこつ清し

む



つら
向いた犬の面打たれず

むうつ
六歳違いは睦まじい

ずね
向う脛は蚤にも喰わするな

無学者論に負けず

昔の罰は四斗樽の底を廻って来
たが今は茶碗の糸底を廻って来
る

むかし
昔話はむけた長者ははげた

む〜や

娘高なし後家ごゆん

娘持っちゃりや男はありもん

麦谷念仏^{わき}で側せる

むつき
六月のくそ据え

むつき
六月のつき据え七月の投げ据え

無理が通れば道理が汚|っ込む

め

目かる入っち鼻かる抜くる

めくらさん無尽

盲とじかのか

めくらの杖でやた振り（降り）

目こすりなます

飯酒たらふく

目と鼻の先（前）

目の灸点^{てん}は口^{くち}にあり

面疔は命とり

めんどり
雌 唄え^やば其の家は滅ぶる

も

もたぬ子のもつき定め（むつき）

持たんものののかすきばり

餅いくそんちいたようなもん

もの知りこと識り猿の尻

物識り箱尻ばんこん尻

桃栗三年柿八年蜜柑橙十三年柚
子は九年で成り兼ねる

門前の小僧習わぬ経よむ

や

厄子の不幸せ

焼芋食うかぼぼするか

焼石に水

焼児は火にこりず

焼猫火ごれせず

やけのやんばち日焼け^{なすび}の茄子

焼け太り

養い仏主に似る

安物買いの銭はたし (失ない)

やせ犬の糞がくめ

やせ牛の仔なげく

やせ子の酢好み

やせは直っても癖は直らん

柳に風折れなし

屋根の上に屋根

八幡のたねじょう石よりゃ固か

破れ焙烙ほうろくに用あり

やったりとったり亥の子餅

山で取らねば川で取る川で取ら
ねば沖中でとる (河童の言分)

山の中から棒さし出えたごて

山より太か猪しいは出ぬ

闇夜に鳥飛ばしたようなもん

やん法師のごて

ゆ

ゆうしの子尋ぬるごて

幽霊もっの片舟見付け

柚子橙十三年

ゆたてゆたて鼯ね最後尻

ゆたてぬたぎり尻

湯の中の尻

湯ぼぼ酒まら

弓つると弦

湯沸ゆわけえち水みずいする

よ

夜明あかり雨は三年しちかるでも降
る

宵の星は風の人ぼり

宵の蜘蛛おやは親え似ちよつてむ殺
せ

宵鶏うたえば亭主喜ぶ鯛の災難

用心けつびと結尾は深うせろ

良かったち悪かったち嫁御の
ものを舅がしゅうもんじゃなし

善かわきや悪か

慾すりゃとんぼする

よ

よ〜れ

夜声八町

横座から舟にゃ乗られん

よしろぬ無かりゃ独楽は廻わぬ

他家の飯も食うちみにゃ分らん

よだり つえつ
延は杖従いち

招ばれち行かんは金蔵漢招ばれ
じい行くとは福蔵漢

呼子の鶏卵

夜道い日は暮れぬ

嫁御だまし

嫁御の二十日ぎろめき

嫁御もとりよによって五十年の
不作

夜目（嫁）遠目

嫁御とるならぬかわの隅かると
れ

嫁をとるときゃ親をみろ

夜のお伴は先の者

夜の外は人と思へ

夜の星は風くんだり

よろくそ蚕のものとがめ

宜しゅうは食われん（うもうな
か）

弱り目え^{りょうび}靈怪（たたり目）

ら

楽は苦の種苦は楽の種子

り

漁師の沖あて

漁師のいくわさばき

両手に花

漁場しち場

良薬は口に苦し

料理は器で食う

れ

蓮根食う

礼に腰折れず

ろ

六月流しは蔵建てろ七月流しは
倉倒せ

禄より格

論語読みの論語識らず

論より証拠

わ

我が上知らずの破れ傘

吾が児荷いならず

分った牛の爪

我が物と下んだり坂は早か

我がものなりやくそも宝

悪^{こたあ}か事^{あつ}は言い当る

笑う門にや福のくる



を

をさ（鰻）洗う（えら）

郷ノ浦祇園さん山笠・山鉦縁起

元文2年(1737)今から262年前、八代將軍徳川吉宗の時代郷ノ浦の本町に住吉屋という大きな造り酒屋があった。この年この酒屋の主人はじめ家族子ども全部が疫病に罹り、蔵男等が大変心配して本(元)居の八坂神社(祇園社)に山笠奉納の約束をし疫病退散の祈願をしたところ、不思議にも間もなく病気は平癒した。蔵男氏達は山笠奉納の約束を果たそうと郷里の筑前津屋崎から山笠飾り人形師を呼び、蔵男氏等4人で山笠を作り八坂の神前に奉納した。博多の山笠より300年後のことである。それから13年後の寛延3年(1750)再び郷ノ浦に疫病が流行しあちらこちらと蔓延して、農・漁・商をはじめ日常生活全ての面に大打撃を受け街は火の消えたようになってしまった。その時13年前の住吉屋の故事を思い出し、浦民挙げて皆協力して祭礼山鉦を作り、八坂神社に奉納したらやがて濡れ紙を剥ぐようにして疫病も鎮まった。斯うして初めは病気平癒祈願の祭礼山鉦も無病息災・五穀豊穡・大漁叶う・商売繁昌・家内安全を併せ祈願する夏祭りとして、以来旧暦6月15日の八坂神社の祭礼日を中心に宵祭り・当日祭・曳き山と盛大に催され、「壱岐名勝図誌」文久元年〔1861〕後藤正恒・吉野軒千代兄弟編纂全25巻にも「寛延三年始めて祭礼山鉦を造る。然りしより以来毎年次第に繁栄して浦中三つに分かれり。其一に築町の内上町・下る町、其二に同町の内十八軒・亀川町・迎町隔年に山鉦を作る。其三に本居浦西組町・築出町、此分祇園祭をなし、祭礼一式請持といへり。右の町中にて隔年に思ひ思ひの山鉦を作りける。其様は木にて高く台をこしらへ、車を付、周りを紙以て張、さまざまの山形をもやうし、上には人形やうの物をすえて衣服甲冑を着せ、或は兵仗をもたせ、旗幟などささせなどして、是を昇以てありくなり。京師の祇園会にくらふれば只形ばかりなれとも、皇都にかはりて年々に異様なるもやうを作りかへて其製同しからざるは又をかしき様也。歌ひなども其作り山のもやうによりて、年々にかはれり」とある。大正の中頃、現在の歌詞の元歌を小金丸登市が作り替えて、一番・二番・三番として歌い継いで来ましたが、昭和49年(1974)、其中の一番と二番の歌詞を下ル町の浜口正則氏が作り替えて現在に至っている。氏は30年以上も

祇園さんと唄子の指導を続けて来られた。「十四日は社頭にて大神楽あり。十五日山を備え奉りし後、神輿をかきりて下る浜の幸ノ下の旅所に渡御なし奉り、国中の貴賤群集せり。」その後幾多の時代変遷を経て祭りも山笠も盛衰消長を繰り返しながら、「郷ノ浦祇園さん」として今年〔1999〕262年間の歴史の中にいる。明治時代地元にも種田国平・下条卯作・本町若松屋種田米太郎やその後は、向町の染物屋富谷某ほか西山某・上町では向井宅平〔向井旅館前主〕・明治30年代から昭和の中頃までは小金丸伊八〔明治12年生〕らが優れた人形師として名を残している。

京都の祇園祭りは今日尚華やかに盛大に行われ続けられて来ているが、初めは今から1100年以上も前の貞観時代〔859～876〕京都の祇園社で貴族の病氣退散祈願の為にに行っていたものが年中行事化して、この神を信仰することによって疫病を免れるという観念的なものに変化し鎌倉・室町時代〔1192～1603〕の最盛期を経て全国各地の祇園社で、山鉦を奉納する祭礼が催されるようになった。又全国的にも有名な博多山笠も今から757年前の仁治3年〔1242〕博多の街に疫病が流行し、その病氣退散のため博多承天寺の僧「聖一国師」が施餓鬼棚に担ぎ棒を括り付け自らそれに乗り町の人に担がせ街中に甘露水を振り撒き浄め、悪病退散の祈禱をして廻った。それから195年後の永享9年〔1437〕今から562年前博多の小堀善右衛門なる人物が京都から人形師を招き、幟幡を挿した人形山笠〔旗差物山笠〕を造り、博多山笠が始まったと言われている。郷ノ浦祇園山笠を遡ること更に300年の古い歴史を踏んで来ている。今日「郷ノ浦の祇園さん」が命脈を保って行けるのも、住吉屋と筑前津屋崎との関わりに始まる博多との深い因縁と今の博多山笠の大きな後楯と協力があればこそと聞く。毎年7月最終日曜日中心に催されている郷ノ浦祇園さんが、地元の熱意と島民の支持支援のもとこれからも長く続けられて行くことを期待し希望する。最後に山鉦山笠について。山鉦は人の体に例えると背は低め胴太りの肥満型に対し、山笠は背が高く脚長で胴中細りの痩せ型。郷ノ浦の山笠は本来中細りののっぴなのが特徴、明治の頃は10～13m程の高さを誇っていた。

じゅうや〔十夜〕

「十夜は「十夜念仏会」と言い元々浄土宗の寺院で、旧暦10月6日から15日までの十日十夜にわたって行われて来た「念仏会」であり「仏の供養」である。壱岐唯一の浄土宗の寺院郷ノ浦の専念寺が鎌倉光明寺の「十夜念仏」を継承し、「専念寺のお十夜」は壱岐の「十夜本山」と言われて、文字通り門前市をなす賑わいを見せて来た。

この「十夜念仏」が壱岐に多い曹洞宗の寺（江戸時代には92寺あった）の「壱州嘆仏」によく似ていて、しかもすぐれた「声明嘆仏」であったので「お十夜」を「壱州嘆仏」で営むようになり、他宗の諸寺院もこれに倣って「壱岐のお十夜」から次第に「十夜念仏」が忘れ去られ遂に「十夜嘆仏」一色になって、「十日十夜嘆仏供養」と言われるようになった。「壱州嘆仏」は用いられる楽器・リズム・仏名・経典の読みがより中国的で「唐嘆仏」とも言われる。「壱州嘆仏」が壱岐に残って伝えられているのは「十夜嘆仏」のお蔭と言われている。

「十夜」は文字通り十日十夜にわたり続けられる仏の供養ではあったが実際に十日十夜続けるのは大変困難な事で、七日七夜で修めた時代、或いは五日五夜、三日三夜に止めた時代もあった。現在は新暦11月1日から20日位の間に島内各寺院間で申し合わせ、日を決めて「一日一夜」の「十夜行事」として営まれている。昔は朝早くから仏に供える料理をこしらえ、午後から夕方・夜にかけて各家一家揃って寺参りし、位牌堂に籠もって夜半に至るまで飲め食ようと賑わって来たものであるが、今では夜に入ることは殆どなく、午前中からの寺参り午後・夕方も早めに寺を後にしているのが実態で、敗戦後50年の大きな世相変化の一つと言うしかない。然しそれだけで信仰心が大きく揺らいで来たと言うには当たらない。今日尚檀徒・信者・民間人を寺行事に直接参加させ十夜行事が存在している事自体いま時珍しい事だと聞く。その日各寺院では「壱州嘆仏」による仏の供養と檀徒の先祖供養が盛大に営まれる。現在「壱州嘆仏」による仏の供養は「十夜嘆仏」の他、在家の寺送り法事・年忌供養・寺院の晋山式江湖会において「嘆仏供養」として厳修されていて、全国的にも貴重な存在であり稀少な伝統である。「嘆仏供養」の僧数は導師を入れ6名以上を基本としている。

壱岐島の俗信あれこれ

この島の人々が生活してきた中で、何を信じ何を忌避し、何を守り何を恐れて来たか、民間で行われてきた信仰・占い・呪い・迷信などのうち、主として出生上の問題に就いて方言の立場からその幾つかを探り上げてみたい。

- (1) 予定では年内に生まれる筈の児が年を越し予定日を過ぎて生まれるのを「としこしご」・「もちこしご」。(2) 十月十日〔とつきとうか〕を過ぎて生まれる児を「つきこしご」と言い、そばかす等で顔が荒れる。(3) 双生児は化け物を持っているとか獣扱いされ、同性なら「長生きする」、異性だとひとりが欠ける、将来夫婦になる「みゅうとご」と言い、ひとりを里児に出したり、双子は「他人に嫌われている夫婦の間に生まれる」と言い産婆の判断で、どちらかを問曰く「あかしかぎい〔かり〕やる」。(4) 普通ひとは満潮時に生まれ干潮時に死ぬと言い、満潮時の出産は軽く幸せになるが、干潮時にかかる難産する。夜明け朝日の昇る時に生まれると縁起が良く幸せになる。旧暦3月女兒・5月男児が生まれるのを嫌い「5月男は河童の餌食」とも言った。(5) 干支では「寅の日」に生まれると良い。「子年」の子は「食いはぐれなし」。「丑年」の子は「うせ込む」といって幸せ。「寅年」は「短気か」。「卯年」は綺麗好きで仕事も綺麗。「辰年」は良くも悪くもない。「巳年」生まれは執念深く「金運」に恵まれ、「午年」生まれ「縁遠い」。「未年」生まれは「取越し苦労が多く」、言いたいことも言えず胸にしまっている。「申年」生まれは「器用人」で真似好き、仕事も綺麗。「酉年」は何をやっても「取りはずしがなく」関わった事は都合良く、「戌年」は「忠実律義」おとなしい。「亥年」生まれは気が荒い。「丙午年」の女は男を食い縁遠い。「丙午年の者同士」の結婚はよくない。(6) 男児の母親似・女兒の父親似は幸せになる。女兒の手相が「ますかけ〔真一文字〕」になっているとよい。「掌〔手の平〕の線がつながっている」・「親指を中に入れて握っている」のは「じえん握り」で「金運」に恵まれる。「手を握っている児」は「頭が良い」。指の長い児は「ふとうなる〔身長が伸びる〕」。「器用になる」。「足の裏が長い」と「背が伸る」。「ふくらはぎとふともも」が「太く」「足首」が「細い」と「足が速い」。(7) 頭の大きい児は知恵がある。耳が大きいと福耳といって商売繁盛。耳が

長いと長寿。耳たぶが厚いと金運に恵まれる。耳が立っていると人の言うことを聞き逃さないで賢くなる。顔にあざがあると長生きする。鼻の下のはくろは金運に恵まれ、眉間のはくろは性格が良い。口のまわりのはくろは食べ物に不自由しない。首にあざのある人は「よう着物を着さす」といって「着る物」に不自由しない。男児の左利きは縁起が悪い。乳児に早くから鏡や花を見せると馬鹿になる。「厄年の子」は「やくご」といって弱い子が多いので、安産の神参りをする。女33歳の厄年に男児を生めば「逆に幸せが良いと」いう。子供に恵まれない夫婦は、親戚などから養子を迎えた。これを「たねご」又は「やしないご」「たねたまご」「あとみだし」という。こうすると「実子」にめぐまれるという。実子が生まれても養家から養子を解消したり帰したりすることはなかった。

家の周囲・屋敷内のこと

(1) 植樹 屋敷内には、桑の木〔雷避け〕・くちなし〔臭い消し〕・柊〔ひいらぎ・魔除け〕・南天〔魔除け・便所の傍〕・松〔神宿る木〕・いみしみ〔いみしんのき・さんごじゅ・火除け〕などを植える。家屋から成るべく離し、梢や枝が屋根より高くない・家に覆い被らないようにする。種は位高い木とされ植え場所を考える。木斛〔もっこく〕は必ず植えておくがよいとされる木。

(2) 屋敷内には植えないがよいとされる木・ほか 蘇鉄・楓〔紅葉〕・公孫樹〔いちよう〕・檜・山椒・棕櫚・椿・枇杷・竹・葡萄・芭蕉・石榴・無花果・柳・牡丹・紫陽花・その他、仏事に用いる花を植えること。

(3) 柳・無花果を植えると頭の悪い子がうまれる。枇杷の木は飯の炊ける音の間こえる所には植えてはならない。

(4) 家について、壁の中から葛類が生えるとよくない。

- ・家に棲むくろのう〔黒蛇〕 青大将は地主・家主と言われてきた。
- ・燕が巣をかけたら良いことがある。
- ・鳥が家の中に飛び込んできたら縁起が良い。
- ・熊蜂の巣を戸口に吊るしておくくと火が暴れず、火事が起きない。
- ・家の灯が水に映る近くの庭に池を掘ってはよくない。

大正15年(1926) 5月28日沓崎郡那賀村大字中野郷東触字岩谷1046番地で出生、両親・兄弟姉妹(3男・2女)・祖母・曾祖母らとの生活。その間昭和12年(1937) 9月祖母岩谷左幾(67歳)死去に伴ない岩谷家養子。昭和26年(1951)迄岩谷姓を名乗るも同年4月結婚、昭和27年(1952) 1月森村に復籍。独立して勝本町内5軒の借家住い転々10年間。昭和36年(1961) 12月小住居付き現在地購入(坪5千円)、昭和37年(1962) 3月25日転入。宅地造成宮坂組(中野郷本村触) 石工棟梁横山安雄(片原触) 大清水布気石使用。大工棟梁富山英松(片原触・住吉出身)。小工豊永製材所(中野郷西触) の各氏。(湯茶・勝子指導晋哉真智子敬子1男2女。岩谷・森村両家山林材提供受。感謝)。昭和39年(1964) 4月竣工落成入居現在に至る。

昭和8年(1933) 4月那賀尋常高等小学校入学、昭和13年(1938) 8月東京淀橋区淀橋第六尋常小学校転校、昭和14年(1939) 3月同校卒業するも、寄留先一家中国上海進出無念の帰郷。4月長崎県立沓崎中学校入学、19年(1944) 3月卒業。同年4月長崎青年師範学校入学。20年1月在学の徴兵制繰下げ数え年19歳(18歳8か月)で徴兵検査、甲種合格。5月沓崎要塞歩兵第二大隊第一中隊第一小隊第一分隊に入隊国土防衛、陣地構築。昭和20年(1945) 8月15日敗戦部隊解散復員の申同年兵山口剛と2名中隊指揮班事務室付き伝令として島内各地に展開関係諸隊との連絡の任に当り9月26日復員帰郷。混乱迷々の中、父の命により11月第2学年復帰、昭和22年(1947) 3月同校卒業。同月20歳10か月にして職を得、箱崎高等実業青年学校教諭・同年4月1日付敗戦後の学制改革により新制小・中学校発足、箱崎中学校教諭に補職、以来島内5中学校(箱中8年・鯨中9年・武中8年・鯨中3年・沼中3年・石中3年)に34年間勤務し、昭和56年(1981) 4月1日退職。昭和38年10月26日交通事故障害後遺症主因。

昭和39年(1964) 4月小林公民館創設に参画、書記会計・体育・育成・教養部長、昭和52年(1977) 4月から58年(1983) 3月副館長、4月より館長2期4か年間。

昭和44年(1969)12月8日趣味により観世流謡曲「謡月会」十八銀行支店長小牟田雅夫氏主宰素人会に入会稽古。同会の発展的解消により、昭和46年(1971)8月同流師範森本司郎師主宰「森本松涛会福岡市警固森本能舞台・玄人会」に入会約10年間出張指導を受ける(当初会員五十数名も年と共に激減)。昭和55年(1980)観世会入門、準九番・九番習免状取得。59年(1984)5月より能舞台に臨み稽古(月3回が基本)・61年(1986)初伝・平成元年(1989)中伝・奥伝・別伝(皆伝格)取得・同年3月観世流謡曲名誉師範(素人)位差許。昭和55年(1980)1月より平成11年(1999)5月迄20年間壱岐松涛会長(森本松涛会所属)。

昭和57年(1982)10月壱岐広域圏町村組合教育委員・58年(1983)11月同委員長・同61年(1986)11月退任(4町より輪番3名選任・任期4年)。

昭和58年(1983)9月郷ノ浦町文化協会会長就任(平成5年(1993)5月迄10か年在任)。昭和58年5月より平成3年(1991)5月迄壱岐文化協会芸能部部長就任8か年間。

昭和56年(1981)4月生涯教育(生涯学習)講座・郷土史研究・園芸クラブ入会活動。

昭和60年(1985)9月郷ノ浦町民憲章制定委員委嘱同年11月3日制定公布参画。

昭和61年(1986)5月還暦記念「壱岐島方言辞典」自費出版。

昭和62年(1987)5月生涯学習スポーツクラブ・グラウンドゴルフ導入に伴い入会、以来講師不在勝ちのクラブ運営委員として14年目を大谷グラウンドに。

平成4年(1992)5月より11年(1999)3月まで郷ノ浦町謡曲クラブ講師。

平成6年(1994)4月より8年(1996)3月まで勝本町謡曲クラブ講師。

平成7年(1995)1月郷ノ浦町史編纂委員(4名のひとり)、同10年(1998)3月作業終り6月30日付け発刊。

平成12年(2000)11月3日「壱岐島方言辞典」増補改訂版発刊。

平成12年(2000)5月28日誕生日記。

壱岐島方言辞典

増補改訂版

平成12年11月3日（大安）発行

森 村 旦 編著

〒811-5136

長崎県壱岐郡郷ノ浦町片原65

印刷 (株)昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007-2